四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第三十八冊

川津東山田遺跡Ⅰ区

2001．10

香　川　県　教　育　委　員　会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日　本　道　路　公　団

四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第三十八冊

川津東山田遺跡Ⅰ区

2001．10

香　川　県　教　育　委　員　会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日　本　道　路　公　団

ＳＲ03出土土器

ＳＲ02出土土器

巻頭図版 2

内面朱付着土器

序　　文

四国横断自動車道の高松～善通寺間は、平成４年５月に開通しました。これにより、瀬戸大橋と香川県の高速道路が直結することになり、香川県は本格的な高速交通の時代を迎えております。

香川県教育委員会では、四国横断自動車道（高松～善通寺間）の建設に伴い、昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに埋蔵文化財の発掘調査を委託し、３年６ヶ月の期間を要して平成３年９月に28遺跡の発掘調査を終了致しました。また、平成３年度からは同センターにおきまして発掘調査で出土した文化財の整理を順次行っているところであり、平成４年度からは調査報告書の刊行をいたしております。

このたび、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第三十八冊　川津東山田遺跡Ⅰ区」として刊行いたしますのは、坂出市川津町東山田に所在する川津東山田遺跡Ⅰ区についてであります。この遺跡の調査では、弥生時代から中世にかけての多くの遺構・遺物が出土し、それぞれの時期の集落跡を確認しました。なかでも弥生時代の朱付着土器や、古代の鍛冶に関連する遺物が出土し、これらの生産の様子を窺わせる貴重な資料が得られたと考えられます。

本報告書が、本県の歴史研究資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土遺物の整理・報告にいたるまでの間、日本道路公団及び関係機関並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表するとともに、今後ともよろしくご支援賜りますようにお願い申し上げます。

平成13年10月

香川県教育委員会
教育長　折原　守

例　　言

1．本報告書は、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第38冊で、香川県坂出市川津町東山田に所在する川津東山田遺跡（かわつひがしやまだいせき）Ⅰ区の報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が日本道路公団から委託され、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査の期間及び担当は以下の通りである。

平成２年８月～平成３年３月　　金丸真明　中野昇一　和田素子　松尾優美

平成３年９月　　西岡達哉　真下拓也　白川悦代

4．発掘調査及び報告書の作成に当たって下記の関係諸機関などの協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

香川県土木部横断道対策室、同坂出土木事務所横断道対策課、坂出市瀬戸大橋・横断道対策室、坂出市教育委員会、坂出市川津公民館、四国横断自動車道建設坂出川津連合対策協議会、同西又地区対策協議会、地元自治会

5．本報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施し、執筆、編集は山元素子が担当した。

6．本報告書の作成に当たっては、下記の方にご教示を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

谷山　譲　　魚島　純一

7．本報告書で用いる方位の北は、国土座標系の北であり、標高はT.P.を基準としている。

また、遺構は下記の略号により表示している。

ＳＢ　掘立柱建物　　ＳＤ　溝　　ＳＥ　井戸　　ＳＨ　竪穴住居　　ＳＫ　土坑

ＳＰ　ピット　　ＳＸ　性格不明遺構　　ＳＲ　自然河川

8．石器実測図中の網目は磨滅痕を、輪郭線の回りの実線は潰れ痕、摩滅痕を示す網目は、磨滅痕の著しい部分については細かくしている。現代の折損は剥離面を黒く塗りつぶしている。

9．挿図の一部に国土地理院地形図　丸亀（１／25,000）および坂出市都市計画図を使用した。

10．本遺跡の報告にあたっては、下記の機関に分析を委託した。

プラント・オパール分析　株式会社　古環境研究所

鉄滓等金属科学的分析　　㈱九州テクノリサーチ・大澤正己

11．土器観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修『新版標準土色帖1992版』を使用して表す。また、残存率は遺物の完形品に対する割合で記す。

本文目次

第１章　調査の経緯
第１節　調査に至る経過 …… 1
第２節　調査の経過 …… 4

第２章　立地と環境 …… 7

第３章　調査の成果
第１節　調査の概要 …… 10
第２節　土層序 …… 14
第３節　遺構・遺物
１．弥生時代中期後半～終末期の遺構・遺物 …… 21
２．奈良時代の遺構・遺物 …… 53
３．平安時代の遺構・遺物 …… 62
４．鎌倉時代の遺構・遺物 …… 93
５．時期不明の遺構 …… 105
６．自然河川 …… 107
７．包含層 …… 238

第４章　自然科学分析の調査結果
第１節　川津東山田遺跡Ｉ区のプラント・オパール分析 …… 242
第２節　川津東山田遺跡Ｉ区出土鍛冶関連遺物の金属学的調査 …… 250

第５章　まとめ
第１節　遺構の変遷 …… 269
第２節　赤色顔料付着土器について …… 274

挿図目次

第１図　四国横断自動車道(善通寺～高松)路線図……1
第２図　調査区割図(１／1,200)……6
第３図　遺跡位置図(1)……7
第４図　遺跡位置図(2)(１／5,000)……8
第５図　周辺の遺跡（１／35,000)……9
第６図　主要遺構配置図(1)(１／500)……11～12
第７図　主要遺構配置図(2)(１／500)……13
第８図　調査区土層図位置図(１／1,500)……16
第９図　調査区土層図①(１／80)……17
第10図　調査区土層図②③(１／80)……18
第11図　調査区土層図③④⑤(１／80)……19
第12図　調査区土層図⑥⑦(１／80)……20
第13図　ＳＨ01、ＳＨ02平・断面図(１／60)……22
第14図　ＳＨ01出土遺物(１／４)……23
第15図　ＳＨ02出土遺物(１／４)……23
第16図　ＳＨ03、ＳＤ3201平・断面図(１／60)……25～26
第17図　ＳＨ04、ＳＤ3204平・断面図(１／60)……27～28
第18図　ＳＤ3201土器出土状況平面図(１／40)……29
第19図　ＳＨ03出土遺物(１／４)……29
第20図　ＳＨ04出土遺物(１／４)……29
第21図　ＳＤ3201出土遺物(1)(１／４)……30
第22図　ＳＤ3201出土遺物(2)(１／４、１／２)……31
第23図　ＳＤ3204出土遺物(１／４、１／２)……31
第24図　ＳＨ05平・断面図(１／60)……32
第25図　ＳＨ06平・断面図(１／60)……33
第26図　ＳＨ06内ＳＫ01土器出土状況
　平・断面図(１／10)……34
第27図　ＳＨ06出土遺物(1)(１／４、１／２)……35
第28図　ＳＨ06出土遺物(2)(１／４)……36
第29図　ＳＨ06出土遺物(3)(１／４、１／２)……37
第30図　ＳＨ07、ＳＤ2201平・断面図(１／60)……38
第31図　ＳＨ07、ＳＤ2201出土遺物(１／４)……39
第32図　ＳＨ08平・断面図(１／60)
　出土遺物(１／４、１／２)……40
第33図　ＳＢ01平・断面図(１／80)……41
第34図　ＳＢ01出土遺物(１／４、１／２)……42
第35図　ＳＢ02平・断面図(１／80)　出土遺物(１／２)……43
第36図　ＳＢ03平・断面図(１／80)……44
第37図　ＳＢ04平・断面図(１／80)……44
第38図　ＳＰ3401平・断面図(１／５)
　出土遺物(１／４)……45
第39図　ＳＰ3402、ＳＰ3403、ＳＰ4101平・断面図(１／40)
　出土遺物(１／４)……45
第40図　ＳＤ3120、ＳＤ3203、ＳＤ3205断面図(１／40)
　ＳＤ3120出土遺物(１／４)……46
第41図　ＳＤ3401～ＳＤ3404断面図（１／40)、
　出土遺物(１／４)……47
第42図　ＳＤ3306、ＳＤ6101、ＳＤ6201、ＳＤ2208断面図
　(１／40)、ＳＤ6201出土遺物(１／４)……48
第43図　ＳＤ2401・ＳＤ2403断面図(１／40)……51
第44図　ＳＤ2401、ＳＤ2403出土遺物(1)(１／４)……52
第45図　ＳＤ2403～ＳＤ2405出土遺物(2)(１／４)……53
第46図　ＳＢ05平・断面図(１／80)……54
第47図　ＳＢ05出土遺物(１／４、１／２)……55
第48図　ＳＢ06平・断面図(１／80)　出土遺物(１／４)……56
第49図　ＳＢ07平・断面図(１／80)……56
第50図　ＳＥ01平・断面図(１／40)……57
第51図　ＳＥ01出土遺物(１／４)……58
第52図　ＳＤ3119断面図(１／40)
　出土遺物(１／４、１／２)……59
第53図　ＳＤ3103～ＳＤ3105断面図(１／40)……59
第54図　ＳＸ01平・断面図(１／60)　出土遺物(１／４)……60
第55図　ＳＢ08平・断面図(１／80)……61
第56図　ＳＢ09平・断面図(１／80)……63
第57図　ＳＢ09出土遺物(１／４)……64
第58図　ＳＢ10平・断面図(１／80)……64
第59図　ＳＢ11平・断面図(１／80)　出土遺物(１／４)……65
第60図　ＳＢ12平・断面図(１／80)　出土遺物(１／４)……66
第61図　ＳＢ13平・断面図(１／80)……67
第62図　ＳＢ14平・断面図(１／80)　出土遺物(１／４)……67
第63図　ＳＰ3201～ＳＰ3204、
　ＳＰ3101出土遺物(１／４)……68
第64図　ＳＤ01断面図(１／40)……69
第65図　ＳＤ01(Ａ・Ｂ)出土遺物(1)(１／４、１／２)……70
第66図　ＳＤ01(Ｂ)出土遺物(2)(１／４)……71
第67図　ＳＤ01(Ｂ)出土遺物(3)(１／４、１／２)……73
第68図　ＳＤ01(Ｃ)出土遺物(4)(１／４)……74
第69図　ＳＤ01(Ｃ)出土遺物(5)(１／４)……75
第70図　ＳＤ01(Ｃ)出土遺物(6)(１／４、１／２)……76
第71図　３区①鍛冶関連遺構平面図(１／100)……77～78
第72図　ＳＨ09平・断面図(１／60)　出土遺物(１／４)……80
第73図　ＳＫ01～ＳＫ03平・断面図(１／40)……80
第74図　ＳＰ3102、ＳＰ3103平・断面図(１／40)
　出土遺物(１／４)……81
第75図　ＳＤ3106断面図(１／40)　出土遺物(１／４)……81
第76図　ＳＤ3109出土遺物(1)(１／４)……83

第77図　ＳＤ3109出土遺物(2)(１／４) …… 84
第78図　ＳＤ3109断面図(１／40) …… 85
第79図　ＳＤ3109出土遺物(3)(１／４) …… 85
第80図　ＳＤ3210a断面図(１／40) …… 86
第81図　ＳＤ3210a出土遺物(１／４) …… 86
第82図　ＳＤ3210b断面図(１／40) 出土遺物(１／４) …… 87
第83図　ＳＤ3209、ＳＤ3211、ＳＤ3214平・断面図(１／40)
ＳＤ3214出土遺物(１／４) …… 87
第84図　ＳＤ3209出土遺物(1)(１／４) …… 88
第85図　ＳＤ3209出土遺物(2)(１／２) …… 89
第86図　ＳＤ3111～ＳＤ3113断面図(１／40) …… 89
第87図　ＳＤ3501断面図(１／40) …… 90
第88図　ＳＤ3501出土遺物(１／４) …… 90
第89図　ＳＤ3213、ＳＤ3504～ＳＤ3507断面図(１／40)
出土遺物(１／４) …… 91
第90図　２区②遺構配置図(１／100) …… 92
第91図　ＳＢ15平・断面図(１／80) 出土遺物(１／４) …… 93
第92図　ＳＰ2201平・断面図(１／40) 出土遺物(１／４) …… 93
第93図　ＳＰ2203、ＳＰ3104、ＳＰ3105出土遺物(１／４) …… 94
第94図　ＳＢ16平・断面図(１／80) 出土遺物(１／４) …… 94
第95図　ＳＢ17平・断面図(１／80) …… 95
第96図　ＳＢ18平・断面図(１／80) 出土遺物(１／２) …… 96
第97図　ＳＢ19平・断面図(１／80) …… 96
第98図　ＳＢ20平・断面図(１／80) …… 97
第99図　ＳＢ21平・断面図(１／80) …… 98
第100図　ＳＢ22平・断面図(１／80) …… 99
第101図　６区②遺構配置図(１／100) …… 100
第102図　ＳＢ23、ＳＢ24平・断面図(１／80) …… 101
第103図　ＳＰ3501、ＳＰ3404、ＳＰ4102、ＳＰ6201～ＳＰ
6203、５区トレンチ出土遺物(１／４) …… 101
第104図　ＳＫ04平・断面図(１／40) …… 102
第105図　ＳＫ04出土遺物(１／４) …… 103
第106図　ＳＸ02平・断面図(１／60) 出土遺物(１／４) …… 103
第107図　ＳＤ6202断面図(１／40)
出土遺物(１／４、１／２) …… 104
第108図　ＳＤ6102～ＳＤ6104断面図(１／40)
出土遺物(１／４) …… 105
第109図　ＳＤ3503断面図(１／40) 出土遺物(１／４) …… 105
第110図　ＳＤ2202、ＳＤ2206、ＳＤ2207、ＳＤ2209、
ＳＤ2210断面図(１／40) …… 106
第111図　ＳＲ01～ＳＲ03土層図作成位置図(１／1,000) …… 108
第112図　ＳＲ01(Ａ・Ｂ)土層図(1)(１／40) …… 109
第113図　ＳＲ01(Ｃ)土層図(2)(１／40) …… 110
第114図　ＳＲ01(Ｄ)土層図(3)(１／40) …… 111
第115図　ＳＲ01(Ｄ)土層図(4)(１／40) …… 112
第116図　ＳＲ01(Ｅ)土層図(5)(１／40) …… 113
第117図　ＳＲ01(Ａ・Ｂ・Ｃ)出土遺物(1)(１／４) …… 114
第118図　ＳＲ01(Ｃ)出土遺物(2)(１／４) …… 116
第119図　ＳＲ01(Ｃ)出土遺物(3)(１／４) …… 117
第120図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(4)(１／４) …… 119
第121図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(5)(１／４) …… 121
第122図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(6)(１／４) …… 122
第123図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(7)(１／４) …… 123
第124図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(8)(１／４) …… 125
第125図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(9)(１／４) …… 126
第126図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(10)(１／４) …… 127
第127図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(11)(１／４) …… 128
第128図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(12)(１／４) …… 129
第129図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(13)(１／４) …… 130
第130図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(14)(１／４、１／２) …… 131
第131図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(15)(１／４) …… 133
第132図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(16)(１／４、１／２) …… 134
第133図　ＳＲ01(Ｅ)出土遺物(17)(１／４) …… 135
第134図　ＳＲ01(Ｅ)出土遺物(18)(１／４) …… 136
第135図　ＳＲ01(Ｅ)出土遺物(19)(１／４) …… 137
第136図　ＳＲ01(Ｅ)出土遺物(20)(１／４) …… 138
第137図　ＳＲ02(Ａ)土層図(1)(１／40) …… 140
第138図　ＳＲ02(Ａ)土層図(2)(１／40) …… 141
第139図　ＳＲ02(Ｂ)土層図(3)(１／40) …… 142
第140図　ＳＲ02(Ｂ・Ｄ)土層図(4)(１／40) …… 143
第141図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(1)(１／４) …… 145
第142図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(2)(１／４、１／２) …… 146
第143図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(3)(１／４) …… 148
第144図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(4)(１／４) …… 149
第145図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(5)(１／４) …… 150
第146図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(6)(１／４) …… 151
第147図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(7)(１／４) …… 152
第148図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(8)(１／４) …… 154
第149図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(9)(１／４) …… 155
第150図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(10)(１／４) …… 156
第151図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(11)(１／４) …… 157
第152図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(12)(１／４) …… 158
第153図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(13)(１／４) …… 159
第154図　ＳＲ02(Ｂ)出土遺物(14)(１／４) …… 160
第155図　ＳＲ02(Ｃ)出土遺物(15)(１／４) …… 162
第156図　ＳＲ02(Ｃ)出土遺物(16)(１／４) …… 163
第157図　ＳＲ02(Ｃ・Ｄ)出土遺物(17)(１／４) …… 164
第158図　ＳＲ02(Ｄ)出土遺物(18)(１／４) …… 166
第159図　ＳＲ02(Ｄ・Ａ)出土遺物(19)(１／４) …… 167
第160図　ＳＲ02(Ａ・Ｂ)出土遺物(20)(１／４) …… 169

第161図　ＳＲ02(Ｂ)出土遺物(21)(１／４) …… 170
第162図　ＳＲ02(Ａ・Ｂ・Ｃ)出土遺物(22)(１／４) …… 172
第163図　ＳＲ03(Ａ・Ｂ)土層図(1)(１／40) …… 173～174
第164図　ＳＲ03(Ｂ)土層図(2)(１／40) …… 176
第165図　ＳＲ03(Ｃ)土層図(3)(１／40) …… 177
第166図　ＳＲ03(Ｄ)土層図(4)(１／40) …… 178
第167図　ＳＲ03(Ａ)出土遺物(1)(１／４) …… 179
第168図　ＳＲ03(Ａ・Ｃ)出土遺物(2)(１／４、１／２) …… 181
第169図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(3)(１／４、１／２) …… 183
第170図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(4)(１／４) …… 184
第171図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(5)(１／４) …… 185
第172図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(6)(１／４) …… 186
第173図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(7)(１／４) …… 187
第174図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(8)(１／４、１／２) …… 188
第175図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(9)(１／２) …… 189
第176図　ＳＲ03(Ｃ・Ｄ)出土遺物(10)(１／４、１／２) …… 190
第177図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(11)(１／４) …… 192
第178図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(12)(１／４) …… 194
第179図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(13)(１／４) …… 195
第180図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(14)(１／４) …… 196
第181図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(15)(１／４、１／２) …… 197
第182図　ＳＲ03(Ｄ・Ｃ)出土遺物(16)(１／４、１／２) …… 199
第183図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(17)(１／４) …… 200
第184図　ＳＲ03(Ｂ)出土遺物(18)(１／４) …… 201
第185図　ＳＲ03(Ｂ・Ｃ)出土遺物(19)(１／４、１／２) …… 202
第186図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(20)(１／４) …… 204
第187図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(21)(１／４) …… 205
第188図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(22)(１／４) …… 206
第189図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(23)(１／４) …… 207
第190図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(24)(１／４) …… 208
第191図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(25)(１／４、１／２) …… 209
第192図　ＳＲ03(Ｃ・Ｄ)出土遺物(26)(１／４、１／２) …… 210
第193図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(27)(１／４) …… 212
第194図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(28)(１／４、１／２) …… 214
第195図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(29)(１／４) …… 215
第196図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(30)(１／４) …… 216
第197図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(31)(１／４、１／２) …… 217
第198図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(32)(１／４) …… 218
第199図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(33)(１／４、１／２) …… 220
第200図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(34)(１／４、１／２) …… 221
第201図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(35)(１／４) …… 222
第202図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(36)(１／４) …… 223
第203図　ＳＲ03(Ｃ・Ｄ)出土遺物(37)(１／４、１／２) …… 224
第204図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(38)(１／４) …… 226
第205図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(39)(１／４、１／２) …… 227
第206図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(40)(１／２) …… 228
第207図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(41)(１／４) …… 229
第208図　ＳＲ03(Ｄ)断面図(１／40)
　　出土遺物(42)(１／４、１／２) …… 230
第209図　ＳＲ03(Ａ・Ｂ)出土遺物(43)(１／４) …… 231
第210図　ＳＲ03(Ａ・Ｂ・Ｃ)出土遺物(44)(１／４) …… 232
第211図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(45)(１／４、１／２) …… 233
第212図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(46)(１／４、１／２) …… 234
第213図　ＳＲ03出土遺物(47)(１／４) …… 235
第214図　ＳＲ03出土遺物(48)(１／４、１／２) …… 236
第215図　ＳＲ03出土遺物(49)(１／２) …… 237
第216図　３区①包含層出土遺物(1)(１／４、１／２) …… 239
第217図　３区①包含層出土遺物(2)(１／２) …… 240
第218図　３区②包含層出土遺物(１／４、１／２) …… 241
第219図　３区④包含層出土遺物(１／４、１／２) …… 241
第220図　川津東山田遺跡Ｉ区におけるプラント・オパール
　　分析結果 …… 246
第221図　遺構変遷図(1)(１／800) …… 270
第222図　遺構変遷図(2)(１／800) …… 271
第223図　遺構変遷図(3)(１／800) …… 272
第224図　遺構変遷図(4)(１／800) …… 273

写真目次

写真１　プラント・オパール（植物珪酸体）の顕微鏡写真(1)
　　…… 247
写真２　プラント・オパール（植物珪酸体）の顕微鏡写真(2)
　　…… 248
写真３　プラント・オパール（植物珪酸体）の顕微鏡写真(3)
　　…… 249
写真４　羽口・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織 …… 259
写真５　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織(1) …… 260
写真６　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織(2) …… 261
写真７　含鉄鉄滓の顕微鏡組織 …… 262
写真８　鉄塊系遺物の顕微鏡組織 …… 263
写真９　棒状鉄片・板状金の顕微鏡組織 …… 264
写真10　椀形鍛冶滓・含鉄鉄滓のマクロ組織 …… 265
写真11　鉄塊系遺物のマクロ組織 …… 266
写真12　棒状鉄片・板状鉄片のマクロ組織 …… 267
写真13　鉄塊系遺物表皮スラグの鉱物相の特性Ｘ線像 …… 268

表目次

表１　四国横断自動車道（善通寺～高松）建設に伴う埋蔵文化財調査地一覧 …… 2
表２　発掘調査及び整理作業の体制 …… 5
表３　川津東山田遺跡Ｉ区のプラント・オパール分析結果 …… 245
表４　供試材の履歴と調査項目 …… 258
表５　供試材の組成 …… 258
表６　赤色顔料付着土器一覧 …… 275

図版目次

図版１　川津東山田遺跡Ｉ区遠景（下が北）
図版２　１区②、２区②（△地）・③、３区①航測写真（左が北）
図版３　２区②航測写真（下が北）
図版４　３区④・⑤航測写真（下が北）
図版５　４区①航測写真（下が北）
図版６　６区②航測写真（左が北）
図版７(1)　２区②（南部）全景（南から）
(2)　３区①全景（南から）
図版８(1)　３区③全景（東から）
(2)　３区④全景（北西から）
図版９(1)　６区①ＳＢ22・ＳＨ08付近（西から）
(2)　６区②（西半部）全景（東から）
図版10(1)　１区②（△地）全景（南から）
(2)　２区②（△地）全景（南東から）
(3)　２区③全景（南西から）
(4)　２区④全景（西から）
(5)　２区②（東部）全景（南西から）
(6)　４区③全景（北東から）
(7)　６区①北半全景（西から）
図版11(1)　６区②北半全景（北西から）
(2)　５区南ﾄﾚﾝﾁ（西から）
(3)　５区北ﾄﾚﾝﾁ（西から）
(4)　７区全景（南西から）
(5)　７区ﾄﾚﾝﾁ（南東から）
(6)　４区①調査風景（東から）
(7)　１区②ＳＨ01・02、ＳＢ10・12付近（南西から）
図版12(1)　ＳＨ01壁溝北西角土器出土状況（南から）
(2)　ＳＨ01内ＳＫ01土器出土状況（西から）
(3)　ＳＨ03・04全景（北東から）
(4)　ＳＨ03全景（北西から）
(5)　ＳＤ3201④断面（西から）
(6)　ＳＤ3201②断面（南から）
(7)　ＳＤ3201土器出土状況（南から）
図版13(1)　ＳＤ3201土器出土状況（北東から）
(2)　ＳＤ3201土器出土状況（北から）
(3)　ＳＨ04全景（北から）
(4)　ＳＨ04内ＳＫ01（北から）
(5)　ＳＤ3204断面
(6)　ＳＤ3204土器出土状況
(7)　ＳＨ05全景（南東から）
(8)　ＳＨ06全景（北東から）
図版14(1)　ＳＨ06内ＳＫ01（南西から）
(2)　ＳＨ06内ＳＫ01（西から）
(3)　ＳＨ06上面土器集中部（北西から）
(4)　ＳＨ07全景（西から）
(5)　ＳＨ07内ＳＫ01断面（北東から）
(6)　ＳＨ08全景（東から）
(7)　ＳＢ01・02・03・04全景（南東から）
(8)　ＳＰ3401土器出土状況（南から）
図版15(1)　ＳＢ05全景（南東から）
(2)　ＳＢ06全景（北西から）
(3)　ＳＥ01曲物出土状況（北西から）
(4)　ＳＥ01曲物出土状況（北西から）
(5)　ＳＤ3103断面（北から）
(6)　ＳＸ01全景（南から）
(7)　ＳＢ11全景（南西から）
(8)　ＳＢ13・18全景（北東から）
図版16(1)　ＳＤ01Ａ断面（東から）
(2)　ＳＤ01Ｂ②断面（北東から）
(3)　ＳＨ09全景（南西から）
(4)　ＳＨ09土器出土状況
(5)　ＳＫ01断面（北東から）
(6)　ＳＫ02断面（西から）
(7)　ＳＫ03断面（南から）
(8)　ＳＤ3106断面（南西から）
図版17(1)　ＳＤ3109ａ断面（南西部）（南東から）
(2)　ＳＤ3209ａ断面（北から）
(3)　ＳＢ15全景（北西から）
(4)　ＳＰ2201土器出土状況

(5)　ＳＢ16土器出土状況
(6)　ＳＢ17全景（南西から）
(7)　ＳＢ19全景（北東から）
(8)　ＳＢ21全景（北東から）
図版18(1)　ＳＢ22全景（南西から）
(2)　ＳＫ04断面（南から）
(3)　ＳＲ01Ｂ断面（南西から）
(4)　ＳＲ01Ｂ土器出土状況
(5)　ＳＲ01Ｃ断面（西から）
(6)　ＳＲ01Ｃ断面（南西から）
(7)　ＳＲ01Ｄ断面
(8)　ＳＲ01Ｅ土器出土状況
図版19(1)　ＳＲ02断面（南から）
(2)　ＳＲ02断面（北東から）
(3)　ＳＲ02断面（南から）
(4)　ＳＲ02断面（北西から）
(5)　ＳＲ03Ｃ断面（北から）
(6)　ＳＲ03Ｄ断面（西から）
(7)　ＳＲ03Ｄ断面（南東から）
(8)　ＳＲ03Ｄ断面（北東から）
図版20(1)　ＳＨ01出土土器
(2)　ＳＤ3201出土土器①
図版21(1)　ＳＤ3201出土土器②
(2)　ＳＤ3204出土土器
図版22　ＳＨ06出土土器
図版23(1)　ＳＨ07出土土器
(2)　ＳＰ3401出土土器
(3)　ＳＤ3120出土土器
(4)　ＳＤ3403出土土器
(5)　ＳＤ6201出土土器
図版24(1)　ＳＤ2401出土土器
(2)　ＳＤ2403出土土器①
図版25(1)　ＳＤ2403出土土器②
(2)　ＳＥ01出土土器
(3)　ＳＤ3119出土土器
(4)　ＳＸ01出土土器
(5)　ＳＤ01Ａ出土土器①
図版26(1)　ＳＤ01Ａ出土土器②
(2)　ＳＤ01Ｂ出土土器①
図版27　ＳＤ01Ｂ出土土器②
図版28(1)　ＳＤ01Ｃ出土土器
(2)　ＳＨ09出土土器
(3)　ＳＰ3102出土土器
(4)　ＳＤ3109出土土器①
図版29　ＳＤ3109出土土器②
図版30(1)　ＳＤ3210ａ出土土器
(2)　ＳＤ3210ｂ出土土器
(3)　ＳＤ3209出土土器
(4)　ＳＰ2201出土土器
図版31(1)　ＳＢ16出土土器
(2)　ＳＫ04出土土器
(3)　ＳＲ01出土土器①
図版32　ＳＲ01出土土器②
図版33　ＳＲ01出土土器③
図版34　ＳＲ01出土土器④
図版35　ＳＲ01出土土器⑤
図版36　ＳＲ01出土土器⑥
図版37　ＳＲ01出土土器⑦
図版38　ＳＲ01出土土器⑧
図版39　ＳＲ01出土土器⑨
図版40　ＳＲ02出土土器①
図版41　ＳＲ02出土土器②
図版42　ＳＲ02出土土器③
図版43　ＳＲ02出土土器④
図版44　ＳＲ02出土土器⑤
図版45　ＳＲ02出土土器⑥
図版46　ＳＲ02出土土器⑦
図版47　ＳＲ02出土土器⑧
図版48　ＳＲ02出土土器⑨
図版49　ＳＲ02出土土器⑩
図版50　ＳＲ02出土土器⑪
図版51　ＳＲ02出土土器⑫
図版52　ＳＲ02出土土器⑬
図版53　ＳＲ02出土土器⑭
図版54　ＳＲ02出土土器⑮
図版55　ＳＲ02出土土器⑯
図版56　ＳＲ02出土土器⑰
図版57　ＳＲ02出土土器⑱
図版58　ＳＲ02出土土器⑲
図版59　ＳＲ03出土土器①
図版60　ＳＲ03出土土器②
図版61　ＳＲ03出土土器③
図版62　ＳＲ03出土土器④
図版63　ＳＲ03出土土器⑤
図版64　ＳＲ03出土土器⑥
図版65　ＳＲ03出土土器⑦
図版66　ＳＲ03出土土器⑧
図版67　ＳＲ03出土土器⑨
図版68　ＳＲ03出土土器⑩
図版69　ＳＲ03出土土器⑪

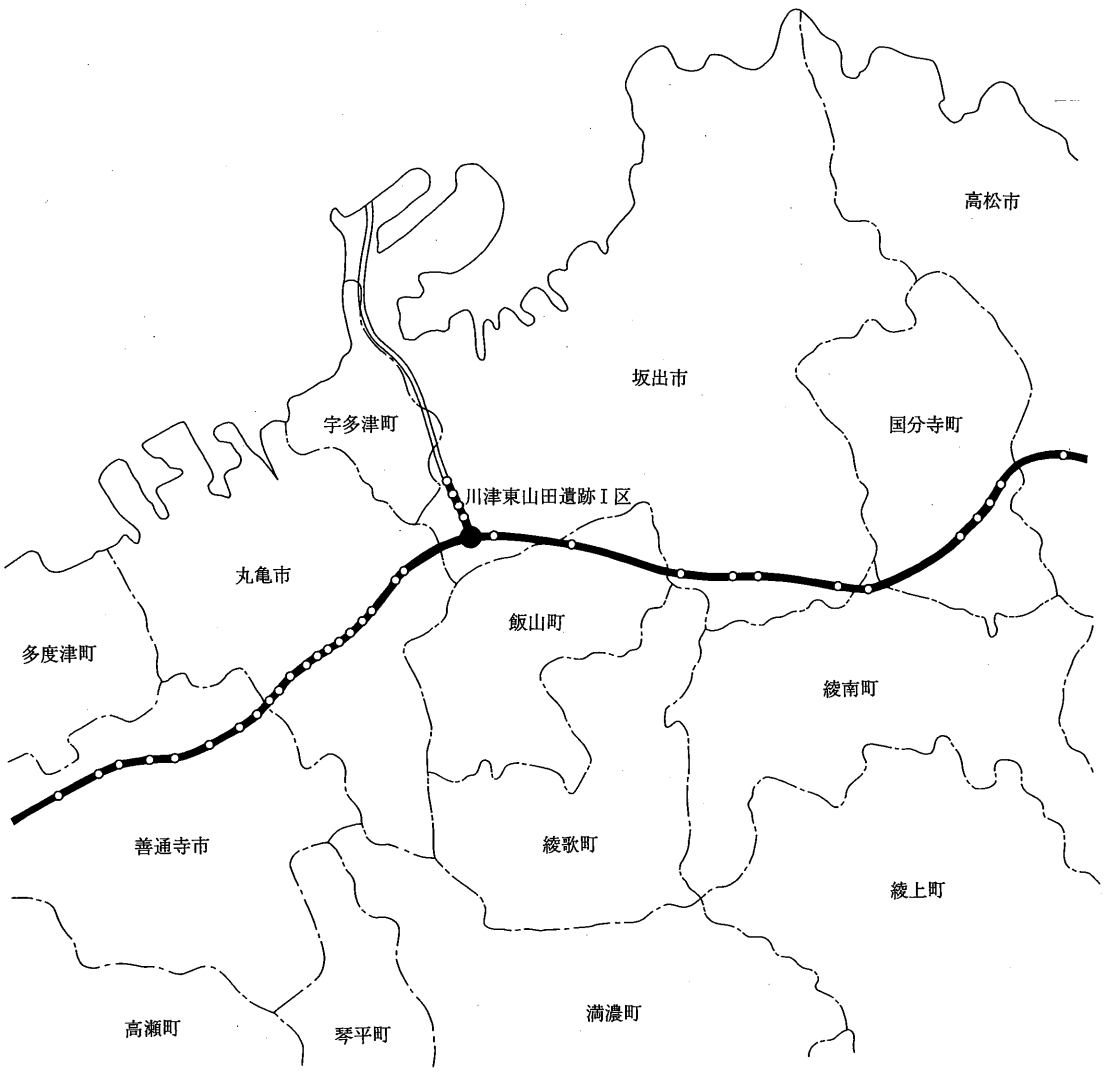
図版70　ＳＲ03出土土器⑫
図版71　ＳＲ03出土土器⑬
図版72　ＳＲ03出土土器⑭
図版73　ＳＲ03出土土器⑮
図版74　ＳＲ03出土土器⑯
図版75　ＳＲ03出土土器⑰
図版76　ＳＲ03出土土器⑱
図版77　ＳＲ03出土土器⑲
図版78(1)　ＳＲ03出土土器⑳
(2)　３区①包含層出土土器
(3)　３区②包含層出土土器
図版79(1)　ＳＤ3201出土石器
(2)　ＳＤ3204出土石器
(3)　ＳＨ06出土石器
(4)　ＳＢ01出土石器
図版80(1)　ＳＢ05出土石器
(2)　ＳＤ01出土石器①
図版81(1)　ＳＤ01出土石器②
(2)　ＳＤ3209出土石器
(3)　ＳＲ01出土石器
図版82(1)　ＳＲ01・02出土石器
(2)　ＳＲ02出土石器
図版83　ＳＲ03出土石器①
図版84　ＳＲ03出土石器②
図版85　ＳＲ03出土石器③
図版86　ＳＲ03出土石器④
図版87　ＳＲ03出土石器⑤
図版88　ＳＲ03出土石器⑥
図版89(1)　ＳＲ03出土石器⑦
(2)　３区①包含層出土石器
図版90(1)　３区④包含層出土石器
(2)　出土石器①
図版91　出土石器②

第１章　調査の経緯

第１節　調査にいたる経過

四国横断自動車道高松～善通寺間の建設は、同善通寺～豊浜間に引き続き、昭和57年１月８日に整備計画が決定され、昭和59年11月30日に建設大臣から日本道路公団総裁に対して施工命令が下された。

香川県教育委員会では、この間路線内の埋蔵文化財包蔵地の確認を目的に国庫補助事業として分布調査(1)を実施し、これを基に調査対象面積を39万㎡余りと判断した。路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、日本道路公団と文化庁の協議により、基本的には記録保存で対応することが決定した。



第１図　四国横断自動車道(善通寺～高松)路線図

No.	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)	調査期間	遺構	遺物
1	龍川五条遺跡	善通寺市原田町	12,300 10,200	元.6.26～2.3.31 2.4.9～2.12.5	弥生時代（環濠，竪穴住居，溝），古代溝，中世建物，近世井戸	弥生土器，土師器，須恵器，石器，木製品
2	龍川四条遺跡	善通寺市原田町・木徳町	20,200 1,700 300	元.7.1～2.3.31 2.5.28～2.12.5 3.4.4～3.6.18	古代掘立柱建物，中世建物，溝，土坑墓，自然河川	縄文土器，土師器，須恵器，瓦器，磁器，中世鏡
3	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町中村	12,041 1,300	63.4.18～元.2.10 元.4.10～2.3.31	弥生時代竪穴住居，溝，自然河川	弥生土器ほか
4	三条黒島遺跡	丸亀市三条町黒島	7,677	63.6.15～63.11.26	ユニット，溝，建物	旧石器，弥生土器，陶磁器
5	群家原遺跡	丸亀市三条町黒島・群家町原	17,099 2,600	63.4.18～元.3.31 元.4.10～2.3.31	竪穴住居，掘立柱建物，溝	弥生土器，土師器，須恵器，緑釉陶器，斎串ほか
6	群家一里屋遺跡	丸亀市群家町八幡上	14,067 6,450	63.4.18～元.3.31 元.4.10～2.3.31	掘立柱建物，溝，自然河川	弥生土器，土師器，須恵器，緑釉陶器，灰釉陶器，有舌尖頭器ほか
7	群家大林上遺跡	丸亀市群家町大林上	11,175	63.6.15～元.3.22	掘立柱建物，溝，自然河川	須恵器，斎串ほか
8	群家田代遺跡	丸亀市群家町田代	12,741	63.6.15～元.2.17	掘立柱建物，溝，火葬墓	弥生土器，須恵器，近世陶磁器，ナイフ形石器
9	川西北・原遺跡	丸亀市川西町北・原	3,033	63.12.12～元.3.25	掘立柱建物，溝	
10	川西北・七条Ⅰ遺跡	丸亀市川西町北・七条	4,034	63.12.13～元.3.27	溝，自然河川	土師器，須恵器
11	川西北・七条Ⅱ遺跡	丸亀市川西町北・七条	4,760	元.2.2～元.3.31	掘立柱建物，溝	土師器
12	川西北・鍛冶屋遺跡	丸亀市川西町北	12,208	元.4.10～元.8.11	中世掘立柱建物，溝，自然河川	土師器，須恵器，近世陶磁器
13	飯野・東二瓦礫遺跡	丸亀市飯野町東二瓦礫	3,366	63.12.13～元.3.27	掘立柱建物，溝，自然河川	土師器，須恵器
14	飯野・東分山崎南遺跡	丸亀市飯野町	300	2.3.1～2.3.31		
15	川津東山田遺跡	坂出市川津町 飯山町東坂元	28,100 500	2.8.2～3.3.20 3.9.2～3.9.4	弥生時代竪穴住居，古墳時代竪穴住居，柱穴	弥生土器，土師器，須恵器
16	川津川西遺跡	坂出市川津町	5,400	2.5.10～3.1.17	古墳時代竪穴住居，古代～中世建物，溝	縄文土器，土師器，須恵器，墨書土器，土馬，耳環
17	川津中塚遺跡	坂出市川津町	15,290 5,700	2.5.10～3.2.28 3.4.4～3.9.13	弥生時代竪穴住居，古代～中世掘立柱建物，溝，土坑，土坑墓	弥生土器，土師器，須恵器，耳環，鉄小刀
18	川津下樋遺跡	坂出市川津町	9,650 200	2.5.10～3.1.31 3.7.1～3.7.16	弥生時代（水田，井堰），溝，自然河川	縄文晩期土器，弥生土器，石器（打製石包丁ほか），木製品
19	川津二代取遺跡	坂出市川津町	10,400	2.5.10～3.3.8	弥生時代（溝，自然河川），中世（建物，溝）	弥生土器，土師器，石器
20	川津一ノ又遺跡	坂出市川津町	35,160 1,350	2.4.12～3.2.28 3.7.18～3.9.27	弥生時代自然河川，弥生時代～古墳時代（竪穴住居，掘立柱建物，土坑），古代～中世（溝，水田）	弥生土器，土師器，須恵器，石器，木製品，帯金具
21	飯山一本松遺跡	飯山町	2,200	元.4.17～元.5.16		弥生土器，土師器，須恵器
22	府中地区	坂出市府中町	3,000	2.10.30～2.12.26	土坑	須恵器
23	綾南奥下池南遺跡	綾南町	2,900	元.5.22～元.7.24	須恵器窯跡	須恵器
24	国分寺下日名代遺跡	国分寺町福家	11,350	元.8.19～2.2.28	弥生時代溝，水田，動物足跡	弥生土器，土師器，須恵器
25	国分寺楠井遺跡	国分寺町福家	4,400	2.4.11～2.10.2	古墳時代横穴式石室，中世窯，建物	土師器，須恵器，瓦質土器，耳環
26	国分寺六ツ目古墳	国分寺町福家	900	元.9.1～元.12.28	前方後円墳（主体部3基）	古式土師器，鉄器
27	国分寺六ツ目遺跡	国分寺町福家	5,600	元.10.1～2.2.28	中近世建物	弥生土器，近世陶磁器，石器
28	中間西井坪遺跡	高松市中間町	11,600 8,680 1,270	元.8.19～2.3.25 2.5.10～3.3.25 3.4.5～3.7.18	旧石器ブロック，弥生時代～近世建物，埴輪，焼成土坑，古墳，溝，土坑	弥生土器，土師器，須恵器，埴輪，陶棺，ナイフ形石器，船底形石器

表１　四国横断自動車道（善通寺～高松）建設に伴う埋蔵文化財調査地一覧

香川県教育委員会では、これを受けて香川県の担当課である土木部横断道対策室及び日本道路公団高松建設局高松工事事務所と昭和62年度から調査体制等について協議を開始した。

その結果、昭和63年度当初から２カ年の予定で本調査を実施すること、整理報告は発掘調査終了後に実施することなどが決定した(2)。これを受けて香川県教育委員会では調査体制の充実を図ることを目的に、昭和62年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設置するとともに、専門職員の増員などの措置を実施した。

平成元年には、坂出市川津町に所在する埋蔵文化財包蔵地の具体的な内容を把握するため、日本道路公団と協議の上、用地買収の進捗に併せて予備調査を実施した。予備調査の着手に当たっては、地元関係者、四国横断自動車道・南進自動車道対策協議会、同中塚地区対策協議会、同西又地区対策協議会、坂出市都市開発部瀬戸大橋・四国横断道対策室、香川県坂出土木事務所横断道対策課等の多大な協力を得た。

予備調査の結果、川津東山田遺跡を始めとする集落跡を中心とした６遺跡についての内容を把握し、同地区での本調査対象面積を111,750㎡に確定した。

今回報告する川津東山田遺跡Ⅰ区は、調査対象面積は28,600㎡である。調査の都合上、調査区はⅠ区とⅡ区に分けて行った。本調査は平成２年８月２日に開始し、未退去家屋部分を残し、平成３年３月20日に終了した。平成２年度に調査を行えなかった個所については、平成３年９月２日に調査を開始し、平成３年９月４日に終了した。

(1)香川県教育委員会1987『国道バイパス及び四国横断自動車道建設予定地内埋蔵文化財詳細分布・試掘調査概報』

(2)最終的に、用地買収・家屋退去等の関係で調査期間は３年６ヶ月を要し、本調査面積は予備調査による遺跡内容の確定を随時実施したことから、319,201㎡になった。

第２節　調査の経過

１．調査の経過

川津東山田遺跡の発掘調査は対象地をⅠ・Ⅱ区に分けて実施した。平成２年５月に予備調査を行い、横断道ジャンクション部分に相当する飯野山北麓緩斜面部分と、その西側の丘陵部について遺跡の広がりを確認することができた。遺跡の中には自然河川があることが確認できたため、掘り下げに排出する土量の資料を得るため、６月には補足の予備調査を行った。その結果を基に、発掘調査はⅠ・Ⅱ区に分けて行い、Ⅰ区16,300㎡、Ⅱ区12,300㎡の合わせて28,600㎡の本調査を実施することとなった。

本調査は、平成２年８月より開始した。調査方式は工事請負方式である。調査は３区④から始め、仮設道を順次付け替えながら３区②で終了した。５区については、予備調査の結果、遺構が希薄であったこと、本調査で行った４区の調査でもきわめて遺構密度が少なく、さらに山手側である５区で遺構が検出する見込みがあまりなくなったことから、まずトレンチ調査を実施し、遺構があれば順次広げる方法を採った。しかし、遺構がみられなかったことで、トレンチ調査で終了した。平成３年度は、平成２年度に調査を実施できなかった未退去家屋のうち、平成２年度の調査の結果、遺構の広がる可能性のある３区④の南側にあたる部分500㎡について調査を実施した。調査方法は直営方式で、平成３年９月２日～９月４日まで実施し、川津東山田遺跡の調査を終了した。

今回の整理作業はⅠ区の報告を行うもので、平成11年10月１日から開始し、平成13年３月30日に終了した。Ⅱ区の整理作業については、平成13年度に行う予定である。

２．発掘調査及び整理作業の体制

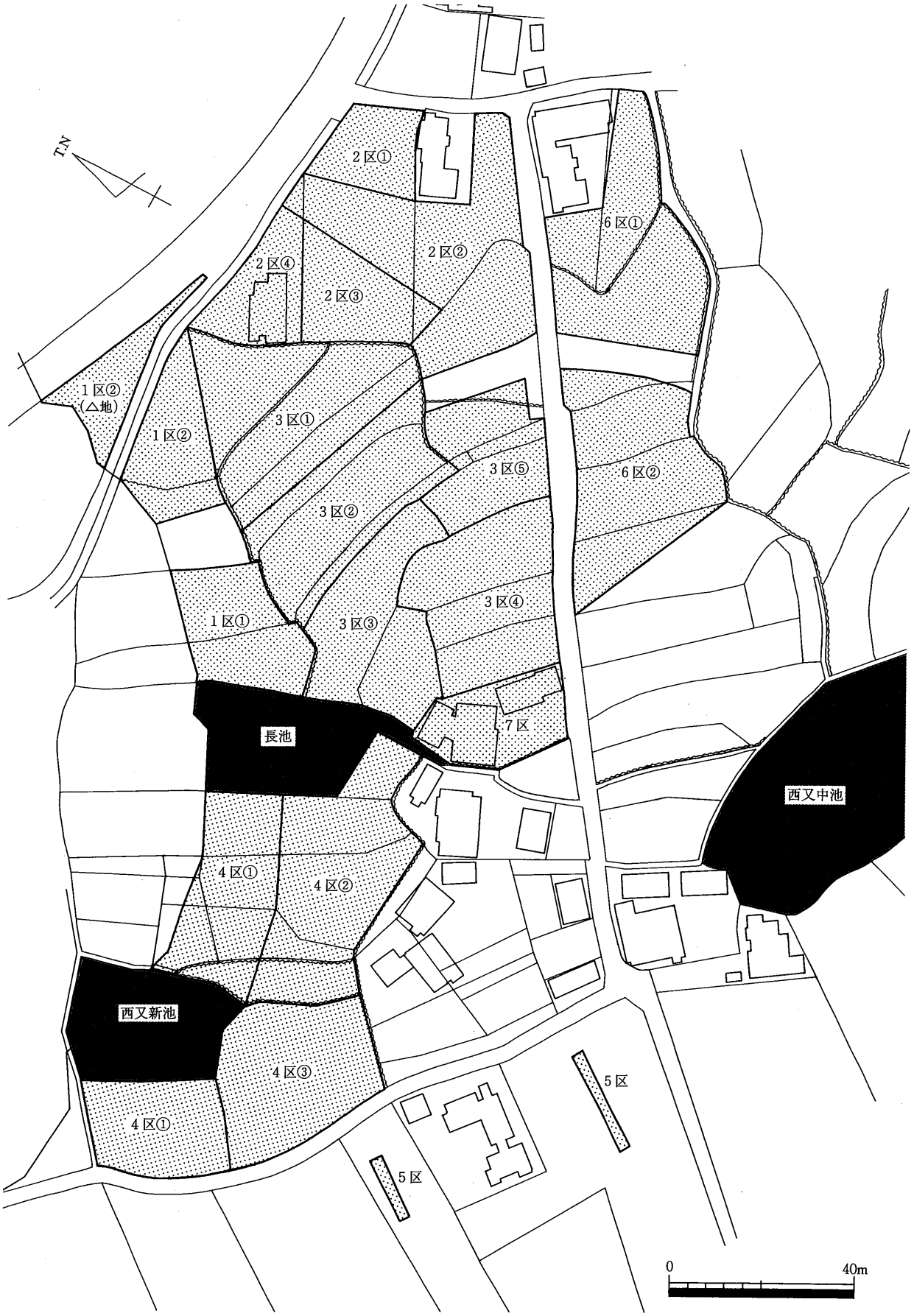
表２のとおり

整理作業に携わった方々は以下の通りである。

整　理　員	岡崎江伊子
整理補助員	合田和子、前田好美
整理作業員	松尾優子、松本知子、池内妙子、藤川洋代、加藤恵子、東川真希子、東条貴美 地崎裕子

香川県教育委員会 文化行政課				
	平成２年度	平成３年度	平成11年度	平成12年度
総括	課長　太田　彰一 課長補佐　菅原　良弘 副主幹　野網朝二郎	課長　中村　仁 主幹　菅原　良弘 課長補佐　小原　克己（6.1～） 副主幹　野網朝二郎（～5.31）	課長　小原　克己 課長補佐　小國　史郎 副主幹　廣瀬　常雄	課長　小原　克己 課長補佐　小國　史郎 副主幹　廣瀬　常雄
総務	係長　宮内　憲生 主任主事　横田　秀幸 主事　水本久美子（～5.31） 主事　石川恵三子（6.1～）	係長　宮内　憲生 主任主事　横田　秀幸（～5.31） 主事　櫻木　新士（6.1～） 主事　石川恵三子	係長　中村　禎伸 主査　三宅　陽子 主査　松村　崇史 主事　石川恵三子	係長　中村　禎伸 主査　三宅　陽子 主事　亀田　幸一
埋蔵文化財	係長　大山　真充 主任技師　岩橋　孝 技師　北山健一郎	係長　藤好　史郎 主任技師　岩橋　孝 主任技師　北山健一郎	係長　西村　尋文 文化財専門員　森　格也 主任技師　塩崎　誠司	文化財専門員　西岡　達哉 文化財専門員　森　格也 文化財専門員　宮崎　哲治
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター				
総括	所長　十川　泉 次長　安藤　道雄	所長　十川　泉 次長　安藤　道雄	所長　菅原　良弘 次長　川原　裕章	所長　菅原　良弘（～10.31） 所長　小原　克己（11.1～） 次長　川原　裕章
総務	係長（事務）　加藤　正司 主査（土木）　山地　修 主事　三宅　浩司（～5.31） 主事　斎藤　政好（6.1～）	係長（事務）　加藤　正司（～5.31） 係長（事務）　土井　茂樹（6.1～） 主査（土木）　山地　修（～5.31） 係長（土木）　今田　修（6.1～） 主任主事　斎藤　政好	副主幹（事務）　田中　秀文 係長　新　一郎	副主幹（事務）　大西　誠治 係長　新　一郎
調査	参事　見勢　護 係長　渡部　明夫 係長　藤好　史郎 係長　真鍋　昌宏 文化財専門員　金丸　真明 主任技師　中野　昇一 技師　和田　素子 調査技術員　松尾　優美	係長　渡部　明夫 係長　真鍋　昌宏 主任技師　西岡　達哉 主任技師　真下　拓也 調査技術員　白川　悦代	主任文化財専門員　大山　真充 文化財専門員　木下　晴一 文化財専門員　山元　素子	主任文化財専門員　大山　真充 文化財専門員　片桐　孝浩 文化財専門員　山元　素子

表２　発掘調査及び整理作業の体制



第２図　調査区割図（１／1,200）

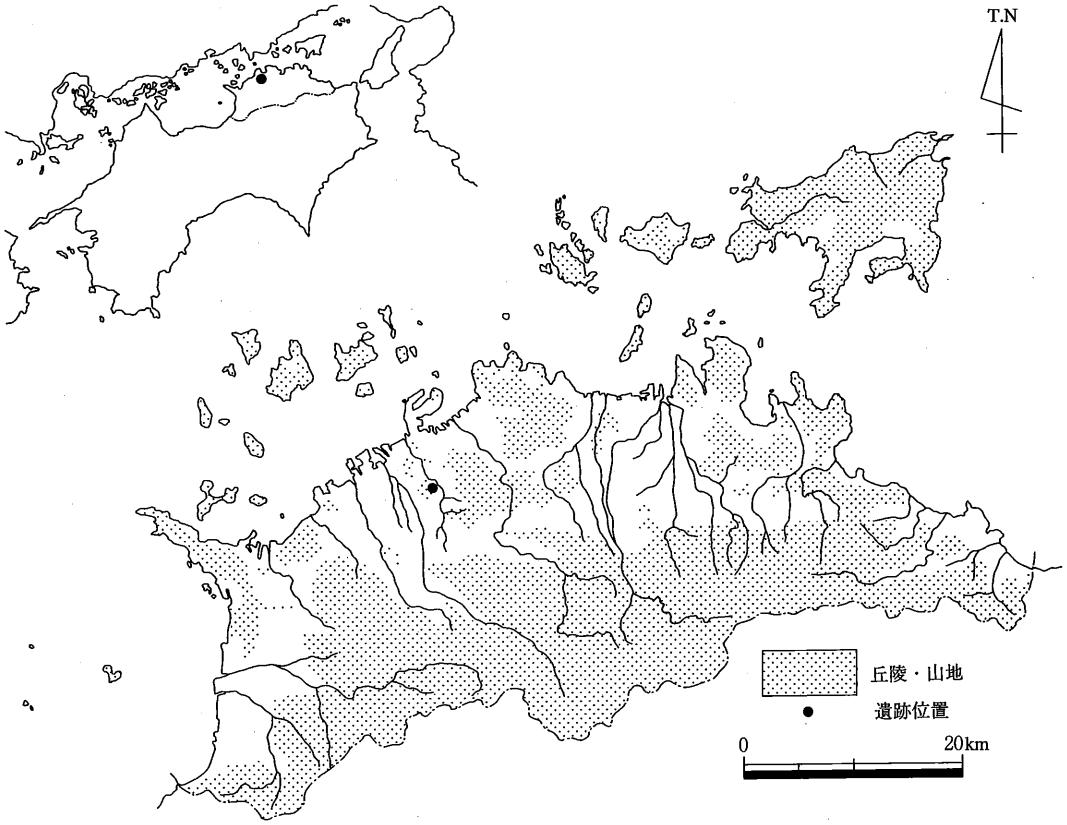
第２章　立地と環境

川津東山田遺跡は丸亀平野の東部、飯野山麓に位置する。調査前の標高は約10～31ｍであった。調査前は、おおむね段丘１面に相当する１・２・３・６区は水田やビニールハウス・宅地に、段丘２面に相当する４・５区は果樹園に利用されていた。調査地の周辺地形については木下晴一氏による詳しい分析がなされているので、参照されたい。(1) 今回報告する川津東山田遺跡Ⅰ区は飯野山の北麓にあたり、地形は若干北へ傾斜している。歴史的環境については『川津一ノ又遺跡Ⅰ』、『川津川西遺跡・飯山一本松遺跡』(2) で詳述しているため、省略した。

(1)　木下晴一　1995「第２章　遺跡の立地と環境」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第十六冊　川津二代取遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

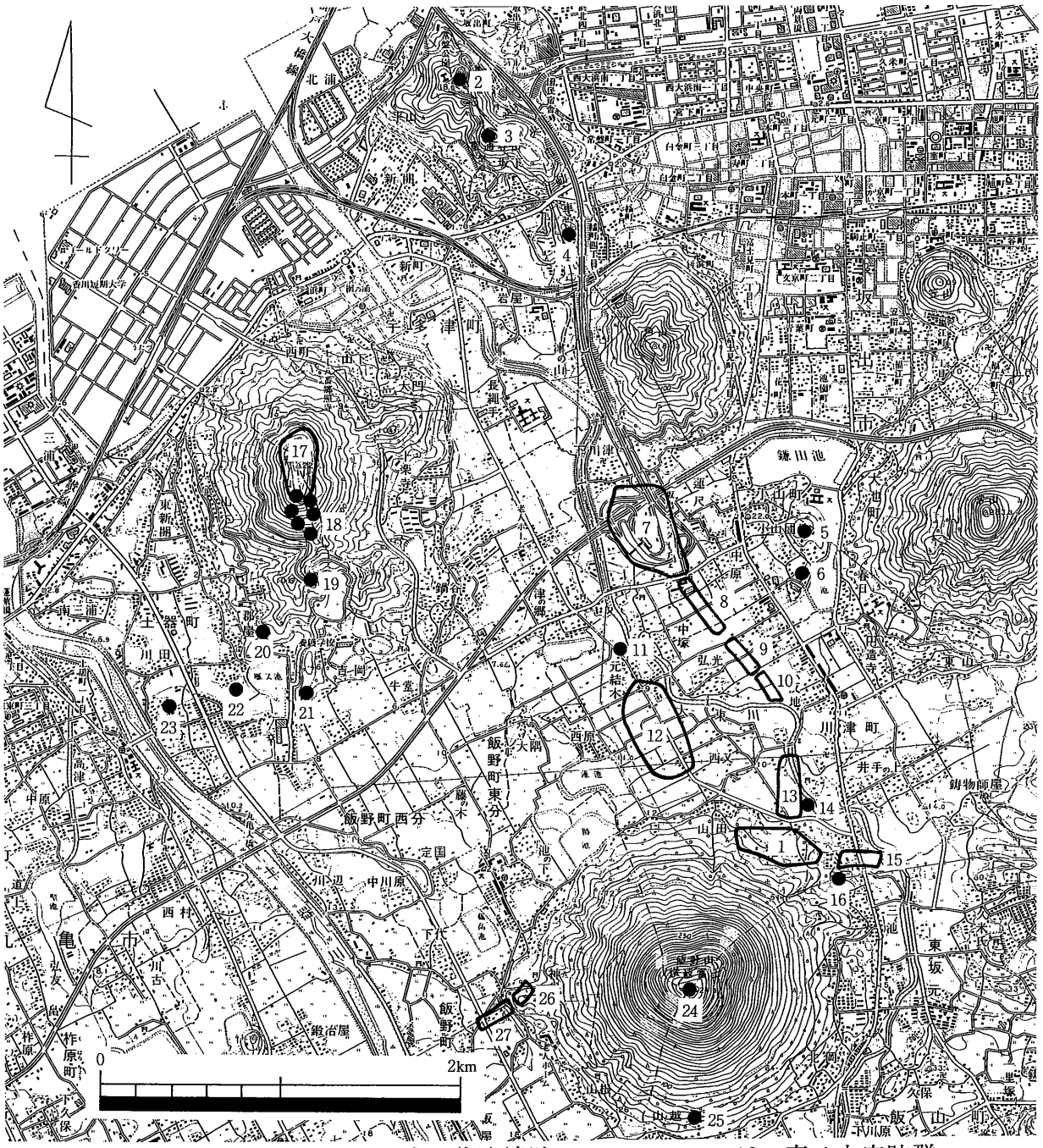
(2)　山下平重　1997「第２章　立地と環境」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第二十六冊　川津一ノ又遺跡Ⅰ』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団

蔵本晋司　1999「第２部　川津川西遺跡の調査　第１章　立地と環境」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第三十三冊　川津川西遺跡・飯山一本松遺跡』香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団



第３図　遺跡位置図(1)

第４図　遺跡位置図(2)(１／5,000)



1．川津東山田遺跡
2．聖通寺山古墳
3．聖通寺城跡
4．田尾茶臼山古墳
5．川津茶臼山古墳
6．蓮尺茶臼山古墳
7．下川津遺跡
8．川津中塚遺跡
9．川津下樋遺跡
10．川津二代取遺跡
11．川津元結木遺跡
12．川津西又遺跡
13．川津一ノ又遺跡Ⅲ・Ⅳ区
14．川津一ノ又遺跡
15．川津川西遺跡
16．三ノ池古墳
17．青ノ山山頂遺跡
18．青ノ山古墳群
19．青ノ山窯跡群
20．竜塚古墳
21．吉岡神社古墳
22．青ノ山２号窯跡
23．青ノ山城跡
24．飯野山山頂遺跡
25．坂本神社遺跡
26．飯野東分山崎南遺跡
27．飯野東二瓦礫遺跡

第５図　周辺の遺跡（１／35,000）

第３章　調査の成果

第１節　調査の概要

川津東山田遺跡は県道富熊宇多津線の南側、飯野山北麓に位置する遺跡である。調査区割りはおおむね旧水田を単位として１区①から６区②まで設定し、平成３年度に行った部分は７区とした。

調査地は平野部へ取り付く部分から緩斜面地（段丘１面）、やや傾斜が急になる場所（段丘２面）まで、標高約15m～約16.5mまで位置する。場所によってはビニールハウスが多く設置されており、攪乱が及んでいた場所も少なくなかった。調査の結果、調査地の東・西側に谷筋が走り、北側に湿地帯が横たわることがわかった。遺構はその間の微高地上で検出した。また、遺構は段丘１面（１～３・６・７区）でおもに検出し、段丘２面（４・５区）では遺構密度は極端に低くなった。

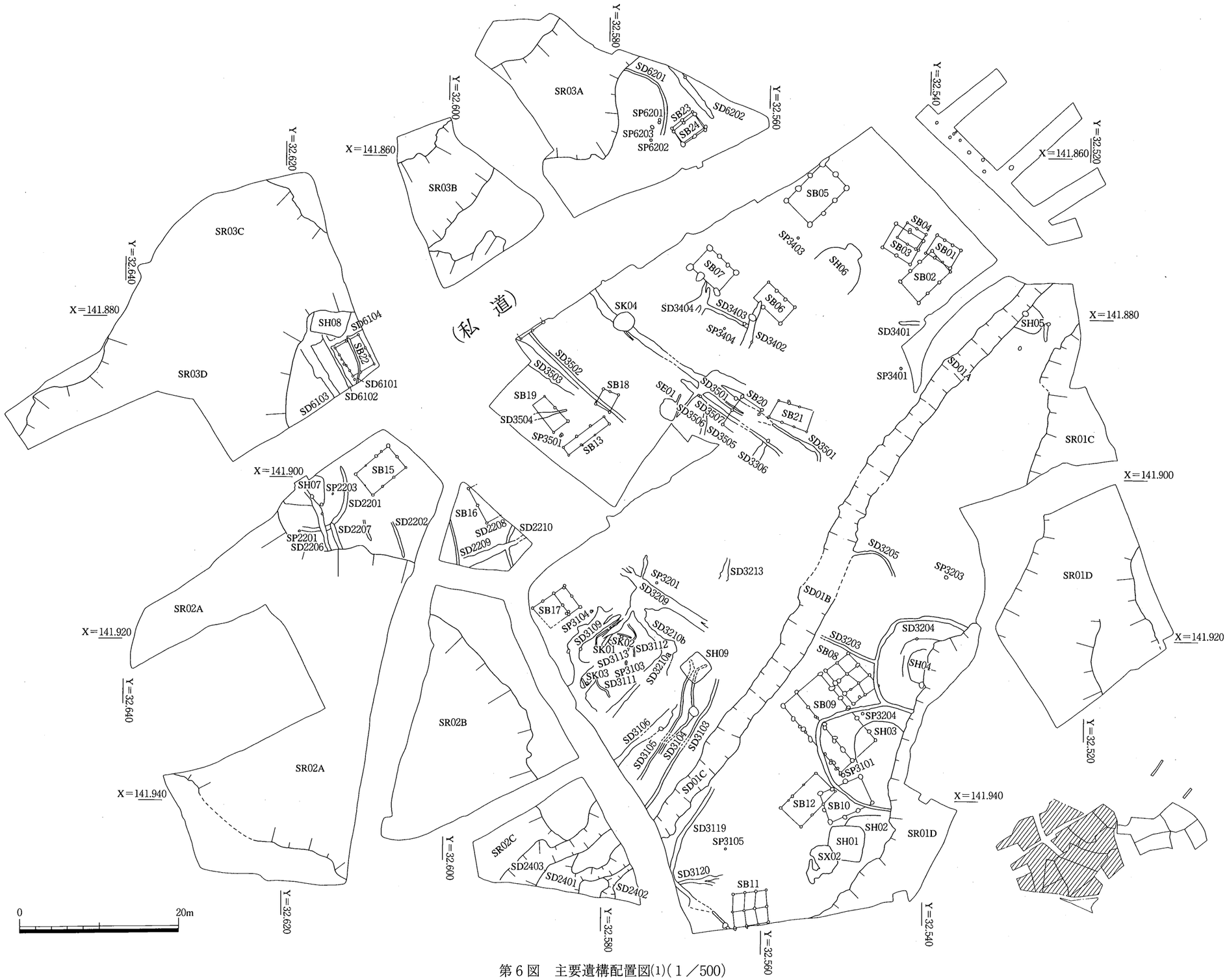
１区①・②（西半部）・３区③（西半部）では幅約20mの谷筋を検出した。この谷筋の堆積土中からはわずかに摩滅の進んだ弥生土器が出土しただけであるが、この谷筋を切って、13世紀頃に形成された２条の流路から、弥生時代後期～13世紀代の土器が大量に出土したことにより、この部分にも弥生時代後期の遺構が広がっていた様子も窺える。

６区①・②では集落の東側に広がる谷筋を検出した。幅約12mの谷筋で、６区②では埋土がほぼ全部が礫で占められていたことから、水流の激しさが窺える。この流路の埋土中からは弥生土器しか出土しておらず、流路の時期もこの頃と思われる。６区②から６区①にかけては、中世以降の小流路が土層断面から数条あったことが想定できるが、平面的に追うことはできなかった。

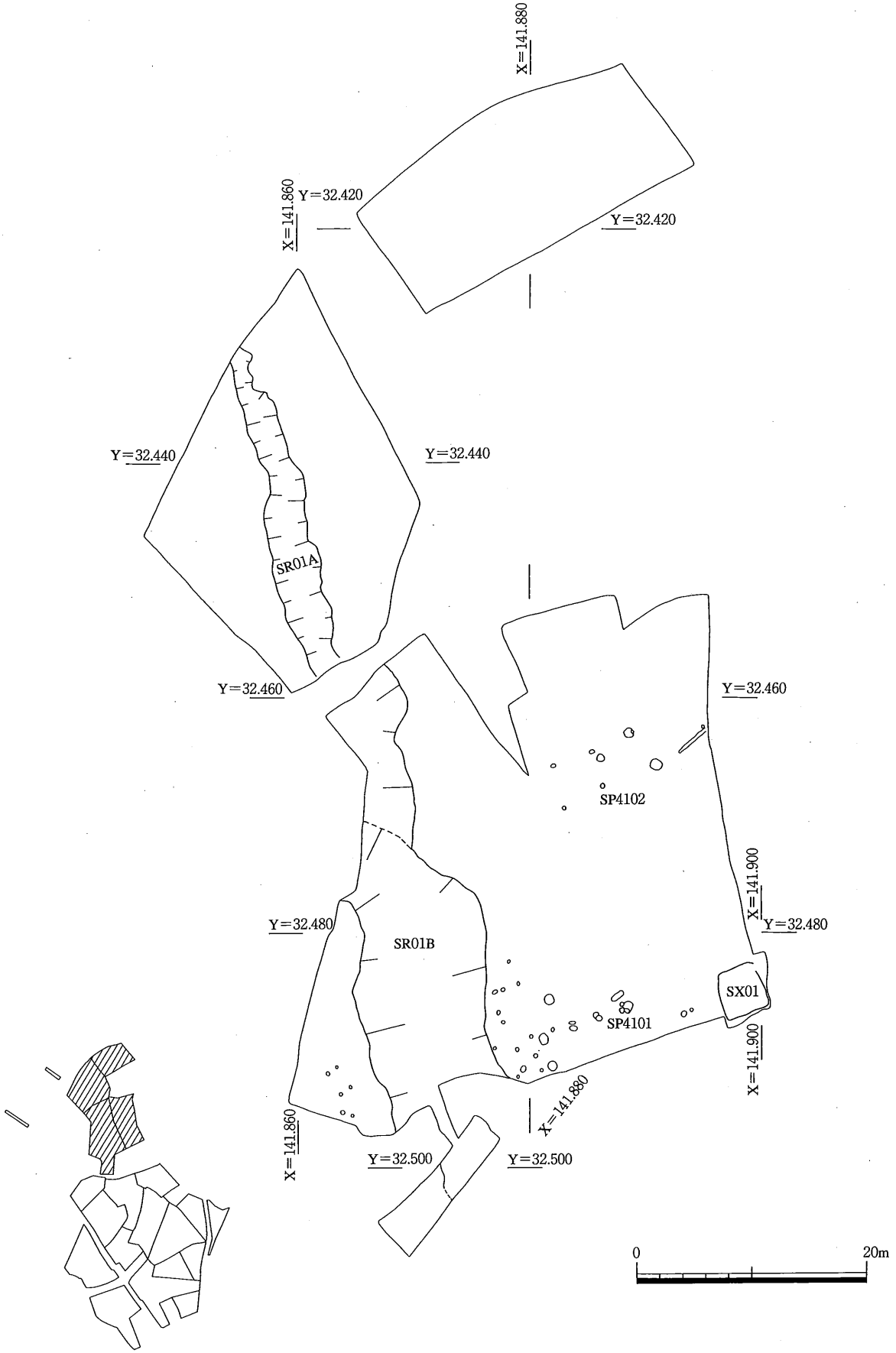
１区②△地・２区①・②・③・④・６区①では、遺跡の北側を限る湿地帯の埋土と思われる黒色粘土層を検出した。この黒色粘土層は川津一ノ又遺跡でも検出しているもので、川津一ノ又遺跡の集落と川津東山田遺跡の集落の境となっていたと考えられる。この黒色粘土層を中心とする埋土中からは多量の弥生土器が出土している。また、この湿地帯の名残は後の時代まで続いたようで、この上面には、古代～中世にかけての包含層が広がり、そのうちの複数面から、水田面を川津一ノ又遺跡Ⅲ・Ⅳ区、川津東山田遺跡Ⅰ区で検出している。このことから古代から中世にかけて水田域が広がっていたことがわかる。

１区②（東半部）・２区②（南半部）・３区①・②・③（東半部）・④・⑤・６区①（西半部）・６区②（西半部）は段丘1面の微高地上に当たり、遺構密度が最も高かった場所である。しかし、遺構の重複は、隣接する川津一ノ又遺跡などに比べれば少なく、川津一ノ又遺跡ほどには発展した集落ではなかったと思われる。遺構はわずかに弥生時代中期後半のものが含まれるが、おもに弥生時代後期後半～終末期、８世紀、９世紀後半～10世紀前半、13世紀頃の遺構を検出した。弥生時代後期の遺構は、おもに微高地の縁辺部や、段丘１面でも比較的高い位置にある３区④で検出している。古墳時代には集落はみられなくなり、８世紀代には徐々に遺構がみられ始めるが、遺構密度は低い。９世紀後半～10世紀前半代は集落の中心が段丘１面でも比較的標高の低い３区①・②（南部）・１区②（東半部）へ移る。ここでは延長82mに及ぶ幹線水路を中心に、地割を形成する溝・掘立柱建物のほか、精練鍛冶を行っていたと考えられる遺構群などを検出した。なお、この遺跡は丘陵の山裾に立地するため、条里型地割はあまり関係ない。13世紀代の遺構は、地割を形成する溝と小規模の掘立柱建物を散在して検出したが、10世紀代に比べて、遺構密度は低くなる。

段丘２面に相当する４区・５区では、西側の谷筋の上流に当たると思われる谷筋と遺構を検出しているが、遺構密度はきわめて希薄で、時期の判明する遺構も少ない。



第６図　主要遺構配置図(1)(１／500)



第７図　主要遺構配置図(2)(１／500)

第２節　土層序

土層図中、自然河川や湿地帯を含む場所は、自然河川の項目で掲載し、ここでは微高地部分の土層で斜面に直交するものと平行するものを載せた。

微高地部分の土層序は、わずかに包含層を含む部分があるものの、大半は耕作土・床土直下はベースである。ベースは段丘１面では黄灰色粘土層、段丘２面では黄褐色・褐色粗砂層で山土であった。微高地の東・西側では谷筋を、北側では湿地帯を検出した。微高地部分でも自然河川や湿地帯の近くになると、耕作土と地山の間に包含層や、自然河川の堆積土の最上部と考えられる土層が堆積するが、これらの土層については自然河川の項で述べる。

⑴土層図①（第９図）

２区②から７区にかけての断面で、調査区のほぼ中央の平野部から山麓への断面である。調査前の標高は11.9m～16.5mで、標高差4.6mである。３区④の低い部分と７区で弥生時代後期の遺物包含層（灰褐色砂質土）が堆積することを除けば、耕作土や近世の耕作土と思われる明黄灰色土の下部にはおおむね黄灰色砂質土のベースがある。遺構面までは一貫して50cm程度と浅い。

⑵土層図②（第10図）

３区①東壁の部分である。丘陵斜面に平行する壁面の土層で、微高地上の土層中、最も低い位置の土層図である。調査前の標高は約10.8mである。耕作土の下部には近世の耕作土と思われる黄褐色系の砂質土層・中世の包含層の灰褐色砂質土層があり、南側の方では暗褐灰色砂混粘質土層（古代包含層）、その下部には部分的に黒色粘土層も薄くみえる。ベースは暗青灰色粘土混砂質土で、この場所がやや湿潤であったことを示すと思われる。中世・古代包含層および弥生時代後期の遺物を含む黒色粘土層はいずれも２区の湿地帯から延びるものと思われ、その縁辺部に当たると考えられる。

⑶土層図③（第10・11図）

３区①南側の壁面の土層図である。等高線に直交する方向と平行する方向のおおむね中間くらいの方位である。調査前の標高は約11.5mである。土層図②同様、耕作土の下部には薄く２区から続く灰褐色砂質土（中世包含層）が堆積するが、暗褐灰色砂質土（古代包含層）や黒色粘土層（弥生時代後期包含層）は認められなくなる。ベースは明灰黄色砂質土である。

⑷土層図④（第11図）

４区①北壁の土層図である。段丘２面に相当し、等高線に直交する方向である。調査前の標高は17.5m～14.8mである。耕作土の下部には褐色や黄褐色砂質土など山土が堆積する。ベースは黄褐色～明褐色粗砂を中心とする土で、丘陵地の色合いを濃くする。

⑸土層図⑤（第11図）

４区①東壁の土層図である。斜面に平行する方向の土層で、標高は調査前で約15.7mである。段丘２面の中では最も低い場所である。基本的な土層序は土層④とあまり変わらないが、ベースまでの深さは浅い。南側は自然河川に向かって低くなるので、その上面に堆積したと考えられる茶灰色粗砂質土を中心とする層が堆積する。

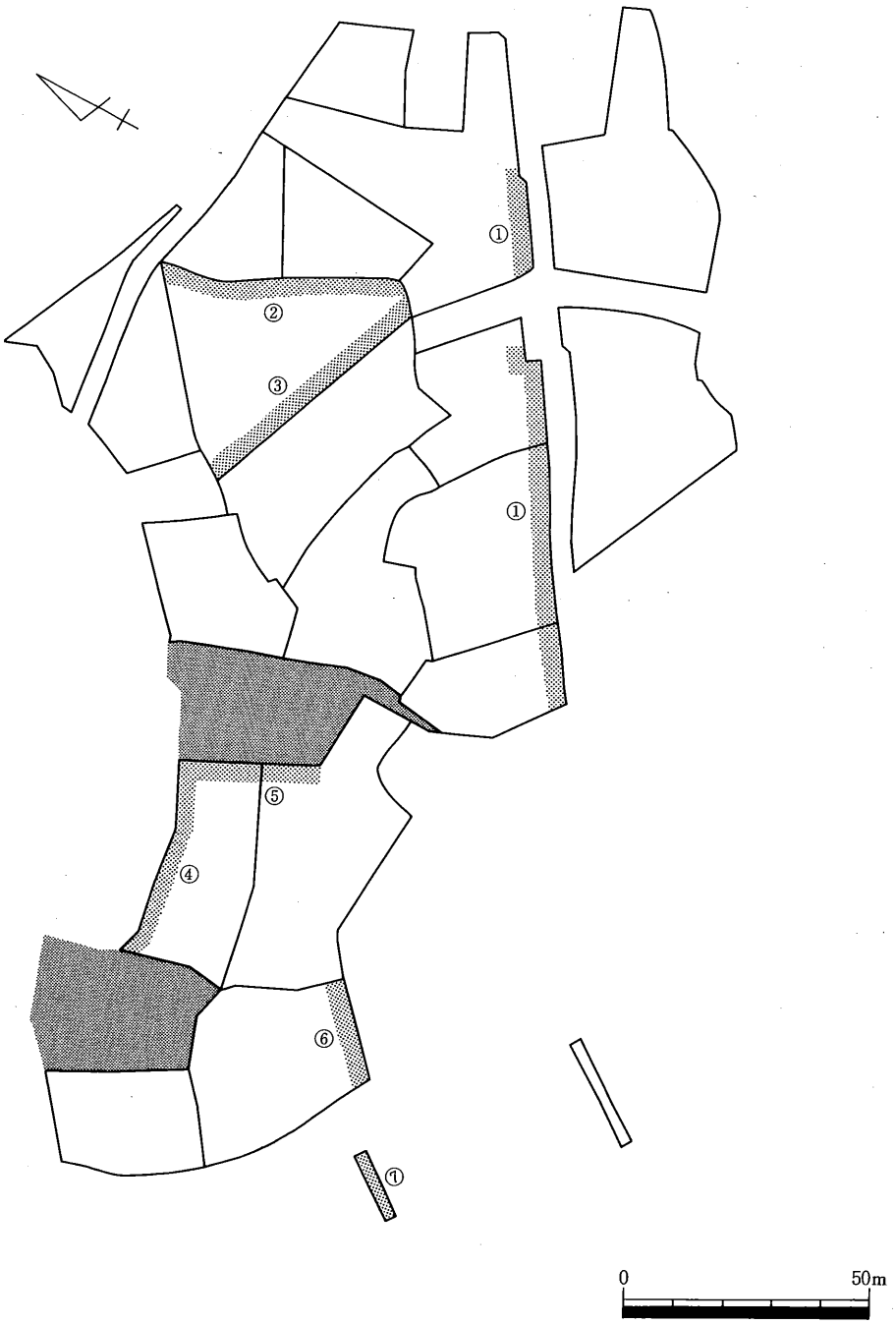
⑹土層図⑥（第12図）

４区③南壁の土層図である。斜面に直交する方向で、４区で最も高い調査区である。調査前の標高は19.6m～23.0mである。上部は黄褐色土の埋土で、果樹園による撹乱土である。ベースは明黄灰色

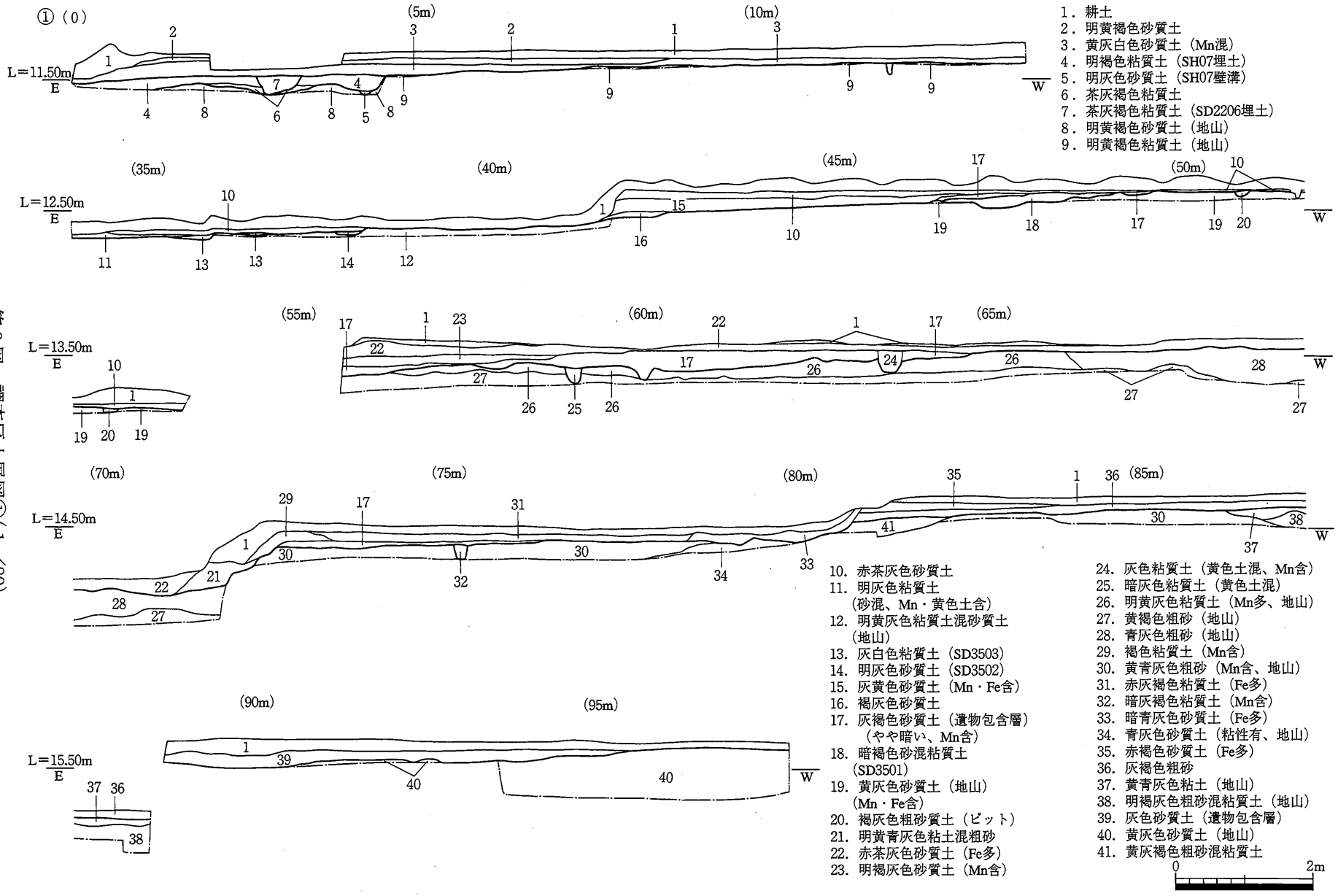
粘質土～粗砂質土である。この調査区の遺構は小規模の流路以外は皆無であった。

⑺土層図⑦（第12図）

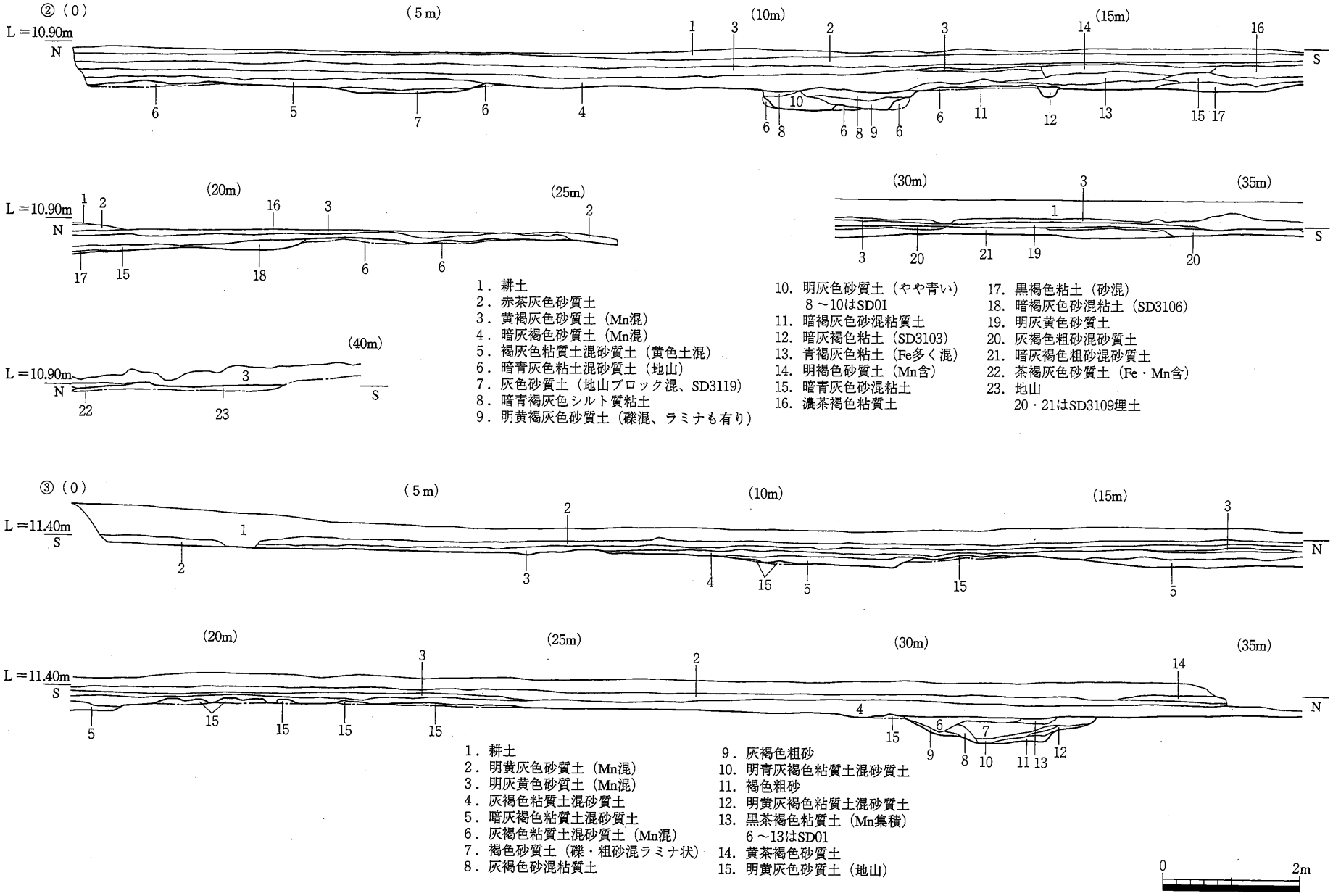
5区②北側トレンチの土層図である。斜面に直交する方向で、調査地の中で最も標高の高い場所にある。調査前の標高は23.4～31mである。耕作土の下部は淡褐灰色小礫混じりシルト、その下部に褐灰色礫混じりシルト・砂が堆積する。この調査区で遺構は皆無であった。



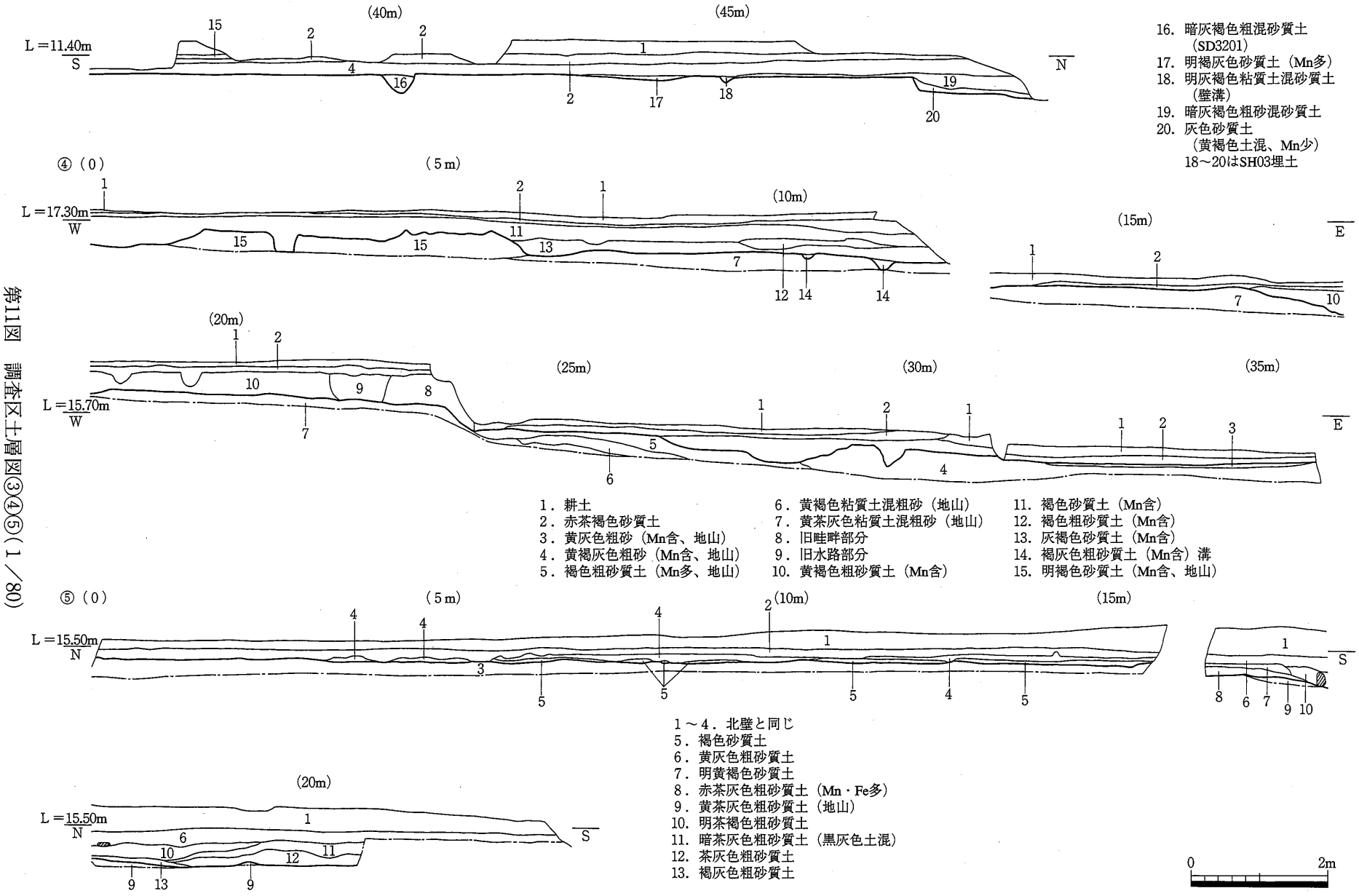
第８図　調査区土層図位置図（１／1,500）



第9図　調査区土層図①（1／80）



第10図　調査区土層図②③（1／80）



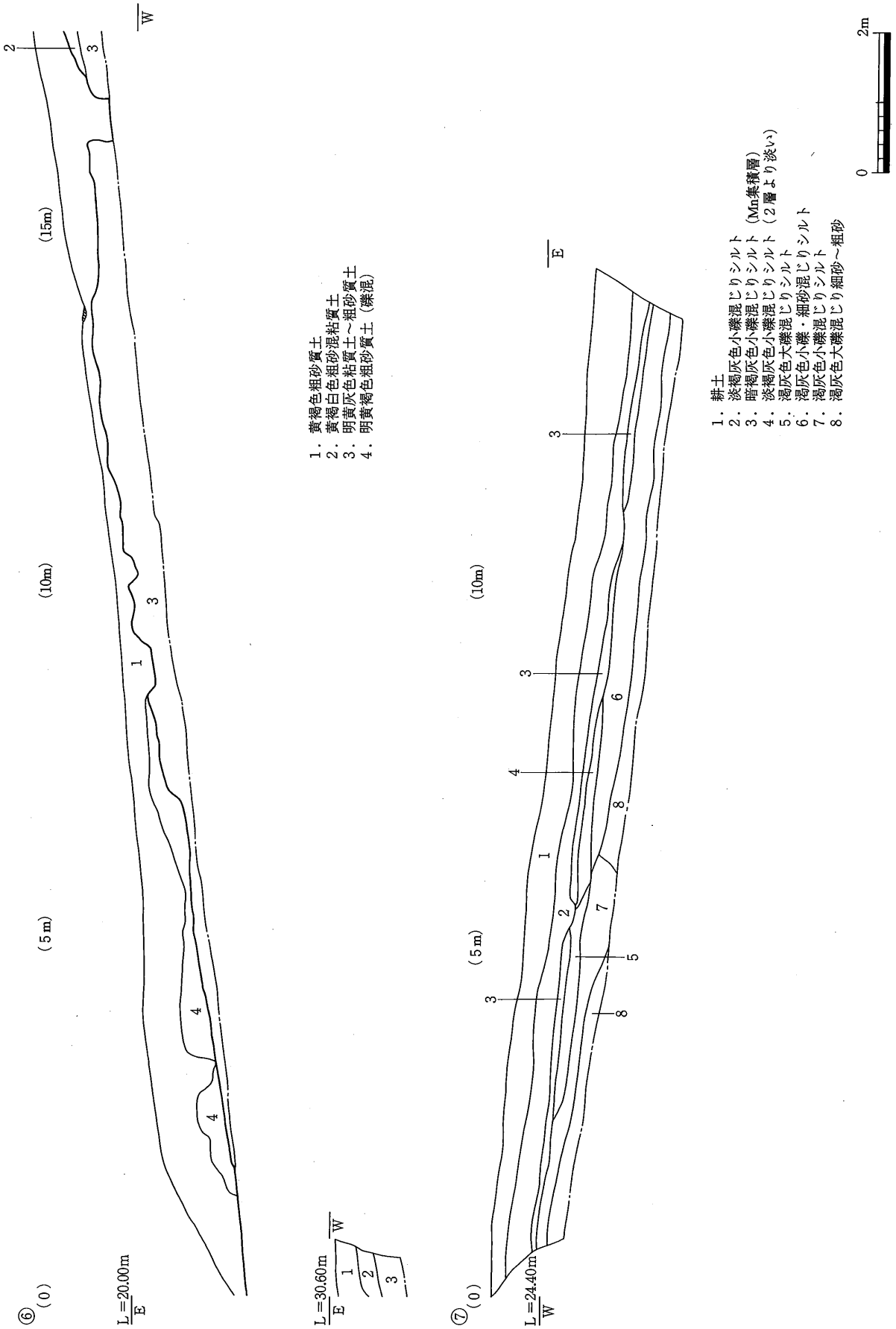
16. 暗灰褐色粗混砂質土（SD3201）
17. 明褐灰色砂質土（Mn多）
18. 明灰褐色粘質土混砂質土（壁溝）
19. 暗灰褐色粗砂混砂質土
20. 灰色砂質土（黄褐色土混、Mn少）

18～20はSH03埋土

1．耕土
2．赤茶褐色砂質土
3．黄灰色粗砂（Mn含、地山）
4．黄褐灰色粗砂（Mn含、地山）
5．褐色粗砂質土（Mn多、地山）
6．黄褐色粘質土混粗砂（地山）
7．黄茶灰色粘質土混粗砂（地山）
8．旧畦畔部分
9．旧水路部分
10．黄褐色粗砂質土（Mn含）
11．褐色砂質土（Mn含）
12．褐色粗砂質土（Mn含）
13．灰褐色砂質土（Mn含）
14．褐灰色粗砂質土（Mn含）溝
15．明褐色砂質土（Mn含、地山）

1～4．北壁と同じ
5．褐色砂質土
6．黄灰色粗砂質土
7．明黄褐色砂質土
8．赤茶灰色粗砂質土（Mn・Fe多）
9．黄茶灰色粗砂質土（地山）
10．明茶褐色粗砂質土
11．暗茶灰色粗砂質土（黒灰色土混）
12．茶灰色粗砂質土
13．褐灰色粗砂質土

第11図　調査区土層図③④⑤（1／80）



第12図　調査区土層図⑥⑦（1／80）

第３節　遺構・遺物

１．弥生時代中期後半～終末期の遺構・遺物

⑴竪穴住居・周溝

ＳＨ01（第13・14図、図版11・12・20）

１区②ほぼ中央部で検出した竪穴住居である。隅丸方形で一辺約4.3m、深さ0.36m、北・東・南側に深さ８㎝のベッド状遺構が確認できた。ベッド状遺構は地面を削り出すことにより作っている。周囲に壁溝を持ち、ベッド状遺構の四隅と、ベッド状遺構のない西側の辺の中央付近に主柱穴と思われるピットがある。中央部では長辺1.18m、幅0.42m、深さ0.12mのＬ字状の土坑（ＳＫ01）を検出し、その北側では長軸1.02m、短軸0.4mの長楕円形の範囲（ＳＫ04）で土が焼けていた。この竪穴住居はＳＨ02を切る。

１～３はＳＫ01から出土した遺物である。１は小型丸底壺。ほぼ完形。摩滅が著しい。底部は退化している。２は甕。口縁はくの字状で、外面はハケ、内面はヘラ削りで調整する。３は鉢。口縁部はくの字に曲がる。４は焼土の部分（ＳＫ04）から出土した脚である。穿孔が２ヶ所残存し、残存範囲から孔は４ヶ所と考えられる。摩滅が著しい。５は南東隅のピットから出土した。鉢。椀形の器形で、外面にはクラックが残る。６は壁溝の北西のコーナーから出土した。鉢。上向きで完形で出土した。外面は叩いて調整する。７～13は竪穴住居埋土中から出土した。７は広口壺口縁部。８は台付の小型丸底壺と考えられる。底部はわずかに段を形成するのみで形骸化が著しい。内面はハケ、外面はヘラミガキで調整する。９は甕。10～12は底部。13は甑底部。底部に１孔穿孔し、底部は平底を呈する。出土遺物は全般に摩滅するものが多く、遺存状況はあまりよくない。時期は概ね弥生時代終末期２と考えられる。

ＳＨ02（第13・15図、図版11）

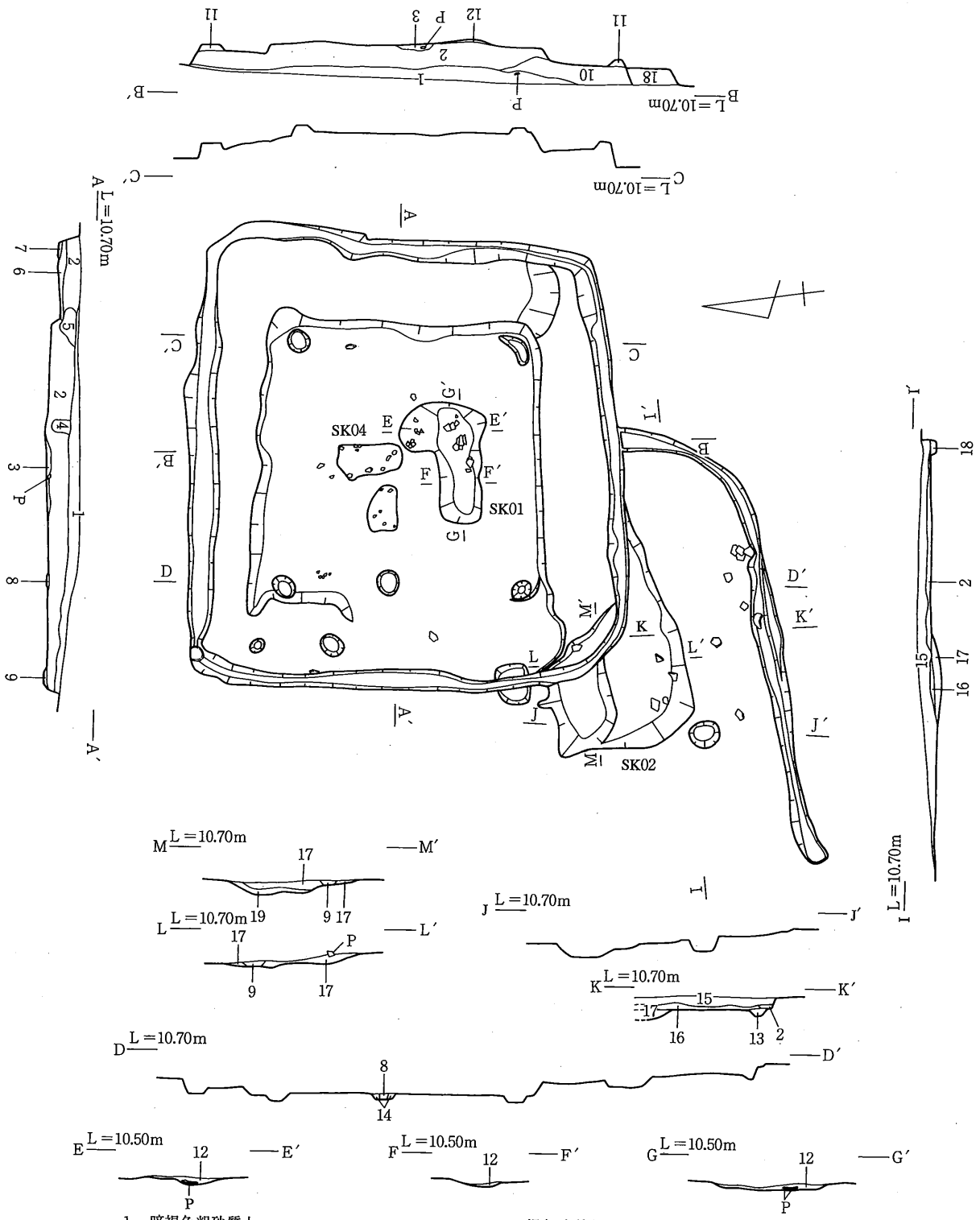
１区②ほぼ中央部で検出した竪穴住居である。隅丸方形と考えられるが、北側はＳＨ01に切られ、西側はＳＲ01による浸食のため、地盤が低くなっており、大半が失われる。残存部分から、１辺は４m程度、深さは0.1mと考えられ、周囲には壁溝を巡らせる。中央には長軸2.4m、短軸1.4m、深さ20㎝の土坑がある。ピットは２穴確認したが主柱穴は不明である。

14はＳＫ02から出土した。広口壺頸部である。体部はハケで仕上げる。15は床面上で出土した甕である。下川津Ｂ類。口縁端部をわずかに引き上げる。摩滅が著しく調整は不明瞭である。16は竪穴住居埋土中から出土した。壺口縁部。口縁端部内面には幅４㎝で黒くなっている部分があり、二重口縁の壺となると思われる。

遺構の切り合い関係からはＳＨ01より古いが、出土土器の時期差はほとんどみられず、弥生時代終末期１～２くらいと考えられる。

ＳＨ03（第16・19図、図版12）

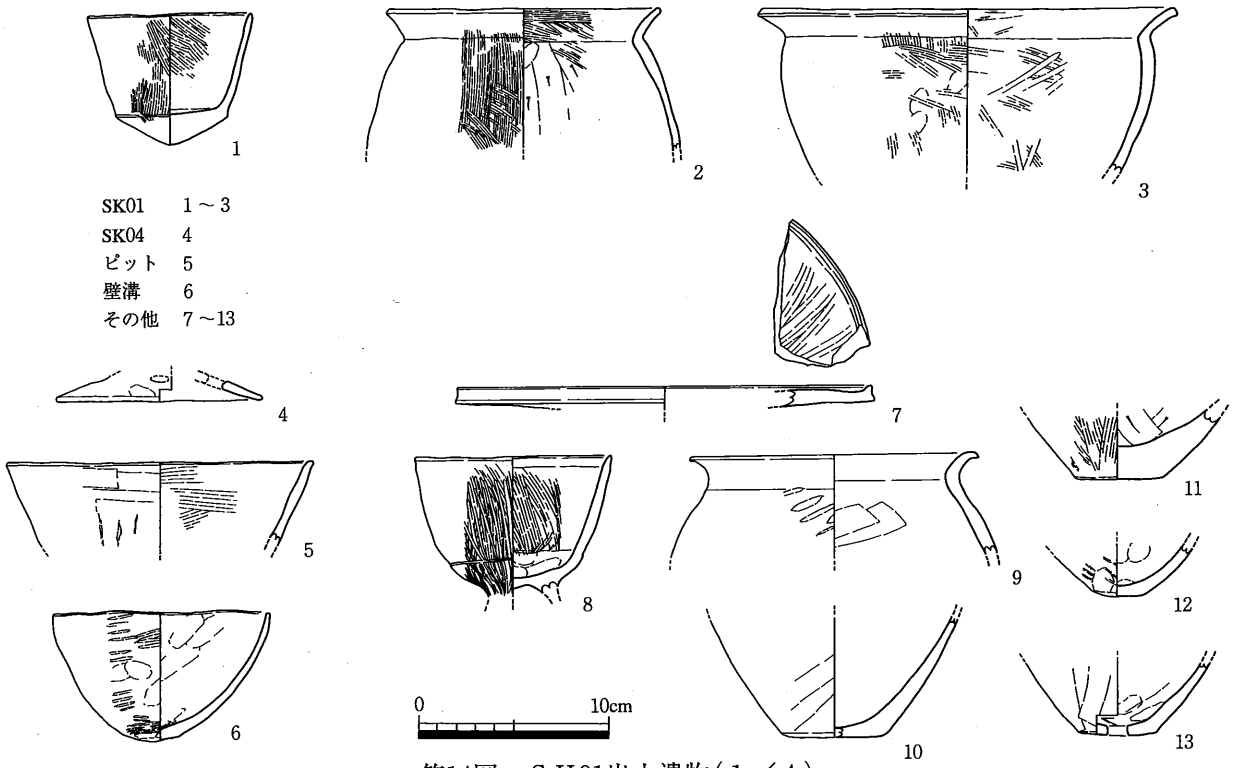
３区②西部で検出した竪穴住居である。西半分はＳＲ01により消失する。円形で、一番外側の壁溝で直径3.15m、深さ0.25mで、その外側4.7mの部分で周溝が巡る。ＳＲ01の際には長軸２m、幅1.6m、深さ0.13mのＬ字型の土坑（ＳＫ01）があり、埋土中には炭が含まれる。その外側にピット、壁溝がある。壁溝は３条検出した。一番外側のものはほぼ途切れずに幅30㎝で巡り、その内側に２重に切れ切れなが



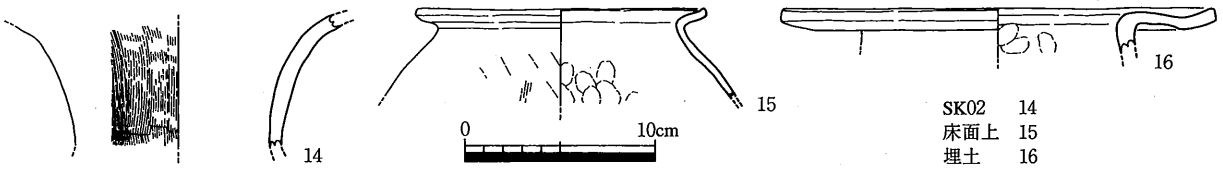
1．暗褐色粗砂質土
2．灰色粗砂質土（地山ブロック多）
3．暗灰色砂混粘質土（土器多）
4．暗灰褐色砂質土
5．暗褐灰色粘質土
6．明灰褐色粗砂質土
（地山ブロック非常に多）
7．灰褐色砂質土（壁溝）
8．灰色粘質土＋地山ブロック（ピット）
9．褐灰色砂質土（壁溝）
10．褐灰色粗砂質土
11．暗灰褐色砂質土（壁溝）
12．褐色砂質土
（黒色粘土、炭、地山ブロック混、SK01）
13．灰褐色粘質土（SH02壁溝）
14．明褐灰色砂質土
15．灰褐色砂質土（Mn含）
16．明灰色粗砂質土（黄色土少し混）
17．褐色砂質土（SK02）
18．褐灰色粘質土（地山ブロック混、壁溝）
19．灰色砂質土（炭混）
P……土器

0　2m

第13図　ＳＨ01、ＳＨ02平・断面図（１／60）



第14図　ＳＨ01出土遺物（１／４）



第15図　ＳＨ02出土遺物（１／４）

ら壁溝が巡る。ピットは壁溝に対応して、３重に巡り、建て増しが想定できよう。主柱穴は壁溝の際に巡っていた。ＳＨ03は周溝をＳＨ04と共有しており、ＳＨ04と同時期と考えられる。

17・18は柱穴から出土した遺物である。17は甕口縁部。18は壺口縁部。19～26は竪穴住居埋土中から出土した。19～22は甕。20は下川津Ｂ類。口縁端部を上方に引き上げ、内面上半部は板ナデを施す。21はくの字に曲がる口縁を持つ。23・24は底部。23は甕底部。24は内面を横～斜め方向のハケで仕上げ、鉢と思われる。25・26は鉢。25は椀形で内面はハケ調整をする。26は小型の鉢。外面を叩いて仕上げる。歪みが著しい。

ＳＨ03の時期は弥生時代後期後半と考えられ、ＳＨ01・02よりやや古いと考えられる。

ＳＨ04（第17・20図、図版12・13）

３区②西部で、ＳＨ03の山手側に隣接して検出した。西半部はＳＲ01により消失する。１辺４ｍ程度、深さ15cm程度の円形あるいは隅丸方形である。壁溝は３重に巡って検出され、ＳＨ03同様建て替えの可能性がある。一番内側の壁溝はほぼ全周するが、２重目、３重目の壁溝は一部しか検出できなかった。中央付近に一辺１ｍ、深さ10cmの隅丸方形の土坑（ＳＫ01）があり、埋土中に炭を含む。主柱穴は内側の壁溝の内部に４穴検出した。ＳＨ03と周溝の一部を共有する。

27はＳＫ01から出土した。甕底部。外面はタタキ後ハケで調整し、わずかに平底を呈する。28は壁溝から出土した。広口壺の口縁部。口縁端部に波状文を施す。29～35は竪穴住居埋土中から出土した。29は細頸壺口縁部。下川津Ｂ類。30～32は甕。30は口縁部が緩く屈曲する。31・32は下川津Ｂ類。いずれ

も小片で、31は傾き、口径ともやや不確かである。33は甕底部。平底を呈する。34は高坏脚部。35は鉢。口縁部は外側へ屈曲し、体部はタタキの後ハケで調整する。

時期はＳＨ03と同じ弥生時代後期後半と考えられる。

ＳＤ3201（第16・18・21・22図、図版12・13・20・21・79）

３区①・②・１区②に跨って検出した円弧状の溝である。ＳＨ03の外側に、ＳＨ04に近い方で２ｍ程度、北・東側で4.5ｍの位置を巡り、西側半分はＳＲ01により消失する。溝の南側はＳＨ04を囲むＳＤ3204と共有する。周溝の直径は概ね15ｍ前後と考えられる。規模は北側で幅44㎝、深さ28㎝、断面形状は半円形に近いＵ字状を呈し、南側では幅32㎝、深さ32㎝、断面形状はＵ字状だが、溝の外側はややなだらかで、地山の土が落ち込んだ様子が窺えるので、外側の肩が少し崩れたと考えられる。溝の埋土は概ね灰褐色砂質土である。底のレベルは北側の方がやや低く、地形の傾斜にあう。溝の中からは弥生土器甕・壺・鉢などがコンテナ３箱ほど出土した。特に溝の東部（微高地に面する方）から集中して土器が出土した。

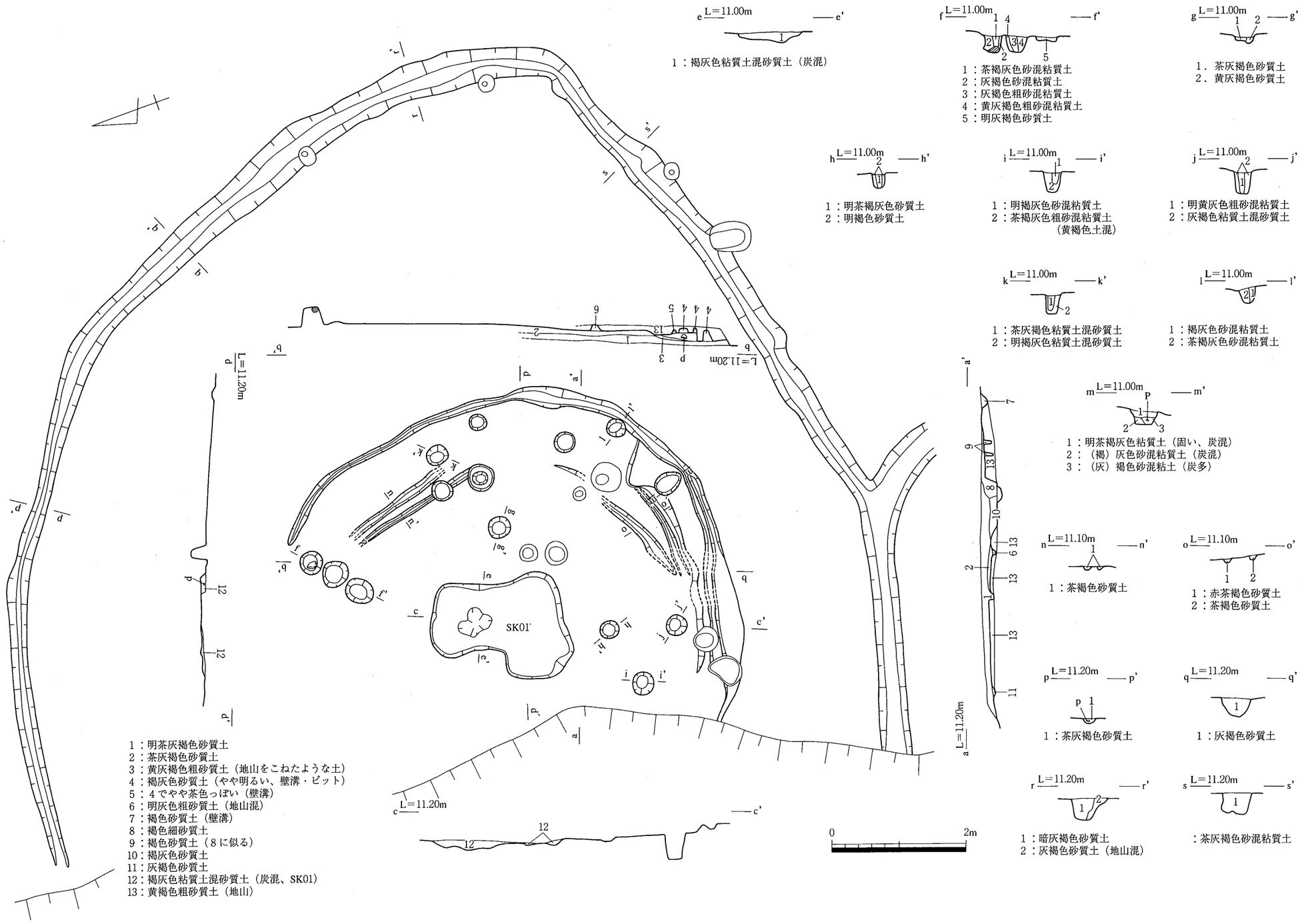
36～40は壺。36～38は広口壺。36はやや新しい要素を持つと思われる。37は頸部から口縁部へ緩やかに開く。38は短い直線的な頸部に口縁部が広がる。口縁端部には沈線状のものが４条巡る。39は短頸壺。内外面ともハケを施し、内面には明瞭に粘土の継ぎ目を残す。40は壺の底部。底部は平底で肩がやや張る器形で、外面はハケで調整した後磨く。42～50は甕。概ね外面はハケで調整し、内面はハケ、ヘラ削り、板ナデなどで調整する。45は外面にタタキ痕を明瞭に残す。50は小型の甕。内面にヘラ削りの痕跡を明瞭に残す。43は口縁部が外側へ強く屈曲し、胎土中に多量の雲母を含む。51～52は甕の底部。52は外面のタタキはほとんどナデ消されている。53は高坏脚部。杯部との取り付き部分に剥離痕跡を残す。図化範囲では穿孔はない。54は台付鉢脚部。55～61は鉢。55は底部に明瞭に葉脈痕を残す。56は浅めの器形で内外面ともハケで調整する。内面は最後に磨いて調整し、口縁端部にはわずかに面を持つ。58は口縁部がわずかに外反し、外面にはクラックを残す。59～61は外面は指押さえ、内面はハケで調整するが、外面には顕著な調整痕を残さない。62は石庖丁。背面は潰し、刃部の表面は珪酸により光沢を持つくらいに磨滅する。

やや時期幅を持つが、溝の時期は弥生時代後期～終末期（１）と考えられよう。

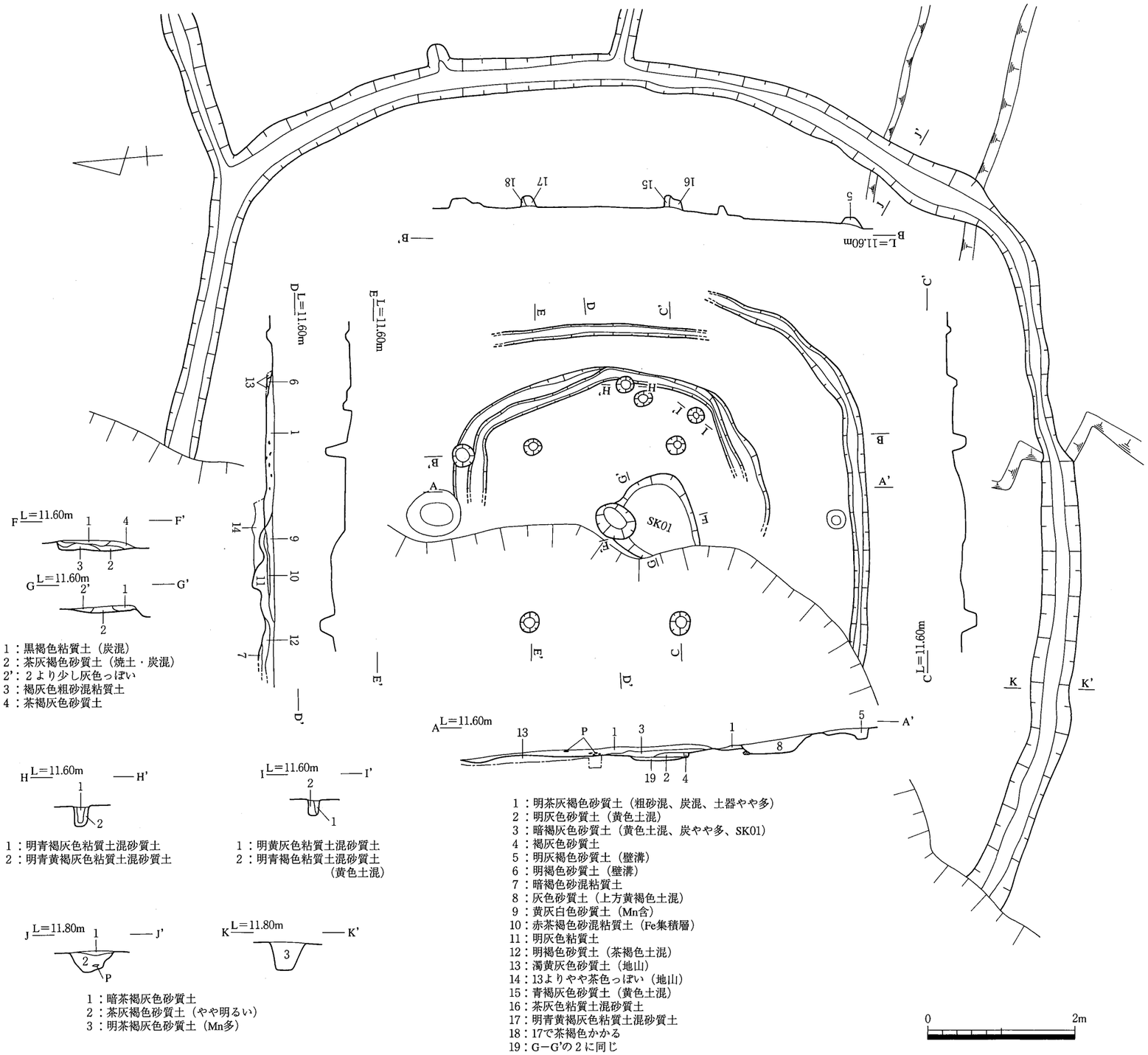
ＳＤ3204（第17・23図、図版13・21・79）

３区②西部で検出した溝である。ＳＨ04の外側約2.5ｍの位置を円形に巡り、西側はＳＲ01により消失する。溝の北側はＳＨ04を囲む溝ＳＤ3201と共有する。直径は概ね12ｍ前後と考えられる。溝の規模は北側で幅50㎝、深さ38㎝で断面形状は逆台形、南側では幅58㎝、深さ28㎝で断面形状は逆台形を示すが、溝の外側が若干崩れている。埋土はやや明るい茶灰褐色砂質土である。溝の底のレベルは場所によらず同じで、ＳＤ3201と地表面からの深さは同じくらいである。埋土中からは弥生土器甕・鉢・高坏などがコンテナ２箱ほど出土した。

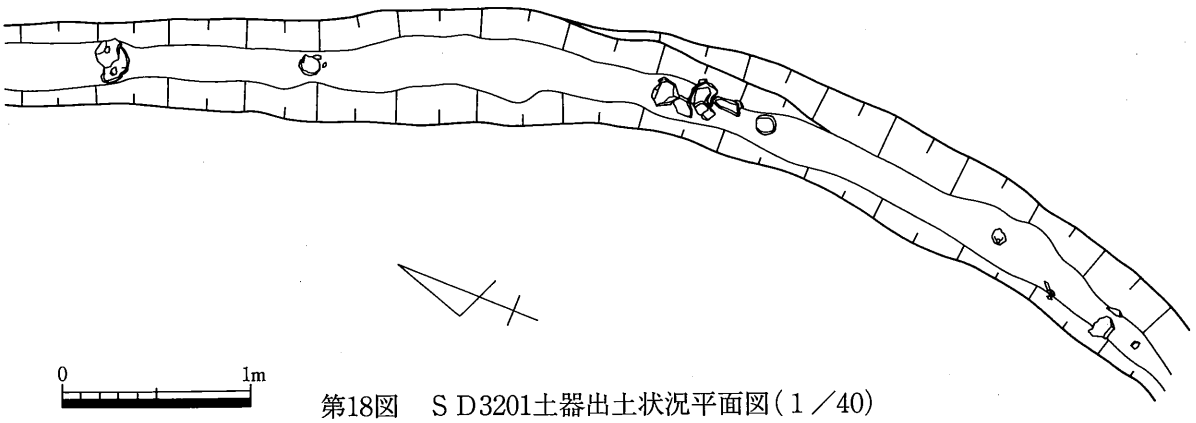
63～64は甕。内外面ともハケで調整する。63は体部上部付近（図化部分）で全体に割れており、ここが粘土の継ぎ目であったと思われる。やや新しいか。65は底部。66は小型の甕。67～68は高坏杯部。67は小片で摩滅が著しい。68は口径は小さく深めの器形。外面は板ナデ又はヘラ削り、内面はヘラミガキ、見込みは分割ミガキで底部に一方向のミガキを施す。脚部は図化部分の個所で全体に割れており、この部分が粘土の継ぎ目であったと考えられる。69～71は高坏脚部。69は残存部で２孔穿孔がみられ、均等に穿孔があるとすれば６孔程度であったと考えられる。71は残存部分で１孔残存する。72～74は椀形の



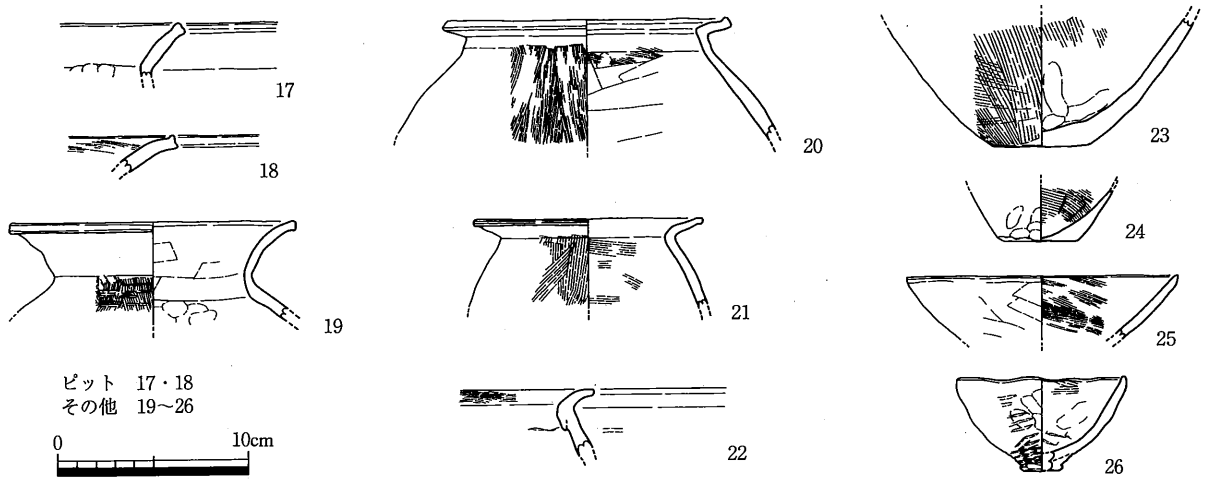
第16図　ＳＨ03、ＳＤ3201平・断面図（１／60）



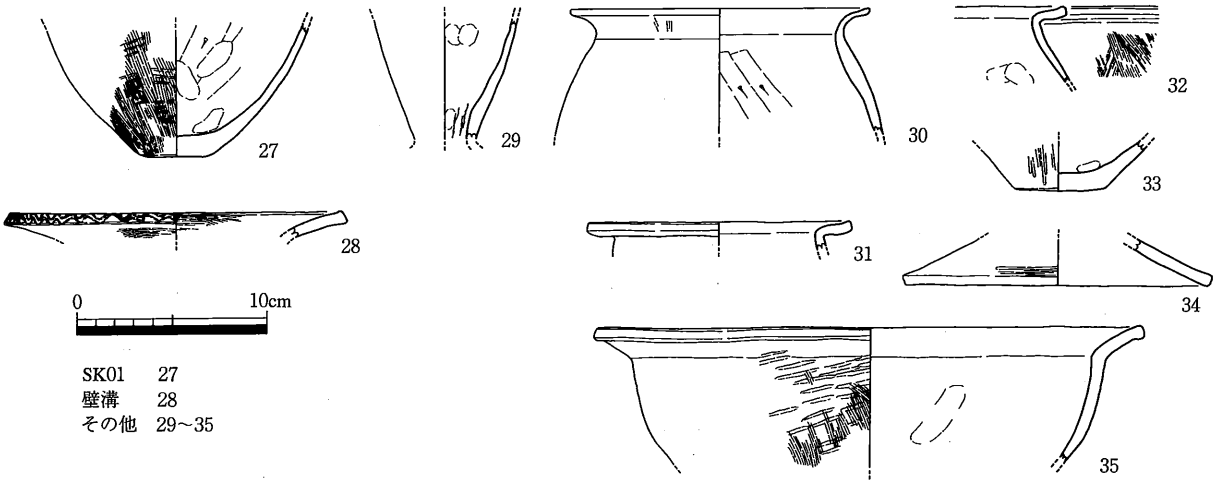
第17図　ＳＨ04、ＳＤ3204平・断面図（１／60）



第18図　ＳＤ3201土器出土状況平面図（１／40）



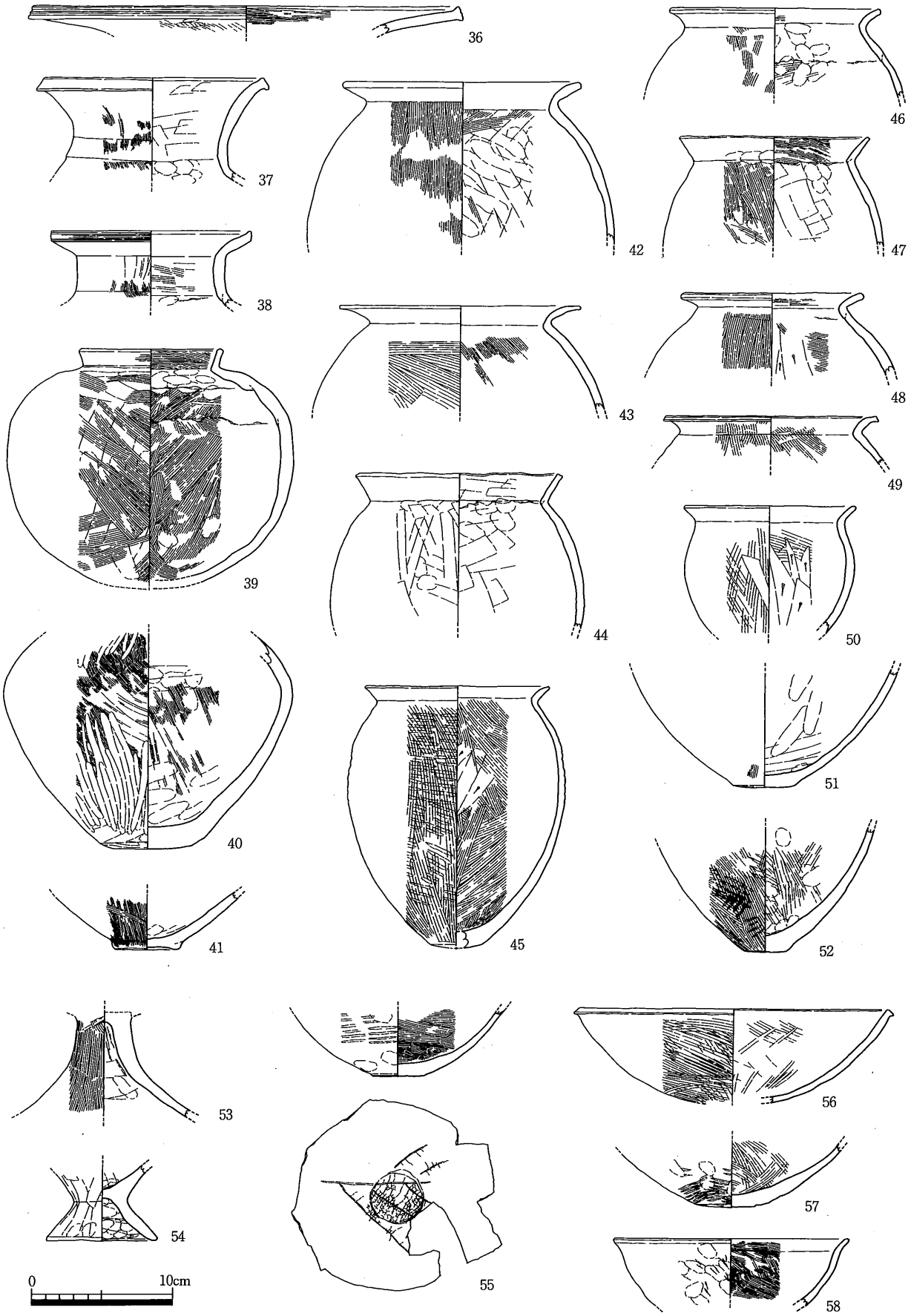
第19図　ＳＨ03出土遺物（１／４）



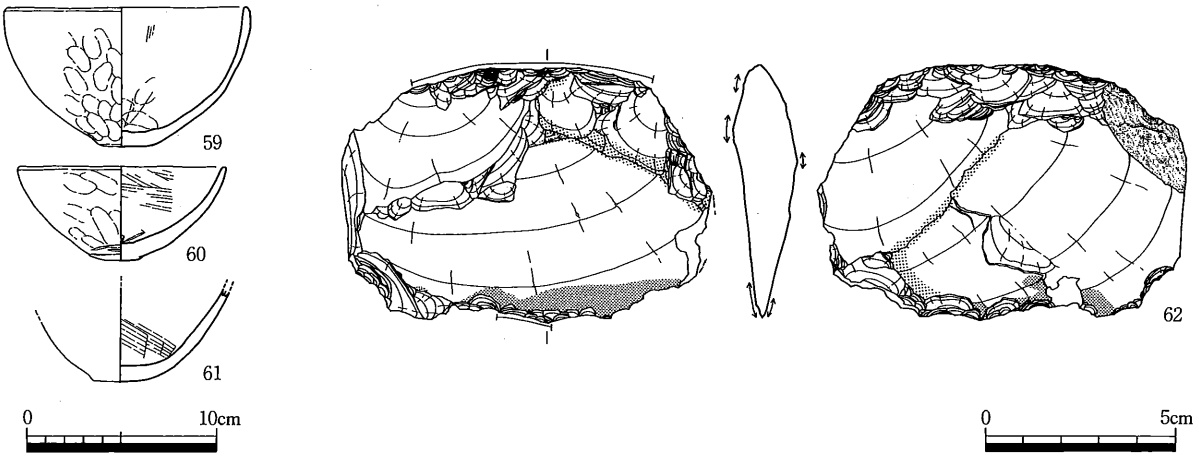
第20図　ＳＨ04出土遺物（１／４）

鉢。いずれも外面には調整痕をほとんど残さない。74は底部外面に葉脈痕を残す。75は石庖丁。サヌカイト製。上面をつぶして加工し、刃部は磨滅する。両端には抉りを入れる。刃部は一部割れている。

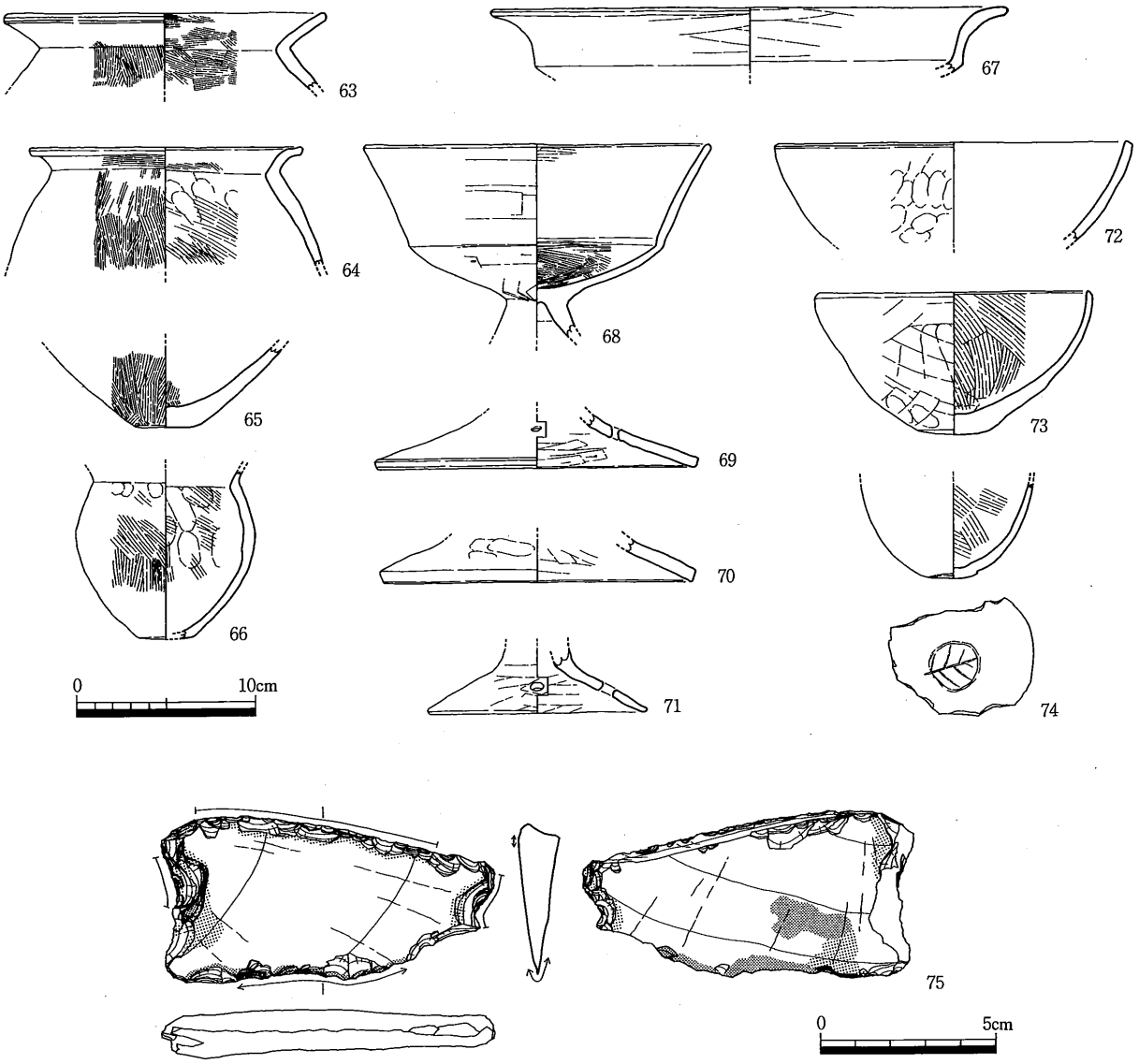
溝の時期は弥生時代後期後半（Ｖ－４新）～終末（１）と考えられよう。



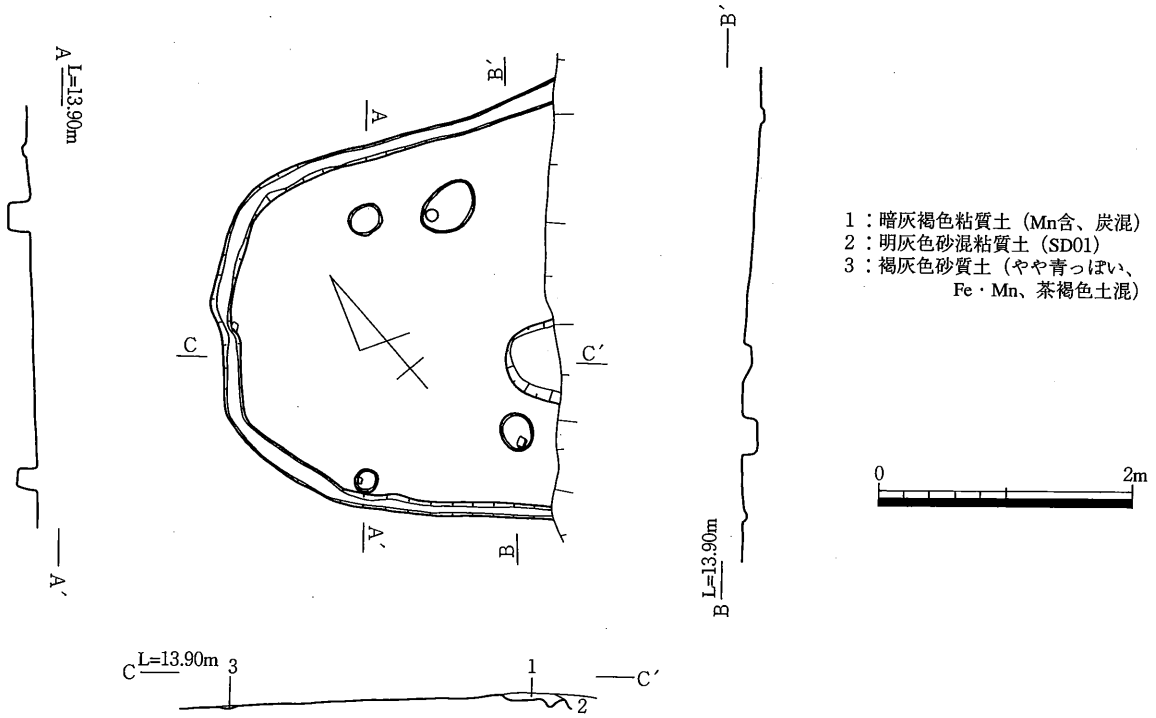
第21図　ＳＤ3201出土遺物(1)(１／４)



第22図　ＳＤ3201出土遺物(2)（１／４、１／２）



第23図　ＳＤ3204出土遺物（１／４、１／２）



第24図　ＳＨ05平・断面図（１／60）

ＳＨ05（第24図、図版13）

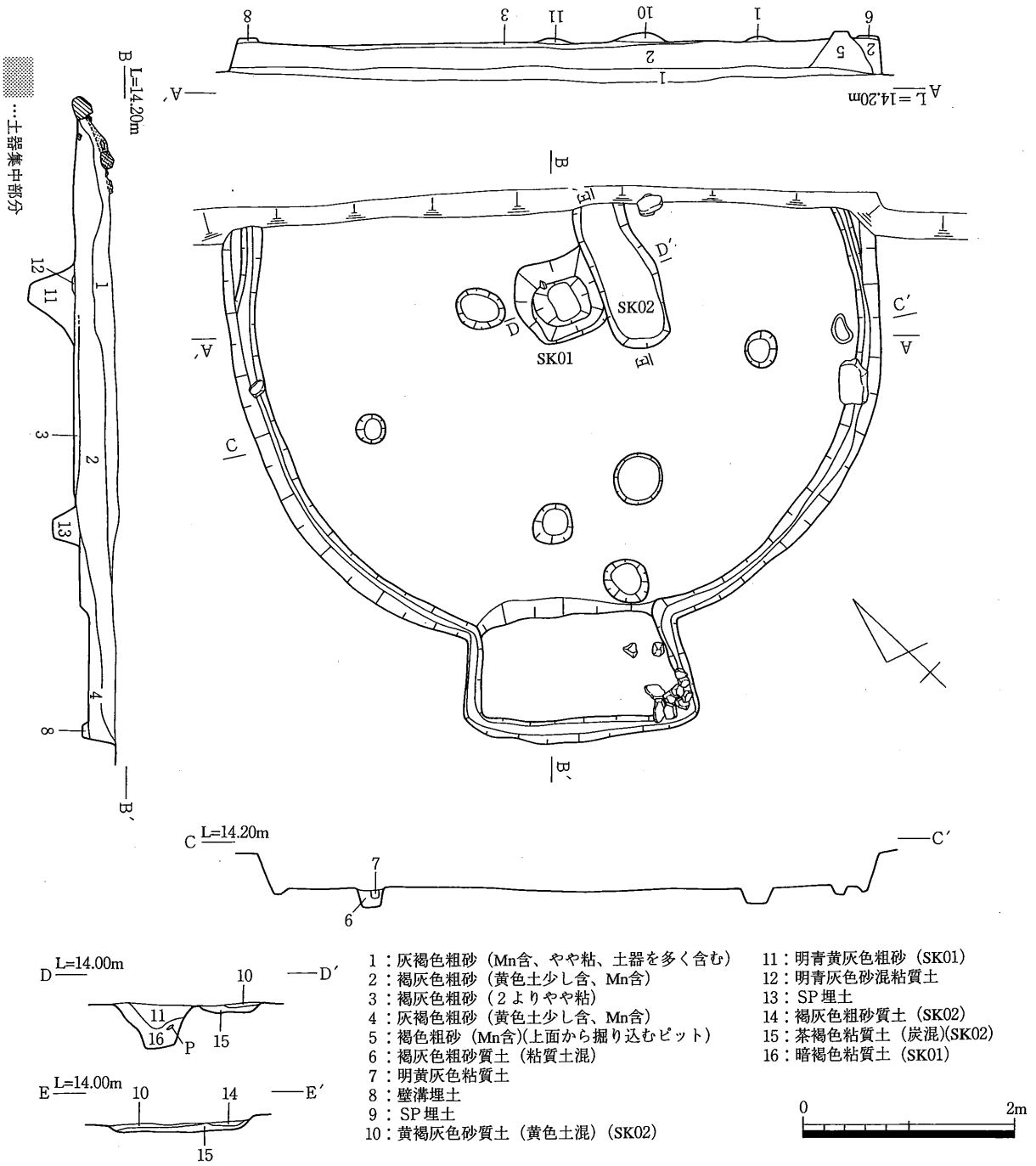
３区③上段で検出した竪穴住居である。南西部はＳＤ01により消失している。形状は長楕円形または隅丸長方形と考えられる。竪穴住居としての掘り込みは残っておらず、壁溝と土坑（西北半部）・ピットが残されているだけである。土坑を中心とすると、長軸5.2m程度、短軸3.3mとなり形状がやや歪になることや、竪穴住居がＳＤ01を越えて検出されていないことを考えれば土坑は住居の南東よりに位置し、長軸は長くても4.8m程度であろう。土坑は直径60cm程度で深さ５cm程度と考えられる。埋土中に炭を含み、底は凹凸がある。ピットは４穴検出したが、主柱穴は北西側の２穴で、残り２穴はＳＤ01により消失したと思われる。

遺構内からは甕体部の小破片が出土しただけであった。周囲の状況から考えれば弥生時代後期～終末期の遺構と思われる。

ＳＨ06（第25～29図、図版13・14・22・79・90）

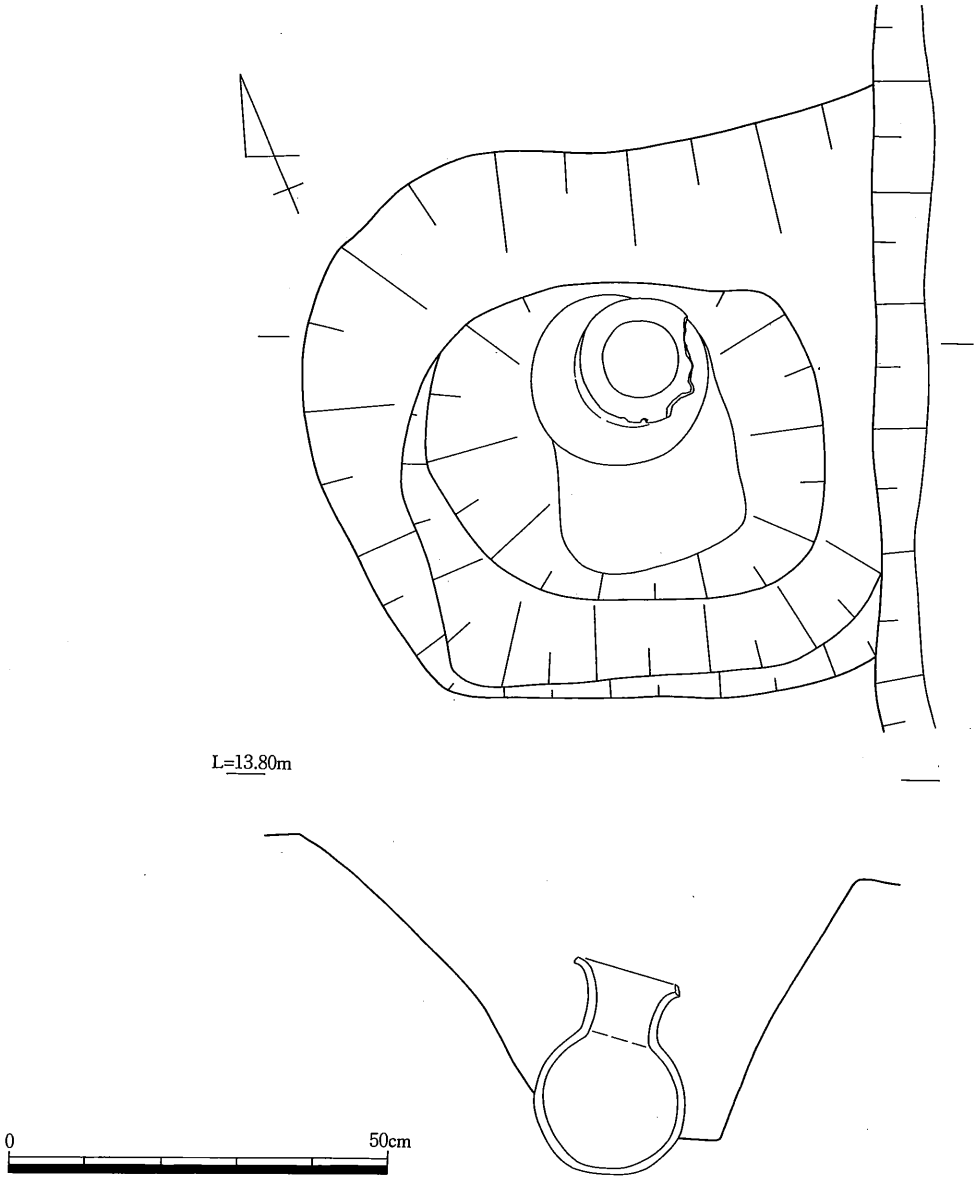
３区④中央部付近で検出した竪穴住居である。北西部分約１／３は後世の耕作に伴う削平のため消失する。直径約６ｍの円形で、深さは32cm、南東部に張り出しを持つ。張り出し部の規模は長辺2.1m、短辺1.2mで、張り出し部は竪穴住居床面から７cm程度高い。張り出し部の南隅には礫が集中していた。壁溝は張り出し部を含めて巡らせる。中央部には方形の土坑と長方形の土坑が切り合って検出された。長方形の土坑（ＳＫ02）は深さは10cm程度で浅く、埋土中に炭を含む。正方形の土坑（ＳＫ01）はＳＫ02に切られており、ＳＫ01の底部には壺がほぼ完形で上向きに埋められていた。竪穴住居を使用する前、あるいは炉を作る前に何らかの祭祀を行った可能性もある。播磨地方によく見受けられる、いわゆる１０型住居と称されるものと思われる。床面でピットを６穴検出した。竪穴住居の上面で土器が多量に散乱した状態で検出され、それらの土器を除去した後に竪穴住居を検出した。竪穴住居廃棄後にゴミ捨て場として使ったのかもしれない。

76～78はＳＫ01から出土した土器である。76は壺。ほぼ完形で出土した。口縁端部は面を持ち、沈線



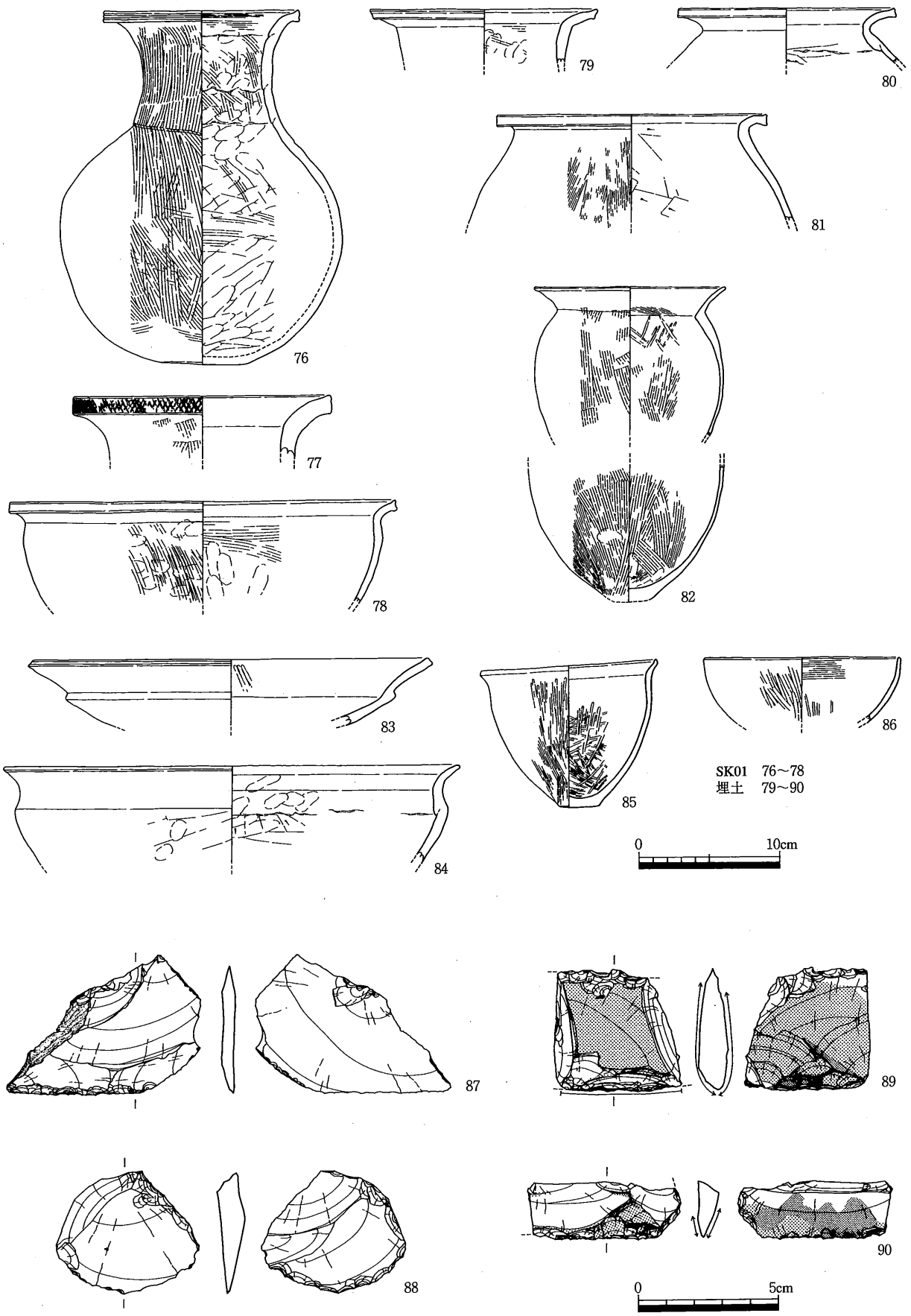
第25図　ＳＨ06平・断面図（１／60）

状に２条が巡る。頸部と体部の境にわずかに段を持つ。弥生時代後期後半。77は壺口縁部。口縁端部に面を持ち、そこに斜格子文を刻む。弥生時代中期後半まで遡るもので、摩滅が著しく、紛れ込みと思われる。78は鉢。口縁端部は外側へ屈曲し、わずかに面を持つ。79～90は竪穴住居埋土中から出土した。79は壺。直立する頸部に短く外反する口縁が付く。端部はわずかに面を持ち、上方へ引き上げられる。80～82は甕。81は強く外反する口縁で端部に面を持つ。82はくの字に曲がる口縁で内面はハケ、外面は薄い板ナデに近いハケで調整し、体部を薄く仕上げる。やや新しいか。口縁部と底部は直接は接合しないが、胎土や調整などの特徴から明らかに同一個体と考えられる。83は高坏。84～86は鉢。85は口縁を外側へ屈曲させ、内外面とも磨く。口縁端部はわずかに上方へ引き上げる。86は椀形で外面はヘラミガ

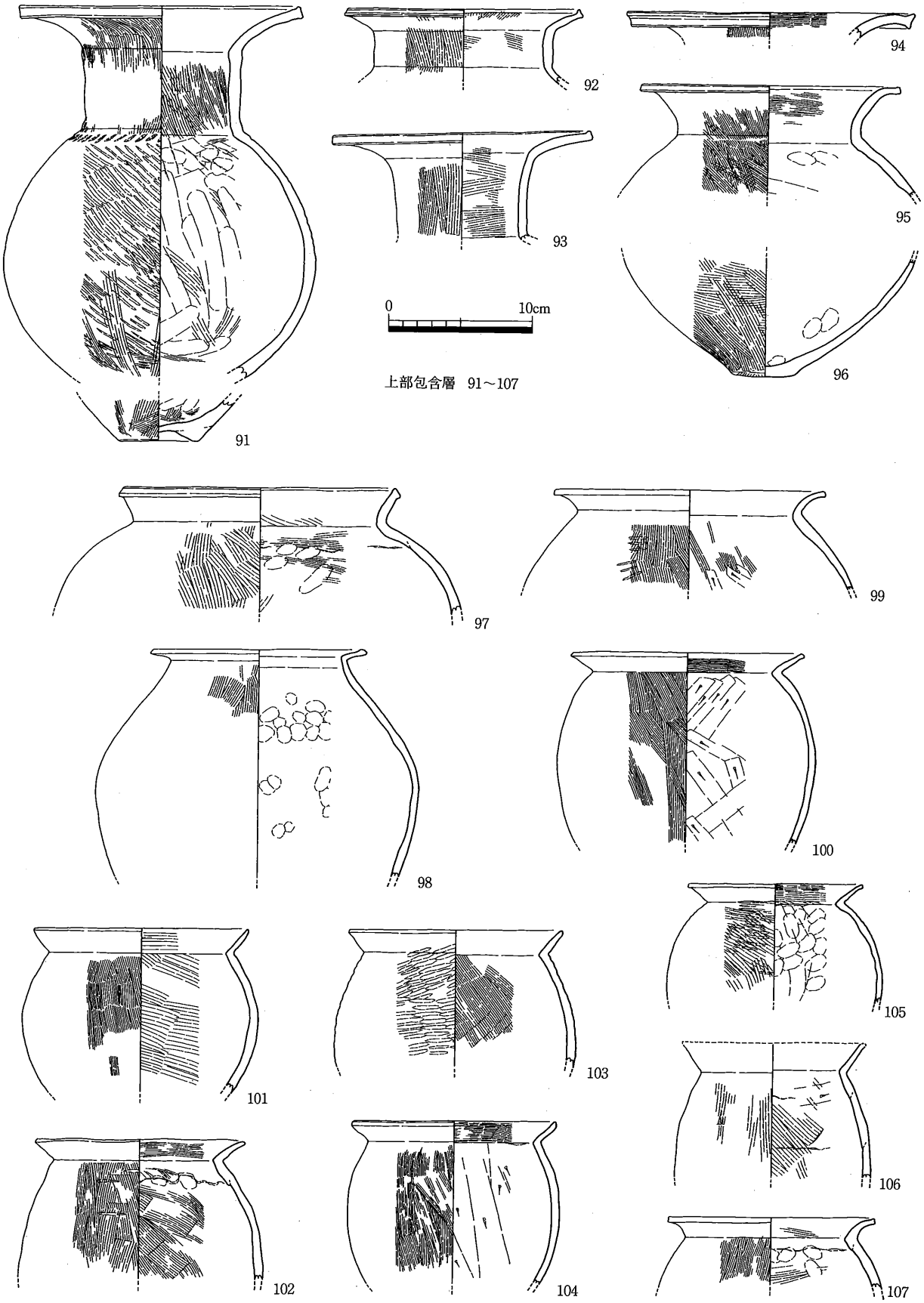


第26図　ＳＨ06内ＳＫ01土器出土状況平・断面図（１／10）

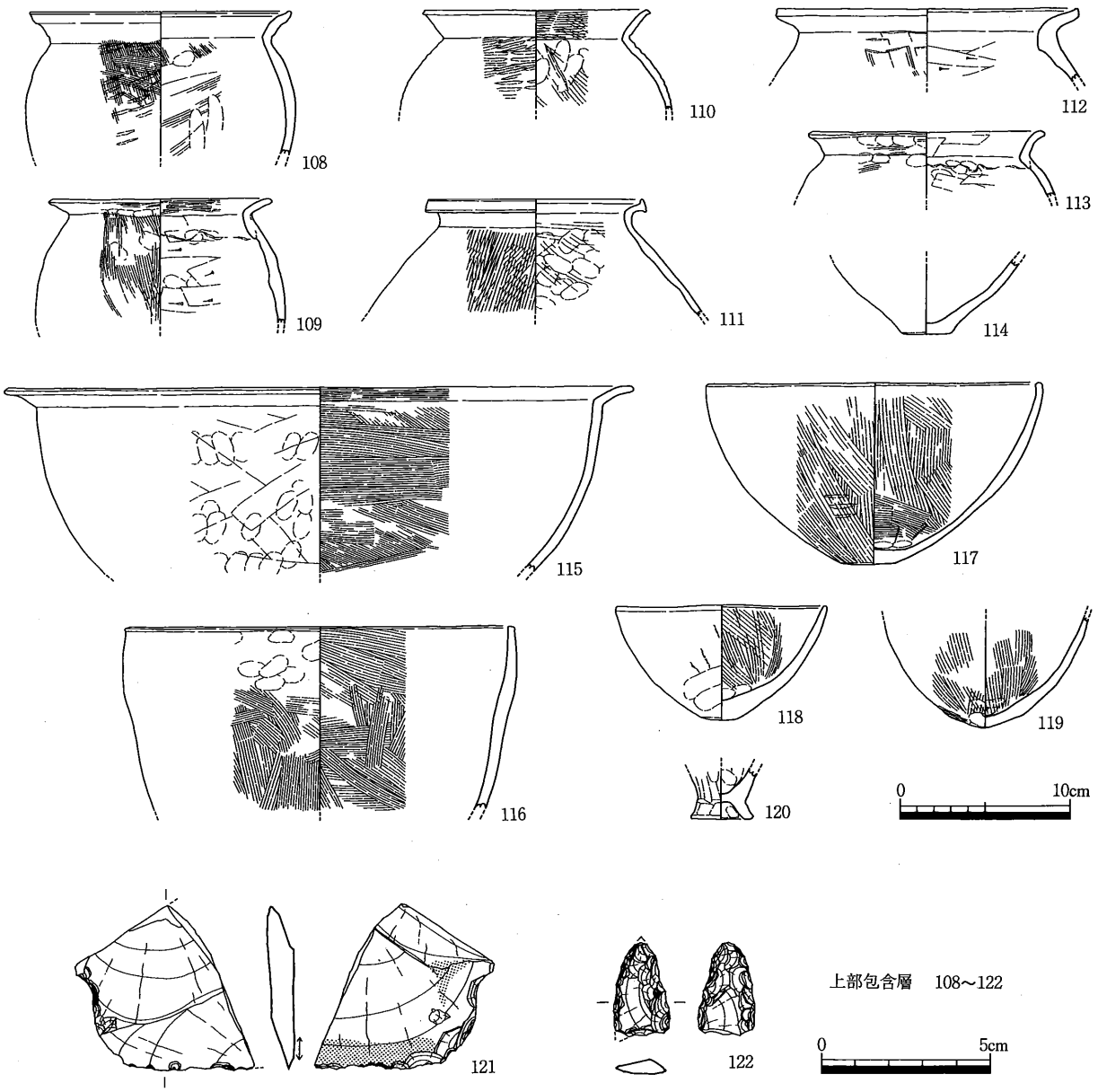
キする。87・88・90はスクレイパー。サヌカイト製。87・88は簡単な加工で刃部を少しだけ作り出す。90は裏面中程付近が著しく磨滅する。89は楔形石器。上面を潰し、両端は割られている。全体に磨滅している。91～122は竪穴住居の上面の土器が集中する包含層で出土した。91～95は広口壺。頸部の形状にやや差があり時期差があると思われる。91は摩滅が著しいもののほぼ完形に復原できる。頸部に斜め方向の刻み目を持ち、体部はタタキで仕上げる。95は斜め上方に緩く立ち上がる頸部でやや新しい。96は95と同一個体の可能性がある。97～113は甕。97は口縁が直立気味に立ち上がる。98はなで肩の体部から口縁部を外側へ強く屈曲させる。口縁端部には面を持つ。下川津Ｂ類。100～110は概ね丸みを持った体部にくの字に屈曲する口縁部を持つもので、外面はタタキやハケ、内面はハケ、ヘラ削りで仕上げる。115～118は鉢。内面はいずれもハケ、外面は116・117はハケ、118はクラックを残し調整痕はあまりない。115は口縁部を屈曲させ外面は指押さえ痕跡を残す。119は底部。120は製塩土器。体部外面は板ナデで調整する。121はスクレイパー。サヌカイト製。刃部はほとんど加工していない。端部にわずかに抉りを作るか。122は石鏃。端部・基部ともわずかに欠損。平基式と考えられる。



第27図　ＳＨ06出土遺物(1)（１／４、１／２）



第28図　ＳＨ06出土遺物(2)(１／４)



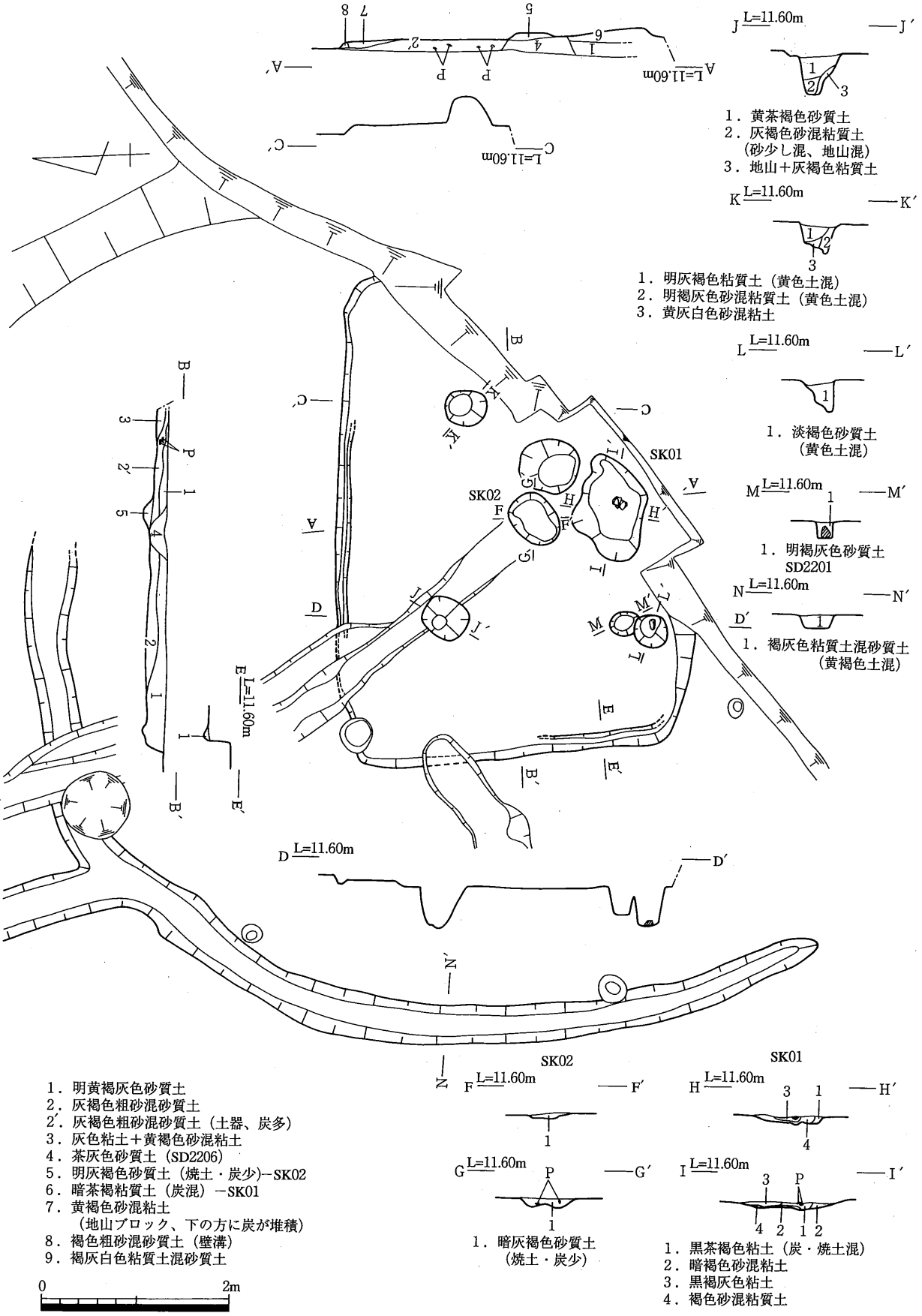
第29図　ＳＨ06出土遺物(3)（１／４、１／２）

竪穴住居時期は土坑や埋土中から出土した土器から概ね弥生時代後期後半（Ｖ－４頃）を中心とした時期と考えられようが、上部の包含層からは終末期下がる遺物も多く含まれるようである。

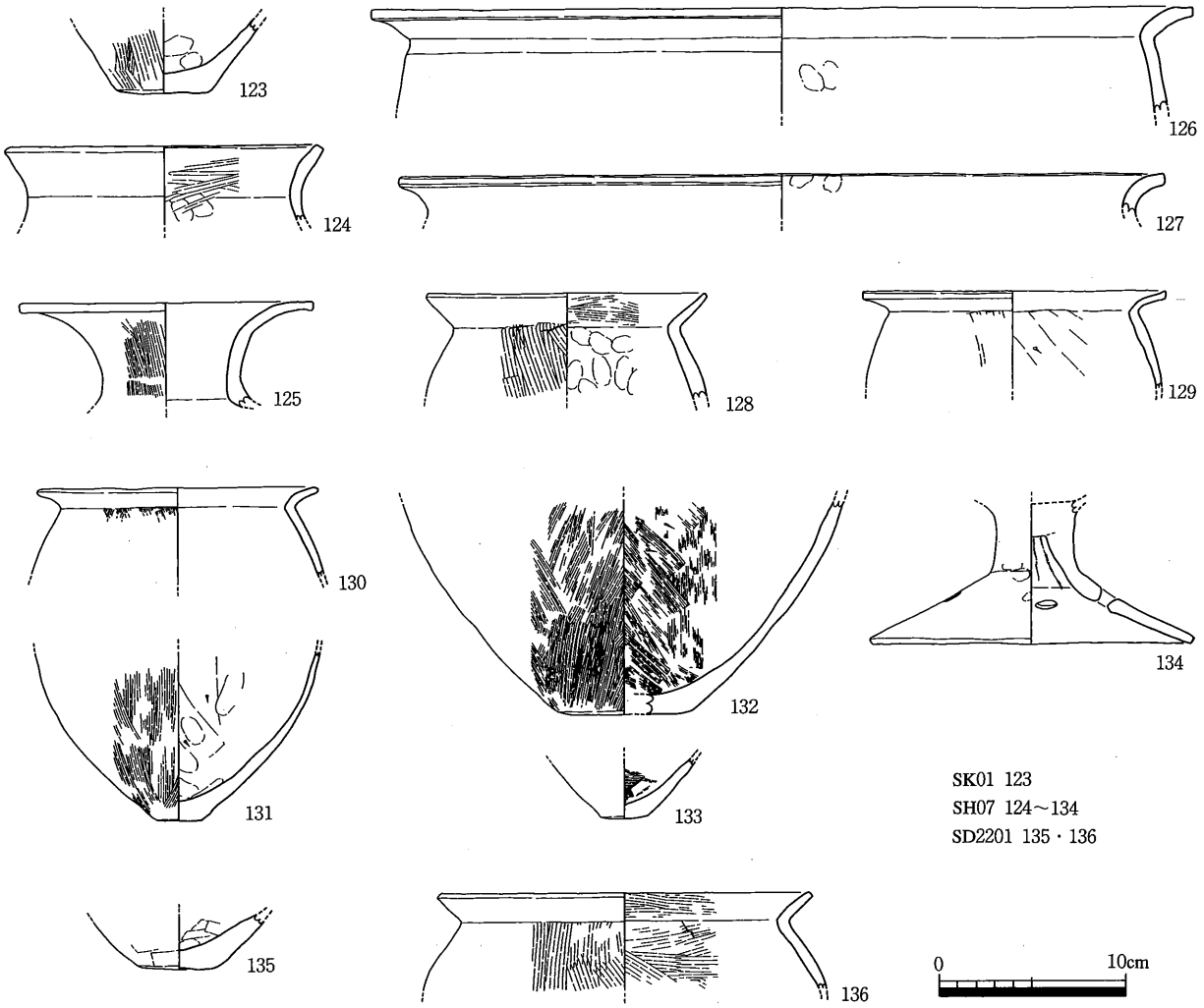
ＳＨ07（第30・31図、図版14・23）

２区②南西部で検出した竪穴住居である。南東部は調査区外へ延びる。北東部には隣接して黒色粘土の埋土を主体とする湿地帯が広がる。隅丸長方形で東西5.5m、南北3.7m、深さは20cmである。北側と西側の一部で幅15cm、深さ４cmの壁溝を検出した。中央部より南へ寄った場所に長軸65cm、短軸55cmの楕円形の範囲で炉跡と考えられる焼土の範囲があり、その北側に深さ10cm程度の炭が多く堆積する土坑（ＳＫ01）がある。主柱穴は炉跡を囲むように３穴検出した。主柱穴は４穴と考えられ、１穴は調査区外へ延びると考えられる。埋土中からは弥生土器壺・甕・鉢・高坏、サヌカイト剥片が出土した。

123はＳＫ01から出土した。甕の底部。124～134は竪穴住居埋土中から出土した。124は短頸壺。体部から短めの傾斜の緩い頸部が付く。125は広口壺。126～133は甕。126・127は口縁の破片が小さく口径・傾きは不確かである。128～130はくの字の口縁が付き、体部は外面はハケで仕上げる。130・131は直



第30図　ＳＨ07、ＳＤ2201平・断面図（１／60）



第31図　ＳＨ07、ＳＤ2201出土遺物（１／４）

接は接合しないが、胎土・調整などがよく似ており、同一個体の可能性が高い。134は高坏脚部。中位で大きく外側へ屈曲し広がる。穿孔がほぼ均等に４ヶ所ある。132～133は底部。132は外面はハケで仕上げ、底部は平底を呈す。時期は弥生時代後期後半（Ｖ－４）頃である。

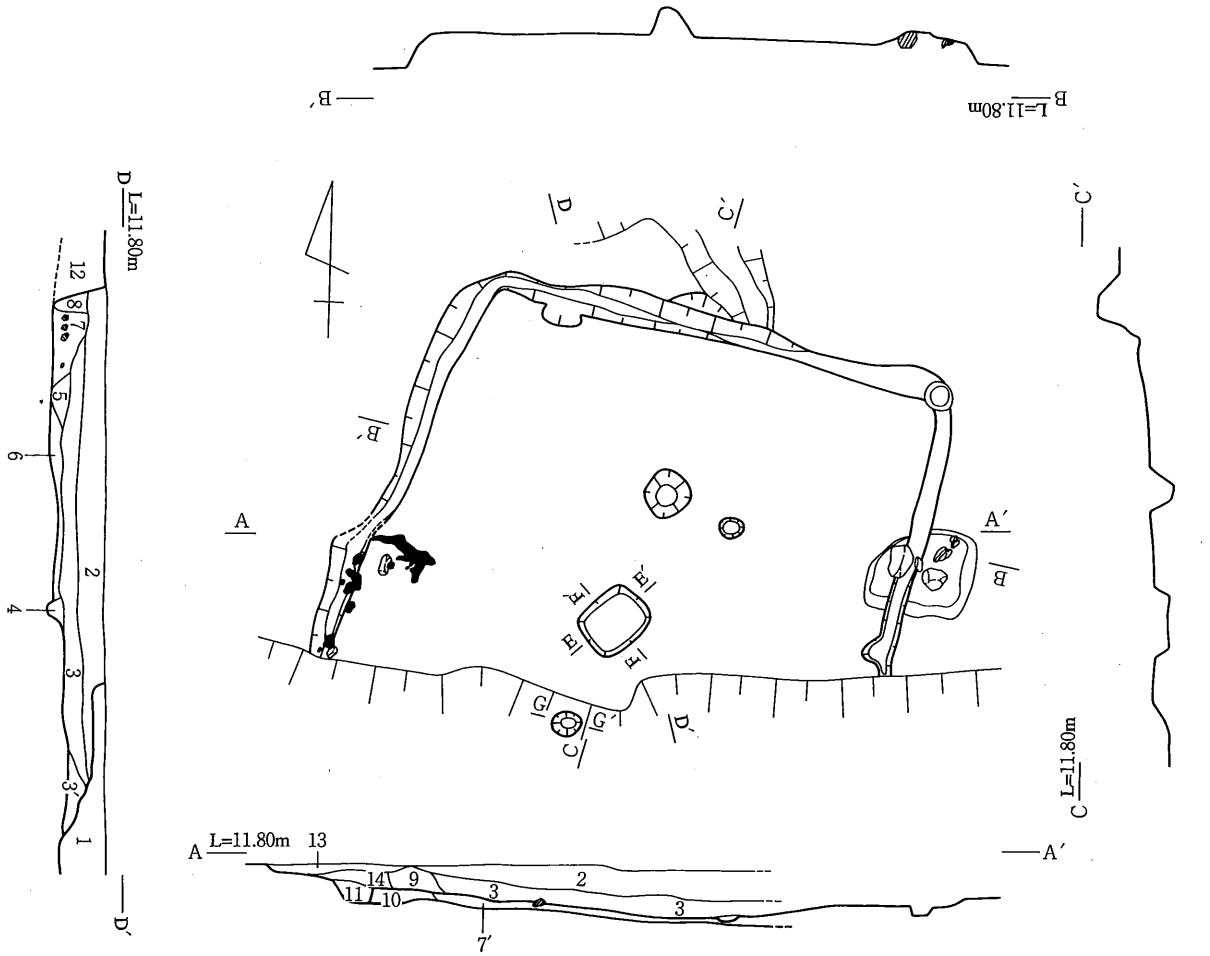
ＳＤ2201（第30・31図）

２区②西部、微高地上で検出したＳＨ07の外側2.8m付近を巡る周溝である。幅38cm、深さ16cm、埋土は褐灰色粘質土混砂質土（茶褐色土混）で断面は逆台形である。溝は南東部半分は途切れている。調査地のレベルや隣接する調査地の壁面の土層図から、削平による消失とは考えられず、もともとなかったと考えられる。地形的には北東方向へ落ちているので土地の高い箇所にだけ周溝を掘ったと考えられる。溝からは弥生土器、サヌカイト剥片などが出土した。

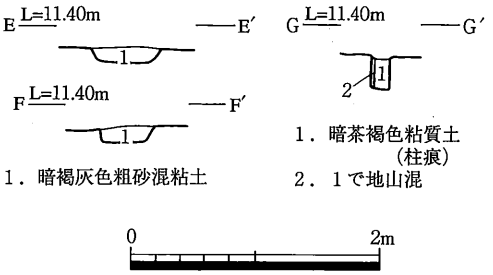
135は底部。摩滅が著しい。136は甕。くの字に曲がる口縁で内外面はハケで調整する。わずかに平底を呈する。弥生時代後期後半～終末頃。

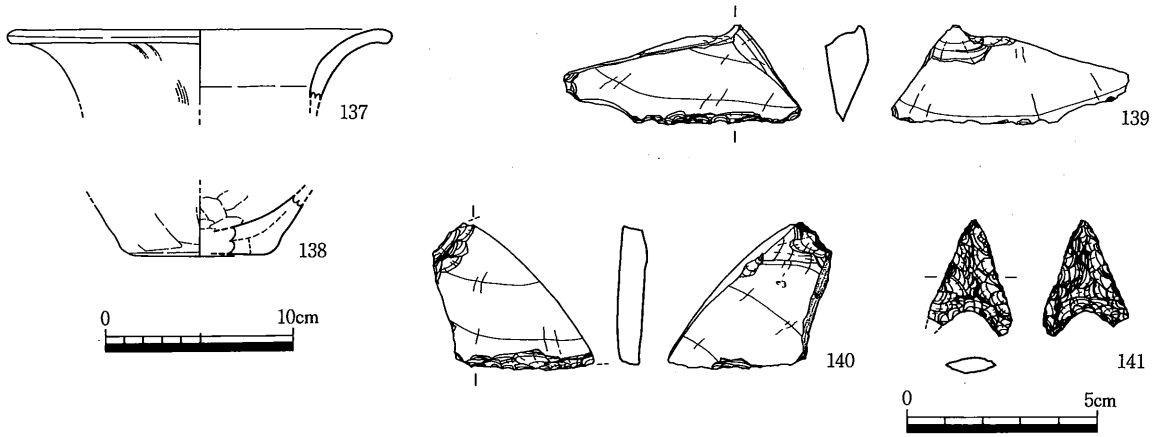
ＳＨ08（第32図、図版14・90）

６区①西部中央付近で検出した竪穴住居である。南半部はＳＲ03により消失する。方形で１辺4.2m、深さ0.35mである。周囲に壁溝を巡らせ、中央に長辺55cm、短辺40cmの長方形の土坑を配する。ピットはいくつか検出したが、主柱穴を構成するピットは不明。竪穴住居の南西部には炭化材が少し残っており、焼失家屋と考えられる。この竪穴住居の平面形態はＳＨ07に似ており、場所も近接していることか

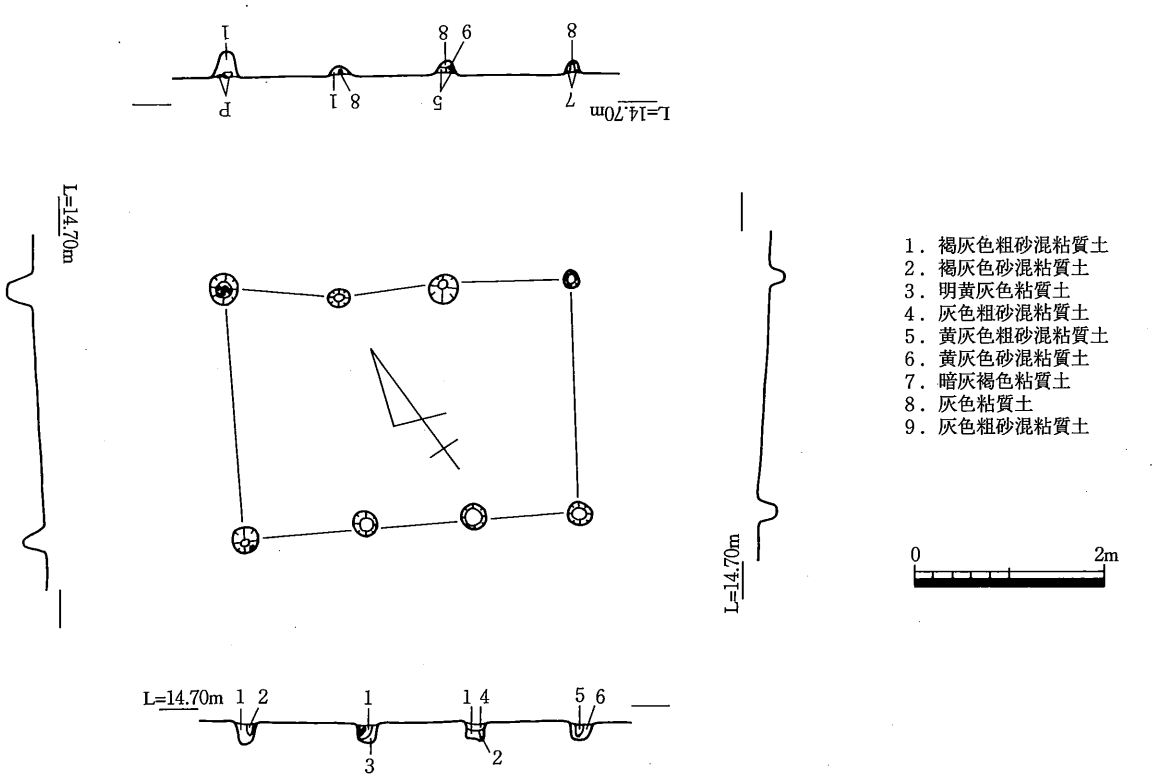


1．明褐色粘質土混砂質土
（SR03埋土）
2．赤茶褐灰色粗砂混砂質土
3．暗褐灰色粗砂混粘土
3′．3よりやや淡い
4．（青）灰色粗砂混粘土
（ピット埋土）
5．暗灰褐色粗砂質土
（炭少し混）
6．褐灰色粗砂混粘土
7．明黄褐色粗砂質土
（大きい炭混）
7′．茶褐灰色砂質土（粘性あり）
8．明茶灰色砂質土（壁溝）
9．灰褐色砂質土
（やや粘性あり）
10．赤褐色砂混粘質土
11．明褐色砂質土
（上面に炭が入る、壁溝）
12．明灰色砂質土
13．明灰褐色砂質土
14．黄褐色粘土（地山）





第32図　ＳＨ08平・断面図（１／60）出土遺物（１／４、１／２）



第33図　ＳＢ01平・断面図（１／80）

ら、ＳＨ07と同時期の可能性があろう。

137・138は竪穴住居埋土中で出土した土器である。いずれも摩滅が著しい。137は広口壺。138は底部。139・140はスクレイパー。刃部は片側をわずかに作り出す。140は側縁の片側が折損し、片側には自然面が残る。刃部はわずかに作るだけである。サヌカイト製。141は石鏃。凹基式。サヌカイト製。

⑵掘立柱建物

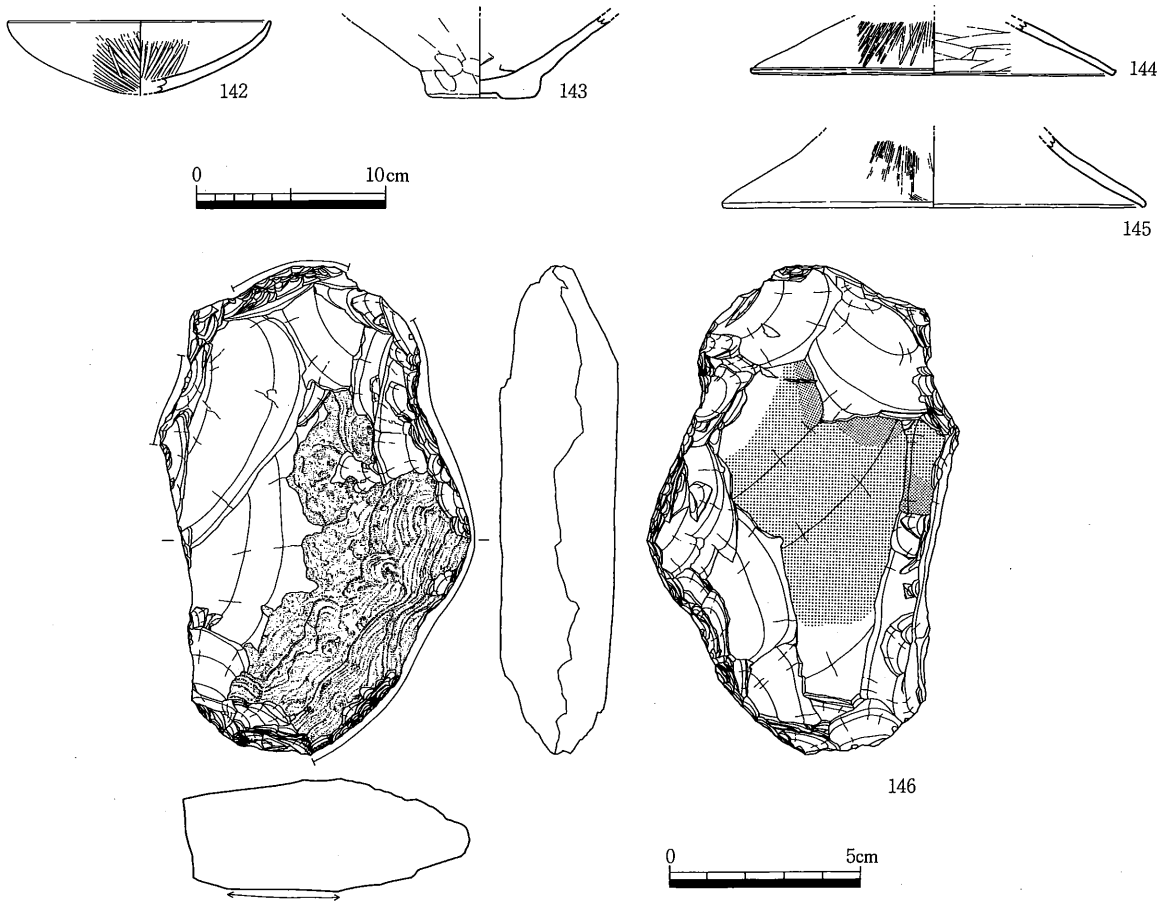
ＳＢ01（第33・34図、図版14・79）

３区④上段北西部で検出した掘立柱建物である。方位はN58°Ｗで、ＳＢ03・ＳＢ04とほぼ同じ方向を示す。現地割より若干南へ振るが、等高線には概ね平行する。桁行３間（3.5m）、梁間１間（2.5～2.8m）で、柱間は桁方向が1.05～1.25m、梁方向が2.5～2.8m、面積は約9.3m²である。ピットは円形で直径16～24cm、深さ10～20cmである。ピット内から弥生土器、土師器、サヌカイト片が出土している。

142は鉢。内外面とも放射状のヘラミガキを施す。143は底部。しっかりした平底で内側が少し窪む。144・145は高坏脚部。146は石斧。サヌカイト製。上部に抉りを入れる。刃部の左側は欠損する。古墳時代初頭頃。

ＳＢ02（第35図、図版14）

３区④上段北西部で検出した掘立柱建物である。方位はN46°Ｅで、ほぼ現地割と同じ方向で、等高線と直交する方向である。桁行３間（5.6m）、梁間１間（3.5m）で柱間は桁方向が1.65～2.0m、梁方向が3.5m、面積は19.6m²である。ピットは円形で直径25～32cm、深さ14～44cmであるが、概ねは30cm前後で高い山側の柱が浅く、低い平野側の柱が深いようである。ピットからは弥生土器の小破片、サヌカイ



第34図　ＳＢ01出土遺物（１／４、１／２）

ト剥片が出土した。ＳＢ01・03・04とは方向が違うが、ピット内から出土するものに新しいものがないので、時期は弥生時代後期後半としておく。

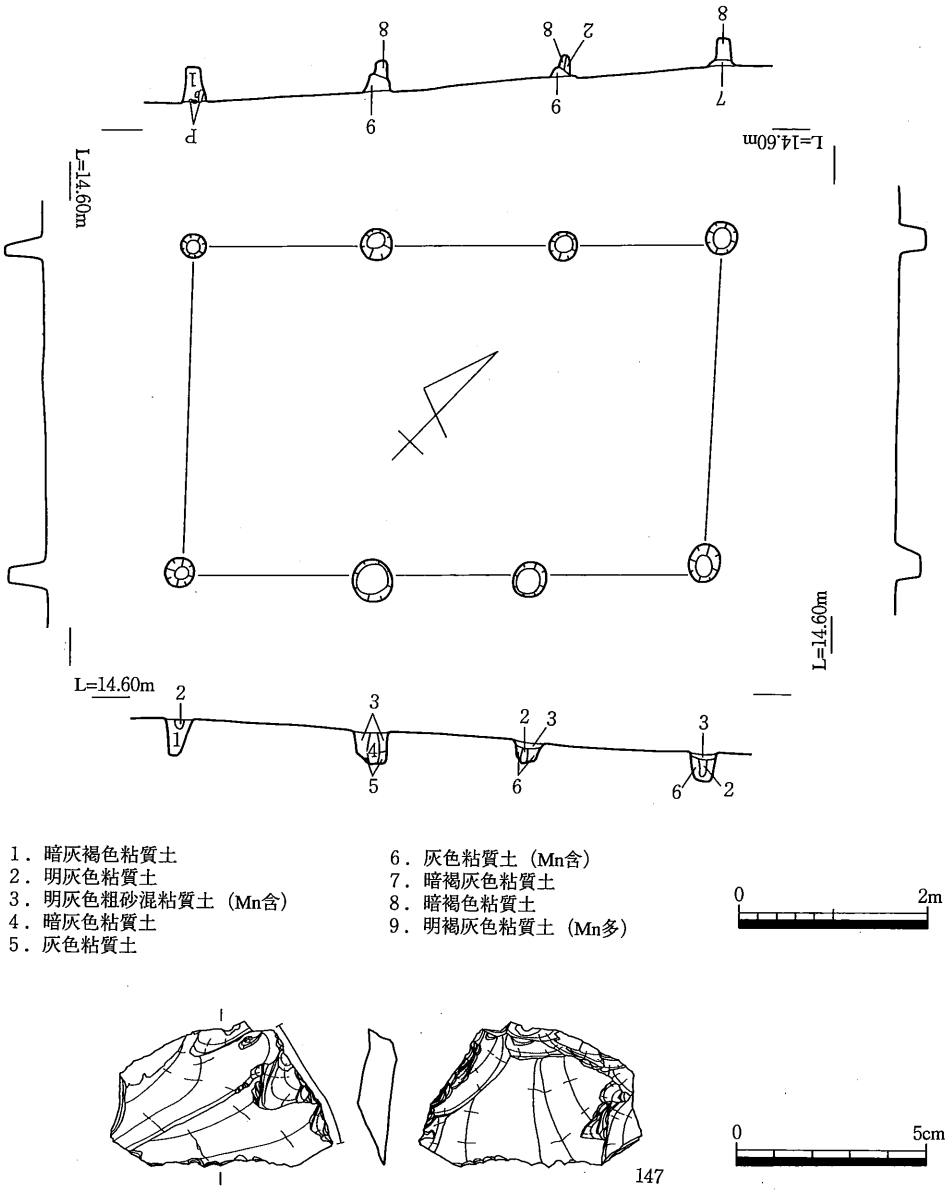
147はスクレイパー。サヌカイト製。刃部を少し削り出すだけのもの。

ＳＢ03（第36図、図版14）

３区④上段北西部、ＳＢ01の南側で検出した掘立柱建物である。方位はN58°Wで、ＳＢ01とほぼ同じく、現地割からはやや南に振り、等高線にはほぼ平行する。桁行２間（４m）、梁間２間（3.4～3.5m）だが、南西梁間の柱筋の中央のピットが欠落している。面積は13.8m²である。ピットは円形で概ね直径34～38cm、深さは22～27cmである。埋土中からは土器は出土せず、サヌカイト剥片が出土しただけであった。時期はＳＢ01と方向を同じくすることから弥生時代後期後半～古墳時代初頭としておく。

ＳＢ04（第37図、図版14）

３区④上段北西部、ＳＢ03と重複する位置で検出した掘立柱建物である。方位はN58°Wで、ＳＢ01・03とほぼ同じ、現地割からはやや南に振り、等高線にはほぼ平行する。桁行２間（2.75～2.8m）、梁間１間（2.2～2.3m）で面積は6.16m²である。ピットは円形で直径20～30cm、深さ９～13cmである。ＳＢ03との前後関係は不明である。ピットからの出土遺物はなかった。時期は決めがたいが、ＳＢ01・03と同方向で、この場所は弥生時代後期の遺構が比較的多く立地するので、弥生時代後期後半～古墳時代初頭としておく。



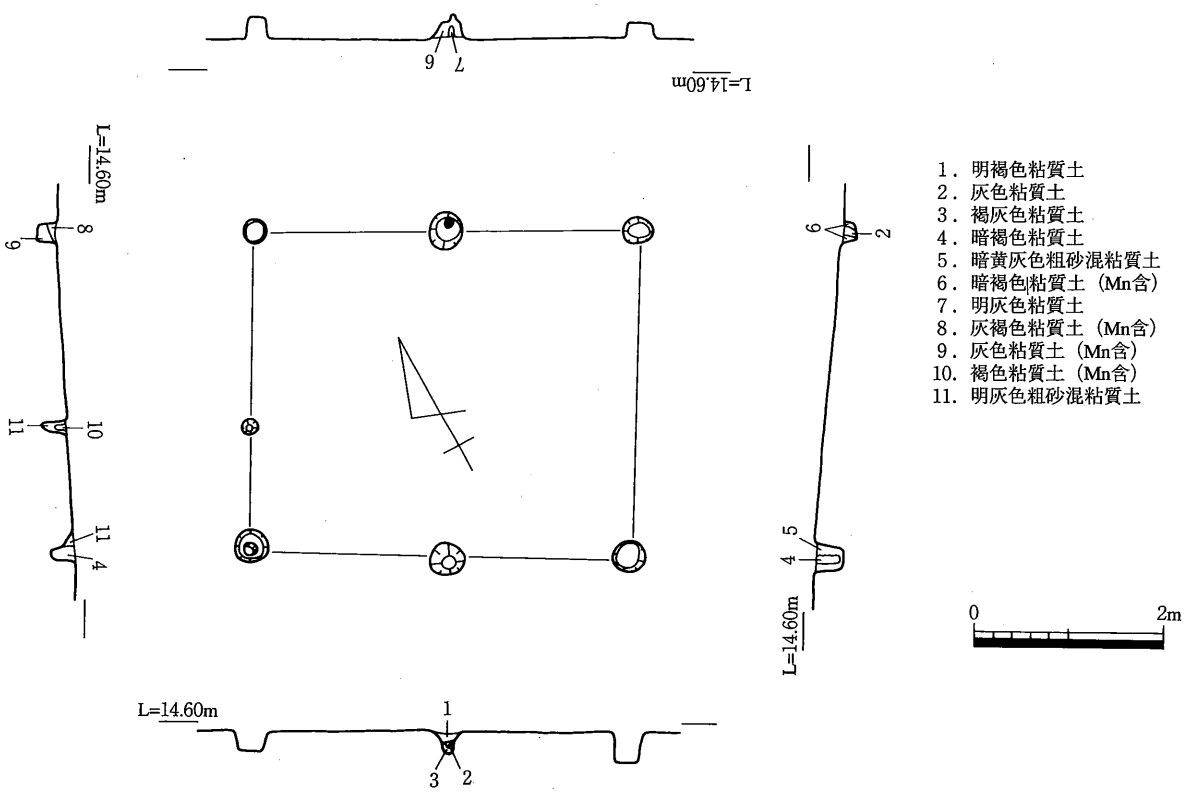
第35図　ＳＢ02平・断面図（１／80）出土遺物（１／２）

(3)ピット

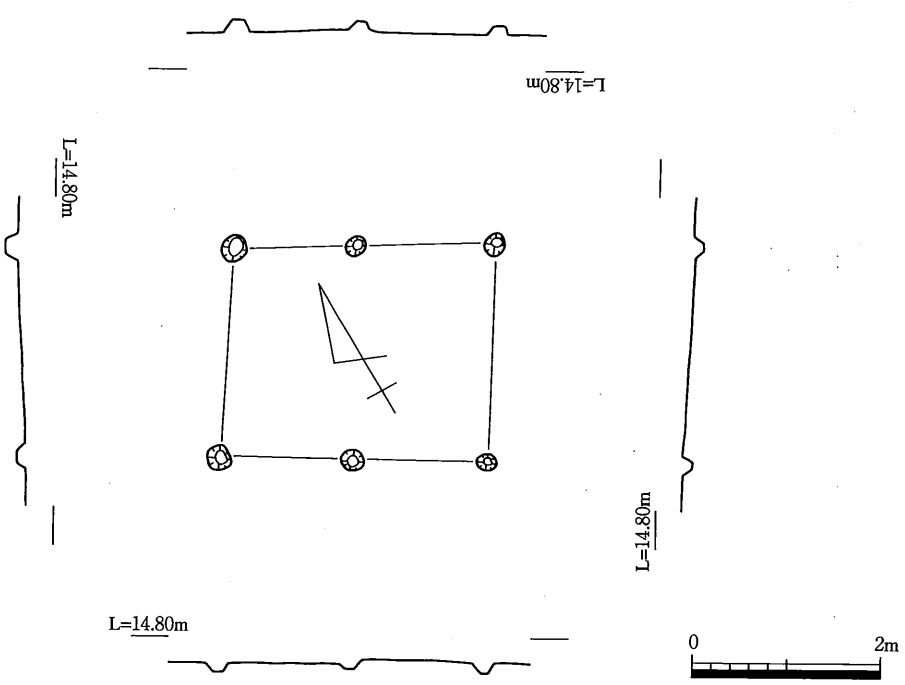
ＳＰ3401（第38図、図版14・23）

３区④下段北端付近で検出したピットである。比較的遺構密度の低い場所である。円形で直径29cm、深さ11cmである。ピットからは上向きに重ねられた状態で鉢が２点、小型丸底壺が１点の合計３点が出土した。下側２点が椀型の小型の鉢で、最上部が小型丸底壺である。鉢２点は北側に口縁部を向け、壺はほぼ上面に口縁部を向けている。いずれもほぼ完形である。

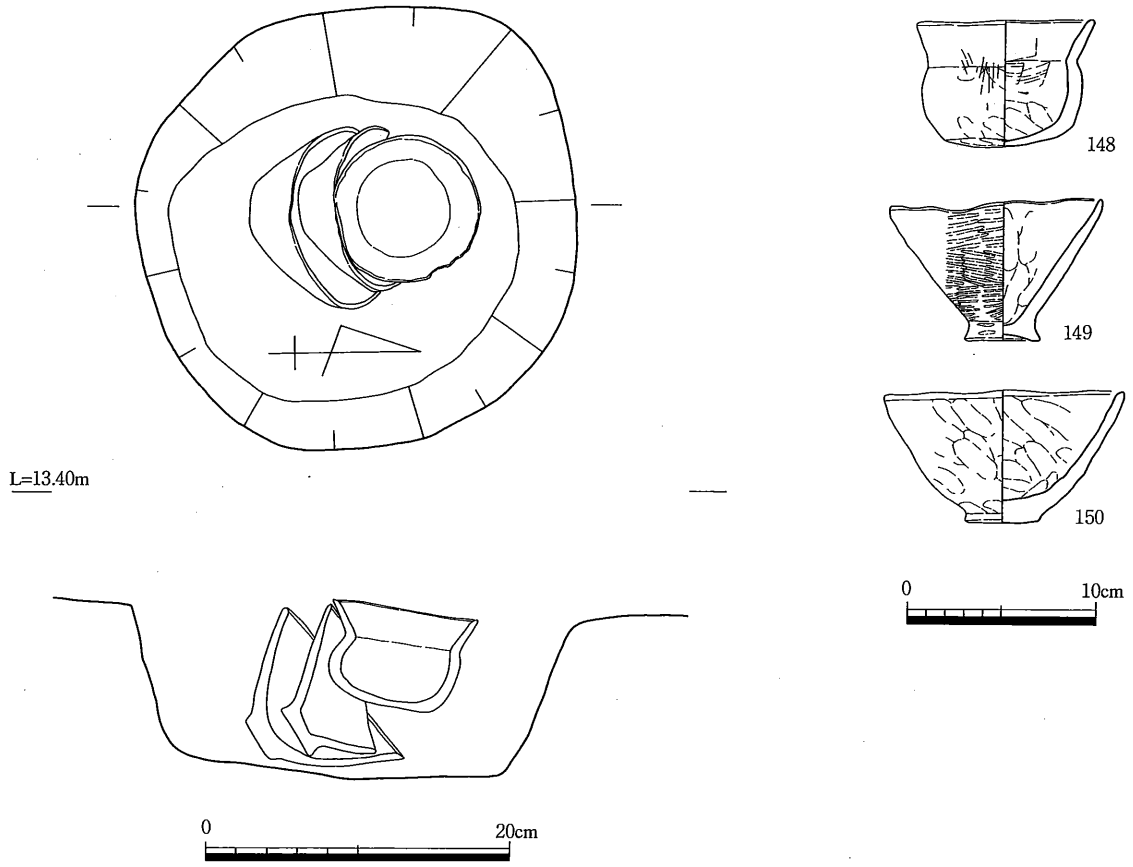
148は小型丸底壺。小型で体部から底部にかけて球形に近い。149・150は鉢。いずれも平底を呈し、149は体部が直線的に上がり、150は丸みを持って立ち上がる。時期は弥生時代後期後半～終末期と考えられる。



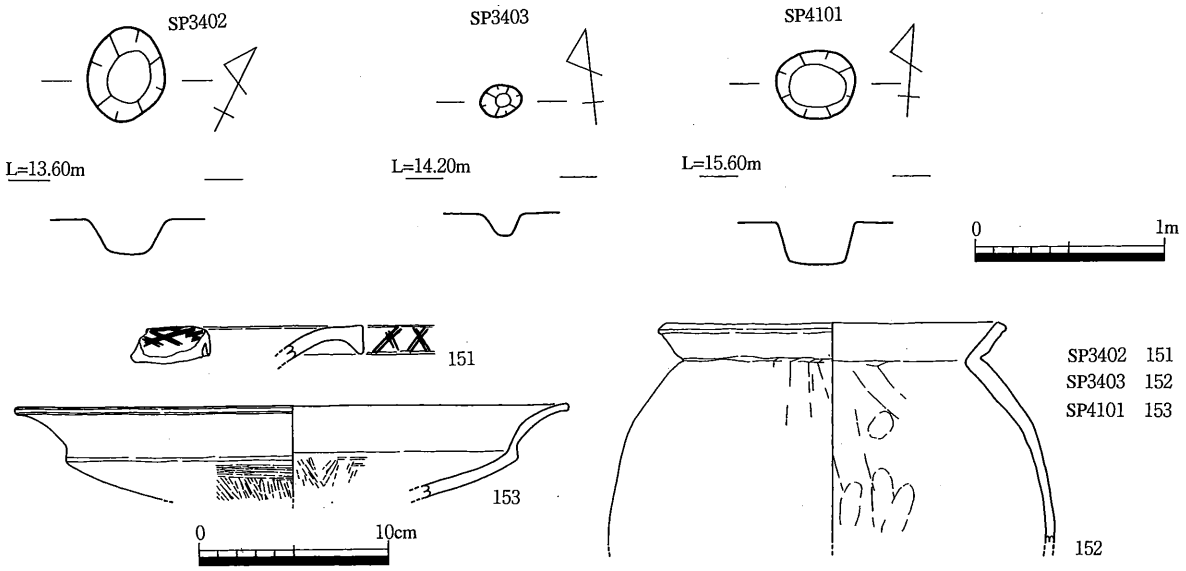
第36図　ＳＢ03平・断面図（１／80）



第37図　ＳＢ04平・断面図（１／80）



第38図　ＳＰ3401平・断面図（１／５）出土遺物（１／４）



第39図　ＳＰ3402、ＳＰ3403、ＳＰ4101平・断面図（１／40）出土遺物（１／４）

ＳＰ3402（第39図）

３区④ＳＤ3403・3404に接して検出したピットである。直径45cm、深さ18cmである。埋土中からは弥生土器壺の破片が出土した。

151は弥生土器壺。口縁部が大きく外側に広がり、面を持つ口縁端部と口縁内面上端部に斜格子文様

を入れる。弥生時代中期後半。

ＳＰ3403（第39図）

ＳＨ06の東南側（私道側）で検出したピットである。直径20cm、深さ11cm、埋土は明褐灰色粗砂混粘質土である。埋土中からは弥生土器甕が出土した。

152は弥生土器甕。摩滅するが、内外面とも板ナデ。弥生時代後期後半。

ＳＰ4101（第39図）

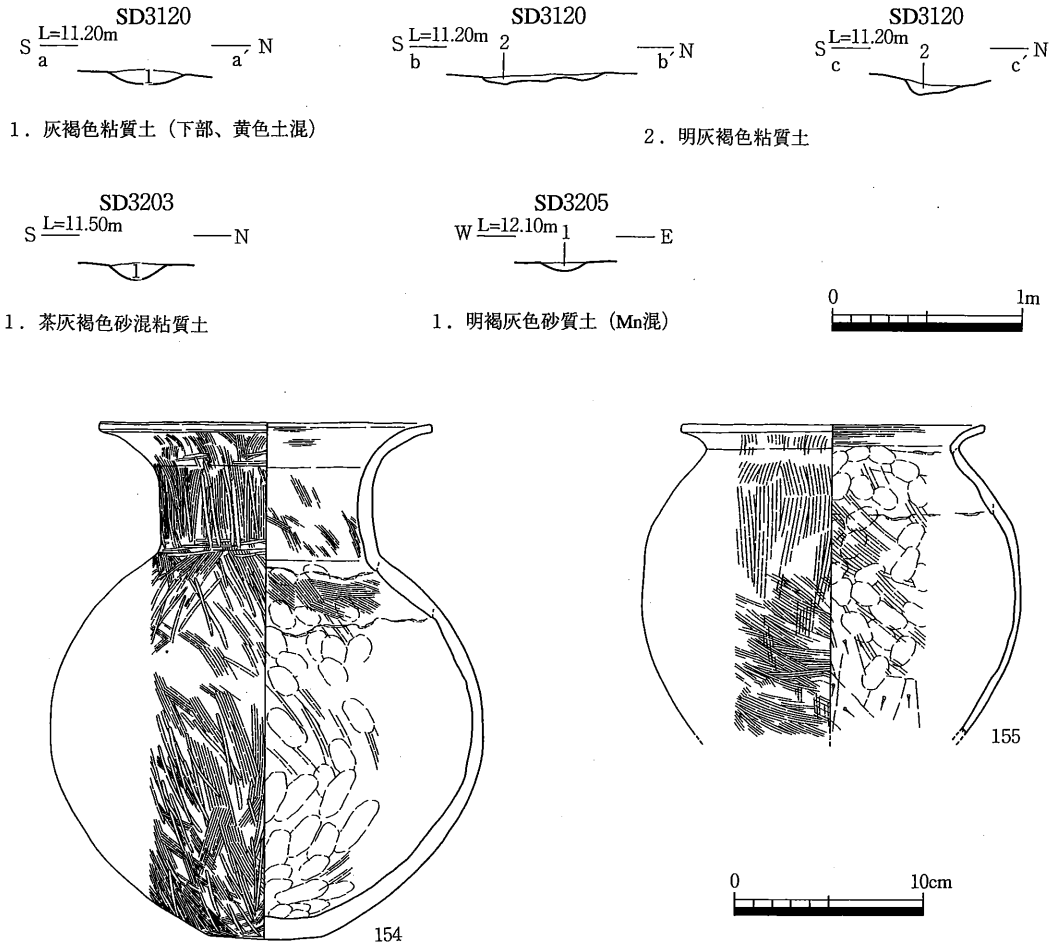
４区①東部（平野部側）で検出したピットである。この付近より山手側では等高線は急に幅が狭くなり、勾配が強くなる。直径41cm、深さ25cm、埋土は灰褐色粗砂混砂質土である。埋土中からは弥生土器高坏が出土した。

153は弥生土器高坏。内外面にミガキを施す。胎土中に角閃石を含む。下川津Ｂ類。弥生時代後期後半。

(4)溝

ＳＤ3120（第40図、図版23）

３区①北端付近で検出した溝である。西半分は二股に分かれる。隣接する１区②では延長部は検出し



第40図　ＳＤ3120、ＳＤ3203、ＳＤ3205断面図（１／40）ＳＤ3120出土遺物（１／４）

ていないが、調査時のベース面が削平により３区①より15cmほど低く、延長部は削平により消失したと考えられる。幅40cm、深さ７cm、埋土は灰褐色粘質土、断面形は浅いボウル状である。この溝はＳＤ3119に切られる。弧の直径は歪みがあまりないとすれば12m前後であろうが、検出部分が少ないので不確かである。竪穴住居の周溝の一部であろうか。埋土中からは弥生土器壺が出土した。

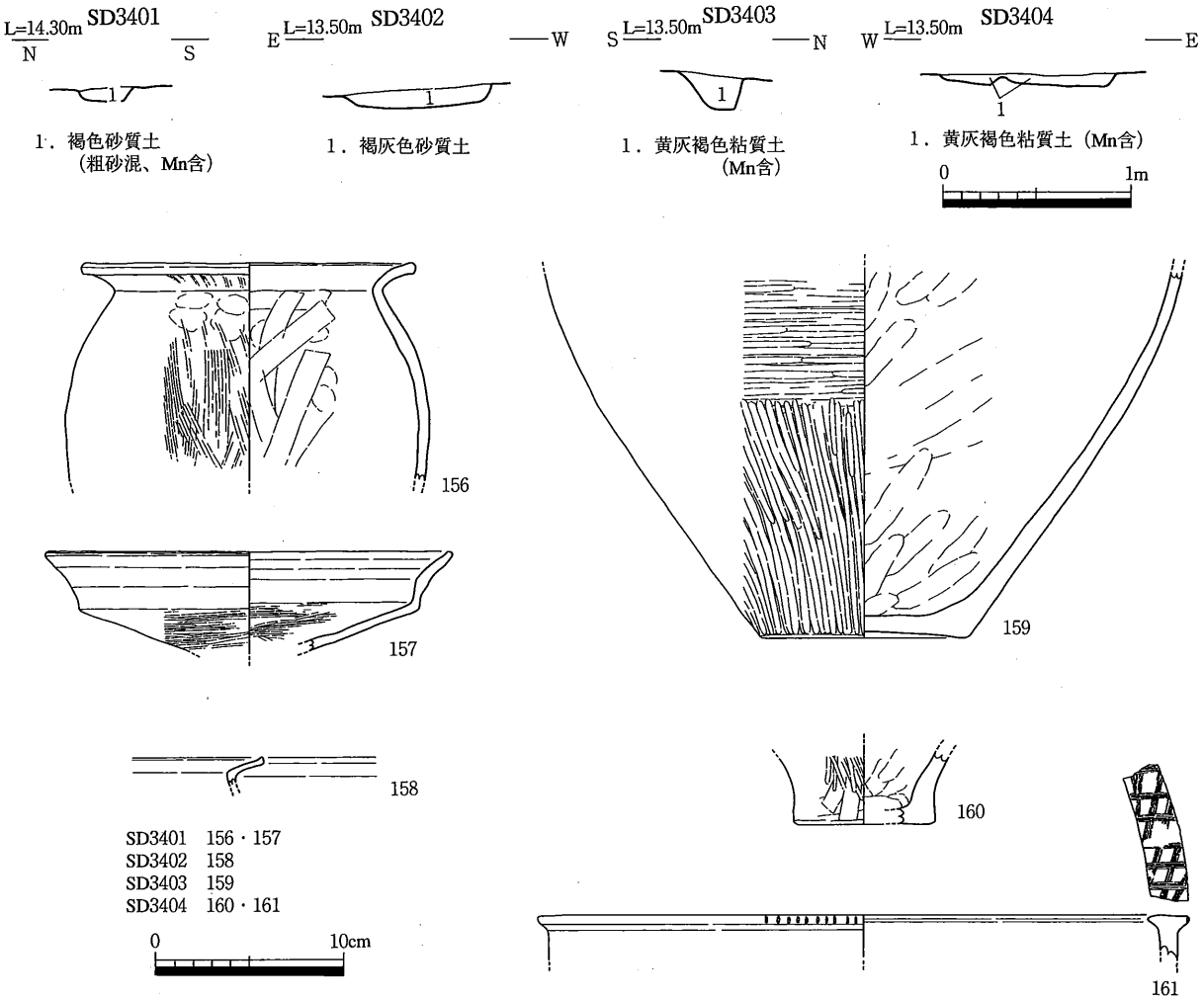
154は弥生土器広口壺である。体部は球形に近く、頸部はほぼまっすぐに立ち上がって口縁部で大きく外反する。口縁端部は四角く収める。155は甕。球形に近い体部で内外面ともハケ、内面下半はヘラ削りする。弥生時代後期後半である。

ＳＤ3203（第40図）

３区②下段西部で検出した溝である。等高線の方向とほぼ同じで、ＳＨ04の周溝であるＳＤ3204から東へ延び、西へは延びない。ＳＤ3204との切り合い関係も認められなかった。幅30cm、深さ８cm、埋土は灰褐色砂混粘質土、断面形は浅いボウル状である。溝の底のレベルはＳＤ3204より５cm高い。埋土中からは土器の小破片がわずかに出土しただけであったが、ＳＤ3204と同時期と考えられることから、ＳＤ3203の時期も弥生時代後期後半～終末と考えられる。

ＳＤ3205（第40図）

３区②上部の西部で検出した円弧状の溝である。検出できたのは１／３程度で、東側はＳＤ01に切ら



第41図　ＳＤ3401～ＳＤ3404断面図（１／40）、出土遺物（１／４）

れ、北側は後世の削平で約40cm低くなっているので、消失したと考えられる。幅24cm、深さ５cm、埋土は明褐灰色砂質土（Mn含）、断面形状は浅いボウル状である。直径は約7.2mに復元できる。埋土中からは土器の小破片がわずかに出土したのみで時期の比定は難しいが、ＳＤ01より古いことは間違いなく、直径が小さいことから、竪穴住居の壁溝の可能性があろう。

ＳＤ3401（第41図）

３区④山手側北端で検出した溝である。ほぼ南北方向で、等高線に対しては斜交している。検出長は６mで平野部側へも３区③へも延長しない。幅30cm、深さ８cm、断面形状は浅い逆台形で、埋土は褐色砂質土（粗砂混）である。埋土中からは弥生土器甕・高坏が出土した。

156は甕。157は高坏。高坏は下川津Ｂ類。弥生時代後期後半である。

ＳＤ3402（第41図）

３区④平野部側・中央付近で検出した溝である。東西方向で等高線にほぼ直交し、現地割より南へ振る。溝の山手側、平野部側ともに削平を受けたと考えられ、検出長約６m、幅80cm、深さ10cm、埋土は褐色砂質土（粗砂混）、断面形は浅い逆台形である。ＳＤ3403を切る。埋土中からは弥生土器甕小破片やサヌカイト片が数点出土した。

158は甕口縁部。小片である。弥生時代後期後半頃であろう。

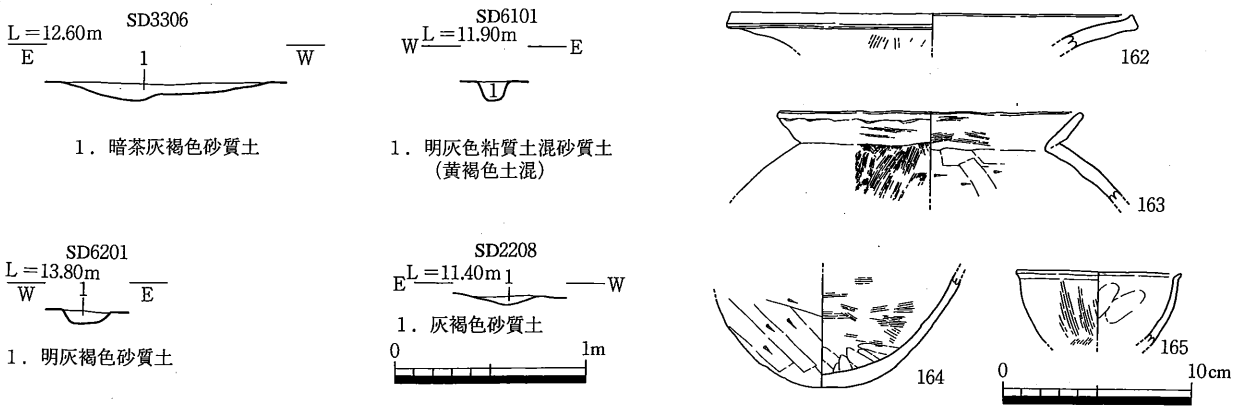
ＳＤ3403（第41図、図版23）

３区④平野部側中央付近で検出した南北方向の溝である。ＳＤ3404・ＳＤ3402に直交し、等高線にほぼ平行である。ＳＤ3402に切られるが、そこから北側は消失している。この場所はちょうど地形的に落ちがやや急になる場所であるので、後世に削り取られた可能性もあろう。ＳＤ3404とは切り合い関係が認められず、そこから南へは続かない。幅35cm、深さ18cm、埋土は黄灰褐色粘質土で断面形状は逆台形である。埋土中からは平底を持つ壺の底部の他、サヌカイト剥片、焼けた石が出土した。

159は壺底部。外面を丁寧に磨く。弥生時代中期後半である。

ＳＤ3404（第41図）

３区④平野部側中央部付近で検出した南北方向の溝である。方向はＳＤ3403に直交し、等高線とも直交する。西側と東側は消失している。検出長は４m、幅95cm、深さ６cm、埋土はＳＤ3403と同じ黄灰褐色粘質土、断面は浅い台形を２個連結した形状で、ＳＤ3403と接していない溝の北側と南側は２股に分かれている。ＳＤ3403との切り合いはないと考えられる。埋土中からは弥生時代中期後半の鉢や甕底部、サヌカイト剥片、焼け石が多く出土した。



第42図　ＳＤ3306、ＳＤ6101、ＳＤ6201、ＳＤ2208断面図（１／40）ＳＤ6201出土遺物（１／４）

160は甕底部。しっかりとした平底で外面は磨く。161は鉢。溝の時期は弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＤ3306（第42図）

３区③下段南端で検出した溝である。西北西から東南東の方向で概ね等高線に直交する方向である。３区③の平野側、３区②側では検出していない。検出長は４ｍ、幅105cm、深さ10cm、埋土は暗茶灰褐色砂質土である。埋土中からは土器の小破片の他サヌカイト剥片が出土した。弥生時代後期の遺構と思われる。

ＳＤ6101（第42図）

６区①微高地上、北部で検出した弧を描く溝である。幅16cm、深さ10cm、埋土は明灰色粘質土混砂質土（黄褐色土混）、断面逆台形を呈す。幅が狭いのに比べて、断面はしっかりしており、後世の削平を受けた可能性が高い。ＳＨ08、ＳＤ6104には切られる。円弧の直径は14m程度になる。溝の東側は調査区外、南西部はやや地形が落ちていく箇所に当たり、削平を受けて消失している可能性もある。埋土中からの出土遺物はなかった。溝の形状から竪穴住居の周溝になる可能性が高く、弥生時代後期後半と考えられる。

ＳＤ6201（第42図、図版23）

６区②西部の山手側で検出した円弧状の溝である。西側１／３を検出した。東側はＳＲ03により消失し、北側も後世の削平により50cmほど低くなっている。幅24cm、深さ７cm、断面形状は逆台形で、埋土は明灰褐色砂質土である。円弧の直径は概ね11.2m前後と考えられる。埋土中からは弥生土器甕・壺・鉢などが出土した。この溝は規模・形状や出土遺物から竪穴住居の周溝の可能性が高いと考えられる。竪穴住居の痕跡は不明だが、溝の立地が微高地と谷筋の縁辺にあって竪穴住居に想定される場所が急激に落ちていることから、ＳＲ03により消失したと考えられる。溝の時期は弥生時代終末期と考えられる。

162は広口壺口縁部。163は甕。口縁はくの字に外傾し丸い体部を持つと考えられる。164は底部。ほぼ丸底を呈し、外面下部はヘラ削りする。165は鉢。口縁端部がわずかに外反し、外面はハケで調整する。

ＳＤ2208（第42図）

２区②の西端で検出した弧を描く溝である。調査区外へ延びるが、隣接する３区④では未検出である。円弧の直径は10m程度になると思われるが、円弧が歪で不確かである。幅26～36cm、深さ３～５cm、断面形状は浅く、削平が著しいと思われる。埋土は灰褐色砂質土である。埋土中からは土師器杯が出土したが、ＳＤ2210の遺物が混入したとも考えられる。円形に巡る溝の形状から、竪穴住居の周溝である可能性があり、弥生時代後期のものである可能性があろう。

ＳＤ2401（第43・44図、図版24）

２区④北部を南西から北東へ流れる溝である。幅1.4m、深さ0.32mで埋土は暗灰色小礫混シルトである。出土した土器は弥生土器が多く、摩滅度も少ないが、小破片ながら９世紀後半～10世紀前半の土師器杯、須恵器杯・壺などが特に溝の西側のＳＲ02と切り合わない場所から出土する。出土遺物は弥生土器が圧倒的に多く摩滅度も少なく破片も大きいが、掲載した弥生土器はすべてＳＲ02と切り合う場所から出土しており、ＳＲ02の土器を巻き込んだものである可能性も高かろう。検出した位置関係から、この溝は後述するＳＤ01に続く可能性があると思われる。

166は広口壺。外面と内面の頸部から上をハケで調整し、内面体部はヘラ削りする。体部の上部でほ

とんどが割れており、ここは粘土の継ぎ目であったと考えられる。167・168は甕。167は内外面ともハケで底部はわずかに底がある。内面下半はヘラ削りする。168は外面を密なタタキで、内面はハケで調整する。169は鉢。口縁部は外側へ屈曲させ、器表にあまり調整痕を残さない。

ＳＤ2403（第43～45図、図版24・25）

２区④中央部付近で、ＳＤ2401の南東側に平行して流れる溝である。幅1.2m、深さ0.6m、埋土は灰色小礫混細砂である。溝の北東部は上面を弥生時代後期の土器を包含する層に覆われ、時期はそれ以前である。ＳＤ2403の下部にはＳＤ2404・2405の２つの流路を検出したが、土層の断面観察からは明確には確認できなかった。

170・172は最下層砂層から出土した。いずれも縄文土器。摩滅が著しい。170は浅鉢。口縁端部がわずかに内側へ屈曲する小片で傾きは不確かである。172は底部。171・176～180は黒色～暗灰色砂層（上層）で出土した。171は縄文土器。深鉢。外面に突帯が巡り、突帯にはＶ字状の刻み目が入る。摩滅が著しい。176は壺。短く直立する頸部が付く。内外面ともハケで仕上げる。外面体部下半は他の部分とは原体が異なる粗いハケで仕上げる。177～187は甕。177は口縁端部に面を持ち、斜め方向の刻み目を入れる。体部中位にも同様の刻み目を入れ、刻み目より上はハケ、下はヘラミガキを密に施す。時期は弥生時代中期後半。178は形態的には下川津Ｂ類と思われるが、角閃石は目立たない。体部外面は上部がハケ、下部は密なヘラミガキを行う。体部内面は上半は指押さえ、下半はヘラ削りを行う。指押さえの場所には指押さえの単位を超えて横方向の筋状の圧痕がある。この圧痕は指押さえをした場所で深く残っており、指押さえをした際に直接土器に指押さえをしたのではなく、何かの上から指押さえをしたと思われる。183は外面にタタキ痕が密に残る。胎土中に雲母を多量に含む。184は外面にあまり調整痕跡を残さない。173～175・181・185～188は上部の埋土中から出土した。173～175は壺。173・174は広口壺。174は口縁端部に面を持ち、そこに斜格子文を刻みつける。175は細頸壺。下川津Ｂ類。185～187は甕。外面はタタキの後ハケを施すが、いずれもあまり顕著には残らない。内面はヘラ削りする。188は鉢。あまり調整痕跡を残さない。底部には時計回りに粘土紐の巻き上げ痕跡が見える。

溝の時期は出土遺物から弥生時代終末期と考えられる。なお、177・179・180・182・185はＳＤ2405との接合資料である。

ＳＤ2404（第45図）

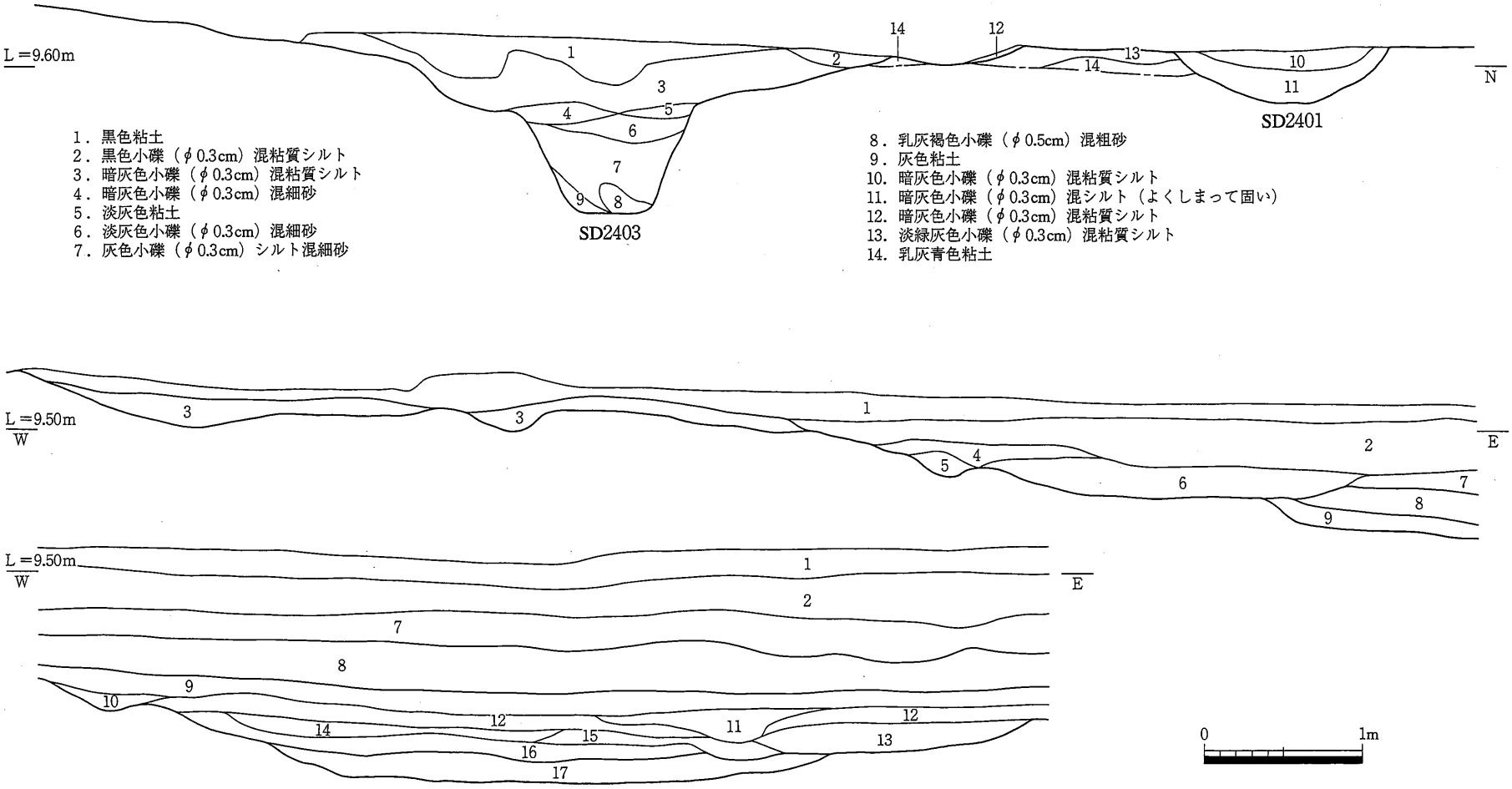
ＳＤ2403の下部で検出した２条の溝のうちの北側の溝である。幅0.35m、深さ15cmである。ただし、土層断面上では確認できなかった。

189は甕。外面はタタキの後丁寧にハケを施し、内面体部はヘラ削りで薄くする。190は鉢。手捏ねで口縁部はガタガタである。底部にわずかにハケを施す。

ＳＤ2405（第45図）

ＳＤ2403の下部で検出した２条の溝のうちの南側の溝である。幅0.5m、深さ16cmである。ただし、土層断面上ではよく確認できなかった。

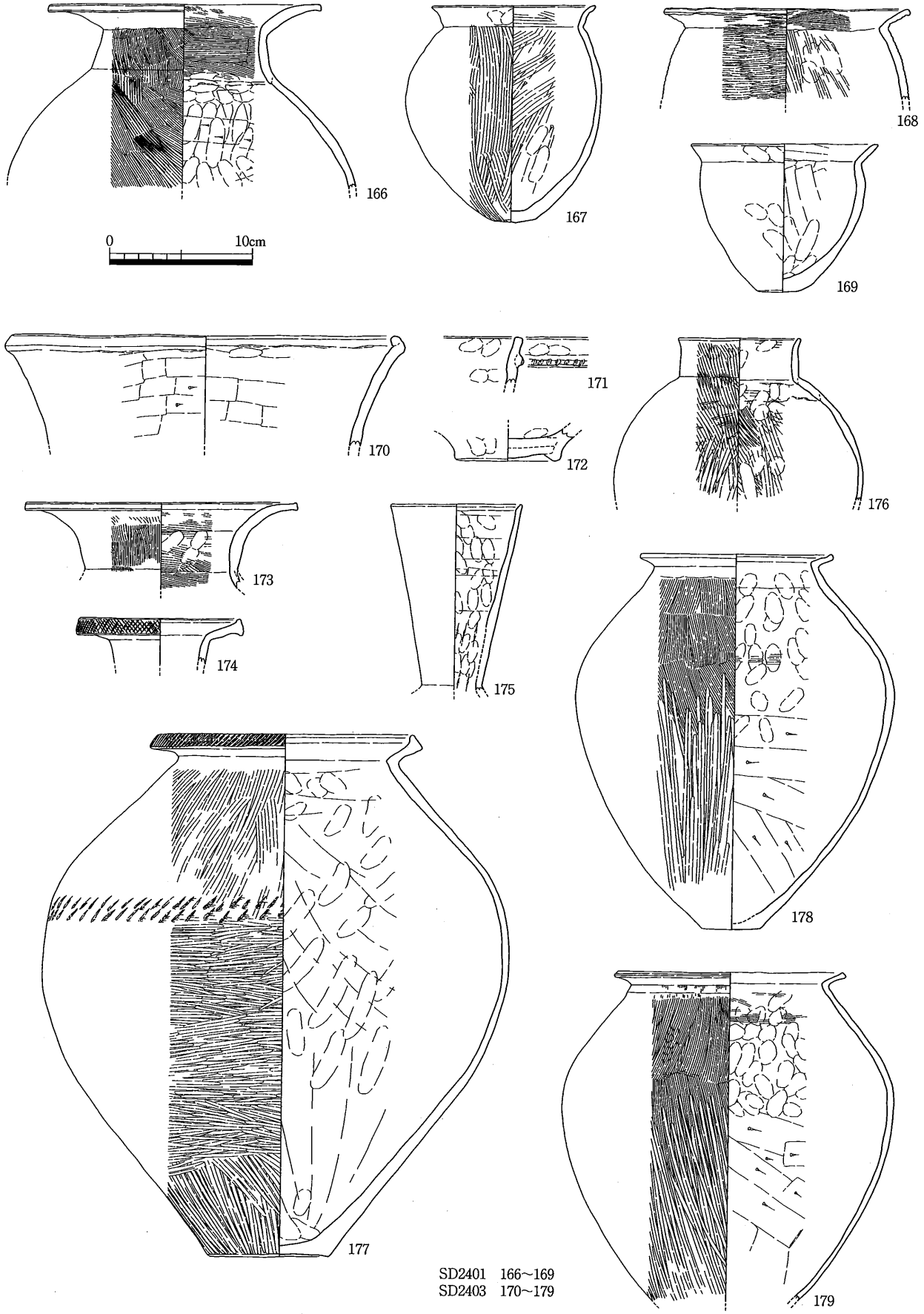
191は甕。外面はタタキを密に施す。192は鉢。内面は横方向のハケを施し、外面には調整痕跡をほとんど残さない。



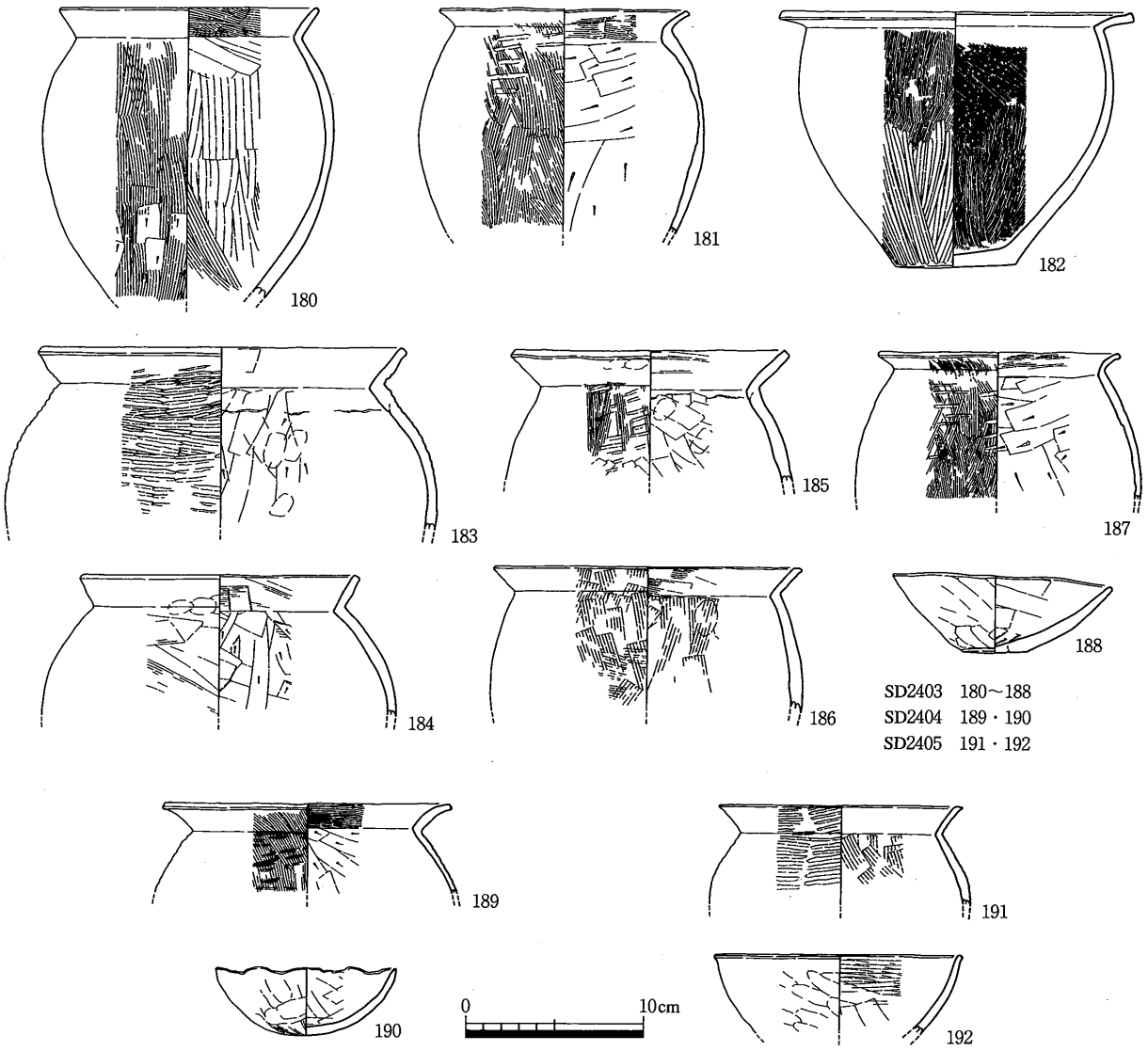
1．黒色粘土
2．黒色小礫（φ0.3cm）混粘質シルト
3．暗灰色小礫（φ0.3cm）混粘質シルト
4．暗灰色小礫（φ0.3cm）混細砂
5．淡灰色粘土
6．淡灰色小礫（φ0.3cm）混細砂
7．灰色小礫（φ0.3cm）シルト混細砂
8．乳灰褐色小礫（φ0.5cm）混粗砂
9．灰色粘土
10．暗灰色小礫（φ0.3cm）混粘質シルト
11．暗灰色小礫（φ0.3cm）混シルト（よくしまって固い）
12．暗灰色小礫（φ0.3cm）混粘質シルト
13．淡緑灰色小礫（φ0.3cm）混粘質シルト
14．乳灰青色粘土

1．暗灰色小礫混粘質シルト
2．暗灰色小礫混シルト
3．灰色小礫混粗砂
4．暗灰色小礫混細砂
5．灰色小礫混粗砂
6．暗灰色小礫混粘質シルト（SD2401）
7．暗灰色小礫混粘土（SR02C）
8．黒色粘土（SR02C）
9．灰色粘質シルト
10．灰色小礫混シルト
11．灰緑色小礫混シルト
12．暗灰色小礫
13．乳灰緑色小礫
14．青灰色シルト
15．灰色小礫
16．淡灰色小礫
17．暗褐色小礫混シルト（木等植物含）（SD2403）

第43図　ＳＤ2401・ＳＤ2403断面図（１／40）



第44図　ＳＤ2401、ＳＤ2403出土遺物(1)(１／４)



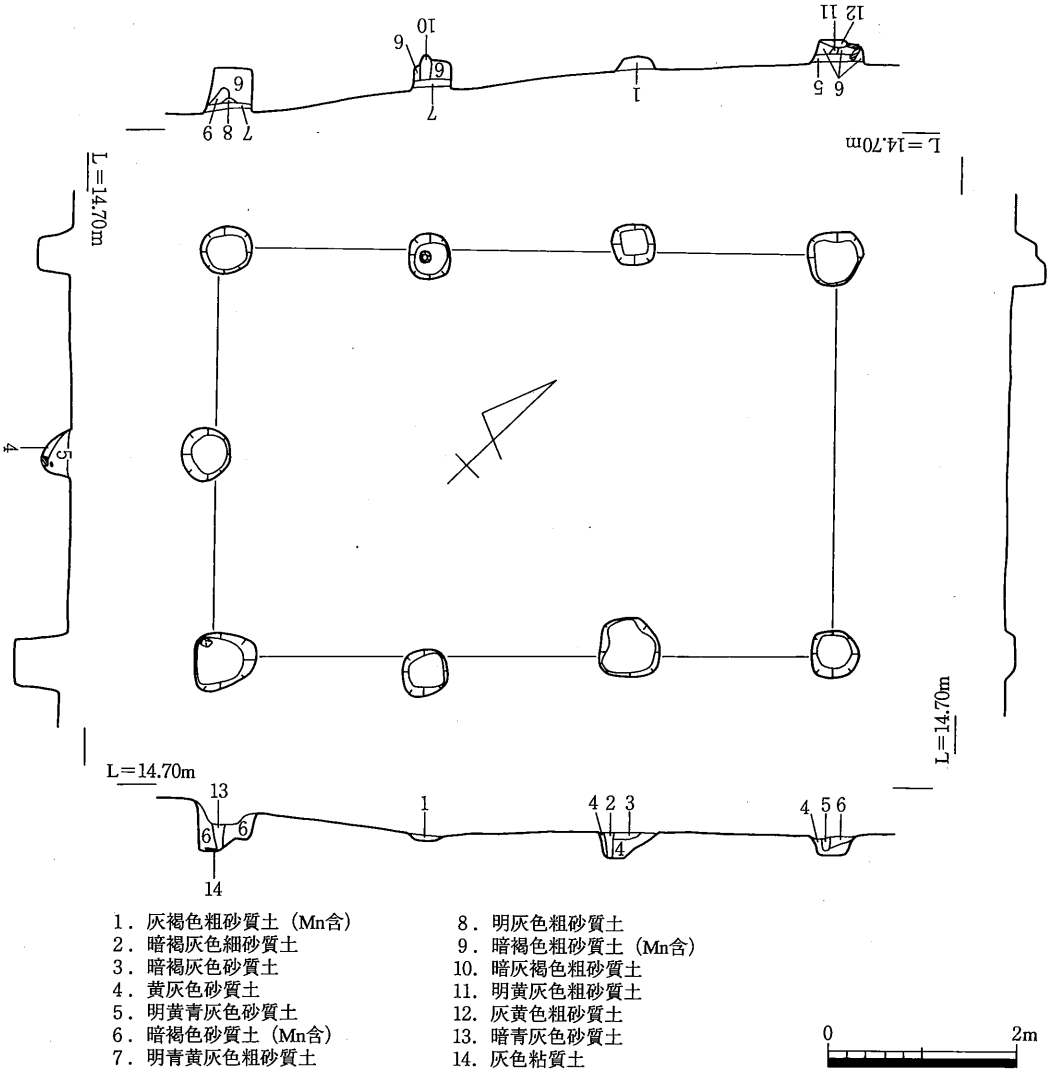
第45図　ＳＤ2403～ＳＤ2405出土遺物(2)（１／４）

２．奈良時代の遺構・遺物

(1)掘立柱建物

ＳＢ05（第46・47図、図版15・80）

３区④上段私道際で検出した掘立柱建物である。方位はＮ46°Ｅで、現地割にほぼ直交、等高線にも概ね直交する。桁行３間（6.45～6.55m）、梁間２間（4.25m）で、柱間は２～2.3m、面積は27.625m²である。南側梁間の中央の１穴がない。柱穴は円形または隅丸方形で、直径36～54cm、深さ25～50cmで、山側の柱穴の方が平野部側よりやや深めである。埋土は暗褐灰色粗砂質土などである。埋土中からは暗文のある土師器杯、須恵器杯・壺、サヌカイト片、弥生土器甕口縁部などが出土した。出土遺物が少なく、時期は決めにくいが、８世紀中頃と考えられる。



第46図　ＳＢ05平・断面図（１／80）

193は土師器皿。小片。193は口縁端部はわずかに玉縁状を呈し、体部内面には斜放射状の暗文がある。外面は横方向のヘラミガキを施す。194は須恵器皿。口縁端部内面にわずかに段を持つ。外面の底部と体部の境付近でわずかにヘラ削り痕跡を残す。いずれも８世紀中頃。195は叩き石。砂岩。下端部に顕著に敲打痕を残し、側縁部にも敲打痕を少し残す。側面のうちの１面の比較的平らな面にはわずかに擦痕があり、砥石としても利用していたらしい。混入と考えられる。

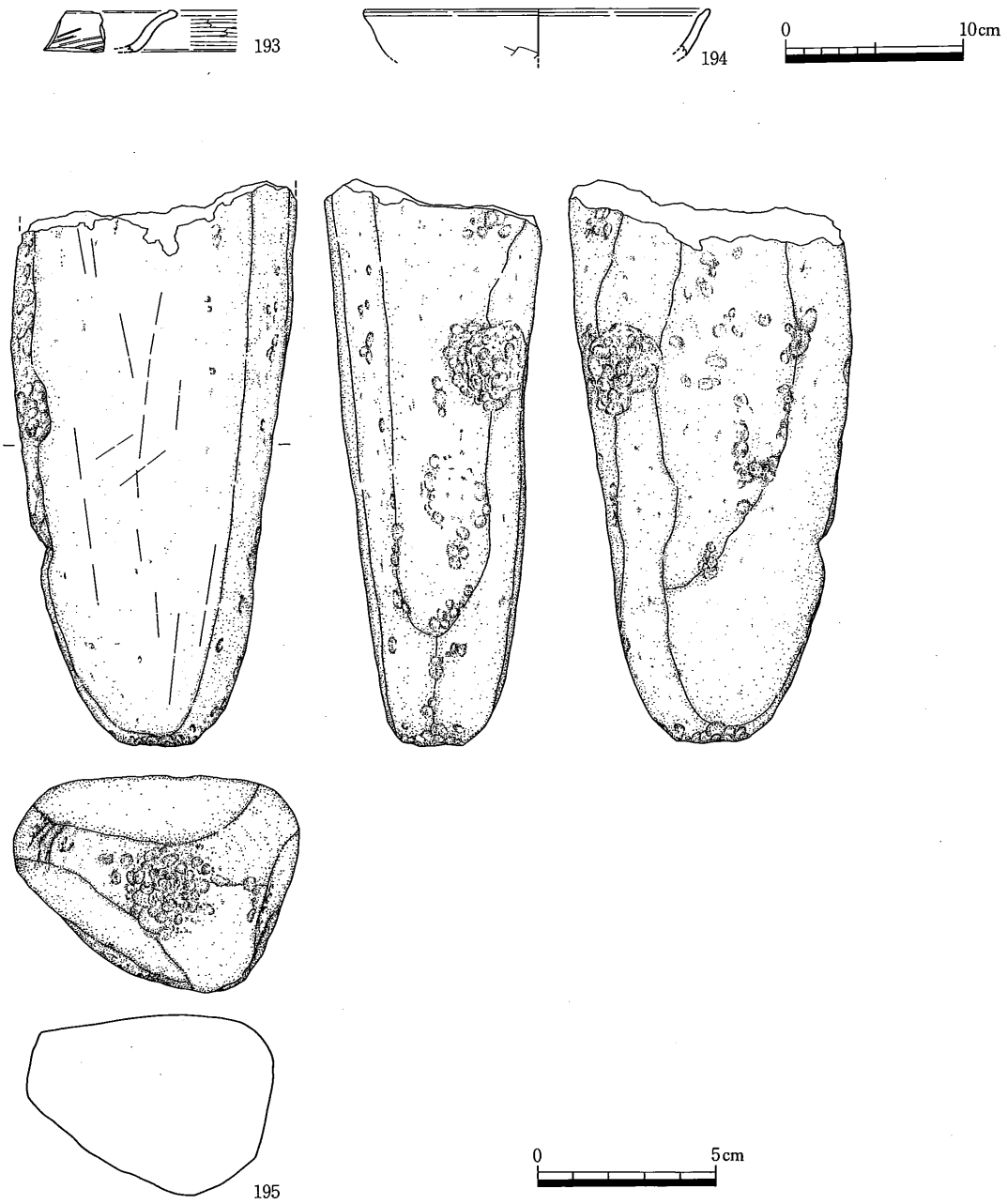
ＳＢ06（第48図、図版15）

３区④下段中央付近で検出した掘立柱建物である。方位はN47°Ｗで、現地割にほぼ平行する。等高線からみれば、やや周囲より高い位置に立地する。桁行３間（4.6m）、梁間１間（2.75m）で面積は12.65㎡である。柱間は桁方向が1.5～1.6m、東隅の柱穴が欠ける。柱穴の形状は円形で直径20～32㎝、深さ15～23㎝、埋土は暗褐灰色粗砂質土である。埋土中からは須恵器杯Ｂ、土器の小破片が出土した。土器の出土量が少なく、時期は明確にはしがたいが、出土遺物から時期は８世紀後半頃と思われる。

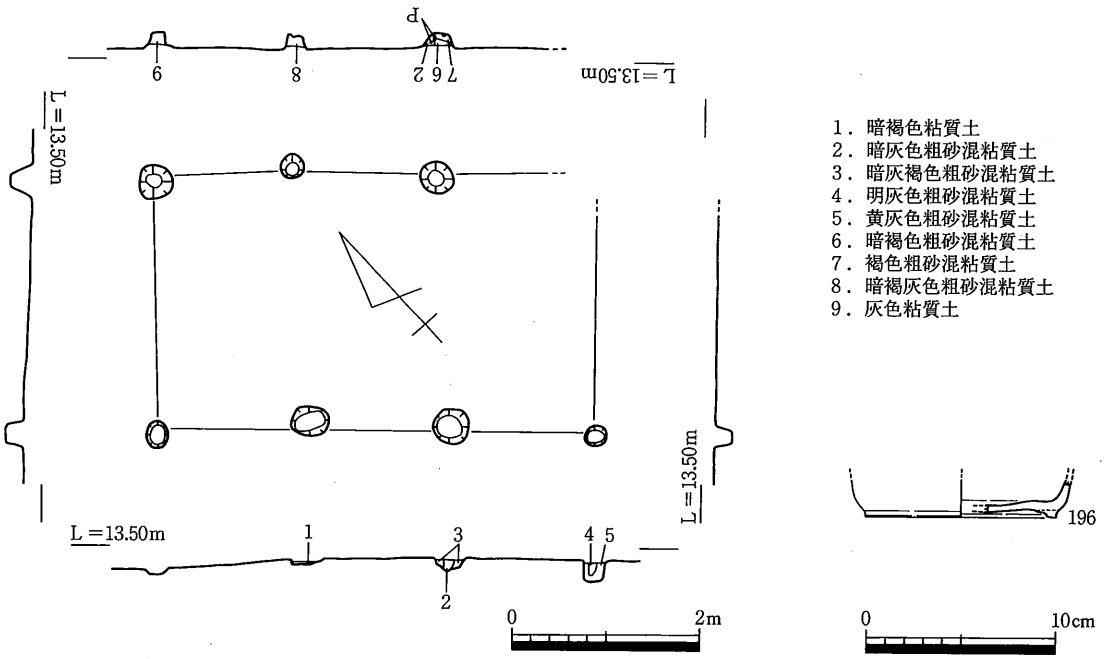
196は須恵器杯Ｂ。退化した高台が付く。

ＳＢ07（第49図）

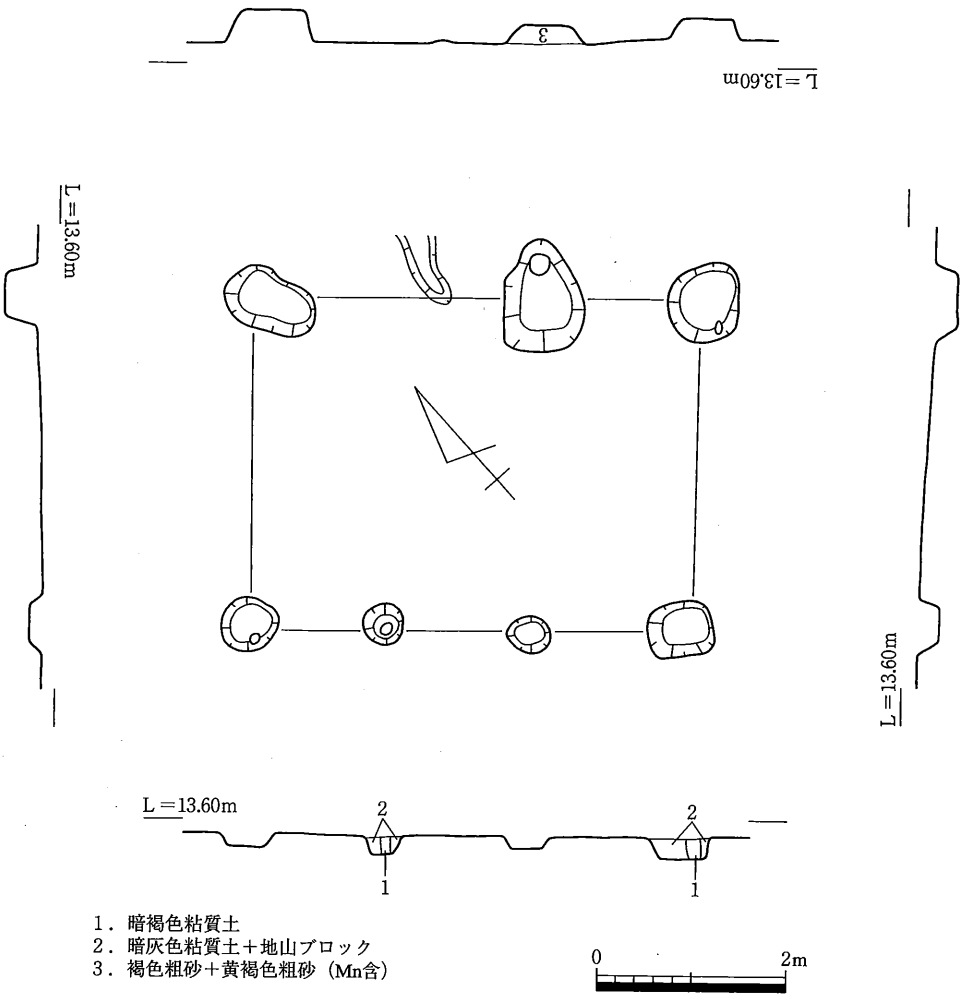
３区④下段東部で検出した掘立柱建物である。方位はN46°Ｗで、ＳＢ06とほぼ同じである。桁行３間（4.6m）、梁間１間（3.4m）で面積は15.64㎡である。柱間は桁方向が1.4～1.6m、梁方向が3.4mで、



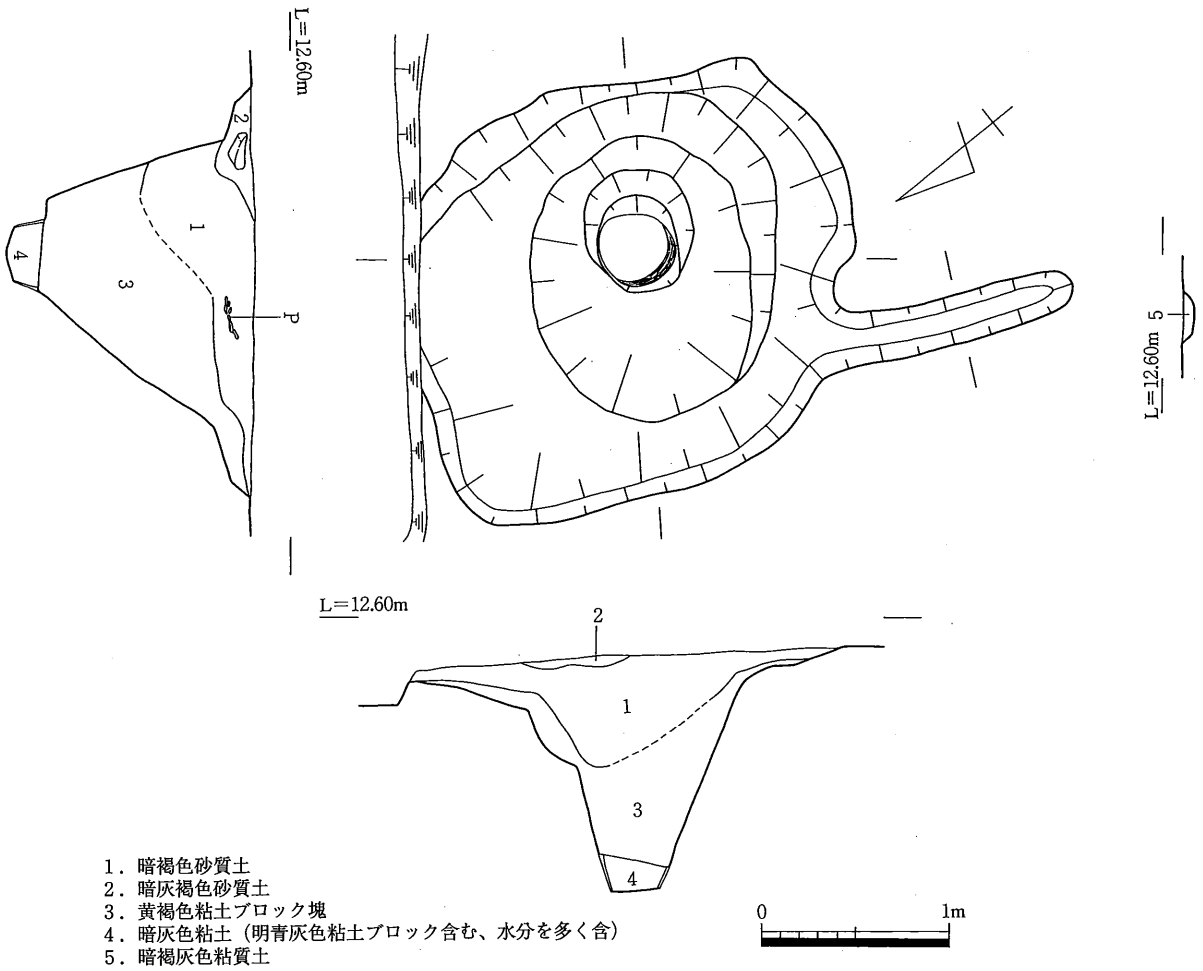
第47図　ＳＢ05出土遺物（１／４、１／２）



第48図　ＳＢ06平・断面図（１／80）出土遺物（１／４）



第49図　ＳＢ07平・断面図（１／80）



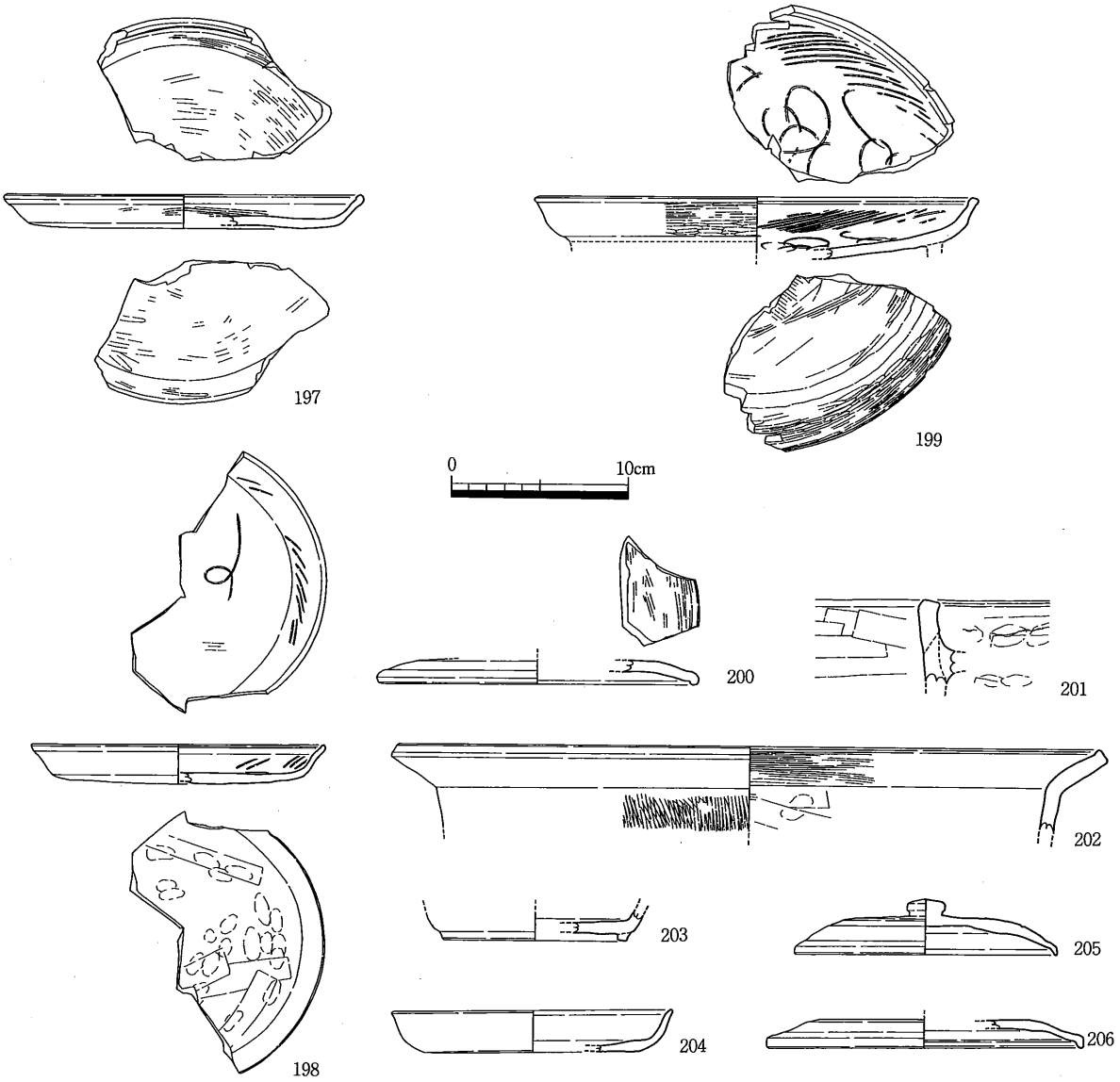
第50図　ＳＥ01平・断面図（１／40）

北側の桁方向の柱が１穴欠ける。柱穴の形状は円形または隅丸方形で直径40～80㎝、深さ20～35㎝、埋土は概ね明灰色粘質土である。埋土中からは底部内面に螺旋形の暗文を施した土師器が出土したほかは、土師器小片が出土しただけである。時期は出土遺物から８世紀代とした。

(2)井戸

ＳＥ01（第50・51図、図版15・25）

３区⑤上段中央付近で検出した井戸である。ほぼ円形で直径2.2～2.4ｍ、深さ1.33ｍで断面形は中央付近までは擂鉢状、それ以下は円筒形に近い。井戸の最下部には直径40㎝の曲物が１段設置されていた。埋土は、井戸枠内は水分を多く含むベタベタの暗灰色粘土、井戸の中位までは地山ブロックで埋められ、人為的に埋め戻されたことがわかる。地表面から60㎝程度までは暗褐色砂質土で漸次的に埋没していったと考えられる。井戸の北西方向から西側へ、(等高線に直交する山手側の方向）現地割に沿う方向で約2.5ｍの溝が延びている。幅25㎝、深さ６㎝、埋土は暗褐灰色粘質土である。井戸から山手側へ水を引くための溝にしては規模が小さく、単に井戸の埋没後で水溜まり状になっていたときに、そこへ周囲の水を排水するために掘られたものであろう。井戸の埋土中からは土師器皿・蓋・甕・羽釜Ｃ、須恵器蓋・杯Ｂが出土した。土師器甕・羽釜Ｃが10世紀代の遺物である他は８世紀後半頃の遺物であり、井戸が稼働していた時期もその頃と考えられる。



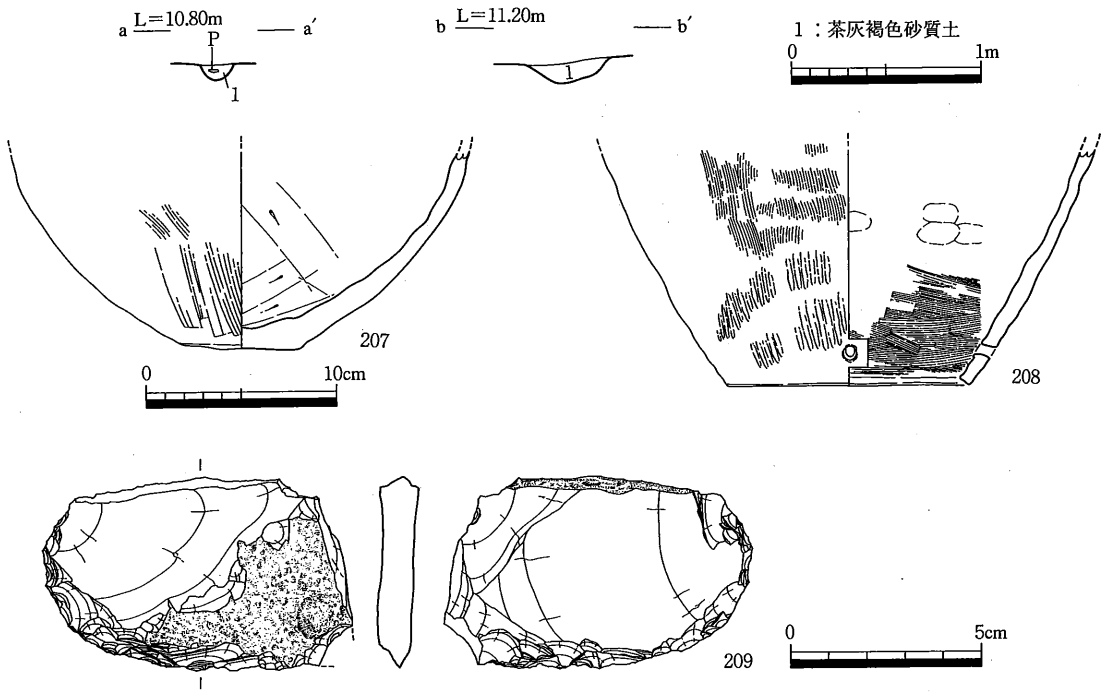
第51図　ＳＥ01出土遺物（１／４）

197～199は土師器皿。198・199は体部に斜放射文、底部に連弧文の暗文を持つ。199は体部外面にもヘラミガキする。197・199は口縁端部を内側へ丸めるようにして玉縁状にする。199は高台の付くものであるが、高台は完全に剥離していて、剥離痕跡を残すのみである。200は蓋。外面にヘラミガキを施す。小破片のため傾きがやや不正確。202は甕Ｄ。体部はまっすぐに延び、長胴形になるもの。201は羽釜Ｃ。小片。203～206は須恵器。203は杯Ｂ。204は皿。205・206は蓋。頂部はヘラ削りで調整する。土器はいずれも遺構の上半部から出土したもので、人為的に埋め戻したと考えられる層位より下からは出土遺物はなかった。

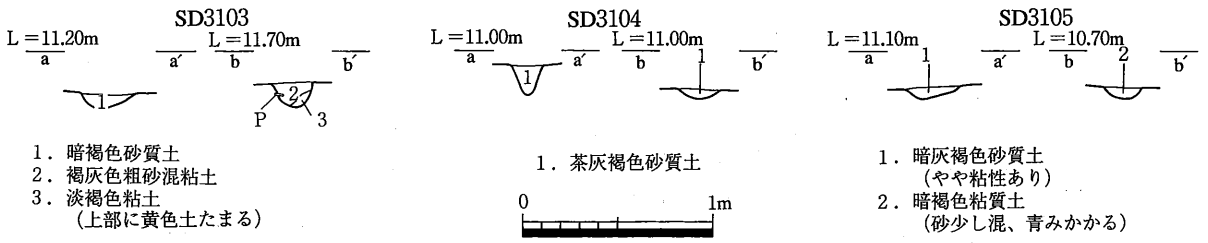
(3)溝

ＳＤ3119（第52図、図版25）

３区①北東部隅で検出した溝である。概ね現地割や等高線に平行・直交する方向で、調査区隅で平野の方向へ直角に曲がる。北側で隣接する１区②とは地表面の高低差が40cmあり、１区②ではかなり削平



第52図　ＳＤ3119断面図（１／40）出土遺物（１／４、１／２）



第53図　ＳＤ3103～ＳＤ3105断面図（１／40）

を受けている。溝の幅22cm、深さ10cm、埋土は灰褐色砂質土である。埋土中からは土師器甑が出土した。この溝は弥生時代後期後半の溝ＳＤ3120を切る。溝の時期は８世紀代と考えられる。

207は弥生土器底部。甕と思われる。外面にはハケ、内面はヘラ削りする。208は土師器甑。体部は開き気味に上がり、体部下端部に孔が１個所残存する。外面は下部は縦方向にタタキ痕が残り、その他はハケで仕上げている。209はスクレイパー。上部には自然面を残し、下部には簡単な刃部を作る。サヌカイト製。

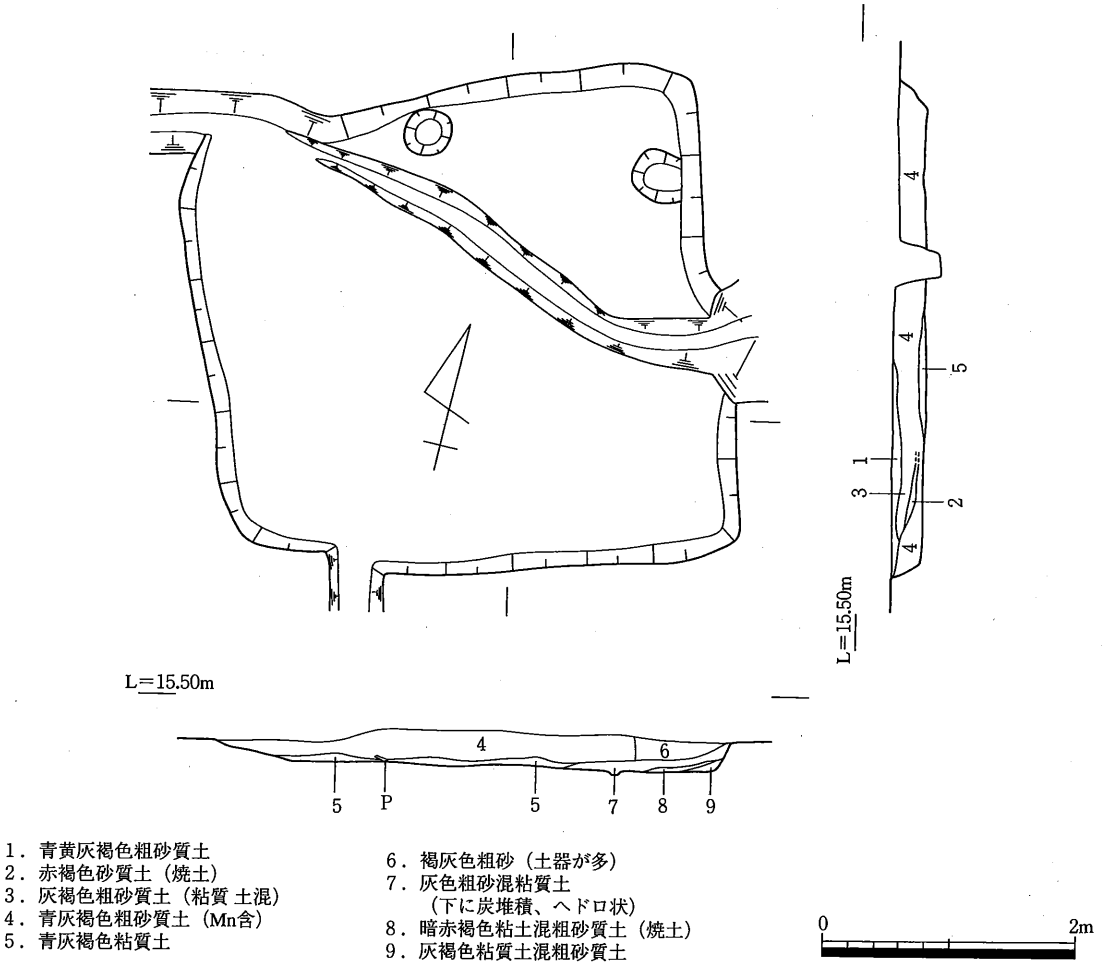
ＳＤ3103（第53図、図版15）

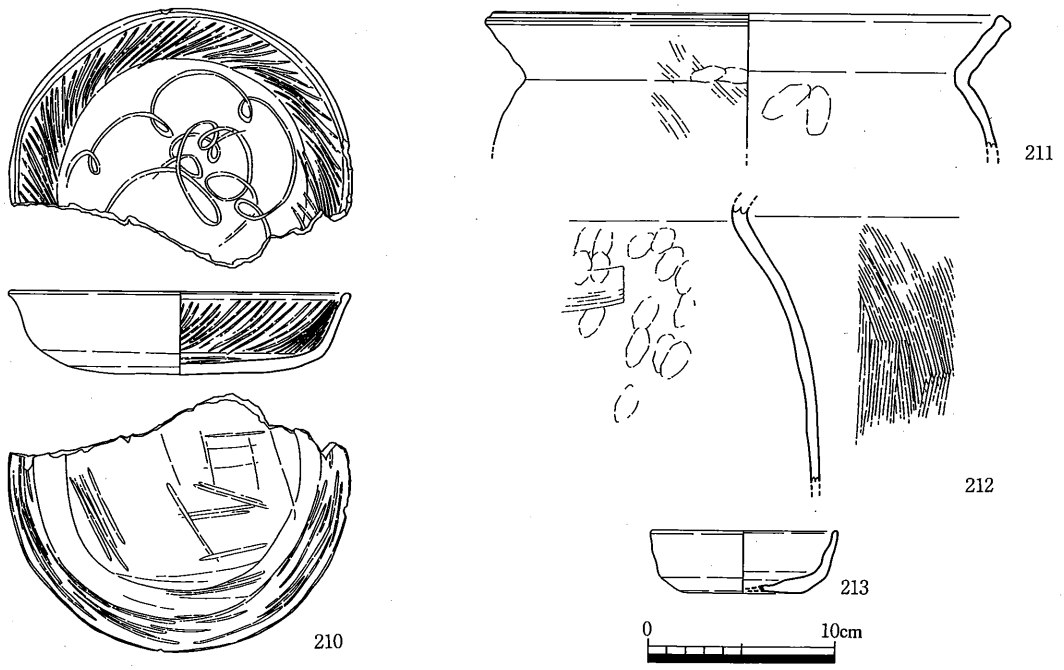
３区①中央やや平野部側（東部側）で検出した。ＳＤ3119とほぼ同じ方向である。幅28cm、深さ７cm、埋土は褐灰色粗砂混粘土である。出土遺物は土師器か弥生土器か区別のつかない土器小片が出土したのみであったが、ＳＤ3104・3105・3119との形状や規模の類似性からこれらと同時期とした。

ＳＤ3104（第53図）

ＳＤ3103の南側約1.5mで検出した溝である。方向は概ねＳＤ3103と同じであるが、蛇行気味に流れ、西側ではＳＨ09と重複する部分で北へわずかに屈曲し、消失する。幅24cm、深さ６cm、埋土は茶灰褐色砂質土である。埋土中からは土師器小破片が出土したのみであったが、この溝はＳＨ09に切られており、８世紀代の溝としておく。

ＳＤ3105（第53図）





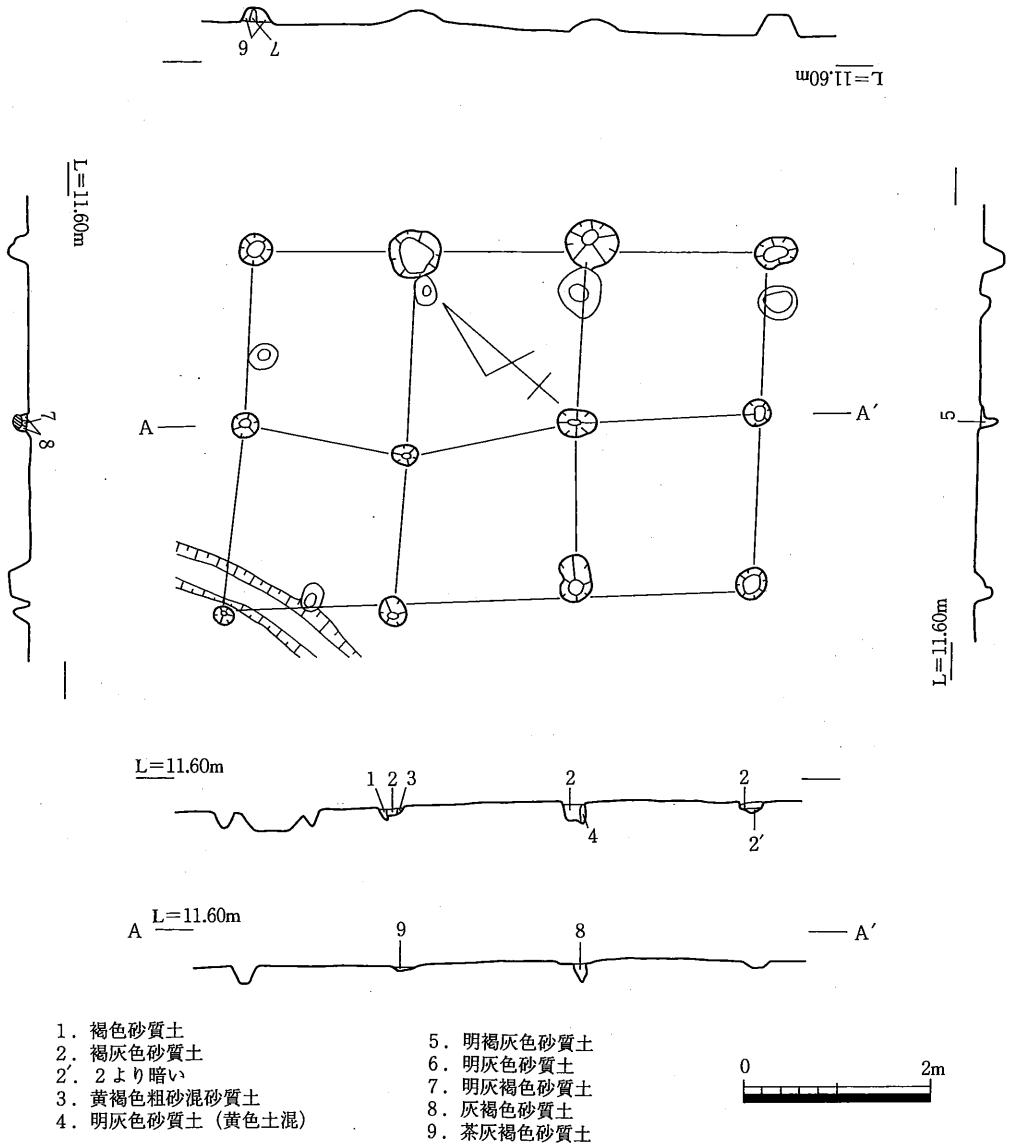
第54図　ＳＸ01平・断面図（１／60）出土遺物（１／４）

3区①中央付近ＳＤ3104の南約１ｍの位置で検出した。方向は概ねＳＤ3103・3104と同じであるが、溝の西半でやや南へ振り、ＳＨ09と重複する部分で南へわずかに屈曲して消失する。幅28cm、深さ６cm、埋土は暗灰褐色砂質土である。埋土中からは土師器の小片が出土しただけであった。しかし、この溝がＳＨ09に切られることから、一応８世紀代の溝としておく。

(4)性格不明遺構

ＳＸ01（第54図、図版15・25）

４区①北東隅で検出した隅丸方形の竪穴状遺構である。傾斜の変換点で、ここより西側は急傾斜地となる。隅丸方形で１辺４ｍ、深さ26cm、埋土は青みがかった灰褐色粗砂質土で遺構の東部には炭や焼土の堆積層がある。壁溝や炉跡は確認できず、北側でピットを２穴確認したが、主柱穴を構成するものかどうかは不明である。埋土中からは土師器杯・甕、須恵器杯Ｇが出土している。土師器杯は内面に斜放射＋連弧文の暗文を持つものである。７世紀後半～８世紀前半頃と考えられる。



第55図　ＳＢ08平・断面図（１／80）

210～212は土師器。210は杯。口縁端部内面にはわずかに沈線状に巡る。内面体部には斜放射、底部には螺旋文を入れる。外面にはヘラミガキを入れる。211・212は甕。213は須恵器杯Ｇ。

３．平安時代の遺構・遺物

(1)掘立柱建物

ＳＢ08（第55図）

３区②北東部で検出した総柱建物である。桁行３間（5.5m）、梁間２間（3.0～4.0m）で、主軸方位はＮ40°Ｗである。柱間は桁行は1.7～2.0m、梁間は1.75～2.0mである。南東側の梁間はやや小さく、やや歪な建物である。柱穴は円形で、直径30～40㎝、深さ10～22㎝、埋土は褐灰色砂質土などである。ＳＢ09と柱筋をきれいに揃える。ＳＢ09との距離は75㎝と非常に近接する。ピットの埋土中からは土師器羽釜、須恵器杯などが出土した。時期は、出土遺物からは10世紀前半頃を考えられようが、同時存在と考えられるＳＢ09は11世紀代と考えられ、ＳＢ08もＳＢ09と同時期であろう。

ＳＢ09（第56・57図）

ＳＢ08と近接して検出した掘立柱建物である。ＳＢ08と主軸方位を揃え、南東の柱筋を揃える。桁行６間（11m）、梁間３間（６ｍ）で、北東側に庇を持つ。柱間は概ね桁行が1.6～2.3m、梁間が1.8～2.4ｍである。柱穴は円形または楕円形で、直径30～60㎝、深さ15～40㎝で埋土はおもに褐灰色砂質土である。ＳＢ08との建物配置の計画性からＳＢ08と同時存在は間違いないと考えられるが、ほぼ同時期の開削と考えられるＳＤ01とは方向が異なり、位置的にも近接することから、ＳＤ01とはやや時期がずれると思われる。柱穴埋土中からは土師器杯・羽釜Ａ、須恵器杯が出土した。時期は11世紀代のものでＳＤ01より新しいと思われる。

214～220はＳＰ194の柱穴から、221～224はＳＰ206の柱穴から、225・226はＳＰ188の柱穴から出土した。214～218・220～226は土師器。220以外は杯。小片が多いがいずれも回転台土師器と考えられる。216は体部が大きく開く。218は円盤状高台底部。219は須恵器。円盤状高台底部。全面に火襷がかかる。220は土師器羽釜Ａ。口縁端部は上方へ引き上げ、体部は内外面とも板ナデで調整する。

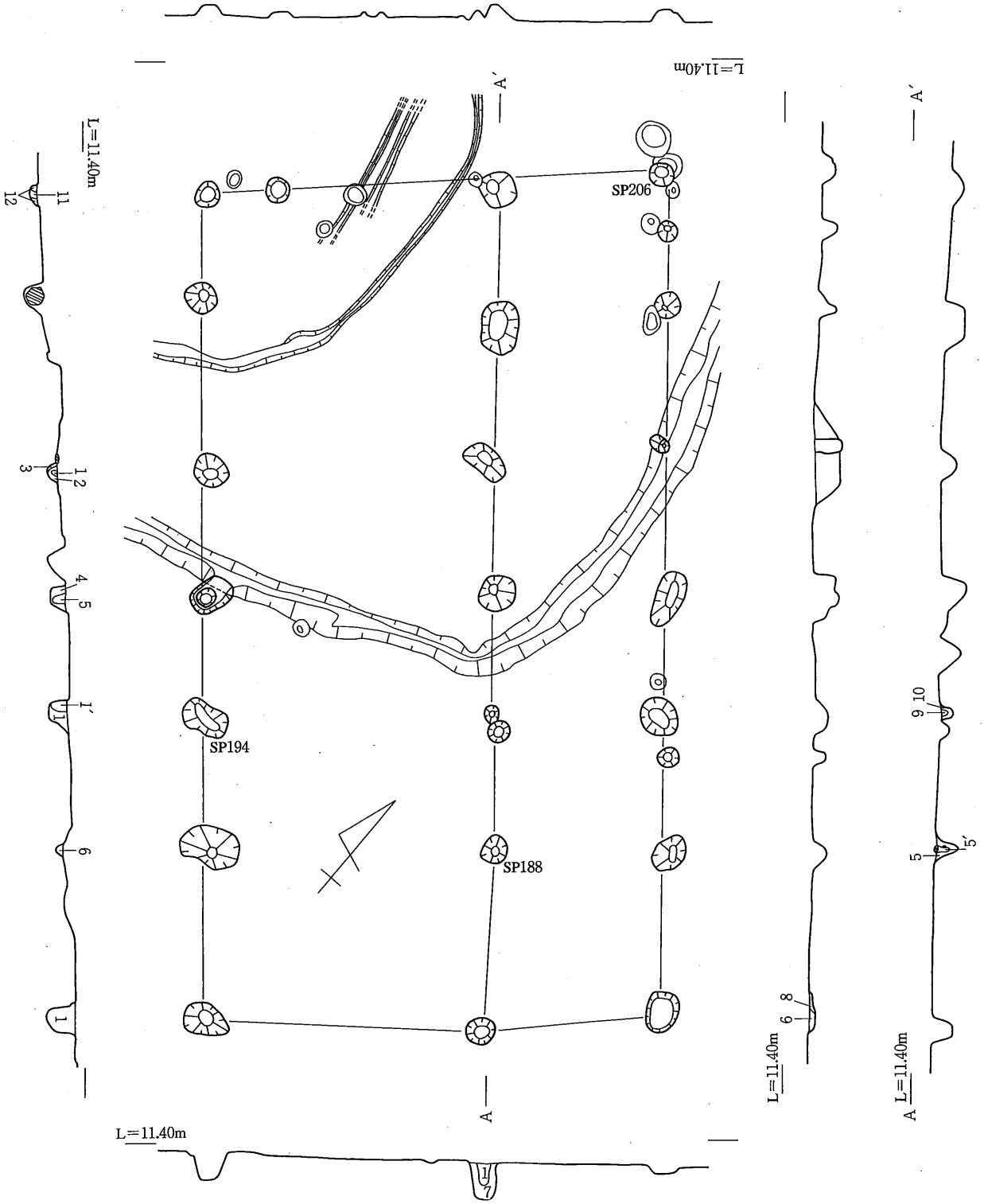
ＳＢ10（第58図、図版11）

１区②と３区①に跨って検出した。桁行３間（5.7m）、梁間２間（4.0m）、面積は22.8㎡である。方位はＮ67°Ｅである。柱間は桁行が1.6～2.1m、梁間が1.7～2.3mである。柱穴は円形または隅丸方形で大きさは１辺50㎝前後、中間の柱穴はやや小さめである。埋土は主に褐灰色砂質土である。柱穴埋土中からは土師器小破片とともに鉄滓が出土した。当遺跡の鉄滓は10世紀前半代の遺構に限られることからこの建物は10世紀前半代に比定できる可能性があろう。

ＳＢ11（第59図、図版15）

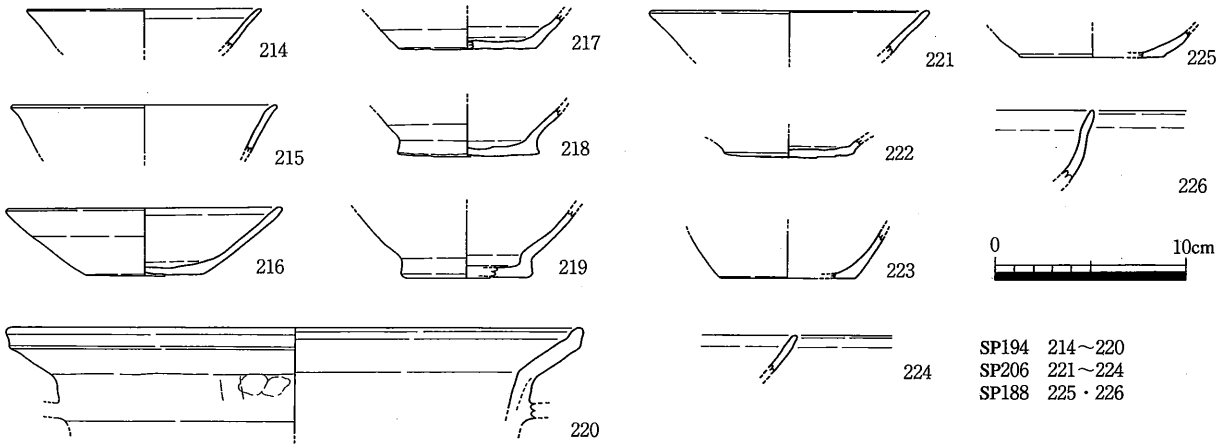
１区②北東端で検出した総柱建物である。桁行３間（4.2～4.35m）、梁間２間（3.9～4.15m）で、面積は17.2㎡、方位はＮ81°Ｅである。柱間は桁行で1.35～1.6m、梁間で1.95～2.15mである。柱穴は円形で直径20～28㎝、深さ９～32㎝、埋土は主に褐灰色粘質土である。柱穴埋土中からは土師器甕、杯などが出土した。時期は概ね10世紀代と考えられ、ＳＢ10と同じくらいと考えられる。

227は土師器甕。やや胴が張るもので、10世紀頃と考えられる。

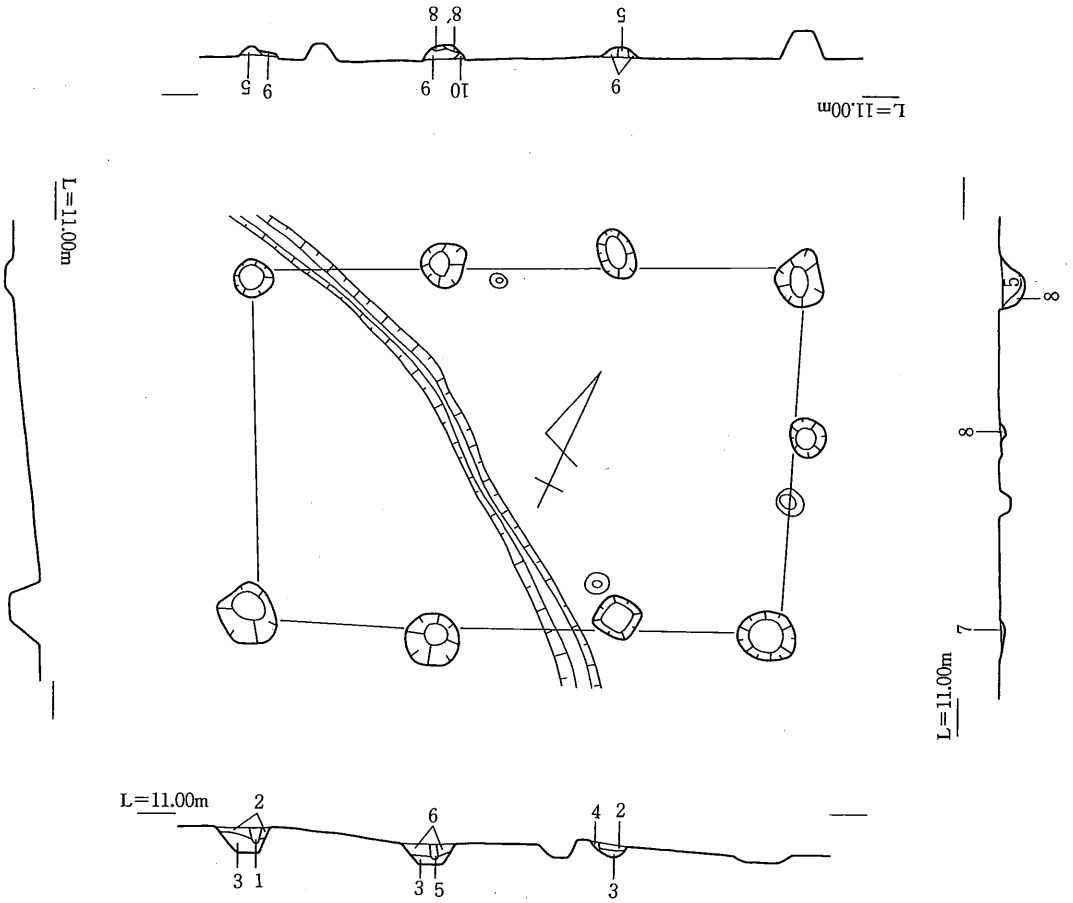


1．褐灰色砂質土
1′．1より少し明るい
2．黄灰褐色砂質土
3．灰色砂質土
4．黄灰砂質土（Mn混）
5．灰褐色砂質土
5′．5よりやや青っぽい
6．茶灰褐色砂質土
7．明灰色砂質土（黄色土混）
8．明茶褐色砂質土
9．黒褐灰色粘質土
10．明黄灰褐色砂質土
11．褐灰色粗砂質土
12．褐茶灰色粗砂質土

第56図　ＳＢ09平・断面図（１／80）

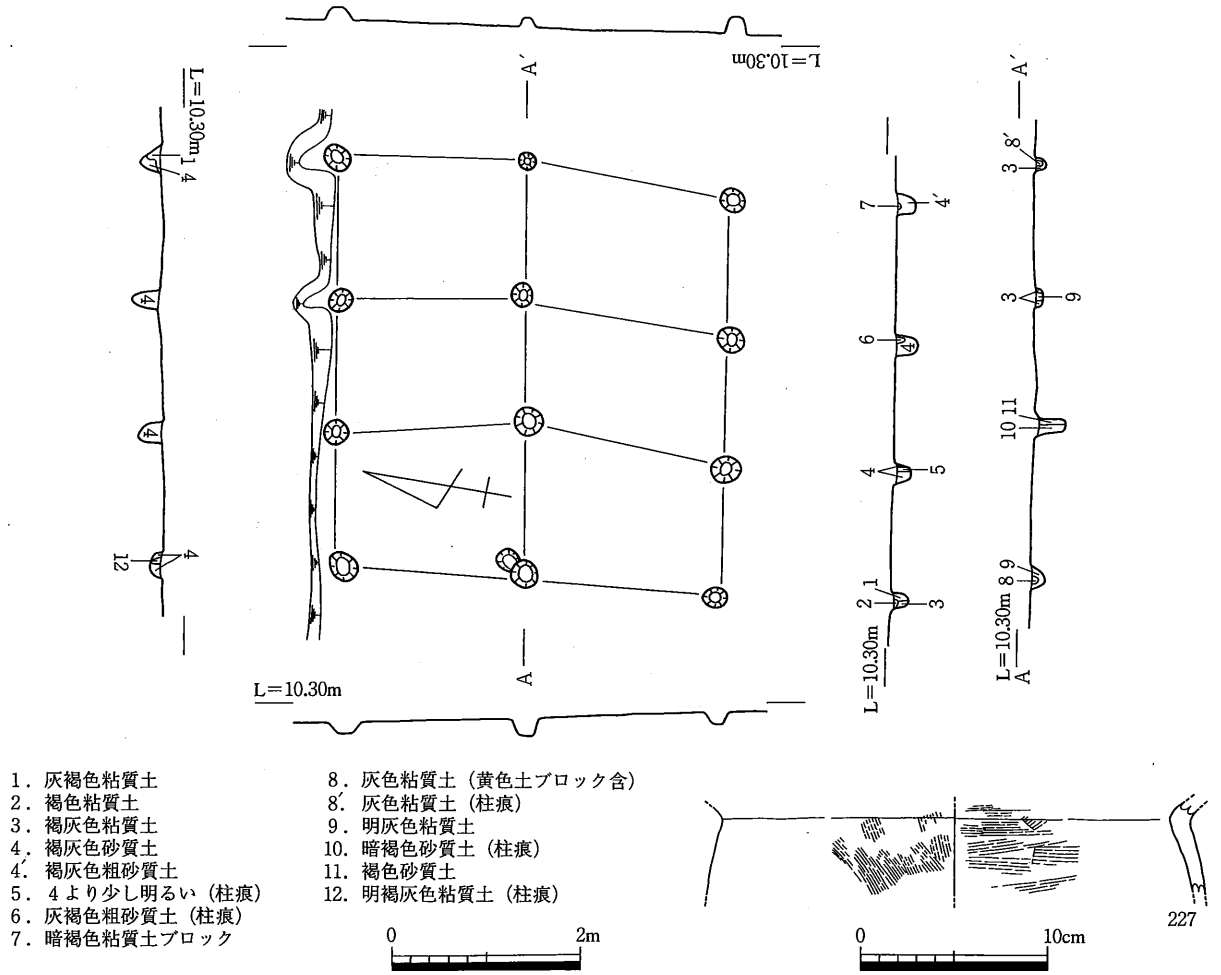


第57図　ＳＢ09出土遺物（１／４）



1．褐灰色粗砂質土（柱痕）
2．褐灰色粗砂質土（Mn含）
3．灰褐色粘質土混砂質土
4．灰褐色砂混粘質土（柱痕）
5．暗褐灰色砂質土
6．褐灰色砂質土
7．灰色粗砂質土
8．暗褐色砂質土
8′．８で黄色土ブロック多量に含む
9．灰色砂質土（黄色土ブロック混）
10．灰色粘質土

第58図　ＳＢ10平・断面図（１／80）



第59図　ＳＢ11平・断面図（１／80）出土遺物（１／４）

ＳＢ12（第60図、図版11）

１区②と３区①に跨って検出した掘立柱建物である。桁行３間（6.7m）、梁間１間（3.45m）で面積は23.1m²、方位はN43°Ｅである。柱穴は円形で直径18～27cm、深さは山側で28cm、平野部側で６～19cmである。平野部側は後に削平された可能性もある。ＳＢ10と重複するが、柱穴の切り合い関係はなく、前後関係は明らかではないが、柱穴がＳＢ10より小さいこと、ＳＢ08・09と柱筋が揃うことなどを考えあわせれば、ＳＢ10より新しいのではないかと思われる。柱穴内からは土師器杯の小片が出土している。

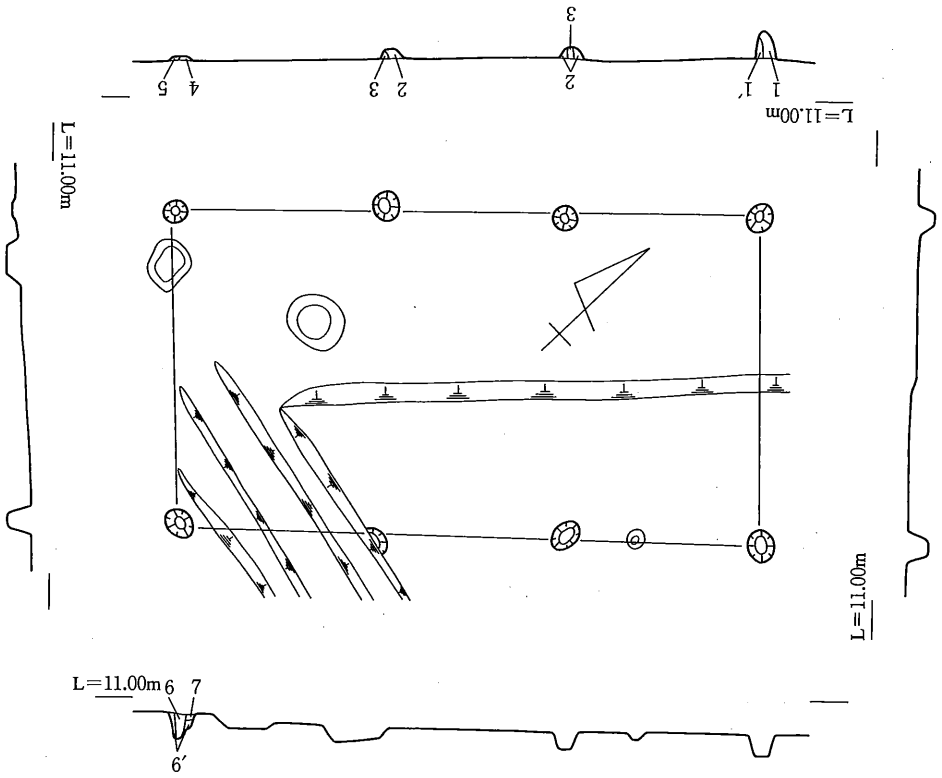
228は土師器杯底部。底部をヘラ切りする。回転台土師器になると考えられる。

ＳＢ13（第61図、図版15）

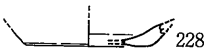
３区⑤下段（北東部）で検出した。方位はN53°Ｅで、現地割にだいたい沿う。桁行３間（6.25m）、梁間１間（1.12～1.18m）で面積は8.2m²である。柱穴は円形で直径13～26cm、深さ８～16cmで、埋土は灰褐色砂混粘質土である。柱穴の埋土中からは土師器甕または鍋、須恵器小片などが出土した。遺構の時期は不明確ではあるが、一応土師器甕の時期である10世紀頃としておく。

ＳＢ14（第62図）

３区⑤下段南西端で検出した。２間分（3.4m）検出し、残りは調査区外の私道へ延びると考えられる。



1．暗褐灰色粘質土
1′．1より少し暗い（柱痕）
2．暗灰色粘質土
3．灰色砂混粘質土
（黄灰色土ブロック多）
4．灰色粗砂質土
5．灰褐色粗砂質土
6．暗灰褐色砂質土
6′．6より少し明るい
7．黄灰色土（ベース）ブロック



第60図　ＳＢ12平・断面図（１／80）出土遺物（１／４）

これが桁行になるか梁間になるか不明である。方位は検出分で判断する限りＮ53°Ｅで、概ね現地割に沿う。柱間は1.7m、柱穴は円形で直径18～30cm、深さ８～10cm、埋土は灰褐色砂混粘質土である。柱穴埋土中からは土師器椀・杯・甕、須恵器片が出土した。時期は11世紀中～後半と考えられる。

229は土師器杯。230は円盤状高台を持つ土師器杯。底部の一部に指押さえ痕があるが、基本的には回転ナデで仕上げる。

ＳＰ3101（第63図）

ＳＢ09北西隅のピットに接して検出したピットである。ＳＢ09との切り合い関係はない。直径50cm、深さ12cmである。埋土中からは土師器羽釜が出土した。

235は土師器羽釜。端部は内面に折り曲がり、鍔は上方へ向く。12世紀前半。

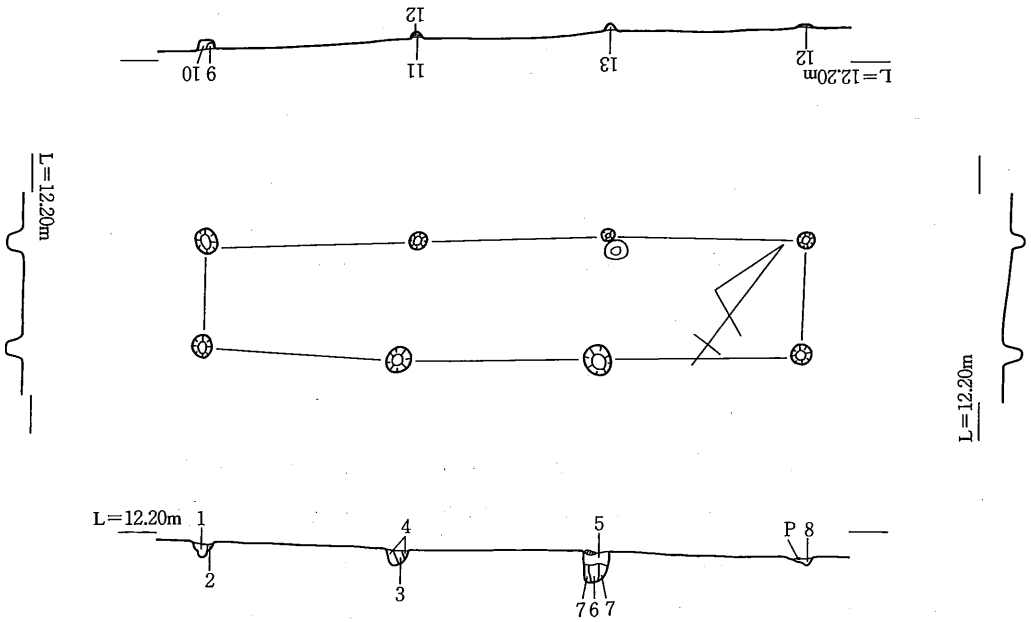
ＳＰ3201（第63図）

ＳＤ3209の山側で検出したピットである。直径30cm、深さ13cmである。埋土中から須恵器杯が出土した。８世紀後半～９世紀前半。

231は須恵器杯Ｂ。高台は完全に剥離しており、裏面に色の薄い剥離痕を残すのみである。

ＳＰ3202（第63図）

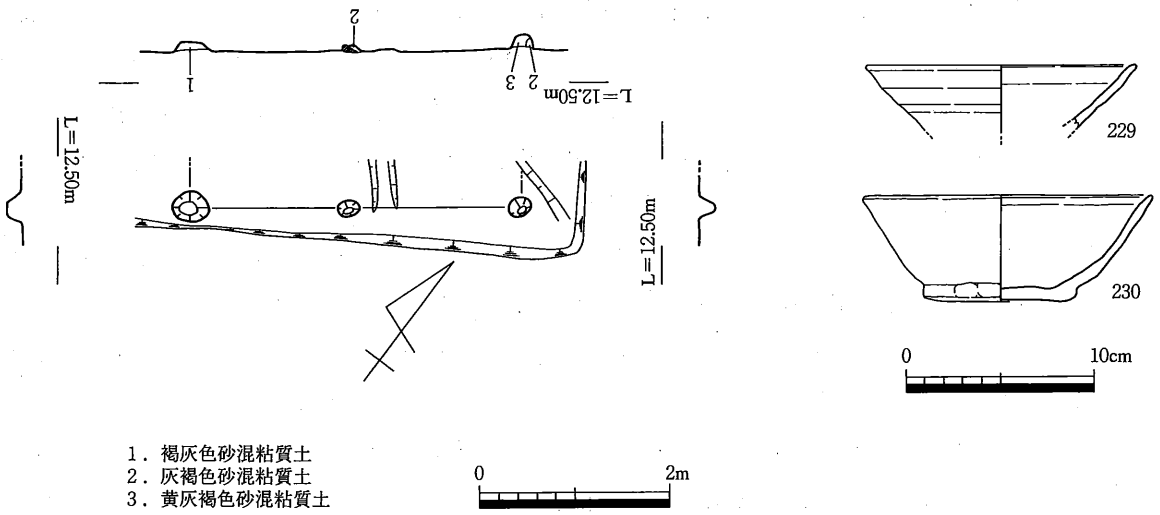
ＳＤ3209私道側で検出したピットである。直径45cm、深さ17cmである。埋土中からは土師器杯が出土した。



1．暗灰色砂混粘質土
2．暗灰褐色砂混粘質土
3．暗褐色砂混質土（黄色土混）
4．灰色砂混粘質土（暗褐色土混）
5．明灰色砂混粘質土
6．灰褐色粗砂混粘質土（黄灰色粘土ブロック含）
7．黄灰色粗砂混粘質土（灰褐色土ブロック含）
8．暗褐色粘質土
9．褐灰色粘質土
10．灰色粘質土
11．明褐灰色砂質土（黄色土混）
12．褐色砂質土
13．明灰褐色粗砂混粘質土

0　2m

第61図　ＳＢ13平・断面図（１／80）



1．褐灰色砂混粘質土
2．灰褐色砂混粘質土
3．黄灰褐色砂混粘質土

0　2m

第62図　ＳＢ14平・断面図（１／80）出土遺物（１／４）

232は土師器杯。底部はヘラ切りで回転台土師器である。９世紀後半～10世紀前半。

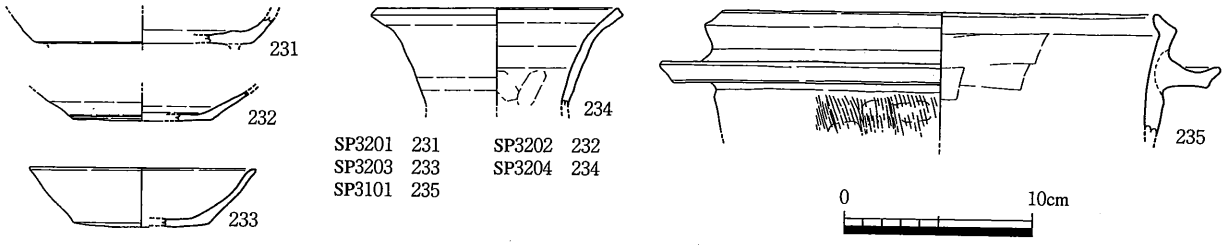
ＳＰ3203（第63図）

３区②北西部、ＳＨ04の東側で検出したピットである。直径35cm、深さ17cmである。

233は土師器杯Ａ。体部はやや膨らみ気味に立ち上がり、口縁端部は緩く外反する。10世紀前半頃か。

ＳＰ3204（第63図）

３区②ＳＢ09の北西隅近くで検出したピットである。ＳＢ09を構成するピットの一つである可能性もある。直径20cm、深さ７cmである。234は須恵器壺。斜め上方に立ち上がる頸部で肩部に丸みを持つ体部が付く。全体にゴマ状降灰がみられる。９世紀後半。



第63図　ＳＰ3201～ＳＰ3204、ＳＰ3101出土遺物（１／４）

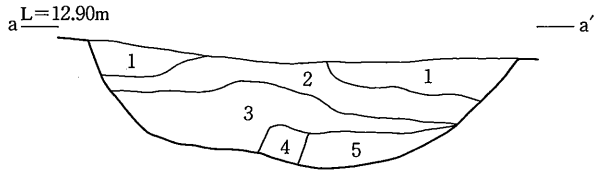
(3)溝（幹線水路）

ＳＤ01（第64～70図、図版16・25～28・80・81）

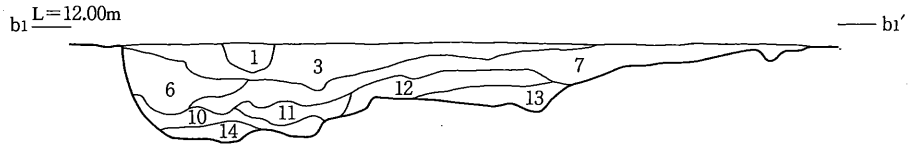
３区③から３区①にかけて丘陵部から平野部まで流れる溝である。３区①に南側に隣接する２区④では不明瞭であったが、ＳＤ2401へ続く可能性が高い。川津東山田遺跡Ｉ区と川津一ノ又Ⅳ区の境には少なくとも古代の一時期に水田域が広がっており、この溝はそこへ続いていた可能性が高いと思われる。延長約85ｍを検出し、高低差は約２ｍを計る。溝の幅は2.4～4.8ｍ、深さは概ね70cm前後、３区②部分までは下部に砂層が多く、一定量の水流があったようである。方位は概ね等高線に直交する方向である。この時期の灌漑水路としての役割を果したと考えられる。

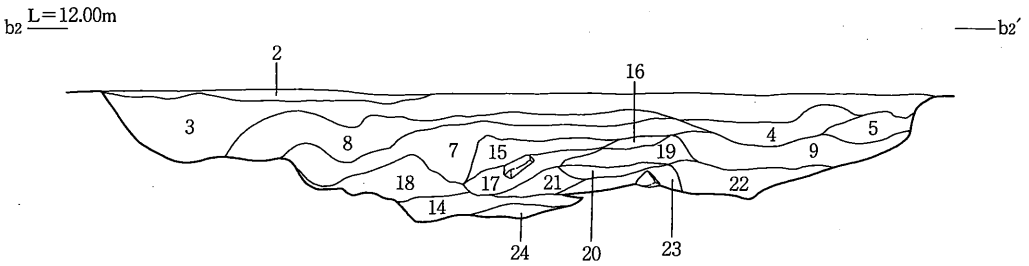
同じ溝ではあるが、延長距離が長いので、区ごとに分けて掲載した。236～246は最も丘陵部側の３区③（ＳＤ01Ａ）から出土した。236は皿。摩滅気味で底部はヘラ切り。237は土師器杯Ｄ。摩滅気味で底部には反時計回りのヘラ切り痕跡を残す。238は椀。内外面ともヘラミガキし、外面の高台と体部の境は指押さえ痕跡を残す。体部の下の方には粘土の継ぎ目が見える。底部外面はナデがきれいに及ばず、クラックが残る。吉備系土師器椀。240・241は羽釜Ｃ。240は鍔が下へ垂れ、足釜になるものか。239は甕Ｄ。体部は丸みを持たず、長胴型になる。口縁端部は上部へ引き上げられる。242は須恵器杯。焼成はやや悪い。243は黒色土器Ｂ。内外面ともヘラミガキが施され、外面の体部と底部の境付近はヘラミガキの前にヘラ削りをしているようである。内面体部のヘラミガキは４～５分割と思われる。底部には時計回りのヘラ切り痕跡が観察できる。244・245は平瓦。いずれも須恵質である。244は凸面に縄タタキ痕跡が斜め方向に残り、下部から斜め上方に交互にタタキを施したことがわかる。端面の中位まで布目痕がかぶる。245は凹面に糸切り痕跡（コビキＡ）が残る。246は扁平片刃石斧。片麻岩製。刃部に擦痕が顕著に残り、両側縁と上部に敲打痕が残る。

247～296は３区②（ＳＤ01Ｂ）部分で出土した遺物である。247～255は土師器杯。回転台土師器254・255は円盤状高台を持つ。255は口縁端部に煤が付着する。256は椀。高台は体部と底部の境に付き、体部はまっすぐ立ち上がりそうである。257～260は甕Ｄ。いずれも口縁端部を上方へ引き上げる。257～259は寸胴の体部を持ち、260は体部にやや丸みを持つ。内面は横方向のハケ、外面は縦方向のハケを施す。261～264は羽釜Ａ。いずれも口縁端部を上方へ引き上げ、鍔はやや短めで、わずかに上方に向ける。概して薄い。265は羽釜Ｃ。口縁端部、鍔端部とも四角く作る。266～268は竈。266・267は鍔部と受け部の間がほとんどない。267は鍔端部を四角くする。268は底部。269は飯蛸壺。上部は窪ませる。270は須恵器杯。焼成はやや悪く、内外面に火襷がかかる。底部には板圧痕が残る。271は皿。焼成はやや悪い。272は蓋。内外面に重ね焼きの痕跡が残り、外面の重ね焼きの場所には土器の溶着痕が残る。273～274は壺。273は長頸壺体部。肩部に稜線を持ち、その部分に沈線を巡らせる。体部の上部の方には絞り目がある。長い頸部が付く。体部下部にはヘラ削り痕が残る。274は外面に自然釉がかかり、内

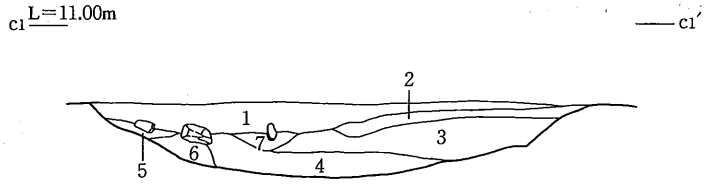


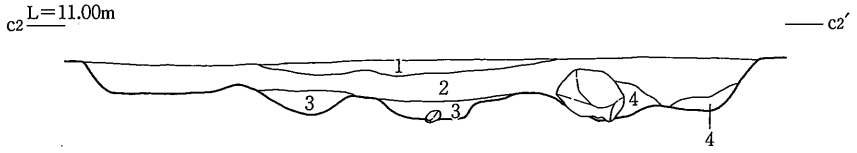
1．茶灰褐色粗砂質土
2．灰色粗砂混粘質土（Fe多、赤茶褐色土多く混）
3．青灰色粗砂混粘土
4．褐色砂
5．青灰色砂（礫混）



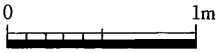


1．灰色砂質土（少し褐色っぽい、下に炭混）
2．明灰褐色砂質土（Mn混）
3．茶灰褐色砂混粘質土
4．３より茶色が強く色が暗い
5．４より茶色が弱く灰色が強い
6．茶灰褐色粗砂混粘質土
7．褐灰色混砂質土
8．褐灰色粗砂（茶灰色土混）
9．灰褐色粗砂混砂（少し茶色かかる）
10．茶褐灰色粘質土混砂質土
11．茶灰褐色粗砂
12．明褐灰色砂質土
13．明黄褐灰色砂質土（礫多、土も多）
14．青褐灰色砂質土（礫混、水分多くややベタつく）
15．明褐色砂質土（礫混）
16．黄褐白色粗砂
17．明青灰褐色砂質土（礫多）
18．青褐灰色粗砂礫
19．灰褐色粗砂質土
20．褐白色粘質土混細砂
21．明灰褐色砂質土＋黄褐色砂質土、ラミナ状
22．青褐灰色粘質土混砂質土（濁っている）
23．明褐色粗砂・砂
24．明褐色粗砂＋礫

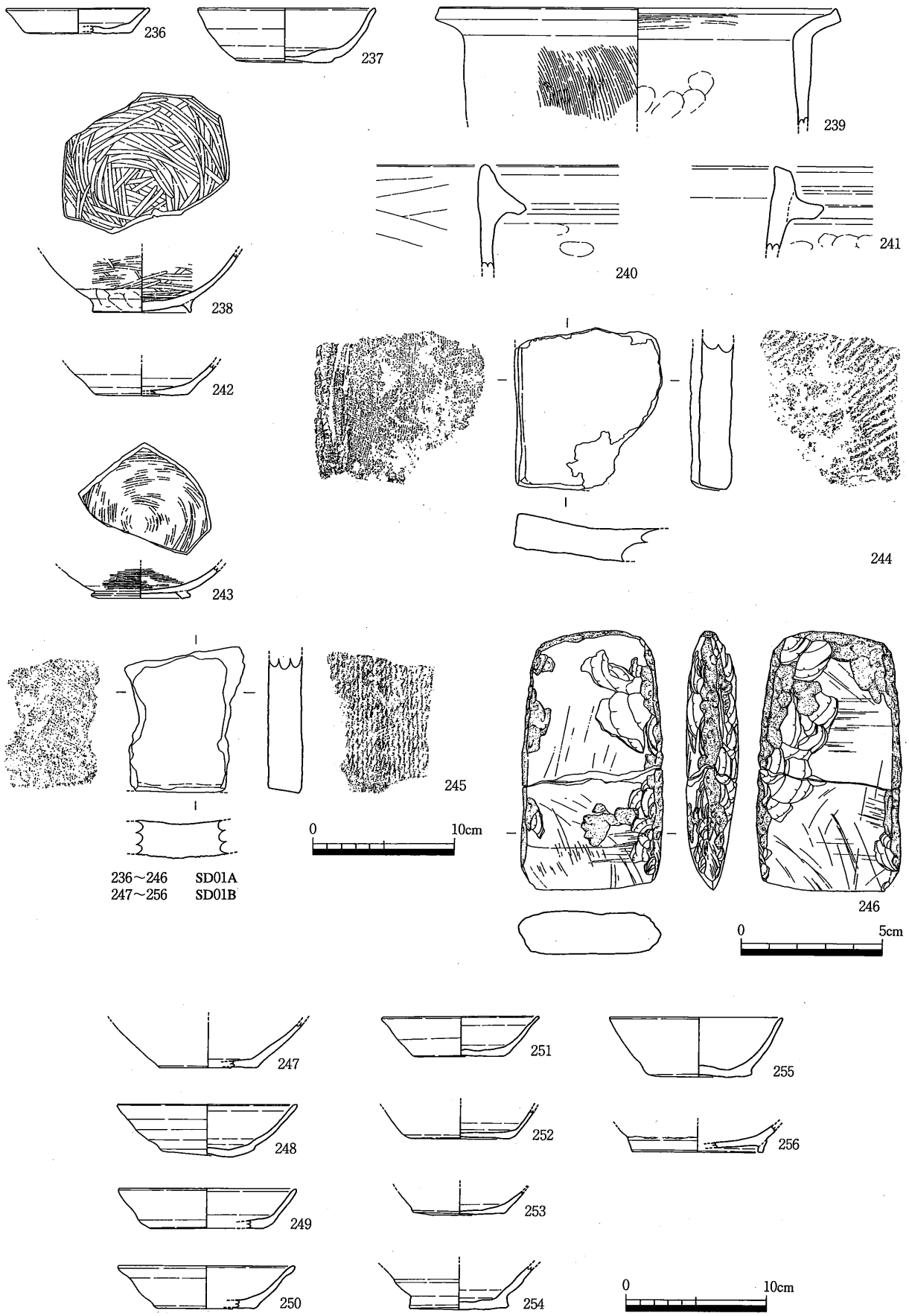




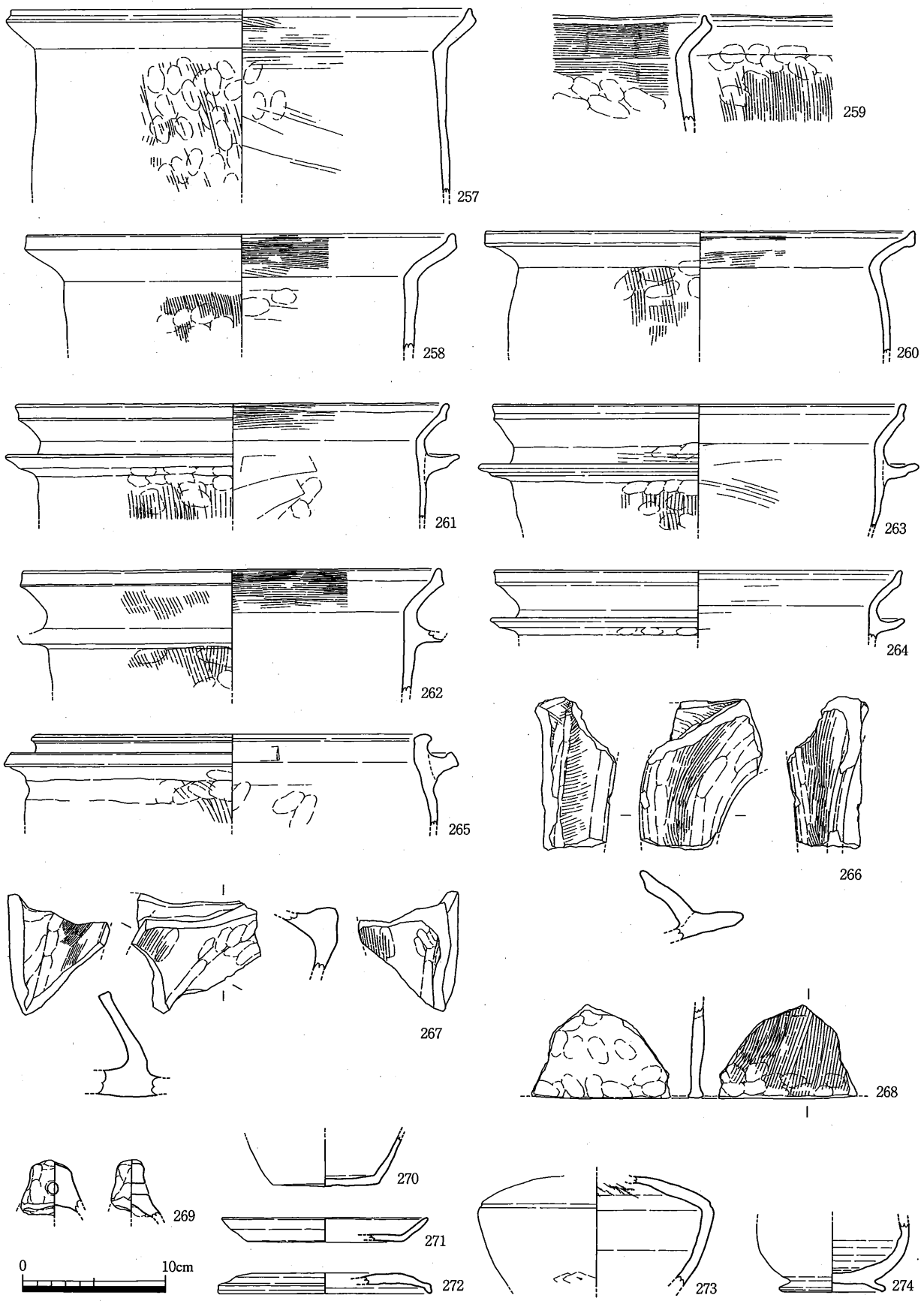
1．褐灰色砂混粘質土
2．暗青褐灰色砂混粘土（砂多）
3．褐灰色砂混粘質土（赤茶褐色上たまる）
4．灰色粘土混砂質土（地山Ｂ含、やや褐色かかる）
5．明青灰色砂質土
6．灰色砂質土（粘性あり）
7．明褐色砂質土（所々黄色がかる）



第64図　ＳＤ01断面図（１／40）



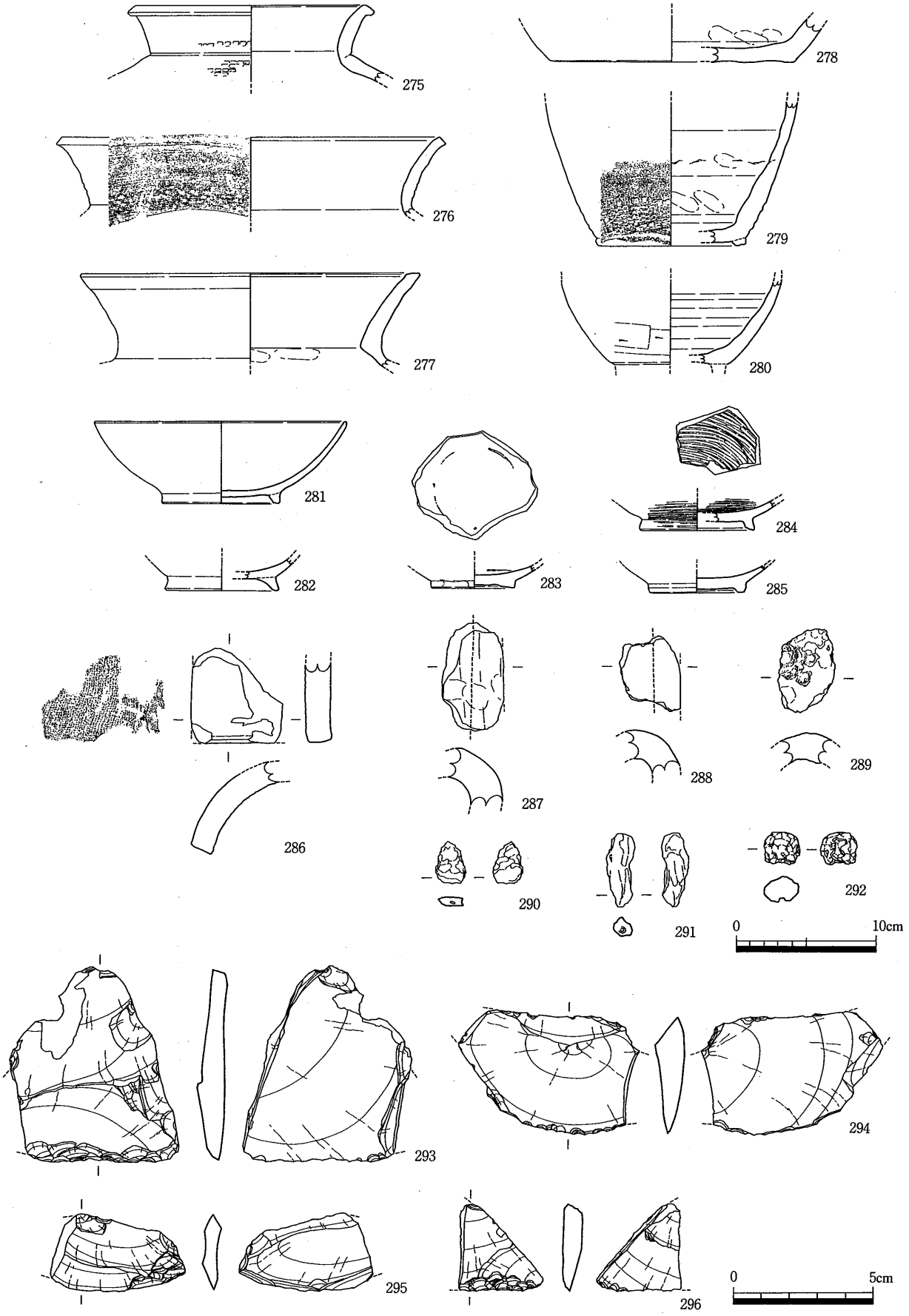
第65図　ＳＤ01（Ａ・Ｂ）出土遺物(1)（１／４、１／２）



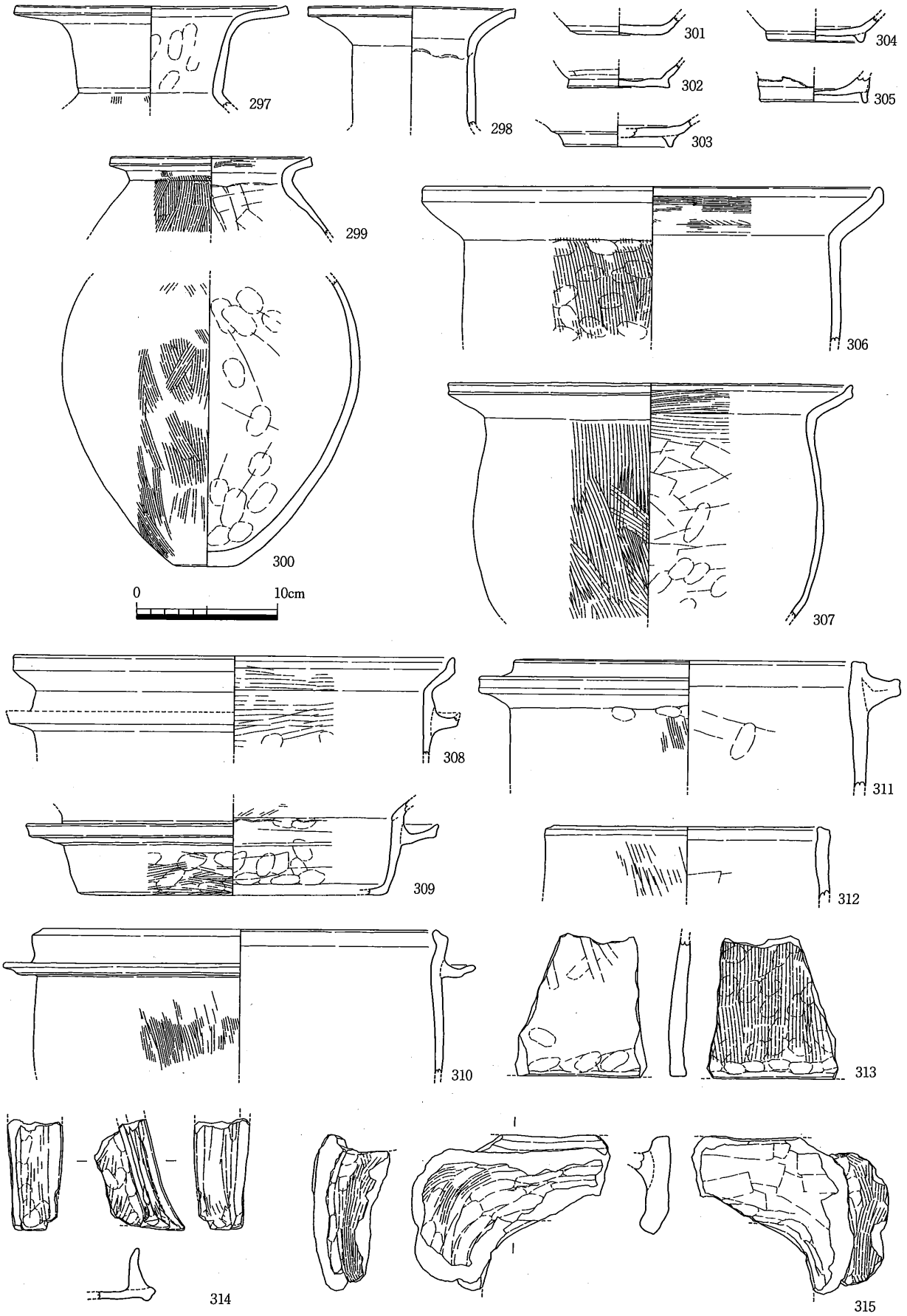
第66図　ＳＤ01(Ｂ) 出土遺物(2)(１／４)

面にはロクロ目を顕著に残す。高台は外側へ大きく踏ん張る形である。やや長めの頸部が付くと考えられる。これはＳＲ02Ａ上層出土のものと接合した。275～277は甕。275は口縁端部を外側へ折り曲げ、276は四角く納める。276は頸部下部から体部にかけて格子タタキ痕がわずかに残るが、ほとんどがナデ消されていて不明瞭である。278～280は底部。278は甕、279・280は壺の底部。278は底部。外面には凹凸が残り調整は不明瞭である。279は低い高台が体部と底部の境付近に付き、体部の下部には１列文の右上がりの格子タタキ痕が残る。280は丸みを持つ体部で下端部にヘラ削りを施す。体部と底部の境に高台の剥離痕跡があるが、きれいに剥離していてほとんど痕跡を残さない。281・282は黒色土器Ａ椀。全体に摩滅が著しく調整は不明瞭。281は高台は３／４程度まで剥離しているが、接合部には刻み目はない。283～285は緑釉陶器。いずれも削り出し高台で京都産。283は内面に重ね焼きの溶着痕を持ち、底部外面は施釉しない。高台は平高台の中を円弧状に沈線を入れたような雑な蛇の目高台である。285も高台内は無釉である。284は内外面にヘラミガキが観察でき、内面には重ね焼き痕と思われる色調の違いがみられる。全面に施釉するが高台内の施釉は薄く透明である。286は丸瓦。内面は布目痕、外面には横方向の板目痕が残る。287～289は鞴羽口。287・288は溶融痕跡はみられないが部分的に灰色に変色する。289は先端部に溶融痕が残る。290～292は金属学的分析試料である。290・291は銹化の進んだ鉄器と思われる。290は長径４㎜、短径２㎜程度のものが、291は断面に直径５㎜程度の円形のものがみえるが、器種は全くわからない。ＳＤ01の下流域東部には鍛冶関連遺構があり、ＳＤ01からも鉄滓や鞴羽口が多く出土していることから、リサイクル用の鉄器であった可能性も指摘された。292は鉄塊系遺物。二次精錬する前の鉄で、この場所で二次精錬を行っていた可能性を示唆する遺物である。293～296はスクレイパー。サヌカイト製。294・295はいずれも刃部をわずかに作り出しているだけである。

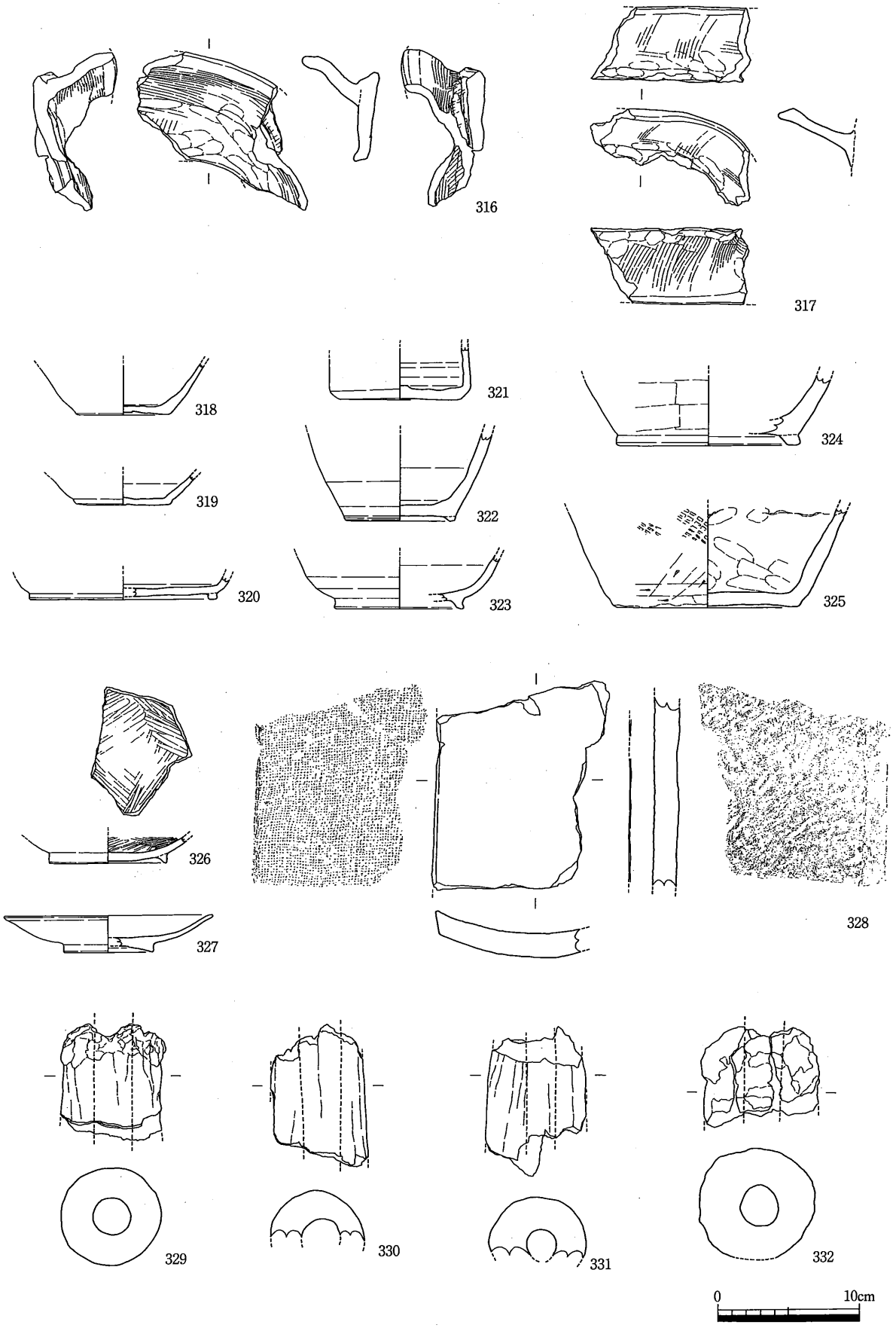
297～337は３区①部分（ＳＤ01Ｃ）で出土した遺物である。297～300は弥生土器。付近の遺構、または自然河川からの紛れ込みと思われる。全体に摩滅が著しい。297・298は広口壺。内面に粘土紐の継ぎ目の痕跡を残す。299・300は甕。外面はハケ、内面は板ナデで調整する。いずれも弥生時代後期後半～終末期。301・302は土師器杯。301は杯Ａ。底部には時計回りのヘラ切り痕が残る。302は円盤状高台杯底部。底部外面には反時計回りのヘラ切り痕跡を残し、板圧痕を残す。303～305は椀。306～307は甕Ｄ。口縁端部を上方へ引き上げる。外面を縦方向のハケ、内面口縁部は横方向のハケを行う。308は羽釜Ａ。口縁端部を上方へ引き上げ、内面に横方向のハケを施す。309は羽釜。上半部の器形は羽釜Ａに類似するようであるが、底部は屈曲し、平底状になる。外面の鍔下部には横方向のハケが残る。310は口縁端部を内側へ屈曲させ、鍔は中位で緩くくの字に屈曲させる。外面に縦方向のハケを残す。311は羽釜Ｃ。体部外面にはハケを残し、口縁端部、鍔端部は四角くする。312～317は竈。312は竈の受け口部分と思われる。小破片で口径はやや不確実である。鍔部は残らない。端部はわずかに内側へ屈曲する。313は底部。内面は板ナデ、外面はハケで、いずれも下端部は横方向に指押さえをする。314は焚き口の下端部付近である。焚き口にほぼ接して鍔が付き、鍔先端部をわずかに内側へ屈曲させる。外面はハケ、内面はナデで仕上げる。315・316は鍔と受け部が残存する。315は鍔の内側を非常に粗雑な板ナデ、外面も雑なハケを施す。粘土がきれいに掻き取られておらず、成形はきたない。作りも厚手である。鍔部と受け部の間はほとんどない。317は鍔のみである。鍔部分がきれいに剥離しており、剥離面には体部の横方向のハケ目痕跡がネガで残っている。端部は下方へわずかに折り曲げる。316は鍔の内外面に横方向のハケを残し、鍔端部はやや下方へ折れ曲がる。318～325は須恵器。318・319は杯Ａ。318は内外面に、319は外面に火襷を残し、いずれも底部には時計回りのヘラ切り痕を残す。320は杯Ｂ。321～323は



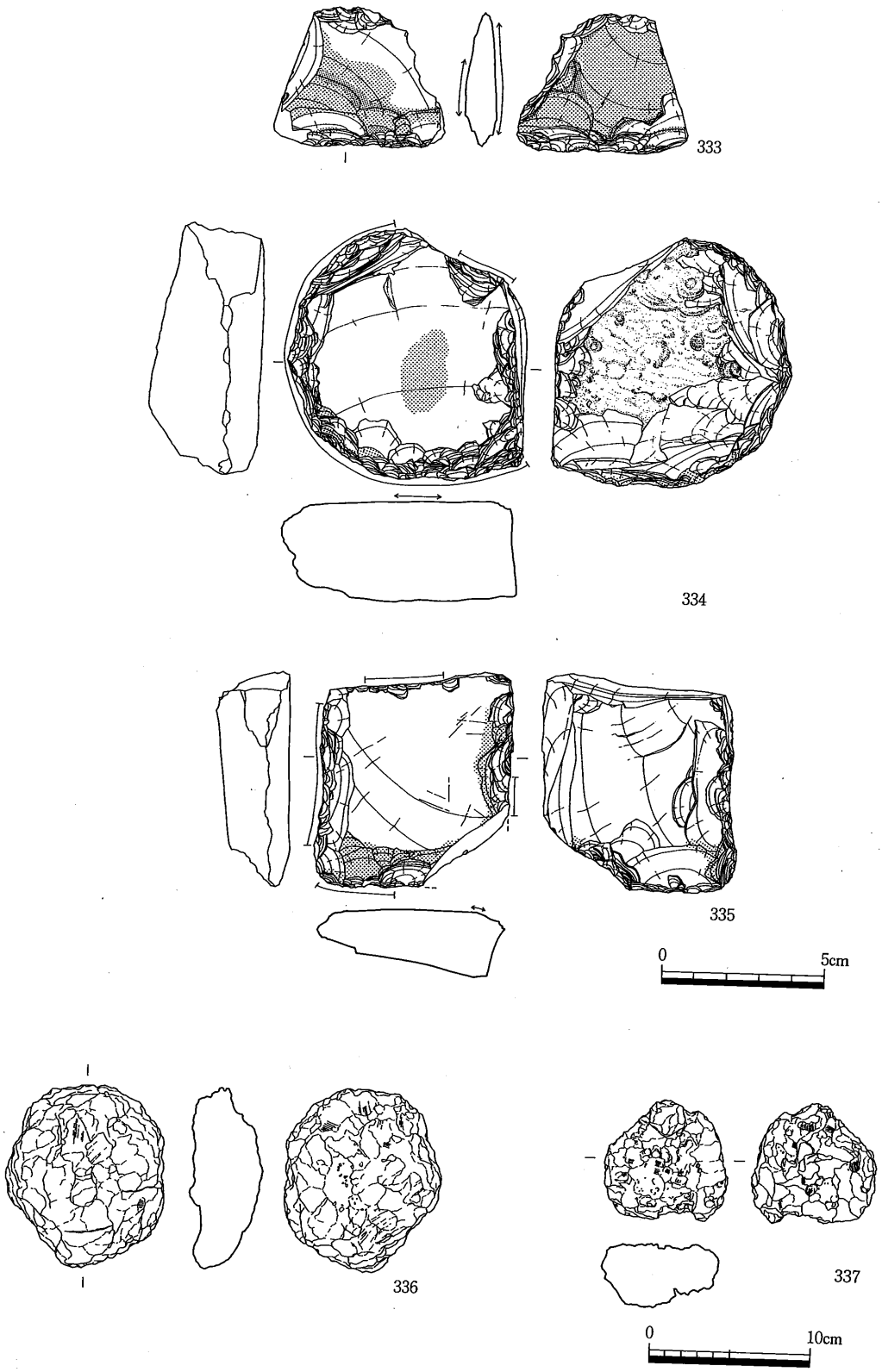
第67図　ＳＤ01（Ｂ）出土遺物(3)（１／４、１／２）



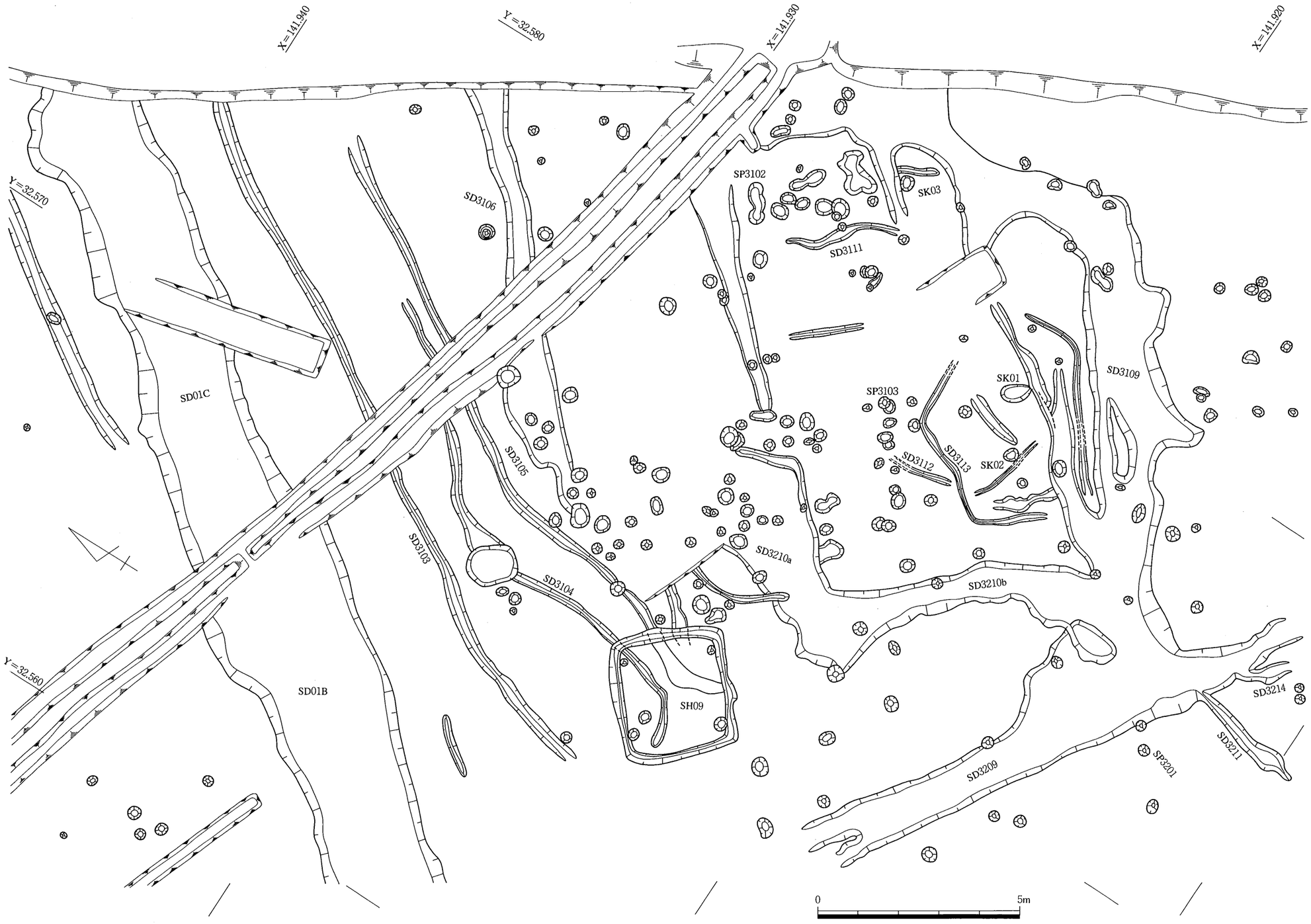
第68図　ＳＤ01（Ｃ）出土遺物(4)（１／４）



第69図　ＳＤ01(Ｃ)出土遺物(5)(１／４)



第70図　ＳＤ01(Ｃ)出土遺物(6)(１／４、１／２)



第71図　３区①鍛冶関連遺構平面図（１／100）

壺底部。321は平底の底部から直立気味に体部が立ち上がり、内面にはロクロ目を顕著に残す。やや長めの頸部が付く。323は外向きに張り気味の高台に丸みを持った体部が付く。下半部はヘラ削りをする。外面には自然釉がかかる。やや長めの頸部が付くと考えられる。322は底部と体部の境に短い高台が付く。体部下半はヘラ削りする。底部に杯又は皿の口縁部が溶着している。324も底部と体部の境に短い高台が外向きに付く。外面はヘラ削りし、内面には自然釉がかかる。322と同様底部には他の土器の小破片と粘土塊のようなものが溶着し、それをとろうとしたのか高台が一部打ち欠かれている。325は甕または壺の底部。体部外面には右下がりのタタキ痕がみられ、下端部にはヘラ削りをする。底部外面の外側部分では約1.2cm幅で工具が当たったような痕跡がみられる。326は黒色土器A椀。丸みを持つ底部に断面が3角形に近い高台を持つ。楠葉産ではないものの、他の在地産のものと比べ形態的に楠葉産に近いものがあり、それを真似た可能性はあろう。見込み部分には4方向の分割ミガキが観察できる。327は緑釉陶器皿。土師質。削り出し高台の蛇の目高台で、全面に施釉する。口縁端部はわずかに外反する。328は平瓦。凹面は布目痕、凸面は斜め方向のタタキ痕があるが、後に粗い板ナデをしてタタキ痕を少し消している。329～332は鞴羽口。329・332は先端部に溶融痕跡を残す。333～335は石器。333は楔形石器。334は石核か。335は石斧か。いずれもサヌカイト製。336・337は椀形鍛冶滓。336はやや浅めのもので、両面に木炭を置いた痕跡が見える。337はやや深めの椀形鍛冶滓。同様に木炭の痕跡が両面に観察できる。いずれも金属学的分析試料である。

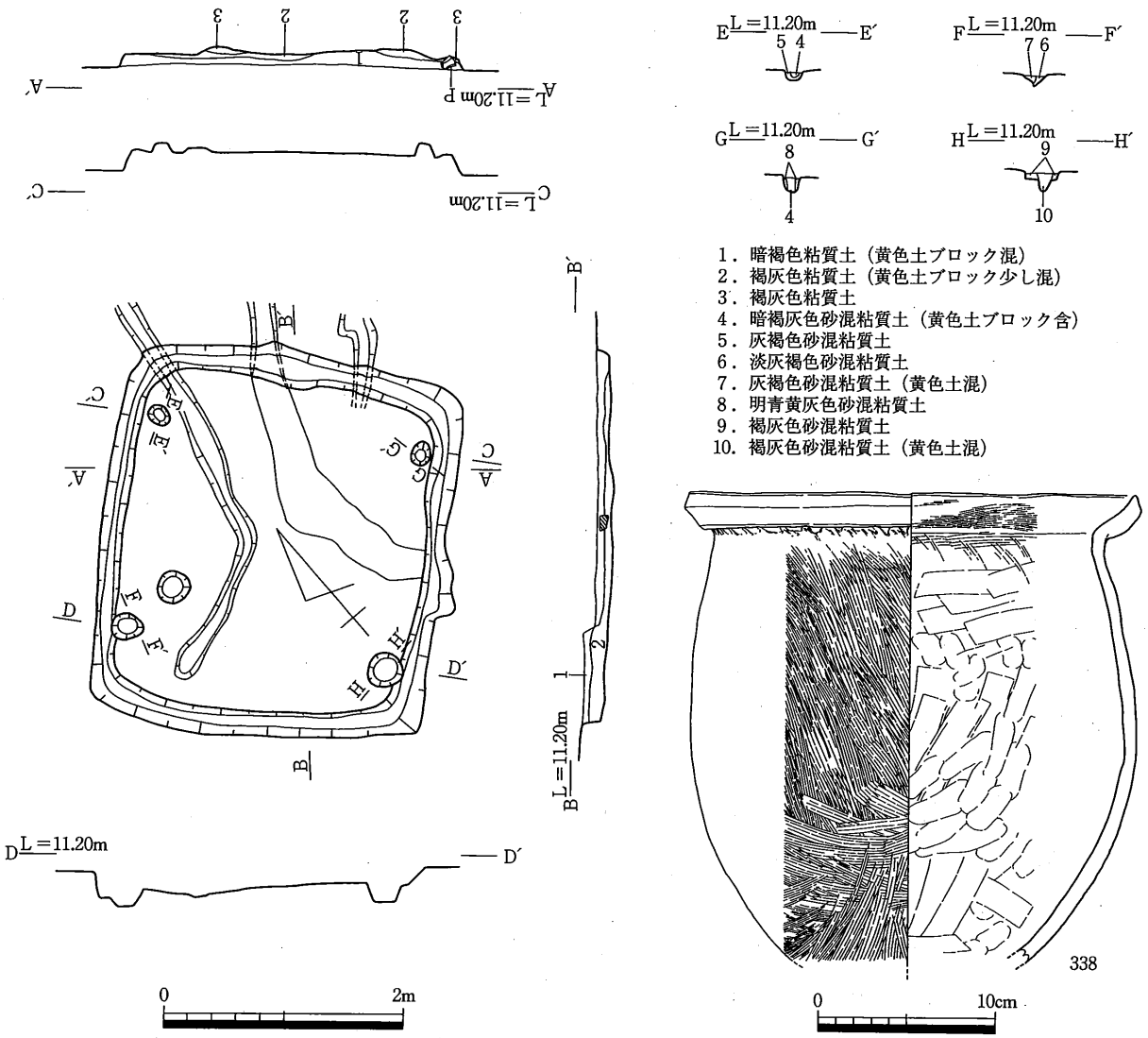
遺物は3区③部分が一番少なく、3区②・①はほぼ同じくらいであるが、やや3区②が多い。3区③では10世紀前半頃からの遺物が出土するが、10世紀後半の遺物がやや優勢と思われ、11世紀後半頃の吉備系土師器椀の頃の時期が最終埋没かと考えられる。3区②では時期の下るものも少しはみられるが、概ね9世紀後半～10世紀前半頃に収まりそうである。ここでは土師器の割合が多く、特に杯と羽釜Aが目出つ。3区①では供膳形態の器種が少なく、竈が目立つ。また、3区②でも出土した鍛冶関連遺物が多い。時期の中心はやはり9世紀後半～10世紀前半頃と考えられる。この溝の開削時期は9世紀後半～10世紀前半と思われ、この頃に集落が近辺に存在していたこの頃の遺物が3区②・①で多く出土し、10世紀後半頃になると山手で同時期の集落が営まれたと思われる。最終的には11世紀後半頃に埋没したと考えられる。

(4)鍛冶関連遺構群

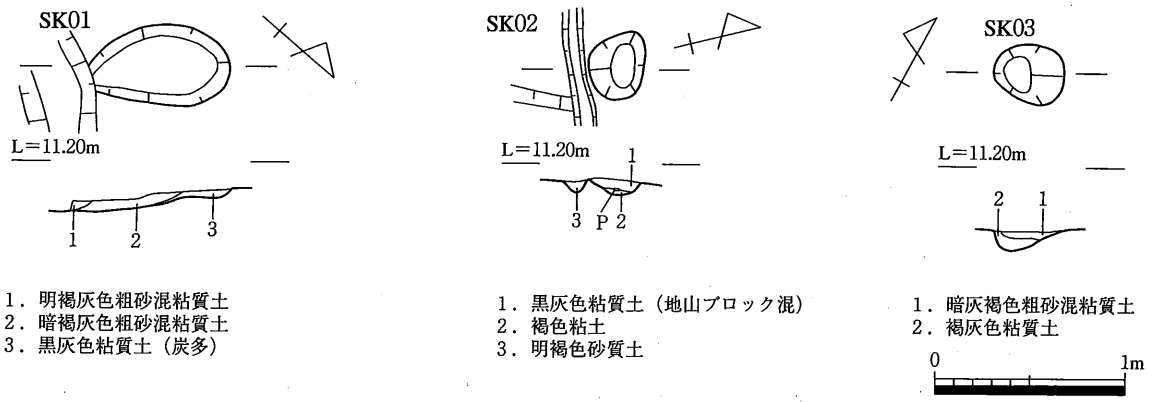
ＳＨ09（第72図、図版16・28）

3区①中央部西側付近で検出した竪穴状遺構である。隅丸長方形で長辺2.8m、短辺3.2m、深さ12cm、埋土は褐色粘質土、褐灰色粘質土で黄色土ブロック混である。壁溝は4周を巡り、幅20cm、深さ2.4～8.8cmである。柱穴は5穴あり、主柱穴は4隅の4穴と考えられる。直径8～13cm、深さ4～15cm、埋土は褐灰色砂混粘質土である。炉跡などは認められない。土層断面図により、ＳＤ3104・3105の方が古い。ＳＨ09の北東辺の壁溝中の中央付近で土師器甕がほぼ完形で出土した。

338は土師器甕D。口縁部をわずかに上方へ引き上げる。外面口縁部下半にヘラ状の圧痕が残る。時期は10世紀前半と考えられる。



第72図　ＳＨ09平・断面図（１／60）出土遺物（１／４）



第73図　ＳＫ01～ＳＫ03平・断面図（１／40）

ＳＫ01（第73図、図版16）

３区①南部、ＳＤ3109の北側で検出した土坑である。長楕円形で長軸74cm、短軸42cm、深さ８cm、断面形状は浅い皿状で、埋土は黒灰色粘質土で炭を多く含み、底は赤く焼けている。埋土中からは須恵器杯・甕、弥生土器か土師器の小破片が出土した。調査時の不注意で埋土中に鍛造剥片や粒状滓などの細

かい精錬・鍛冶関連遺物が出土したかどうかは不明であるが、近接するＳＤ3109で鞴羽口・鉄滓が多く出土していること、底部に被熱痕跡があり、埋土中に炭を多く含むことから火床であった可能性が高いと考えられる。

ＳＫ02（第73図、図版16）

３区①南東部、ＳＫ01の南西部に近接して検出した土坑である。楕円形で長軸38cm、短軸30cm、深さ８cm、埋土は黒灰色粘質土で多量の炭を含み、底部は被熱により赤く焼けている。断面形状はボウル状である。出土遺物はなかった。しかしＳＫ01と同じ事情でこの土坑も火床になる可能性が高いと思われる。

ＳＫ03（第73図、図版16）

３区①南東部で検出した。楕円形の土坑で長軸38cm、短軸30cm、深さ10cmで埋土は暗灰褐色粗砂混粘質土、断面形状は浅いボウル状である。埋土中に炭はみられなかったが、底部は被熱により赤く焼けていた。埋土中から出土遺物はなかった。しかし、ＳＫ01・02と同じ理由でこの土坑も火床となる可能性が高いと考えられる。

ＳＰ3102（第74図、図版28）

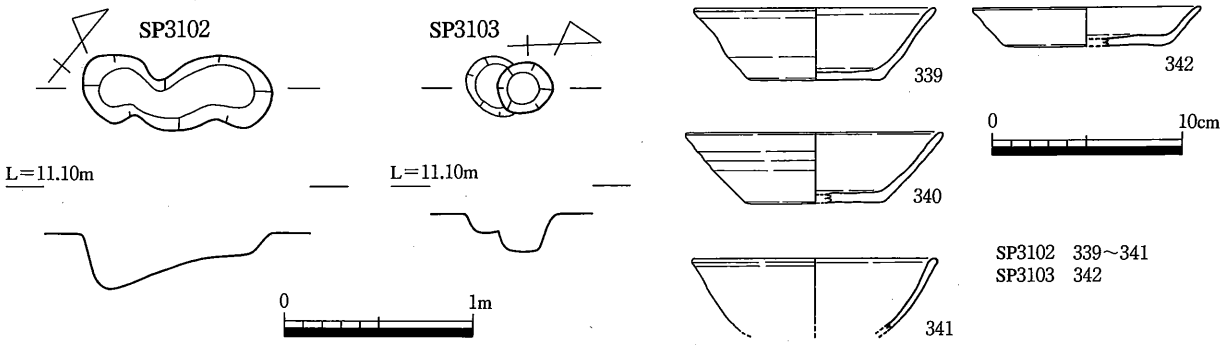
３区①南東部で、ＳＤ3107、ＳＤ3109支流に囲まれるようにして検出した。この周囲には同様にピットを連結したような不定形の土坑が集中する。大きさは長軸１ｍ、短軸30cm、深さ28cmである。埋土中からは須恵器杯、黒色土器Ａ椀が出土した。10世紀前半と考えられる。

339・340は須恵器杯。339は内面と底部外面に火襷がある。場所によっては赤っぽい色調で土師器に近い。340は口縁端部外面に重ね焼き痕が残る。341は黒色土器Ａ椀。摩滅のため調整は不明。

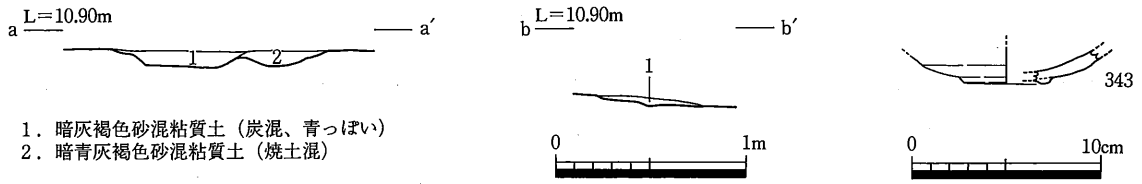
ＳＰ3103（第74図）

ＳＤ3113の北側付近で検出したピットである。直径29cm、深さ20cmで埋土は暗褐灰色砂質土である。埋土中から須恵器皿が出土した。

342は須恵器皿。内面に一部火襷がかかる。９世紀前半～中頃。



第74図　ＳＰ3102、ＳＰ3103平・断面図（１／40）出土遺物（１／４）



第75図　ＳＤ3106断面図（１／40）出土遺物（１／４）

ＳＤ3106（第75図、図版16）

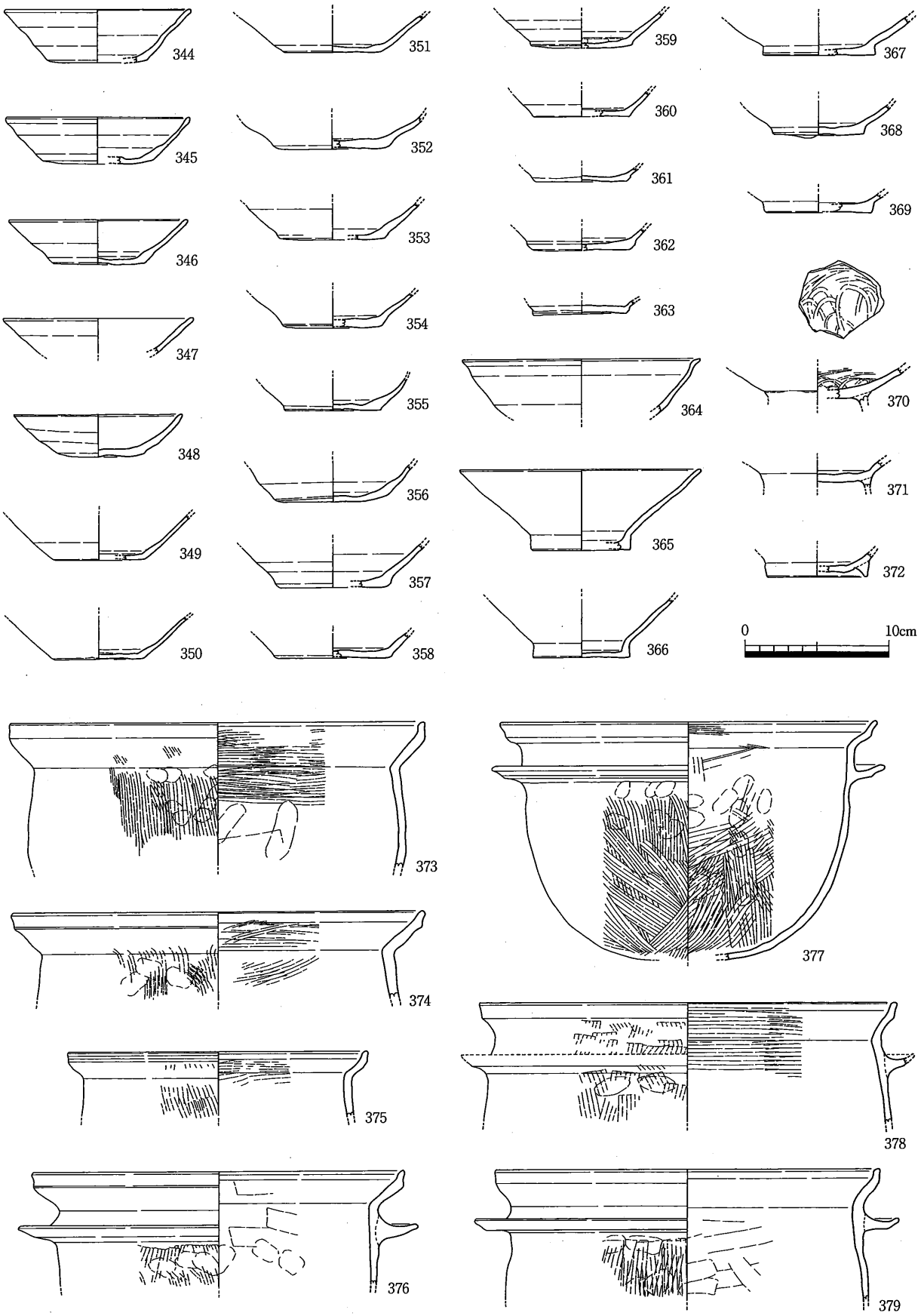
３区①中央部付近で検出した溝である。方位は概ねＳＤ01と同じであるが、西南側では消失する。検出長10m、幅58cm、深さ10～15cm、埋土は上層が暗灰褐色砂混粘質土（炭混、やや青っぽい）で下層は上層の土に焼土が混じる。断面形状は浅い皿状である。埋土中からは須恵器杯、土師器羽釜Ａ、黒色土器Ａ椀が出土したほか、鉄滓・焼土が数多く出土した。鞴羽口の出土はなかった。この地区では鉄滓、鞴羽口等が多数出土しており、ＳＤ3106も鍛冶関連遺構の１つで、鍛冶により炉中より排出された炭や鉄滓を廃棄した溝の１つかとも考えられる。時期は10世紀前半頃と考えられる。

343は土師器椀。やや新しく13世紀代と考えられ、紛れ込みと思われる。

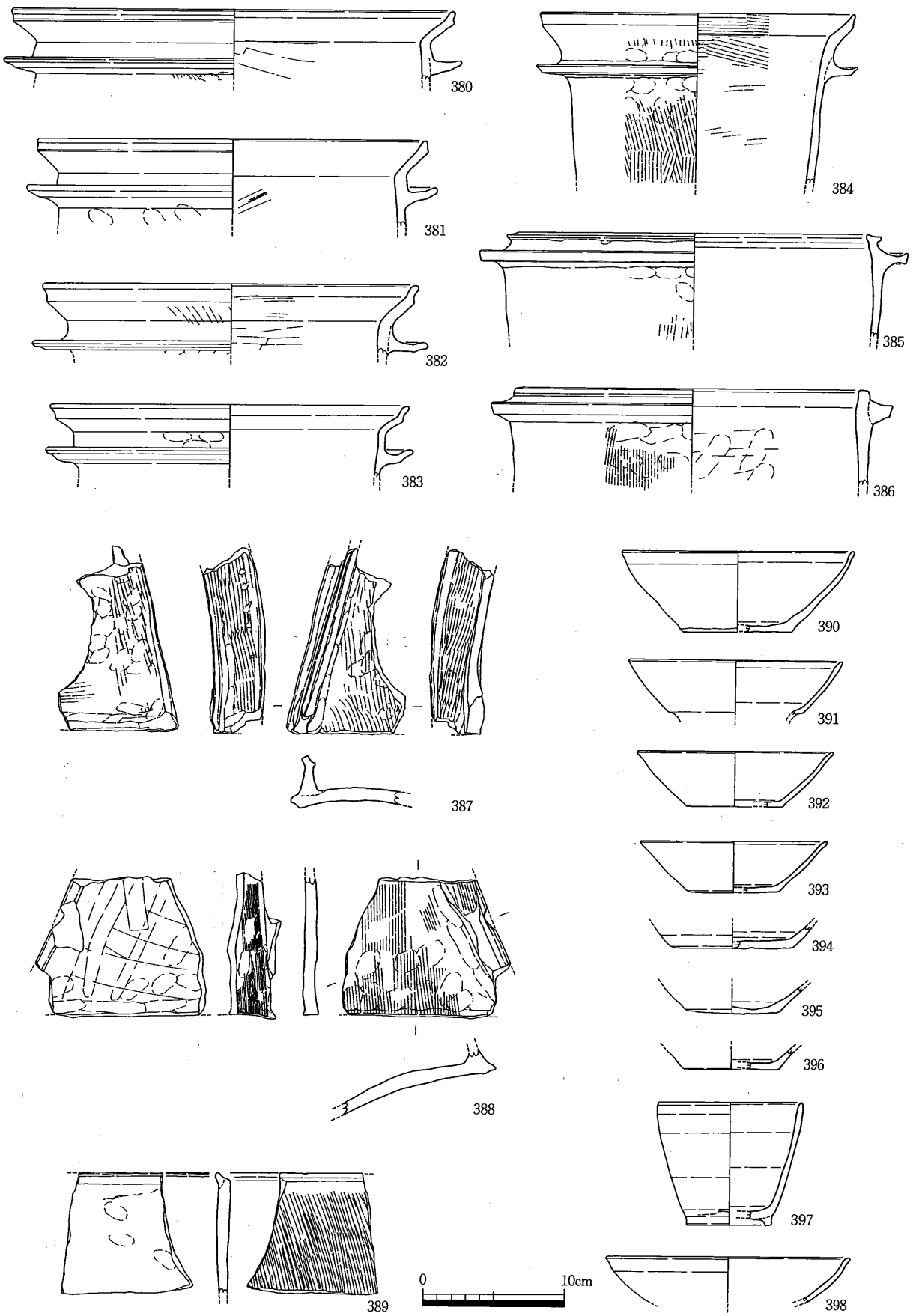
ＳＤ3109（第76～79図、図版17・28・29）

３区①南東部で検出した溝である。ＳＤ3106とほぼ同方向であるが３区①と３区②の境付近で遺構のラインは不明瞭になり、消失する。幅200cm前後、深さ15～28cm、埋土は上層が暗灰褐色粗砂混粘質土、下層が暗褐灰色粗砂混粘質土で、いずれも埋土中に炭が混じる。断面形状は中央付近が盛り上がり、２条の溝が重複したような形状で、現に南側では２条に分かれている。溝の北側も調査区の境付近で不明瞭になり、北西側へオーバーフローしているような形になっている。また、この溝は屈曲してからそれぞれ北東に２m、3.5m進んだ場所でＳＤ3109が屈曲する前の溝と同じ方向に分岐する。いずれも1.5～２mで消失する。しかし北側の溝の断面から北へ屈曲していることがわかり、鍵型の溝になる。埋土中からは土師器杯・羽釜Ａ・竈・円盤状高台、須恵器杯、黒色土器Ａ椀など、多量の土器が出土しており、溝の時期は10世紀前半頃と考えられる。その他鞴羽口、鉄滓、焼けた石が出土しており、精錬鍛冶に関連する遺構と考えられる。炉から排出された廃棄物を掻き出す場所とも考えられるが、土器も数多く出土しており、他の廃棄物も集めた場所だったかもしれない。溝の時期は出土遺物から９世紀後半～10世紀前半と考えられる。

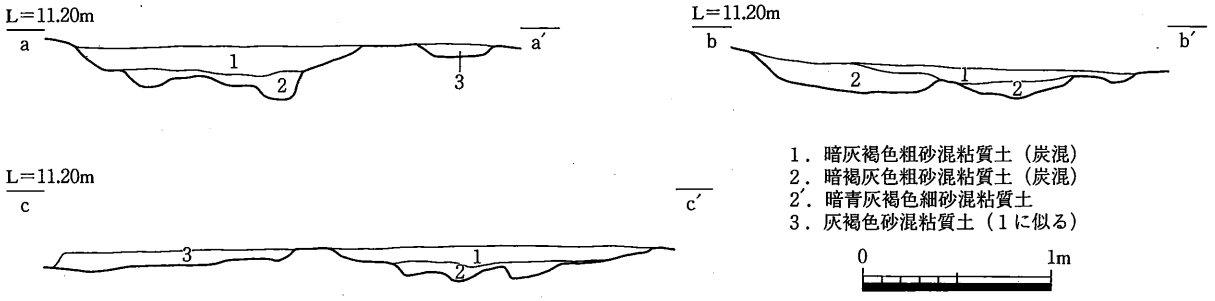
344～389は土師器。344～363は杯Ａ。回転台土師器。概ね直径12.5～13.0cm、器高3.5cm前後になると思われる。365～369は円盤状高台の底部を持つ。底部の深いもの（365・366）と浅いもの（367～369）がある。370～372は椀。373～375は甕。いずれも口縁部上端を上方へ引き上げる。376～384は羽釜Ａ。口縁端部・鍔端部とも上方へ引き上げる。385・386は羽釜Ｃ。いずれも口縁端部・鍔端部とも四角くする。387～389は竈。387・388は下端部で焚き口が一部残る。焚き口と鍔の間はほとんどない。389は受け口である。端部を内傾させる。390～402は須恵器。390～396は杯Ａ。土師器杯Ａと同じタイプ。390を除き口径13.5cm程度、底径6.5～７cm程度、器高は3.5cm程度である。390には内面に火襷が認められる。390・392・393の焼成は土師器に近い。397は外面に火襷がかかり、底部内面にはゴマ状の降灰がみられる。398は椀。西村産。口縁部内外面に重ね焼きの痕跡を残す。調整は回転ナデ以外は認められない。399・400は甕。399は口縁端部を外側へ折り曲げる。400には頸部に右上がり、体部に左上がりの格子タタキが認められ、一連叩打成形をしていたことがわかる。401は短径壺。壺Ｅ。強く張った肩部に稜を巡らせ、短い頸部が付く。肩部から体部にかけて自然釉が付着する。頸部と肩部の間の部分に重ね焼きの痕跡が残る。ＳＤ01との接合資料。402は壺。403・404は緑釉陶器椀。内外面にヘラミガキを密に施す。須恵質で、口縁端部外面を強くなで、緩い稜を作っている。405・406は黒色土器Ａ椀。405は底部の部分だけが円形に割れている。体部内面には４方向程度の、底部には１方向のヘラミガキが施されるようだ。406は底径が広めで断面３角形の高台が付く。楠葉産の可能性がある。407は平瓦。土師質で凹面にはやや粗めの布目、凸面には右上り方向の縄タタキ目が残る。408・409は鞴羽口。408は先端部に



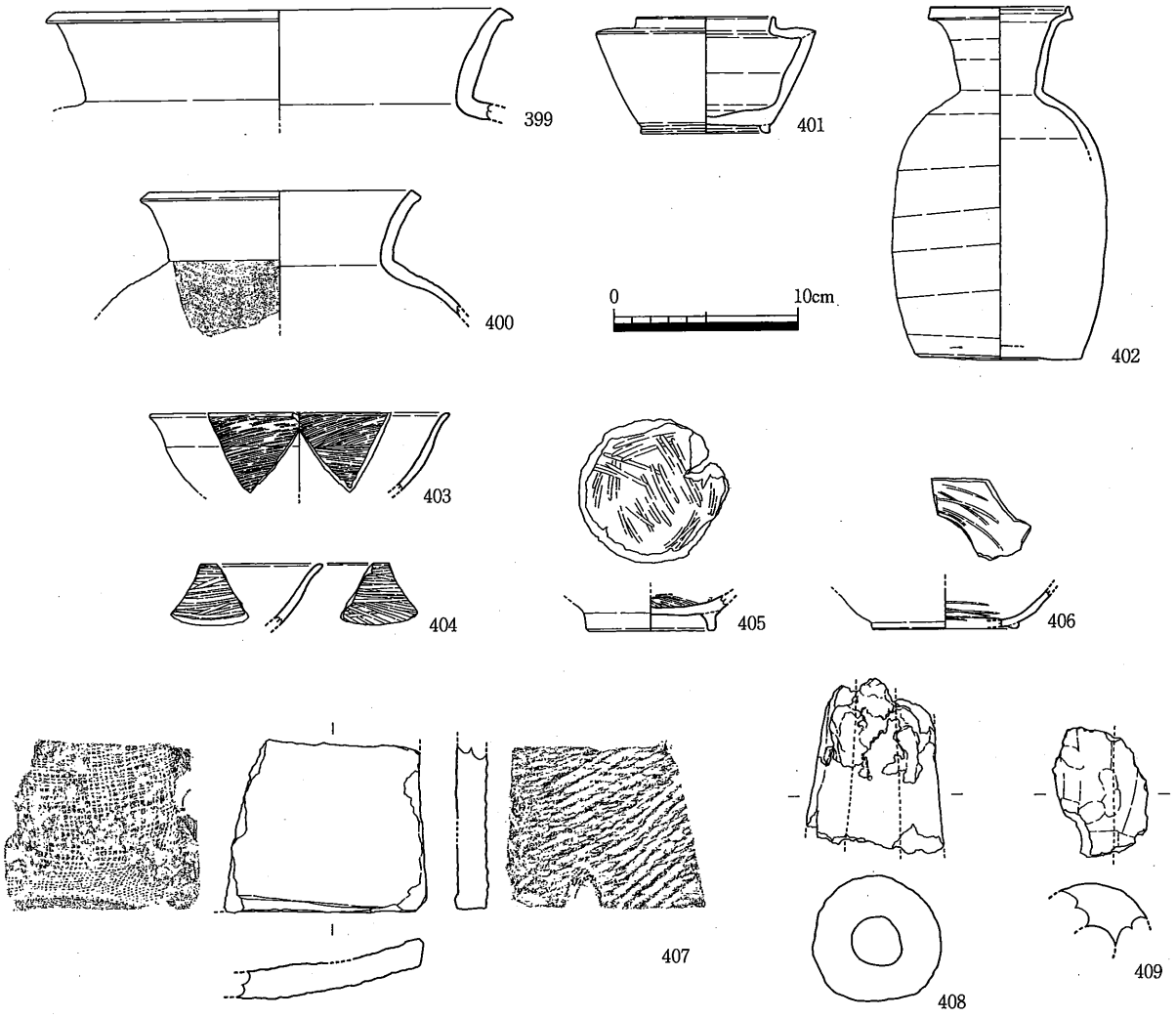
第76図　ＳＤ3109出土遺物(1)（１／４）



第77図　ＳＤ3109出土遺物(2)(１／４)

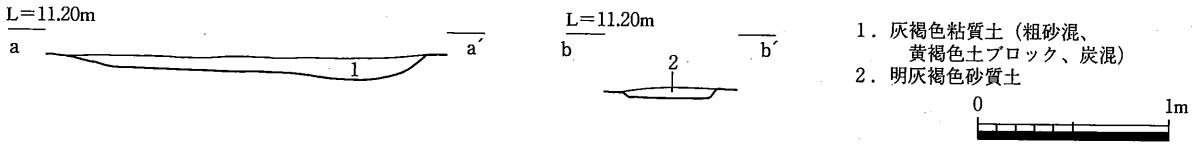


第78図　ＳＤ3109断面図（１／40）

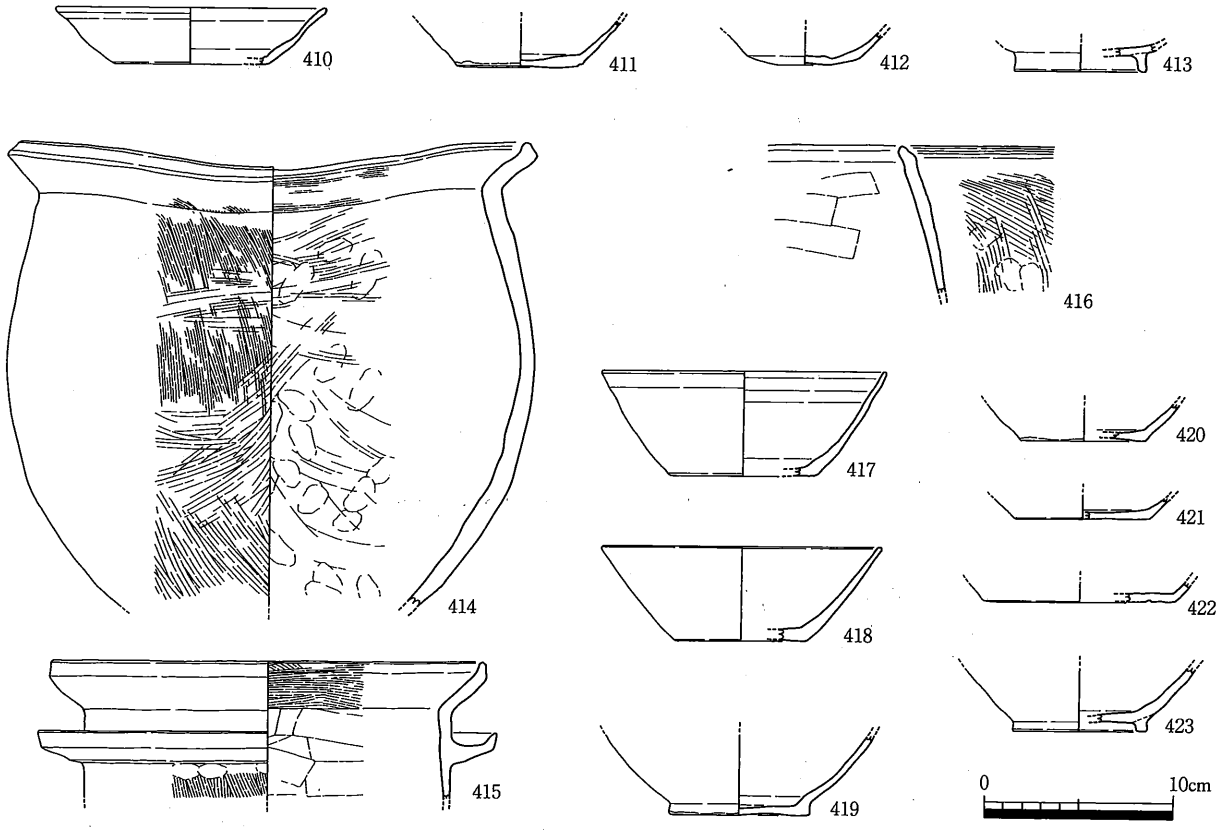


第79図　ＳＤ3109出土遺物(3)（１／４）

溶融痕が残り、その下部は灰色に変色している。



第80図　ＳＤ3210a断面図（１／40）

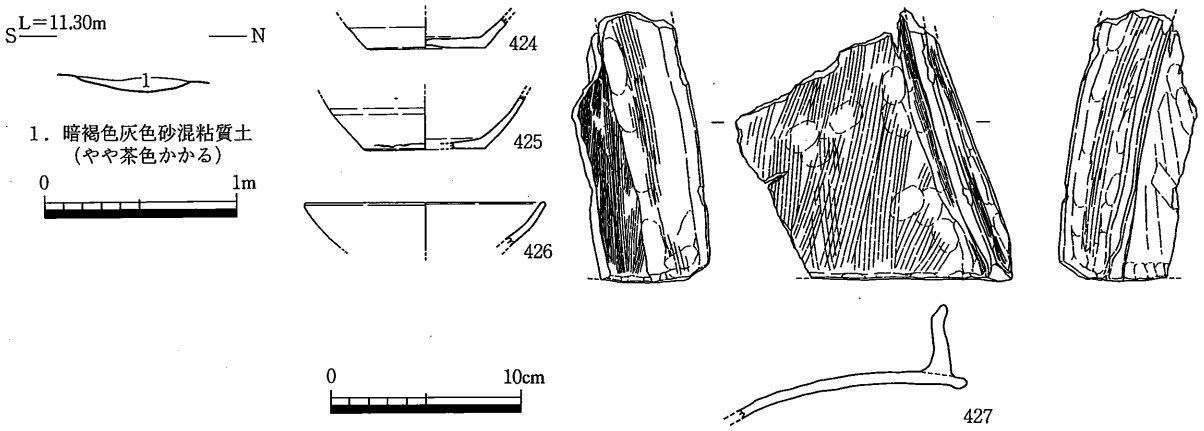


第81図　ＳＤ3210a出土遺物（１／４）

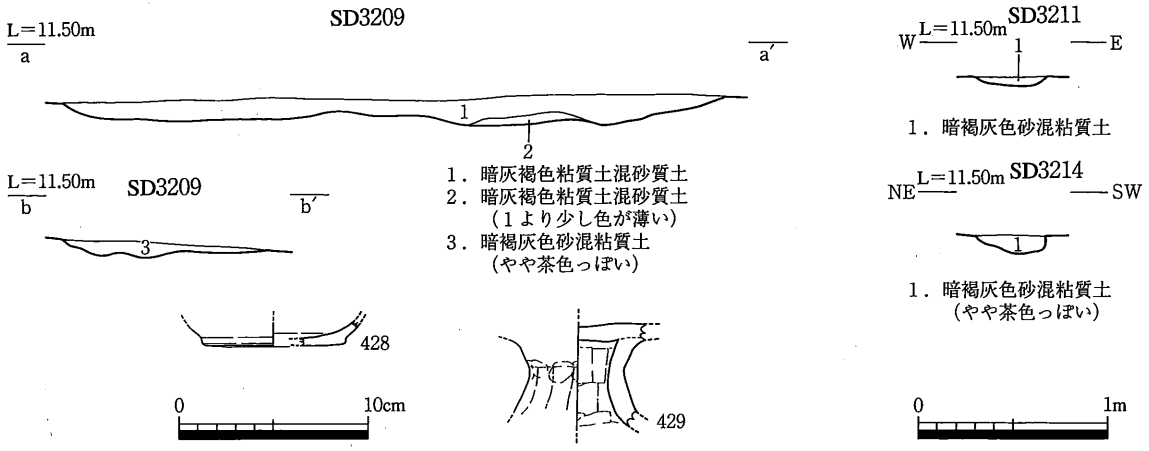
ＳＤ3210ａ（第80・81図、図版30）

３区①南端で検出した溝状遺構である。３区南端をＳＤ3109の北西約９ｍの位置を並行して走り、約13ｍで南東へ直角に屈曲し、ＳＤ3109とＳＤ3209と併せて長方形の区画を形成すると考えられる。ＳＤ3210ａの北側はベース面が10cm程度段差のある場所があり、そこは削平のため消失しているが、北側で幅48cm、深さ６cm、埋土が明灰褐色砂質土の溝に続くようである。南側では幅190cm、深さ11cm、埋土は灰褐色粘質土（粗砂混、黄色土ブロック、炭混）である。埋土中からは須恵器杯Ａ・Ｂ、土師器椀・杯・羽釜・竈・甕が多数出土している。なお、埋土中に炭を含むものの、鞴羽口・鉄滓などの出土はなく、ここへは炉中のあまり廃棄物は掻き出されなかったらしい。溝の時期はＳＤ3109と同じく10世紀前半頃と考えられる。

410～416は土師器。410～412は杯。410は色調は土師器であるが、火襷がわずかに見え、須恵器の可能性もある。413は椀。414は甕。口縁端部を上方へ引き上げる。415は羽釜Ａ。口縁端部、鍔ともに上部へ引き上げ、外面はハケ、内面は口縁部をハケ、体部を板ナデする。416は竈。端部はわずかに段を持ち、内面の上部には煤が付着する。417～422は須恵器杯。417・418は深めの器形で火襷がかかる。418は口縁端部にわずかに重ね焼きの痕跡がみられる。419は円盤状高台の底部を持ち、ヘラ切り痕を明瞭に残す。423は杯Ｂ。底部と体部の境に高台が付き、高台径が小さいので深めの器形になると思われる。



第82図　ＳＤ3210b断面図（１／40）出土遺物（１／４）



第83図　ＳＤ3209、ＳＤ3211、ＳＤ3214平・断面図（１／40）ＳＤ3214出土遺物（１／４）

遺構の時期は出土土器から10世紀前半頃と考えられるが、当遺構では供膳形態では須恵器が優勢である。

ＳＤ3210ｂ（第82図、図版30）

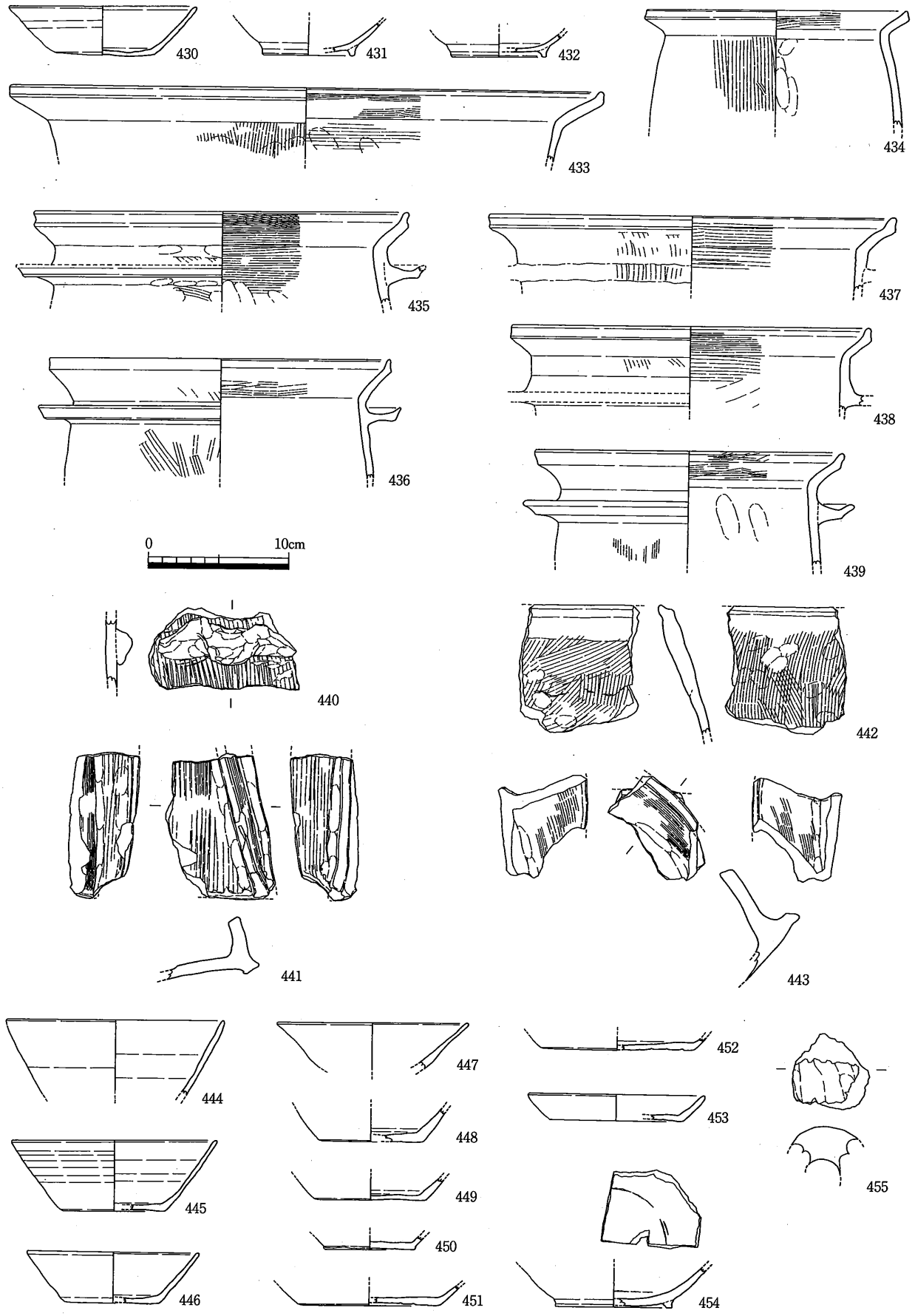
３区①と②の境付近で検出した溝である。ＳＤ3210ａへ続く。方向はＳＤ3209と同じであるが、溝の南西隅部分でＳＤ3209と連結するようである。幅60cm、深さ７cm、埋土は暗褐灰色砂混粘質土、断面形状は浅い皿形である。埋土中に炭の堆積はみられない。埋土中からは須恵器杯・椀、土師器杯・竈、黒色土器Ａ椀の他鞴羽口が出土した。

424・425は土師器杯。回転台土師器。427は竈。下端部分で焚き口が残る。鍔は内側へ折り曲げられる。426は須恵器杯。焼成はあまりよくなく、口縁端部外面に重ね焼き痕跡が残る。

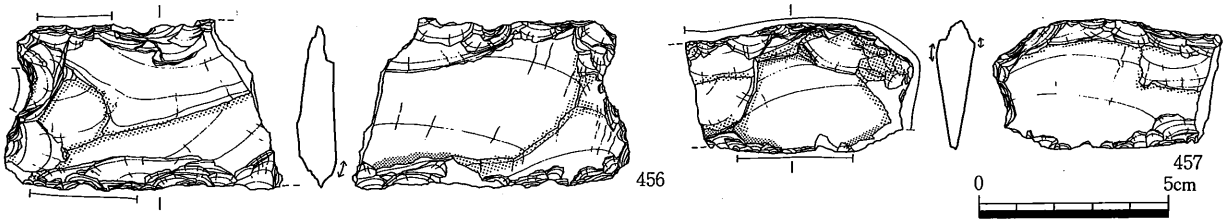
ＳＤ3209（第83～85図、図版17・30・81）

３区②で３区①に接する位置で検出した溝である。ＳＤ3109と直交、南西部でＳＤ3210ｂと連結する。調査区境に段差があり、溝の延長部がやや不明瞭であるが、ＳＤ3109と連結する可能性もある。幅80cm／350cm、深さ８～16cm、埋土は暗褐灰色砂混粘質土でＳＤ3210に類似する。炭の堆積はみられなかった。断面形状は中央部がやや盛り上がり、底が２カ所あるような形状である。埋土中からは須恵器杯・蓋・甕、土師器杯・土釜・竈などが出土したほか、鞴羽口が出土した。鉄滓は出土しなかった。

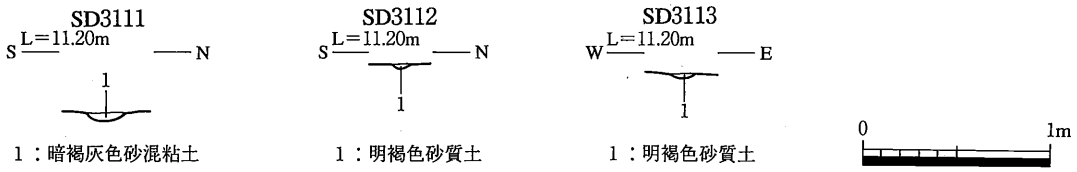
430～443は土師器。430は杯Ａ。回転台土師器。431・432は椀。433・434は甕。433は口縁部破片で口径は不確かである。435～439は羽釜Ａ。残存する範囲ではいずれも口縁端部・鍔端部とも上方へ引き上



第84図　ＳＤ3209出土遺物(1)(１／４)



第85図　ＳＤ3209出土遺物(2)(１／２)



第86図　ＳＤ3111～ＳＤ3113断面図(１／40)

げる。440は甑の把手。先端部を下側へ折り曲げている。441～443は竈。441は下端部で焚き口とそれに伴う鍔が残る。442は受け部。443は受け部と上方の鍔の部分が残る。焚き口・受け部と鍔の間はほとんどない。鍔端部は四角くする。444～454は須恵器。444～450は杯Ａ。444～446・450には火襷が掛かる。451～453は皿。いずれも火襷が掛かる。454は椀。内面には重ね焼きの痕跡が残る。455は鞴羽口。456・457は石庖丁。稜部分は磨滅する。サヌカイト製。

溝の時期は９世紀後半を中心とする時期と考えられ、ＳＤ3109と同じ頃に同じ様な機能を持つ遺構と思われるが、土器組成には若干の差が認められ、こちらは須恵器が優勢である。

ＳＤ3211（第83図）

ＳＤ3209の南西隅からＳＤ3209に垂直方向に西へ向かう溝である。延長約３ｍで途切れる。ＳＤ3209との切り合い関係はない。幅35cm、深さ５cm、埋土は暗褐灰色砂混粘質土で出土遺物はわずかに土器の小片があるのみである。時期はＳＤ3209と同じと考えられる。

ＳＤ3214（第83図）

ＳＤ3209の南西隅でＳＤ3209の南側へ派生する溝である。ＳＤ3209が消失するのと同じくらいの場所で消失する。ＳＤ3209との切り合い関係はなく、ＳＤ3209と同じと考えられる。幅36cm、深さ10cm、埋土は暗褐灰色粘質土である。埋土中からは須恵器甕・皿、土師器杯等の他鉄滓が出土した。時期はＳＤ3209と同じと考えられる。

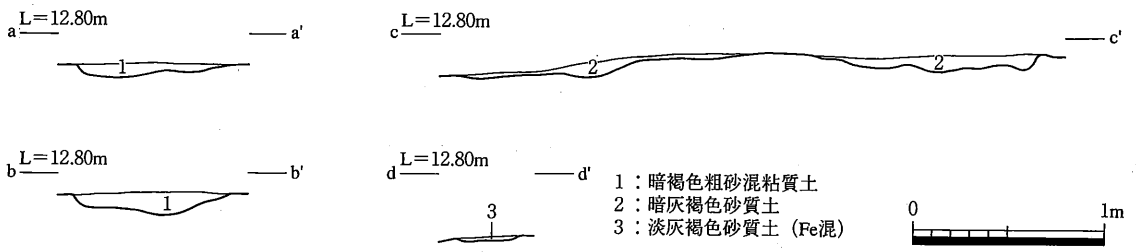
428は土師器杯。回転台土師器。429は土師器高坏。低めの脚部で脚部は面取りする。８世紀半ば頃と思われ、紛れ込みと思われる。

ＳＤ3111（第86図）

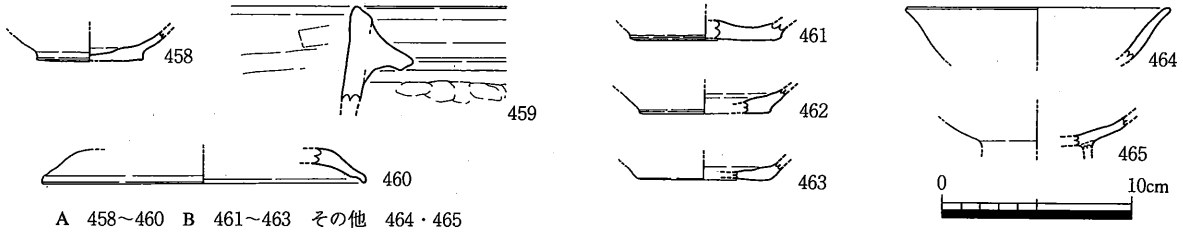
３区①北東部で検出した小溝である。緩くＳ字状に曲がる。ＳＤ3109から派生する溝部分の南側を囲み、その中は不定形ピット群がある。ＳＤ3109等と直交する方向で延長2.8m、幅20cm、深さ５cm、埋土は明褐灰色砂混粘質土である。埋土中からは土師器杯・羽釜が出土した。時期は周囲の遺構群と同じ10世紀前半としても大きな間違いはないと考えられ、鍛冶に関連する遺構の可能性があろう。あるいは形状が不安定なことから、不定形ピット群と同様の性格のものかもしれない。

ＳＤ3112（第86図）

３区①南東部を弧を描く溝である。円形とすれば南半部のみ検出され、北半部は未検出である。ＳＫ



第87図　ＳＤ3501断面図（１／40）



第88図　ＳＤ3501出土遺物（１／４）

02と接しているが、前後関係は明らかではない。ＳＫ01を囲う位置である。幅６㎝、深さ２㎝、埋土は明褐色砂質土である。出土遺物はなかった。

ＳＤ3113（第86図）

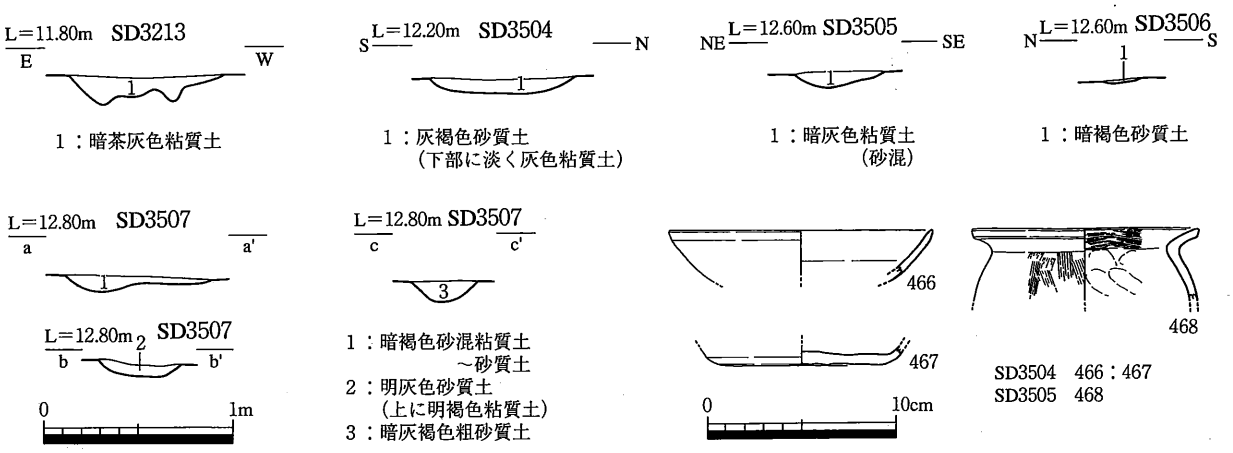
３区①南東部を変形５角形に巡る溝である。ＳＫ01・02を囲う位置にある。北西と南東の２カ所で途切れる。１辺2.4～3.5m、幅９～18㎝、深さ２～５㎝、埋土は灰褐色砂質土である。埋土中に炭などはない。埋土中から遺物は出土しなかった。

(5)溝

ＳＤ3501（第87・88図）

３区⑤上段で検出した南西から北東方向へ走る溝である。地割の方向と合致する溝で、旧水田境の中央付近に位置し、東側の１段低い水田境の延長上でＳＤ3506と直交し、そこから東では２～３条（Ａ～Ｃ）に分岐する。また、ＳＤ3506と直交する場所付近ではＳＤ3507が並行して東側を走る。北側で隣接する３区③では、地表面の高低差が３区⑤より約25㎝低く、ＳＤ3501（Ｂ）の延長部と、ＳＤ3507延長部を検出しただけである。ＳＤ3501（Ｂ）の延長部は延長約９ｍ北側で東側である平野部側へ屈曲し、隣接する３区②では検出していない。溝の幅は南東側で80㎝、深さ７㎝、北西側の分岐した後の場所では幅315㎝、深さ10㎝で埋土は暗灰褐色砂質土、断面形状は中央部分が盛り上がる形状である。ＳＤ3501を含めた溝群、特にＳＤ3506から北側の溝群は何らかの区画を構成すると考えられる。３区③部分ではこれらの溝はほぼ平行して走り、屈曲するので、区画の南北の範囲は概ねこの範囲と考えられる。埋土中からはサヌカイト片、土師器杯・椀・土釜Ｃ・甕、須恵器蓋・甕・壺等が出土した。ＳＤ3501は13世紀後半の遺構であるＳＫ04に切られる。溝の時期は10世紀～11世紀と考えられる。出土土器はいずれも小破片である。

458～460は３条に分かれた溝の一番南側の筋（Ａ）から出土した土器である。458は土師器杯。回転台土師器。459は羽釜Ｃ。460は須恵器蓋。口縁端部内面に重ね焼き痕跡がある。461～463は中央の筋



第89図　ＳＤ3213、ＳＤ3504～ＳＤ3507断面図（１／40）出土遺物（１／４）

（Ｂ）から出土した。いずれも回転台土師器杯の底部。464・465はその他の部分から出土したものである。464は土師器杯。465は土師器椀。

ＳＤ3213（第89図）

３区②中央部付近で検出した溝である。流れの上・下両方向とも攪乱により検出できず、検出したのはわずか３ｍであった。方向は概ね南北方向で、幅80cm、深さ12cm、埋土は暗茶灰色粘質土で、断面形状は両側が少し深く、中央付近がやや盛り上がる。出土遺物は弥生土器、サヌカイト片、須恵器片であった。遺構の時期は須恵器により10世紀代と考えられる。

ＳＤ3504（第89図）

３区⑤下段、東部で検出した東西方向の溝である。現地割には沿わないようである。西は水田耕作の際の削平により、東側はおそらく低地であったため消失していて、検出長４ｍである。幅76cm、深さ８cm、埋土は灰褐色砂質土である。ＳＢ19を構成するピットに切られる。埋土中からは土師器杯・円盤状高台底部やサヌカイト片が出土した。土師器杯から13世紀後半頃と考えられる。

466は土師器杯。467は土師器杯底部。

ＳＤ3505（第89図）

３区⑤上段の北端付近で検出した東西方向の溝である。現地割からは方向を東でやや北に振る。ＳＤ3506の北西側約1.8mの位置でＳＤ3507に北東側から取り付き、それより西側へは続かない。またＳＤ3507との切り合い関係も確認できなかった。幅45cm、深さ８cm、埋土は暗灰色砂混粘質土である。埋土中からはサヌカイト片、弥生土器小片が出土したのみであったが、遺構の切り合い関係などから他の溝と同時期ではないかと思われる。

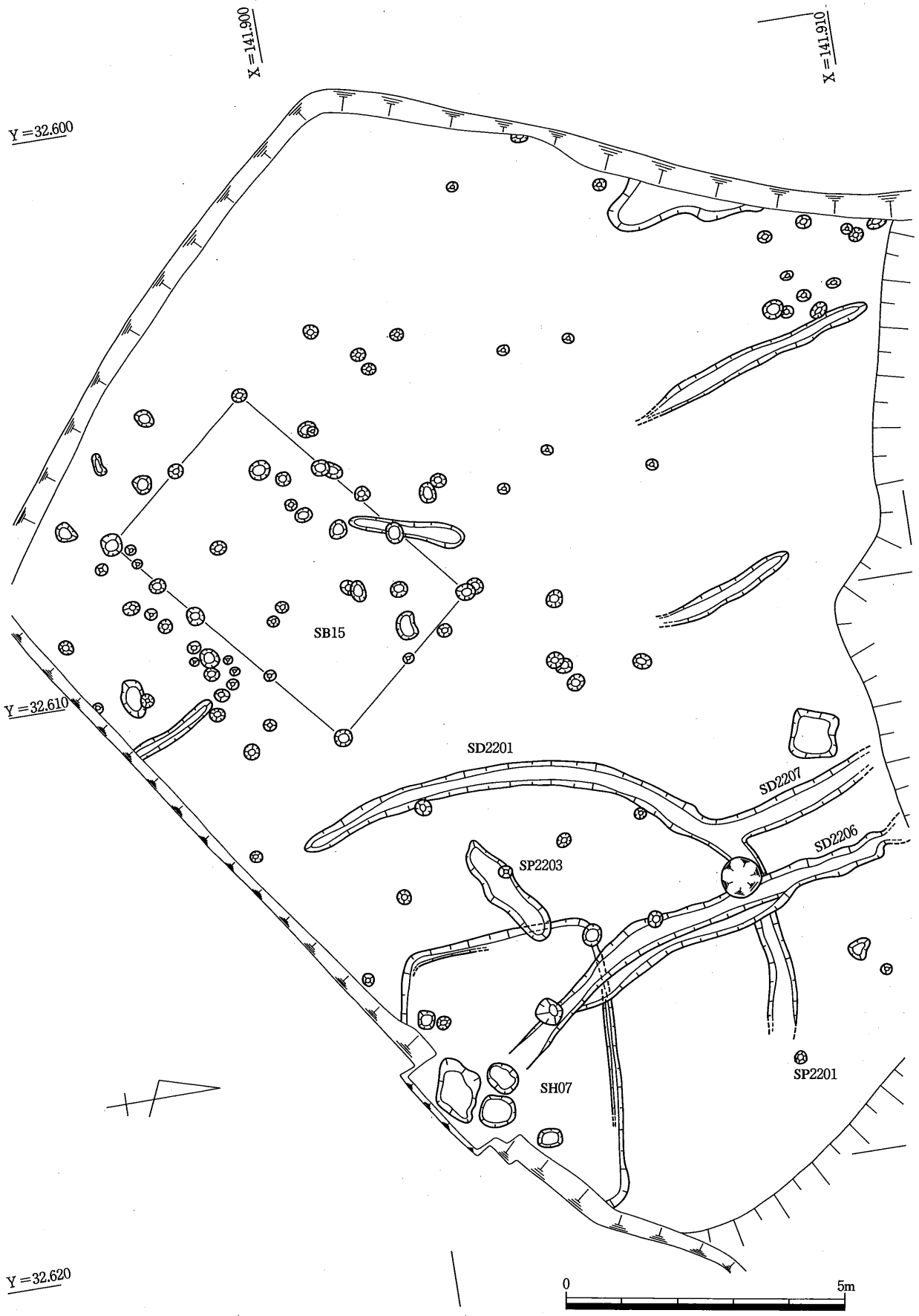
468は弥生土器甕。口縁部はくの字に外傾し、口縁部内面はヘラミガキする。

ＳＤ3506（第89図）

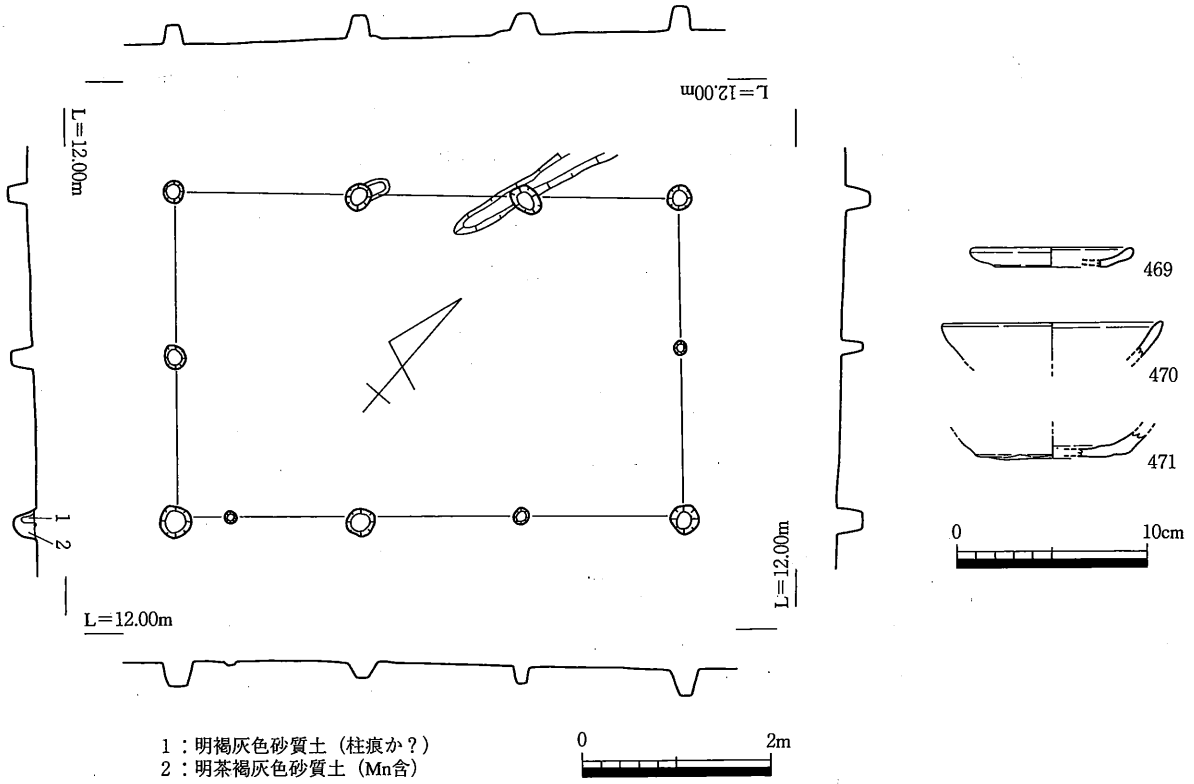
３区⑤上段北部で検出した東西方向の溝である。３区⑤下段の水田の北側境の延長上に東西方向に位置し、ＳＤ3501・ＳＤ3507と直交する。幅18cm、深さ１cm、埋土は暗褐色砂質土でＳＤ3501・ＳＤ3507と切り合い関係は認められない。埋土中からは土師器小片が出土しただけであるが、ＳＤ3501・ＳＤ3507等との関連を考えあわせれば10世紀後半と考えられる。

ＳＤ3507（第89図）

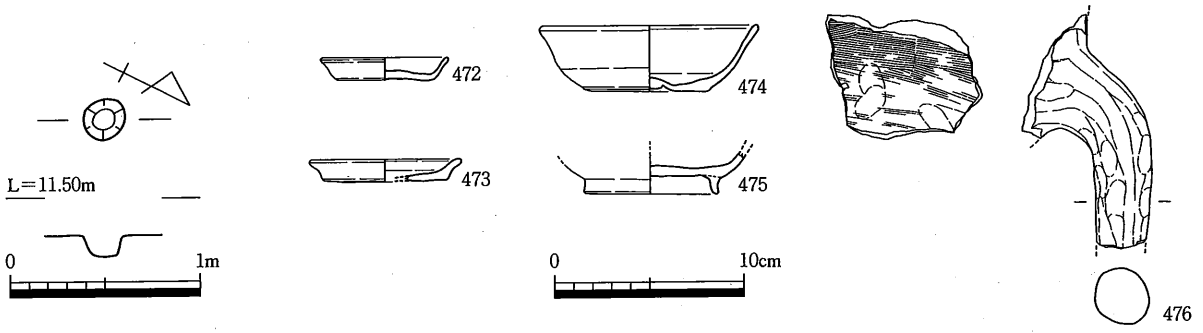
３区⑤上段で検出した、地割に沿う南北方向の溝である。ＳＤ3501がＳＤ3506と直交する付近より約2.2m南側で出現し、ＳＤ3501の東側0.75m付近をＳＤ3501と同方向に走る。ＳＤ3506と直交し、その1.8



第90図　２区②遺構配置図（１／100）



第91図　ＳＢ15平・断面図（１／80）出土遺物（１／４）



第92図　ＳＰ2201平・断面図（１／40）出土遺物（１／４）

m北側ではＳＤ3505が東側から取り付く。幅40cm、深さ10cm、埋土は明灰色砂質土、断面形状は半円形だが、ＳＤ3506の南側では東肩が崩れたような形状である。埋土中からは須恵器杯Ｂ・杯・甕、土師器土釜脚部などが出土した。溝の時期はＳＤ3501と同様10世紀後半と考えるが、白磁片や足釜の脚部なども出土しており、溝は13世紀頃まで機能していたかもしれない。

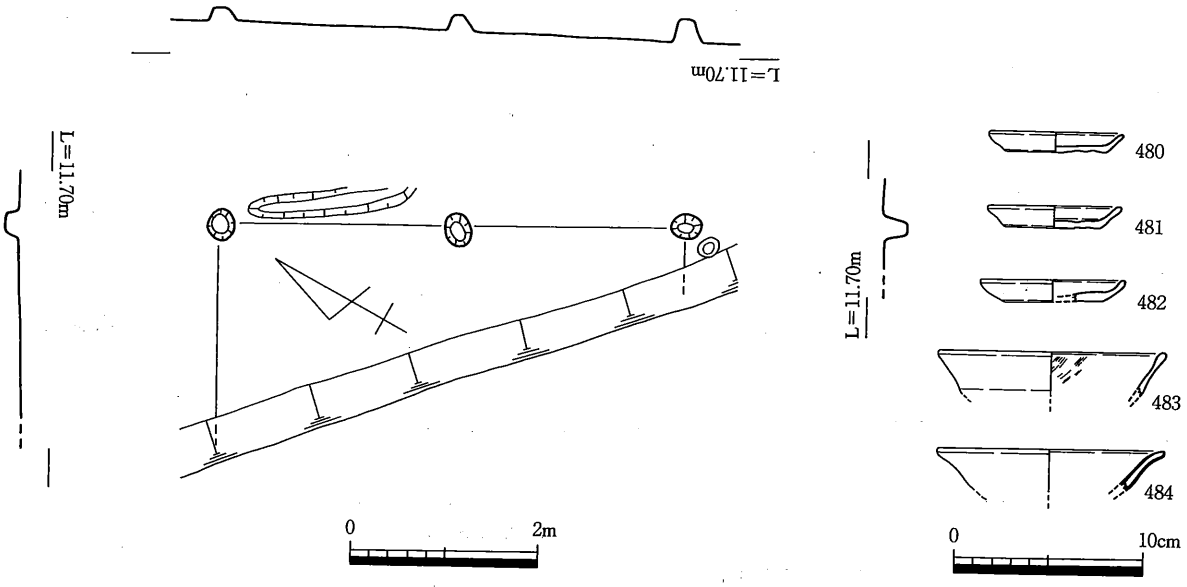
４．鎌倉時代の遺構・遺物

(1)掘立柱建物・ピット

ＳＢ15（第91図、図版17）

２区②西部で検出した掘立柱建物である。桁行３間（5.3m）、梁間２間（3.5m）で面積は18.55m²、方

第93図　ＳＰ2203、ＳＰ3104、ＳＰ3105出土遺物（１／４）



第94図　ＳＢ16平・断面図（１／80）出土遺物（１／４）

位はＮ50°Ｅで、概ね現状地割と同じである。柱間は1.6～2.0m、柱穴は円形で直径25～30cm、深さ15～54cm、埋土は明褐灰色砂質土である。柱穴埋土中からは土師器杯・小皿が出土した。11世紀後半～12世紀。

469は土師器小皿。470・471は土師器杯。

ＳＰ2201（第92図、図版17・30）

２区②東側の微高地縁辺部で検出したピットである。ピットの集中部からは少し離れた位置にある。円形で直径22cm、深さ12cmである。ピット内には土釜の脚部と下から土師器小皿・杯・椀の順で上向きの重ねた状態で埋納されていた。近接して掘立柱建物はない。時期は13世紀中～後半と考えられる。

出土土器は全て土師器である。472・473は土師器小皿。いずれもヘラ切りで、472はほぼ完形であった。ヘラ切り痕は時計回り。474は杯。ヘラ切り痕は反時計回りで、表面の摩滅が著しい。475は椀底部。底部はヘラ切り痕を残す。底部は完存し、体部は全くない。表面の摩滅が著しい。476は土釜脚部。脚部の下半部は欠損。

ＳＰ2203（第93図）

ＳＢ15の北東部で検出した。円形で直径30cm、深さ19cmである。埋土中から土師器杯が出土した。時期は13世紀代と考えられる。

477は土師器杯Ｄ。

ＳＰ3104（第93図）

ＳＢ17の南西部で検出した。円形で直径21cm、深さ９cmである。埋土中からは土師器杯が２／３ほど遺存した状態で出土した。

478は土師器杯。底部外面はヘラ切りで板圧痕が残る。13世紀代と考えられる。

ＳＰ3105（第93図）

３区①と１区②の境付近で検出したピットである。ＳＢ12の北東側で検出した。直径51cm、深さ10cmである。埋土中から土師器杯が出土した。13世紀代のものと考えられる。

479は土師器杯Ｄ。

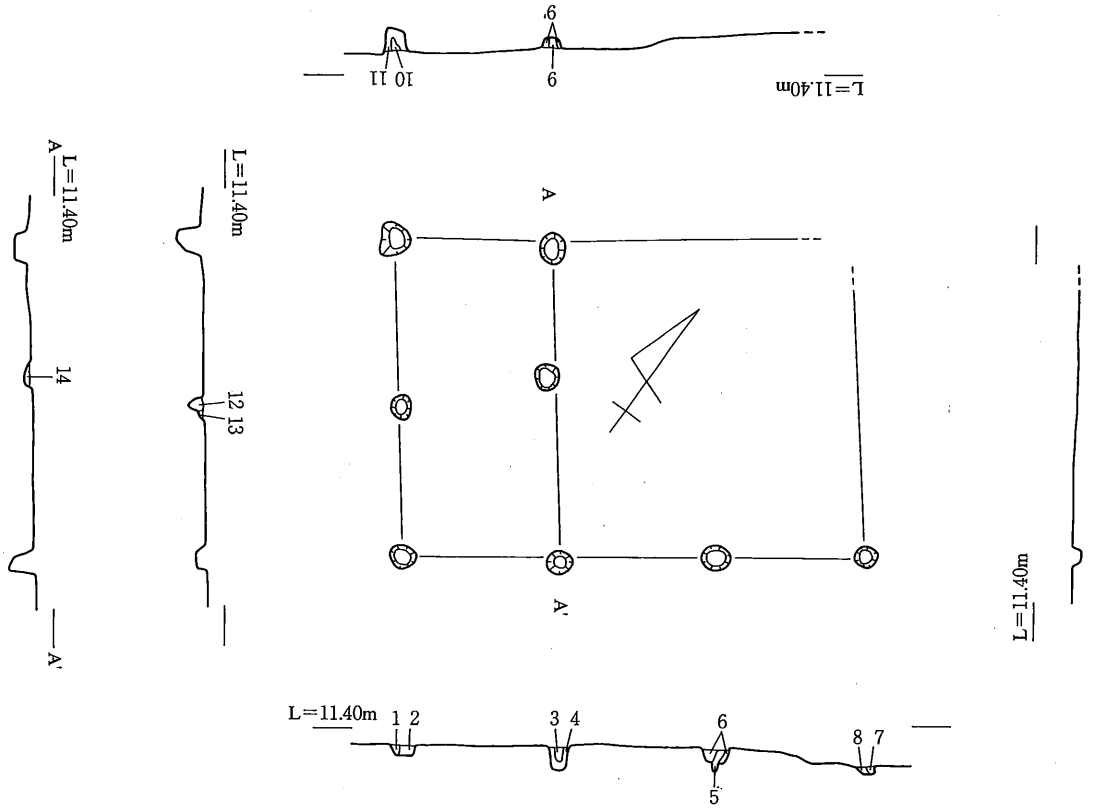
ＳＢ16（第94図、図版17・31）

２区②で２間分検出した。南西側に延びて掘立柱建物となると考えられる。その場合は次の柱間での距離は2.2m以上となる。延長５ｍ、柱間は2.5m、方位はＮ28°Ｗである。柱穴は円形で直径30cm前後、深さ12～24cm、埋土は灰褐色砂混粘質土である。柱穴の深さは川側（北東側）ほど浅く、山側（南西側）ほど深く、柱穴の底のレベルはあまり変わらない。埋土中からは土師器小皿・杯、須恵器椀、白磁碗などが出土した。12世紀後半。

480～482は土師器小皿。483は土師器杯。484は白磁碗。

ＳＢ17（第95図、図版17）

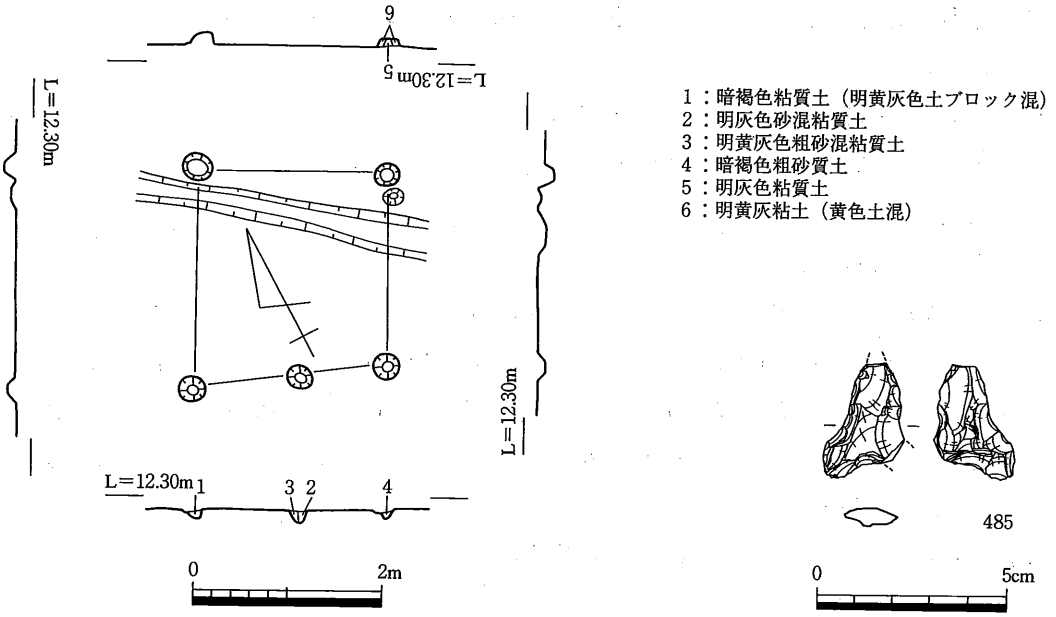
３区①南部で検出した掘立柱建物である。桁行３間（4.8m）、梁間２間（3.35m）、面積は15.68m²、方



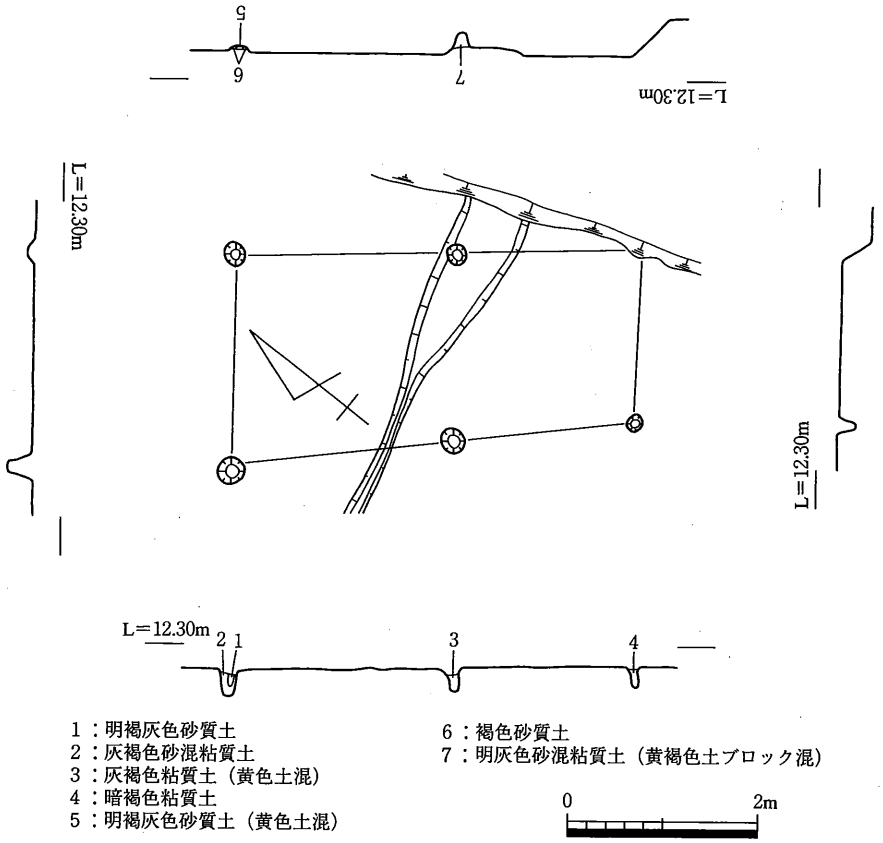
1：褐灰色砂混粘質土（柱痕）
2：灰褐色砂混粘質土
3：明褐灰色粗砂質土（柱痕）
4：明灰色粗砂質土
5：褐灰色粘質土（柱痕）
6：褐灰色砂混粘質土
7：灰色粘質土（８の埋土を含、柱痕）
8：灰褐色粗砂混粘質土
9：明灰褐色砂質土（柱痕）
9'：９によく似るがやや明るい
10：明灰褐色粗砂混粘質土（柱痕）
11：明灰色粘質土
12：灰褐色粘質土（柱痕）
13：明灰色粗砂混粘質土（地山ブロック混）
14：褐灰色粗砂混粘質土

0　2m

第95図　ＳＢ17平・断面図（１／80）



第96図　ＳＢ18平・断面図（１／80）出土遺物（１／２）



第97図　ＳＢ19平・断面図（１／80）

位はＮ55°Ｅである。南西側に間仕切りを持つ。北西側の桁行の柱筋の柱穴が北東の２穴が欠けているが、この付近は遺構面が下方へ傾斜していく場所であり、ピットは消失したとも考えられる。柱間は1.5～1.75m、柱穴は円形で直径22～26cm、深さ８～26cm、埋土は概ね灰褐色粗砂混粘質土である。出土遺物はないが、ＳＰ3105と関連があると考え、同じくらいの時期とした。

ＳＢ18（第96図、図版15・90）

３区⑤下段中央部付近で検出した掘立柱建物である。桁行２間（2.0m）、梁間１間（2.0～2.34m）、面積は4.34㎡、方位はＮ28°Ｅである。桁行き北側の柱列は中央の柱がない。柱穴は円形で直径24㎝程度、深さは12㎝前後である。埋土中からは石鏃のほかは土師器の小片が出土しただけであった。時期は柱穴の配列の歪さや遺構の広がり方から中世としたが、曖昧さは残る。

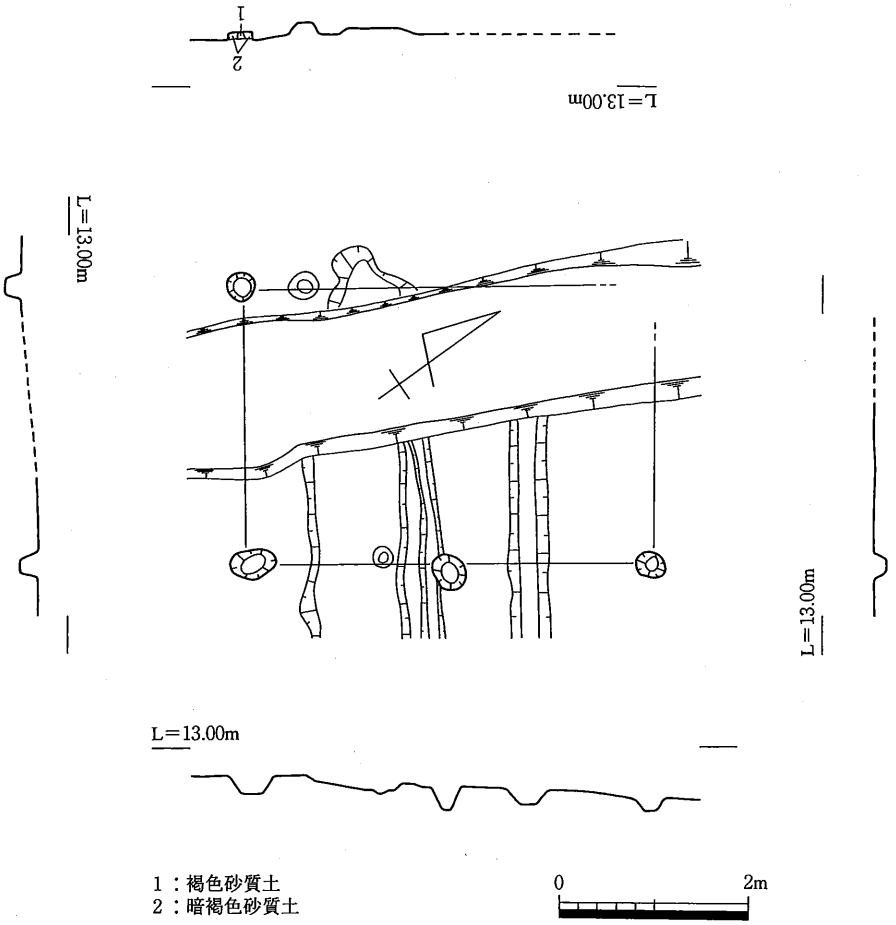
485は石鏃。サヌカイト製。凹基式。基部の片側と先端部が欠損している。

ＳＢ19（第97図、図版17）

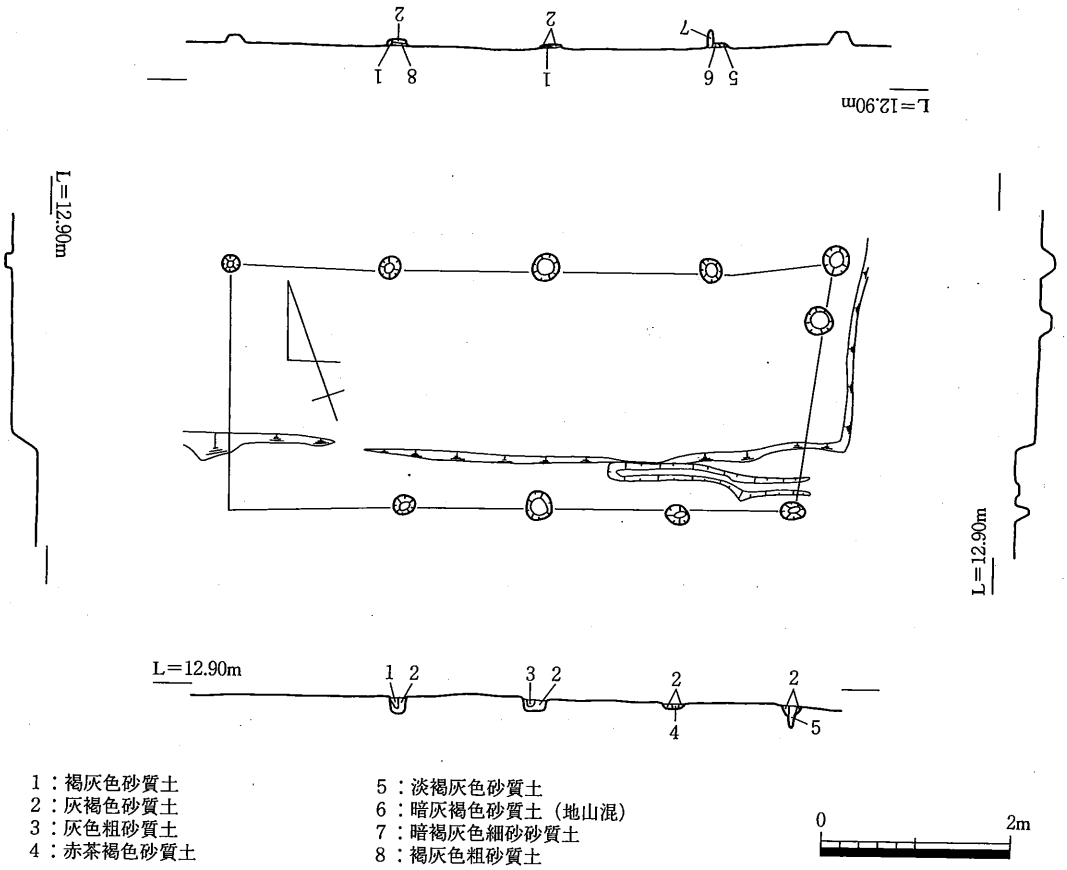
３区⑤下段南東部で検出した掘立柱建物である。桁行２間（4.25m）、梁間１間（2.3m）、面積は9.775㎡、方位はＮ44°Ｗである。柱間は1.9～2.35m、柱穴は円形で直径16～22㎝、深さ６～27㎝、埋土は褐色粘質土、柱穴埋土中からは土師器小片、亀山焼甕、焼けた石などが出土した。ＳＤ3504を切る。時期は13世紀代と考えられる。

ＳＢ20（第98図）

３区⑤上段北端部で検出した。ＳＤ3501・ＳＤ3507と重複する位置で検出している。一部３区③へ跨る。方位はＮ34°Ｅで、ＳＤ3501等とは直交する。北側柱穴列のうち、西側２穴は、調査区の境に当たって未調査地となり、検出していない。桁行２間（4.2m）、梁間（3.0m）で面積は推定12.6㎡である。柱間は2.1m、柱穴は円形で直径30～32㎝、深さ13～24㎝、埋土は灰褐色砂質土・粘質土である。埋土中からは須恵器小片、土師器小片しか出土せず、明確な時期は不明であるが、掘立柱建物を構成するピットのうち１穴がＳＤ3501を切っており、それより新しい。



第98図　ＳＢ20平・断面図（１／80）



第99図　ＳＢ21平・断面図（１／80）

ＳＢ21（第99図、図版17）

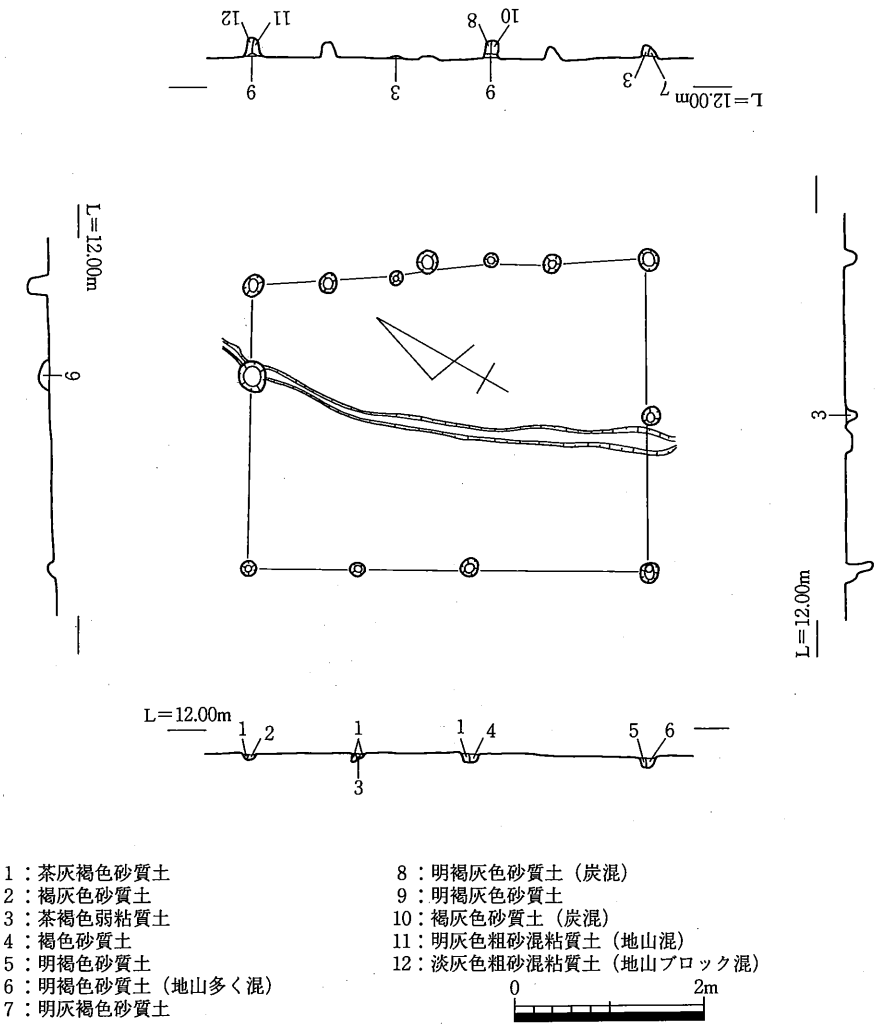
３区③南部、３区④・⑤境付近で検出した掘立柱建物である。ＳＤ3501Ａと重複する位置にあるが、前後関係は明らかではない。桁行３間（4.7m）、梁間１間（2.5m）、面積は11.75㎡で、方位はＮ69°Ｗである。柱間は1.65～1.85m、柱穴は円形で直径20㎝、深さ6～18㎝、埋土は暗灰褐色砂質土である。柱穴からは須恵器甕やサヌカイト片が出土した。時期は不明である。ＳＤ3501・3507とは方向が異なりおそらく関係ないと考えられること、ＳＢ20が近接しており、時期はこの掘立柱建物とあう可能性があろう。

ＳＢ22（第100図、図版18）

６区①北西隅で検出した。ＳＤ6102とＳＤ6104に囲まれる位置である。桁行は山手側が３間（4.2m）、平野側が６間（4.0m）、梁間は２間（3.0～3.25m）、柱間は平野側が0.3～1.0m、他は1.0～2.0mである。柱穴は円形で直径15～23㎝、深さ６～12㎝、埋土は灰褐色砂質土である。方位はＮ29°Ｗで、周囲の溝や現状地割と同じである。柱穴埋土中からは土師器杯が出土した。時期は決めがたいが、ＳＤ6102～6104と関連性が高いと考えられることから13世紀代と考えられる。

ＳＢ23・24（第102図）

６区②北西部私道際、ＳＤ6202の平野部側約１ｍの位置で検出した。南東側の柱穴列は狭い間隔で２列並列しており、北西側柱穴列はピットが２穴ずつ重なる。建て替えの可能性が高く、柱穴の切り合い関係からＳＢ24の方が新しい。



第100図　ＳＢ22平・断面図（１／80）

ＳＢ23は桁行２間（3.3m）、梁間１間（2.55～2.75）m、面積は8.475m²で、方位はＮ52°Ｅである。柱穴は直径30～35cm、深さ12～16cm、埋土は概ね褐灰色砂質土である。柱穴埋土中から土師器竈の小破片が出土した。

ＳＢ24は桁行２間（3.6m）、梁間１または２間（1.9～2.2m）、面積は7.38m²で、方位はＮ55°Ｅである。柱穴は円形、隅丸長方形で直径または１辺30～40cm、深さ16～30cmで埋土は概ね褐灰色粘質土混砂質土（黄色土混）である。柱穴埋土中からは出土遺物はなかった。

出土遺物は少なく時期の特定はしにくいが、ＳＤ6202との関連性からＳＤ6202と同時期としておく。

ＳＰ3501（第103図）

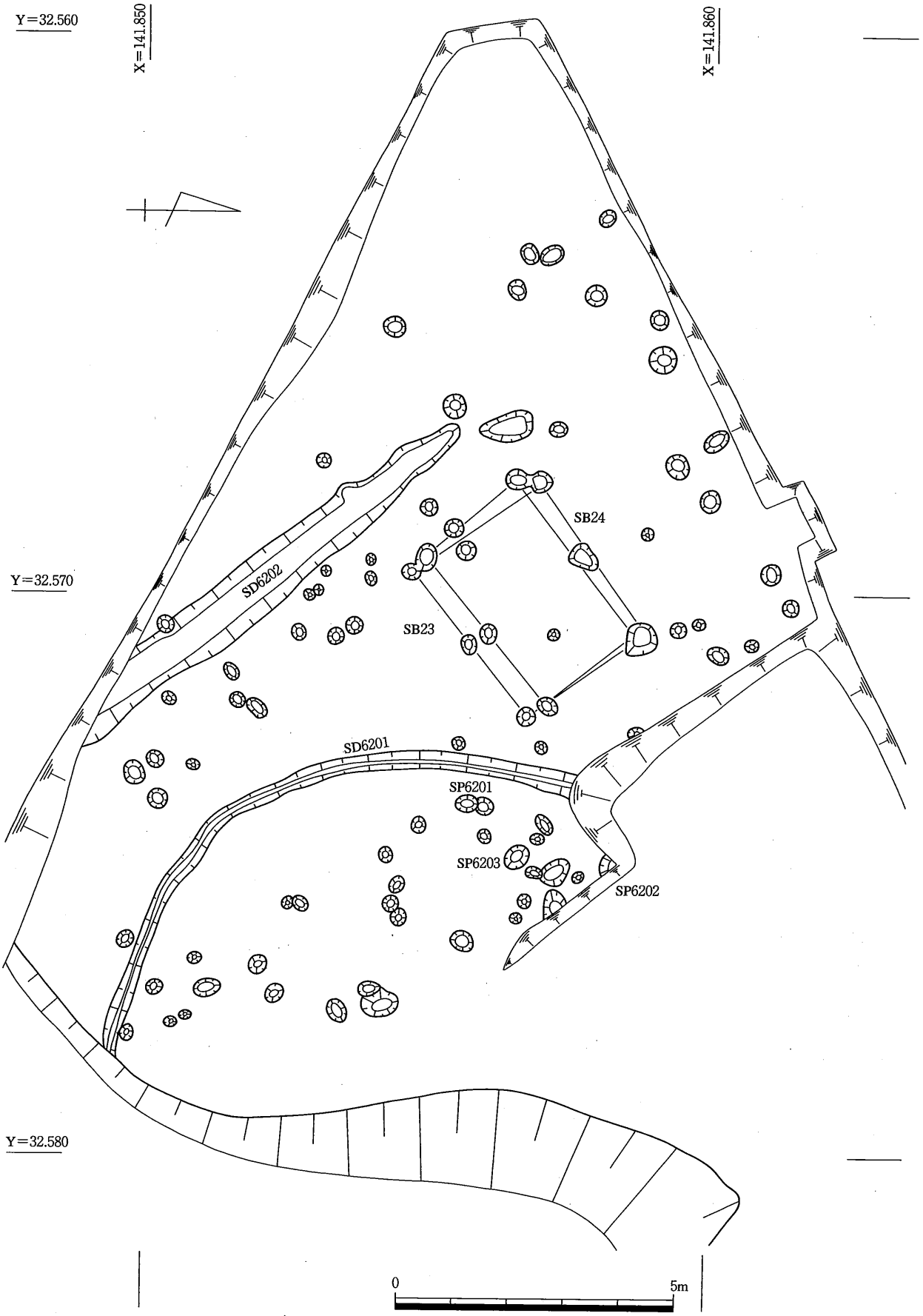
３区⑤下段、ＳＢ19とＳＢ13の中間付近で検出したピットである。直径42cm、深さ17cm、埋土は明灰色粗砂質土である。埋土中からは土師器杯が出土した。

486は土師器杯。13世紀後半頃と考えられる。

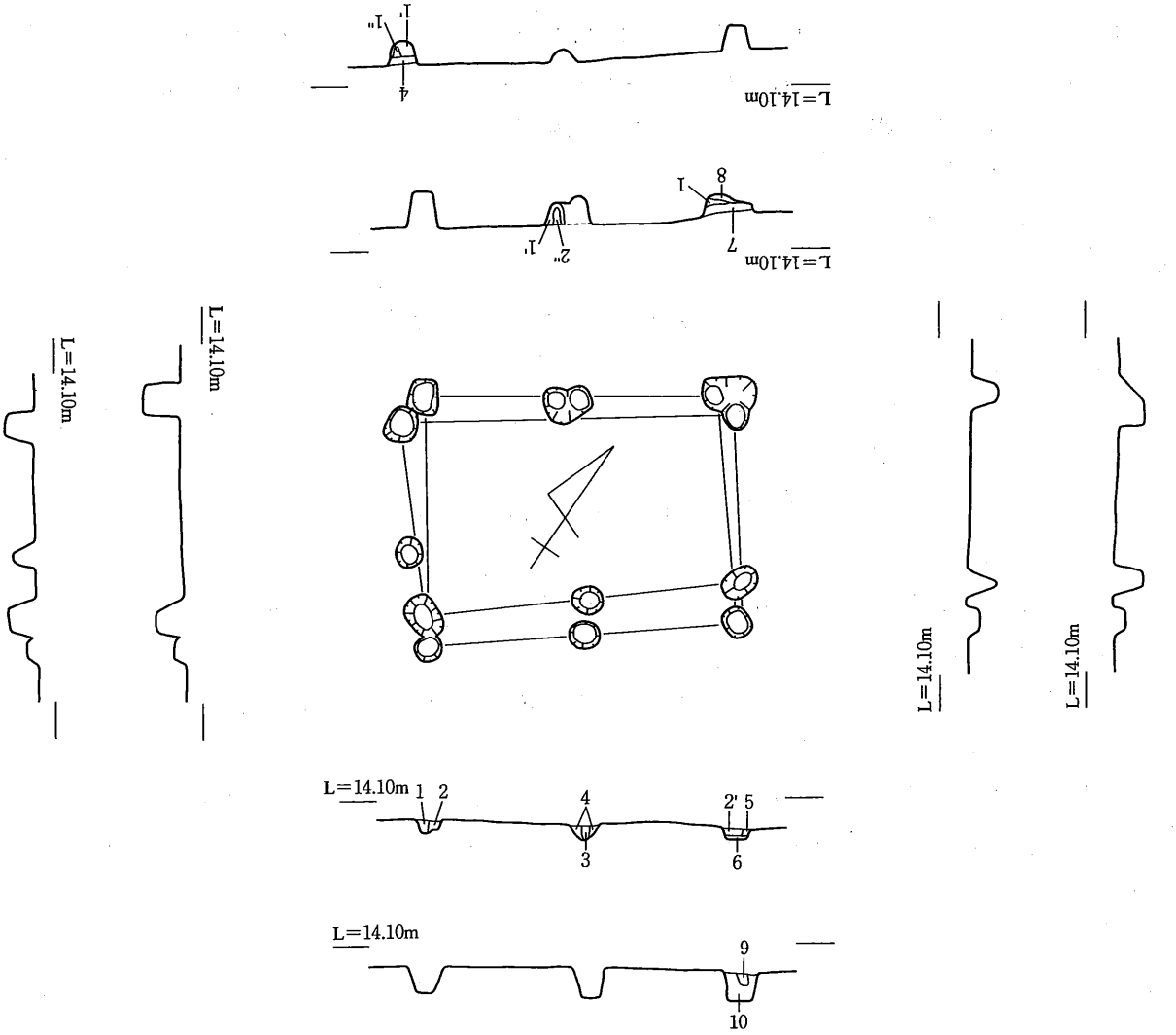
ＳＰ3404（第103図）

３区④下段３区⑤との境付近の中央付近で検出したピットである。直径25cm、深さ11cm、埋土は灰褐色粗砂混砂質土である。埋土中からは土師器杯が出土した。

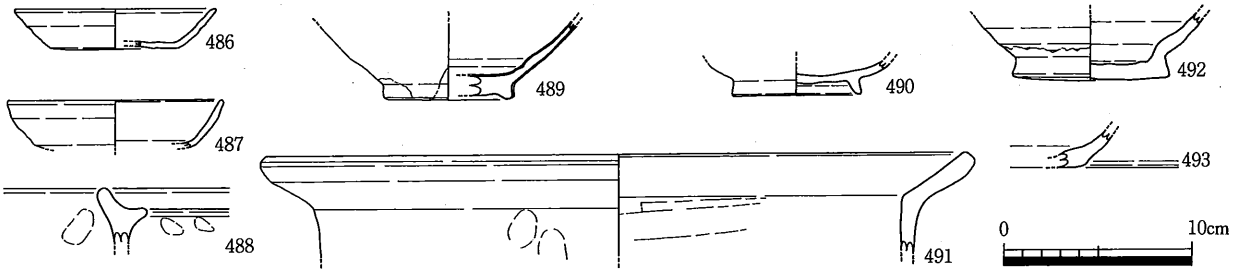
487は土師器杯。13世紀代と考えられる。



第101図　6区②遺構配置図(1／100)



第102図　ＳＢ23、ＳＢ24平・断面図（１／80）



SP3501　486　　SP3404　487　　SP4102　488
SP6201　489　　SP6202　490　　SP6203　491　　５区トレンチ　492・493

第103図　ＳＰ3501、ＳＰ3404、ＳＰ4102、ＳＰ6201～ＳＰ6203、５区ﾄﾚﾝﾁ出土遺物（１／４）

ＳＰ4102（第103図）

４区①山手側で検出したピットである。等高線が急になっている場所であり、周囲は遺構は希薄である。直径32cm、深さ17cm、埋土は暗黄灰色粗砂混砂質土である。埋土中からは土師器足釜片が出土した。

488は土師器足釜の口縁部破片。14世紀末～15世紀初頭。

ＳＰ6201（第103図）

６区②ＳＢ01東南方向のピット群の内のピットである。直径30cm、深さ10cmである。埋土中からは白磁碗の底部が出土した。

489は白磁碗底部。釉は高台部分まであまり及んでいない。12世紀後半。

ＳＰ6202（第103図）

ＳＢ23・24の東南方向のピット群のなかのピットである。大半は削平により失われる。深さ45cmである。埋土中から土師器椀が出土した。

490は土師器椀底部。磨滅が著しく、調整は不明。吉備系土師器椀。

ＳＰ6203（第103図）

ＳＢ23・24の東南方向のピット群のなかのピットである。直径45cm、深さ29cmである。埋土中からは土師器甕破片が出土した。

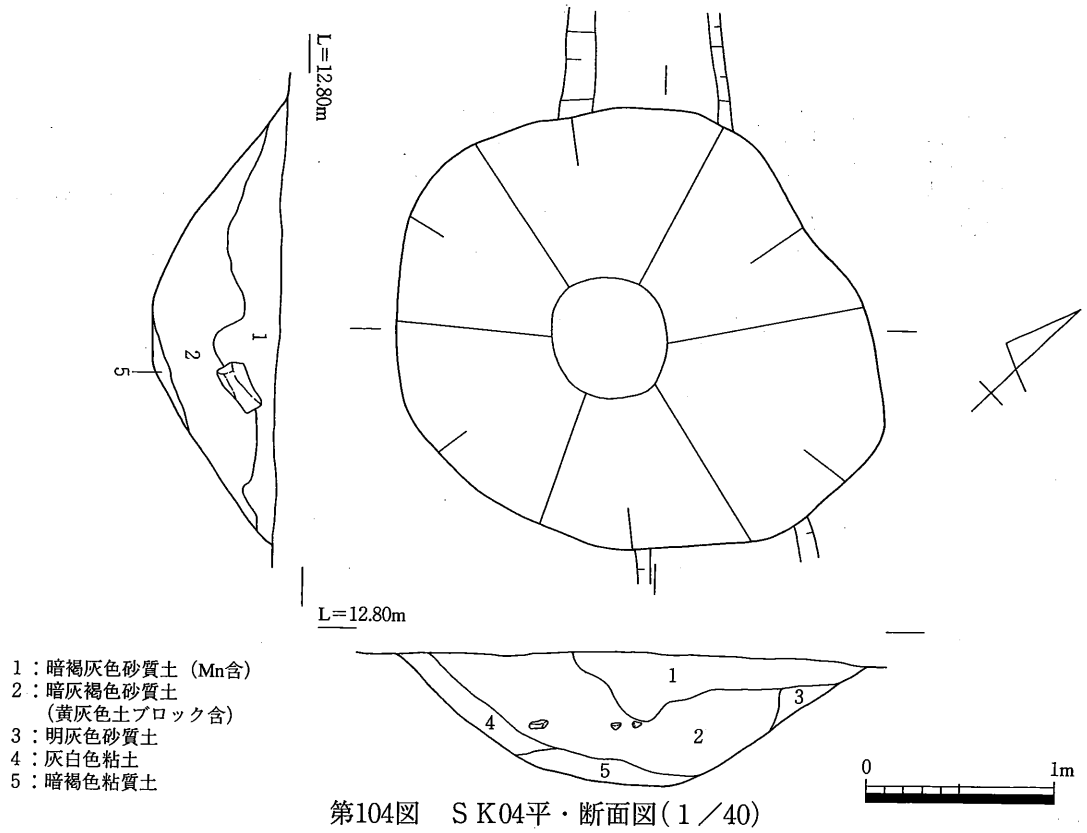
491は土師器甕Ｆ。内面は板ナデし、外面にはあまり調整痕を残さない。11世紀中～12世紀前半。

５区　予備調査出土土器（第103図）

５区を予備調査した際に出土した土器である。周辺は急傾斜地で、周囲に遺構はみられない。

492は円盤状高台を持つ。493は土師器杯。小片で摩滅が著しい。時期は11世紀後半頃。

(2)土坑等

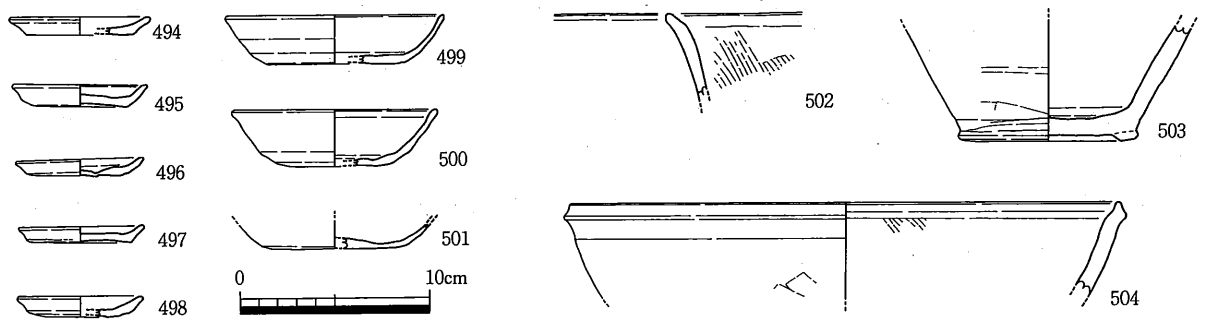


第104図　ＳＫ04平・断面図（１／40）

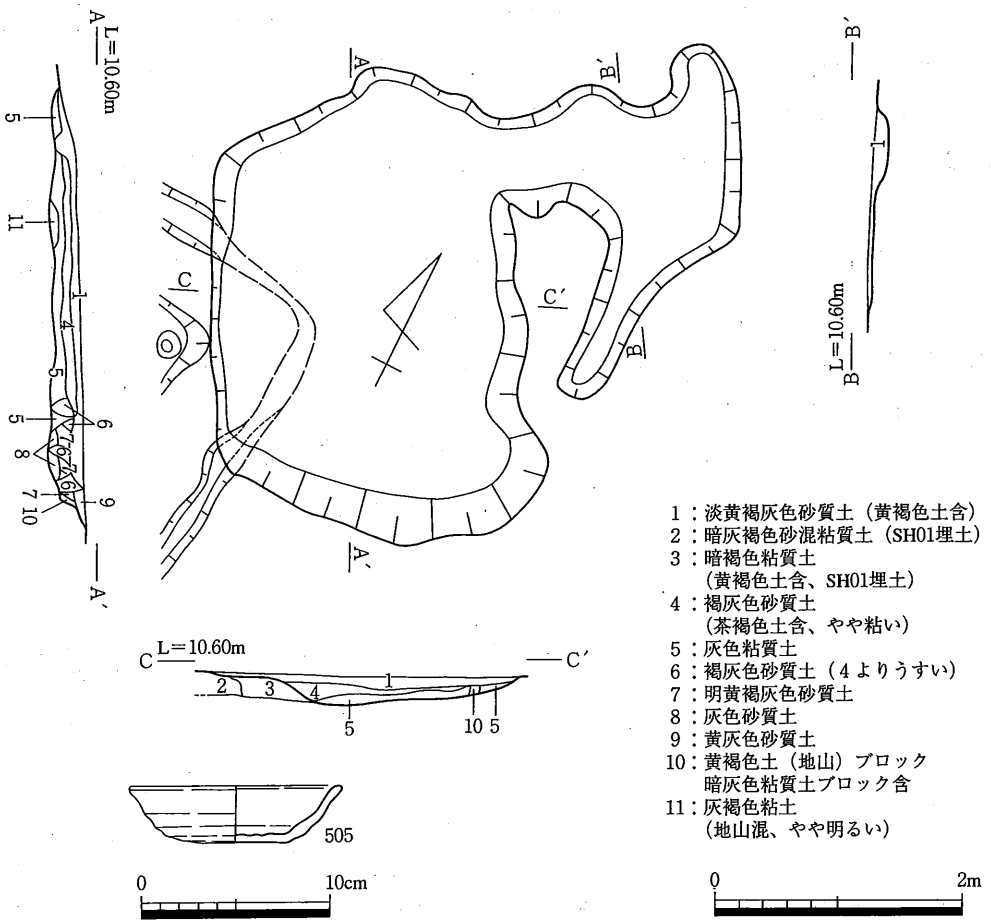
ＳＫ04（第104・105図、図版18・31）

３区⑤上段中央部やや南東寄りで検出した土坑である。円形で直径2.35～2.45m、深さ70cm、埋土は最底部は暗褐色粘質土、上部は暗灰褐色砂質土（地山ブロックを含む）で、断面形状は擂鉢形である。ＳＤ3501を切る。埋土中からは須恵器壺底部、捏鉢、土師器杯・小皿・竈等が出土した。やや古い遺物が混じるものの、土師器杯・小皿から埋没時期は13世紀後半と考えられる。古い遺物はＳＤ3501を掘り込んだ際に巻き込んだものと考えられる。

494～498は小皿。口径はだいたい６cm前後に収まる。499～501は土師器杯Ｄ。口径は概ね11cm程度に収まる。502は竈の受け口部分。口縁端部外面部分が黒く変色している。503は須恵器壺底部。外面下部は板ナデをしている。高台の接地部分が非常に摩滅している。504は須恵器捏鉢。西村産。502・503は10世紀前後、504は12世紀後半頃、あとは13世紀後半頃と考えられる。



第105図　ＳＫ04出土遺物（１／４）



第106図　ＳＸ02平・断面図（１／60）出土遺物（１／４）

ＳＸ02（第106図）

１区②で検出した。不定形の落ち込みでＳＨ01を切る。深さは16㎝、埋土は褐灰色砂質土である。ＳＲ01がオーバーフローしたものの可能性もある。埋土中からは土師器杯が出土した。

505は土師器杯Ｄ。完形でロクロ痕が顕著に残る。底部には左回りのヘラ切り痕が残る。13世紀中～後半と考えられる。

(3)溝

ＳＤ6202（第107図）

６区②山手側で検出した溝である。北西側はＳＢ23・24の西側柱筋付近で消失する。幅92㎝、深さ14㎝、埋土は上層が暗茶褐灰色粗砂混粘質土、下層が明灰褐色砂質土で、断面形はなだらかな鉢形である。概ね現地割に沿い、ＳＢ23・24ともほぼ直交する。また、この溝の私道を越えた延長上には調査前までの水田境がある。埋土中からは土師器杯・椀、黒色土器Ａ椀、須恵器甕が出土した。時期は11世紀後半～12世紀前半と考えられる。

遺物は摩滅したものが多い。506・507は土師器小皿。508は土師器椀。509は石器。石庖丁。サヌカイト製。半分以上が欠損。側縁に抉りを入れる。

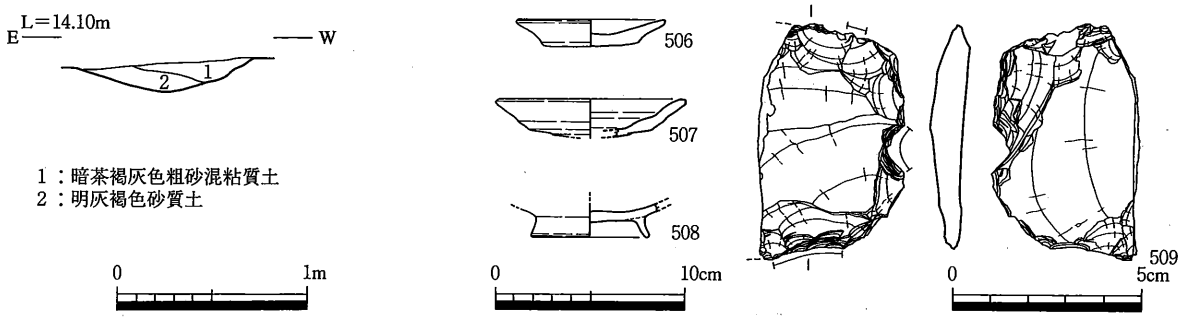
ＳＤ6102（第108図）

６区①北西部で検出した溝である。幅30㎝、深さ３㎝、埋土は灰褐色粘質土混砂質土で、断面形状は浅い皿状である。方向は現状地割に沿う。南東側約2.5ｍの位置にＳＤ6103が平行して走り、ＳＤ6103とともに道路状遺構の側溝となる可能性もある。また、ＳＤ6104が直交して山手側へ取り付き、ＳＤ6102とＳＤ6104の西側ではやはり方位を揃えてＳＢ22を検出しており、区画のための溝と考えられる。ＳＢ22との距離は50㎝である。出土遺物はないが、ＳＤ6104との関連性から13世紀代の溝と考えられる。

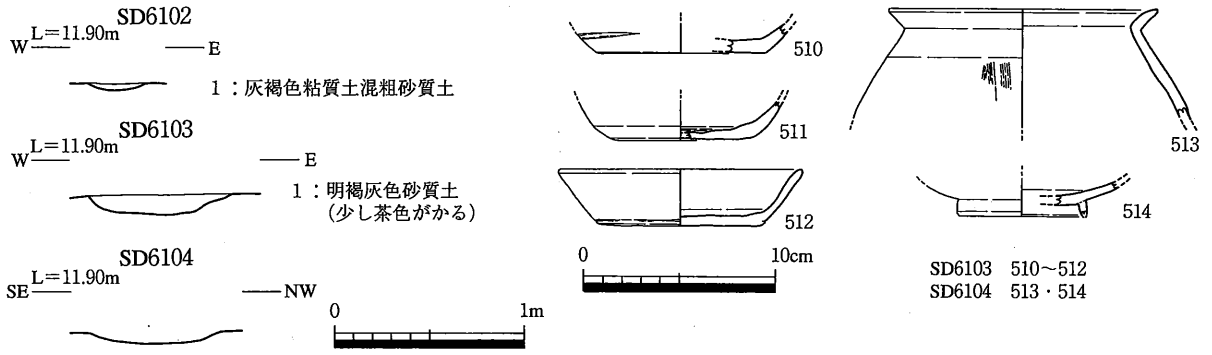
ＳＤ6103（第108図）

６区①北西部で検出した。幅75～120㎝、深さ10㎝、埋土は灰褐色粗砂混粘質土でＳＤ6202に似る。断面は浅い皿状である。現状地割に沿い、ＳＤ6202と平行する。ＳＤ6202の南東側（平野側）2.5ｍの位置し、２条の溝の間は道路状遺構になる可能性がある。埋土中からは摩滅の著しい弥生土器片、須恵器甕・杯、土師器杯・小皿などが出土している。

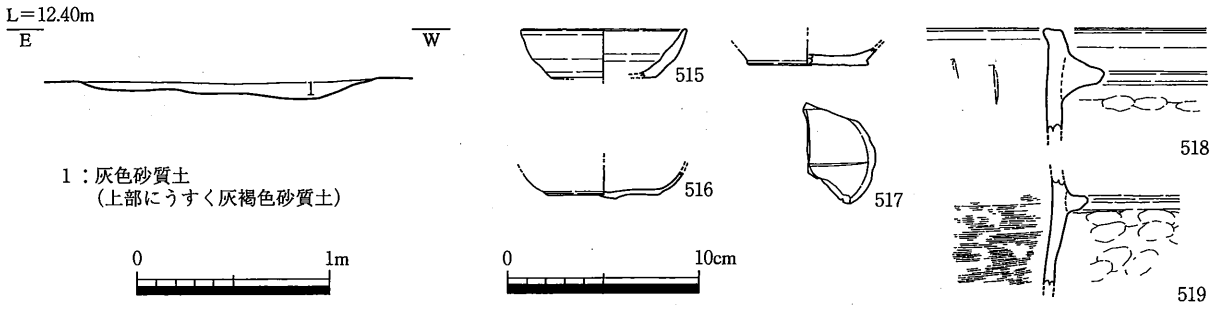
510～512は土師器杯。510は底部から少しあがった場所で全体的にきれいに割れている。底部外面のヘラ切り痕は丁寧にナデ消されている。時期は概ね13世紀代と考えられる。



第107図　ＳＤ6202断面図（１／40）出土遺物（１／４、１／２）



第108図　ＳＤ6102～ＳＤ6104断面図(１／40)出土遺物(１／４)



第109図　ＳＤ3503断面図(１／40)出土遺物(１／４)

ＳＤ6104（第108図）

６区①北西部で検出した溝である。ＳＤ6102に直交して西側へ取り付き、ＳＤ6102の東側へは延びない。ＳＢ22の梁間との距離は約40cmである。幅71cm、深さ２cmである。おそらくＳＤ6102とともにＳＢ22を含む土地の区画となるものであろう。埋土からは弥生土器、土師器杯が出土した。

513は弥生土器甕。全面剥離している。ＳＤ6104はＳＨ08を壊しているのでその遺物が混入したのであろう。514は吉備系土師器椀。時期は概ね13世紀代と考えられる。

ＳＤ3503（第109図）

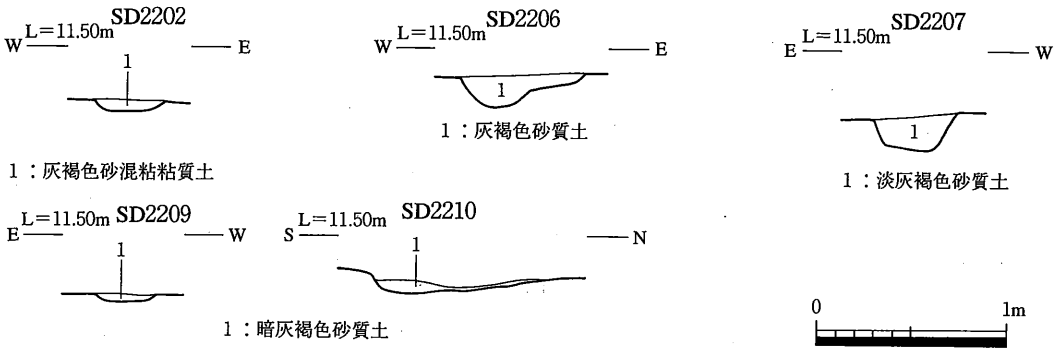
３区⑤下段東部で検出した東西方向の溝である。概ね地割に沿う。西半部は削平のため失われる。幅153cm、深さ10cm、埋土は灰色砂質土である。埋土中からは土師器杯・羽釜Ｃ・足釜脚部、青磁碗、備前焼擂鉢などが出土した。備前焼擂鉢を除けば概ね13世紀後半～14世紀前半と考えられる。

515～517は土師器杯。底部はいずれもヘラ切り。517は杯Ａ。体部と底部の境で全体的に割れており、底部にヘラ記号らしいものがある。他の遺物に比べやや先行する時期のものと思われる。515・516は杯Ｄ。518は土師器羽釜Ｃ。口縁端部は内傾させ、口縁部内面内側に稜線を持たせる。519は脚釜。口縁形態は不明。内面には密にハケを施し、外面の鍔下部には煤が付着する。

５．時期不明の遺構

ＳＤ2202（第110図）

２区②南西部で検出した溝である。幅36cm、深さ６cm、埋土は灰褐色砂質土で断面形状は浅い皿状である。ＳＤ2206・2207と平行する。ＳＤ6103の延長上に近い位置にあるが、同一遺構かどうかは不明である。出土遺物はなく時期は不明である。



第110図　ＳＤ2202、ＳＤ2206、ＳＤ2207、ＳＤ2209、ＳＤ2210断面図（１／40）

ＳＤ2206（第110図）

２区②南部で検出した溝である。断面形状は東側が１段上がってテラス状になる。幅63cm、深さは東側が６cm、西側は16cm、埋土は灰褐色粘質土である。ＳＨ07を切る。ＳＤ2207とほぼ平行に走る。出土遺物はなかった。時期は不明である。

ＳＤ2207（第110図）

２区②南部で検出した溝である。幅44cm、深さ17cm、断面形状は逆台形で、埋土は灰褐色砂質土である。ＳＤ2206南側約1.2mの位置を走る。周溝の南側では検出していない。出土遺物はなく、時期は不明である。

ＳＤ2209・2210（第110図）

２区②北部で検出した溝（ＳＤ2210）と、それにほぼ直交する溝（ＳＤ2209）である。ＳＤ2209はほぼ等高線に直交し、ＳＤ2202・2206・2207の方向と似る。ＳＤ2210は等高線には斜交する。ＳＤ2210は幅100cm、深さ10cm、断面形状は浅い皿状、埋土は灰褐色砂質土でＳＤ2209は幅43cm、深さ３cm、埋土はＳＤ2210と同じ灰褐色砂質土である。ともに出土遺物はなかった。時期は不明である。

6．自然河川

ＳＲ01（第112～116図、図版18）

４区③から１区②へかけて検出した谷筋で、微高地の西側を限るものである。この西側の谷筋は全域にわたってＳＲ01とした。しかし、４区③に発する自然河川は、４区②の南側を西から東へ流れ、４区②の中央部南側から入る流路を切って流下するものの、その後３区③へ繋がるのかどうかは、４区と３区の間の距離がややあり、位置的には繋がっていると考えてもおかしくはないと思われるが、埋土や出土遺物からは別の流路である可能性も充分ある。

４区③と４区②の延長距離は75m、比高差は4.1cmである。４区②と３区③の間には延長距離は24m、高低差は2.7mの未調査部分があり、また、土層の堆積状況も４区②部分と３区③部分は対応関係が明確にできず、直接的に結びつくかどうかは疑問の余地がある。

３区③から１区②にかけては概ね連続的に調査区が設定されており、土層の堆積状況の対応関係もだいたい追える。３区③から１区②まで標高差約2.6m、延長距離約67m、流路は若干西へ膨らんでいる。傾斜は３区③南端から１区①北端にかけてが急で、１区①北端から１区②南端はなだらかである。３区③から１区①にかけては、大きい谷筋の上面から２条の流路が切っている。遺物の大半はここから出土している。

ＳＲ01の掘削は各調査区ごとでトレンチを掘削後概ね層位ごとに掘削を行うことを心がけた。しかしながら、各調査区ごとで統一した層名では遺物の取り上げを行っておらず、土層図と遺物取り上げラベルの層名を照らし合わせながら復元を試みた。復元の方法は遺物取り上げラベルの層名と土層図の対照の比較的しやすかった３区③と１区①を基準に行った。３区③と１区①は大きい谷筋に２条の流路が刻まれて、その包含層の埋土が堆積する様子がよくわかったことで遺物取り上げラベルとの対応も比較的容易であった。２条の流路の行方をたどりながら、１区②の流れの予測を行った。４区については先述した事情で、層位の対応関係が不明瞭であった。ＳＲ01からはコンテナ43箱分の遺物が出土した。

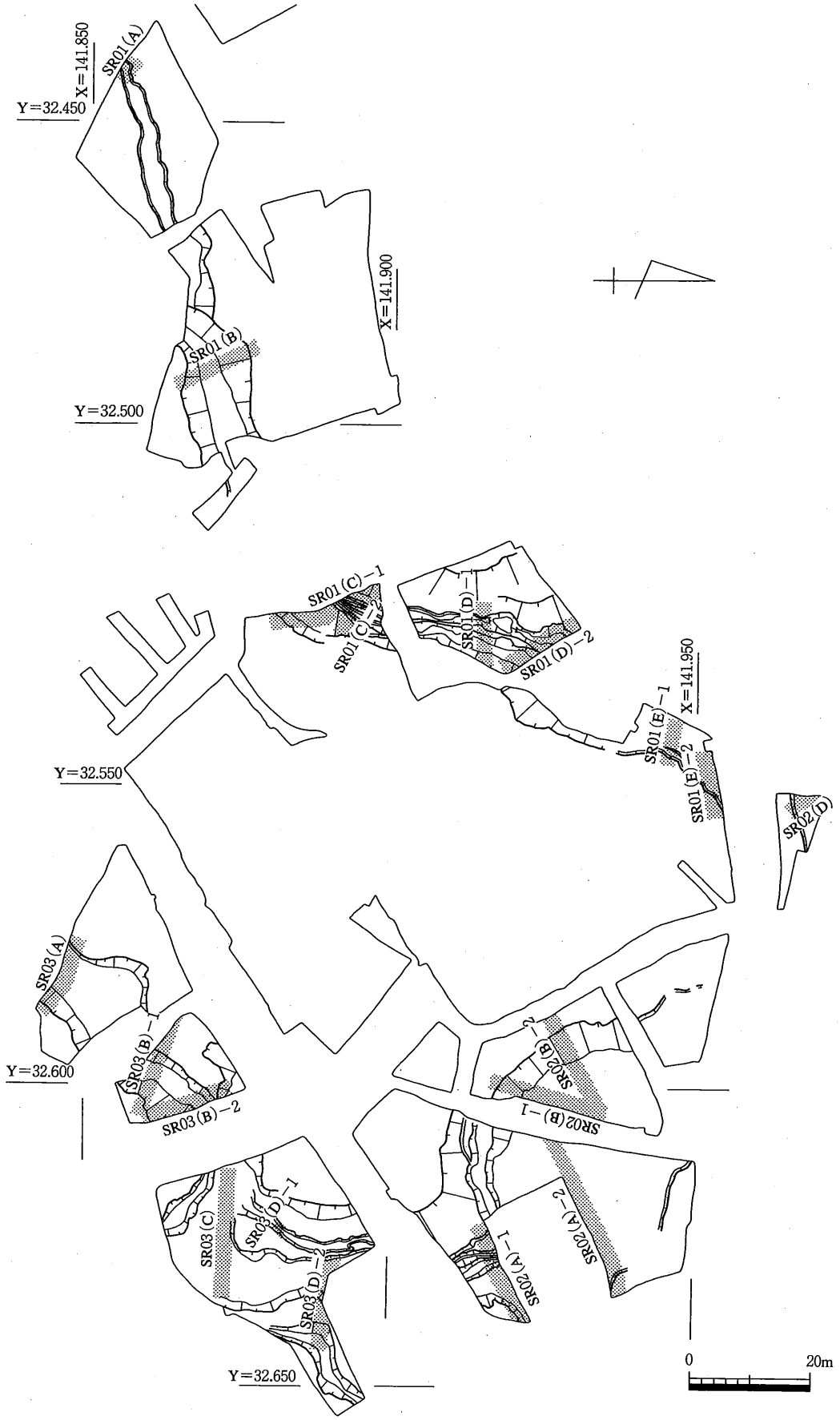
ＳＲ01Ａ（第112・117図、図版31）

４区③を西から東へ流れる流路である。西端から東端までの比高差4.1m、幅3.7m、深さ62cm、埋土は上層に暗褐色粘質土、下層に灰褐色砂質土（礫混）、断面形はなだらかな半円形である。遺物はほとんど含まない。流れはそれほど急ではなかった。この流路はＳＲ01Ｂの西半部に続くが、その後は不明である。ここからは12世紀代の土師器が出土した。

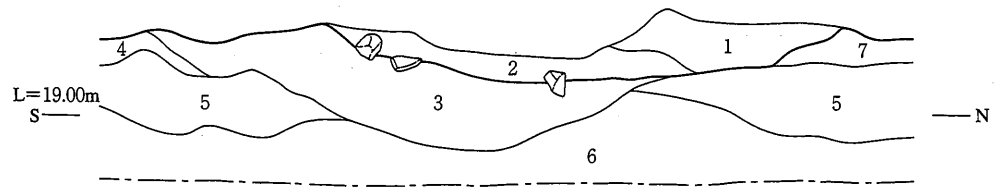
520・521はＳＲ01Ａから出土した。520は土師器杯。底部はヘラ切り後板ナデをする。521は土師器椀。外面の高台の上部１段分を全体に指押さえする。12世紀代。

ＳＲ01Ｂ（第112・117図、図版18・31）

４区②の南部を西から東へ流れる流路を指す。この流路は４区②西側から入ってくる、４区③から続く流路と、４区②中央部付近から南から入る流路の両方が含まれる。４区③から続く方は、川の南方は調査区外へ延びるため、幅は不明であるが、6.6m以上、深さ70cm、埋土は黄灰色～灰色～灰褐色砂質土で、出土遺物はなかった。有機物を含まない川である。流れはあまり急ではなく、土壌化された層に近い。この川の行方は不明である。南から入ってくる流路については幅12m、深さ55cm、埋土は下層に礫、上層に暗灰色系の粘質土、最上層にそれらを切って褐色砂を中心とするラミナ層が見られる。当初流れが急であったものが、一定期間滞水状況にあり、再び急な流れが見られたと思われる。遺物は暗灰色粘

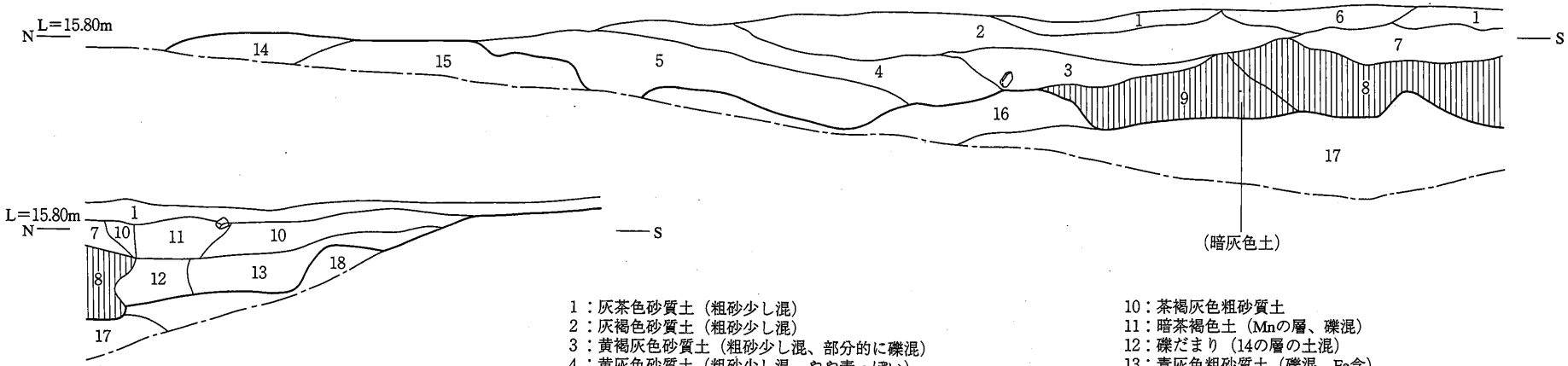


第111図　ＳＲ01～ＳＲ03土層図作成位置図（１／1,000）



SR01（A）

1：暗褐色砂質土
2：暗褐色粘質土
3：灰褐色砂質土（礫混、Mn多）
4：黄茶灰色粗砂質土（固い）
5：黄褐色粗砂質土
6：黄青灰色礫混砂質土
7：黄茶褐色粗砂質土（上部にFe、下部にMn含）

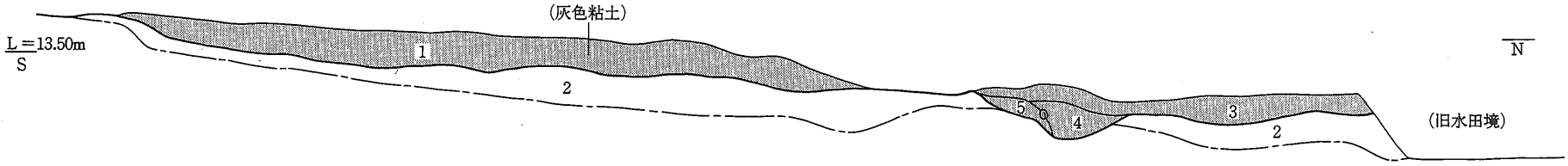


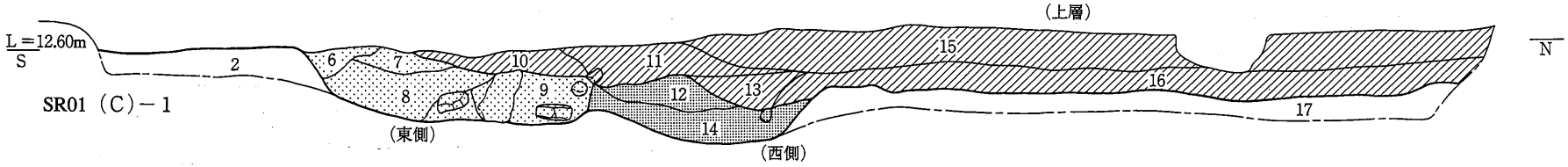
SR01（B）

0　1m

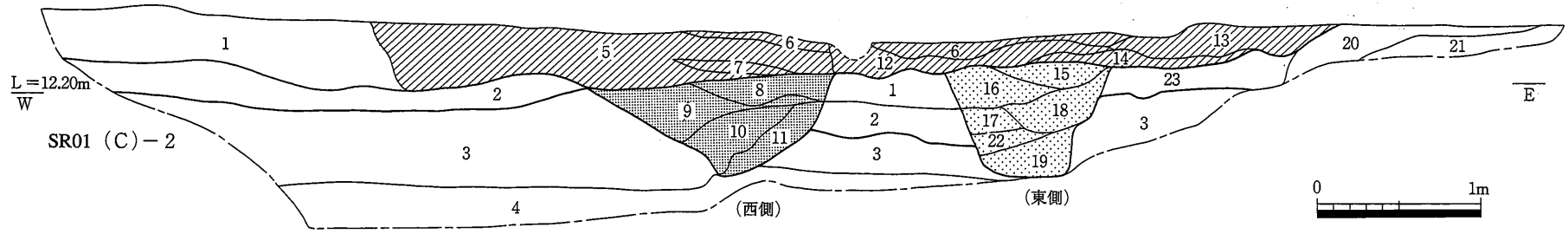
1：灰茶色砂質土（粗砂少し混）
2：灰褐色砂質土（粗砂少し混）
3：黄褐灰色砂質土（粗砂少し混、部分的に礫混）
4：黄灰色砂質土（粗砂少し混、やや青っぽい）
5：灰色粗砂質土（礫、くさり礫混）
6：褐色粗砂質土＋礫
7：上半　暗茶褐色土（Mn集積層）
　　下半　赤茶褐色砂質土（Fe集積層）
8：暗灰色砂質土（砂混、Fe含）
9：暗灰色砂質土（粗砂少し混、Fe含）
10：茶褐灰色粗砂質土
11：暗茶褐色土（Mnの層、礫混）
12：礫だまり（14の層の土混）
13：青灰色粗砂質土（礫混、Fe含）
14：明黄灰色粗砂質土（礫混）
15：明茶褐色粗砂質土（礫、くさり礫混）
16：明青黄灰色粗砂質土
17：礫、くさり礫（17の土混）
18：青灰色砂質土（粗砂混、Fe含、やや粘）

第112図　ＳＲ01(Ａ・Ｂ)土層図(1)(１／40)



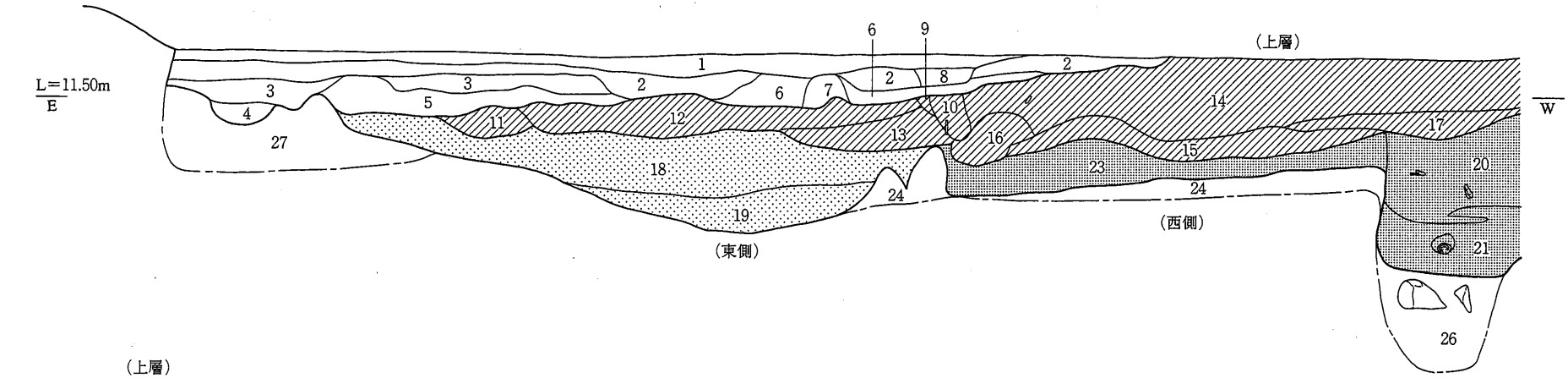


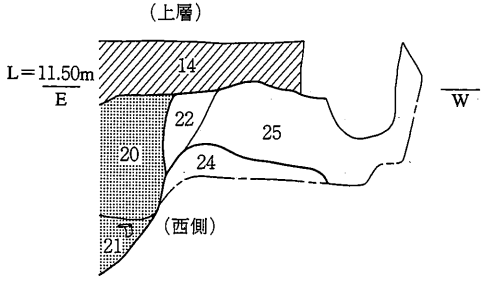
1．暗褐灰色砂質土（粗砂少し混、褐色土所々混）
2．暗褐灰色砂質土（粗砂少し混、明灰色土混）
3．青褐灰色砂混粘質土
（4より明るいがやや暗め、4より青みが強い）
4．暗青褐灰色粘質土（砂混）
5．黄青灰色砂混粘質土（やや暗め）
6．灰色粘土（砂少し混、やや紫っぽい）
7．黄褐色粗砂ブロック（明青灰色筋状にわずかに入る）
8．灰褐色粗砂、灰褐色粘土ラミナ（やや青っぽい）
9．砂礫（35cm大礫もあり）
10．青褐灰色砂質土（Fe混）
11．赤茶褐色砂質土（よくしまる）
12．青灰色砂質土（黄褐色くさり礫混）
13．暗青茶灰色砂混粘質土（Fe少）
14．明青灰色粗砂（礫、土器混）
15．暗灰褐色粗砂混砂質土
16．褐灰色粘質土混砂質土（Mn多）
17．明青灰色砂混粘質土（茶褐色土粗砂ブロック）



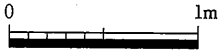
1．茶褐灰色粗砂混砂質土
2．灰色粘質土混粗砂質土（赤褐色粘質土ブロック多く混）
3．黄灰色粗砂質土
4．青灰色粗砂質土
5．暗茶褐灰色粗砂混砂質土
6．茶灰褐色粗砂質土
7．褐灰色礫混粗砂（ラミナ状）
8．灰褐色粗砂（黄褐色くさり礫混）褐灰色砂質土のラミナ
9．黒灰色細砂、灰褐色細砂（くさり礫混）のラミナ
10．褐色砂
11．褐色砂、黒灰色細砂ラミナ
12．明青灰色細砂、褐色砂ラミナ
13．黒褐色粗砂質土
14．灰褐色粘土
15．赤褐灰色粗砂質土（Fe含、黄褐色くさり礫含）
16．褐灰色粗砂混粘質土
17．褐灰色粗砂混粘質土（16よりやや青っぽい）
18．灰褐色砂質土（褐色砂部分的に混）
19．茶褐灰色砂混粘土（水分が多）
20．明褐灰色粗砂混砂質土（茶褐色土混、Fe含）
21．明褐灰色粗砂混砂質土（20よりFeが多）
22．明灰色粗砂質土（3のブロックが一部減る）
23．褐色細砂、灰褐色粘土のラミナ

第113図　ＳＲ01(Ｃ)土層図(2)(１／40)



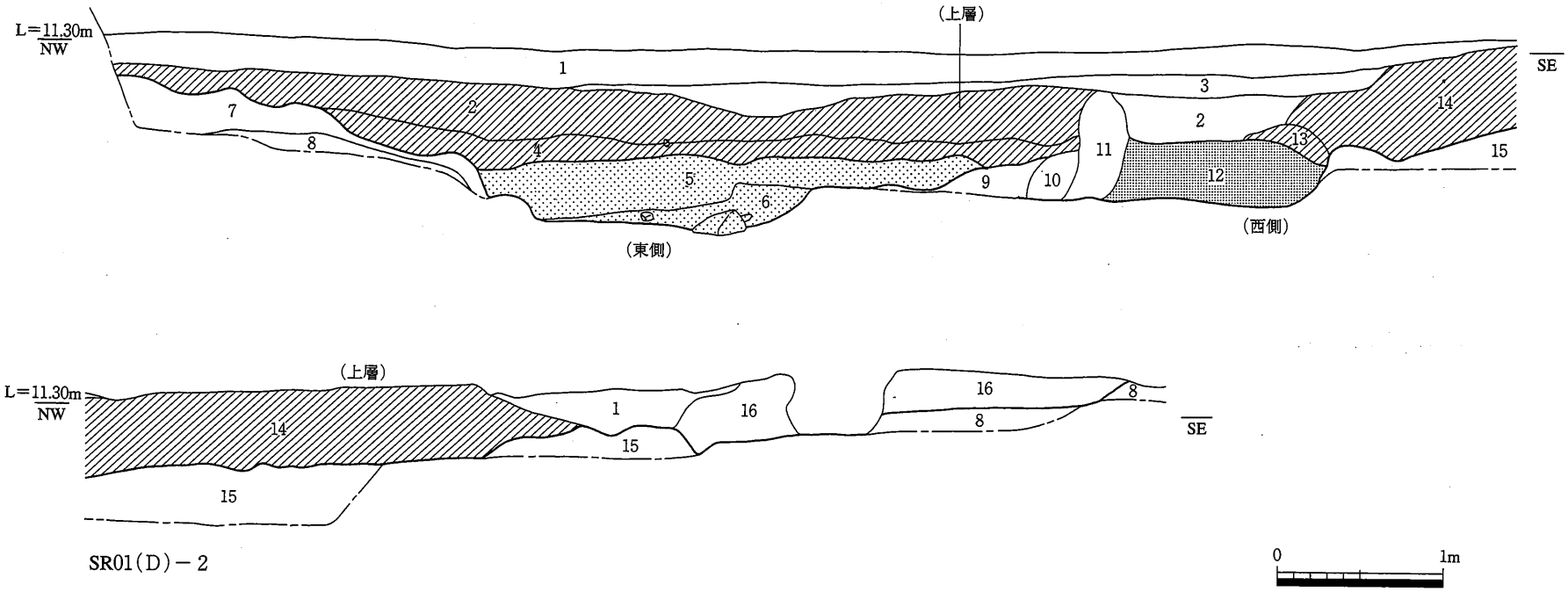


SR01(D)－1



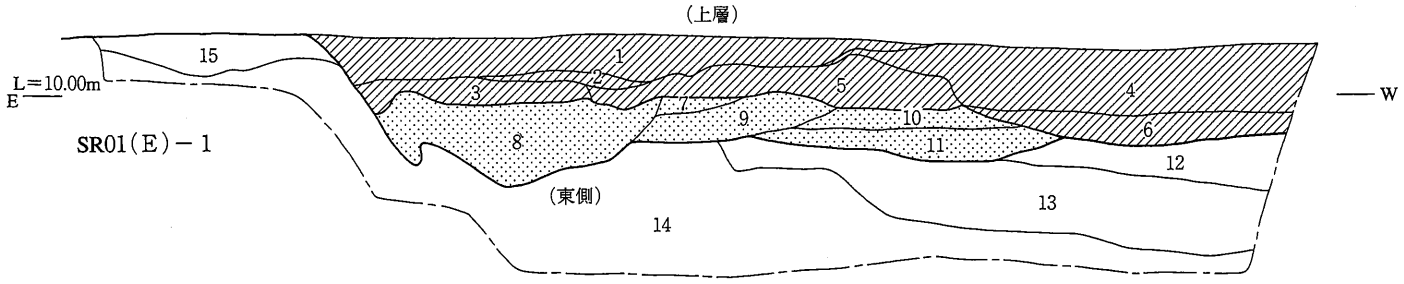
1：明黄灰色砂質土（Mn含）
2：明褐灰色砂質土（Mn多）
3：灰褐色砂質土（Mn多）
4：明灰色砂質土（礫混）
5：暗灰褐色砂質土（Mn多）
6：濃茶褐色粗砂質土
7：6と12が混ざった土
8：褐灰白色粗砂質土
9：明赤茶灰色粗砂質土
10：灰白色砂質土
11：暗赤茶灰色砂混粘質土（Fe多）
12：赤茶褐色砂質土（上部に1cmほど黒色土が混）
13：赤茶灰色砂混粘質土
14：暗茶褐色砂混粘質土
15：暗赤茶褐灰色粘質土（Fe含）
16：暗青灰色粗砂質土（下半部礫多、砂多）
17：20に似るがやや暗い
18：暗褐灰色粘土（褐色砂ラミナ状に堆積）
19：暗褐灰色砂礫
20：暗褐灰色粘土（黄白色砂、礫、ラミナ、土器多）
21：暗灰色砂
22：25に似る（暗灰色土多く混）
23：暗茶褐灰色粗砂混粘質土（黄白色砂ラミナ状）
24：明茶褐色粗砂質土（固い）
25：暗黄灰色粗砂質土（暗灰色土混）
26：暗青灰色砂礫（地山）
27：明黄灰色砂質土（地山）

第114図　ＳＲ01(Ｄ)土層図(3)(１／40)

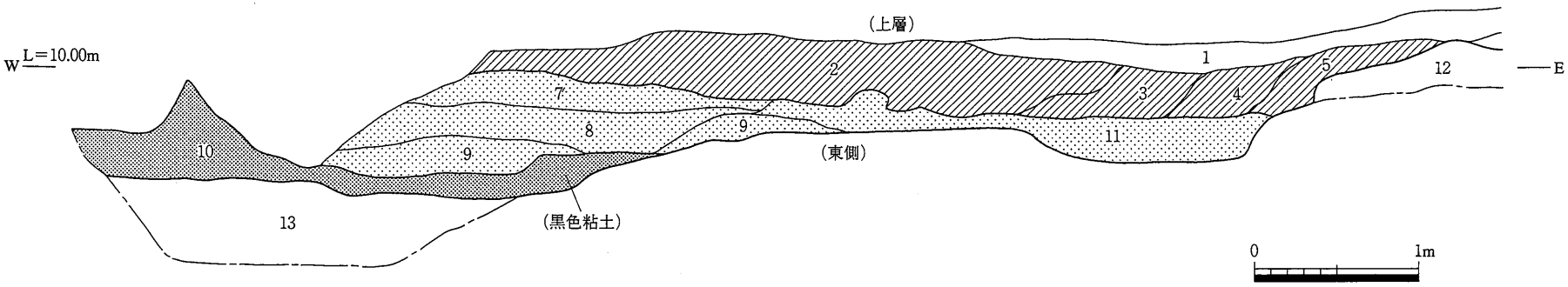


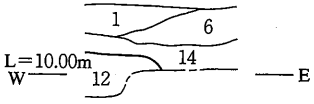
1：明茶灰色砂質土（Mn含）
2：暗褐灰色砂質土
3：黄茶灰色砂質土
4：茶灰色砂質土（粘性あり）
5：暗灰色砂質土
6：暗灰色礫（土器多）
7：明黄灰色粗砂質土（礫混）
8：黄灰白色粗砂質土（地山）
9：茶灰色砂質土
10：黒褐色砂質土
11：茶褐色砂質土ブロック
12：灰色粘土（黄褐色砂ラミナ状）
13：黒褐色～茶褐色粗砂（固い）
14：黒褐色粘質土（固い）
15：茶褐灰色砂質土
16：黄茶灰色砂質土（Mn含）

第115図　ＳＲ01(Ｄ)土層図(4)(１／40)



1：明灰褐色砂質土
2：1’明茶灰褐色砂質土
3：灰色砂混粘質土
4：暗茶褐色粘質土（砂混、とても固い）
5：赤茶褐色粗砂質土（固い）
6：暗茶灰色砂混粘質土
7：灰色粘質土（茶褐色土混、8に似る）
8：灰色砂混粘質土＋明褐色砂礫のラミナ大量
9：茶褐灰色砂質土（砂、礫）
10：赤茶褐色粗砂質土（上より砂が多、砂ラミナ）
11：褐灰色粘質土（砂ラミナ）
12：暗黄茶灰色粗砂質土（粘性あり、固い）
13：暗黄灰色粗砂質土
14：明青灰色粘質土～砂質土（地山）
15：褐色粗砂質土（黄色上混）

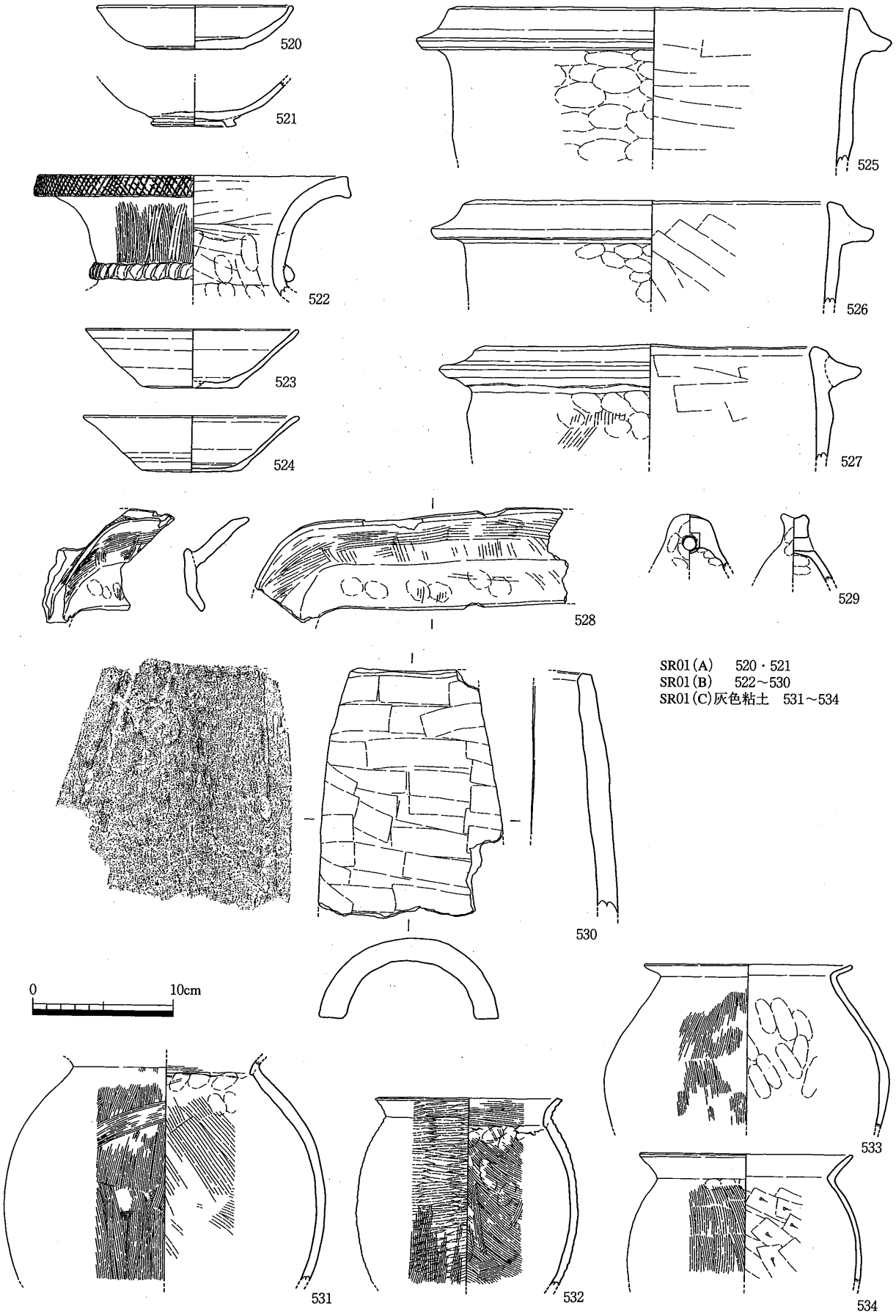




SR01(E)－2

1：灰褐色砂質土（やや粘性あり）
2：明灰色砂混粘質土（Fe含）
3：灰褐色粗砂（やや粘質土混）
4：茶褐灰色砂質土
5：明灰色砂質土（Mn多、やや褐色っぽい）
6：黄褐灰色砂質土（やや粘性あり）
7：暗灰褐色砂混粘質土（くさり礫混）
8：暗褐色砂混粘質土（くさり礫混）
9：暗褐色粗砂（礫混ラミナ）
10：暗灰色砂混粘質土（暗い）
11：褐灰色粗砂
12：灰褐色砂質土
13：暗青灰色砂混粘質土
14：黄褐灰色砂質土

第116図　ＳＲ01(Ｅ)土層図(5)(１／40)



第117図　ＳＲ01(Ａ・Ｂ・Ｃ)出土遺物(1)(１／４)

土層から出土した。

522～530は４区②から出土した。522・529以外は暗灰色層から、522・529はトレンチなどから出土した。

522は弥生土器広口壺。口縁端部は斜格子文を入れ、頸部には押圧突帯を貼る。頸部で全体に割れており、ここで剥離した様子が窺える。弥生時代中期後半。523・524は土師器杯。回転台土師器で、524は底部に板目圧痕が残る。523は底部から１cmくらい上がった場所で全体に割れており、ここに継ぎ目があったことがわかる。525～527は羽釜Ｃ。525・526は外面指押さえ、内面板ナデで、口縁端部・鍔端部とも四角くし、527のみ外面にハケの痕跡が残る。口縁端部はわずかに先端を尖らせるもので、鍔端部はわずかに上部を尖らせる。528は竈。やや薄手の作りで、鍔端部は細くする。焚き口部分はやや外側へ折り曲げる。529は飯蛸壺。上端部を窪ませる。530は丸瓦。上端が下端部に比べてすぼまっており、行基葺きに使う瓦と思われる。凹面には布目、凸面には横方向の板ナデ痕跡がよく残る。この区画から出土する遺物は、弥生土器を除けば10世紀前半前後と考えられる。

ＳＲ01Ｃ（第113・117～119図、図版18・31）

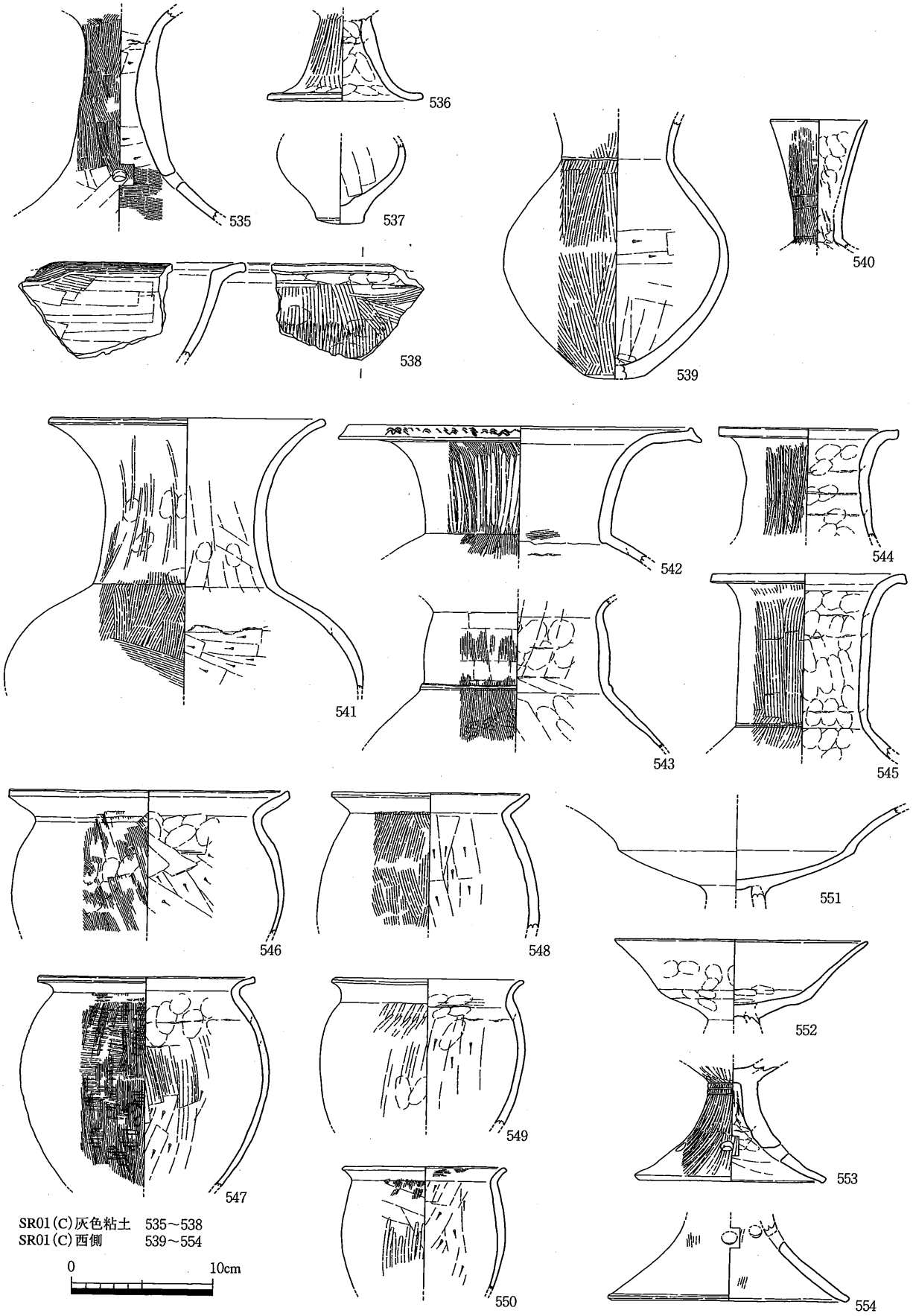
３区③西部で検出した。幅10m以上、深さ0.5m程度、主に褐灰色砂質土の埋土の大きい谷筋の上面を流路が２条走り、その上面に包含層が堆積し平坦地となる。流路に切られる谷筋の埋土からは摩滅の進んだ弥生土器が数点出土したが、遺物はあまり多くない。

西側の流路は上部では幅1.5m、深さ60cm、断面形は逆三角形で底の標高は11.7mである。埋土は灰褐色粗砂・細砂、黒褐色細砂などがラミナ状に堆積し、ある程度の流れがあったことがわかる。この流れは３区③の下流側では幅2.3m、深さ76cm、底の標高は11.6mと広がり、溝の断面からは東側にえぐれている様子が窺える。埋土には褐色～灰褐色砂層やラミナ状堆積の見られる層が目立ち、流れは急になるようである。埋土中からは主に弥生土器壺・鉢などが出土している。

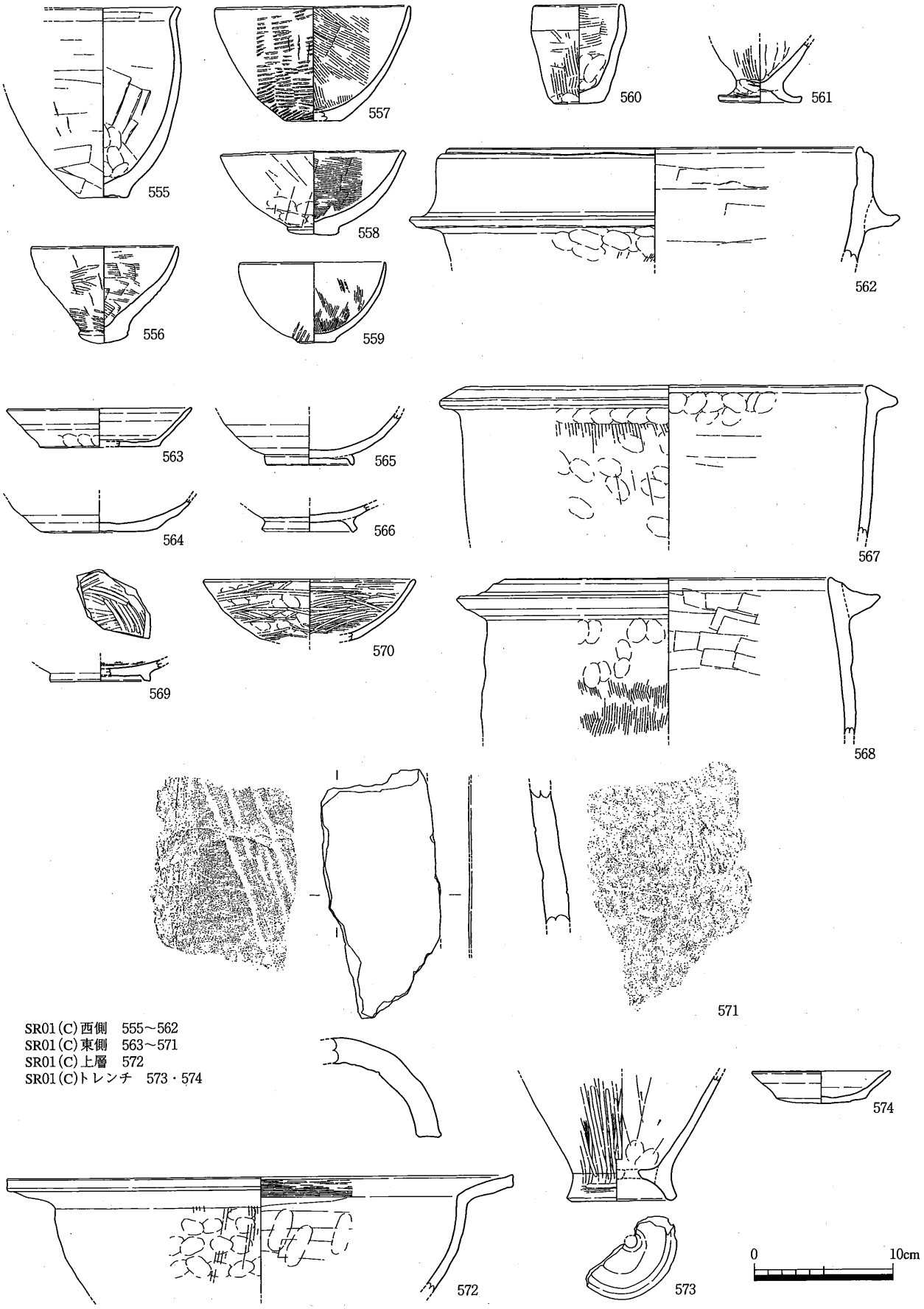
東側の流路では上部で幅１m、深さ70cm、底の標高は11.7m、断面形は逆台形で、灰褐色・褐灰色砂質土などが堆積し、急激に流れた様子はあまり窺えない。下流側では幅3.06m、深さ1.18m、底の標高は11.0mと急激に規模が大きくなり、断面形は西側へえぐれる形となる。暗灰色・暗褐色などの土が堆積し、流路が広くなり、最下層は滞水状態にあったようで、ベタベタの粘土である。埋土中からは10～13世紀代の遺物が出土し、流路の年代は13世紀頃と考えられる。遺物はあまり摩滅していないものが多い。

西側の流路が埋没した段階で概ね平坦地にはなっており、やや窪んだ地形となっていたが、それらの上面を上層が覆い、埋没が終了している。上層は灰色～暗灰色土で幅10m以上、深さは20cm程度であった。

531～538は３区③の上段の水田部分で出土した土器である。これらは西側・東側の流路が形成される前に堆積したと考えられる暗褐灰色砂質土及び青褐灰色砂混粘質土層から出土した。いずれも弥生土器で、摩滅が著しい。531～534は甕。531は内外面をハケで調整、532は外面を口縁端部まで叩き上げ、内面はハケで調整する。533は口縁端部は丸く収め、外面にはハケ、内面には指押さえ痕跡を残す。摩滅が著しい。534はくの字に曲がる口縁を持つ。内面はヘラ削りする。535・536は高坏脚部。535は外面をハケ、内面はヘラ削りで、下部だけハケを施す。孔は３孔残存し、残存率から４孔あったと考えられる。537はミニチュア壺の底部か。摩滅により調整は不明瞭である。538は片口鉢。外面はハケ、内面はハケ・板ナデである。ここから出土する土器は概ね弥生時代後期後半で、谷筋が埋没した時期もこの頃と考えられる。



第118図　ＳＲ01(Ｃ)出土遺物(2)(１／４)



第119図　ＳＲ01(Ｃ)出土遺物(3)(１／４)

539～562は西側の流路で、砂層のラミナ層が顕著に認められる流路から出土した土器である。539～561は弥生土器。539～545は壺。539・541・542・544・545は広口壺。541は長めの頸部に自然に拡がる口縁を持つ。542は太めの斜め上方に立ち上がる頸部に口縁部が急に拡がる。口縁端部は上下に拡張させ、端部に波状文を施す。544・545は長めの頸部に口縁端部が少し開く。口縁端部には面を持つ。頸部外面にはハケ、内面は指押さえで、粘土の継ぎ目を明瞭に残す。545は頸部と体部の境に段を持つ。540は細頸壺。下川津Ｂ類。543は頸部に膨らみを持ち、体部と頸部の境に凹帯が巡る。546～550は甕。概ね外面はハケ、内面はヘラ削りで調整し、口縁部は緩く屈曲する。549は外面体部上部に縦向きのタタキがわずかに残る。551～554は高坏。551・552は杯部。553・554は脚部。553は脚部の上端付近に沈線が３条巡る。穿孔は不均等に４ヶ所ある。554は穿孔が２ヶ所残存する。残存状況から４ヶ所に施されたと考えられる。555～560は鉢。555は口縁端部が外側へ開く。外面は板ナデで全体に平滑に仕上げて、調整痕跡はほとんど残さない。体部残存部分の歪みが著しく、反転復元はしなかった。556～559は椀形で、556だけやや小型で、丸みを持たない。概ね外面はタタキ、内面はハケで、556・557は外面にクラックを残す。558は外面をきれいに板ナデし、調整痕跡をほとんど残さない。560は手捏ね。内外面にハケで調整するが、成型時の凹凸をよく残す。561は製塩土器。562は土師器足釜。口縁端部に沈線を持つ。13世紀末～14世紀前半。この流路からは概ね弥生時代終末期２～３の弥生土器が多く出土するが、図化しなかった13世紀代前後の土器も少なからず出土し、流路の形成自体はこの頃と考えられる。出土した土器はいずれもあまり摩滅しておらず、周辺の集落にあった遺物を巻き込んだものと思われる。

563～571は東側の流路から出土した。563～568は土師器。563・564は杯。563は回転台土師器。体部下端部に指押さえ痕が残る部分がある。564は杯Ｄ。565・566は椀。565は高台の内部の貼付粘土が内側にまで及んでいる。ヘラミガキは認められない。吉備系土師器椀。567・568は羽釜Ｃ。567は鍔と口縁がほとんど一体となっている。569は緑釉陶器椀。土師質で高台は削り出し輪高台である。内面にはヘラミガキが残る。京都産。570は瓦器椀。内外面にヘラミガキを施す。和泉産。571は丸瓦。凸面はヘラ削りで調整するが、雑で縄叩き痕跡が残る。やや先細り気味で、行基葺きの瓦の可能性もある。概ね10世紀～13世紀までの遺物を含むようだが、12世紀後半～13世紀前半頃が中心である。

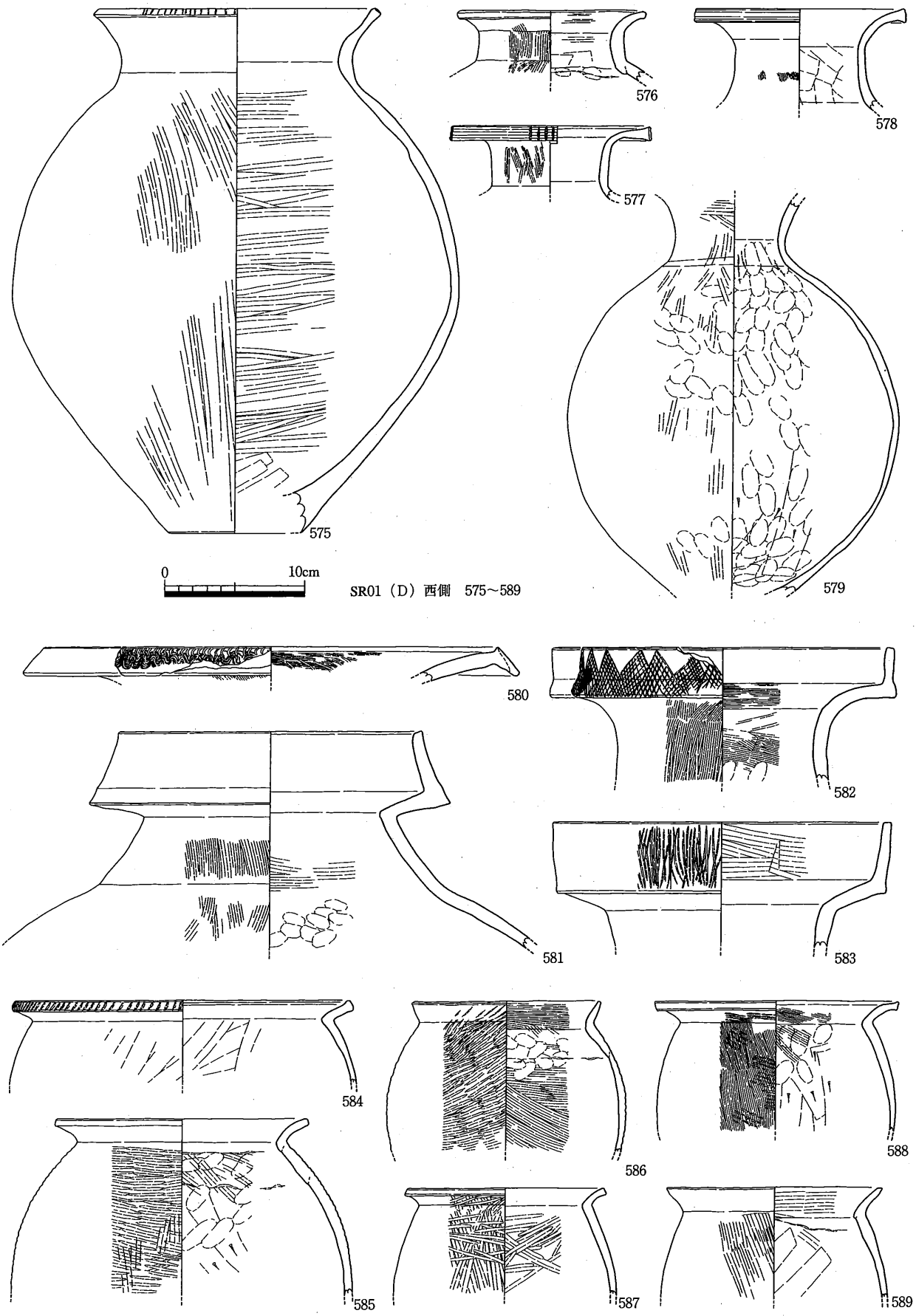
572は流路を覆う上面の包含層から出土した。土師器鍋。７世紀代。

573・574はトレンチから出土した。573は弥生土器甑。底部には高台状のものが付き、やや偏った位置に孔が１つ残存する。弥生時代中期後半。574は土師器皿。11世紀中葉頃。

ＳＲ01Ｄ（第114・115・120～132図、図版18・32～38・81・82・91）

１区①では、西側の流路は幅2.3m、深さ60㎝、底のレベルは11.4mで、断面形は逆三角形、埋土は暗灰色砂質土や褐色粗砂である。中央付近では幅1.2m、深さ１m、底のレベルは10.4m、断面は逆台形となるが、一番平野側へ降りてくると該当する土層がなく、中央付近やや北側で東側の流路に吸収されるようである。埋土中からは弥生時代後期の土器を中心に一部弥生時代中期の土器や10世紀代の土器が出土した。

東側の流路では、ＳＲ01Ｃよりさらに流路の規模は大きくなり、幅４m、深さ80㎝、底の標高は11.4m、埋土は灰色砂礫を中心とし、断面形は逆台形である。ＳＲ01Ｄの中央付近では幅3.6m、深さ62㎝、底の標高は10.7m、断面形はなだらかな半円形を呈し、特に東肩が緩やかになる。埋土は暗灰色粘土系で流路がやや緩やかになる様子が窺える。最も平野側では幅3.2m、深さ45㎝、底の標高は10.2m、埋土は褐色系の土がラミナ状に堆積する。断面形状は浅い窪み状となっている。埋土中からは弥生時代中期

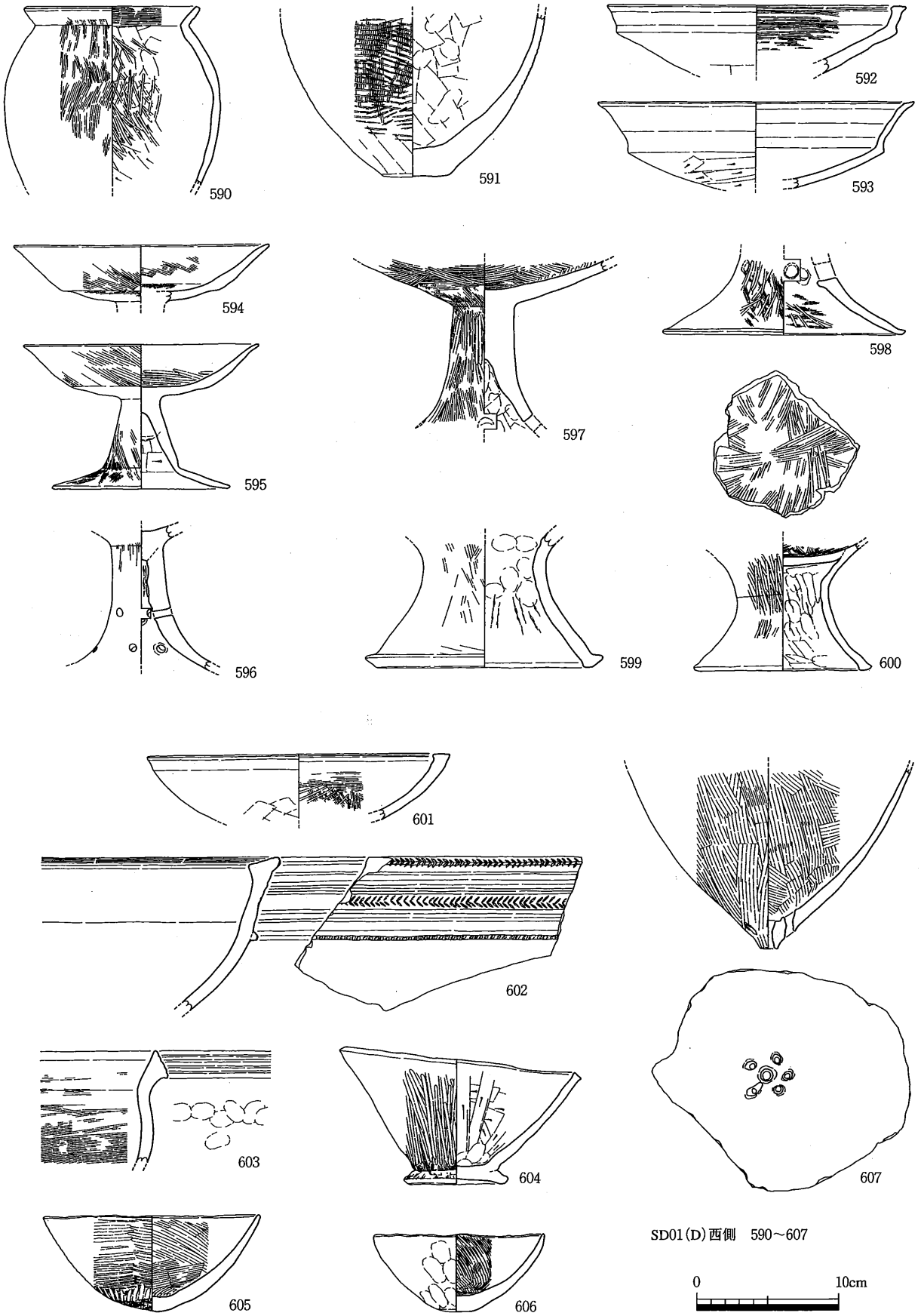


第120図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(4)(１／４)

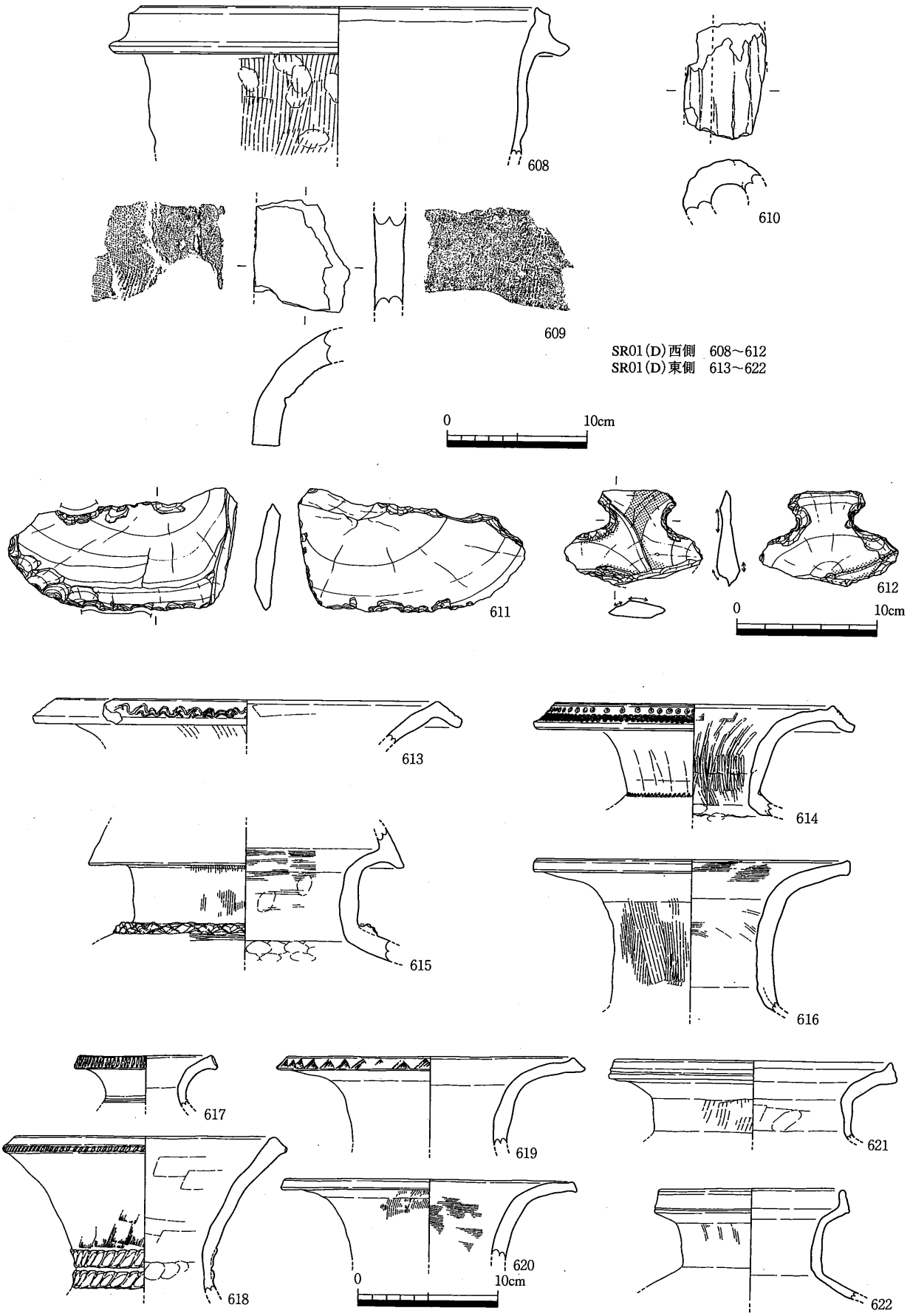
～後期の土器と10～12世紀代の土器が多く出土した。隣接する３区③微高地部分や３区②山側部分では遺構密度は希薄であったが、このあたりはビニールハウスなどの後世の攪乱等で破壊されていたことなどを勘案すれば、この付近に集落があったものが13世紀頃の土石流で破壊されたことが考えられよう。これらの流路の上面には暗茶褐色・暗褐色砂質土の包含層が80㎝前後ほど堆積し、埋土中からは９～10世紀代の土器に混じって13世紀代の土師器が出土した。最終的な埋没はこの時期と考えられよう。

575～610は西側の流路から出土した土器である。575～607は弥生土器。575～583は壺。575は口縁端部に刻み目を入れ、内外面にヘラミガキを施す。弥生時代中期後半。576～578はやや短めでほぼ直立する頸部に急に開く口縁部を持つ。頸部外面にはハケを施す。577は口縁端部に凹線を施し、その後均等に４ヶ所に４本１単位の縦方向の刻み目を入れる。体部と頸部の境できれいに剥離している。580は口縁端部を上下に拡張させ、端面上部に半裁竹管文を、下部に波状文を施す。口縁部端面には粘土を薄く巻き付けて面を広くしたような剥離痕跡が残り、剥離面に指頭痕が残る。581～583は二重口縁壺。581は下川津Ｂ類。582は口縁立ち上がり部に鋸歯文を施す。583は口縁部立ち上がりの基部で剥離面がみられる。584～591は甕。584は口縁端部に刻み目を持つ。弥生時代中期後半。585・588は外面にタタキの後ハケを施し、内面体部上部にハケ、中位から下部はヘラ削りする。589・591も似たような調整を行っていたと思われる。592～600は高坏。592は口縁端部に凹線が３条巡る。内面にはヘラミガキを密に施す。弥生時代中期後半。593は体部外面に横方向のヘラ削りがある。全体に摩滅する。下川津Ｂ類。594・595は杯部内外面とも横～斜め方向にハケを施し、杯部の屈曲は緩い。古墳時代初頭。596は脚部のうち筒部はほぼ完存する。穿孔は２段に５個所ずつ施される。597は杯部内外面に４分割程度の横方向のヘラミガキがある。脚部の穿孔は２ヶ所遺存しており、ほぼ均等に３ヶ所に穿孔するか、やや広めの２孔１対の穿孔になると思われる。599・600は底部に円形の剥離痕跡があり、底部を充填した様子が窺える。ともに弥生時代中期後半。601～606は鉢。601は口縁端部に面を持ち、内面はハケの後ヘラミガキを施す。602は大形の鉢。口径は50㎝を越えると考えられる。口縁部外面に綾杉文＋凹線文３条＋綾杉文＋凹線文＋刻み目を施す。摩滅が進む。603は口縁部を外側へ軽く屈曲させ、口縁部端面には凹線文を４条施す。601～603は弥生時代中期後半。604～606は椀形の鉢。604は底部に粘土を足して明確な平底を作り出している。外面はヘラミガキを丁寧にする。605・606は内面に横～放射状のハケ、外面は605はタタキ、606は調整痕跡を残さない。607は有孔鉢。尖った底部には中心に１孔・その周囲に５孔の合計６個所を穿孔する。この場所で出土する弥生土器は中期後半～古墳時代初頭まであるが、後期後半が中心となると思われる。608は土師器羽釜Ｃ。口縁部内面に凹線が巡り、端部上面にも窪みができる。609は丸瓦。凸面の長辺の端面に近い方は縄目はほとんどナデ消されるが、頂部に近い方は縄目はよく残る。凹面は端面に近い部分は板ナデ調整をし、布目を全く残さない。失敗して余分な粘土を掻き取ったようである。610は鞴羽口。溶融痕は残さないが、上部にわずかに灰色に変色している部分がある。611・612は石器。611はスクレイパー。刃部をわずかに加工する。612は石匙。刃部は加工されておらず、未製品と思われる。この流路では多量の弥生土器に混じり、上記の10世紀代の土器が出土した。

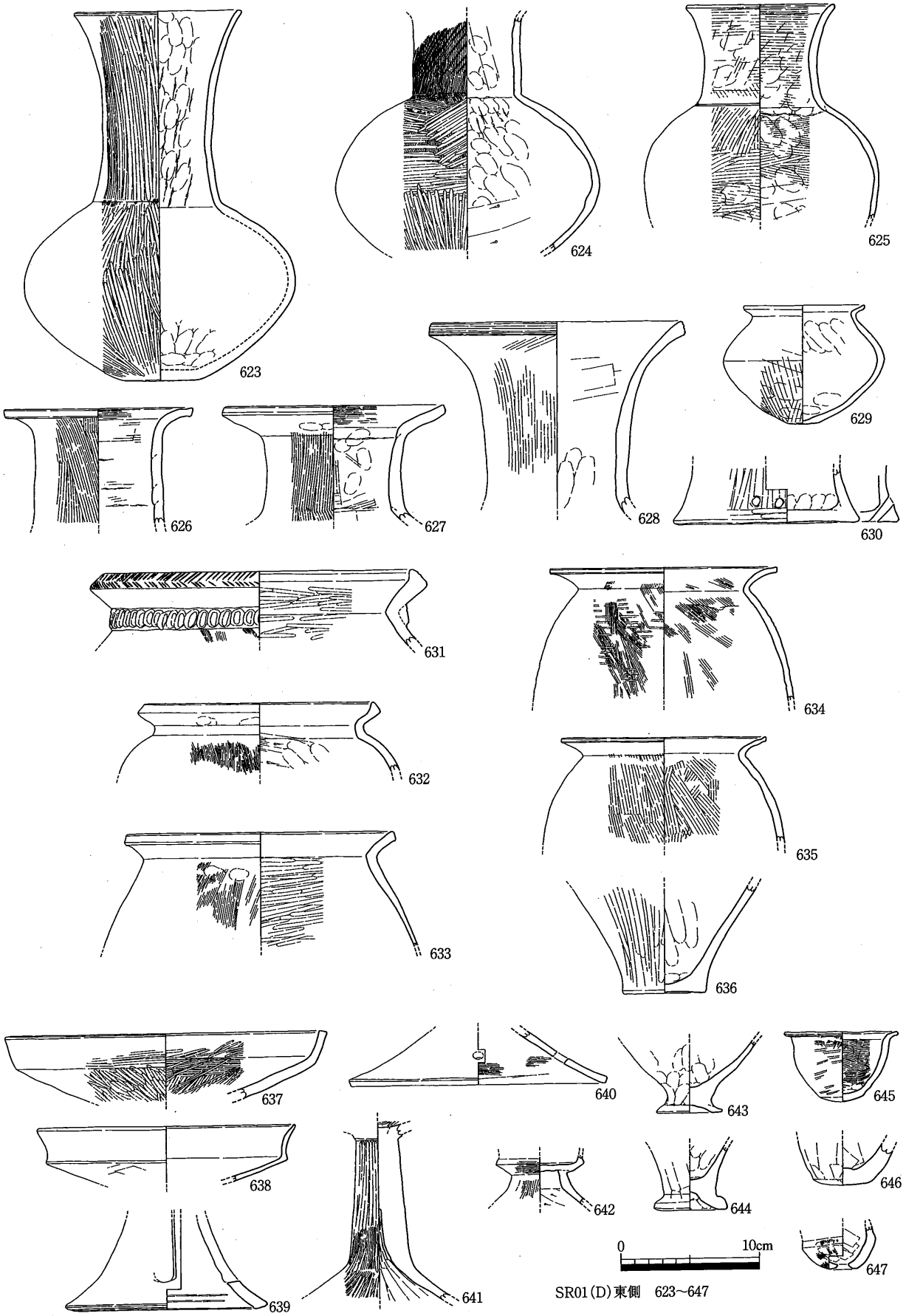
613～746は東側の流路から出土した。613～650は弥生土器。613～630は壺。613・614は斜め外側へ開く頸部から大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は下側へ拡張させる。613は口縁端面に波状文、614は上段に竹管文、下段に波状文を施し、頸部に刻み目を入れる。615・622は二重口縁壺。615は頸部に山形突帯を貼り付ける。616・619・620はやや太めの直立～やや斜め外側へ立ち上がる頸部から口縁部が大きく開くものである。619は口縁部端部に面を持ち、鋸歯文を施す。617は口縁端面に縦方向の刻み目を、



第121図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(5)(１／４)



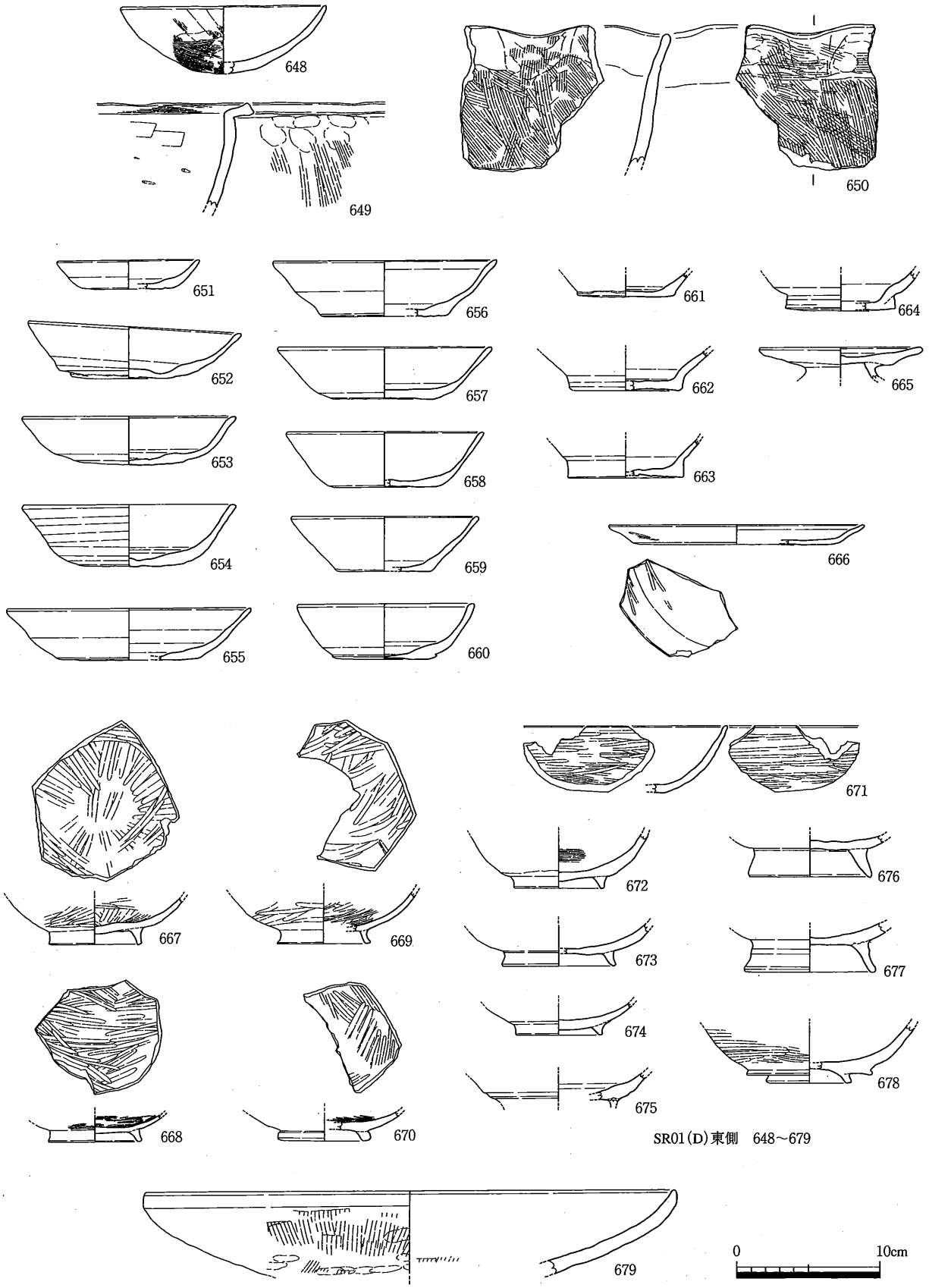
第122図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(6)(１／４)



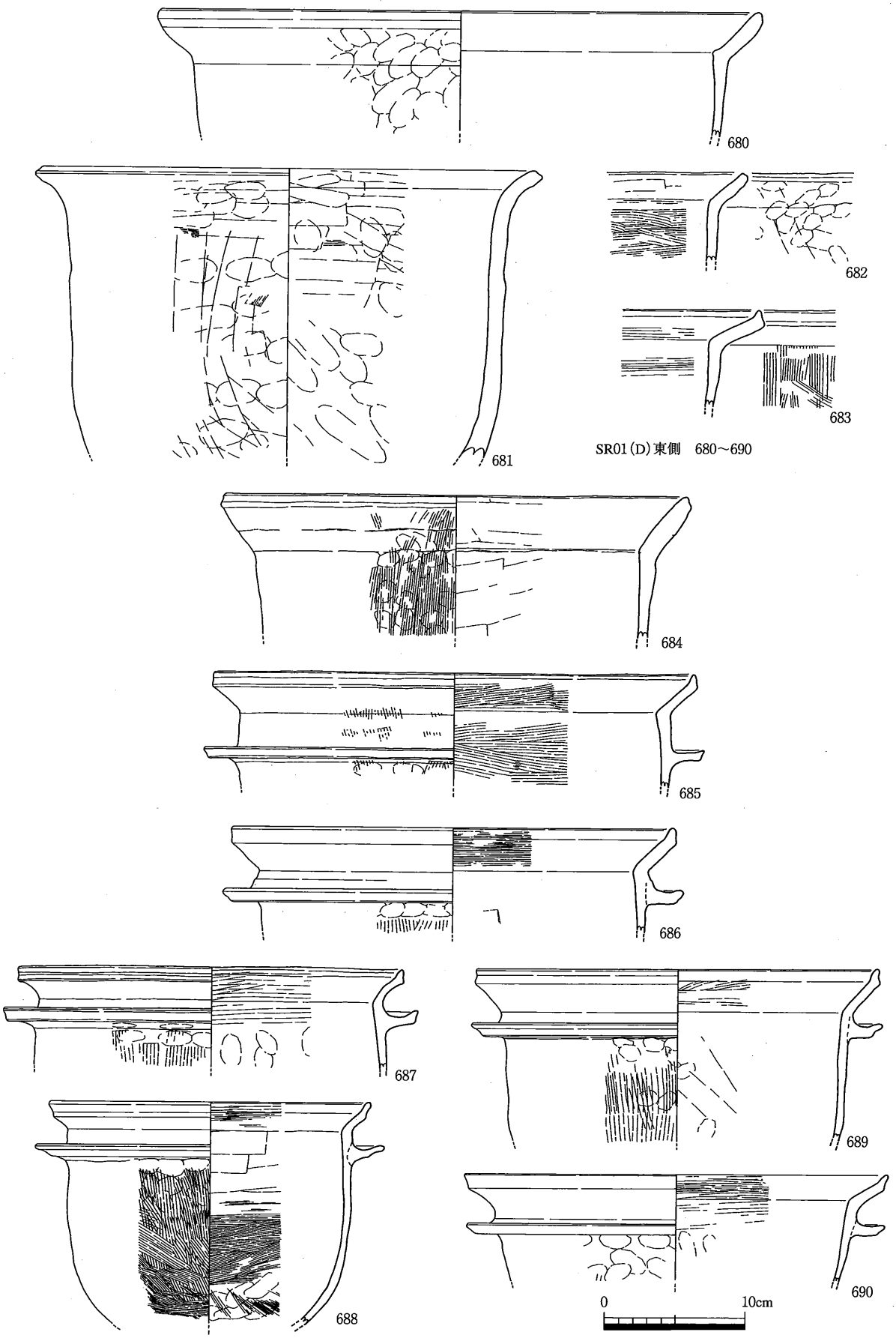
第123図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(7)(１／４)

618は口縁端部外面に縦方向の刻み目を入れ、頸部には押圧突帯を二重に巡らせる。617・618は弥生時代中期後半。621は太く短い直立する頸部から口縁部が大きく開く。口縁端部には凹線が2条巡る。623～625・628は長く細めの頸部に口縁端部がなだらかに開くものである。623は外面全面を縦方向に丁寧にミガキを施し、624は外面体部にハケの後上半部は横方向の4分割程度の、下半部は縦方向の丁寧なミガキを施し、頸部にはハケの後斜め方向に工具で模様を付けている。頸部と体部の境にはわずかに段を付ける。625は頸部と体部の境に緩い沈線が巡る。628は口縁端部に凹線を巡らせる。628は弥生時代中期後半。626・627は長めの直立する頸部に口縁端部が大きく開く。頸部内外面ともにハケを施す。629は短頸壺。体部中位が大きく張り、外面はヘラミガキする。630は壺の底部に2孔1対の穿孔がある。弥生時代中期後半。631～636は甕。631は口縁部端面に綾杉文を入れ、頸部には押圧突帯を貼る。632は口縁端部を上方へ引き上げ、内面にはヘラ削りする。633はあまり張らない体部で、内面には横方向にヘラミガキを密に施す。634・635は内外面をハケで調整し、やや長めの口縁部はきつく屈曲する。636は明確な平底で、外面は丁寧にヘラミガキする。631・633・636は弥生時代中期後半。637～641は高坏。637は杯部内外面とも体部を横方向、底部を縦方向のヘラミガキを丁寧に行う。弥生時代中期後半～後期初頭。639には脚部に長方形の透かしが2個所残存する。残存部分から4個所に透かしがあったと考えられる。640は穿孔が2孔残存し、全体では4孔が均等にあったと考えられる。642は台付鉢の接合部。上部には小型丸底壺のような器形のものがあったと考えられる。643・644は製塩土器。633はやや丸みのある体部、644はまっすぐ立ち上がる体部で、外面は板ナデで成形する。645～650は鉢。645は小型の鉢。外面にタタキを施した後、全体にハケで仕上げる。646・647は手捏ねの後粗く調整を施している。647は焼成後に底部に穿孔がみられる。648はやや浅めの椀形の器形。649はきつく屈曲する口縁部を持つ。650は片口部分。全体をハケで調整する。ここで出土する弥生土器は弥生時代中期後半のものが一部出土するが、主には弥生時代終末期前後の遺物が多く出土する。

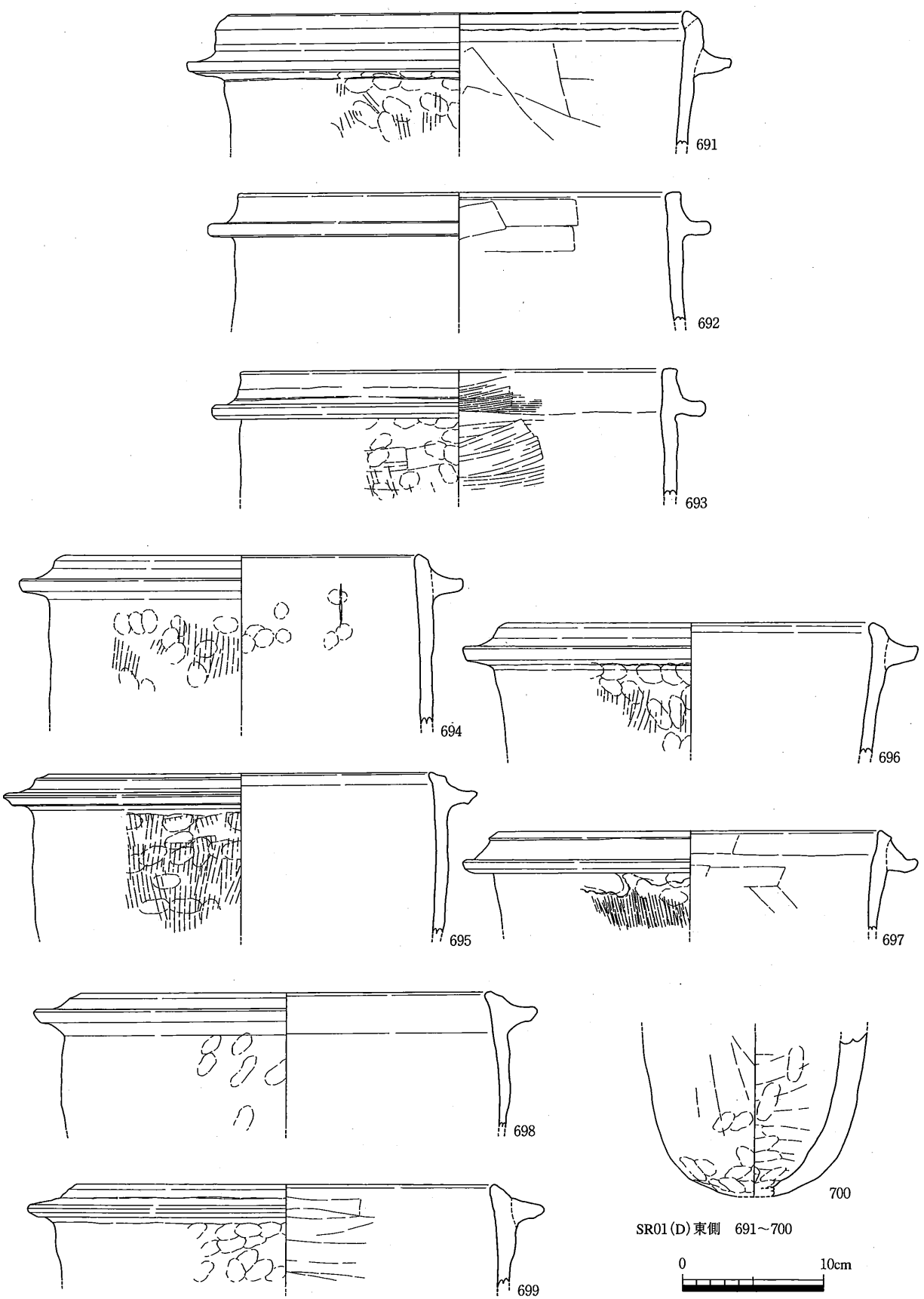
651～702は土師器。651は小皿。652～658・660は杯D。口径は14.5cm前後のものが多い。底部はすべてヘラ切りで、654には時計回りのヘラ切り痕が残る。654には体部に回転台を使用した際の凹凸が明瞭に残る。652は歪みが著しい。653は底部中心部に直径3.1cm程度の円盤状の剥離が見られる。この円盤を芯にして底部を作ったものか。12世紀後半～13世紀前半。659・661は杯A。回転台土師器。661には反時計回りのヘラ切り痕を残す。662～664は円盤状高台を持つ杯。ともに10世紀代。665は皿。小型で高い高台が付く。10世紀後半。666は口縁端部を丸くする。外面にわずかにヘラミガキが残存する。8世紀後半。内面の暗文はみられない。667～678は椀。667～669・671・673は吉備系土師器椀。673以外は内外面とも丁寧なヘラミガキを施す。11世紀後半～12世紀前半。670は内面にヘラミガキを施し、外面の高台部分のすぐ外側には1段のヘラ削りを施す。672・674は高台部のすぐ外側にヘラ切り痕を残し、ヘラ削りは行わない。672には内面に横方向のハケが残る。670・672・674は西村産と考えられる。12世紀代。675は高台が欠損しているが、本来高台があったらしい場所には円弧状の刻み目があり、接合しやすくしている。676・677は高台が高い椀。10世紀後半。676は高台の作りが雑で、高台を輪状に丸くした接合部が裏側からはよく観察できる。677は高台部分が一部剥離し、その部分には円弧状の刻み目が見られた。接合の目安と接着面を広くすることが目的と思われ、676では円弧状の刻みが一部高台の外側に及んでいる個所もあった。677は摩滅が著しいものの、底部内面には放射状の圧痕が認められた。678は平高台の杯に高台が付いたような形態である。内面は摩滅がひどく調整は観察できなかったが、外面には密にヘラミガキが施される。680～684は甕。680・682・684は甕E。681は甕F。頸部に稜線を



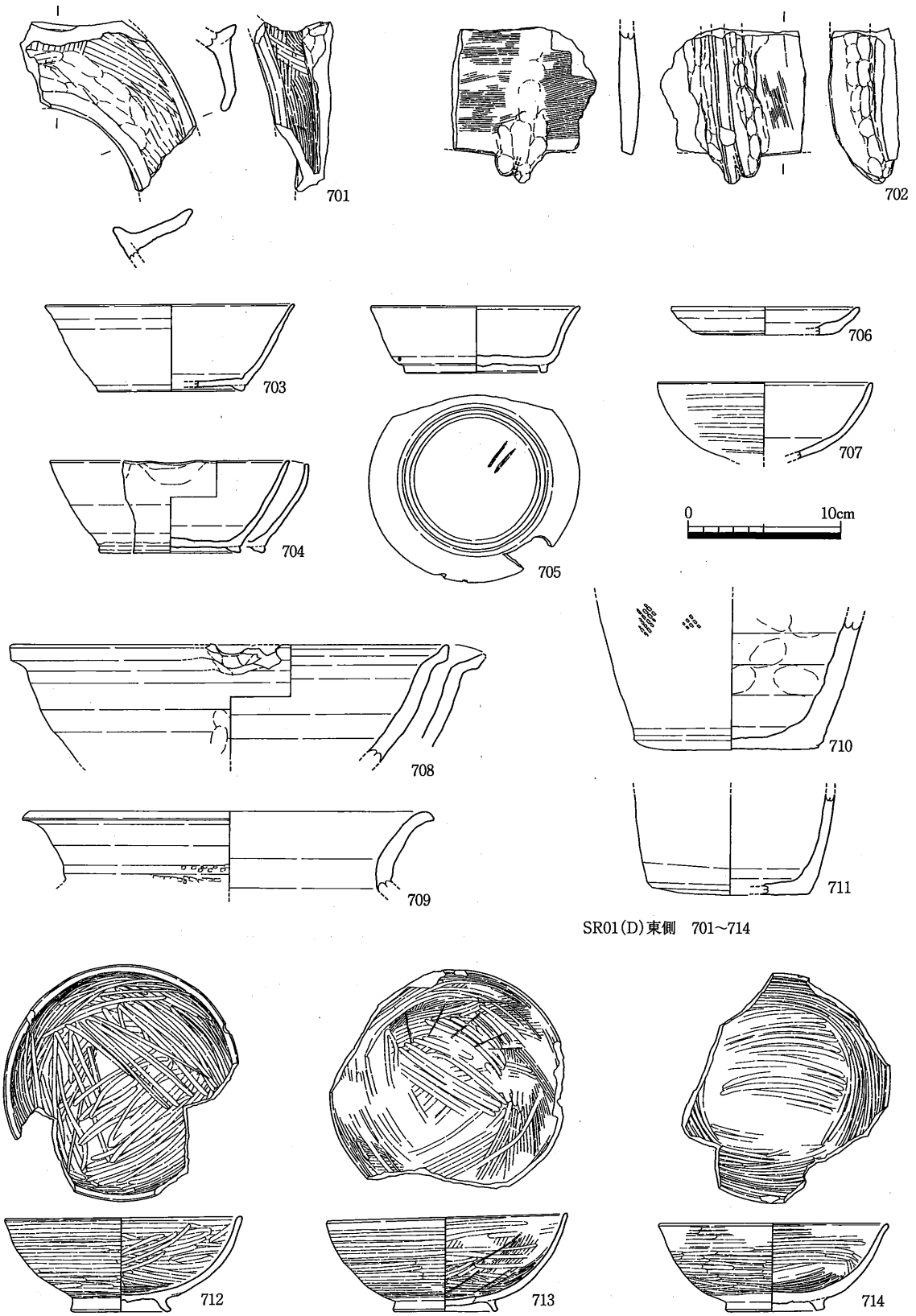
第124図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(8)(１／４)



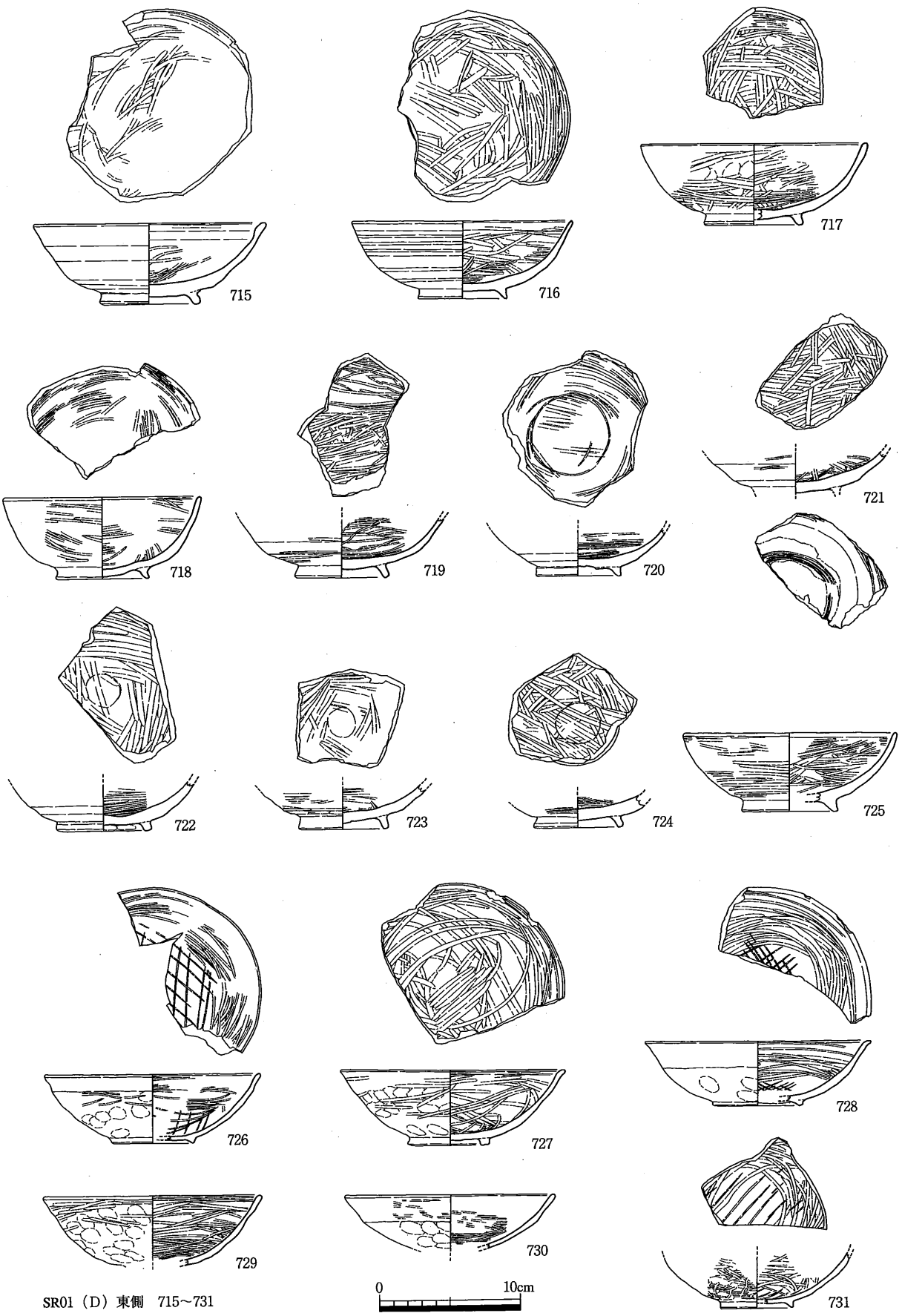
第125図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(9)(１／４)



第126図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物⑽(１／４)

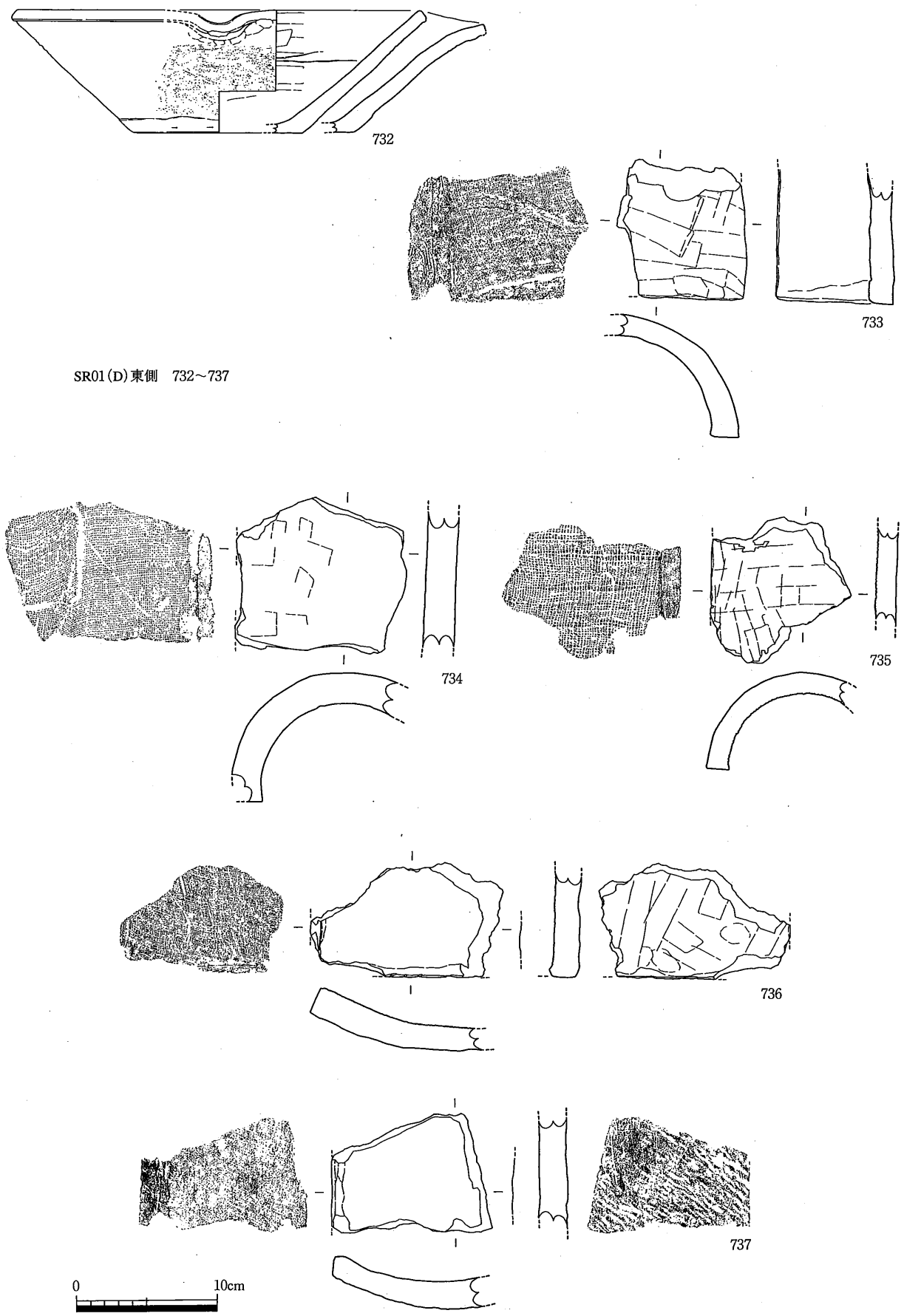


第127図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(11)(１／４)

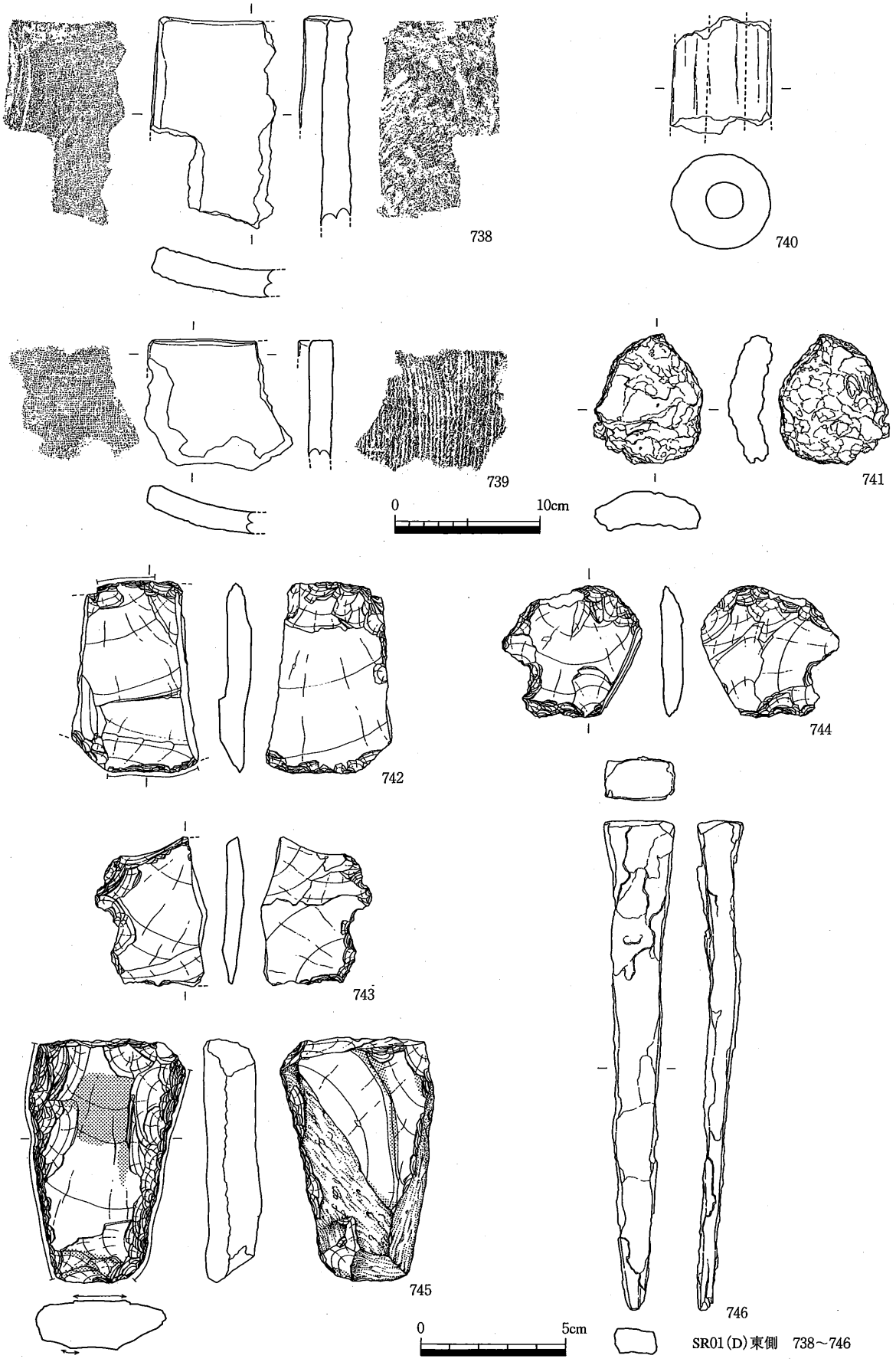


SR01（D）東側　715～731

第128図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物⑫(１／４)

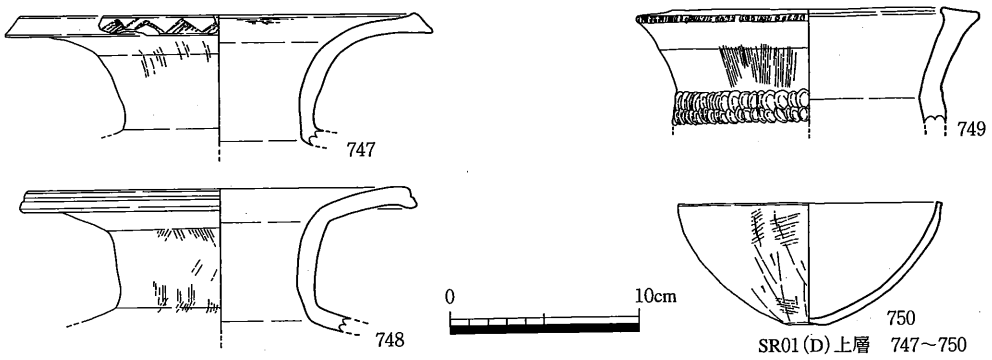


第129図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物(13)(１／４)



第130図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物⒁(１／４、１／２)

持たず、なだらかに体部に至る。683は甕D。口縁端部を上部へ引き上げる。685～690は羽釜A。いずれも口縁端部を上方へ引き上げ、鍔端部は上方を尖らせる。内面は横ハケ、外面は縦ハケで調整する。691～699は羽釜C。口縁端部は四角くするもの（692・693）、尖らせるもの（694・696～699）、内側へ屈曲させ、内面に凹線を持つもの（691・695）があり、鍔端部は四角くするもの（691～694・696）と上側を尖らせるもの（695・697～699）がある。700は真蛸壺。厚手の作り。701は竈。鍔と受け口の一部が残存する。鍔端部は尖らせる。702は器種不明。外面に太めの突帯のようなものを縦方向に貼り付け、下方から直径5㎜程度の孔があけられる。この孔は1㎝程度は上方へあいているが、上端部の割れている部分ではみられない。土師器の時期は8世紀後半の土師器皿を除けば10世紀後半～12世紀代である。703～711は須恵器。703～705は高台付杯。703・704はやや薄手で深めの杯に、体部と底部の境に短い高台が付く。704は口縁端部を1個所内側へ折り曲げている。意図したものかどうかは不明。9世紀中頃。705は体部がやや丸みを持ちながら立ち上がる器形。底部外面に2本の刻み目がある。706は皿。焼成不良の須恵器のような色調で、西村産と思われる。11世紀後半。707は須恵器椀。外面には横方向の粗いヘラミガキ、内面には板ナデを施す。西村産。12世紀後半。708は捏ね鉢。口縁端部は上方へつまみ上げ、片口部分は指で外側へ折り曲げて作る。11世紀後半。709は甕。頸部下端に格子タタキ痕が残る。左上がりのタタキを右から叩いている。710・711は壺底部。710は体部に疎らに左上がりの格子タタキ痕が残る。11世紀後半。須恵器は12世紀後半のものがあるものの、概ね11世紀後半頃である。712～725は黒色土器A椀。口径指数は37～42程度。口径は概ね15㎝～16㎝の間に収まるが、718だけ小振りである。調整は概ね体部外面を横方向のヘラミガキ、内面を4～5分割のヘラミガキをした後底部にヘラミガキをする。しかし、破片が小さかったり摩滅があったりで、それらの調整が不明瞭であったものもあった。715・722には外面のヘラミガキは認められず、722は体部と底部のヘラミガキが一体化していた。713は内面のヘラミガキがやや雑で、ハケの痕跡が明瞭に残る。715・718・719・722以外は外面の底部と体部の境にヘラ削りを1段程度施す。718はヘラ削りはないが、該当部分は丁寧に磨いて底部と体部の境が目立たないようにしている。720には見込み部分に直径5.7㎝程度の重ね焼き痕跡と思われる圧痕が、722～724には直径2.5㎝程度の粘土の継ぎ目と思われる稜線がみられる。721は高台が剥離しているが、その部分には円弧状の刻み目が2周巡っており、接合面を増やす工夫をしていたと考えられる。黒色土器の年代は11世紀中葉～12世紀代と考えられる。726～731は瓦器。概ね口縁端部外面を横方向にナデて、体部には指頭痕を残す。しかし、外面にも疎らにヘラミガキ痕跡を残し、指押さえの凹凸は顕著ではない。726・728には見込みに格子状のヘラミガキが、731には直線状のヘラミガキがある。727・729は外面に一部燻されずに、728には内面に白っぽく残った場所がある。瓦器の年代は概ね12世紀代であろう。732は瓦器捏ね鉢。片口部をわずかに残し、外面下端部を幅1㎝ほどでヘラ削りし、上半部を左から右へ格子タタキをする。底部は一部剥離しており、その部分には指押さえ痕跡が残る。ＳＲ01（E）から出土したものと接合した。13世紀後半。西村産。733～735は丸瓦。いずれも凸面に板ナデ痕、凹面に布目痕を残す。736～739は平瓦。736は凸面を板ナデし、タタキ痕を残さない。737は凸面に斜め方向の縄目が残るが、その縄目痕を一部ヘラ削りして消す。738は側縁が長方形に割れており、凸面はその上部と横部に指押さえ痕跡が残る。欠損ではなく、隅切瓦として利用した可能性もあろう。739は凸面に縦方向の縄目痕跡を明瞭に残す。740は鞴羽口。溶融痕跡を残さない。741は椀形鍛冶滓。742～745は石器。742は楔形石器。上・下部とも敲打により潰す。743・744は石庖丁。いずれも側縁部に抉りを残すが大半は欠損する。745は打製石斧。両側縁は敲打痕が残る。746は鑿。鍛冶関連遺物とし



第131図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物⑮(１／４)

て注目される。東側の流路から出土した遺物は一部弥生土器を含むが、概ね10～13世紀代の土器を多く含む。

747～765は上層部分から出土した遺物である。747～750は弥生土器。747・748は広口壺。太く短めの頸部で口縁部は大きく開く。747の頸部は斜め上方に、748はほぼ直立する。747は口縁端部に鋸歯文を施す。749は頸部と体部の境に２段の押圧突帯貼り付け、口縁端部に刻み目を持つ。弥生時代中期後半。750は鉢。751～757は土師器。751は土師器杯。底部は糸切りである。13世紀前半頃。752は高台付杯。摩滅が著しい。口縁端部は外反し、高台は底部と体部の境付近に付く。753～755は甕。753・755は口縁端部を上方へ引き上げ、体部外面を縦ハケ、口縁部内面を横ハケで調整する。754は口縁端部を丸くし、体部外面を縦ハケ、内面は横方向の板ナデをする。756は羽釜Ａ。口縁部を内傾させ、端部にわずかに段を持つ。757は羽釜Ｃ。口縁端部・鍔端部とも先端を丸くする。758・759は須恵器。758は杯。外面には火襷がかかる。759は蓋。頂部はヘラ削りできれいにする。760は黒色土器Ａ。内面体部に横方向のヘラミガキをした後、底部には１方向のヘラミガキを施す。外面には高台部の直上に横方向のヘラ削りがみえ、疎らな横方向のヘラミガキが施される。761は白磁碗。釉は外面玉縁部の下部にはかからない。11世紀後半～12世紀前半。762は鞴羽口。763・764は椀形鍛冶滓。小型のもので、763は上・下面に木炭痕を残す。ともに分析資料でその項を参照されたい。765は石庖丁。両側縁に浅い抉りを入れる。上部にはほとんど加工を施さず、刃部も簡単に作り出すだけである。

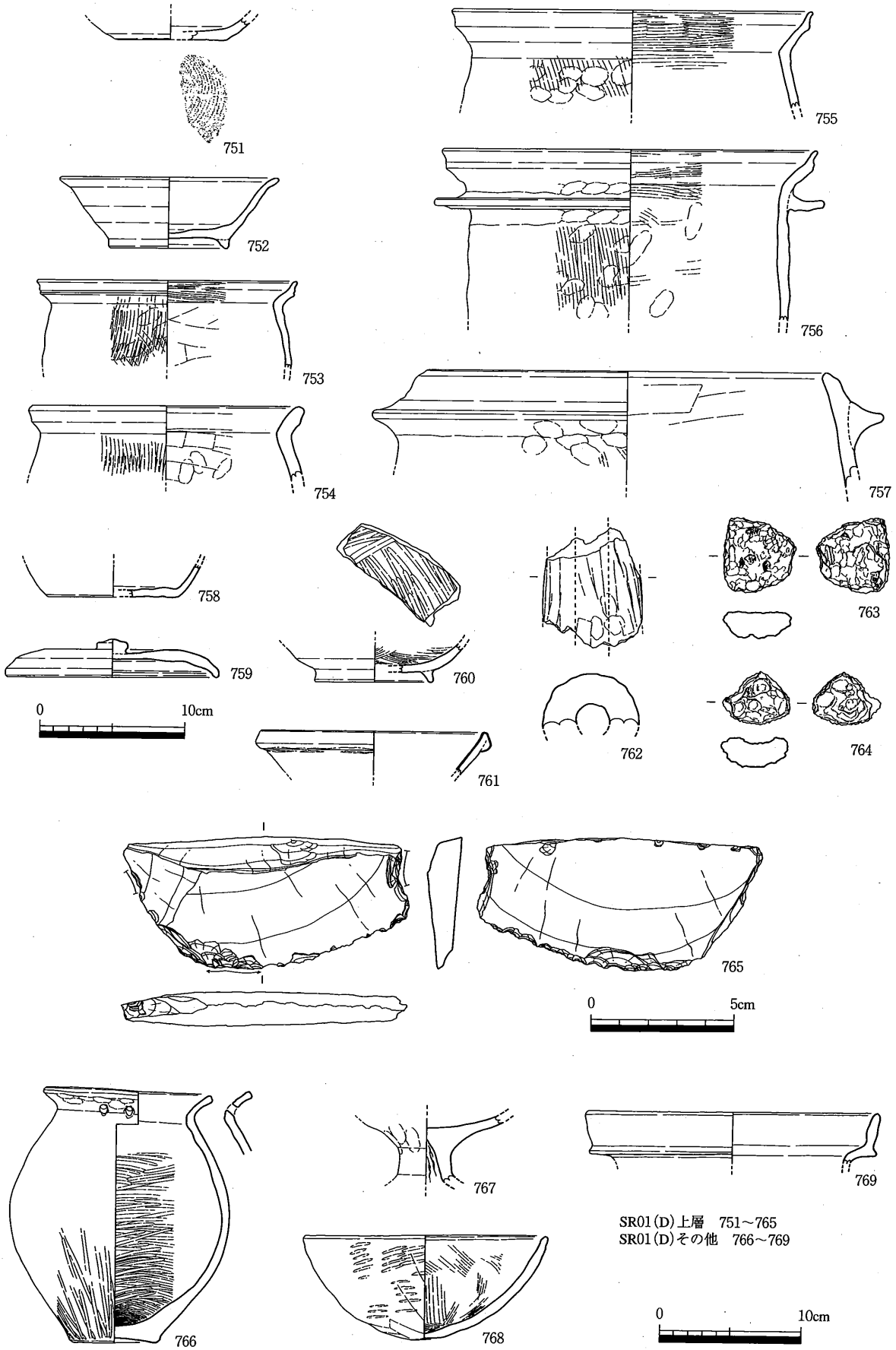
766～768は層位不明遺物である。すべて弥生土器。766は壺。内外面に丁寧にヘラミガキを施し、頸部に２孔１対の穿孔がある。767は高坏。768は椀形の鉢。外面にはタタキ、内面にはハケを施す。

769はＳＲ01（Ｄ）の上部に堆積する包含層から出土した弥生土器。二重口縁壺。下川津Ｂ類。

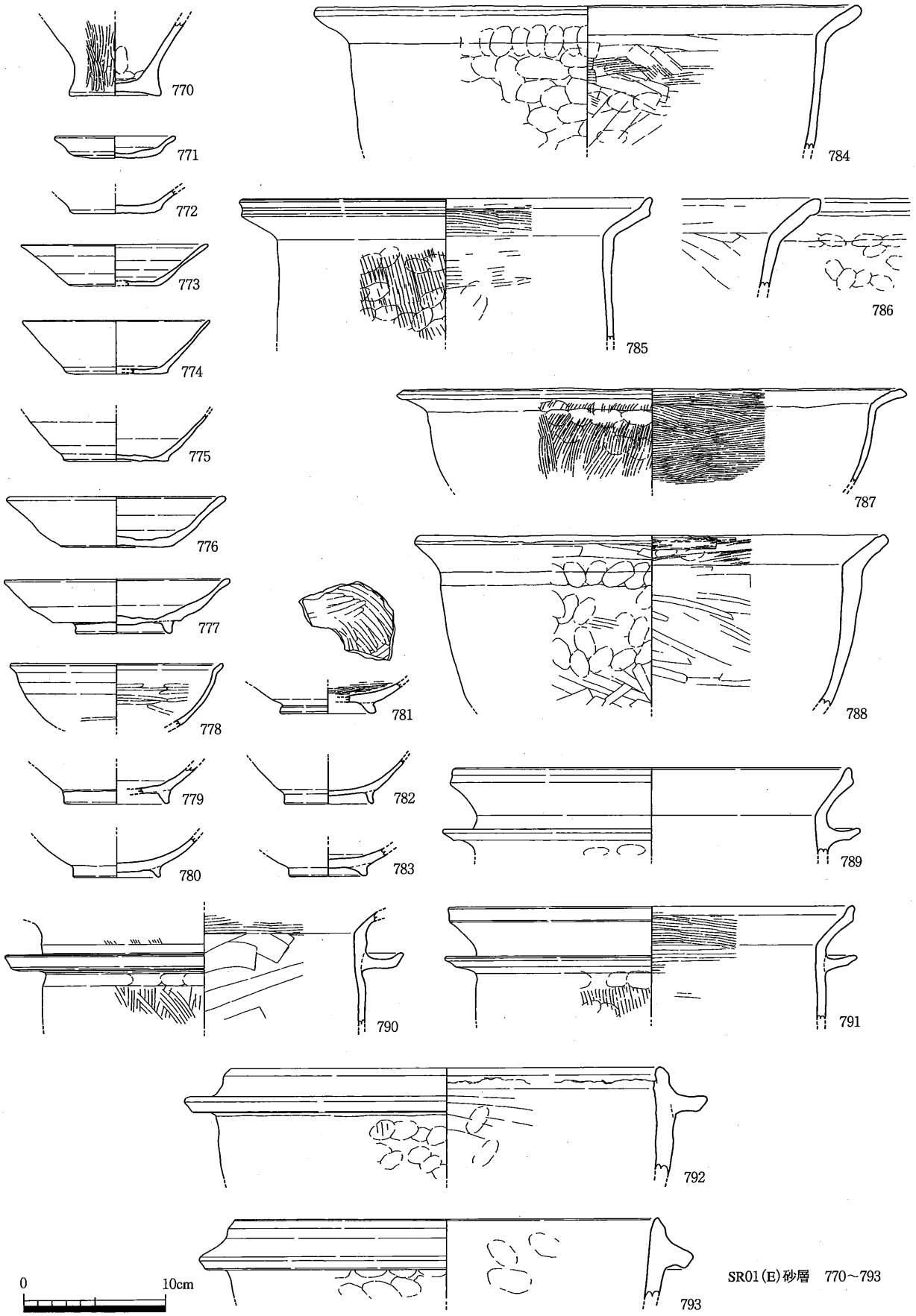
ＳＲ01（Ｅ）（第116・133～136図、図版18・38・39）

１区②では東側流路しか認められない。幅2.5m、深さ1.1m、底のレベルは9.3mで、断面形は緩めの逆台形、埋土は礫を中心としたものからさらに下部では砂層と礫のラミナ状堆積となる。遺物は10～13世紀の遺物がほとんどである。

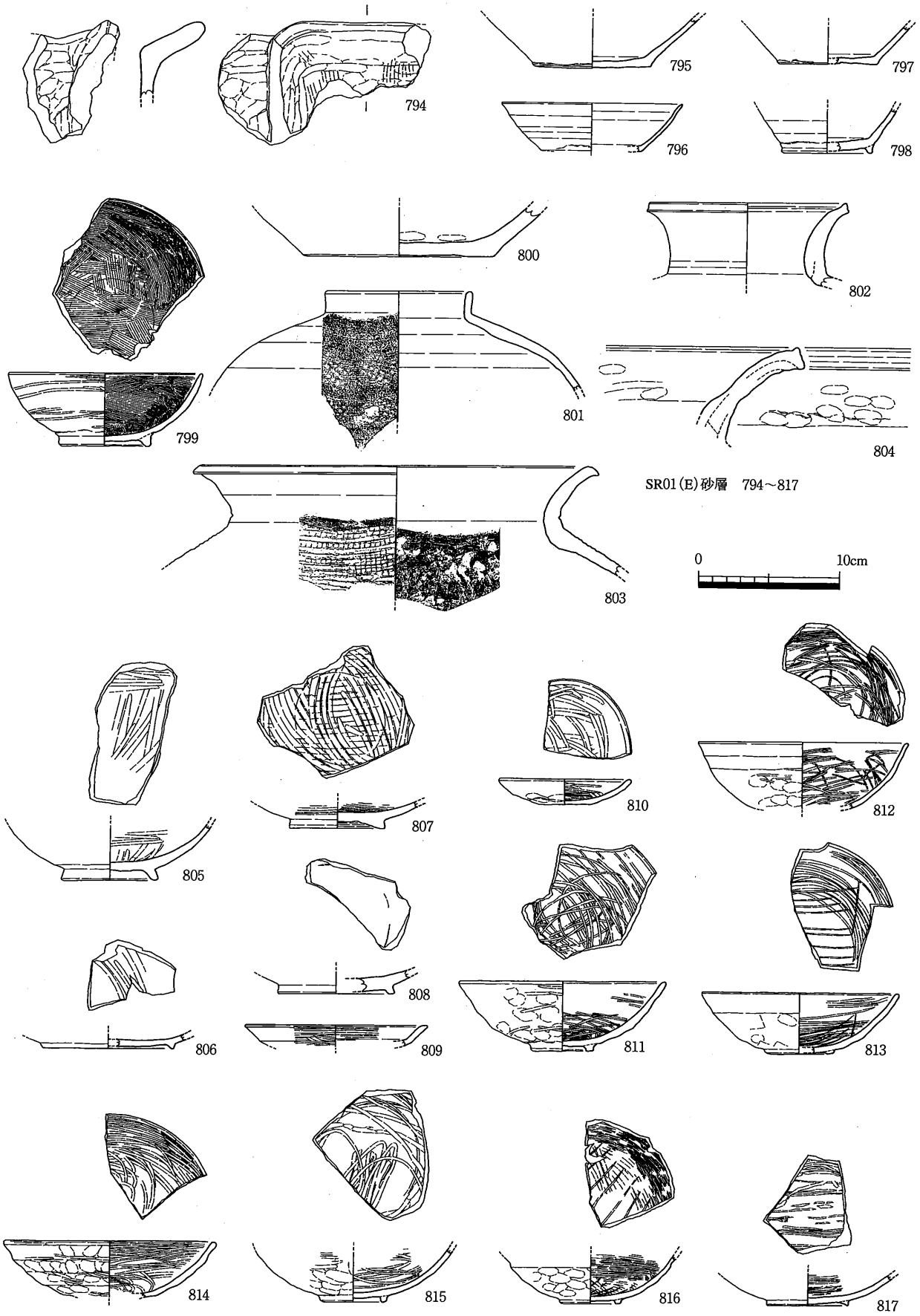
770～834はＳＲ01（Ｅ）から出土した遺物である。770は弥生土器甕底部。しっかりした平底で外面は丁寧に磨く。弥生時代中期後半。771～794は土師器。771は小皿。772～775は回転台土師器。底部はいずれもヘラ切りで、775は反時計回りのヘラ切り痕跡が残る。10世紀前半頃。776は杯Ｄで全体に歪みがある。反時計回りのヘラ切り痕跡が残る。777～783は椀。777は杯の底部に高台を貼り付けたような器形である。778・780は吉備系土師器椀。778は口縁端部を外反させ、内外面をヘラミガキする。12世紀代。779・782は杯に高台を付けた器形で、体部と底部の境に高台が付く。781は内面にヘラミガキを



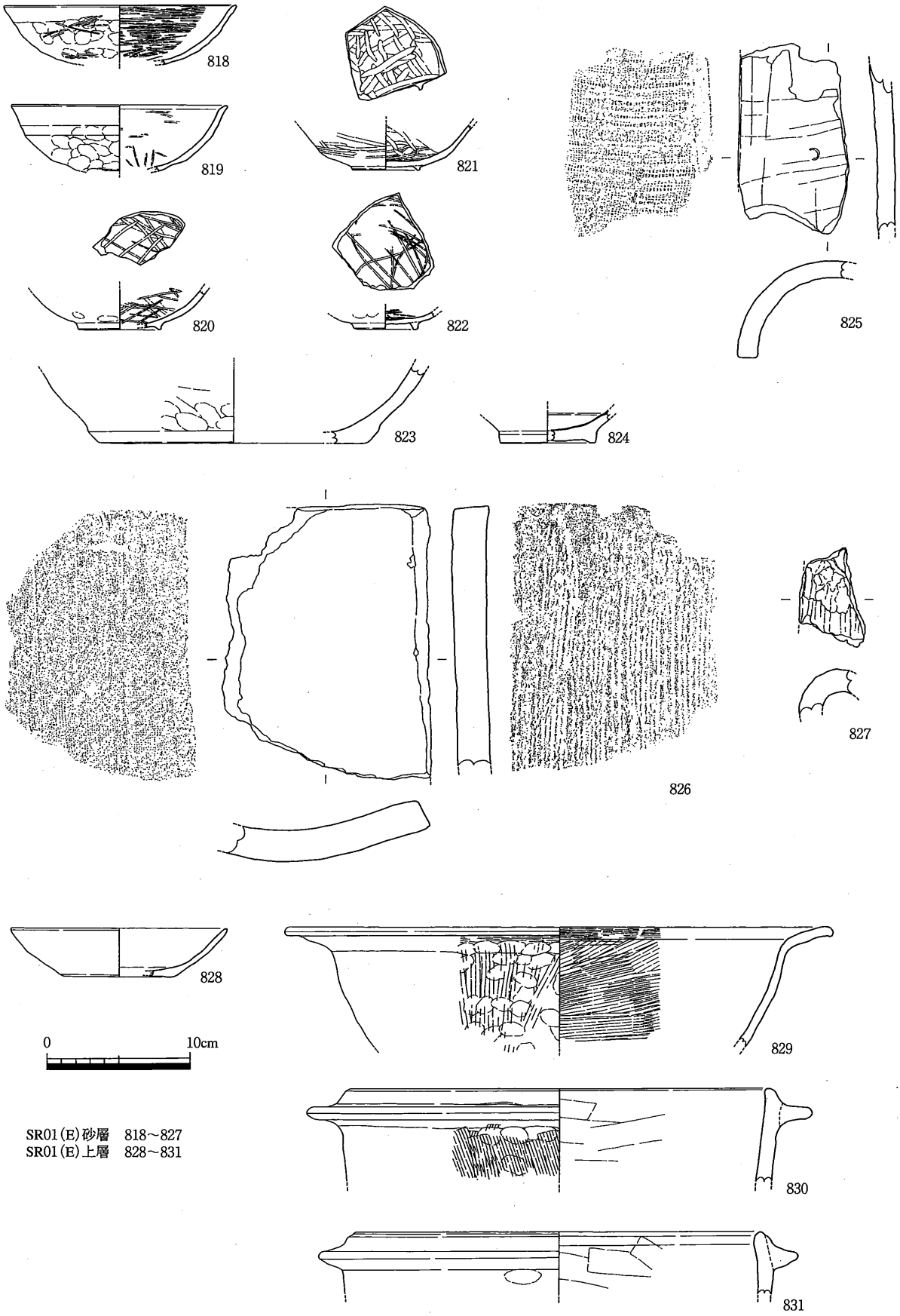
第132図　ＳＲ01(Ｄ)出土遺物⑯(１／４、１／２)



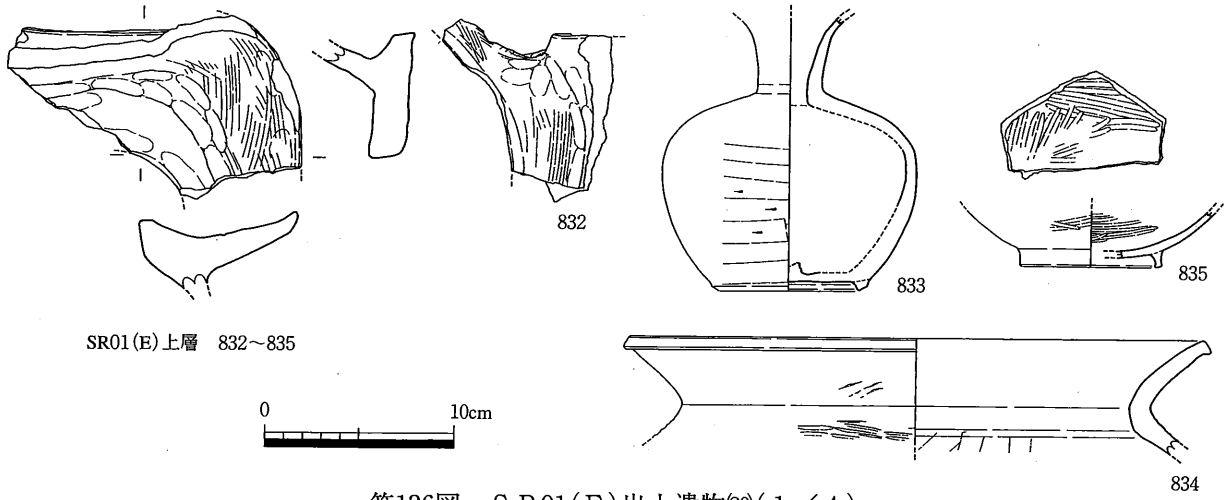
第133図　ＳＲ01(Ｅ)出土遺物(17)(１／４)



第134図　ＳＲ01(Ｅ)出土遺物⒅(１／４)



第135図　ＳＲ01(Ｅ)出土遺物⑲(１／４)



第136図　ＳＲ01(Ｅ)出土遺物⑳(１／４)

施し、高台直上付近にヘラ削りを施す。12世紀後半。784～786・788は甕。784・788は甕Ｅ。784は外面の口縁部と体部の境付近に煤が付着する。785は甕Ｄ。体部外面に煤が付着する。786は口縁端部が玉縁状になる。787は鍋。外面は縦ハケ、内面口縁部は横方向の粗いハケ、体部は細かいハケを施す。789～791は羽釜Ａ。いずれも鍔端部は上方へ引き上げて細くし、口縁端部もいずれも上方へ細く引き上げられると考えられる。790・791は体部外面に縦方向のハケ、内面には横方向のハケで調整する。792・793は羽釜Ｃ。いずれも口縁端部は細く尖らせ、鍔端部は四角気味にする。792は口縁部内側に粘土のしわが残る。794は竈。鍔の取り付きは上部から横部へ直角に取り付き、受け部は鍔部からの立ち上がりがない。全体に太く粗いハケが器面に残る。795～804は須恵器。795～797は杯Ａ。いずれも火襷が残り、796には口縁端部に重ね焼き痕跡が残る。９世紀後半～10世紀前半。798は高台付杯。底部と体部の境に小振りの高台が付く。部分的に土師器に似た焼成状況を示す。799は椀。西村産。内面は横方向のハケで調整し、外面には疎らなヘラミガキを施す。見込み部分には直径約６㎝の白い部分があり、重ね焼き痕跡と考えられる。12世紀後半。800は底部。801・802は壺。801は直立する頸部を持ち、頸部内外面から一部体部外面までゴマ状の降灰が及ぶ。体部上半部には左上がりの格子タタキ痕がある。10世紀前半。802は短い頸部で口縁端部はわずかに上方へ引き出される。頸部外面下半には砂が溶着している。内面には自然釉がかかる。803・804は甕。803は口縁端部が外反する。体部には横方向の格子タタキが残り、頸部には斜め方向のタタキが部分的にナデ消されずに残る。格子状タタキは縦方向の刻みが横方向の刻みを切っており、元は平行タタキであったものが、使い込んで木目が浮き出てくることにより格子状のタタキになったと考えられる。804は体部へ取り付く部分できれいに剥離し、断面から粘土を重ねて頸部を作った様子が観察できる。805・806は黒色土器Ａ。805は内面にヘラミガキが観察できるが、外面調整は摩滅のため不明。806は高台径がやや広めで高台は断面３角形を呈し、形態的には楠葉産のものと類似するが、楠葉産とするには胎土に違和感があり、在地産とする方が妥当と思われる。807～809は緑釉陶器。807・808は高台は削り出しで京都産。807は内外面ともヘラミガキした後全面に施釉する。見込み部分には直径約6.5㎝程度の円形の重ね焼き痕跡が残る。土師質の焼成である。808は釉が禿げ上がって緑色を呈しておらず、透明の釉の痕跡が残るだけである。内面のみ施釉し、外面は施釉しない。見込みには重ね焼きの痕跡が残る。須恵質の焼成である。809は皿。須恵質の焼成で、内外面ともヘラミガキの後施釉する。810～822は瓦器。810は小皿。外面底部付近には粘土の継ぎ目の痕跡が残る。内

外面とも底部から体部下半にかけてはきれいに燻されず、白っぽい。直接重ねて焼成したと思われる。811～822は椀。体部外面に指頭痕を残し、811・812・814・815・818・821には粗いヘラミガキが残る。底部内面には細いヘラミガキで１方向に施すもの（813・816・819)、格子状に施すもの（820)、体部と同じ太さで円弧状に施すもの（811・812・814・815）等がある。817・818・820～822は完全に燻されずに白く残っている部分が多く、特に、818・820・822は燻されている場所が全然残っていない。瓦器の年代は概ね12世紀後半と考えられる。823は須恵器鉢底部。焼成は瓦質。全体に剥離が進む。824は白磁碗底部。見込みに１条の沈線を施す。施釉は残存部分では内面のみである。12世紀代。825は丸瓦。凸面は板ナデ痕跡が残り、凹面の布目ははっきりしている。826は平瓦。凹面には布目痕の下部に斜め方向の糸切り痕が残る。凸面には縦方向の縄目痕が残る。827は鞴羽口。先端部は溶融し、その下部は全体に灰色に変色する。ここから出土した遺物は概ね10世紀前半前後のものと12世紀代のものがみられるようである。

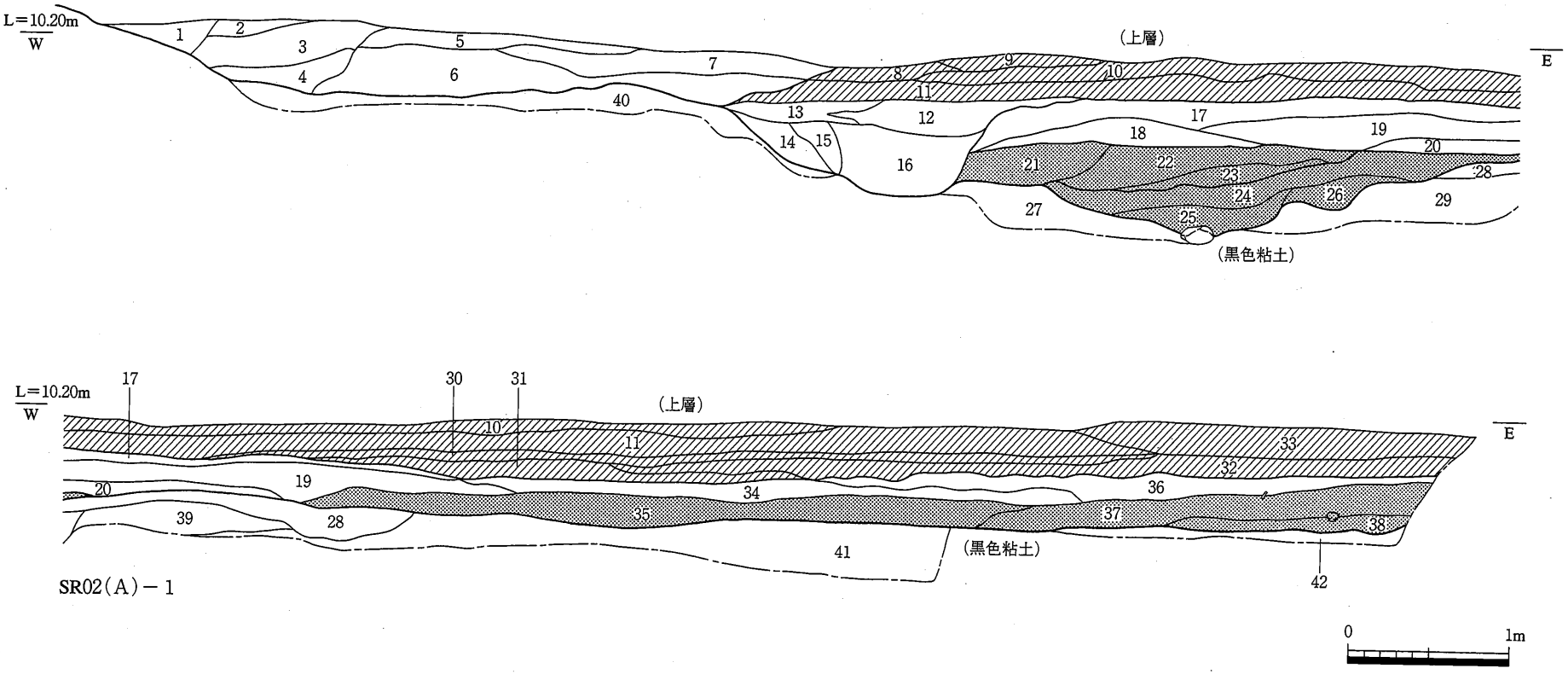
828～834は上層から出土した遺物である。828～832は土師器。828は土師器杯Ｄ。829は鍋。外面には縦方向のハケ、内面には横方向のハケがみられる。830・831は羽釜Ｃ。口縁端部・鍔端部とも丸くする。832は竈。受け口端部、焚き口端部、鍔端部とも四角く納める。外面は粗いハケ、内面は板ナデをする。833・834は須恵器。833は壺Ｌ。丸みを持つ体部に細長い頸部が付く。高台はほとんど体部と一体化しており、体部下半はヘラ削りする。体部の張りの強い部分のやや上側に外面から粘土のしわがみえる。ここが体部と頸部の接合部と考えられる。834は甕。外面頸部下部から体部にかけて平行タタキ痕がある。頸部のタタキ痕は右上がり、体部のタタキ痕はやや左下がりで、頸部のものはほとんどナデ消されている。体部内面は板ナデする。10世紀代。835は黒色土器Ａ。内面には４～５分割のヘラミガキを行う。外面にも摩滅がすすむものの、ヘラミガキは観察できる。上層から出土した土器も10世紀～12世紀のものである。

ＳＲ02（第137～140図、図版19）

ＳＲ02は遺跡の北東側を限る湿地帯である。１区②西北隅から出現し、１区②△地・２区④・２区③・２区①・２区②から６区①へ続いていく。ここではＳＲ02は２区②までしか掲載しておらず、６区①部分については位置的に重複するＳＲ03の一部として報告した。流路の底のレベルは南東から北西へ向けて下がっているが、基本的には流れはほとんどなかったと考えられる。この湿地帯は２区①で一度上がっているが、同様の黒色粘土を基本とする層位は北側に隣接する川津一ノ又遺跡Ⅲ区・Ⅳ区でも検出されており、川津東山田遺跡Ⅰ区は川津一ノ又遺跡よりも標高が高いので、削平を受けた可能性もあり、この湿地帯は川津東山田遺跡と一ノ又遺跡を限るものだったと考えられる。

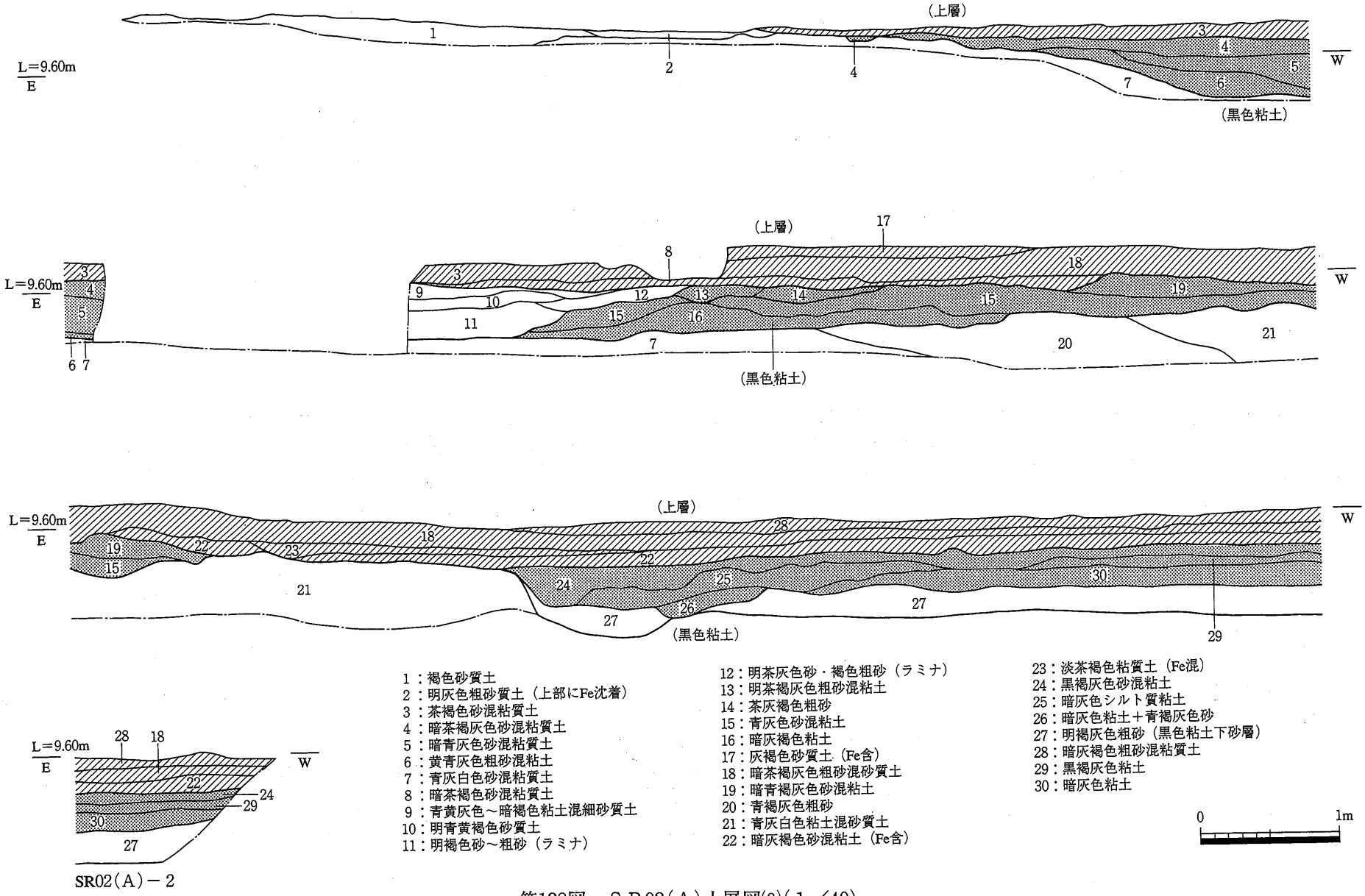
遺物の取り上げは、ＳＲ01と同様、ＳＲ02も調査区ごとに層位を決めて層位ごとの取り上げに務めた。ＳＲ02はすべての調査区にわたって黒色粘土系の土層が堆積していたので、この層を基準として層位を決めていった。

基本的な層序は、最上層に褐灰色系砂質土（厚さ25cm程度)、上層に灰褐色砂質土（35cm程度)、中層に黒色粘土層（厚さ50cm程度）が堆積する。その下層は、２区②部分では黒色粘土層の下部の青灰色砂層を中心とする層で弥生時代後期の遺物が数多く出土しており、この砂層はＳＲ03の砂層へ続く。この層はＳＲ02の北西部までは続かず、２区③、２区④、１区②△地ではみられない。黒色粘土層の下部には自然河川の堆積が２区②の東部から２区③～１区②△地へ向けて流れているが、この層は無遺物層で、川津一ノ又遺跡Ⅳ区の自然河川へつながると考えられる。土層の堆積は、黒色粘土層、包含層ともほぼ



1：明褐色砂（ラミナ）
2：灰褐色粗砂混砂質土
3：明灰褐色粗砂混細砂
4：褐色粗砂、黄褐色粗砂、ラミナ
5：明褐色砂質土（Fe混、6に似るが6の方が固い）
6：赤茶褐色粗砂質土（粘土混）
7：茶褐色粗砂質土
8：赤褐色砂（ラミナ状）
9：淡褐色砂質土
10：灰褐色砂質土（Fe混）
11：赤茶褐色砂質土
12：赤茶灰色粗砂質土（黄褐色くさり礫混）
13：暗青茶灰色砂混粘質土（Fe混）
14：暗黄青灰色粘土
15：暗青灰色シルト質粘土（Fe混）
16：青灰色粗砂、褐色粗砂、ラミナ状（流れ）
17：暗茶褐灰色粘質土（Fe混）
18：暗茶灰褐色粘土混砂質土
19：茶褐色粗砂質土
20：赤茶褐灰色粘質土（Fe混）
21：暗青灰色粘土混粗砂
22：暗青褐灰色粘土混砂質土
23：暗褐灰色粗砂質土（粘土混）
24：暗灰褐色粘土
25：黒灰色粗砂（粘土混）
26：明青灰色シルト質粘土
27：明青灰色粗砂
28：明青灰色粘土混粗砂質土
29：青褐色粗砂
30：明赤茶褐色粗砂混砂質土（粘性あり）
31：濃茶褐色粗砂混粘質土
32：暗茶褐色砂混粘質土
33：赤茶灰色粘土混粗砂質土
34：暗褐灰色粘土（黒に近い）
35：暗褐灰色粘土（黒に近い、33よりやや粘性弱い）
36：37'（37より灰色が濃い）
37：暗褐灰色砂混粘質土（やや青みがかる）
38：暗青灰色砂混粘土
39：明黄青灰色粗砂混粘土
40：明青黄灰色砂混粘土
41：明黄灰色粗砂質土
42：灰色粘土

第137図　ＳＲ02(Ａ)土層図(1)(１／40)

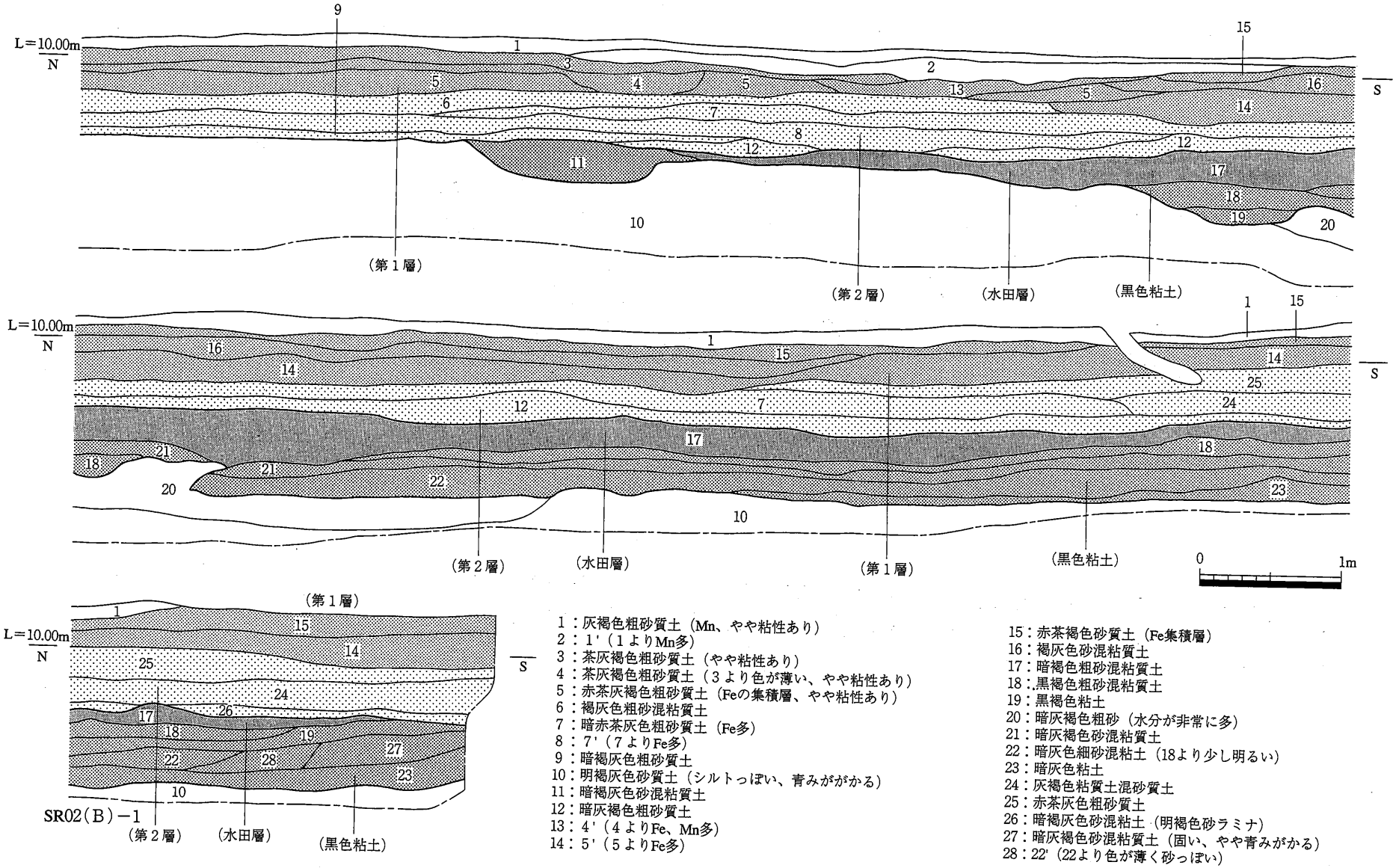


SR02(A)－2

1：褐色砂質土
2：明灰色粗砂質土（上部にFe沈着）
3：茶褐色砂混粘質土
4：暗茶褐灰色砂混粘質土
5：暗青灰色砂混粘質土
6：黄青灰色粗砂混粘土
7：青灰白色砂混粘質土
8：暗茶褐色砂混粘質土
9：青黄灰色～暗褐色粘土混細砂質土
10：明青黄褐色砂質土
11：明褐色砂～粗砂（ラミナ）
12：明茶灰色砂・褐色粗砂（ラミナ）
13：明茶褐灰色粗砂混粘土
14：茶灰褐色粗砂
15：青灰色砂混粘土
16：暗灰褐色粘土
17：灰褐色砂質土（Fe含）
18：暗茶褐灰色粗砂混砂質土
19：暗青褐灰色砂混粘土
20：青褐灰色粗砂
21：青灰白色粘土混砂質土
22：暗灰褐色砂混粘土（Fe含）
23：淡茶褐色粘質土（Fe混）
24：黒褐灰色砂混粘土
25：暗灰色シルト質粘土
26：暗灰色粘土＋青褐灰色砂
27：明褐灰色粗砂（黒色粘土下砂層）
28：暗灰褐色粗砂混粘質土
29：黒褐灰色粘土
30：暗灰色粘土

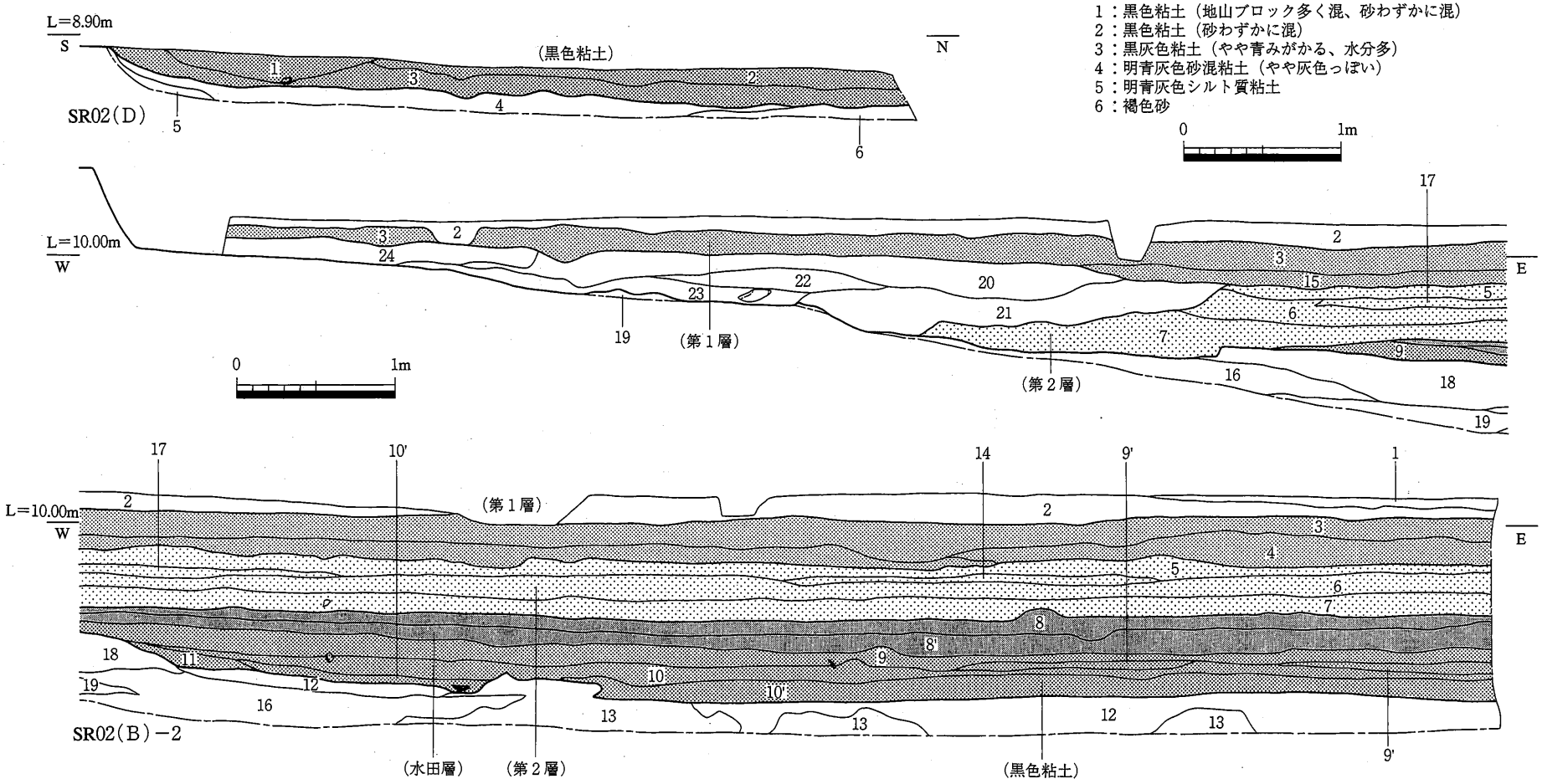
0　1m

第138図　ＳＲ02(Ａ)土層図(2)(１／40)



1：灰褐色粗砂質土（Mn、やや粘性あり）
2：1'（1よりMn多）
3：茶灰褐色粗砂質土（やや粘性あり）
4：茶灰褐色粗砂質土（3より色が薄い、やや粘性あり）
5：赤茶灰褐色粗砂質土（Feの集積層、やや粘性あり）
6：褐灰色粗砂混粘質土
7：暗赤茶灰色粗砂質土（Fe多）
8：7'（7よりFe多）
9：暗褐灰色粗砂質土
10：明褐灰色砂質土（シルトっぽい、青みがかる）
11：暗褐灰色砂混粘質土
12：暗灰褐色粗砂質土
13：4'（4よりFe、Mn多）
14：5'（5よりFe多）
15：赤茶褐色砂質土（Fe集積層）
16：褐灰色砂混粘質土
17：暗褐色粗砂混粘質土
18：黒褐色粗砂混粘質土
19：黒褐色粘土
20：暗灰褐色粗砂（水分が非常に多）
21：暗灰褐色砂混粘質土
22：暗灰色細砂混粘土（18より少し明るい）
23：暗灰色粘土
24：灰褐色粘質土混砂質土
25：赤茶灰色粗砂質土
26：暗褐灰色砂混粘土（明褐色砂ラミナ）
27：暗灰褐色砂混粘質土（固い、やや青みがかる）
28：22'（22より色が薄く砂っぽい）

第139図　ＳＲ02(Ｂ)土層図(3)(１／40)



1：黒色粘土（地山ブロック多く混、砂わずかに混）
2：黒色粘土（砂わずかに混）
3：黒灰色粘土（やや青みがかる、水分多）
4：明青灰色砂混粘土（やや灰色っぽい）
5：明青灰色シルト質粘土
6：褐色砂

1：褐灰色粗砂質土（Fe、Mn含）
2：赤茶褐色砂質土（Feの集積層）
3：灰褐色砂質土（粗砂混、やや粘性あり）
4：赤茶灰褐色砂質土（粗砂混、Fe多、やや粘性あり）
5：灰褐色粘質土（粗砂混、Fe少し混）
6：灰褐色粘質土（1より褐色が強い）
7：暗灰褐色粗砂混粘質土
8：暗灰褐色砂混粘質土
8'：暗灰褐色砂混粘質土（8より色がやや薄く砂が少ない）
9：黒灰褐色粘質土（砂少し混）
9'：黒灰褐色粘質土
10：黒灰色粘土
10'：黒茶灰色粘土（10より色が薄い）
11：暗灰褐色粘質土（砂少し混）
12：明青灰色粘質土～砂質土
13：明青灰色砂質土
14：灰褐色粗砂質土
15：灰褐色砂質土
16：青褐灰色砂粗砂（ラミナ状に入る）
17：灰褐色砂質土（砂がラミナ状に混）
18：青黄灰色砂混粘質土
19：明青灰色砂質土
20：暗褐灰色砂混粘土（木片混）
21：暗褐色砂（明褐色砂ラミナ状に入る）
22：暗灰褐色砂混粘土（明褐色砂多く入る）
23：青黄褐色砂
24：暗褐灰色粘土（粗砂少し混）

第140図　ＳＲ02(Ｂ・Ｄ)土層図(4)(１／40)

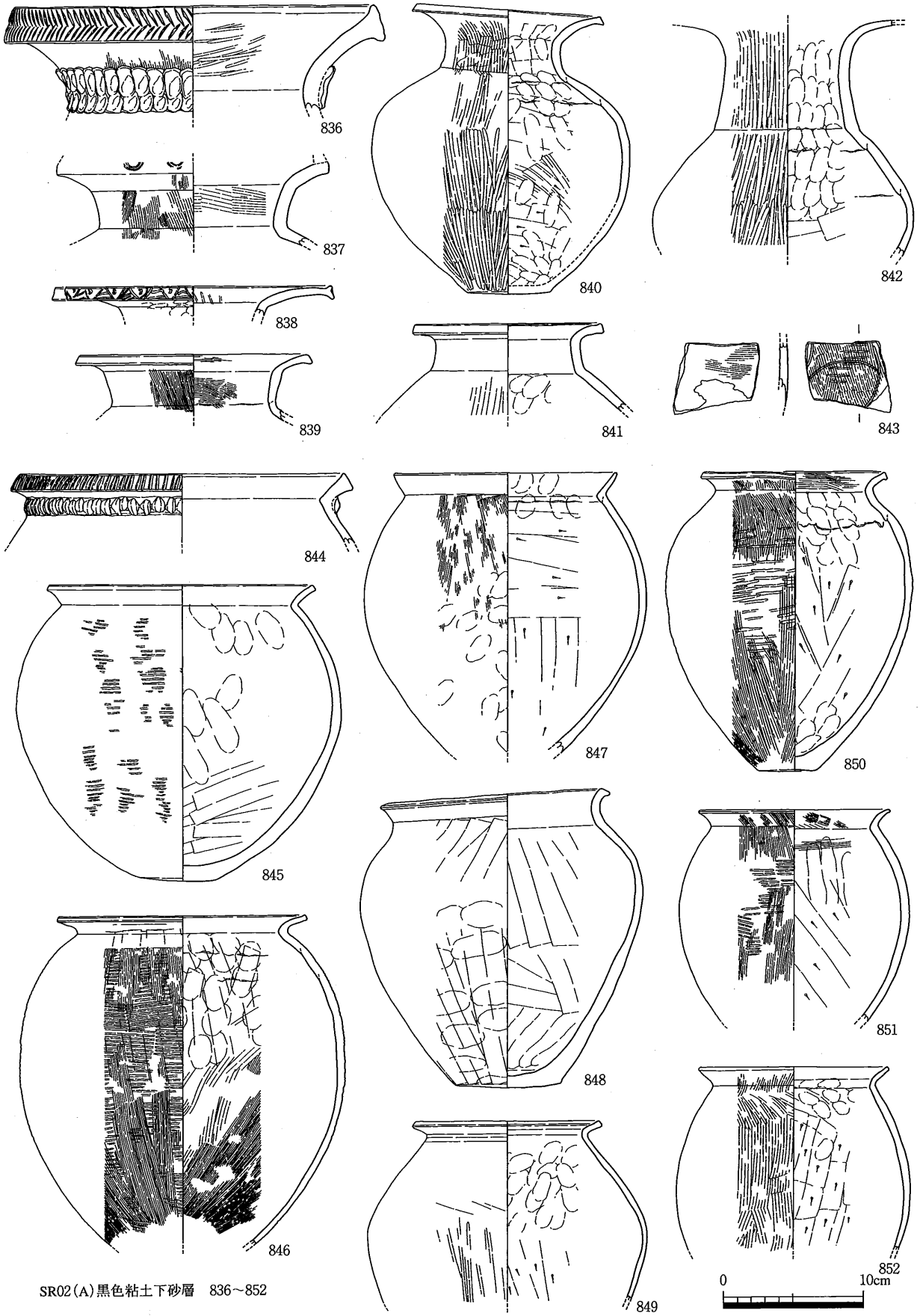
全体に水平堆積である。また、黒色粘土層や包含層を切って砂層を中心とする流路が流れる。

なお、遺物の取り上げは現場では概ね黒色粘土層をキーとして、上面の包含層、下部の砂層を分けて取り上げたが、整理作業を進めるうちに、黒色粘土層と上部の包含層の間に奈良時代の包含層と考えられる暗灰色系の土層があることが判明した。この層は２区④部分では黒色粘土層の上面に堆積し、なおかつ上部包含層がその上面に堆積するＳＤ2401に切られる層であり、２区③部分では後述するように水田層が検出された層である。この層は２区④では厚さ約20cm、２区③でも同様に厚さ20cmで堆積する。２区②ではこの層は明確には認められない。２区③部分でプラント・オパールの分析を行った結果、最上層・上層・暗灰色粘土層の上層で水田跡があったことがわかった。このことは川津一ノ又遺跡Ⅲ・Ⅳ区の結果とも概ね整合するものとなった。

ＳＲ02（Ａ）黒色粘土下砂層（第137・138・141・142図、図版19・40・41）

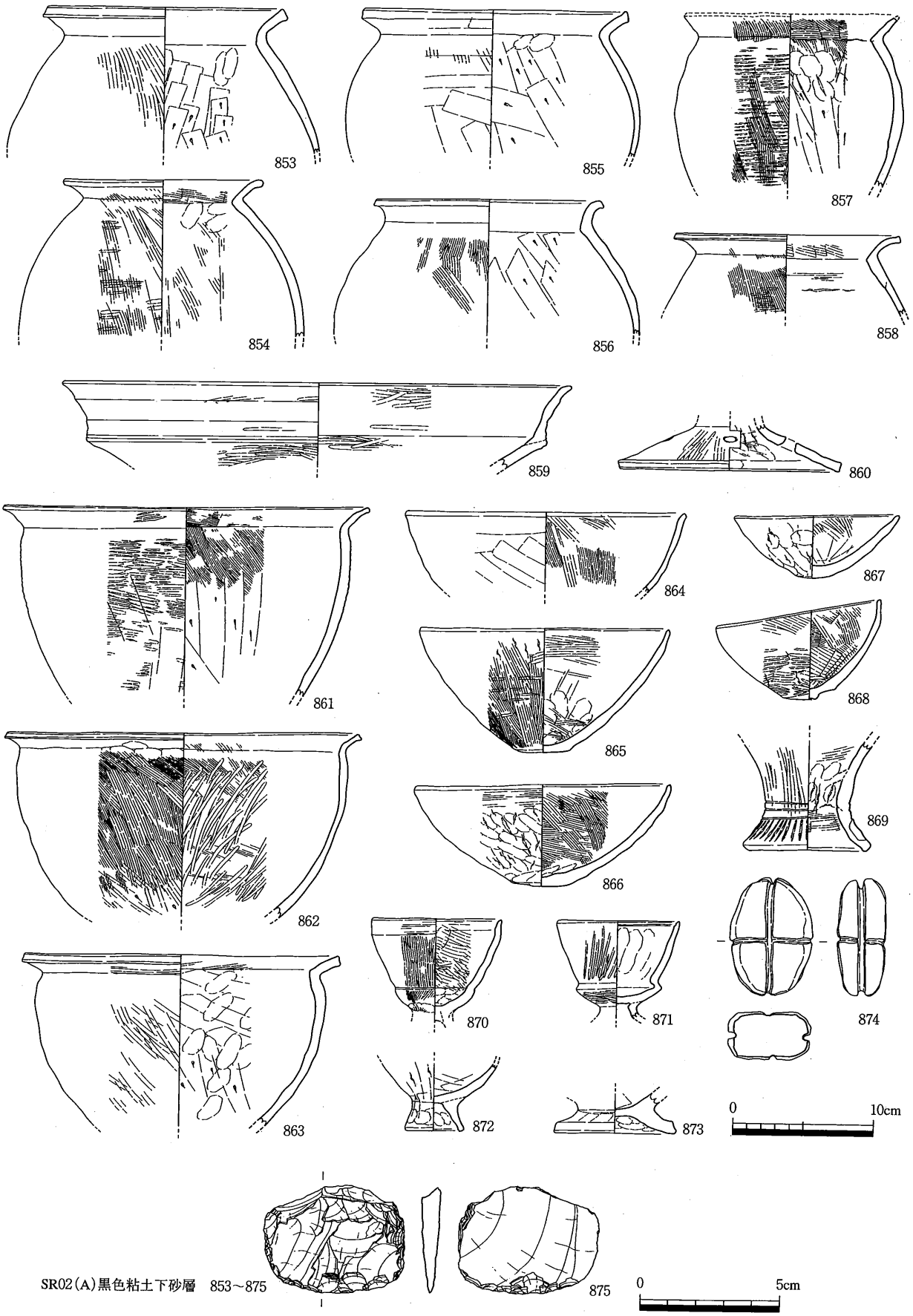
Ａ部分（２区②）で検出した黒色粘土の下部に堆積する明青灰色砂層である。ＳＲ03から続く層位で、場所によって別々に報告しているが、同じ層位と考えられる。Ａ部分を南東から北西方向へ抜け、Ｃ部分（２区②）の北東部をかすめながら北へ向かうと考えられる。幅は６ｍ、深さ30～40cm、埋土は明青灰色～青褐色粗砂である。

836～843は壺。837・843以外は広口壺。836は口縁端部に綾杉状の刻み目文、頸部には２段の押圧が施された突帯文が付く。弥生時代中期後半。837は二重口縁壺。外面は縦方向のハケ、頸部内面は横方向のハケを施す。二重口縁の部分はきれいに剥離している。二重口縁部にはヘラ画きで鋸歯文または波状文状の文様を施す。胎土中に雲母が少し含まれる。838は口縁部が大きく開き、口縁端部にはヘラで波状文、その上部からさらに幾何学文様を施す。839～841は短めの頸部に大きく開く短めの口縁部が付く。口縁端部には面を持つ。839・841はほぼ直立する太めの頸部で、口縁部と頸部の境は稜線を持つ。840は完形に近い。頸部は丸みを持って立ち上がる。頸部は縦方向のハケ、体部は丁寧に磨く。842は長めの頸部を持ち、外面は丁寧に磨く。843は壺体部片。円弧状のヘラ描きがある。844～858は甕。844は口縁端部に縦方向の刻み目を持ち、頸部には押圧突帯を貼る。弥生時代中期後半。845～858は、調整は外面はタタキの後ハケ、内面は体部は主にヘラ削りで、体部上部や頸部にハケを併用するものや体部下半にハケを施すもの、(846・850・851・854・857・858)、又は外面にハケ調整、内面には体部上部にハケをし、中位から下部をヘラ削りするもの（847・852・853・855・856）が大半を占める。850は平底を持つ。845はほぼ完形であるが、摩滅が進む。丸い体部でわずかに平底状を呈し、体部はタタキ調整する。848はほぼ完形。やや摩滅する。内外面とも板ナデで仕上げる。頸部は短く直立気味に立ち上がり、口縁端部には面を持つ。底部は平底である。849は下川津Ｂ類。859・860は高坏。859は口縁部の小片。内外面とも横方向のヘラミガキをし、口縁端部は面を持つ。口縁部と体部の境には2条の沈線が巡る。この部分には剥離痕跡が見える。860は脚部。筒部はないが、筒部から大きく脚部へ広がる器形と考えられる。２孔穿孔が認められ、残存状況から４孔がほぼ均等に穿孔されたと考えられる。861～871は鉢。861～863は口縁部が屈曲する器形。口径は22～26cm程度、調整は外面は叩くもの（861)、ハケを施すもの（863)、ハケの後底部を削るもの（863)、内面は上半部をハケまたは板ナデし、下半部を削るもの(861・863)、ハケの後ヘラミガキするもの（862）がある。862のタイプには内面に朱が付着するものがある。864～868は椀形の器形のもの。864～866は口径が17.5～20cm程度のもの。内面はいずれも横～斜め方向のハケ、外面は板ナデするもの（864)、タタキの後ハケをするもの（865)、あまり調整を加えないもの（866）があり、866には顕著に、また865にもわずかにクラックが残る。867・868は口径11.5cm前



SR02(A)黒色粘土下砂層　836～852

第141図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(1)(１／４)



SR02(A)黒色粘土下砂層　853～875

第142図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(2)(１／４、１／２)

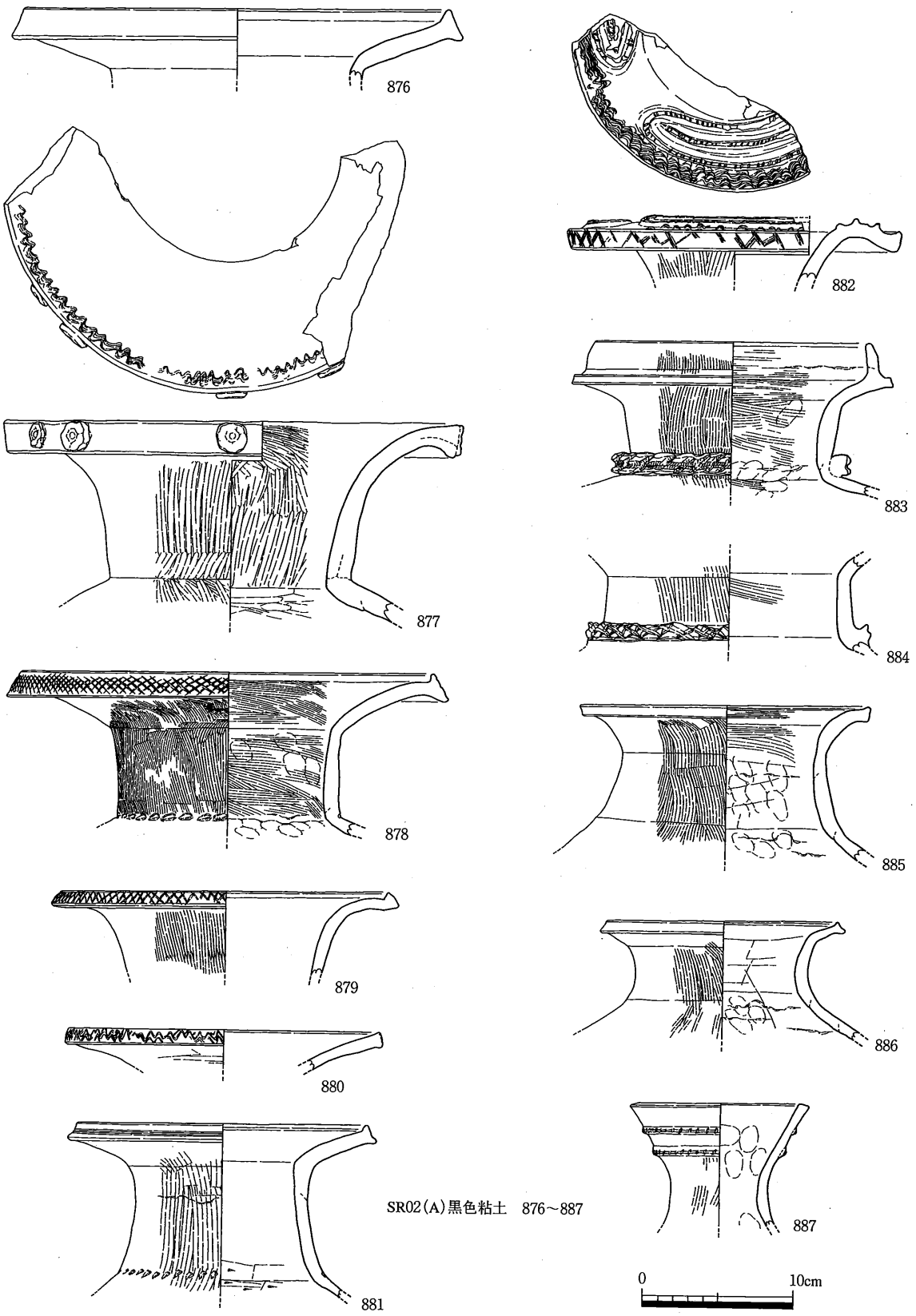
後のもの。いずれも内面は右下から左上の斜め方向にハケを施し、平滑にする。867は浅めで歪みがある。内面はハケ、外面は成形の痕跡があまりなく、クラックが残る。868はやや深め。外面は下部にタタキ痕を顕著に残し、上部にハケを施す。クラックがわずかに観察できる。外面底部はヘラ削りをしているが、非常に粗く周縁部を削っているだけで中心部分が盛り上がり、平らになっていない。869は台付鉢。底部はきれいに剥離して、やけムラ以外の痕跡を残さない。体部と脚部の境に３条の沈線を施し、脚部には内面まで達しない縦方向の刻み目を入れる。弥生時代中期後半。870・871は小型丸底壺に脚が付く器形。870はやや丸みを帯びた底部を持ち、底部と体部の境にわずかに段を付ける。871は下川津Ｂ類。外面をヘラミガキし、体部最大径部分に稜を持つ。872は製塩土器か。体部は開き気味で丸みを持ち、内外面とも調整痕をあまり残さない。873は台付鉢脚部。874は土錘。楕円形で扁平な形状を示し、側縁に１重、表裏面には十字に溝を入れる。側縁の溝の方が深い。875はスクレイパー。サヌカイト製。

黒色粘土下砂層の遺物の時期は、一部に弥生時代中期後半の資料が混じるものの、概ね弥生時代後期後半Ｖ－３～終末期２くらいの時期幅があると考えられる。

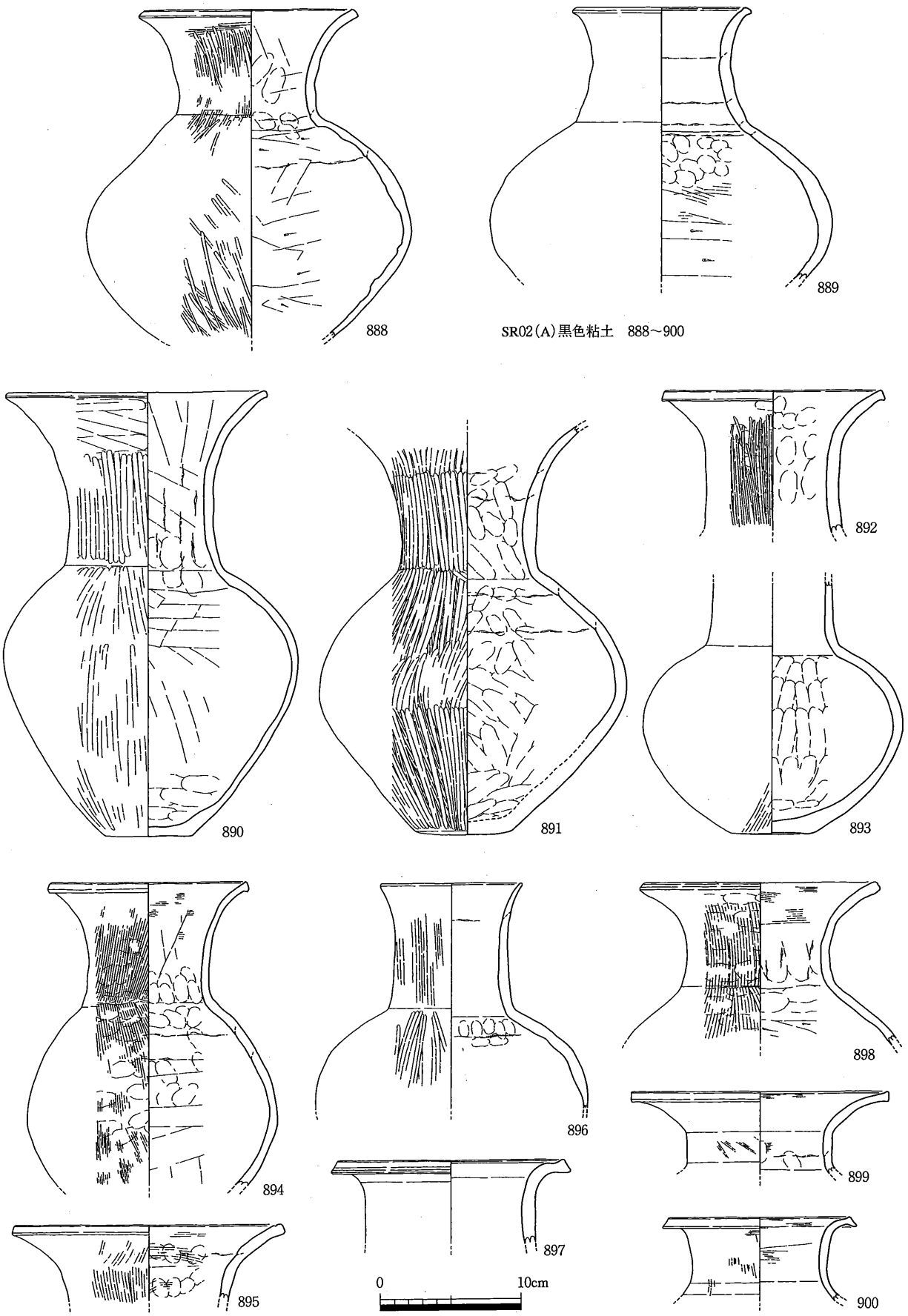
ＳＲ02（Ａ）黒色粘土（第137・138・143～153図、図版19・42～51・82）

Ａ部分（２区②）のほぼ全面で検出した層である。概ね厚さ30cm程度の水平堆積である。

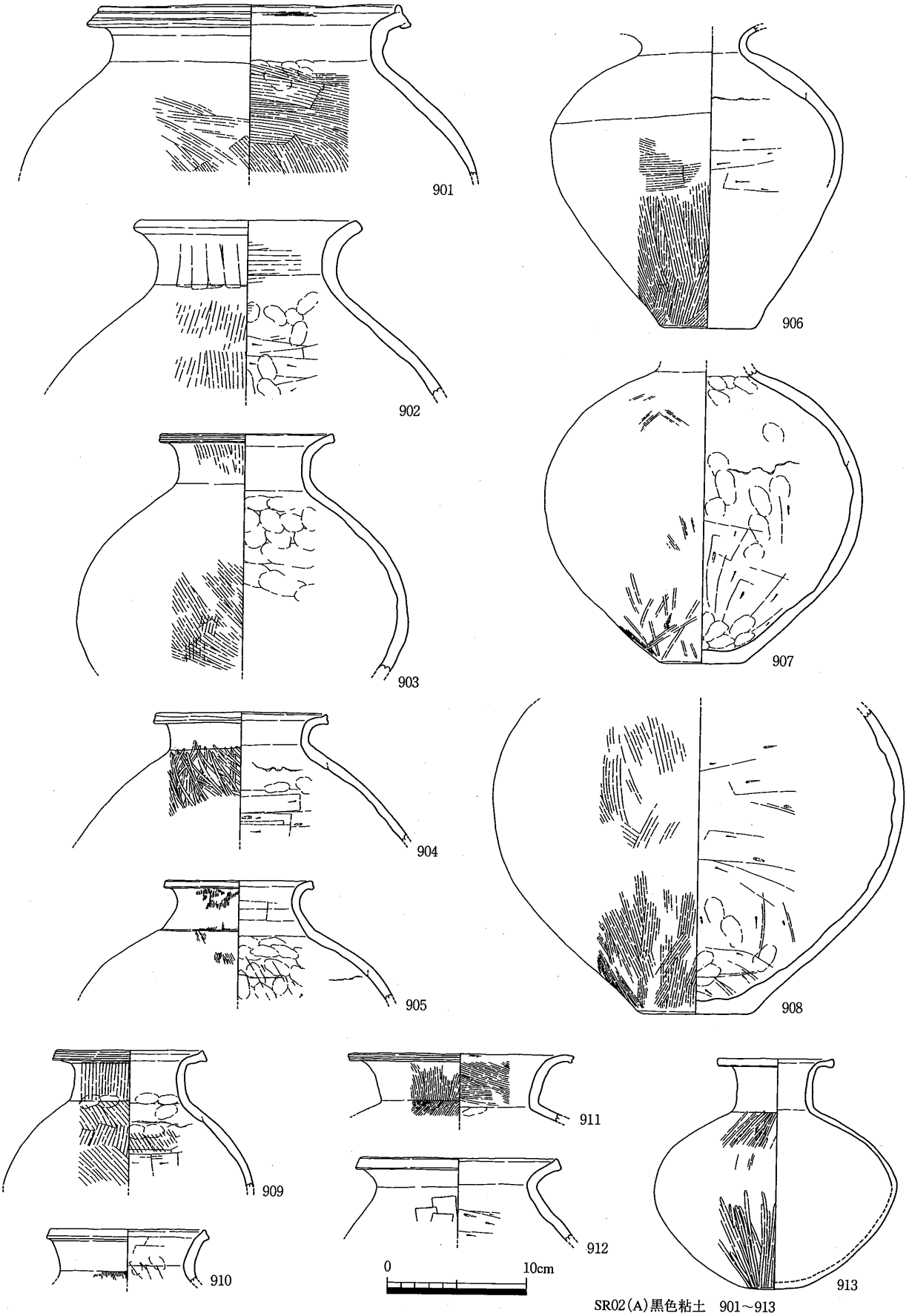
876～918は壺。877～881・899は直立または斜め方向に延びる頸部にやや長めの口縁部が大きく開くもの。口縁端部に面を持たせ、装飾を加えるものが多い。876は下川津Ｂ類。877は口縁端部に２個一単位の円形浮文を貼り付け、口縁部内面には波状文を描く。内外面とも丁寧にヘラミガキする。口縁端部下側を粘土を貼り付けて拡張させる。878・879は口縁端部を上部に拡張し、口縁端部に斜格子文を描く。878は頸部と体部の境に刺突文を入れる。881は頸部はやや長めで内傾気味に立ち上がり、体部と頸部の境に刺突文を入れる。882は内面加飾壺。口縁部内面に波状文、その内側に刻み目を付ける突帯を楕円形に巡らし、その内側にも刻み目を持つ突帯を貼り付けたものが少なくとも２単位ある。口縁端部には斜格子文を付ける。弥生時代中期中葉。883は二重口縁壺。頸部と体部の境に突帯を巡らせ、突帯にはまず斜め方向に刻み目を入れ、その後横方向に沈線のように凹ませる。884は頸部と体部の境に突帯を巡らし、そこに斜格子に刻みを深く付けている。口縁部は二重口縁壺になる可能性がある。885・886・897・900はやや長めの頸部に短めの口縁が急に大きく開くもの。口縁端部には面を持たせる。885・886・900はハケを施す。887は口縁端部は平らにし、頸部の上の方に２条の刻み目突帯を貼り付ける。弥生時代中期後半。888～896・898は長めのほぼ直立する頸部に口縁部が緩やかに開くもの。外面調整は頸部から体部にかけてハケで調整するもの（823～825・828）とその後にヘラミガキを加えるもの（888・890・891・896）がある。底部は平底で、体部は丸いもの（893　・894）と中位が張り気味のもの（888～891）がある。内面は、頸部から体部上半にかけて指押さえの痕跡を残し、下半はヘラ削りするものが多い。901・902・904～906・912・914は短めの頸部から口縁が開く。906・912は頸部がほとんどない。907・908は体部から底部。球形に近い体部に平底の底部が付く。外面はハケを施し、907には下部にヘラミガキも見られる。内面はヘラ削りする。903・909・913はやや長めの頸部に急激に屈曲する口縁部を持つ。やや小型品で口径は８～12cm前後である。913はほぼ完形で体部外面をヘラミガキする。体部下半部に直径7.5mm程度の焼成後の穿孔が１個所みられる。下川津Ｂ類。903・909は口縁端部に２条の沈線を巡らせ、外面はハケで仕上げる。910は頸部がまっすぐに伸びるもの。頸部はほぼ直立し、口縁部は開かない。915・916は小型のもの。915は丸い体部を持ち、頸部はほとんどなく口縁部に至ると思われる。外面は縦方向に丁寧にヘラミガキし、最後に中位に横方向にヘラミガキする。916は体部中位



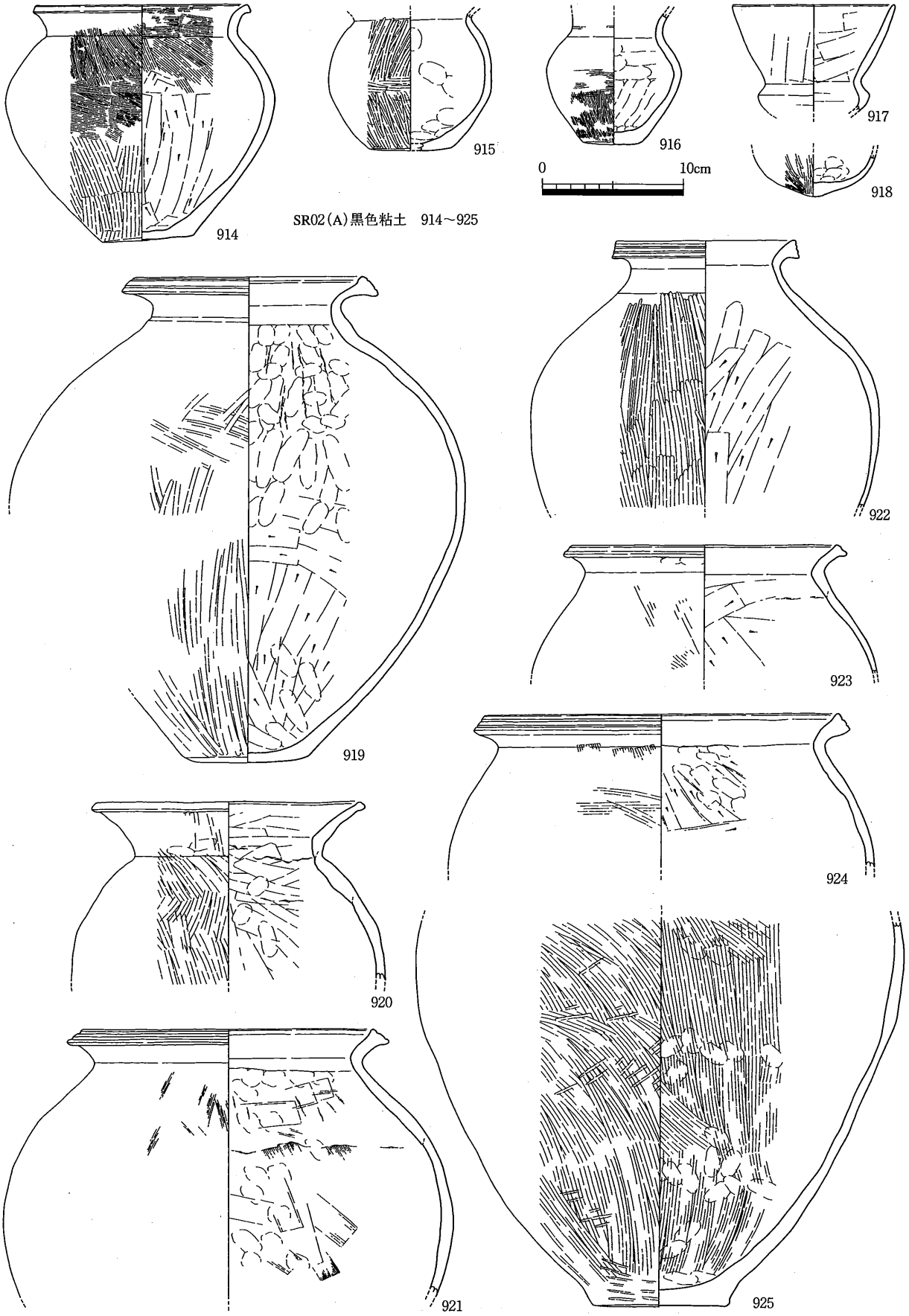
第143図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(3)(１／４)



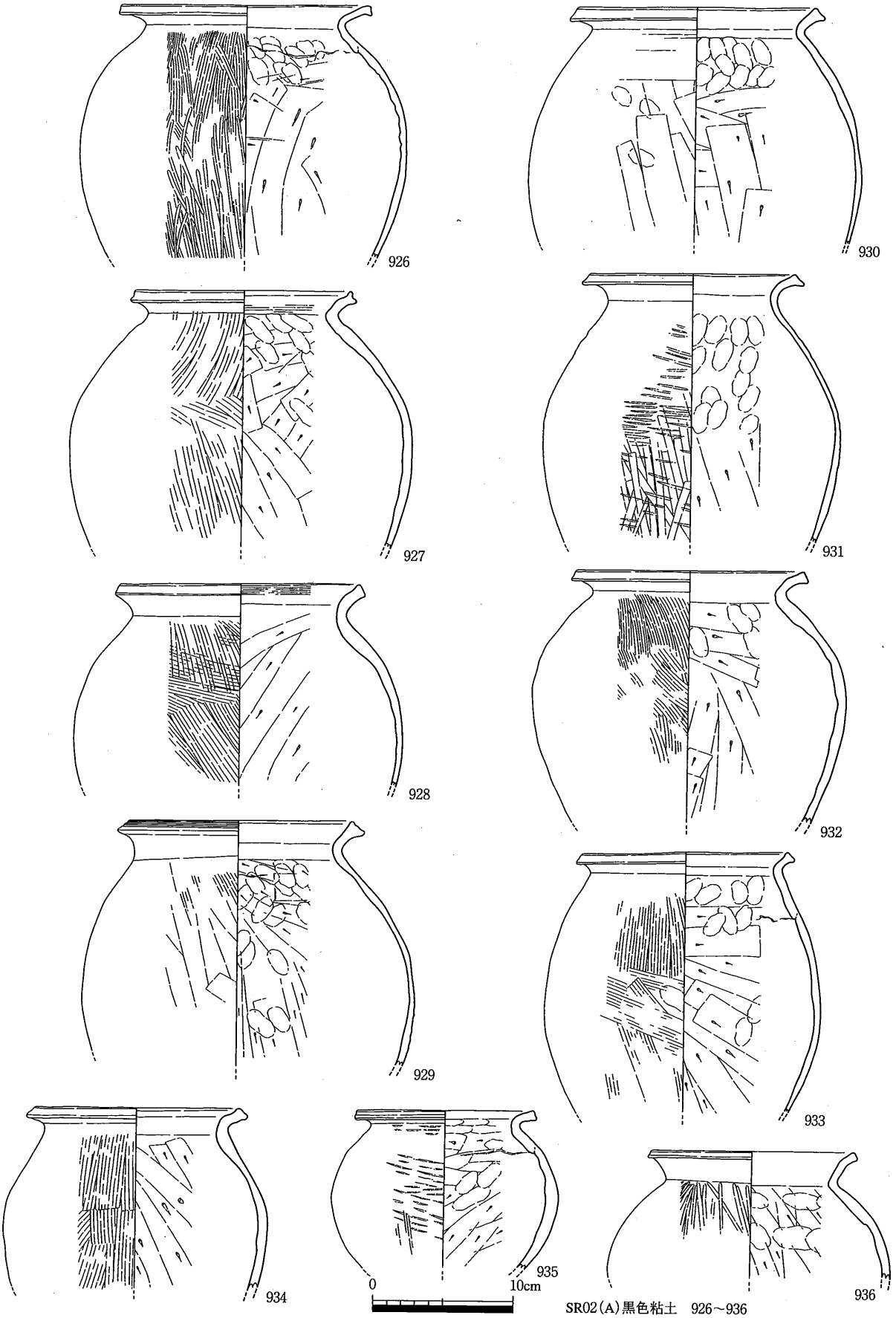
第144図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(4)(１／４)



第145図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(5)(１／４)



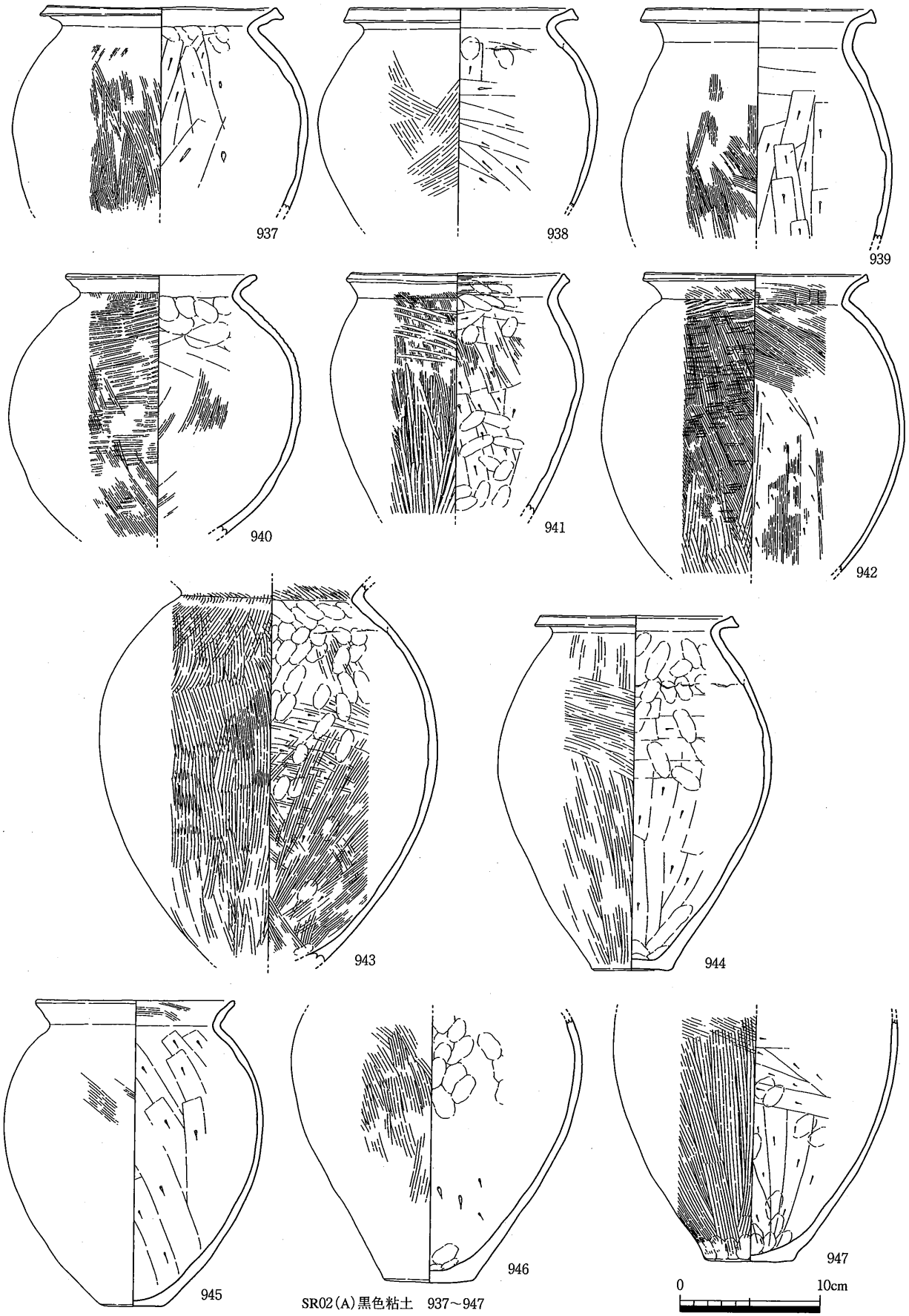
第146図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(6)(１／４)



第147図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(7)(１／４)

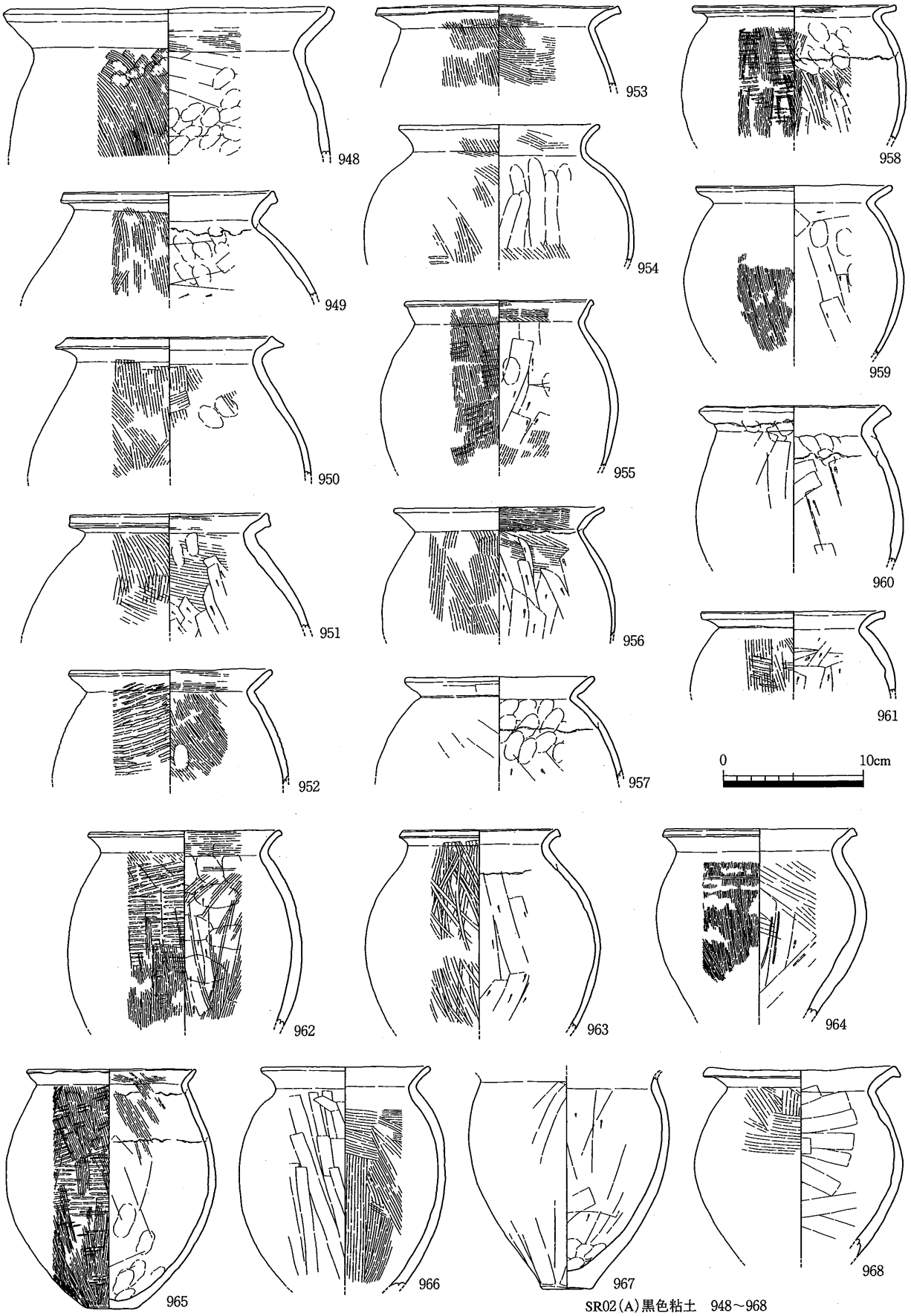
が張っており、頸部はやや伸びそうである。917は小型丸底壺。全体に調整痕は不明瞭である。底部の形骸化は進んでいない。

919～975は甕。919～924（920を除く）・929は口端部に凹線文を１～３条程度巡らせるものである。919・922は体部外面を丁寧にヘラミガキ、その他はハケを施す。内面は921がハケを施す他はヘラ削りする。925は体部から底部。しっかりした平底で、外側を叩いて成形した後、内外面ともハケを施す。926～951は一部を除き口径が14.5～17.5cm程度のものである。926・927・930・932は口径が15cm～17.5cm程度のもので、頸部が強めに屈曲し、端部に至る。端部には面を持つ。調整は外面はハケで（930は板ナデ）、内面はヘラ削りである。926は外面下半部にハケの後ヘラミガキする。944も類似する形態・調整方法を採るが、口径が小さい。928・931・933・934・939は頸部がやや間延びしたような器形で、928以外は体部もあまり丸くならず、寸胴気味である。口径はだいたい14.3cm～16.7cmである。調整は外面をハケ、内面をヘラ削りするが、931はハケは丁寧には行われず、タタキ痕が明瞭に残る。935・937・938は頸部が強めに屈曲し、体部が球形を示す。口縁端部には面を持つ。937・938は体部外面をハケ、内面はヘラ削りし、935は外面にタタキ痕を明瞭に残す。935はやや小型。936・942・955は頸部をくの字に屈曲させ、口縁部はやや鈍角気味に付く。943も頸部の残り具合からこのような形態と思われる。外面はハケ、内面はヘラ削りし、942・943は内面をヘラ削りしたあと、ハケを施す。942はハケの下側にタタキ痕跡が観察でき、外面下半部には間隔の広いハケの原体を使っている。941は緩く屈曲する口縁部にあまり丸みを持たない体部を持つ。外面はハケの後体部上半を横方向の、下半を縦方向のヘラミガキをして、きれいにしている。946・947は底部。ともに平底で外面はハケ、内面はヘラ削りする。口径はだいたい15～17cm程度になると思われる。928・948はくの字に折れ曲がる頸部に長めの口縁部を持つ。948は古墳時代前期頃の紛れ込みか。949・951・963は頸部が丸みを持って屈曲し、口縁端部には面を持つ。丸みを持ちながら体部に至る。口径は950・952は14cm前後。963は11.1cmである。963は外面をハケの後ヘラミガキする。950はゆったりした頸部からなで肩状の体部を持つ。口縁端部には面を持つ。952・954～968は11.8～14cm程度のものである。952・955～959・962・965・966は概ねくの字に屈曲し、あまり鋭角的に付かない口縁部に丸みを持つ体部が付く。外面はタタキのみのもの（952）、タタキの後ハケを施すもの（955・958・962・965）、ハケのみが残るもの（956・959）、板ナデが残るもの（966）があり、内面はヘラ削りの後ハケを施すもの（955・956・962）、ハケのみのもの（952・966）、ヘラ削りのみのもの（959）がある。954は頸部にやや丸みを持たせながら口縁端部に至る。953はきつく頸部が曲がって、体部肩部が直線状に落ちるもの。弥生時代中期後半と思われる。960・964・968は口縁端部に面を持ち、体部中程がやや張り気味である。967はしっかりした底部で開き気味の体部を持つ。969・970は底部。971～973は口径が10.5cm程度でしっかりとした平底を持つ小型の甕である。外面はハケまたはタタキ痕を残し、内面は指ナデまたはヘラ削りである。974は口径8.8cmの小型の甕で、頸部の屈曲は緩い。975は頸部の屈曲は更に緩く、内面に粘土の継ぎ目の痕跡を明瞭に残す。976～994は高坏。976～982は杯部が残る。口縁端部は面を持つもの（976・978・979）、丸くぽてっとするもの（977）、丸く細いもの（980）、立ち上がりが長めのもの（982）がある。調整は980以外は全部杯部内面には底部に放射状のヘラミガキが見られる。杯部立ち上がり部には横方向にヘラミガキするもの（976～978）、縦方向にヘラミガキするもの（982）があり、外面は放射状にヘラミガキするもの（977～979・981・982）が大半を占め、その他ハケをするもの（976）もある。外面の立ち上がり部分には縦方向にヘラミガキするもの（976・982）、横方向のヘラミガキをするもの（978）、連弧状のヘラミガキをするもの（977）がある。

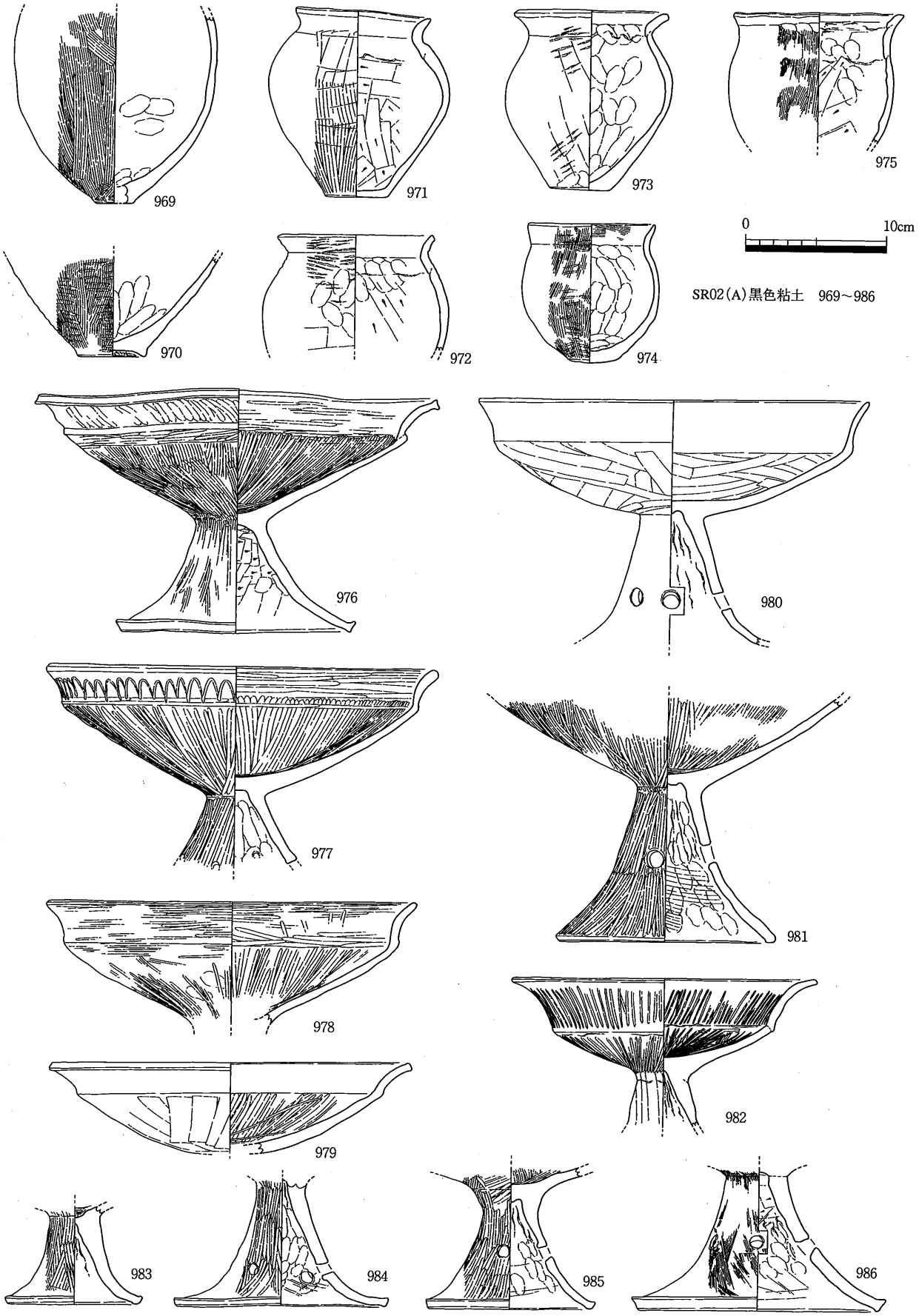


SR02(A)黒色粘土　937～947

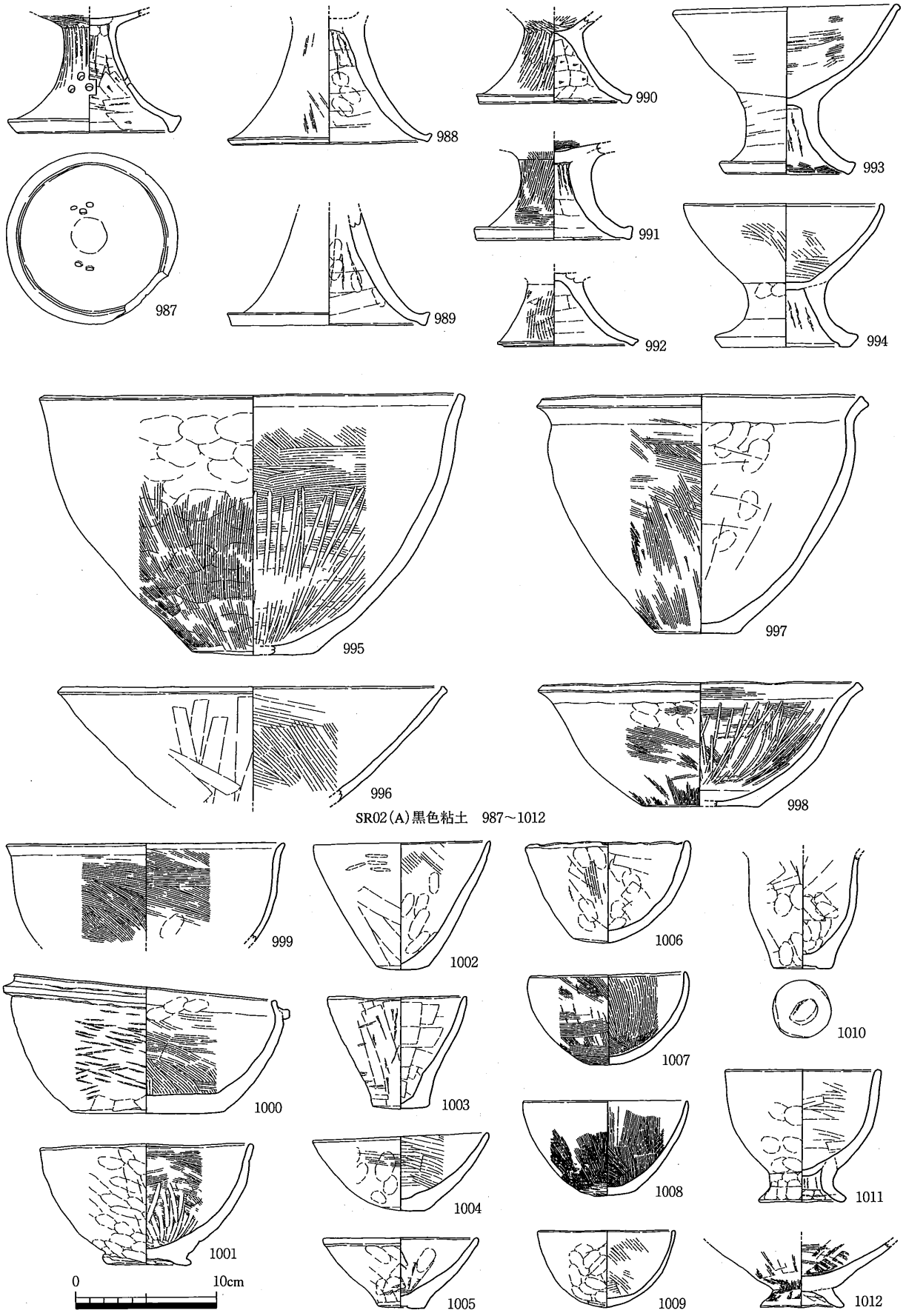
第148図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(8)(１／４)



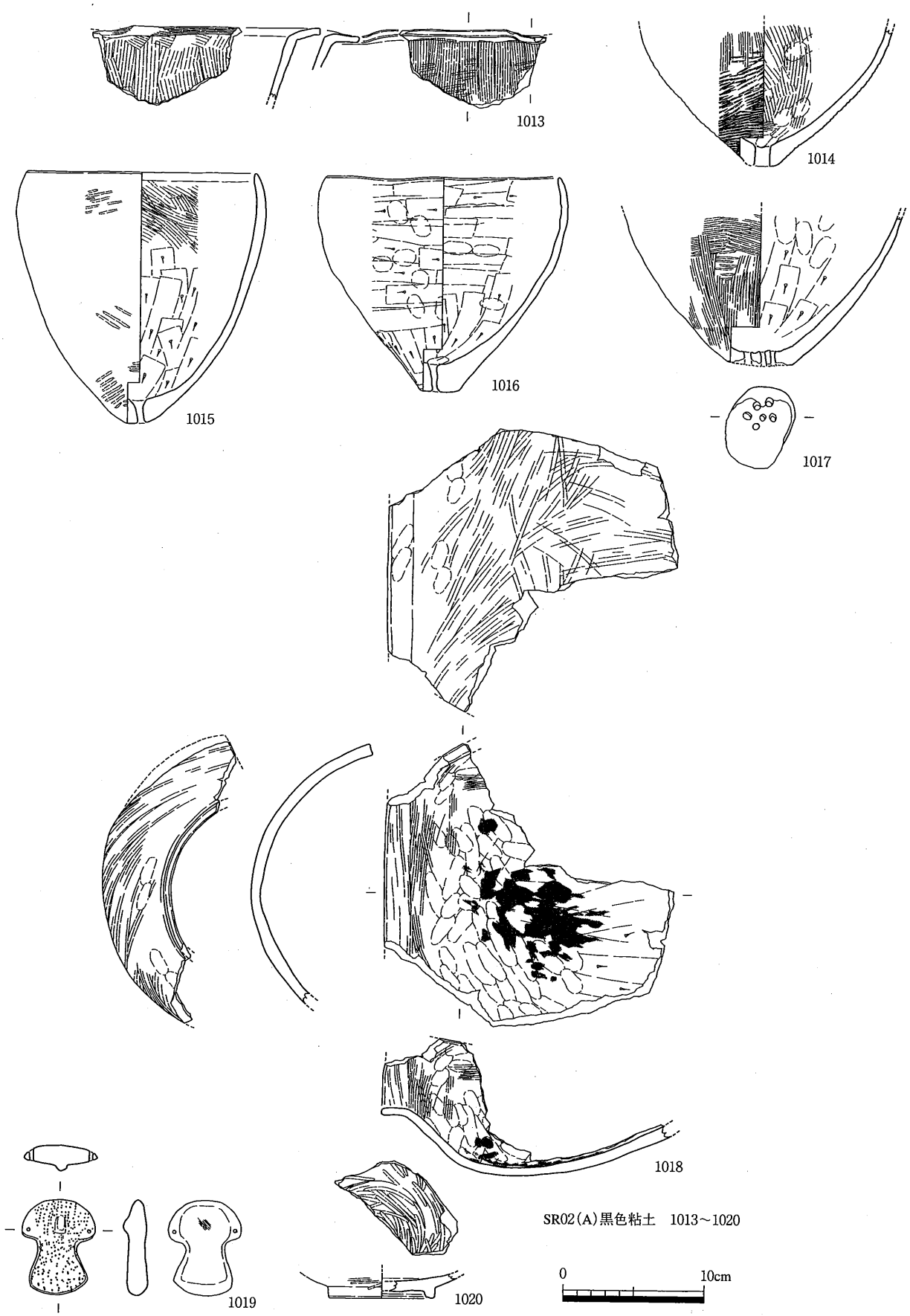
第149図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(9)(１／４)



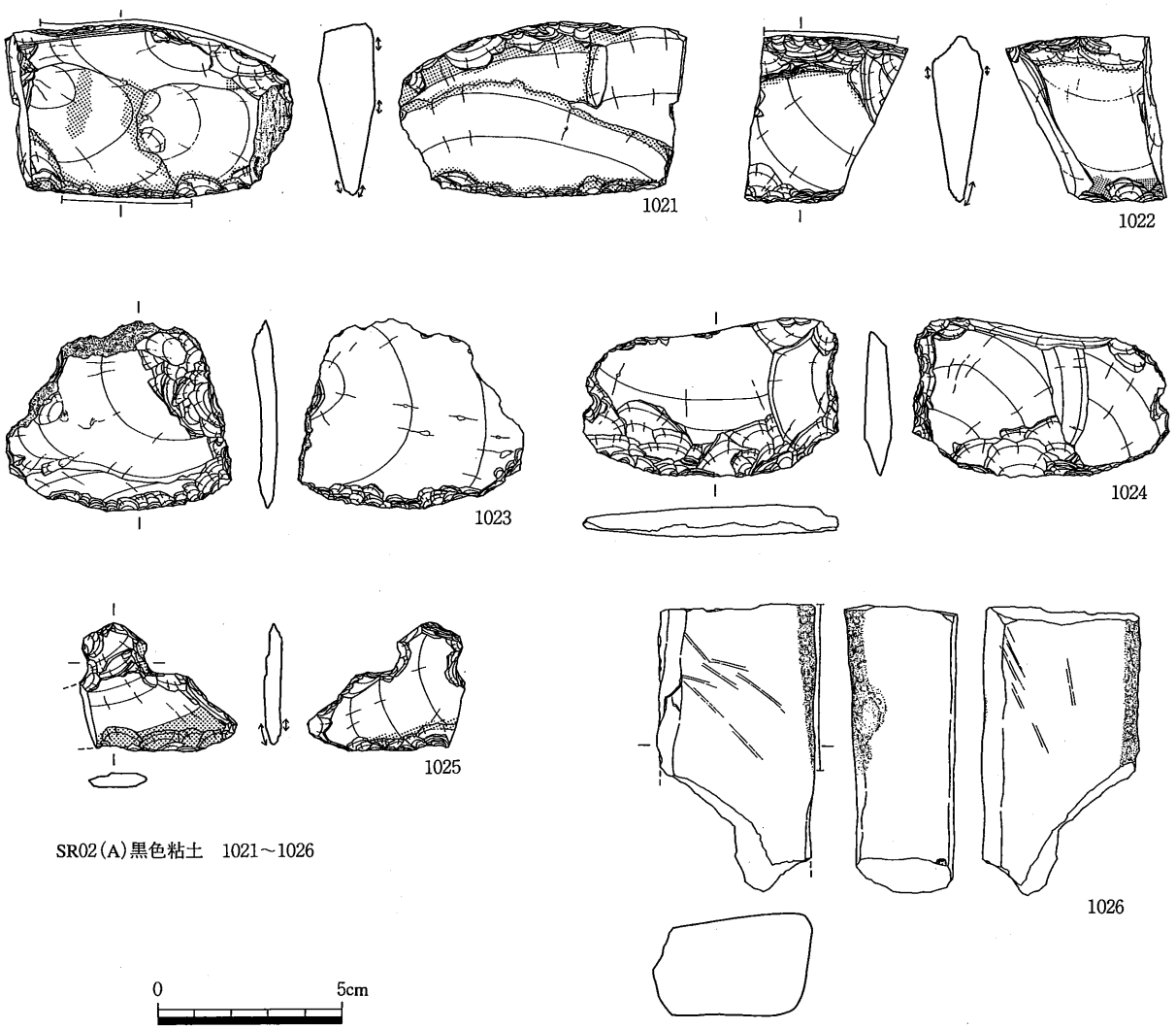
第150図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物⑽(１／４)



第151図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(11)(１／４)

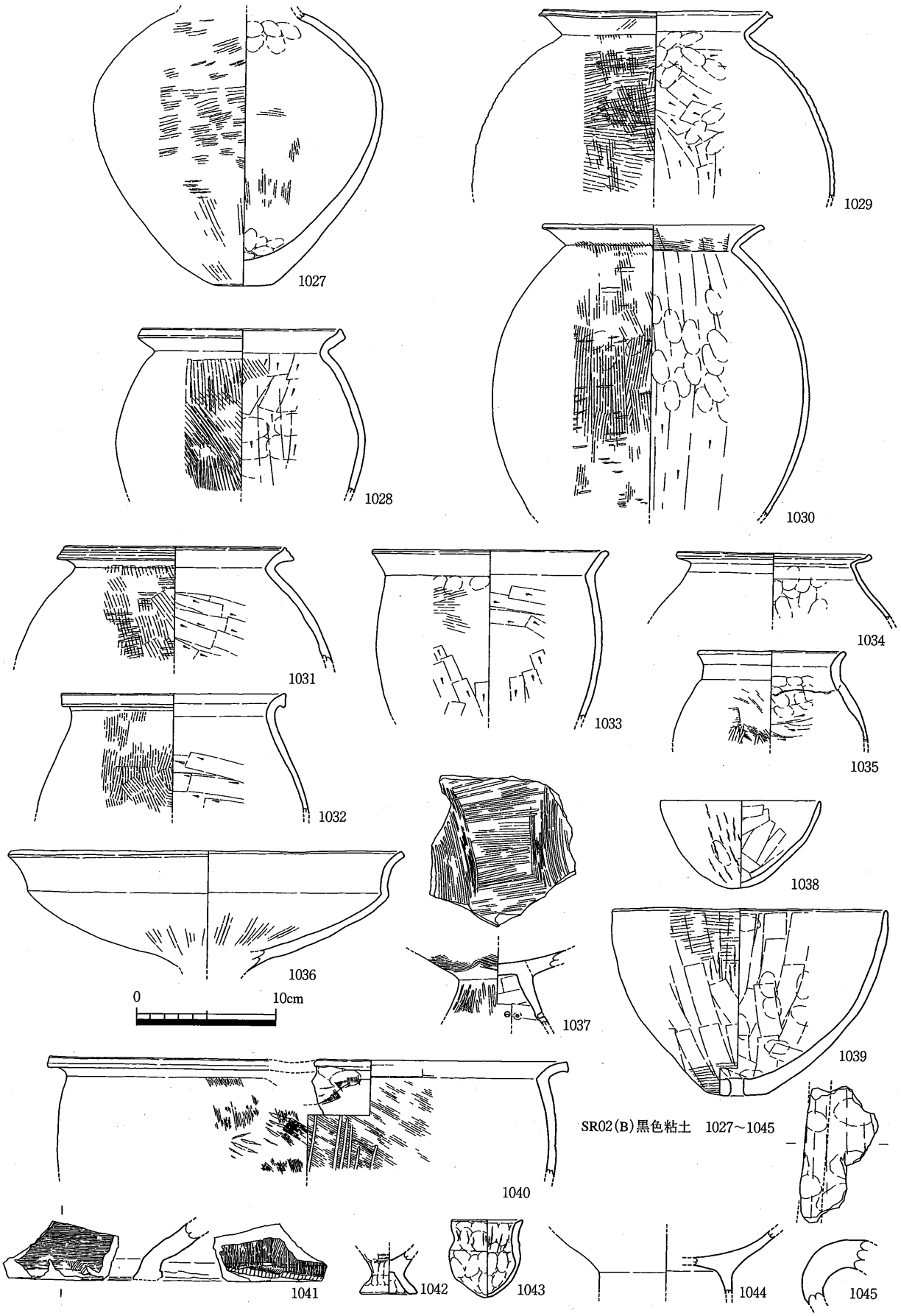


第152図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物⑫(１／４)



第153図　ＳＲ02(Ａ)出土遺物(13)(１／４)

983～992は脚部。984～987は脚部に穿孔するもの。977・980・981の脚部にも穿孔が認められる。980・986・987以外は外面に２～３段程度のヘラミガキが密に観察できる。987は他のものとは形態が若干異なり、脚部内面は全体にヘラ削りして薄くし、脚端部は上下に肥厚させる。杯部と脚部の境は円盤状に割れており、円盤充填により底部を作ったと考えられる。穿孔は３角形状に３個所、横１列に２個所、合計５個所に施される。976・983・988～992は穿孔を持たない。983・990・991・992は短めの脚で、990は外面を丁寧なヘラミガキ、976は外面をハケで調整し、ともに内面をほぼ全面横方向でヘラ削りし、983・991・992は外面をハケ、内面にはあまり調整痕が見られない。988・989はやや長めの脚部で調整痕をあまり残さない。993・994は短めの脚部に椀状の杯部が付く。弥生時代中期後半。995～1012は鉢。995は深めの椀型。口縁端部はわずかに外側へ広げる。内面はハケの後粗くヘラミガキをする。996は口径27cm程度の椀型の鉢。997・998は口縁部が緩く外側へ屈曲する。口縁端部が四角くし、底部は平底、体部はあまり張らない。998は体部内面をハケの後ヘラミガキする。この器形の鉢には内面に朱が付着するものがある。999は口縁端部がなだらかに外側へ向くもの、1000は口縁部の下側に突帯を巡らせる。歪みが著しい。1001～1009は椀形の形態。1001は底部を捻りながら押し潰すようにして平底気味にし、外面は凹凸が顕著に残る。内面はハケをし、下半はヘラミガキする。1002・1003はやや深めで平底を持



第154図　ＳＲ02(Ｂ)出土遺物⒁(１／４)

つ。調整痕をあまり残さない。1004～1009は内面をハケまたは板ナデで平滑にし、ハケの跡を顕著に残す。1007・1008以外は外面に調整痕跡はあまり残さず、クラックを残すものが多い。1010は口縁部は欠損するが、残存部から口縁端部は外側へ屈曲しそうである。底部外面中央部は指頭痕により少し窪ませている。1011・1012は台付鉢。1013は片口鉢。口縁部はきつく屈曲させ、内外面ともハケで仕上げる。1014～1017は甑。1014～1016は底部に１孔のみ穿孔されるもの。1015・1016は口縁部を屈曲させない。1016は、粘土の継ぎ目が内外面に残る。1017は底部に穿孔が６個所ある。底部は少し剥離する。1018は把手付広片口皿。片口部分と、側縁部分がわずかに残る。内面には朱がびっしり付着する。外面は全体が煤けている。1019は分銅型土製品。上半は半円状、下半は台形に近い、キノコのような形状で、上半部中央に突起を貼り付けて鼻を作る。上半部の両下端部には直径約３㎜の孔を貫通させる。表面は細い棒状工具で突いて細かい孔を多数あける。1020は緑釉陶器。内外面ともヘラミガキをした後全体に施釉する。底部は削り出しの輪高台である。須恵質。京都産。混入と思われる。1021～1026は石器。1026以外はサヌカイト。1021・1023はスクレイパー。1021は上部を潰して刃部を簡単に成形する。1023は刃部のみ簡単に成形する。1022は楔形石器。上部は潰してある。1024は石庖丁。側縁を抉る。上部はほとんど加工しない。1025は石匙。1026は砥石。流紋岩。両面に擦痕がみられる。角の部分に敲打痕が顕著に見られ、敲き石としても利用されていたと考えられる。時期は弥生時代後期後半（Ｖ－２）～終末期－２頃と考えられる。

ＳＲ02（Ｂ）黒色粘土（第139・140・154図、図版19・51）

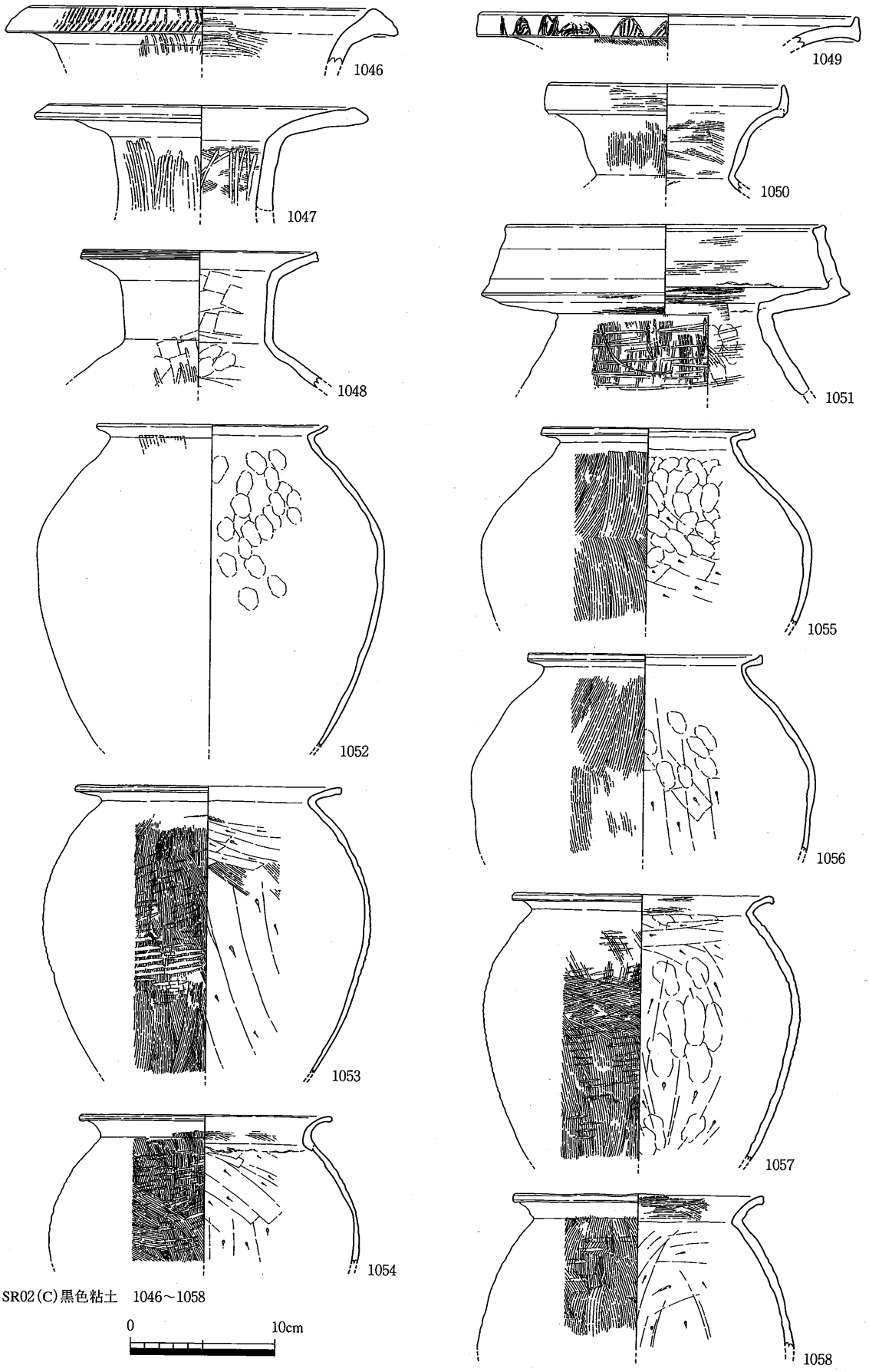
２区③部分で検出した黒色粘土層で２区②部分から続く。厚さ30㎝程度の水平堆積で、西側が薄く東側で厚い。調査時はこの直上の暗灰褐色砂混粘土層も黒色粘土として取り上げたが、プラント・オパールの分析結果と遺物の出土状況からこの層は奈良時代の包含層であることが判明した。ここではこの層から出土したと思われる遺物は極力除去したつもりであるが、齟齬がある可能性がある。なお、他の地区に関しては遺物の出土状況や当時作成した土層図から概ねこのような間違いはなかったと考えられる。

1027～1045は２区③部分で検出した黒色粘土部分で出土した土器である。この地区では黒色粘土の下部の部分の土層はほとんどなく、土器の出土もない。

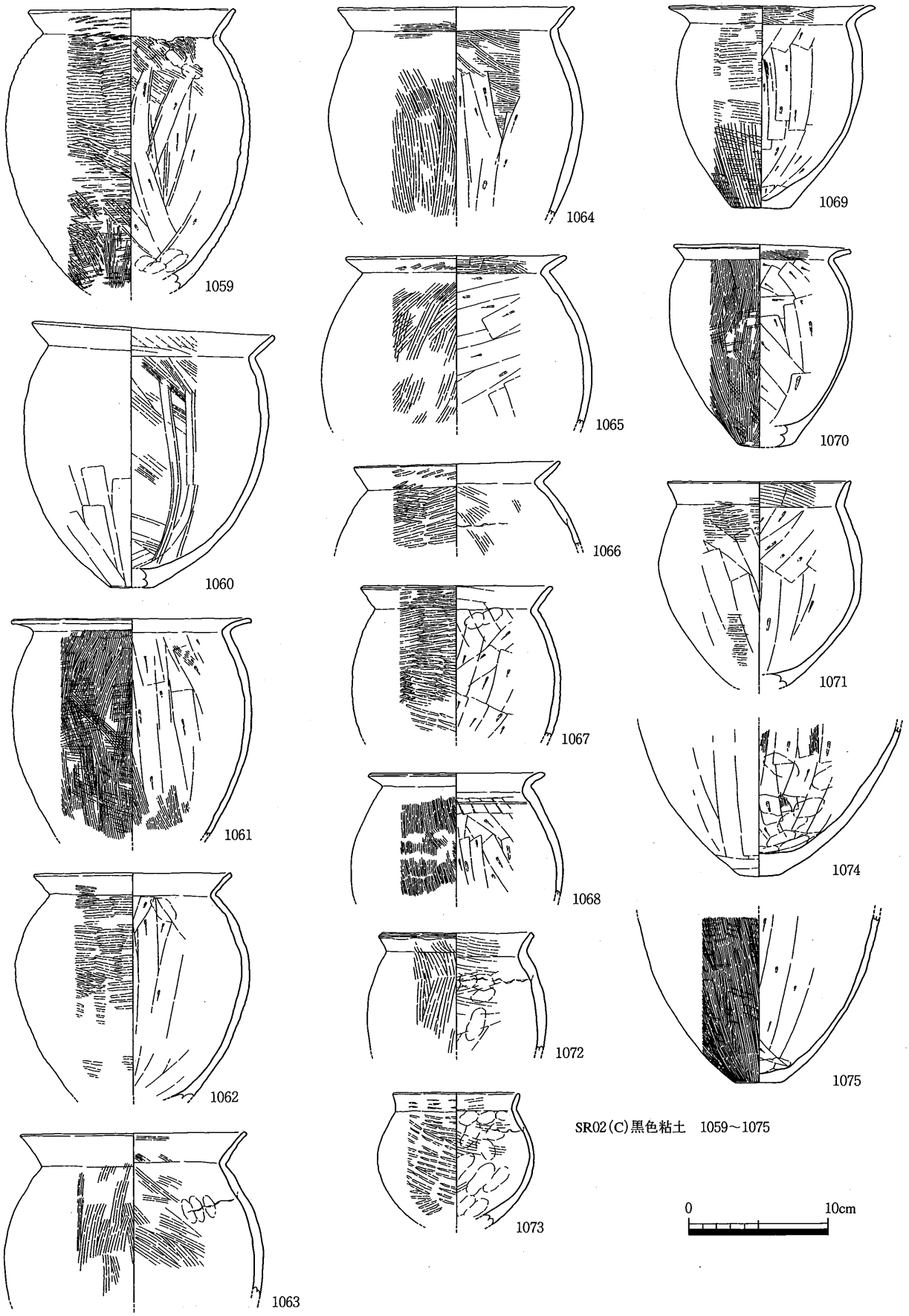
1027は壺の体部。1028～1035は甕。1028・1031は拡張気味の口縁をもち、1031は口縁端部に凹線が１条巡る。1029・1030はきつく屈曲する頸部に長めの口縁部が付く。外面にはタタキの後ハケを施し、内面はヘラ削りして薄くする。1032は口縁端部は緩く屈曲し、端部には面を持つ。胴部はあまり丸みを持たない。1033・1035は小型の甕。1034は下川津Ｂ類。1036・1037は高坏。1037は杯部と脚部の接合部分しか残存しないが、杯部外面には横方向に分割のヘラミガキが、内面にも４分割のヘラミガキが見られ、底部に一方向のヘラミガキがある。脚部には３カ所に穿孔があるが、そのうちの１カ所は内面まで穿孔が及んでいない。1038は鉢。椀型で内外面ともあまり調整痕を残さない。外面にはクラックが顕著に残る。1039は甑。底部は平底で、口縁部は屈曲しない器形。外面は叩いて成形し、その後板ナデで消している。1040は片口鉢。頸部はきつく屈曲し、体部はあまり張らない。1041は器種不明。下端部にきれいに剥がれた剥離痕跡がある。外面には縦方向のハケ、内面には横方向のハケがある。剥離部分を水平にして図化したが、傾きは不明である。1042は製塩土器。1043はミニチュアの壺。全体に手捏ねで作り、成型時の凹凸やクラックを残す。1044は土師器椀。1045は鞴羽口。

ＳＲ02（Ｃ）黒色粘土（第43・155～157図、図版19・51）

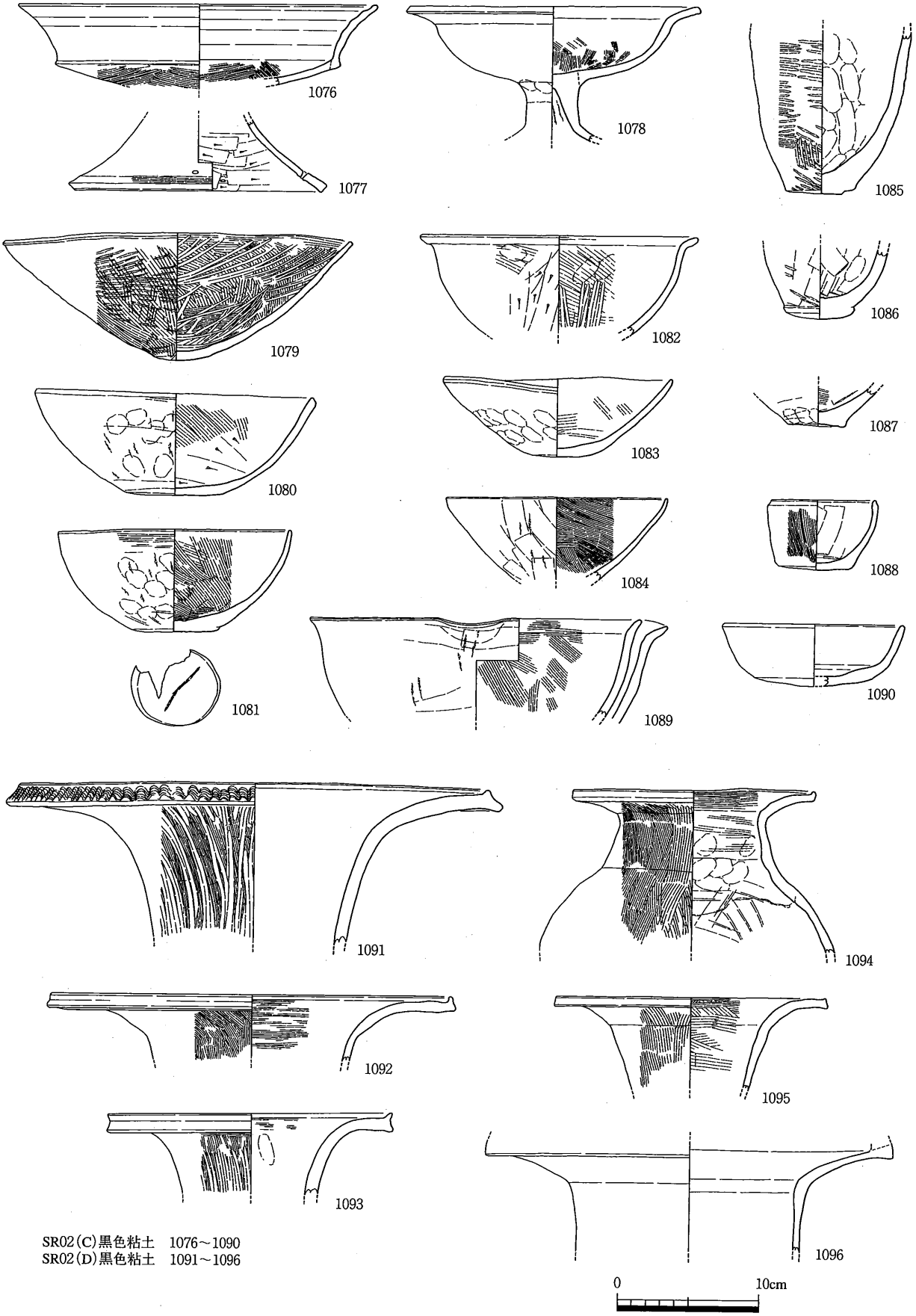
２区④部分で検出した黒色粘土層である。２区④東半部で厚さ30㎝程度のほぼ水平堆積であった。



第155図　ＳＲ02(Ｃ)出土遺物⒂(１／４)



第156図　ＳＲ02(Ｃ)出土遺物⑯(１／４)



SR02(C)黒色粘土　1076～1090
SR02(D)黒色粘土　1091～1096

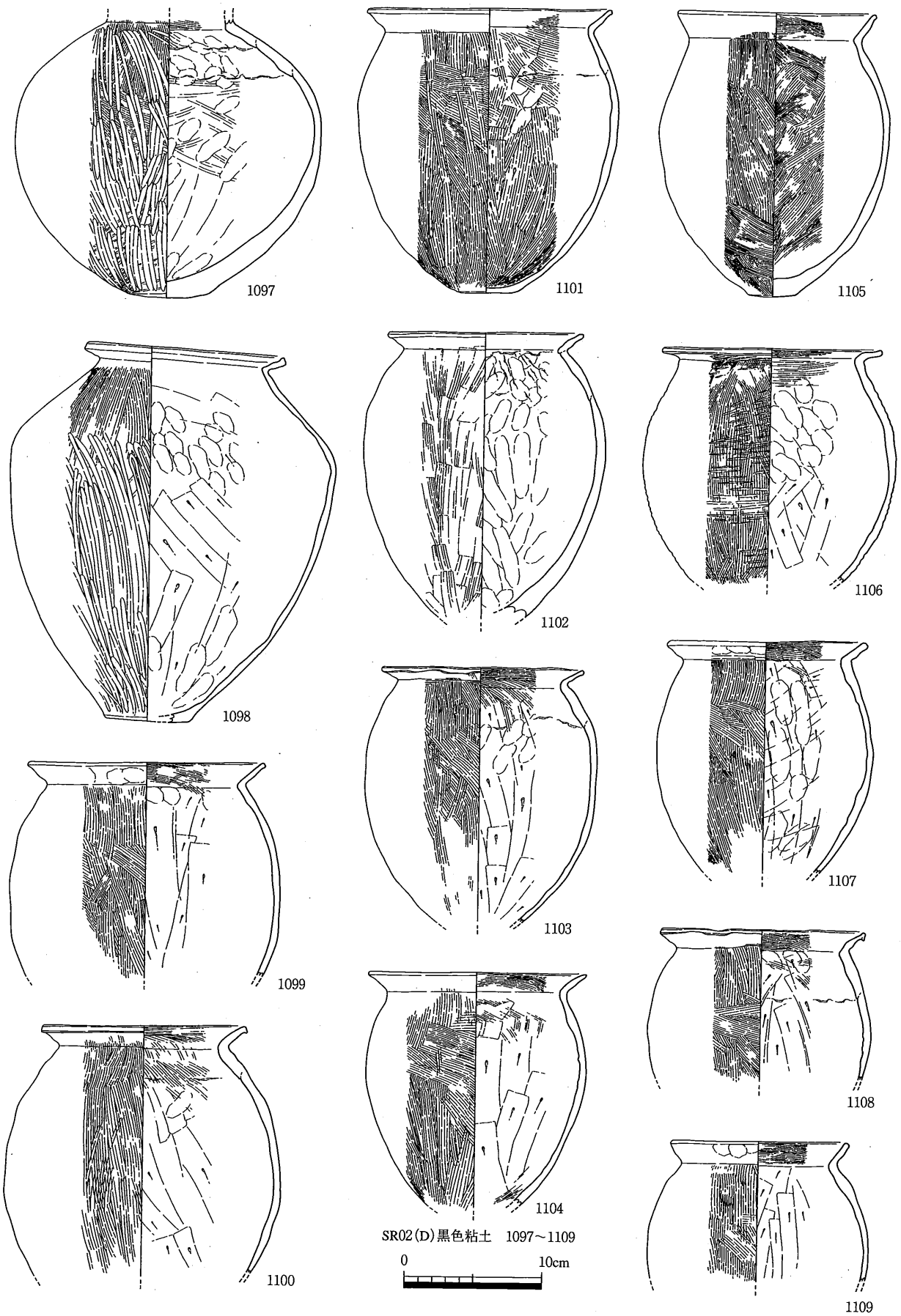
第157図　ＳＲ02(Ｃ・Ｄ)出土遺物(17)(１／４)

1046～1051は壺。1046は口縁端部に綾杉文が崩れたような文様を刻む。弥生時代中期後半。1047～1049は広口壺。1047・1048はやや長めの直立する頸部に大きく開く口縁部を持つ。1047は口縁端部に斜めに平坦面を持ち、頸部外面は板ナデで平滑にする。1049は口縁端部を上方へ引き上げ、口縁部には鋸歯文や鋸歯文が崩れたような幾何学文様を刻む。1050・1051は二重口縁壺。1050は斜め上方に頸部が立ち上がり、二重口縁が付く。二重口縁部は口縁の角に貼り付ける。1051は口縁部の立ち上がりの根本部分で部分的に剥離する。頸部にはヘラ描きで文様を描く。1052～1075は甕。1052・1055・1056は下川津B類。口縁端部は上方へ少し引き上げる。1055・1056は体部外面にはハケ、内面の上半には指押さえ痕、下半はヘラ削りする。1052は摩滅が著しい。1053～1058・1061は頸部を鋭く屈曲させ、外面はタタキの後ハケ、体部内面はヘラ削りして、薄くする。1053は体部内面にもハケ、1054・1057・1058は頸部にハケを施す。1065はタタキ痕跡は残さないが、同様の形態を示す。1059～1071（1061・1065を除く）は口径が14～16cm程度で、頸部の屈曲が鋭く、口縁部があまり鋭角に付かないもの。外面はタタキまたはハケで、内面はヘラ削り、一部体部上半部から頸部にハケを施すものもある。底部まで残るものはわずかに平底を呈する。1072・1073は口径が10cm程度の小型の甕。口縁の立ち上がりは緩く、頸部もはっきりとした稜線を持たない。1072は外面をハケで、1073はタタキで調整し内面はともに粗いハケを施す。1074・1075は底部。退化気味の平底を持つ。1076～1078は高坏。1076・1077は下川津B類。1076は体部内外面とも四分割程度のヘラミガキをする。1077は脚部。脚部の下の方に5孔の穿孔がみられる。1078は丸みを持った杯部で、脚部は裾で外側へ屈曲する。杯部の中央部分には脚部を差し込んだ痕跡を示すように丸くひびが入る。1079～1088は鉢。1079は椀形のもの。口縁端部は四角くし、外面はタタキ＋ハケ、内面はハケの後ヘラミガキを粗く２段に施す。1080・1081・1083・1084は椀形で口径16cm前後のもの。外面には調整痕をあまり残さず、クラックが目立つものが多い。内面は左上がり斜め方向のハケで（1081・1083・1084）、または下半部をヘラ削りし、上半部だけ他と同様のハケを施して（1080）、平滑にする。1081は底部をきれいに平底にし、ヘラ描きを入れる。1082は口縁端部を外側へ屈曲させる。1085は細長い形態で、外面には明瞭にタタキ痕跡を残し、内面には指押さえ痕跡が顕著である。歪みが著しい。1086も同様の器形になると思われる。1087は底部。体部の下端部を指押さえしてしっかりした底部を作り出す。内面に横方向のハケがみられ、鉢の底部と思われる。1088はミニチュア土器。歪みが著しい。1089は片口鉢。内面はハケで調整し、外面にはクラックが残る。1090は須恵器杯。混入と思われる。

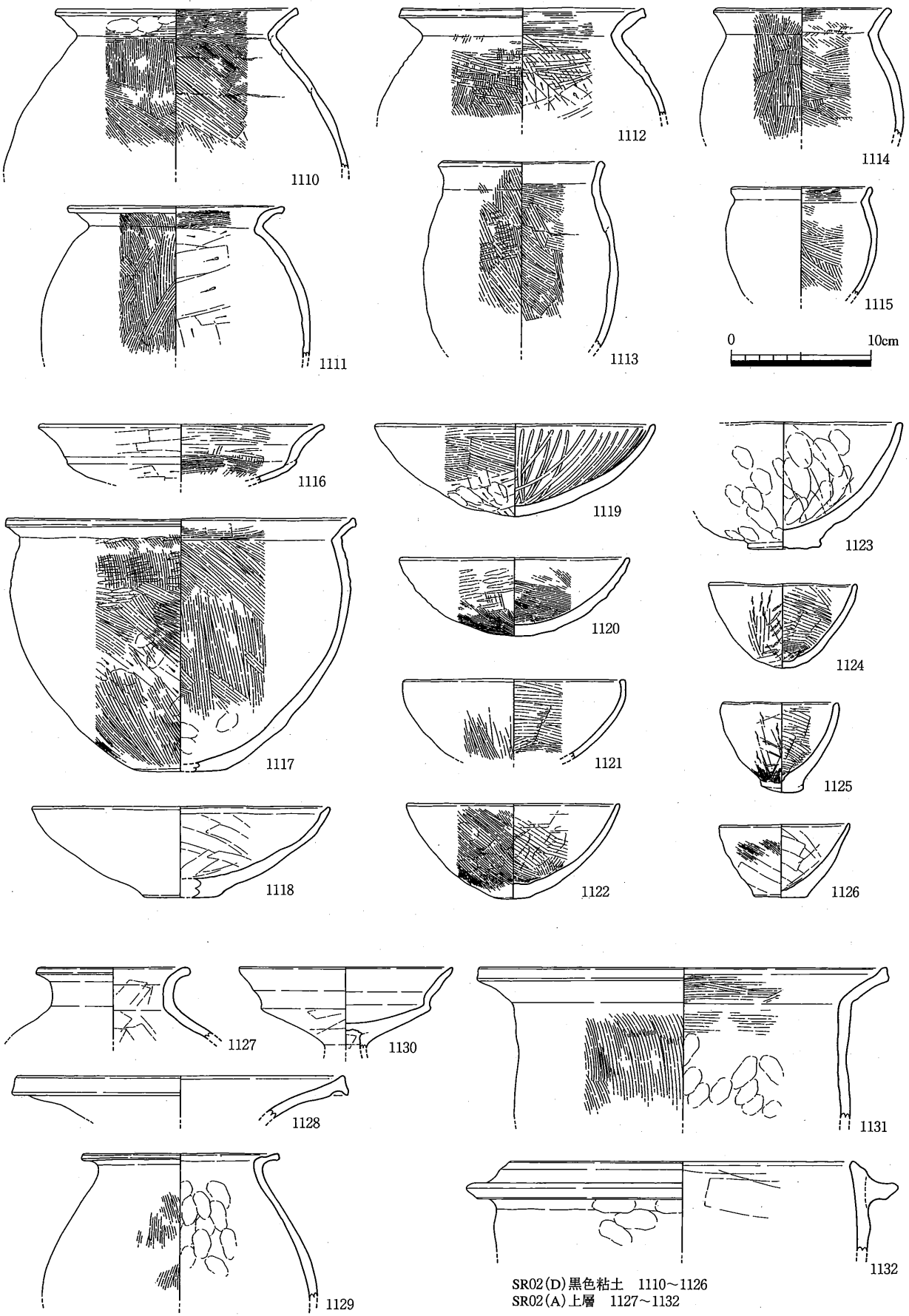
ＳＲ02（Ｄ）黒色粘土（第140・157～159図、図版19・53～55）

１区②△地で検出した黒色粘土層である。厚さ30cm程度のほぼ水平堆積であるが、北西側ほどわずかに厚い。

1091～1096は壺。1091～1093・1095は外傾して立ち上がる頸部に大きく開く口縁部が付く。1091～1093は口縁端部を上方へ肥厚させ、1091は端面に波状文を施す。頸部外面はハケで調整するが、1091・1093はその後でヘラミガキをする。1094は内傾して立ち上がる頸部に大きく拡がる口縁部を持つ。1096は二重口縁壺。摩滅が著しい。口縁端部の立ち上がり部分はちょうど基部の部分できれいに剥離する。下川津B類。1097は体部。球形に近い体部でわずかに底部を作る。外面を丁寧に磨く。1098～1115は甕。1098は下川津B類。歪みがある。口縁端部は上部へ引き上げ、体部のやや上位が張る。外面上半はハケ、下半は丁寧に磨く。内面は上部は指押さえ痕を顕著に残し、下半部はヘラ削りする。1099～1111（1101・1105・1106・1110を除く）は頸部を強く屈曲させ口縁部はあまり鋭角には付けない形態である。外面



第158図　ＳＲ02(Ｄ)出土遺物⒅(１／４)



第159図　ＳＲ02(Ｄ・Ａ)出土遺物⑲(１／４)

はハケで調整し、内面は頸部を横方向のハケ、体部を縦方向にヘラ削りする。1101・1105・1110はこれらの甕とよく似ているが、体部内面全体にヘラ削りの後ハケで調整する。1106は口縁部が鋭角で取り付き、外面にはタタキ痕跡が観察できる。1113～1115は小型のもの。口縁部の立ち上がりは緩く、1115の外面は摩滅のため調整が不明瞭であるが、内外面ともハケで調整するようである。1116は高坏。内面には横方向のヘラミガキ、外面には横方向のヘラ削りをする。1117～1126は鉢。1117は口縁部が屈曲する器形。1118～1126は椀形の器形。1118・1119は口径20cm前後、器高6.5cm程度のもの。1118は摩滅のため調整が不明瞭であるが、1119は外面をハケ＋ヘラ削り、内面をヘラミガキする。1120～1122は口径は15cm前後、器高６cm前後のもの、内面は横～左上がりの斜め方向のハケ、外面は縦方向のハケで1120は上部にタタキ痕跡が残る。1123は厚めの体部で平底を作る。調整痕はあまりなく、外面にはクラックが入る。歪みが著しい。1124～1126は口径10cm程度、器高５～６cm程度のもの。内面は左上がりのハケを密に施すが、外面のハケは疎らで、クラックが多く残る。時期は概ね弥生時代後期後半（Ｖ－４）～終末期２と思われる。

ＳＲ02（Ａ）上層（第137・138・159・160図、図版19・56）

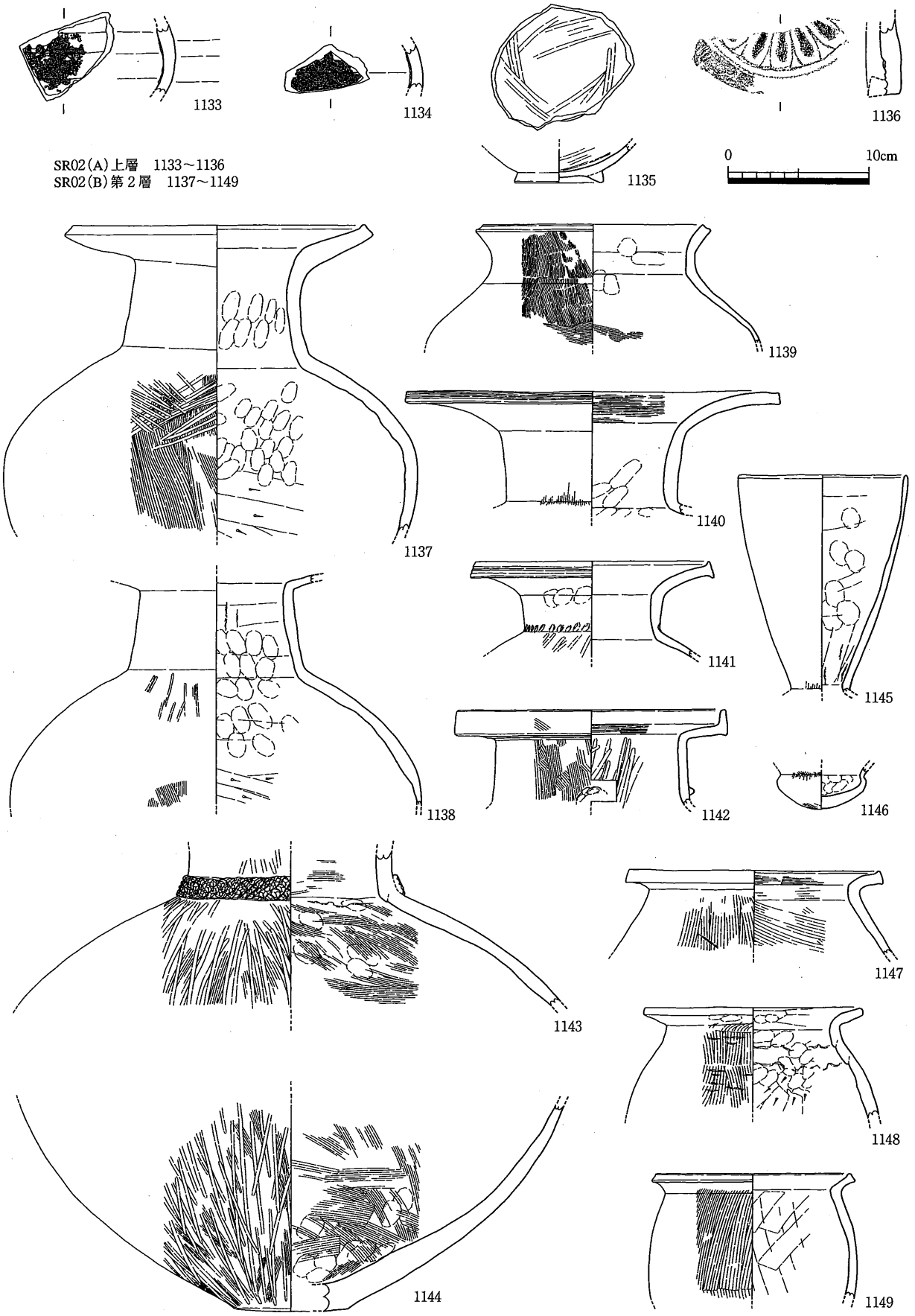
２区②部分で検出した黒色粘土上面に堆積する灰褐色・茶灰褐色系の粗砂・砂混粘質土である。厚さ30cm程度の水平堆積で、２区②の集落域以外のほぼ全面を覆っている。

1127～1132は弥生土器。いずれも摩滅が著しい。1127・1128は壺。1127は直立する頸部に大きく開く口縁部が付く。1128は下川津Ｂ類。1129は甕。下川津Ｂ類。1130は高坏。1131・1132は土師器。1131は甕Ｄ。口縁端部をわずかに上方に引き上げる。1132は羽釜Ｃ。口縁端部・鍔端部とも先端を細くする。1133・1134は須恵器壺体部。小破片で傾きは不明。両者は同一個体と思われる。いずれも内面に漆が付着する。1135は黒色土器Ａ。椀。内面に分割ヘラミガキがわずかに観察できる。1136は軒丸瓦。小破片で丸瓦の取り付け部は残らない。単弁で16弁前後と考えられる。蓮弁の外側には圏線が巡り、外縁は素縁で直立する。瓦当厚は1.3cmで薄い。中房の文様は不明であるものの、文様としては始覚寺で出土する細単弁16葉蓮華文と類似するが、製作技法は異なり、蓮弁もさらに退化している様子が窺える。時期としては暗文の施される土師器と対応する８世紀代に当たるのであろう。

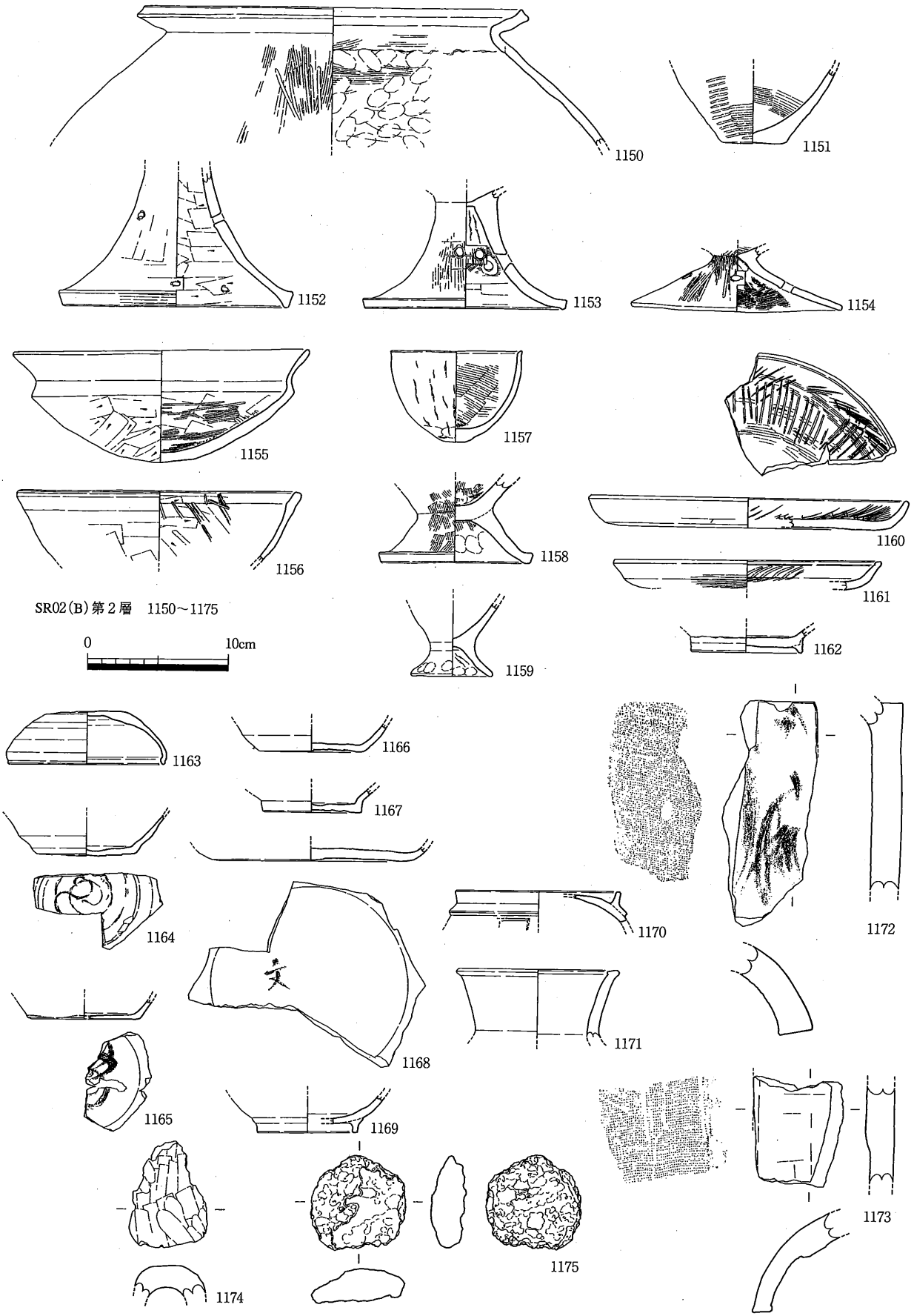
ＳＲ02（Ｂ）第２層（第139・140・160・161図、図版19・56～58）

ＳＲ02（Ｂ）部分（２区③）で取り上げた層位である。調査区の西端部を除くほぼ全面で検出したが、西端部は砂層を中心とする流路に切られている。厚さ約30cmの水平堆積で、灰褐色系の砂質土である。この層の中位から土壌分析の結果水田層が確認された。

1137～1159は弥生土器。1137～1146は壺。1137・1138・1140・1141は広口壺。1137・1138は内径気味の長めの頸部から口縁部が大きく屈曲して開くもの。体部は丸い。外面体部上半は横方向の分割ヘラミガキ、下半はハケ、体部内面は上半部は指押さえ、下半部は横方向のヘラ削りをする。1140・1141は直立する頸部に口縁部が大きく開く。ともに口縁端部に凹線が巡る。1141は体部と頸部の境に刺突文を入れる。1139は短めの頸部で口縁部はほとんど開かない。1142は二重口縁壺。体部と頸部の境に粘土塊が付着している。1143・1144は違う番号をとっているが、大きさや胎土・成形上の特徴から同一個体と考えられる。頸部に突帯を貼り、そこに斜格子状に強くヘラで模様を付けている。体部外面は丁寧にヘラミガキする。1145は細頸壺。調整はほとんどみられない。下川津Ｂ類。1146は小型丸底壺。外面はハケで調整する。1147～1150は甕。1147は口縁端部にやや面を持ち、肩部は直線的である。いずれも口縁端部に面を持ち、外面はハケを施す。1150は大型の甕で、外面にハケを施した後ヘラミガキをする。1151



第160図　ＳＲ02(Ａ・Ｂ)出土遺物⑳(１／４)



第161図　ＳＲ02(Ｂ)出土遺物(21)(１／４)

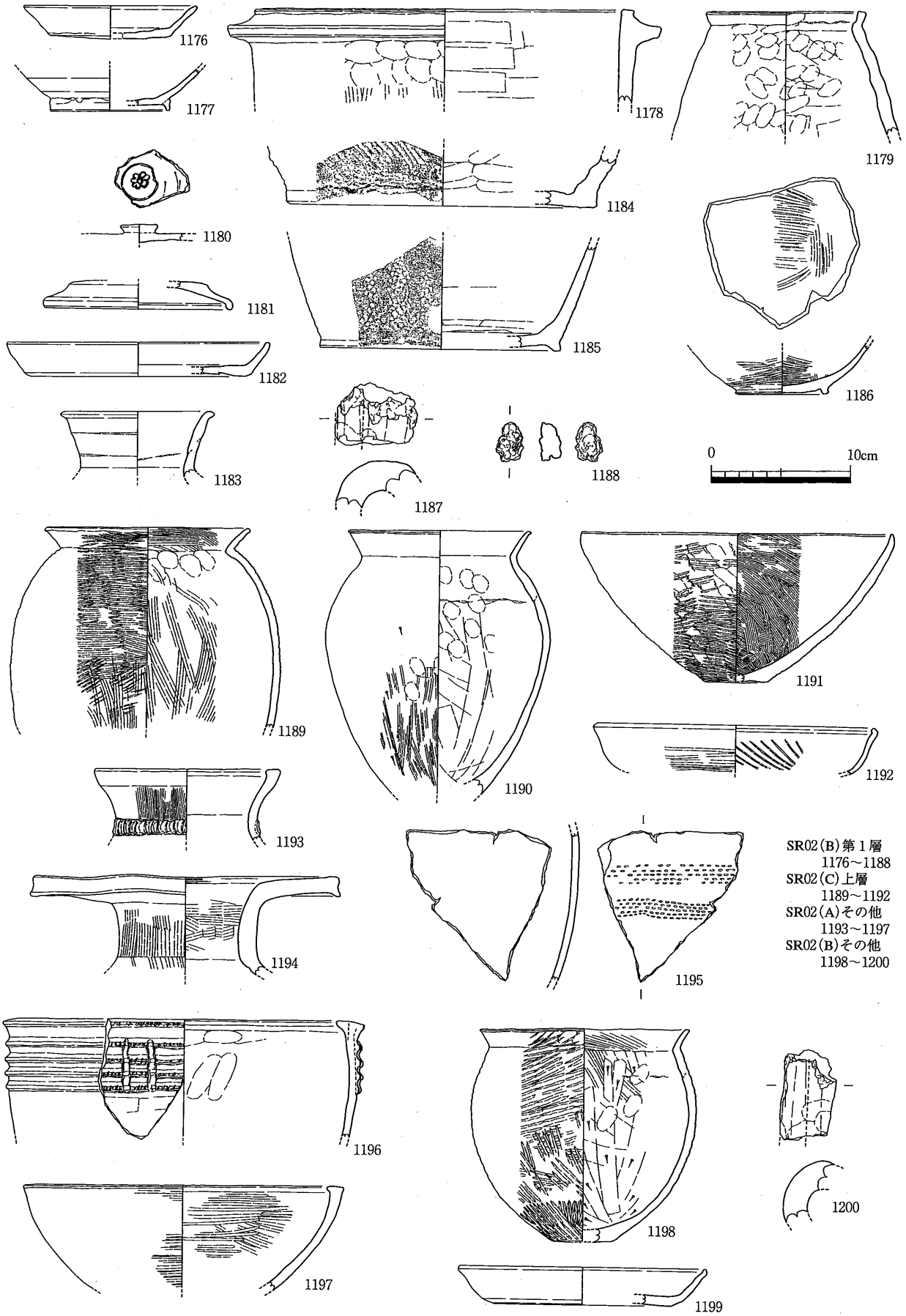
は底部。平底で外面はタタキ、内面は左上がりのハケがある。内面の調整から鉢の底部の可能性がある。1152・1153は高坏。1152は上下２段に穿孔をそれぞれ１ケ所ずつ施し、内面はヘラ削りする。下川津Ｂ類。1153は脚部に２孔１組の穿孔を３箇所に穿孔する。1154は台付鉢脚部。脚部に４孔穿孔し、内外面ともハケで調整し、外面はその後粗くヘラミガキをする。1155～1157は鉢。1155は高坏の杯部と同じ形態で、底部外面は横方向のヘラ削り、内面は横方向のヘラミガキがある。下川津Ｂ類。1156は口縁端部が肥厚する。1157は椀形の器形。内面は左上がりのハケ、外面はほとんど調整を加えず、クラックが多く残る。1158は台付鉢。弥生時代中期後半。1159は製塩土器。摩滅が著しい。

1160～1162は土師器。1160・1161は皿。いずれも体部内面に斜放射の暗文を施す。1161は外面にヘラミガキを施し、口縁端部は内側へ玉縁状に丸まる。1162は椀。平らな底部で底部と体部の境に高台を貼り付ける。部分的に高台は剥離するが、その部分はきれいに剥離しており、痕跡をほとんど残さない。内面には墨痕がびっしり付着する。1163～1171は須恵器。1163は杯蓋。上半部は回転ヘラ削りをする。1164～1167は杯。1164・1165は内面に火襷が掛かり、底部外面に墨書がみられる。1164は底部外面にはっきりとした細い墨描きでＳ字状の曲線を描く。1165は墨の濃い部分と薄い部分があり、どれが文字を構成する墨痕かはわかりにくい。内容は不明。1167は円盤状高台を呈する。1168は皿。底部外面中央付近に「文」の字の墨書土器がある。全面に火襷が掛かる。1169は椀。底部と体部の境に内傾気味の高めの高台が付く。1170は円面硯。脚部の長方形の透かしがわずかに残る。外面には全面に自然釉が掛かる。1171は壺口縁部。瓦質の焼成を示し、外面は燻される。口縁端部は平らで内側をわずかに玉縁状にする。1172・1173は丸瓦。ともに凸面は板ナデ。1172は玉縁部分が僅かに残る。外面には焦げ茶色の墨痕？らしきものがある。墨痕らしきものには濃淡の差がかなりあり、その場所にはその方向と同方向の擦痕が顕著に残る。1174は鞴羽口。溶融痕は残らないが、灰色に変色する。1175は椀形鍛冶滓。やや扁平な形状で、椀は浅い。上面には木炭痕跡が残る。第２層からは黒色粘土からの混入と思われる弥生土器を除けば、概ね８～９世紀の遺物が出土する。

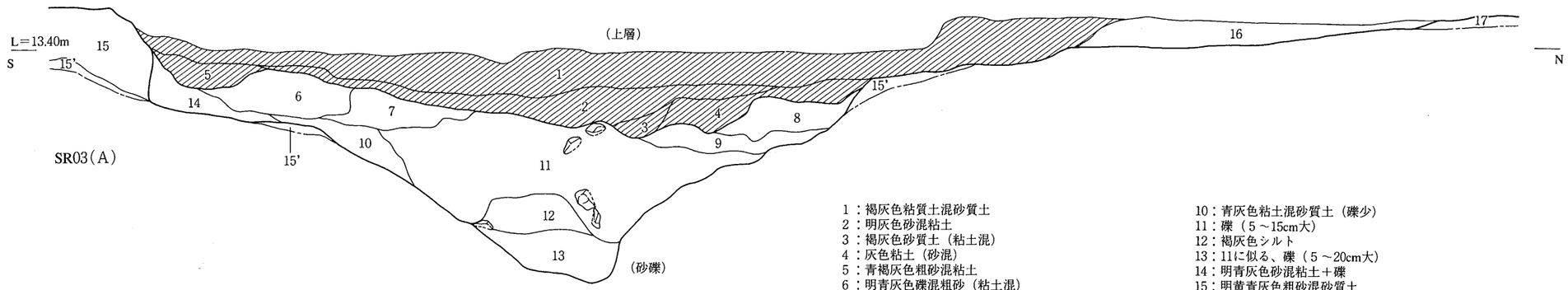
ＳＲ02（Ｂ）第１層（第139・140・162図、図版19・58）

ＳＲ02Ｂ部分（２区③）で取り上げた層位である。調査区の西端部を除くほぼ全面で検出した。赤茶褐色系の砂質土の埋土で、厚さ約30㎝の水平堆積であった。土壌分析の結果、この上部から稲のプラント・オパールが検出され、水田層であったことが確認された。

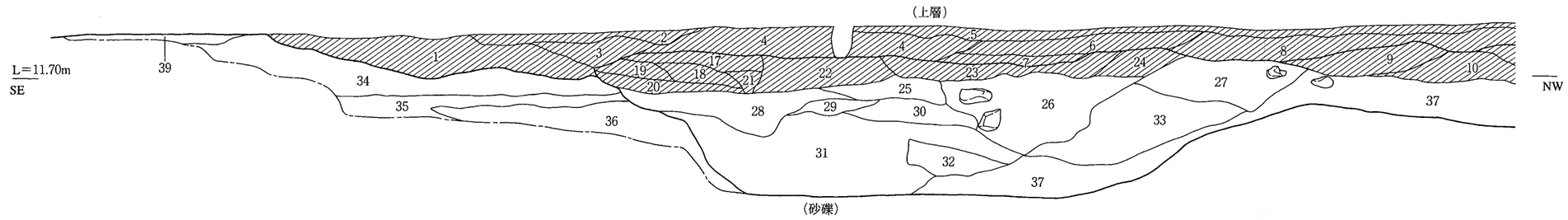
1176～1179は土師器。1176は皿。底部は中心部から直径1.5㎝の円形で欠損している。土器を作る際の粘土の継ぎ目と思われる。1177は椀。底部はまっすぐで椀形を呈しておらず、体部と底部の境に高台が付く。見込みに重ね焼き痕跡がある。1178は羽釜Ｃ。外面はハケ、内面は板ナデ。口縁・鍔端部とも四角くする。1179は蛸壺。内外面とも指押さえ痕跡が顕著に残る。1180～1185は須恵器。1180は蓋。つまみ部分。頂部はヘラ削りする。つまみ部分には中房＋４弁の花模様が墨で描かれる。花弁の中央部には切れ込みが入る。花のモデルは不明。1181は蓋。頂部をヘラ削りし、体部は回転ナデをする。口縁端部は丸くする。1182は皿。1183は壺口縁端部をわずかに外側へ拡張させ、頸部の内・外面に粘土の継ぎ目が残る。1184は壺または甕の底部。外面ほぼ全面に自然釉が掛かり、外面には左上がりの平行タタキがある。内面の底部と体部の境付近には指ナデ痕が顕著に残る。1185は壺の底部。外面には右上がりの格子タタキが、やや粗く入る。体部と底部の境付近には高台が付く。1186は黒色土器Ａ椀。内外面ともヘラミガキする。1187は鞴羽口。先端部には溶融痕があり、その下部は灰色に変色する。1188は含鉄鉄滓。分析資料である。第１層中からは概ね９世紀前後の遺物が出土する。

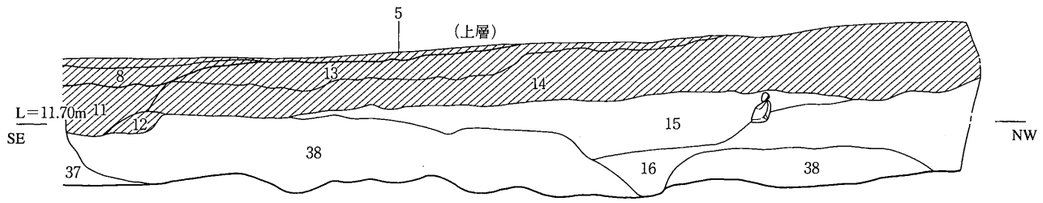


第162図　ＳＲ02(Ａ・Ｂ・Ｃ)出土遺物㉒(１／４)



1：褐灰色粘質土混砂質土
2：明灰色砂混粘土
3：褐灰色砂質土（粘土混）
4：灰色粘土（砂混）
5：青褐灰色粗砂混粘土
6：明青灰色礫混粗砂（粘土混）
7：黄青灰色礫混粗砂（粘質土混、水分多）
8：礫（10cm大）に９の土混
9：褐灰色礫混砂質土
10：青灰色粘土混砂質土（礫少）
11：礫（５～15cm大）
12：褐灰色シルト
13：11に似る、礫（５～20cm大）
14：明青灰色砂混粘土＋礫
15：明黄青灰色粗砂混砂質土
15'：明黄青灰色礫混粗砂質土（地山）
16：濃茶灰色礫混砂質土（粘質土混）
17：明黄青灰色砂質土（地山）





SR03(B)－1

0　1m

1：明赤茶褐色礫混砂質土
2：濃茶褐色粘質土混砂質土（黒褐色土混）
3：赤茶褐灰色粘質土混砂質土（粗砂混、Fe多）
4：赤茶褐灰色粘質土混砂質土（３に似るが３よりFe少）
5：褐色砂質土
6：明灰色砂質土（Feやや多）
7：褐灰色砂質土（Fe少）
8：茶灰褐色粘質土（砂少し混）
9：茶灰褐色粘土混砂質土（粗砂質土）
10：黄褐色砂混粘土（灰色土混）
11：茶灰褐色細砂混粘質土
12：黄褐色粘土＋灰色粘土（ブロックで入る）
13：明茶灰褐色砂混粘質土
14：黄茶灰褐色砂混粘質土
15：黄灰褐色粗砂混粘土
16：青黄灰白色粘質土混砂質土
17：褐灰色砂質土（４にやや似るが４よりFe少、粘り気なし）
18：褐灰色砂質土（17に似る、17よりFe少）
19：灰色粘質土混砂質土（Fe混）
20：灰色砂質土
21：暗青灰色砂質土（上方Fe混）
22：明灰色細砂（Fe少）
23：青灰色砂質土（下の方で暗灰色砂質土多く混）
24：茶灰色砂混粘質土
25：明褐色砂（粗砂ラミナで入る）
26：暗灰褐色砂混粘土（粘土所々筋になって入る、礫少）
27：明赤茶灰色粗砂質土
28：礫（８～15cm大、青灰褐色砂混）
29：黄青灰色砂（砂やや細かめ）
30：青灰色砂（砂やや細かめ、青灰色粘土ブロックで入る）
31：青灰色礫混砂質土（５～８cm大の礫が非常に多く混、中には15～20cm大のものもある）
32：暗青褐灰色粘質土（礫混）
33：５cm大礫＋黄青灰色粗砂
34：明青灰色砂質土（地山）
35：明青灰色粘土質シルト（地山）
36：明青灰色粗砂（地山）
37：５～10cm大礫（暗褐色粗砂混）
38：37'　５～10cm大礫＋灰色粘土混粗砂質土
39：赤茶褐色砂質土

第163図　ＳＲ03(Ａ・Ｂ)土層図(1)(１／40)

ＳＲ02（Ｃ）上層（第162図、図版19）

２区④部分で検出した。調査区の主に東半部で検出し、調査区の東端では厚さ45cm程度になる。概ね水平堆積で、埋土は暗灰色小礫混シルト層である。この層はＳＤ2401の上面に堆積する。

1189～1191は弥生土器。1189・1190は甕。1191は大型の椀形の鉢。外面はタタキ、内面はハケを密に施して調整する。1192は土師器杯。口縁端部は内側へ丸めて玉縁状にし、内面には斜放射暗文を施す。

ＳＲ02（Ａ）その他（第137・138・162図、図版19・58）

ＳＲ02（Ａ）（２区②）で出土した遺物である。

1193～1195は古代包含層を切る小さい砂層を中心とする流路から出土したと思われる。

全て弥生土器である。1198は壺口縁端部は平坦で、頸部には押圧突帯を貼り付ける。弥生時代中期後半。1194は広口壺。直立する頸部に大きく屈曲して開く口縁部を持つ。1196は鉢口縁部は内側に粘土を足して肥厚させる。口縁部外側に刻み目を付け、外面には４条の刻み目突帯を貼り付ける。その突帯をまたぐように縦方向に２条１単位の粘土紐を貼り付けたものが１ヶ所に残っていた。弥生時代中期後半。1197は椀。口縁端部は平坦にし、内外面とも横方向にヘラミガキする。弥生時代中期後半。1195は体部破片。横方向に５列１単位の列点文が２列施される。摩滅が著しい。

ＳＲ02（Ｂ）その他（第139・140・162図、図版19・58）

1198～1200はＳＲ02（Ｂ）（２区③）の遺構精査中などで出土した遺物である。1198は弥生土器甕。口縁部はあまり鋭角でない角度で取り付き、底部はわずかに平底である。外面は口縁部から底部まで叩いて仕上げ、内面は上部はハケ、中位から下部はヘラ削りである。1199は須恵器皿。口縁端部はわずかに丸めて玉縁状にする。1200は鞴羽口。

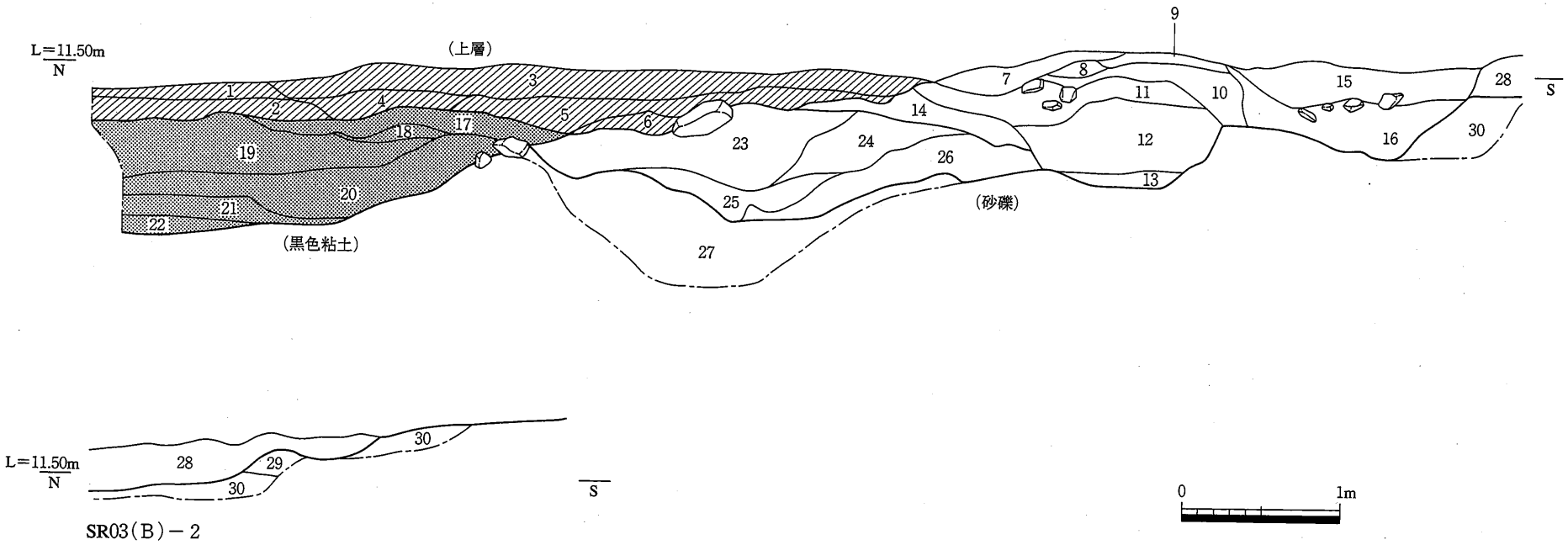
ＳＲ03（第163～166図、図版19）

調査区の東側を限る谷筋である。６区②から６区①にかけて検出した。６区で検出したものを一括してＳＲ03としているが、一度に形成されたものではなく、また、一部ＳＲ02へ続く流路も含めているが、ＳＲ03のなかで報告した。土層序は各調査区で作成した壁面の断面図や土層観察用の畔の断面図をもとにした。発掘調査の際には自然河川の掘り下げに先だって設定したトレンチの土層から層位ごとに取り上げるように心がけたが、いろいろな小流路が錯綜している部分もあり、面的に掘り下げをしている際に掘り下げ層位が錯綜した場所もあったと思われる。図面を掲載する際には調査時の取り上げ層位をもとに土層図と照合しながらある程度層名を整理した。６区②部分に関しては層位が単純であったが、６区①に関してはここでは幅広く堆積する黒色粘土を鍵として層序を考えた。

６区②部分では幅6.4m、深さ1.4m、検出範囲の高低差は2.1mで、分厚い砂礫層の堆積がみられ、流れが急激であったことを窺わせる。礫は５～15cm程度で、上流側ほど礫の堆積は厚い。この礫中から弥生時代後期の土器が多く出土した。この部分は地山層も礫であったが、ここでは遺物を含まない。この礫層の上層には灰色砂質土を中心とする層が厚さ60cmで堆積する。これは流路が埋没した後に、堆積したものと思われる。

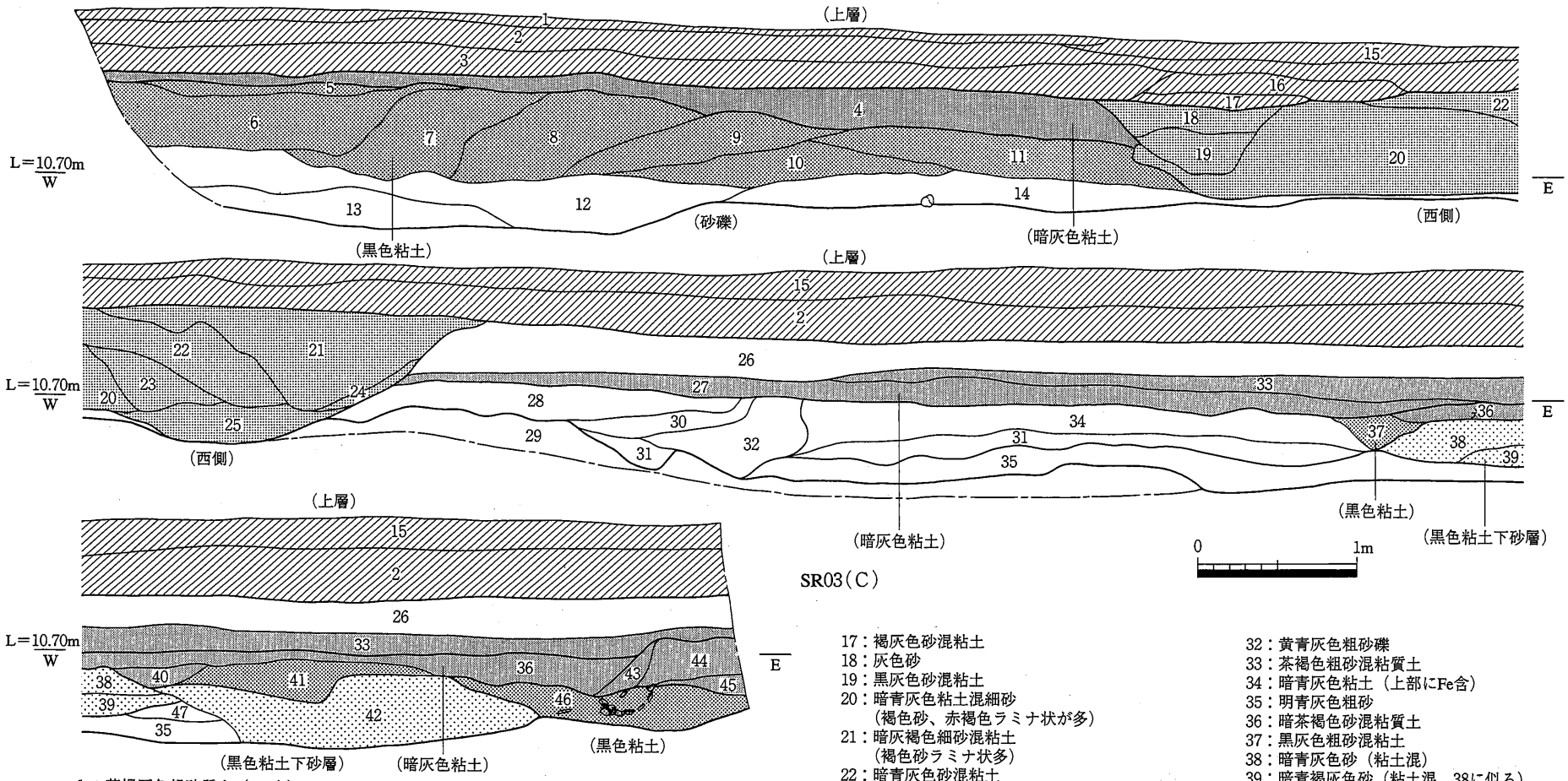
６区②北西部付近から黒色粘土層が出現する。この層は範囲が狭いが、ＳＲ02の黒色粘土層と同一の可能性もある。この層は６区①で広範に広がる層である。また、このあたりから小規模な、砂層を中心とする流路がいくつか見え始める。

６区①では基本的な土層は下層から順に砂礫層→砂層→黒色粘土層→上層で、上層の上・下で小規模



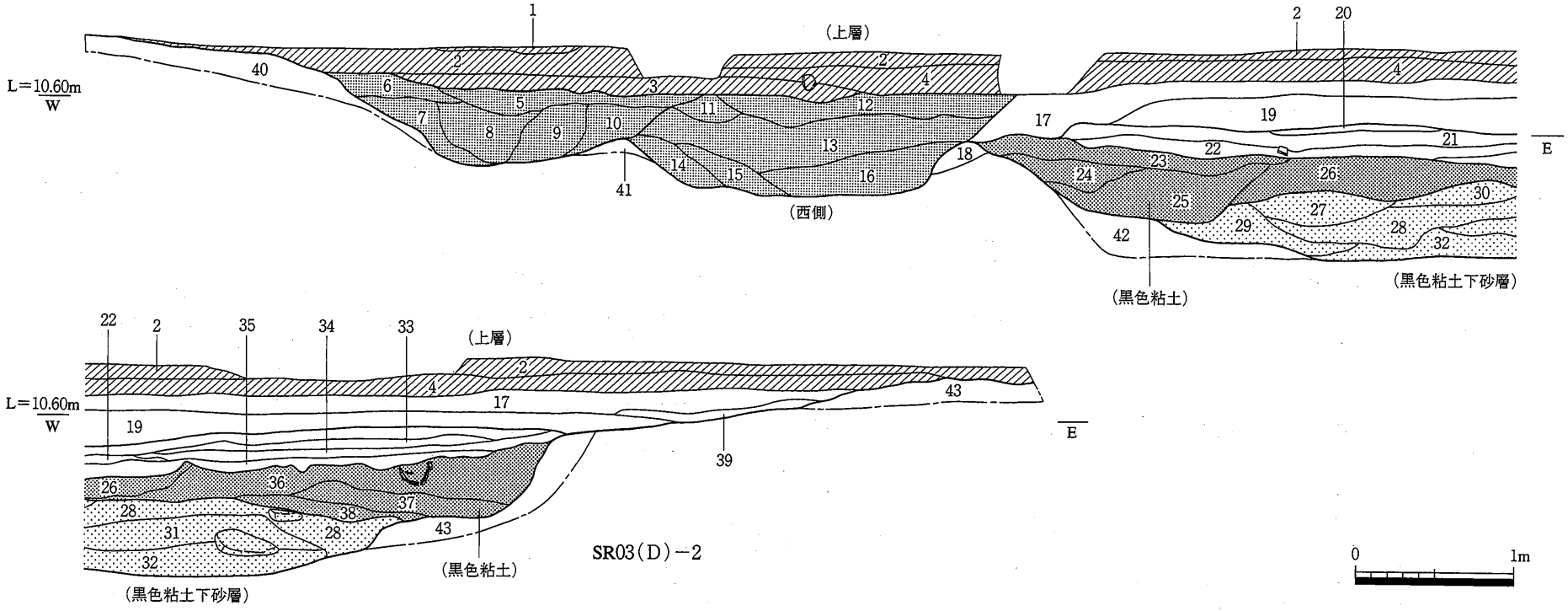
1：赤茶褐色粗砂質土（小礫混）
2：褐灰色粗砂混砂質土
3：灰色粘質土混砂質土（明褐色土混）
4：褐灰色砂質土（明褐色砂質土混）
5：明褐灰色砂質土
6：暗茶灰色シルト（よくしまる）
7：明灰色粘質土混砂質土（Fe混）
8：明黄褐色砂（ブロック状に入る、Fe混）
9：明黄褐色砂
10：明赤茶褐色粗砂
11：明褐色砂質土（黄褐色粗砂ラミナ状に入る）
12：褐色砂、褐灰色粘土（ラミナ状に堆積）
13：５cm大前後の礫（一部10cm大以上のものもある）
14：灰褐色シルト
15：暗褐灰色砂混粘土（部分的に褐色砂ラミナ）
16：明青灰色砂質土（15cm大前後の礫混）
17：黒褐色砂混粘質土
18：19で砂がブロック状に入る
19：黒褐色粘土（砂わずかに混）
20：黒灰色砂混粘土
21：暗褐灰色粘土
22：暗褐灰色礫混粗砂
23：３～５cm大の礫（大きいものもあり、暗褐灰色砂質土混）
24：暗褐灰色砂質土（くさり礫混）
25：明灰色砂質土（ラミナ、礫混）
26：暗青褐灰色粘土混粗砂質土
27：明黄青灰色砂質土（礫混、地山）
28：明赤茶褐灰色細砂質土（Fe多）
29：暗褐灰色粘土
30：青灰色シルト（地山、礫混）

第164図　ＳＲ03(Ｂ)土層図(2)(１／40)



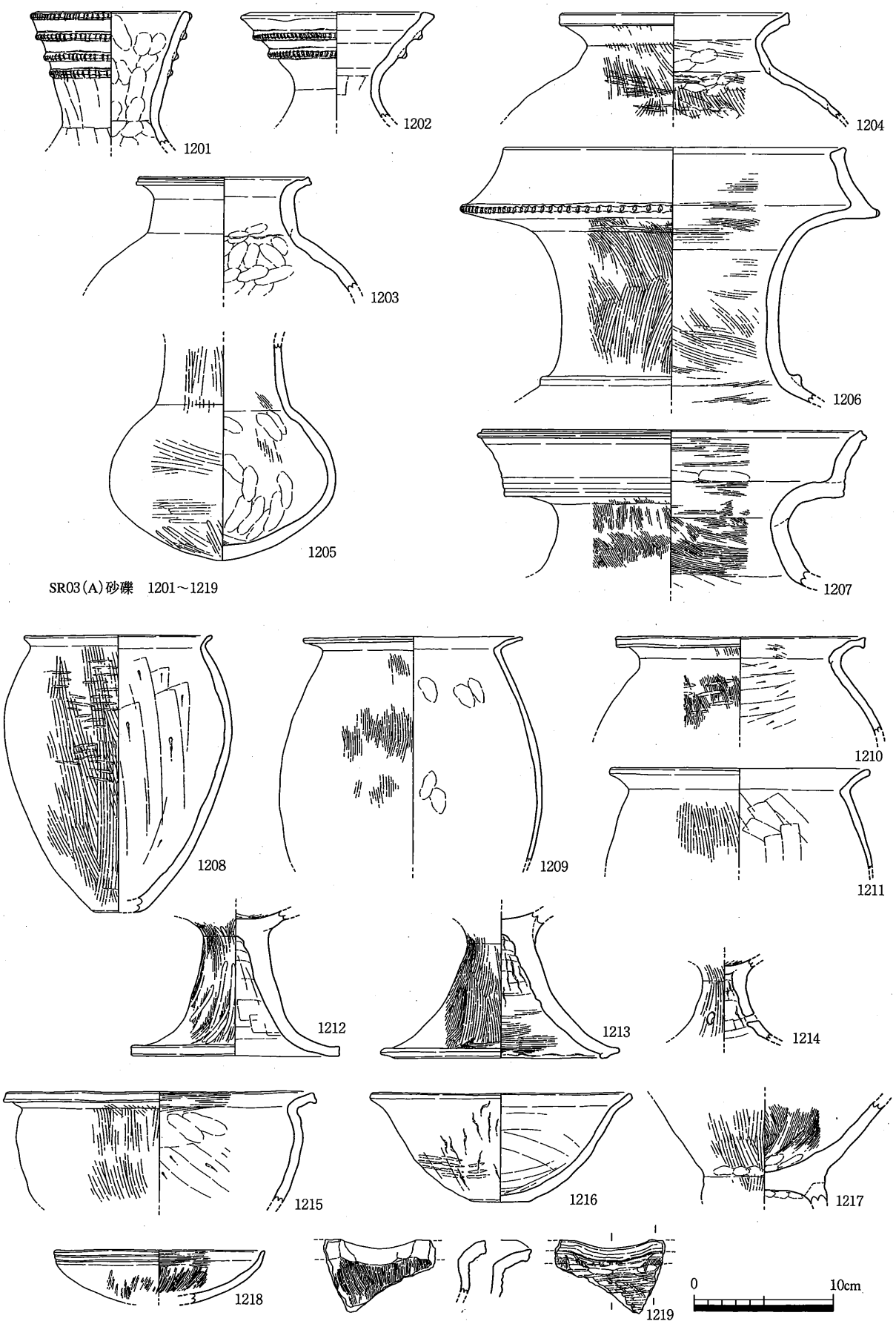
1：茶褐灰色粗砂質土（Mn含）
2：褐色砂質土
3：暗褐色砂混粘質土
4：黒灰褐色砂混粘質土
5：青灰色細砂混粘土
6：暗灰色砂混粘土
7：暗灰色粘土（固い）
8：暗青灰色砂・くさり礫混粘土
9：暗灰褐色砂混粘土
10：暗灰褐色シルト質土
11：淡黒灰色粘質土混シルト
12：暗灰色砂礫
13：暗青灰色砂
14：暗褐色砂
15：明灰色粗砂質土
（Mn含、茶褐色土混、固い）
16：暗青灰色粘質土
（上部に茶褐色土、固い）
17：褐灰色砂混粘土
18：灰色砂
19：黒灰色砂混粘土
20：暗青灰色粘土混細砂
（褐色砂、赤褐色ラミナ状が多）
21：暗灰褐色細砂混粘土
（褐色砂ラミナ状多）
22：暗青灰色砂混粘土
23：青灰色粗砂混粘土
24：青灰色粗砂質土
25：暗褐色砂礫（ラミナ）
26：明褐灰色砂質土（粘質土混）
27：暗茶褐色砂混粘質土
28：黄青褐灰色粗砂質土（固い）
29：明青灰色砂（礫混、地山）
30：暗黄青灰色細砂
31：黒灰色細砂
32：黄青灰色粗砂礫
33：茶褐色粗砂混粘質土
34：暗青灰色粘土（上部にFe含）
35：明青灰色粗砂
36：暗茶褐色砂混粘質土
37：黒灰色粗砂混粘土
38：暗青灰色砂（粘土混）
39：暗青褐灰色砂（粘土混、38に似る）
40：36に似る、36よりやや濃い
41：黒褐色粘土（よくしまる）
42：黒褐色粘土混砂
（砂ラミナ状、礫も多）
43：暗褐灰色砂混粘質土
44：黄青褐色砂混粘質土
45：白褐灰色砂混粘質土
46：黒灰色粘土（よくしまる）
47：青褐灰色砂（ラミナ）

第165図　ＳＲ03(Ｃ)土層図(3)(１／40)



1：暗茶褐色粘質土（Fe少）
2：明灰褐色砂質土（Fe多）
3：褐灰色粘質土混細砂質土
4：明褐色砂質土（Fe多）
5：褐灰色粘質土（明褐色砂ラミナで太く入る）
6：褐灰色粗砂混粘質土
7：褐灰色細砂（明褐色砂ラミナで多く入る）
8：明褐色砂（赤茶褐色砂ラミナ状）
9：褐灰色砂混シルト
10：褐色粗砂
11：褐灰色粗砂混粘質土
12：明褐色粗砂～砂（ラミナ状、11の土混）
13：暗灰褐色粘土
（ややシルトっぽい、明褐色砂ラミナで多く入る）
14：青褐灰色粘質土質砂質土
15：青褐灰色砂質土（水分多）
16：明褐色砂ラミナ状（13の土わずかに入る）
17：明灰褐色砂質土
18：明灰褐色粗砂混砂質土
19：明茶褐色砂混粘質土（Feやや多）
20：暗褐色粘土（Fe少、砂少し混）
21：暗褐色粘土（砂少し混）
22：黄灰白色砂
23：黒茶褐色粘質土（暗灰色粗砂ラミナ状に入る）
24：黒茶褐色粘土
25：暗茶灰褐色砂質土（明褐色砂ラミナ状）
26：暗褐灰色粘土（ややシルトっぽい、粗砂多く混）
27：赤褐色礫
28：明青灰色粘土
29：明青灰色粘土（地山が撹乱を受けたもの）
30：暗青灰色粗砂質土
31：明青灰色粘土混粗砂（下方にFe集積）
32：茶黄褐色砂礫
33：青灰白色砂
34：灰褐白色砂
35：明褐色砂質土（下方にFe集積）
36：黒灰褐色シルト質粘質土
37：暗褐灰色シルト
38：暗褐灰色粘土
39：明灰褐色粘質土
40：明青黄灰色粗砂～粘土（地山）
41：明青灰色粘土（地山）
42：明青灰色細砂（下の方礫混、地山）
43：明青黄灰色粗砂混粘土（地山）

第166図　ＳＲ03(Ｄ)土層図(4)(１／40)



第167図　ＳＲ03(Ａ)出土遺物(1)(１／４)

の砂層を中心とする流路がみられる。層位・遺物の説明は層位ごとに行い、その層位が複数に跨るときはさらに区別に行った。

ＳＲ03（Ａ）砂礫（第167・168図、図版59・84）

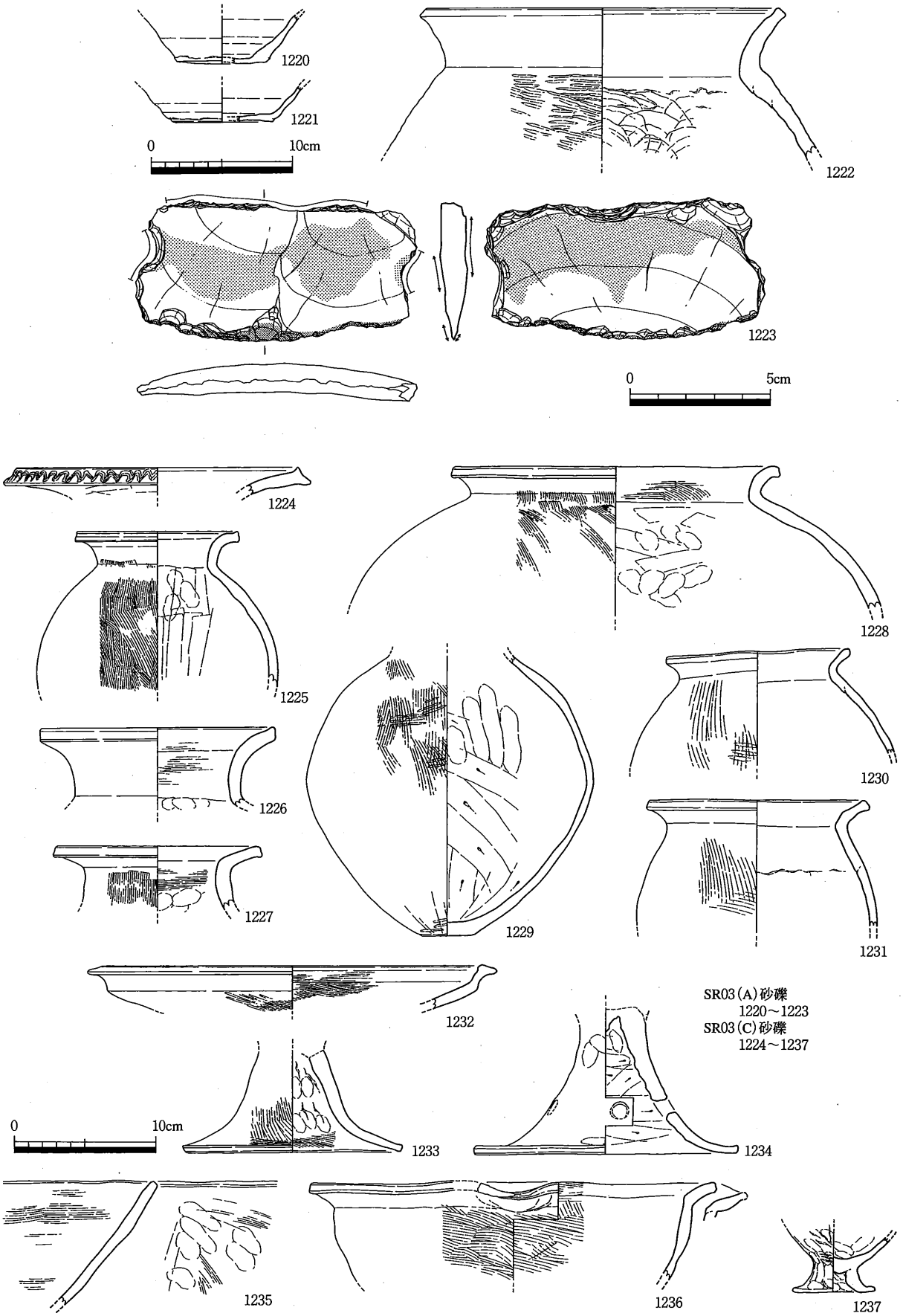
６区②南西から北東へ向けて流れ、６区①へ流れ込む流路である。南西端部分では深さ約1.3m、幅約3.5mにわたって堆積し、その上部には灰色土の包含層が堆積する。20mほど下った畔ＳＲ03（Ｂ）－１では礫は幅5.5m、深さ60cmほどになり、上面に流路の跡と思われる砂層のラミナ状の堆積がみられるようになる。６区②の一番低い部分である北東の壁面土層ＳＲ03（Ｂ）－２では幅約３m、深さ約70cmとなり、ここでは北西部から流れ込んでくる黒色粘土に切られている。また、礫層の南部では流路の跡と考えられる砂層の堆積が礫層の上部でみられた。周辺の地形の傾斜は６区②山側よりは平野側の方がやや緩く、おそらく６区②山側付近で傾斜がやや緩くなり、多量の礫とともに土器が多く堆積していったと考えられる。

1201～1219は弥生土器。1201～1207は壺。1201・1202は頸部に突帯を貼り付け、そこに刻み目を付ける。弥生時代中期後半。1203・1204は直立またはやや内傾する短めの頸部に口縁部が開く器形。1205は直立する長めの頸部を持つもので、丸い体部が付く。外面全体にヘラミガキする。1206・1207は二重口縁壺。1206は口縁部の立ち上がる部分に刻み目を入れ、頸部に突帯を貼り付ける。1207は頸部の中位と口縁部の立ち上がる部分に剥離痕がある。1208～1211は甕。概ね外面にはハケ、内面はヘラ削りまたは板ナデで薄く仕上げる。1208・1210はハケの下部にタタキ痕跡を残す。1212～1214は高坏。1212・1213は脚部に穿孔をしない。1214は脚部に穿孔を３ヶ所均等にする。1215～1219は鉢。1215は口縁部をきつく屈曲させる。1216は口縁部を緩く屈曲させ、外面下部にはぼやけたタタキ痕を残すが、タタキ痕がみえない個所ではクラックが顕著に残る。1217は低い脚部の付くものか。底部には脚部を貼り付けた痕跡がみえる。1218は小型の皿状の鉢で、体部内外面には放射状の、口縁部内面には横方向のヘラミガキがある。1219は片口鉢の口部分。1220は土師器杯。回転台土師器。内面全体と外面の一部に墨らしいものが付着する。1221・1222は須恵器。1221は杯。外面には火襷が掛かる。1222は甕。外面にはタタキ痕、内面には青海波紋の当て具痕跡が残る。タタキ調整は頸部から下部へ向かって円弧状にタタキ締められている。全体に自然釉が掛かり、外面には全体に砂利が釉に溶着する。1223は石庖丁。上面を潰し、両端に抉りを入れる。刃は磨滅する。サヌカイト製。出土遺物のうち土師器・須恵器はいずれも９世紀後半代と考えられるが、おそらく取り上げ時に上層のものが混入したと思われる。時期は一部弥生時代中期後半のものが混じるが、概ね弥生時代後期後半と考えられる。

ＳＲ03（Ｃ）砂礫層（第168・169図、図版84）

６区①（Ｃ）の、主に畔ＳＲ03Ｃの南側東半部分で検出した層位である。①の主に南側区画では、②に面した西側の壁面土層で黒色粘土層・その下部の青灰色砂質土層のさらに下部で、地山直上に厚さ約30cmの礫層がある。それは、南側の壁面土層の最下層を厚さ20cm前後で堆積し、一部では途切れるものの、概ね水平堆積をする。そして、その上部に土器が多量に出土した黒色粘土層や黒色粘土下部の砂層が堆積する。このような状況を考えれば、この砂層はＳＲ03Ｃ部分の区画を中心に西から東へ流路が向き、調査区外へ出るものと考えられる。

1224～1237は弥生土器。1224～1227は壺。1224は口縁部が大きく開く器形で、口縁端部に波状文を施す。1225～1227は短い頸部で、口縁部が開く器形。1227は割れている部分は剥離部分であり、ここで粘土の継ぎ目があったと考えられる。1228～1231は甕。1228は整理作業が終了する直前になって1267と接



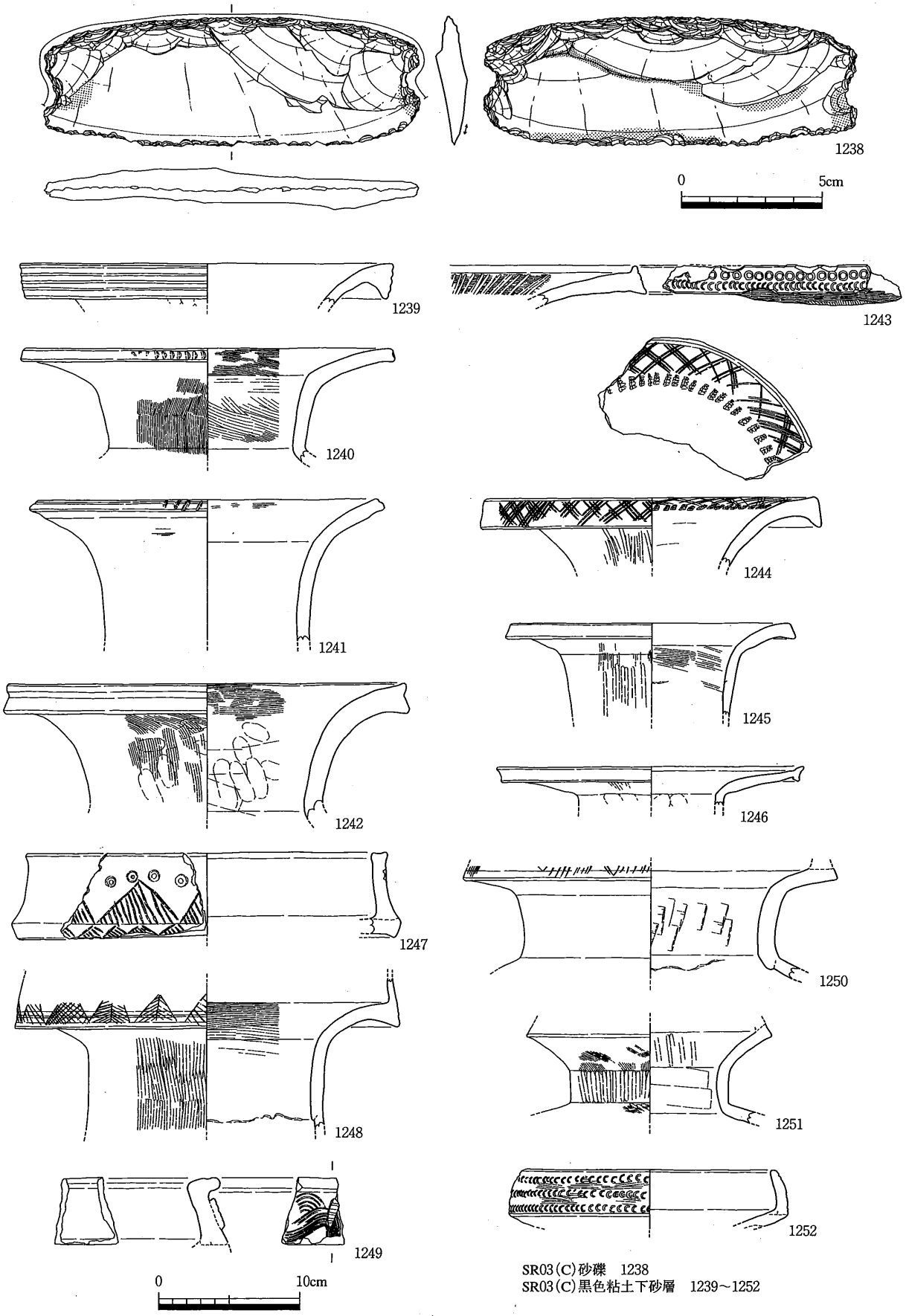
第168図　ＳＲ03(Ａ・Ｃ)出土遺物(2)(１／４、１／２)

合することが判明した。1230・1231は頸部の屈曲は緩く、外面はハケで仕上げる。1232～1234は高坏。1232は杯部。口縁端部に平坦面を持ち、内外面にヘラミガキをする。弥生時代中期後半～後期初頭。1233は外面はハケ、内面は筒部には板ナデ、裾部にはハケを施す。脚部上端部の割れは剥離面で、ここで粘土の継ぎ目があると考えられる。1234は脚部に不均等に4孔穿孔がみられる。上端部分の杯部分は剥離痕跡が確認できる。1235は鉢。大型の椀形になるもの。1236は片口鉢。注ぎ口に煤が付着している。1237は製塩土器。外面はタタキの後指ナデする。1238は石庖丁。上部は潰し、両端に抉りを入れる。サヌカイト製。

ＳＲ03（Ｃ）黒色粘土下砂層(3)（第169～176図、図版59～61・83～85）

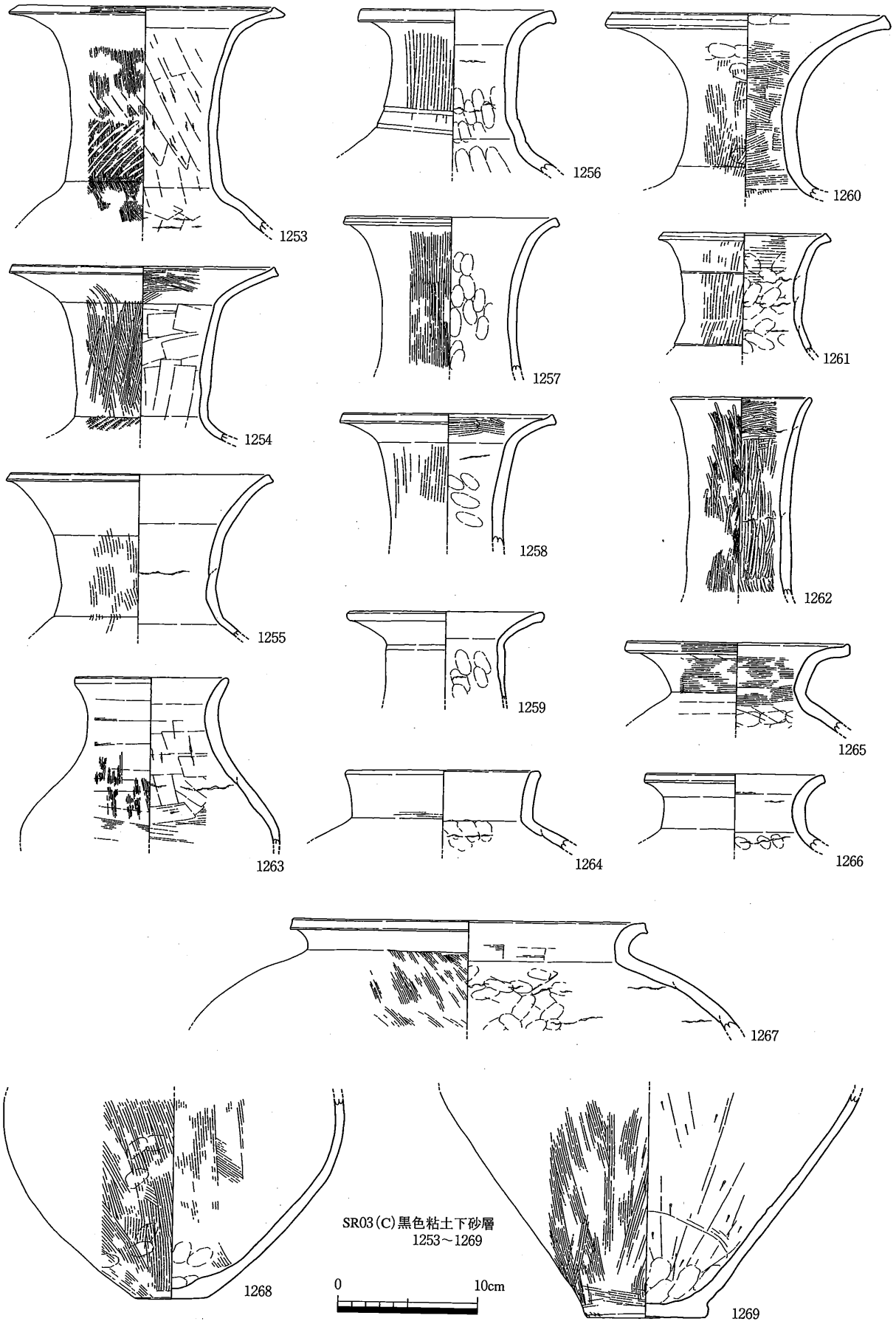
ＳＲ03Ｃ部分（６区①南）で検出した層位であり、出土した遺物である。ＳＲ03Ａ・Ｂ部分では砂礫層の上部には該当するような堆積はない。ＳＲ03Ｂ部分東側壁面土層では黒色粘土の下に該当する層位は見あたらないが、予備調査の断面図では黒色粘土の下部に灰色砂層があり、黒色粘土の下部に堆積するものと考えられる。ＳＲ03Ｃの西側南半部から現れ、西半部分では南壁をかすめながら東北方向へ進路を変え、畔ＳＲ03－Ｃでは東半部分で出現し、ＳＲ03Ｄ部分（６区①北）へ続く。ＳＲ03Ｃ部分西壁土層では黒色粘土層の下部、砂礫層の上部に堆積し、概ね西壁から南壁西半部にかけては厚さ40cm程度の水平堆積である。埋土は暗青灰色粘土混じり砂質土となっている。畔部分でも青みを帯びた暗灰色系の砂層で、全体に青みを帯びた粘土混じりの砂質土・砂層である。

1239～1267は壺。1239は口縁端部に凹線文を持つ。弥生時代中期後半。1240～1242・1245はほぼ直立する頸部に大きく開く口縁部が付く。1240は口縁端部に爪型文がある。残存部分は多くはないが、爪型文のない個所もあり、全周はしないようだ。下川津Ｂ類。1241は口縁端部に沈線が１条巡り、刻み目を入れる。残存部分では刻み目は４個１単位で１個所に残る。摩滅が著しい。1242は口縁部がやや外傾して立ち上がり、口縁端部には凹線が１条はいる。1243は口縁端部に竹管文と半裁竹管文を２段にして施す。内面はハケの後ヘラミガキする。下川津Ｂ類。1437と同一と考えられる。1244は口縁端部に斜格子文、内面には斜格子文を施し、その下に３段の列点文を入れる。1247～1252は二重口縁壺。1247は立ち上がった口縁部のみ残る。口縁端部には竹管文と２段の鋸歯文を施す。立ち上がりの基部部分には剥離痕跡が残る。1248は口縁端部に鋸歯文を施すが、鋸歯の中のヘラ描き文様は斜格子状、斜線のみのもの、樹木のようなものなどまちまちである。二重口縁部の立ち上がりは薄い。頸部下部に粘土紐の痕跡が残る。1249は二重口縁部の立ち上がり部分だけ残ったものである。下部に剥離痕が残る。端部は外側へ拡張させ、波状文と棒状浮文で飾る。棒状浮文には横方向の刻み目を入れる。1250は二重口縁部分が剥離し、立ち上がり部分は残らないが、口縁端部に鋸歯文の下部が残り、口縁端部を鋸歯文で飾るものと思われる。1251は二重口縁部分が完全に剥離するが、口縁端部内側が変色しており、この部分に口縁が立ち上がるらしい。口縁部は内傾気味に立ち上がる。下川津Ｂ類。1252は概ね立ち上がり部分のみである。壺本体との剥離面が下部に残る。口縁部は丸みを持って立ち上がり、そこには３段の半裁竹管文が施される。1253～1261は長めの頸部に口縁部が開くもの。外面は概ねハケで調整し、1253・1254はその後ヘラミガキを加える。1253は頸部外面の中位に左上がりのヘラ状工具痕、その下部には右上がりのヘラミガキ状の文様を施す。内面には絞り目を顕著に残す。1256は頸部下端部に２条の沈線を施す。1261は頸部と体部の境に段を持つ。頸部中位やや上よりにも沈線を１条持つ。1262は細頸壺。内外面はヘラミガキし、頸部に粘土の継ぎ目が観察できる。下川津Ｂ類。1264は頸部の短い壺。直立する頸部を持つ。1265・1266は短めの頸部で口縁端部が開くもの。1265は外傾気味の頸部で頸部内外面に横方向のハケが

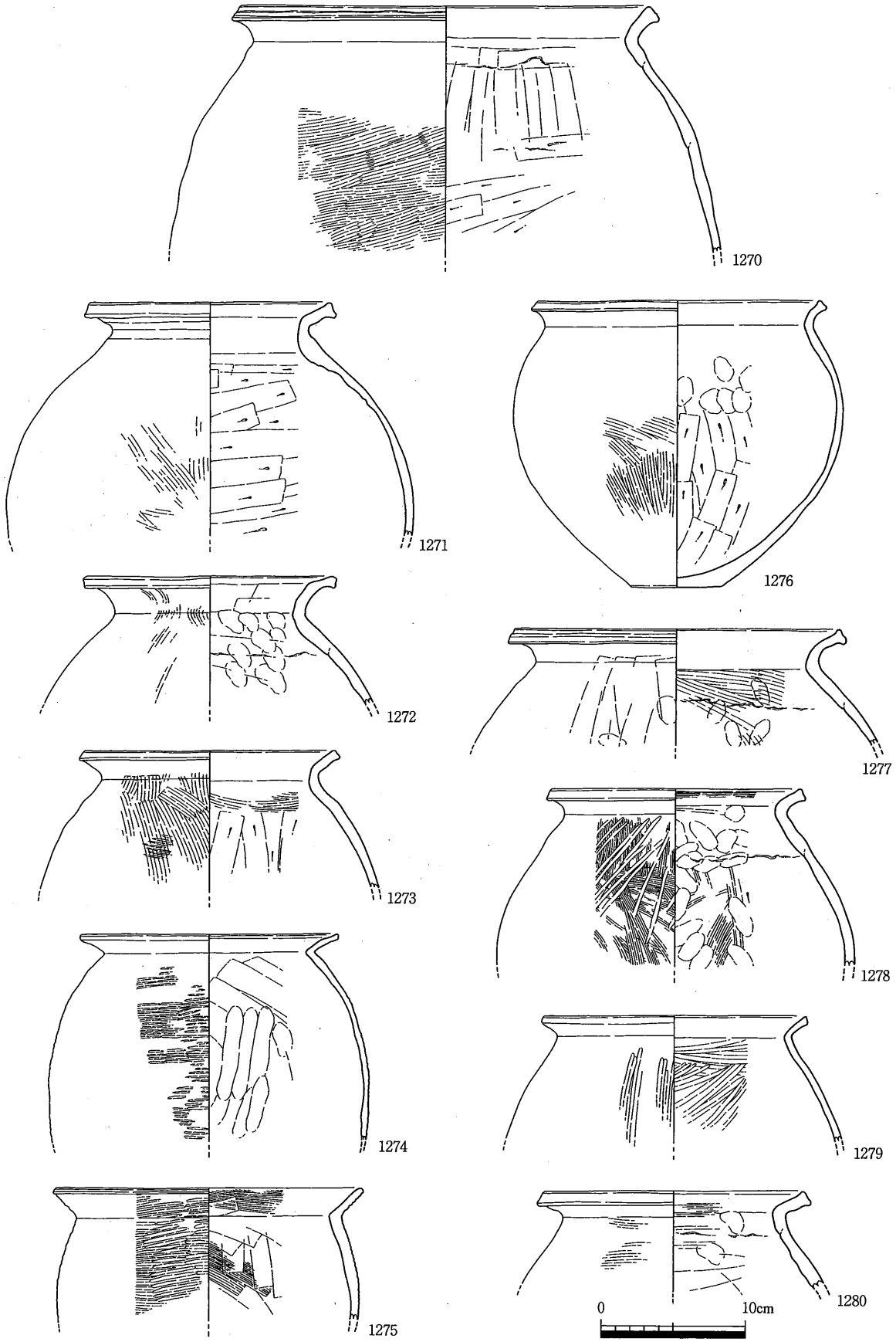


SR03(C)砂礫　1238
SR03(C)黒色粘土下砂層　1239～1252

第169図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(3)(１／４、１／２)

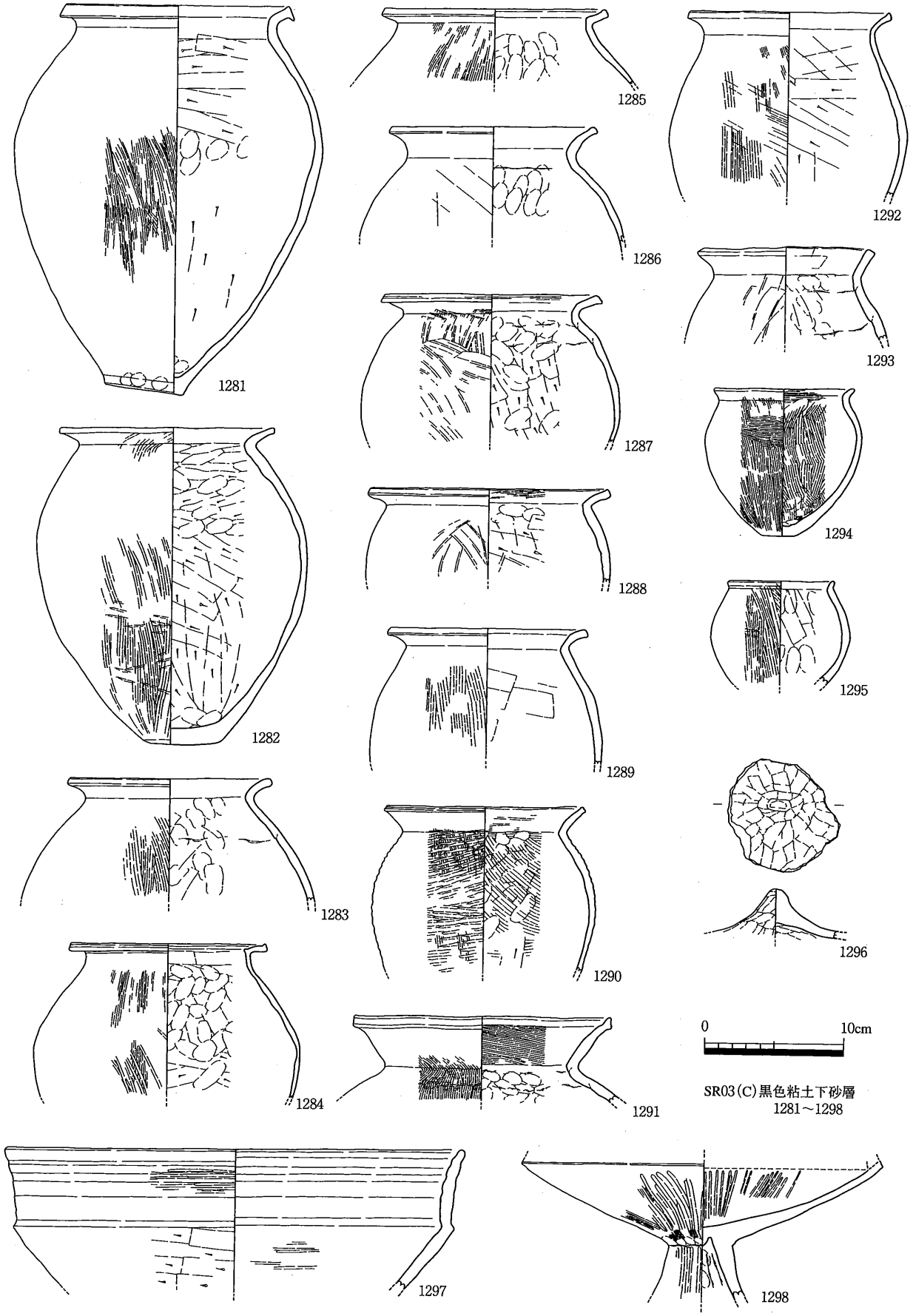


第170図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(4)(１／４)

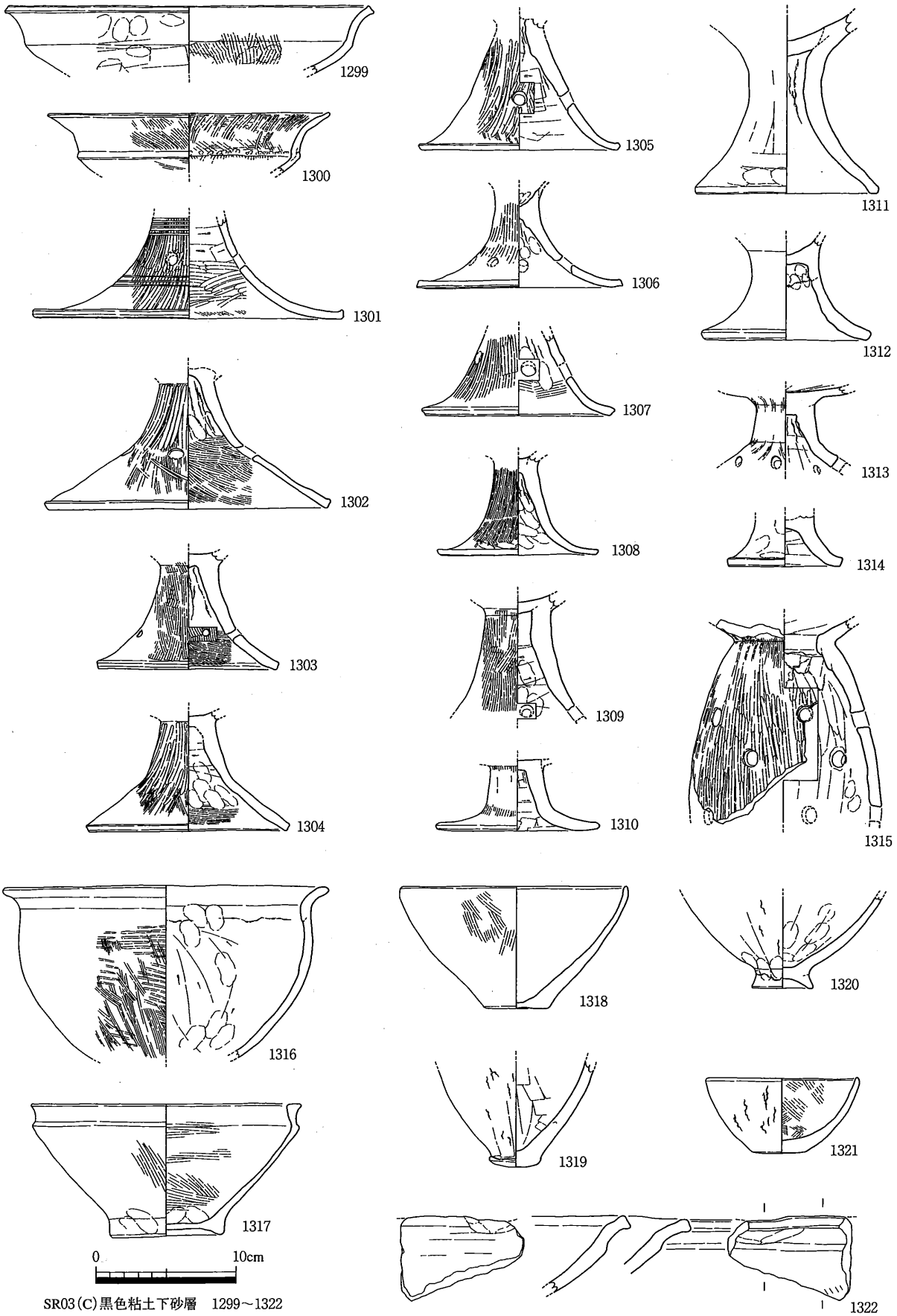


SR03(C)黒色粘土下砂層　1270～1280

第171図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(5)(１／４)

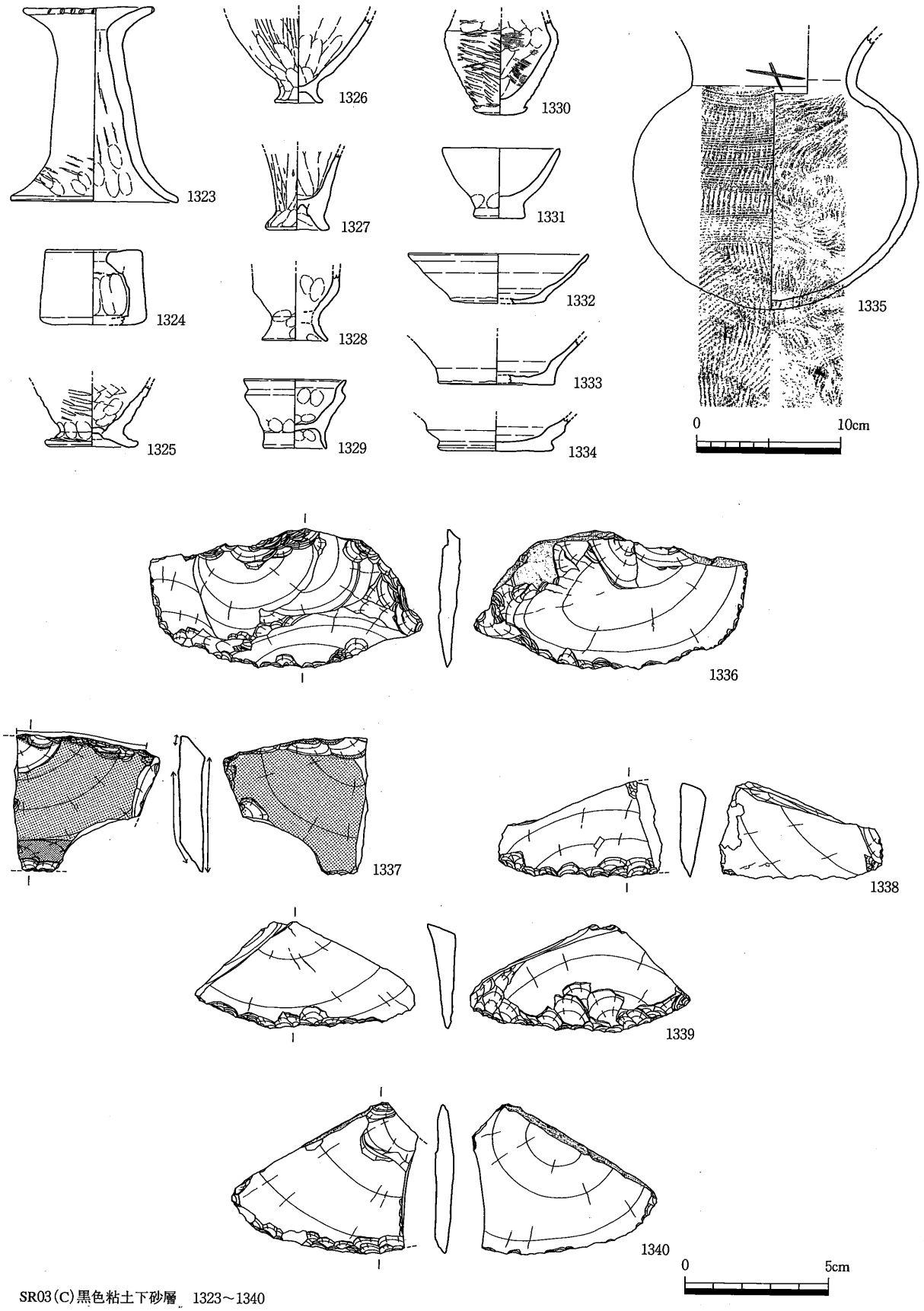


第172図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(6)(１／４)



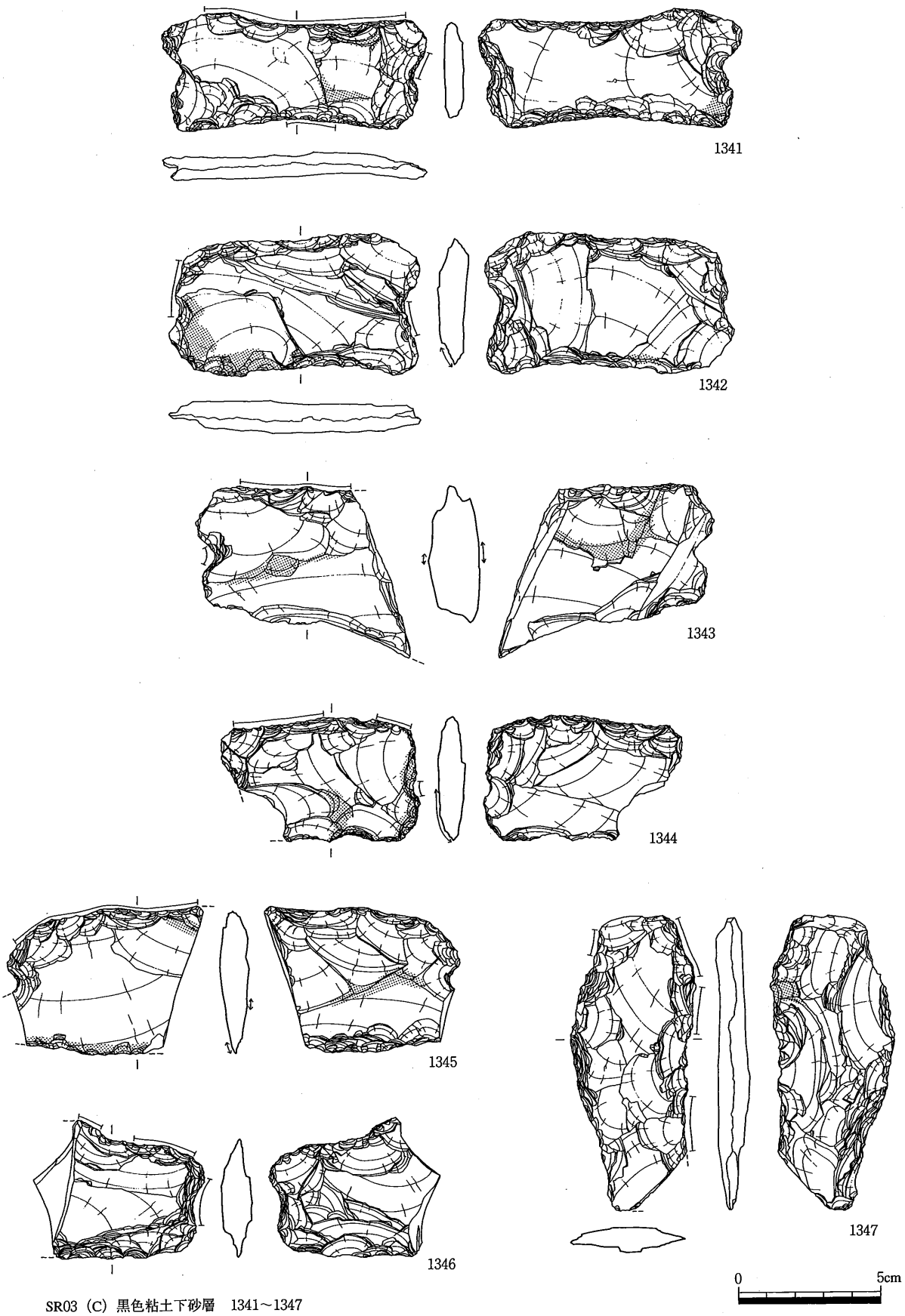
SR03(C)黒色粘土下砂層　1299～1322

第173図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(7)(１／４)



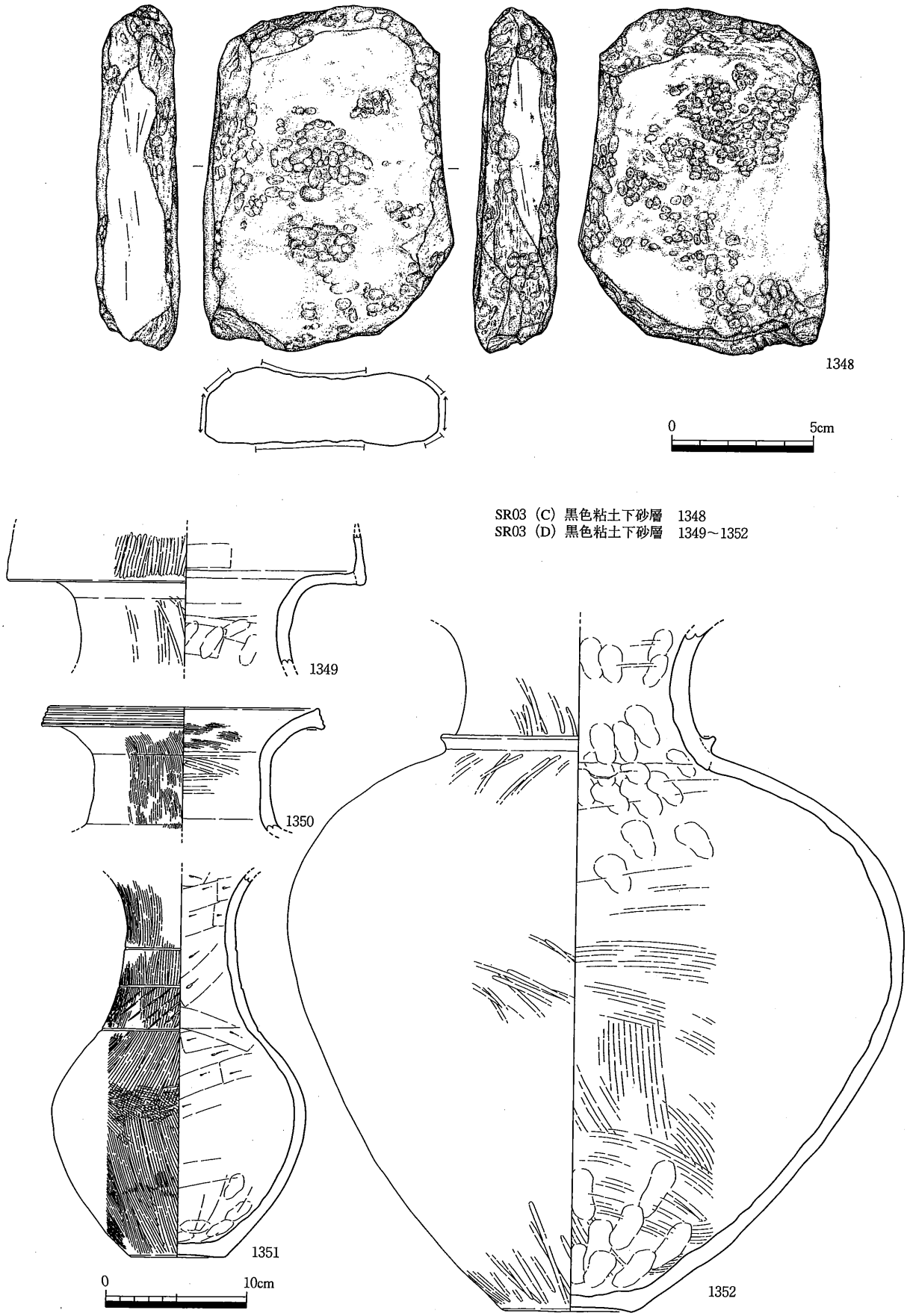
SR03(C)黒色粘土下砂層　1323～1340

第174図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(8)(１／４、１／２)



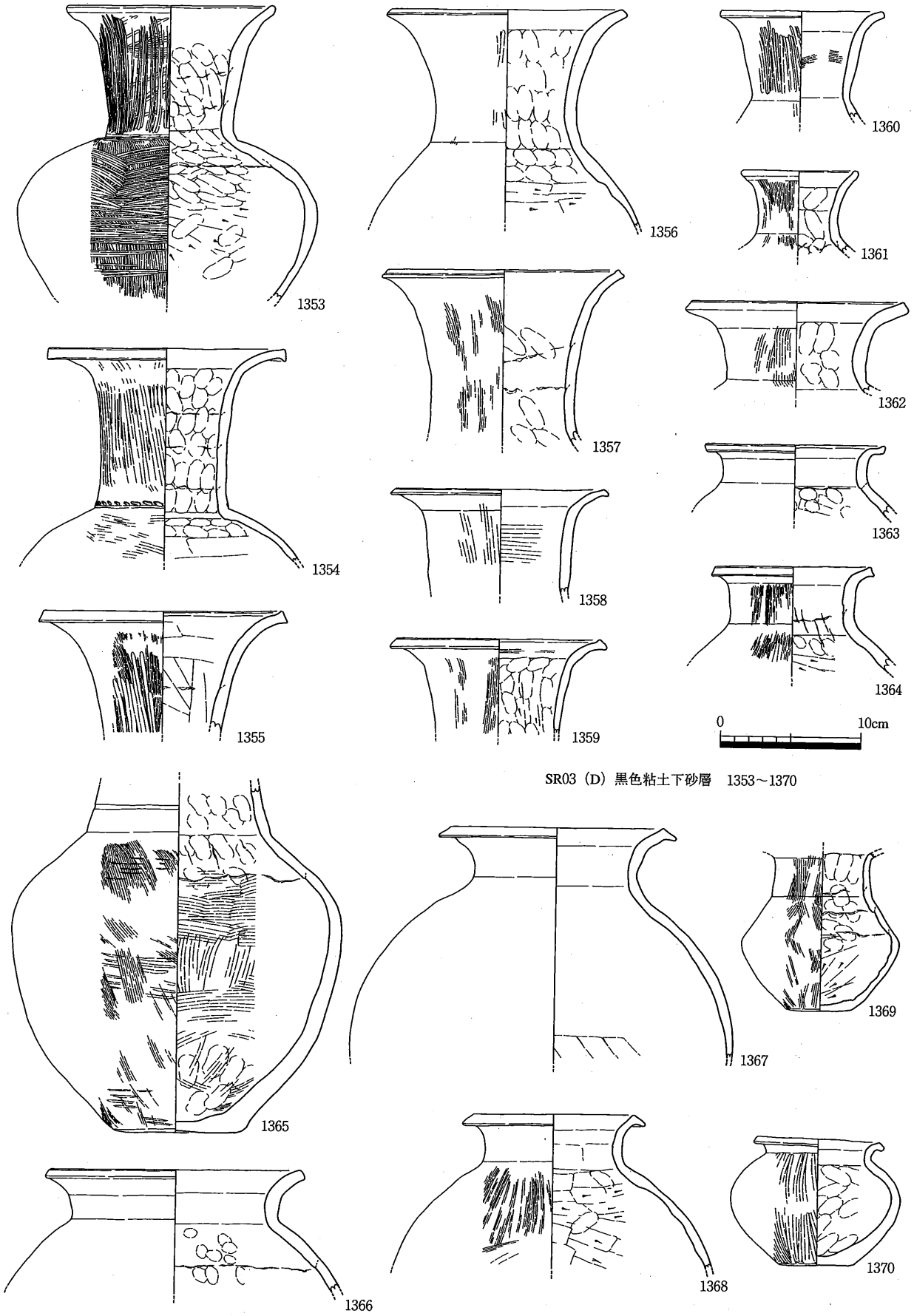
SR03（C）黒色粘土下砂層　1341～1347

第175図　ＳＲ03（Ｃ）出土遺物(9)（１／２）



第176図　ＳＲ03(Ｃ・Ｄ)出土遺物⑽(１／４、１／２)

ある。1266は口縁端部の開きは小さい。1267は短い頸部で大きい体部が付く。1268・1269は底部。いずれも平底で、1268は丸みを持つ体部、1269は体部は直線的に延びる。1270～1295は甕。1270は口縁端部に凹線を持つ。弥生時代中期後半。1271・1276～1278・1280・1281は口縁端部が広めの平坦面を持ち、頸部の屈曲は緩い。1278は外面にハケを施した後、粗いヘラミガキをする。1279は内外面ともにヘラミガキを施す。弥生時代中期後半。1281はしっかりとした平底を持つ。1274・1275・1290は頸部が鋭く屈曲し、外面は叩いて成形するだけである。1275は口縁端部までタタキ痕跡が残る。1282・1283は外面をハケ、内面は板ナデまたはヘラ削りで、1282は体部外面にタタキ痕跡を残し、底部は平底状を呈す。1284・1285は下川津Ｂ類。外面はハケで内面には指押さえ痕跡が顕著にある。1284は体部中位の内面にはヘラミガキが、内面にはヘラ削りが施される。1287・1289は外面にナデに近い、痕跡をあまり残さないハケ、内面にはヘラ削りする。1291はくの字に開く甕でやや新しく、古墳時代前期まで下るもの。1294・1295は直径８～10㎝程度の小型のもの。口縁部は短く、外面はハケ、内面はハケ（1294）、板ナデ（1295）する。1296は蓋。外面には３段の板ナデ、内面には指ナデ痕を残す。1297は鉢。口縁部外面と底部内面にヘラミガキ痕跡を残し、底部外面には横方向のヘラ削りをする。下川津Ｂ類。1298～1314は高坏。1298は杯部内外面ともに放射状のヘラミガキを施す。脚部外面にもヘラミガキ痕を残す。杯部分の底部と体部の境はきれいに剥離している。1299・1300は杯部。1300は杯体部内面にハケの後縦方向のヘラミガキがある。1301～1313は脚部。1301は脚部の中位と下位に沈線を巡らせる。外面は縦方向に密に、内面には下部に横方向のヘラミガキを行う。穿孔は残存部分では２孔あるが、均等に孔があれば３孔あったと思われる。1302は外面上半部にヘラミガキ、下半部には内外面ともにハケを残す。穿孔は４個所にあった。杯部との境はきれいに剥離する。1303はやや不均等に４個所に穿孔し、上部の杯部との境はきれいに剥離する。1305は外面にヘラミガキし、内面はヘラ削りする。脚部上端部分には杯を接合した際の剥離痕跡がきれいに残る。穿孔は３個所残り、均等にあるとすれば４孔あったと考えられる。1306は杯部の底部に当たる部分が窪んでいる。穿孔は２孔１対のものが３個所あり、合計６個所の穿孔がある。1309は２個所に穿孔があるが全容は不明である。1311は丸みを持つ杯部が付き、底部を充填した痕跡がある。弥生時代中期後半。1313は脚部の中位で屈曲する。２孔残存しており、均等に穿孔があれば６～７個所に穿孔があったと考えられる。1315は器台脚部。外面はハケの後密にヘラミガキし、脚部に３段に穿孔がある。穿孔は残存部分から１段につき６個所程度と考えられる。1316～1321は鉢。1316は口縁端部を外側へ屈曲させる。1317は体部上部で稜線を持ち、口縁端部は面を持つ。底部は平底である。内外面にハケを施す。1318～1321は椀形の器形。1318は外面にわずかにハケがみえるが、きれいになでつけ、調整痕をほとんど残さない。1319は押さえつけたような底部で、外面にはクラックを残す。1320はわずかに台が付く。1321は底部内面に放射状のハケの工具痕を残す。外面にはクラックが残るが、平滑に仕上げている。1322は片口鉢。1323・1324は支脚。1323は上方がすぼみ気味の円筒形状で、上・下部ともラッパ状に開く。口縁端部には刻みが付く。1234は低めの円筒形のもの。上部には円形に孔があく。残存部では上面が若干傾斜しており、上部は傾斜する器形かもしれない。1325～1328は製塩土器。1325は外面はタタキ痕を顕著に残し、底部外面には指押さえ痕を顕著に残す。内面には横方向の板圧痕を残す。1327は外面をヘラ削りする。1328は摩滅が進み調整は不明。底部は残らないが、一番くびれた部分は色が薄く、元々この部分に底部を充填していたと思われる。1329・1330はミニチュア壺。1329は摩滅が著しい。高台は薄く、接合部の内外面には指押さえ痕が残る。1330は底部を押し潰して作る。外面にはタタキ痕が明瞭に残り、内面にはハケを施す。1331はミニチュア鉢。椀形の器形。摩滅が著しい。



第177図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(11)(１／４)

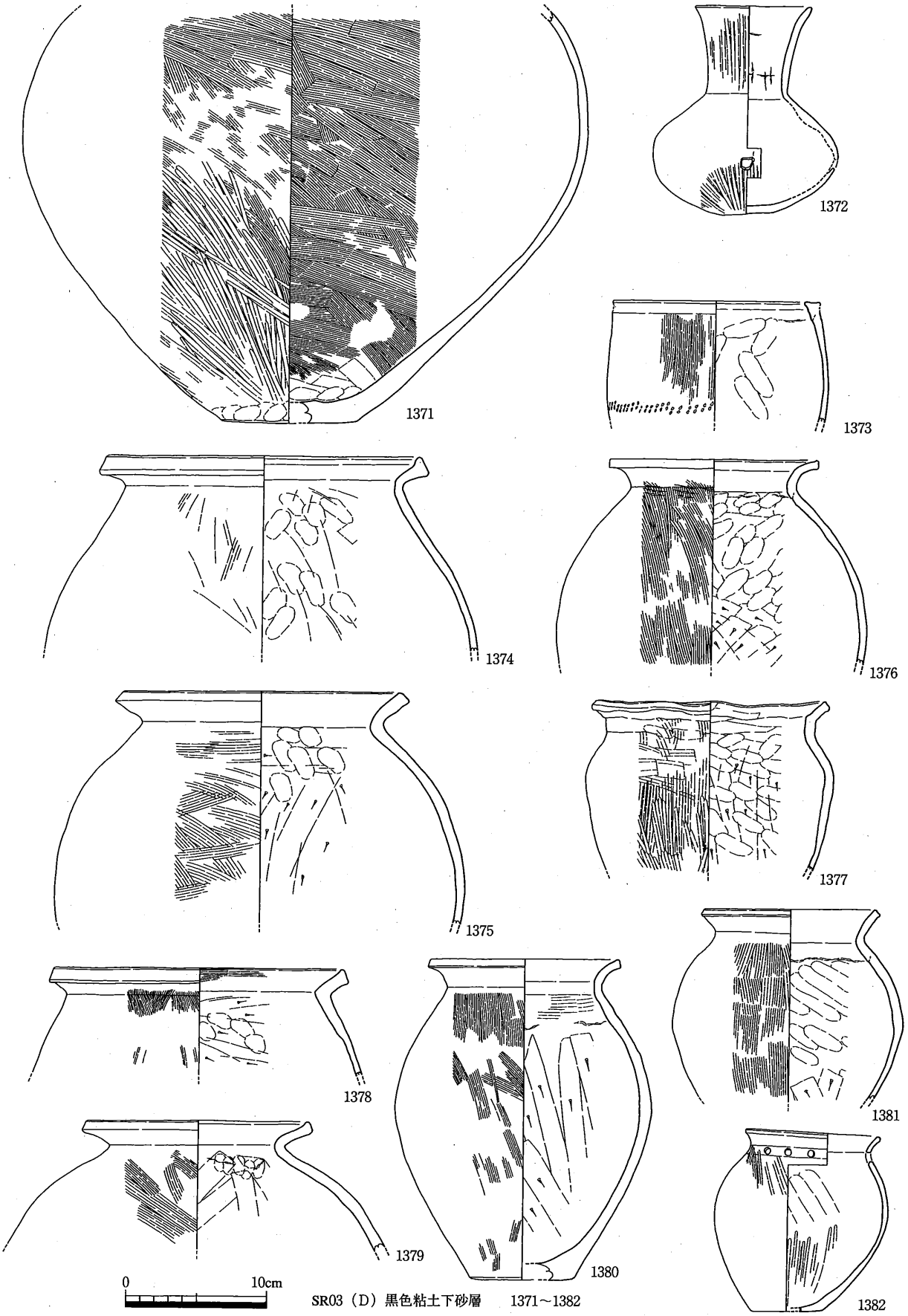
1332～1334は土師器杯。1332は回転台土師器。1333は円盤状高台を持つもの。1334は高台の少し上部に稜を持つもの。底部外面に板圧痕がある。1335は須恵器甕。口縁端部を除いて完形。外面はタタキの後カキ目、内面には青海波紋を明瞭に残す。1336・1338～1340はスクレイパー。サヌカイト製。1337は楔形石器。下側一部は欠損。全体にローリングを受けるが、刃部の内側の稜線が特に磨滅する。1341～1346は石庖丁。1343は潰れのない側がきちんと成形されておらず、未完成のまま折損したと思われる。1347は打製石斧。1348は叩き石。両面中央部付近と側縁部との境に敲打痕を残す。側縁の２個所に擦痕を残し、この部分は砥石として使用したようだ。安山岩製。

弥生時代中期後半～後期前半頃のものを多く含む。1332～1335は紛れ込みと思われる。

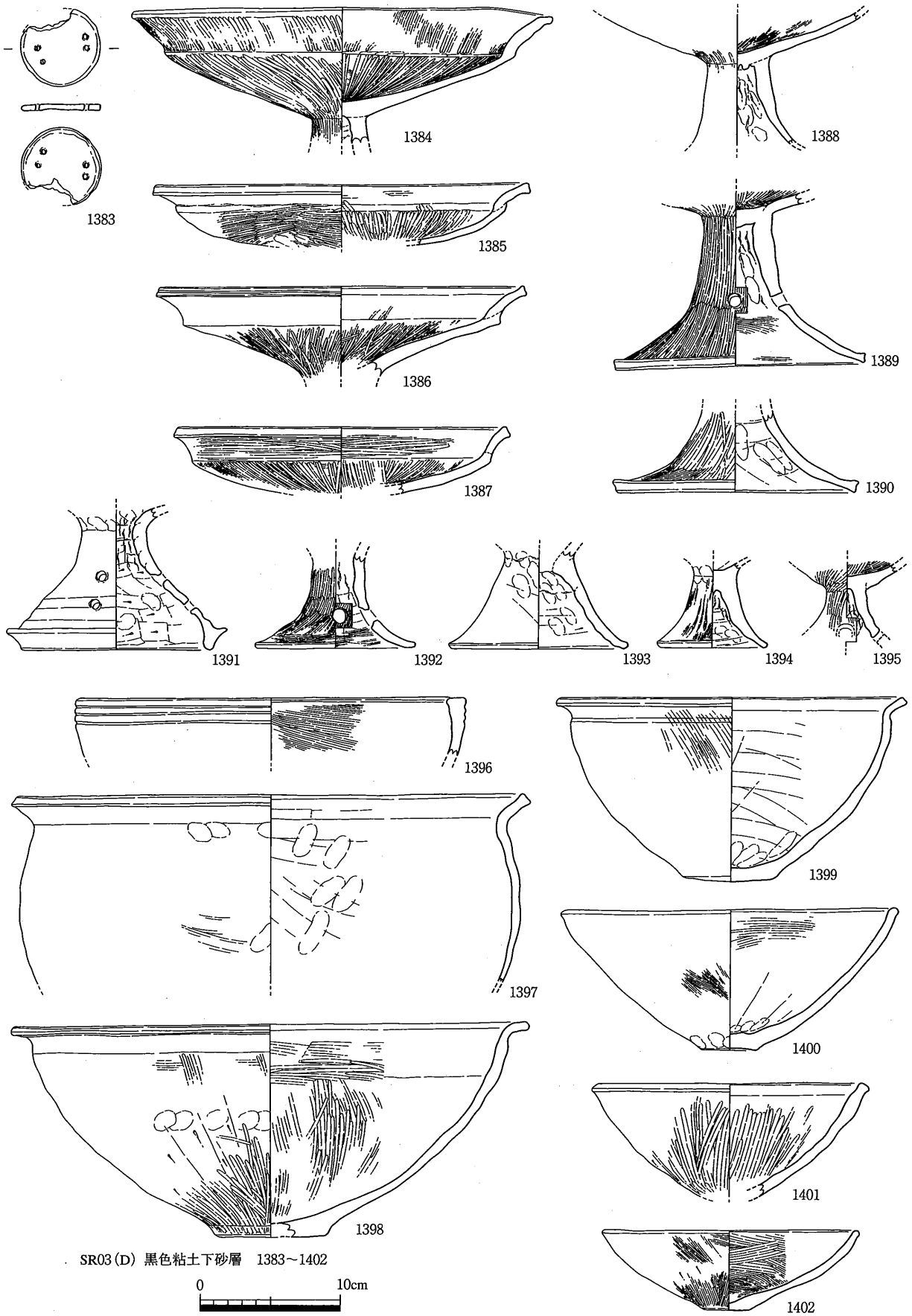
ＳＲ03（Ｄ）黒色粘土下砂層（第176～181図、図版61～64・84・90）

ＳＲ03Ｄ部分（６区①北）で検出した砂質土層である。ＳＲ03Ｃ部分（６区①南）の黒色粘土下砂層に連続する層位である。ＳＲ03Ｃ部分とＤ部分の境付近の様相が不明瞭であるが、畔ＳＲ03（Ｄ）部分では黒色粘土層の下部の厚さ20cm程度の青灰色粘土・砂質土層が相当する。この層はＳＲ03Ｄ部分の北壁土層では50～60cmの堆積となり、おそらく北壁土層に平行する方向に近い方向で東へ抜けると思われ、６区①東壁土層では中央付近でＳＲ03の上がりがみられる。グライ化が著しい。遺物は多量に出土した。

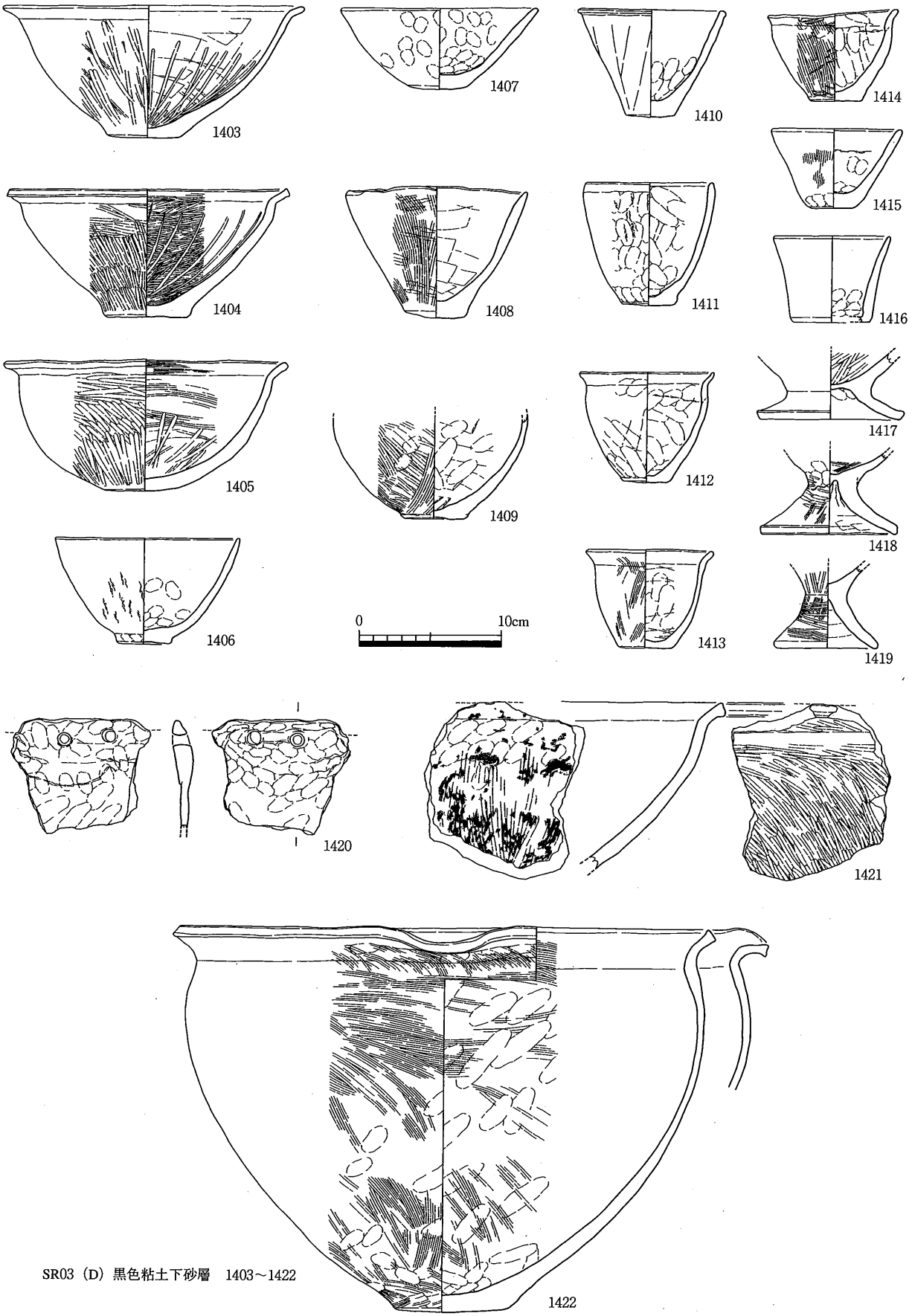
1349～1372は壺。1349は二重口縁壺。外面には縦方向のヘラミガキ、内面は板ナデする。口縁立ち上がり部分は口縁の基部の上面ではなく外側に貼り付けて作る。胎土中に角閃石を多く含む。1352は大形の壺で頸部と胴部の境付近に突帯を持つ。1351・1353～1361・1365・1372は頸部の長い広口壺。1351は外面ほぼ全体をハケ調整し、頸部に２条、体部と頸部の境に１条の沈線を巡らせる。頸部の下部、沈線と沈線の間に右上がりの斜線文をヘラ状の工具で入れる。1353は外面をきれいに磨く。1354は頸部と体部の境に刺突文を施す。下川津Ｂ類。1356は摩滅が進むが、1353と同じ様なタイプであろう。1359は口縁端部を上方へやや拡張する。下川津Ｂ類。1365は頸部の下部に沈線が１条残る。1360・1361・1372はやや小型品。1361は外面をハケで、1360と1372は外面をヘラミガキで調整する。1372は体部中程に焼成後の穿孔がみられる。1350・1362～1364・1366～1370は短めの頸部から口縁部が広がる広口壺。概ね外面は縦ハケ、内面は頸部は指押さえまたはナデ、体部はヘラ削りである。1369・1370は小型のもの。1369は口縁部が欠損するが、同様の器形になると考えられる。体部の中央部が張り、平底を持つ。1370は体部外面をヘラミガキで仕上げる。1371は壺の体部。内面はハケ調整、外面はハケの後ヘラミガキする。1373～1382は甕。1373は体部中程に列点文を巡らせる。口縁端部外側に剥離痕跡があり、ここに口縁を付けてＬ字状にしていたと考えられる。弥生時代中期初頭。1374・1375・1378・1379は口縁部と体部の境が強く屈曲するもの。外面はハケ、内面はヘラ削りする。口縁端部を上方へ拡張するもの（1374・1379)、四角くするもの（1375・1378）がある。1376・1377・1380・1381は口縁部が緩くカーブしながら立ち上がる。外面はハケ、内面は1376は上半部を指押さえ、下半部をヘラ削り、1380は上半部を横方向のハケ、下半部をヘラ削りする。1377は頸部のようなものが付く。口縁部はガタガタで、体部も部分的にハケで調整した後余分な粘土を掻き取るように板ナデをする。1382は口頸部に穿孔するもの。残存部分で３孔１組の穿孔が一個所に残る。外面と内面下半部にヘラミガキし、底部は平底にする。1383は蓋。２孔１対の穿孔が概ね対角線上に２個所につく。摩滅が著しく、調整は不明。1384～1395は高坏。1384～1387は杯部。いずれもヘラミガキを密に施すが、内外面とも縦・放射状にヘラミガキするもの（1384・1386)、内面は横／放射状（1385・1387)、外面は分割ミガキ（1385)、横／放射状ミガキ（1387）のものがある。1384は口縁端部内面にわずかに段を持ち、内面の口縁部と底部の境の屈曲部分に沈線を



第178図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物⑫(１／４)

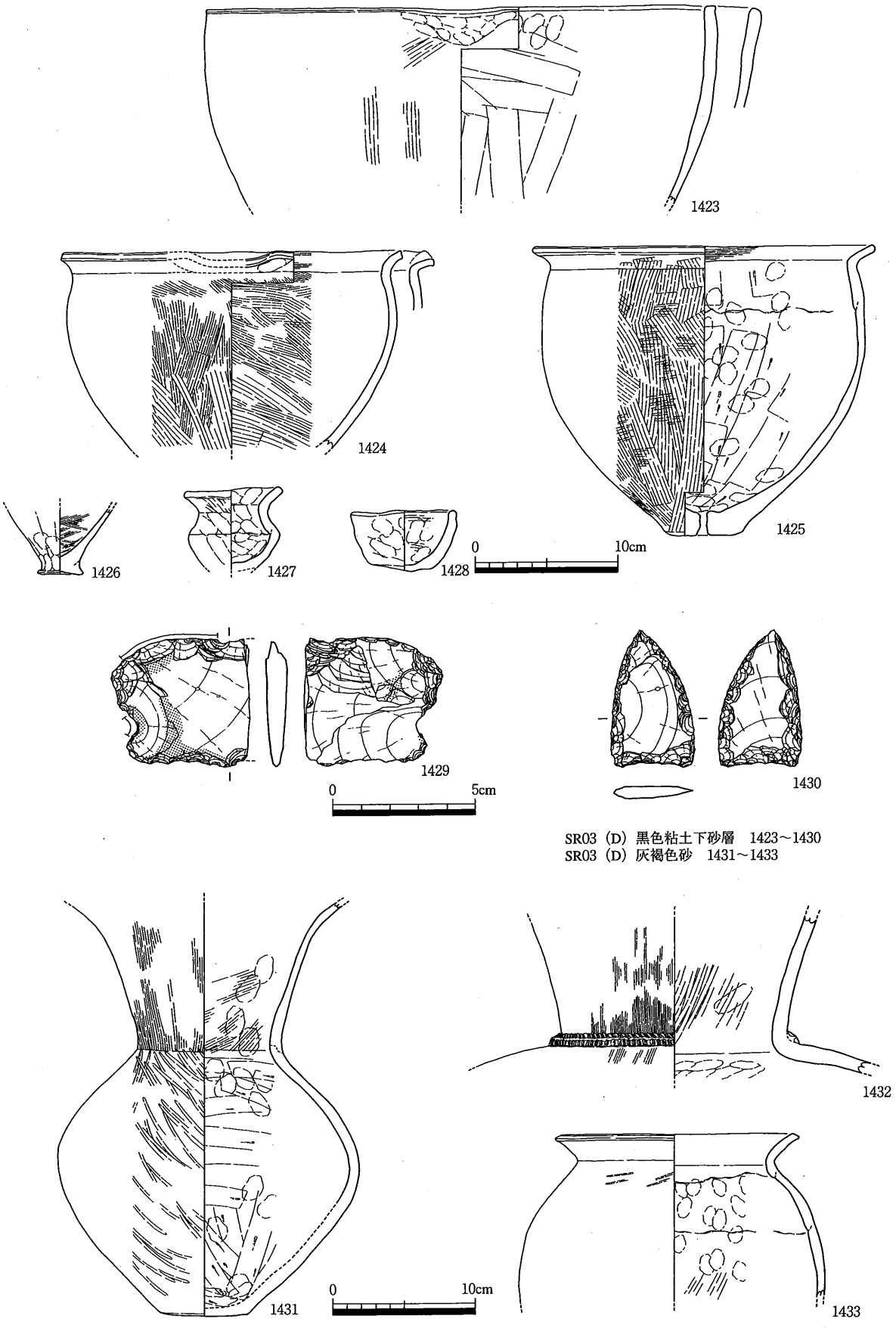


第179図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物⒀(１／４)



SR03（D）黒色粘土下砂層　1403～1422

第180図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物⒁(１／４)



第181図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物⑮(１／４、１／２)

持つ。1388・1389は杯部の底部内外面に放射状のヘラミガキを施すものと考えられ、脚部はおそらく縦方向にヘラミガキをする。1388は杯部に脚部を押し付けた様な接合痕跡が脚部と杯部の境に残る。杯部の外側中央部付近（脚部に隠れる場所）には深い円形の窪みがある。1389は脚部にほぼ均等に4個所に穿孔を施す。1391は脚部端部を大きく拡張させ、脚部はやや膨らみながら内面をヘラ削りして薄くする。穿孔は上段4個所、下段1個所に残り、上・下段の穿孔はほぼ直線上にあける。おそらく上下2段に4孔ずつ穿孔があったのだろう。一番くびれた部分に底部が充填されていたと考えられるが、その痕跡には残らない。1392・1395は脚部筒部に縦方向のヘラミガキをし、1395は杯部に放射状のヘラミガキを残す。脚部にはほぼ均等に4孔の穿孔を入れる。1396～1424は鉢。1396は口縁端部を平らにし、外面に凹線を3条施す。弥生時代中期後半。1397～1399・1403～1405は口縁端部が外側へ屈曲するもの。1397はやや胴が張り、甕を浅くしたような器形。1398は口径37cm前後になる大型の鉢。内外面ともにハケの後ヘラミガキする。1403～1405は口径20cm前後のもの。外面には密なヘラミガキ、内面にもやや粗な縦方向のヘラミガキをする。1400～1402・1406～1409は椀形のもの。1400・1401は口径20～24cm前後の椀形の鉢。1400は外面を縦方向のハケ、内面を横方向のハケを、1401は内外面にヘラミガキをする。1400は体部に粘土の継ぎ目がある。1406～1408は口径13cm前後の椀形の鉢。1406・1407は指押さえやナデ以外の調整痕跡はほとんど観察できず、1406は外面にクラックを顕著に残し、底部は押し潰すようにして作る。1408は外面はタタキ後ハケで調整する。1410～1413は口径9cm前後、器高7～9cmとやや深めのもの。口縁部は椀形のもの（1410・1411）と口縁端部を外側へ屈曲させるもの（1412・1413）がある。1413が外面にハケ調整を残すほかは、あまり調整痕跡がない。1411は外面にクラックが目立つ。1412は黒色粘土層との接合資料である。1414～1416は口径8～9cm、器高6cm程度の小型のもの。1416は底径と口径のあまり差のない器形。1417～1419は脚付の鉢。1420は口縁端部は屈曲せず、2孔の穿孔がある。穿孔の周囲は指押さえ痕跡が顕著に残る。1421はやや大型と思われる鉢。口縁端部を屈曲させ、内外面ともヘラミガキを密にする。内面には赤色顔料（水銀朱）がべっとり付着する。1422～1424は片口鉢。1422・1424は口縁端部を折り曲げるもので、内外面ともハケで仕上げる。1424は上半と下半ではハケの原体を変えている。1423は口縁端部をまっすぐに終わらせるもの。1425は甑。1426は製塩土器。1427・1428はミニチュア土器。指押さえの凹凸が顕著で口縁部はガタガタである。1429は石庖丁。半分は欠損。表面・刃部が磨滅する。1430は石鏃。平基式。ともにサヌカイト製。

この層位から出土した土器は概ね弥生時代後期前半～中葉頃が主である。

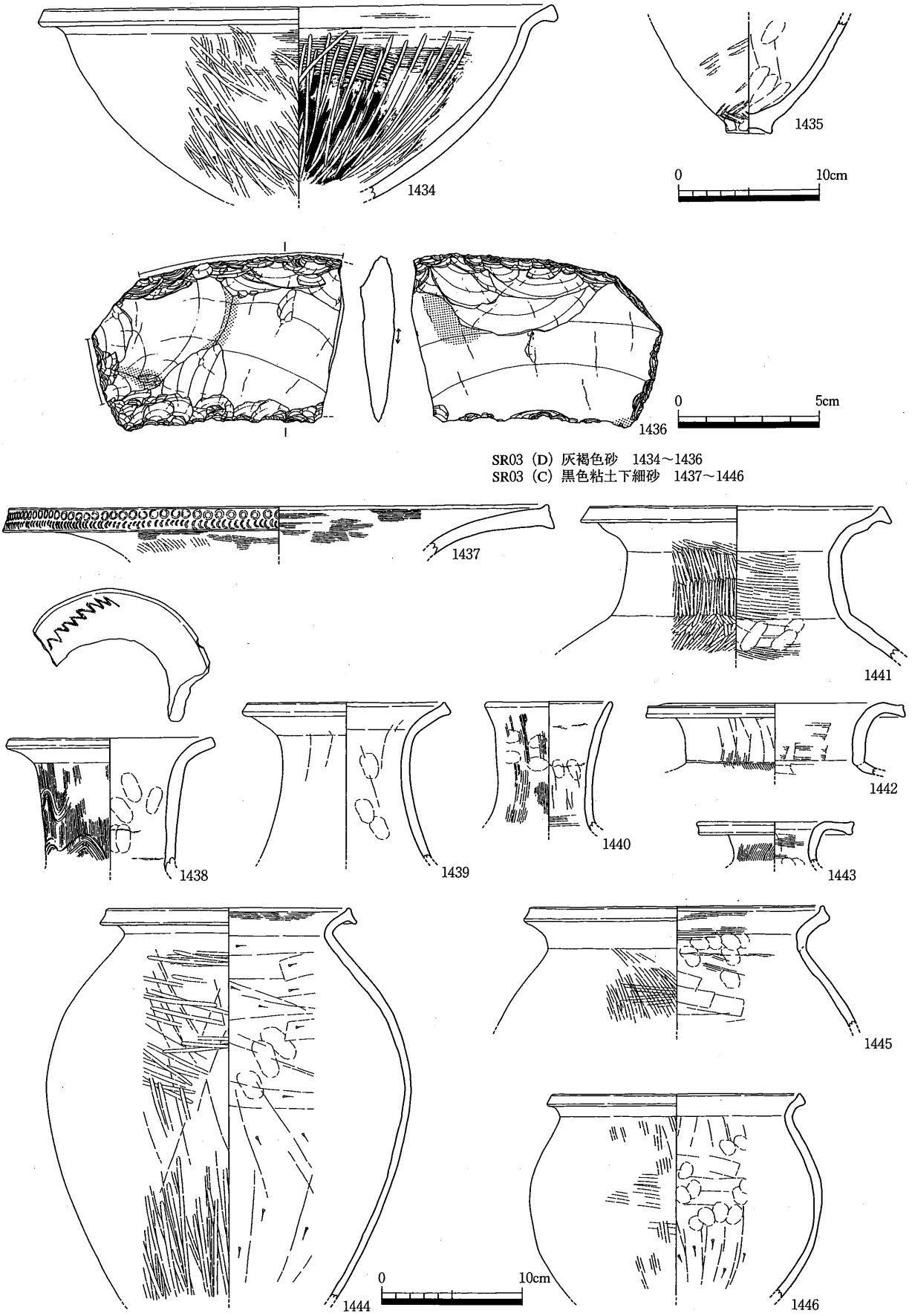
ＳＲ03（Ｄ）灰褐色砂（第181・182図、図版64・65・83）

ＳＲ03Ｄ部分（6区①北）の東肩付近で検出した層位である。検出した範囲は狭い。黒色粘土の下部に堆積する。この層が認められる場所では黒色粘土下に堆積する青灰色砂層の上層に堆積するが、基本的には青灰色砂層と同一層位と思われる。

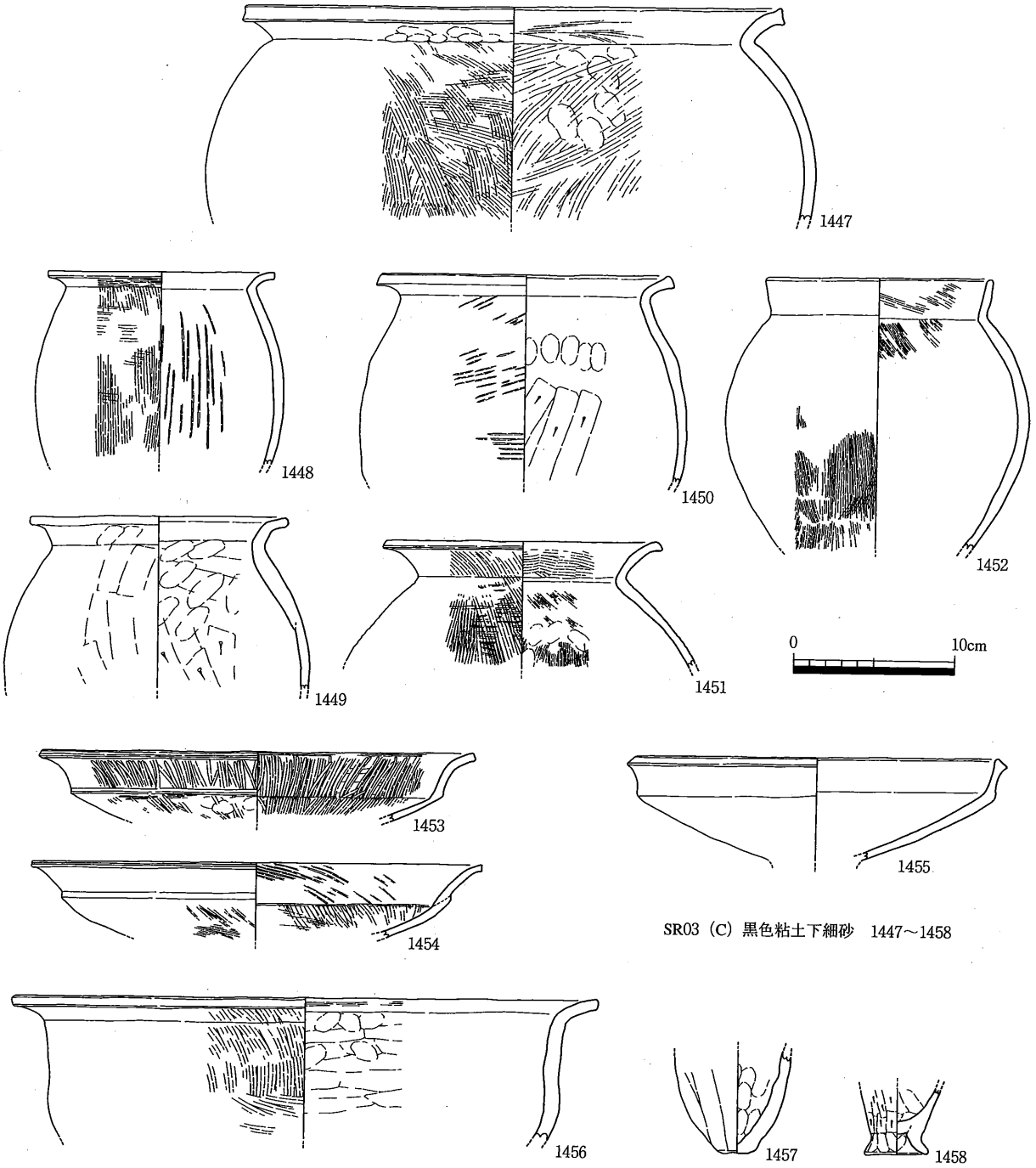
1431～1435は弥生土器。1431・1432は壺。1431は長めの頸部に緩やかに開く口縁部を持つ。外面は頸部はハケ、体部はヘラミガキする。1432は頸部に突帯を貼り付け、そこに2段の刻みを付ける。1433は甕。1434・1435は鉢。1434は口縁部を外側へ屈曲させる器形で、外面は密なヘラミガキ、内面はハケの後やや粗なヘラミガキをする。内面には赤色顔料（水銀朱）が付着する。1436はスクレイパー。上縁と側縁を潰し、下縁に刃部を付ける。サヌカイト製。

ＳＲ03（Ｃ）黒色粘土下細砂（第182・183図、図版65）

ＳＲ03Ｃ部分（6区①南）で検出した層位である。黒色粘土の下部、砂層の上部に厚さ10cm程度堆積



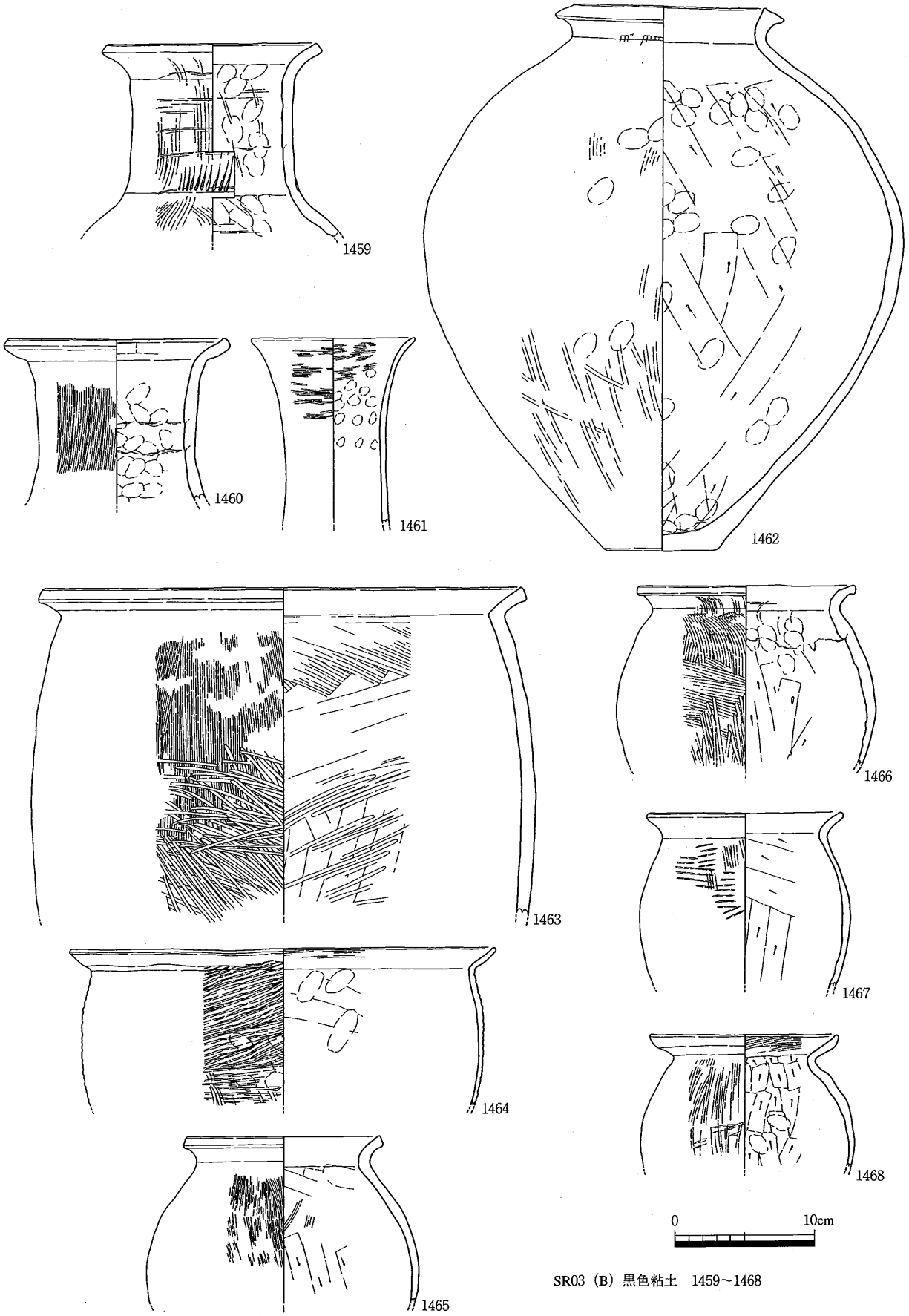
第182図　ＳＲ03(Ｄ・Ｃ)出土遺物⑯(１／４、１／２)



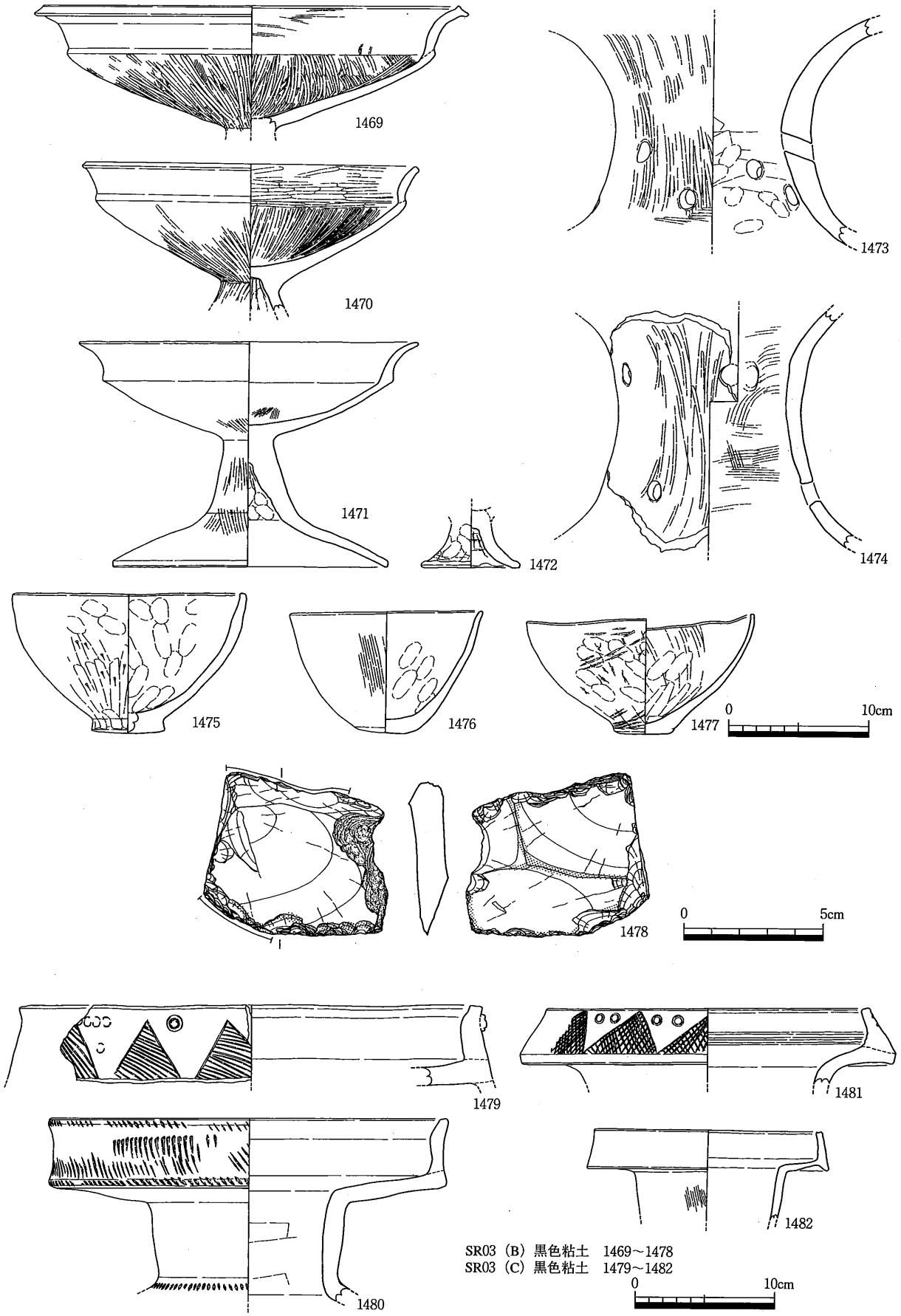
第183図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(17)(１／４)

する。基本的な層位は黒色粘土層と同一と考えられる。

1437～1443は壺。1437は大きく開く口縁部で直立または外傾するやや短めの頸部が付くと考えられる。口縁端部には上部に竹管文、下部に半裁竹管文が連続的にスタンプされる。1243と同一個体と考えられる。1438・1439は長い頸部に口縁部が開くもの。1438は頸部に波状文が２段に施され、口縁部内側にも部分的に波状文が施される。1440は頸部はほぼ直立する長めの頸部で、口縁端部はほとんど開かない。1441～1443はほぼ直立する短めの頸部に口縁端部が大きく開く器形。外面は縦方向のヘラミガキ（1441）またはハケ（1442・1443）、内面は横方向のハケをする。1444～1452は甕。1444は口縁端部に面を持ち、外面はヘラミガキ、内面はヘラ削りする。1448は内面にヘラ状の圧痕が縦方向に数条みられる。1451は



第184図　ＳＲ03(Ｂ)出土遺物⒅(１／４)



第185図　ＳＲ03(Ｂ・Ｃ)出土遺物(19)(１／４、１／２)

口縁部がやや長めのもので、やや後出するもの。1452は口縁部が直立するもの。ほぼ球形の体部で内外面ともハケで仕上げる。1453～1455は高坏。1453・1454は内外面に概ね縦方向のヘラミガキを施す。1455は杯部の口縁部がほぼ直立して立ち上がり、端部は面を持つ。1456・1457は鉢。1456は口縁部が外側へ屈曲し、体部は真下に下がる。1458は製塩土器。外面はヘラ削りする。

ＳＲ03（Ｂ）黒色粘土（第184・185図、図版65）

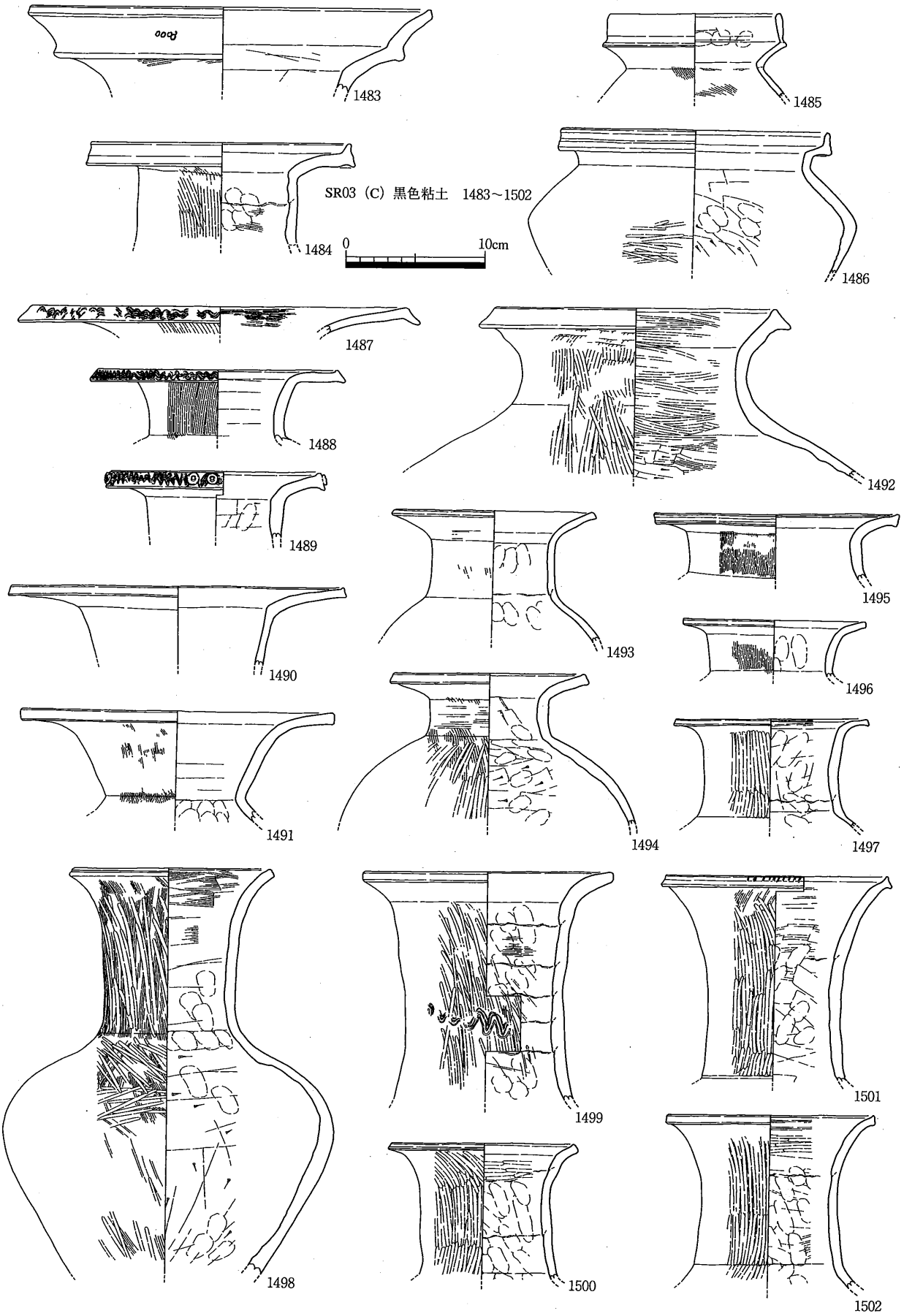
ＳＲ03Ｂ部分（６区②南）の北西隅で検出した層位である。ＳＲ02に連続する層位とも考えられるが、幅は広くても10m程度と狭い。この層位はＳＲ03Ｃ（６区①南）・Ｄ（６区①北）部分では広範な範囲で認められるものとなる。この層から出土した土器は全て弥生土器である。

1459～1461は壺。1459・1460は直立する長めの頸部から口縁部が開くもの。外面はハケ、内面は指押さえで粘土の継ぎ目痕跡が顕著に残る。1459は頸部の下端付近に部分的に縦方向のヘラ状の圧痕がある。1462～1468は甕。1462は大型のもの。口縁端部位は広めの面を持ち、外面下半部はヘラミガキ、内面はヘラ削りする。1463は内外面ともハケの後中位以下を丁寧にヘラミガキする。体部は丸みを持たない。弥生時代中期後半。1464は薄い作りで口縁端部まで叩き出して成形する。1466・1467は頸部の屈曲が弱く、口縁端部に面がある。外面はハケで、1466には下半部にヘラミガキが観察できる。内面は中位より下側をヘラ削りする。1467・1468は頸部がやや鋭く屈曲するもので、外面はタタキの後ハケ、内面は体部上位からヘラ削りをする。1469～1472は高坏。1469・1470は杯部内外面を放射状にヘラミガキし、1470は口縁部内面も横方向にヘラミガキする。1471は摩滅が著しいが、杯部内面にわずかに放射状と思われるヘラミガキが観察できる。1472は手捏ねと考えられる。杯部は欠損する。指押さえの凹凸が顕著で内面に絞り目が残る。1473・1474は器台。外面をヘラミガキし、内面は板ナデまたはハケを施す。1475～1477は鉢。いずれも椀形で、口径は14cm～17cmのもの。1475はしっかりした平底を持ち、外面はヘラ削りする。1477は外面にタタキ痕跡を残すが、クラックを多く残す。歪みが著しい。1478はスクレイパー。サヌカイト製。上縁と下縁の一部を潰している。

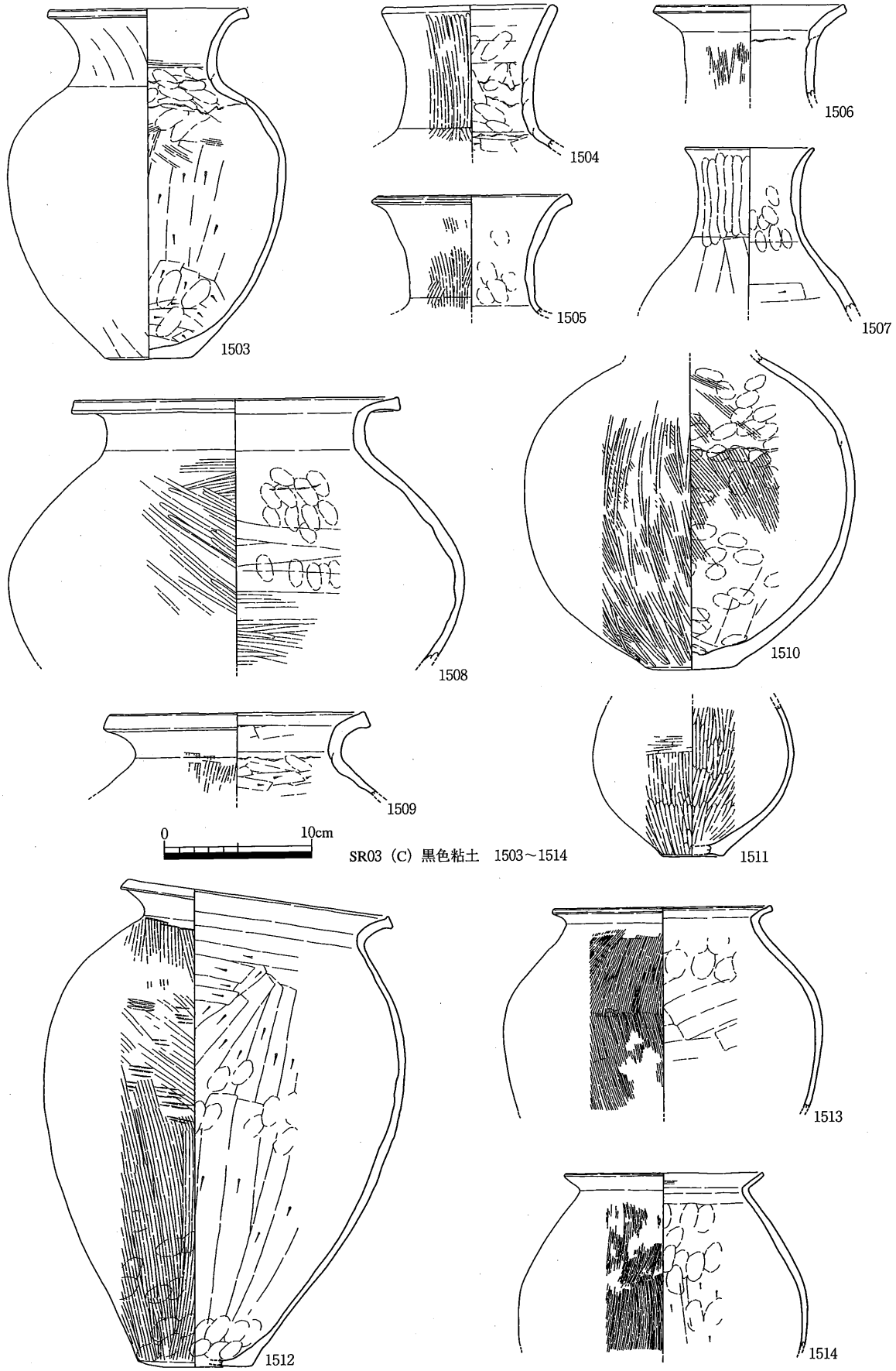
ＳＲ03（Ｃ）黒色粘土（第185～192図、図版66～69・85・86・91）

ＳＲ03Ｃ部分（６区①南）でほぼ全面で認められるものである。ＳＲ03Ｂ部分の北東隅から入り込み、ほぼ西半部で厚さ約50cmにわたって堆積していた。これはＳＲ03Ｄ部分（６区①北）に流れ、最後にはＳＲ02へ続くと考えられる。

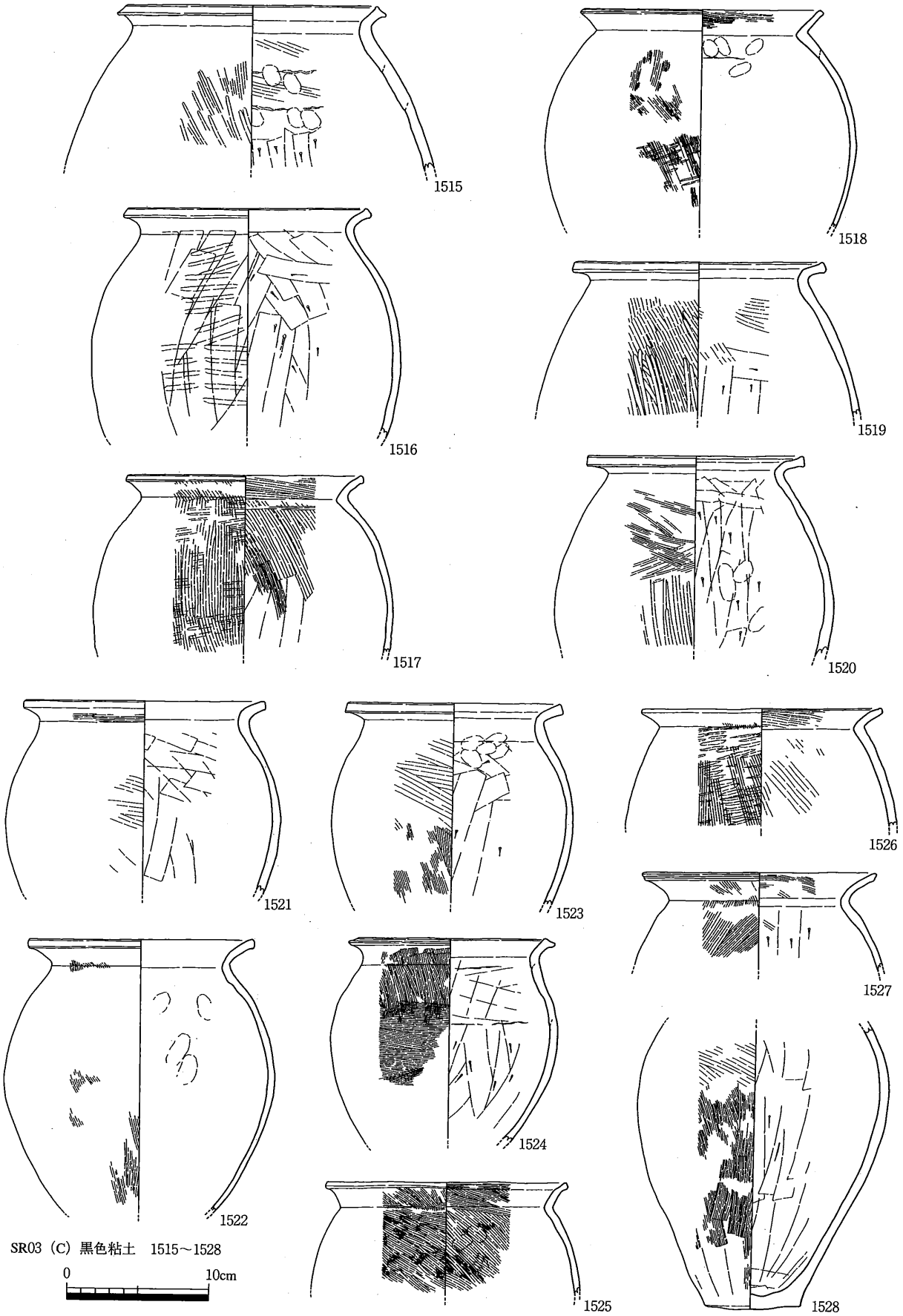
1479～1511は壺。1479～1483・1485は二重口縁壺。1479は口縁部に鋸歯文を飾り、その間には円形浮文や竹管文・薄い竹管文が施される。口縁部の下部にも粘土を貼り付けて拡張した痕跡がみられる1480は口縁部の上方と下方に刻み目を付け、頸部と体部の境にも刻み目を付ける。1481は内傾する口縁部に鋸歯文を描き、鋸歯文と鋸歯文の間に竹管文を２個ずつ施す。1486は算盤型の体部に短い直立する頸部が付く。口縁部は直立し、凹線が施される。体部には横方向のヘラミガキがある。1484・1487～1497は直立または外傾する頸部に大きく開く口縁部が付く。1484はやや長めの頸部で口縁端部は上下に拡張させる。1487は口縁部は大きく開き、口縁端部を下方へ大きく拡張させ、そこに波状文を施す。1488・1489は口縁端部に波状文を描き、1489には２個１単位の円形浮文を４ヶ所に張ると考えられる。1490・1491は頸部が外傾して立ち上がるもので、やや後出するもの。1492は大形の壺で頸部から上はハケ、下部は外面はヘラミガキ、内面はヘラ削りする。1497はやや長めの頸部を持ち、口縁部を短く鋭く屈曲させる。外面はヘラミガキする。1498～1507は長めの頸部から口縁部が緩やかに開くもの。1498～1502・1504では頸部に縦方向の密なヘラミガキが観察され、1505・1506ではハケが施される。1499は頸部中程



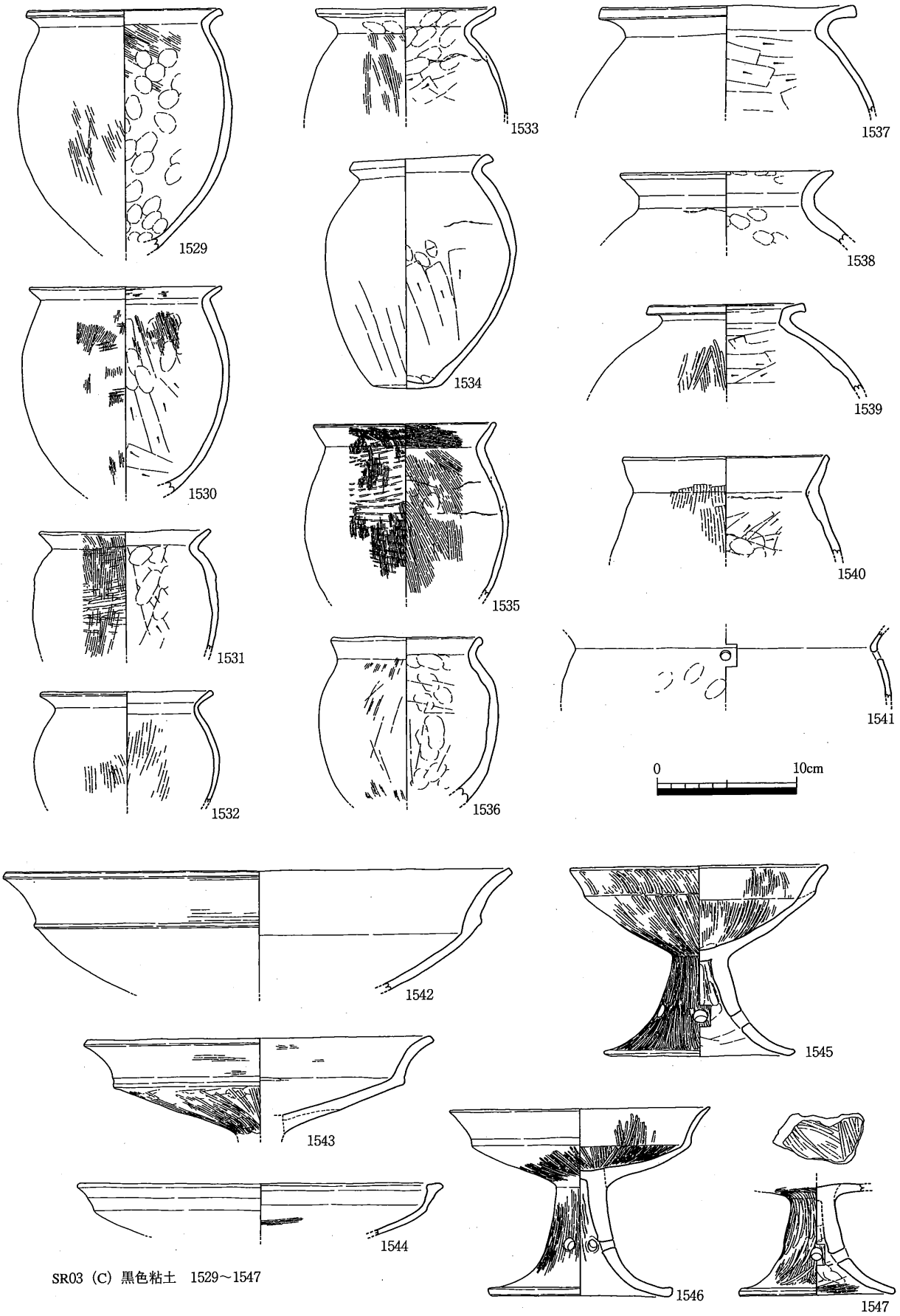
第186図　ＳＲ03（Ｃ）出土遺物⑳（１／４）



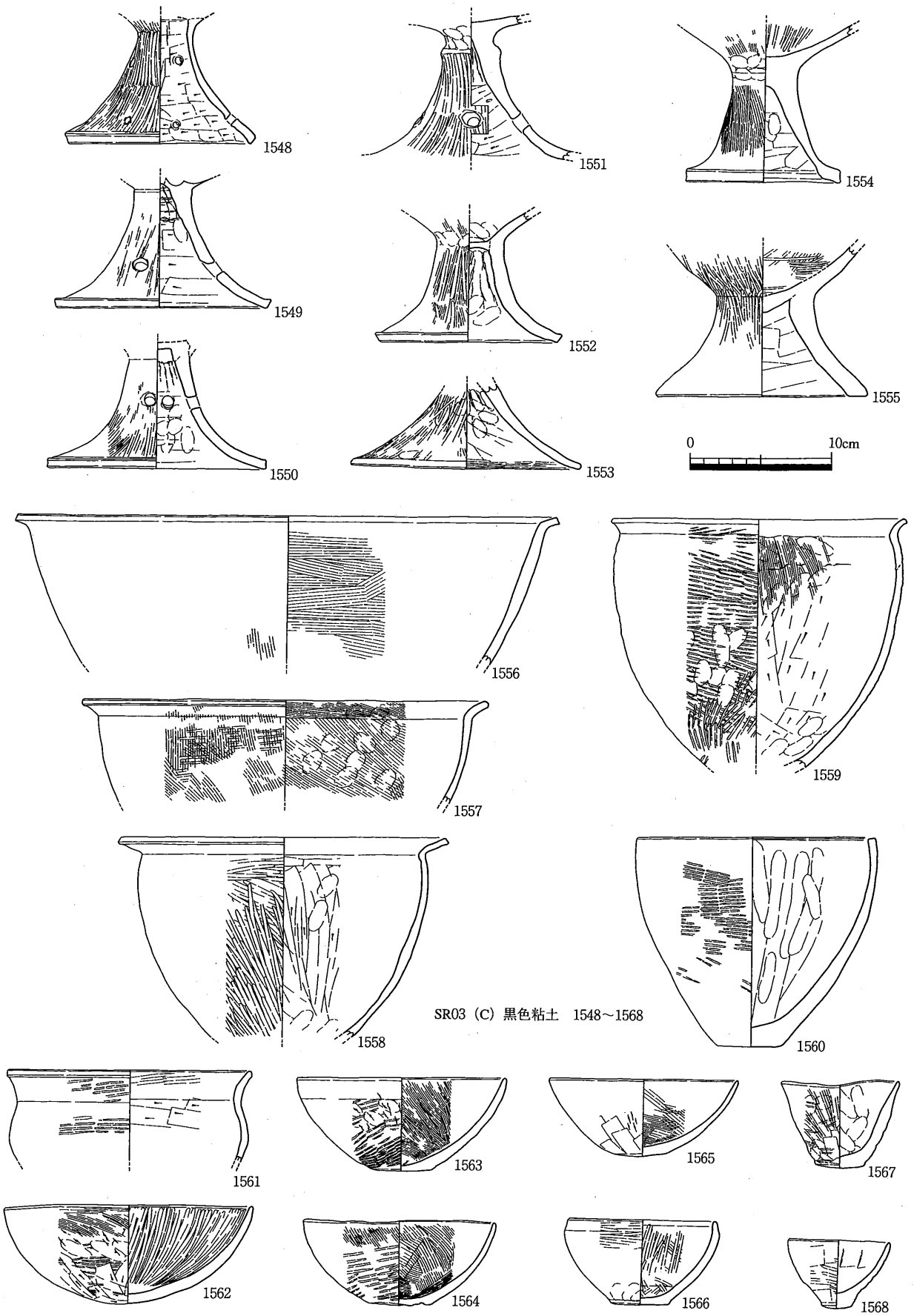
第187図　ＳＲ03（Ｃ）出土遺物(21)（１／４）



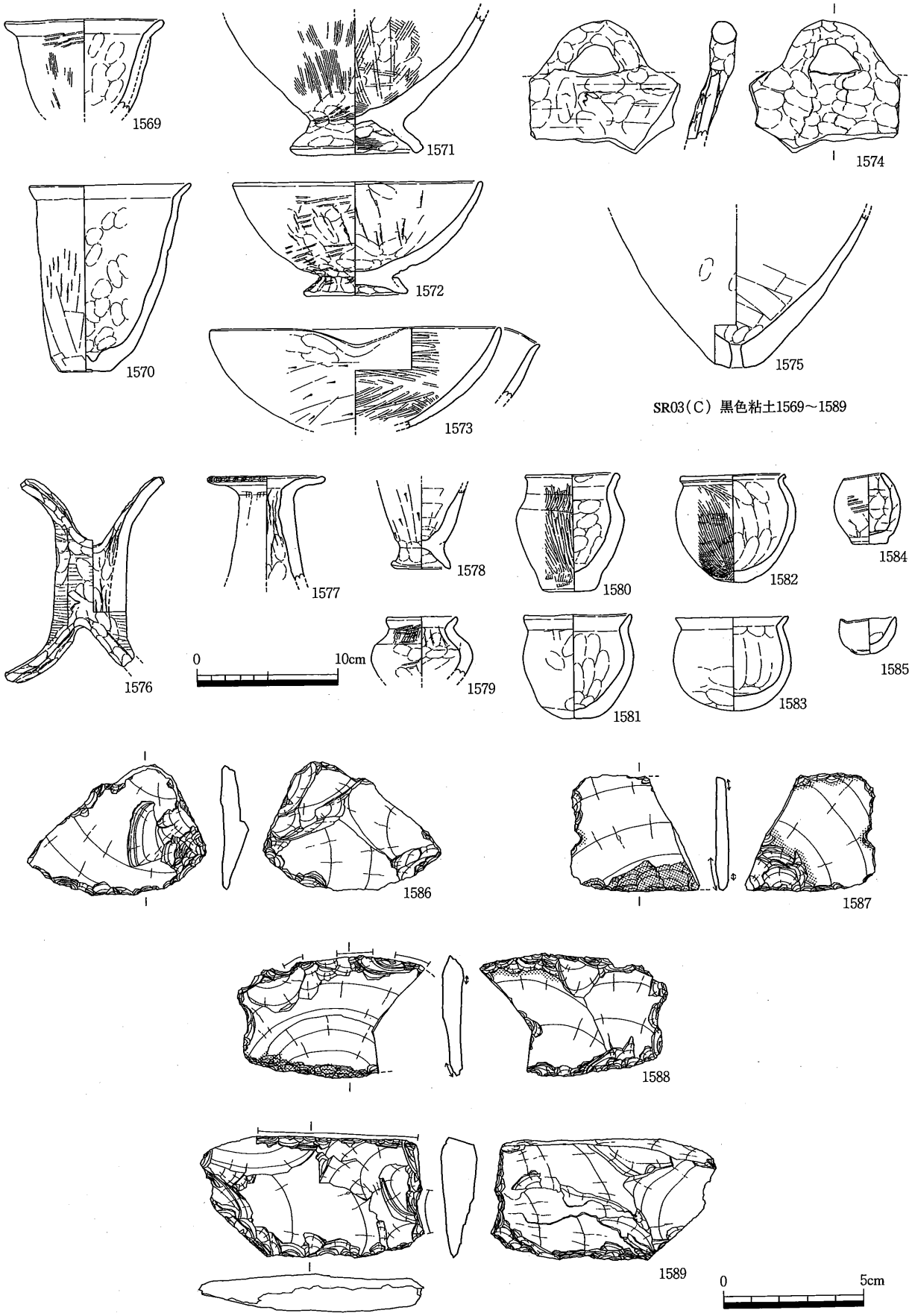
第188図　ＳＲ03（Ｃ）出土遺物㉒（１／４）



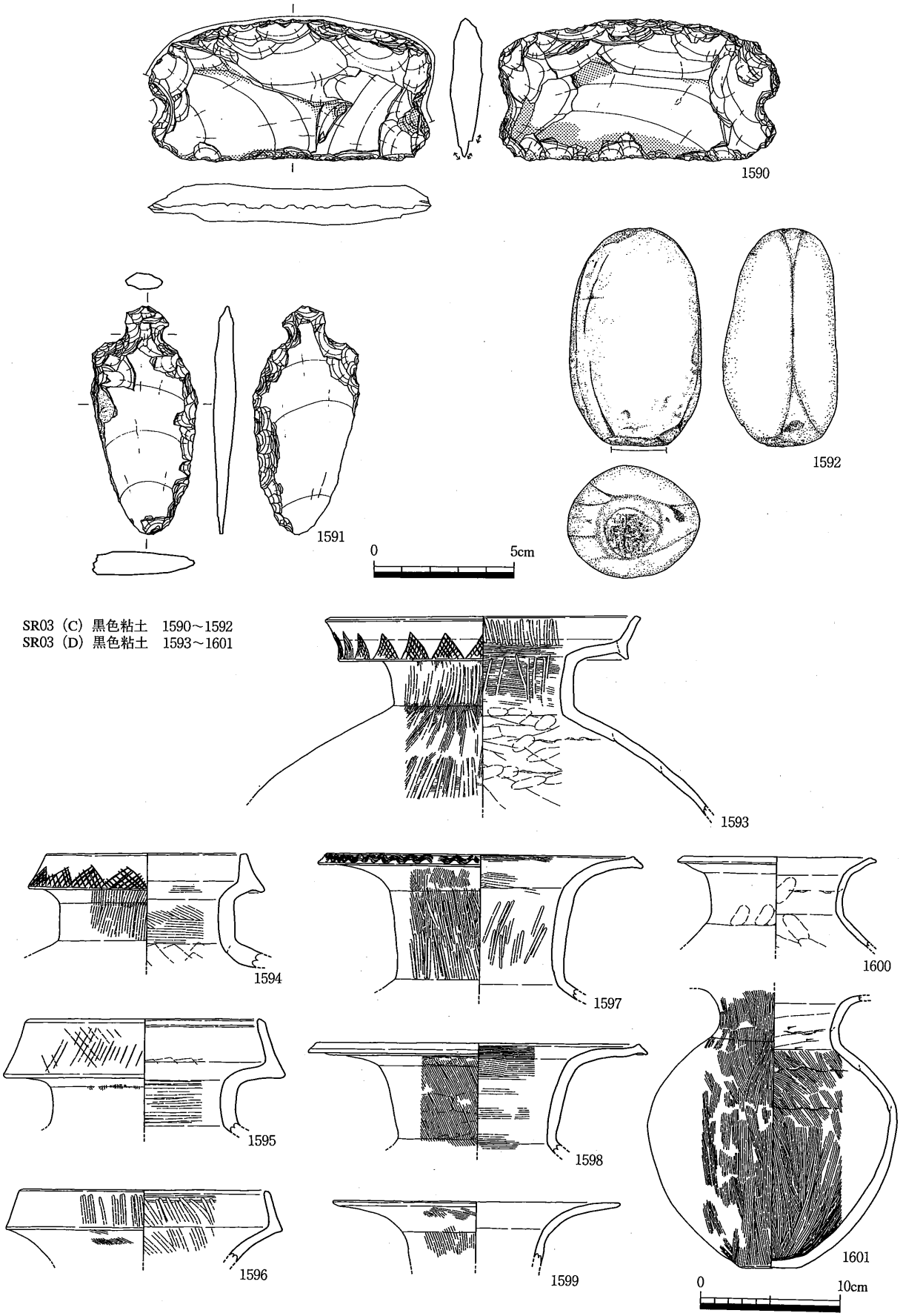
第189図　ＳＲ03（Ｃ）出土遺物㉓（１／４）



第190図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物㉔(１／４)

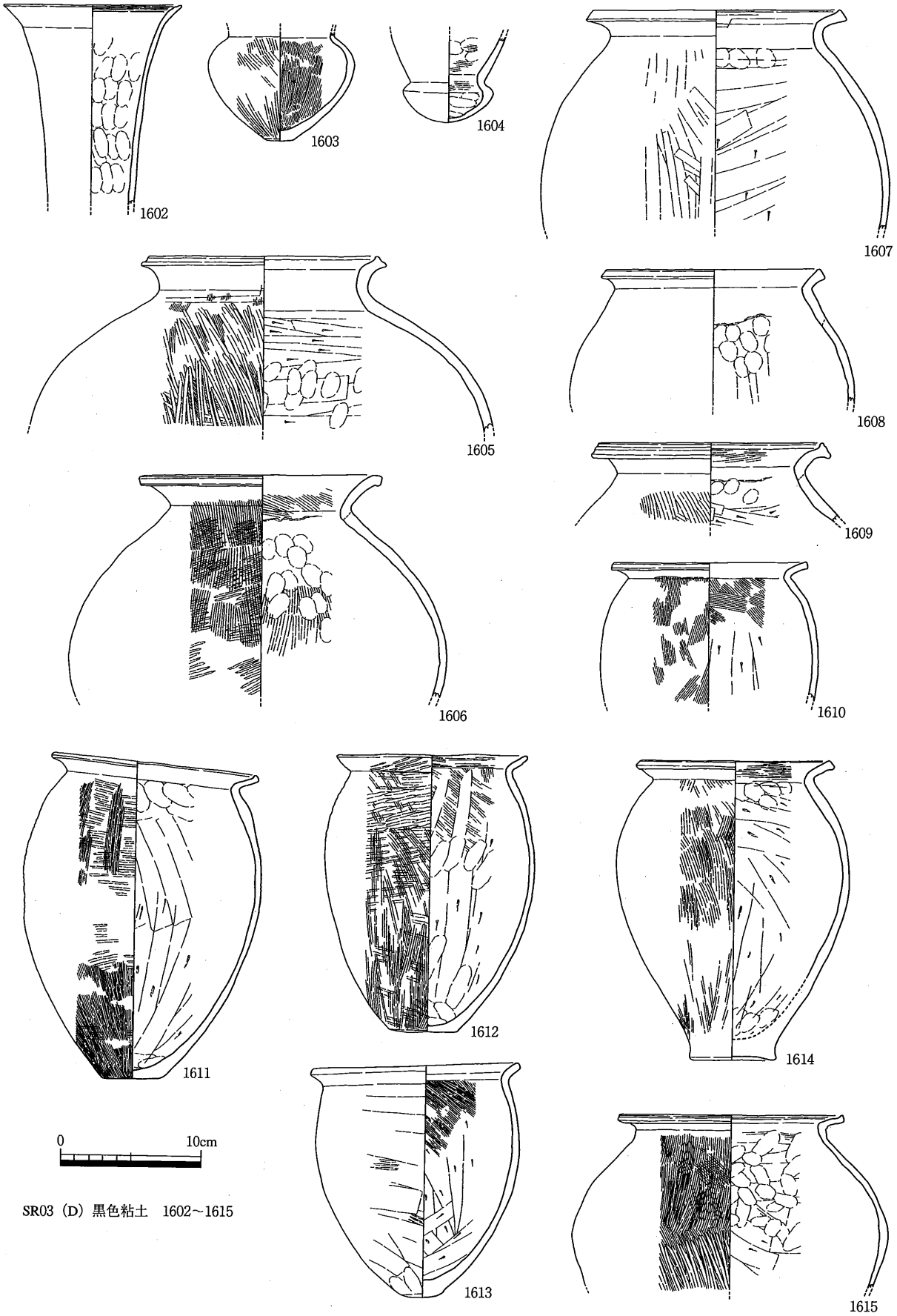


第191図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物㉕(１／４、１／２)



第192図　ＳＲ03(Ｃ・Ｄ)出土遺物㉖(１／４、１／２)

に一部に波状文が施される。1501では口縁端部に部分的に刻み目が入れられる。1508・1509は短い頸部で口縁端部が大きく開くもの。1510・1511は体部。球形に近い体部で退化気味の平底が付く。1510は外面に、1511は内外面に縦方向のヘラミガキがある。1512～1541は甕。1512は歪みが著しい。1513は下川津B類。1512・1515・1519・1520・1539は口縁端部に面を持つ。外面はハケの後ヘラミガキ、内面は上半部をハケ、下半部をヘラ削りするものと全体にヘラ削りするものがある。1539は頸部がやや長めで面を持つ。1524も口縁端部に面を持つが、やや小型で、外面はハケ調整だけである。1517・1518・1525・1526は頸部を鋭く屈曲させ、内外面にはハケを施す。外面にはハケ調整の前のタタキ調整が残るものもある。1527・1533はやや長めの口縁部を持つ。1528は底部。しっかりとした平底で、体部はあまり張らない。外面のハケは体部上半と体部下半では密度が異なり、ハケの原体が違うと考えられる。1529・1530は口縁部がやや短めで外面と内面の上半部はハケを施す。1531・1535は外面の口縁部までタタキ痕が残り、その後ハケで仕上げる。1541は摩滅が著しい。頸部に1ヶ所穿孔されている。1542～1555は高坏。1542・1543は口縁端部に面を持つ。ともに摩滅するが、1542は口縁部外面に横方向のヘラミガキ、1543は口縁部内外面に横方向のヘラミガキ、底部外面に放射状のヘラミガキがある。1544は口縁端部がほぼ水平で面を持つもの。弥生時代後期前半。1545・1546は口縁端部は丸く、杯部のヘラミガキは体部・底部とも放射状を呈する。脚部はともに4孔の穿孔があり、内面は絞り目を残すのみ、外面は1545は縦方向の密なヘラミガキ、1546はハケが観察できる。1545は口縁端部は厚く、口縁部と底部の屈曲は緩い。1547は杯部はほとんど残らないが、外面には放射状のヘラミガキが、内面には2方向程度のヘラミガキが観察できる。脚部はハケの後、縦方向の2段のヘラミガキを施し、4ヶ所に穿孔する。1548は端部が内傾する脚部で、上段2ヶ所、下段4ヶ所、合計6ヶ所に穿孔し、外面は縦方向に2段のヘラミガキ、内面は横方向にヘラ削りする。杯部外面にもわずかに縦方向のヘラミガキが確認できる。1549・1550は外面に縦方向のハケ、内面には横方向のヘラ削りがある。脚部には1594には3ヶ所、1550には4ヶ所に穿孔が認められる。1551は脚部と杯部の境が極端にくびれ、指頭痕が顕著に残る。この部分には本来接合粘土があったと考えられる。1552・1554はやや寸胴気味の脚部にやや深めの杯部が付くと考えられる。ともに脚部外面はハケで、1552には粗いヘラミガキが観察できる。杯部外面にもわずかにハケが観察でき、1554は内面に放射状とみられるヘラミガキがある。1552には底部を充填した様子が窺える。1555は弥生時代中期後半。1556～1574は鉢。1556～1559は口縁端部が屈曲するもの。体部が直線的で浅めの器形から、体部に丸みを持ち、深めの器形がある。1560は椀形で深めの器形。外面にはタタキ痕が残る。1562～1566は椀形の器形。内面は右下から左上へのハケ、または縦方向のヘラミガキ、外面はタタキだけ（1563）、タタキの後ハケ（1563・1564）で、やや大きめの1562は底部をヘラ削りする。1563・1565は外面にクラックが残る。1566はしっかりした平底で口縁はやや内傾気味に付く。外面は横方向のヘラミガキである。1567・1568は小型で作りが粗く、歪みがある。外面にはタタキ痕が残り、1567はその後にハケを施す。1569・1570は口縁端部を外傾させるもので、作りが粗く、歪みが著しい。1570は外面にクラックが顕著に残り、底部内面は窪んでいる。1571・1572は台付鉢。1571は外面の底部と脚部の境付近にタタキ痕が残る。1572は外面杯部から脚部にかけてタタキ痕が残り、全体に叩き出した様子が分かる。外面にはクラックが顕著に残り、内面は右から左へ板ナデした際の圧痕が残る。1573は片口鉢。外面はヘラ削り、内面はヘラミガキする。1574は把手の付く鉢。残存部分では全面に指押さえ痕跡が残る。1575は甑。1576・1577は支脚。1576は上部・下部ともに二股に分かれたXの様な器形で、中空、外面全体にタタキ痕が残る。1577は下部に対して上方がややすぼまり気味の器形で、端部が大きく開く



SR03（D）黒色粘土　1602～1615

第193図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物㉗(１／４)

もの。下部は緩やかに広がる。端部には刻み目が付く。1578は製塩土器。体部外面全体に縦方向にヘラ削りする。1579～1585はミニチュア土器。1579は厚めの体部で外面にはタタキやハケの痕跡が残るが、調整はしっかりは行われず、指押さえ痕跡がよく残る。1580は外面全体に縦方向のヘラミガキを施す。厚手で歪みがある。1581・1583は指押さえでのみ調整する。1584・1585はごく簡単な作りである。1584はわずかにタタキ痕があるが、内面に粘土の継ぎ目を明瞭に残し、指押さえも雑である。1585は口縁部もガタガタで、ほとんど成形痕がない。1586・1587はスクレイパー。1588～1590は石庖丁。いずれも上縁部から側縁部を潰している。1590はほぼ完形。1591は石匙。片面には刃部の加工が施されていない。1592は叩き石。下部に敲打痕が顕著に残る。花崗岩製。

ＳＲ03（Ｄ）黒色粘土（第192～194図、図版69～71・86）

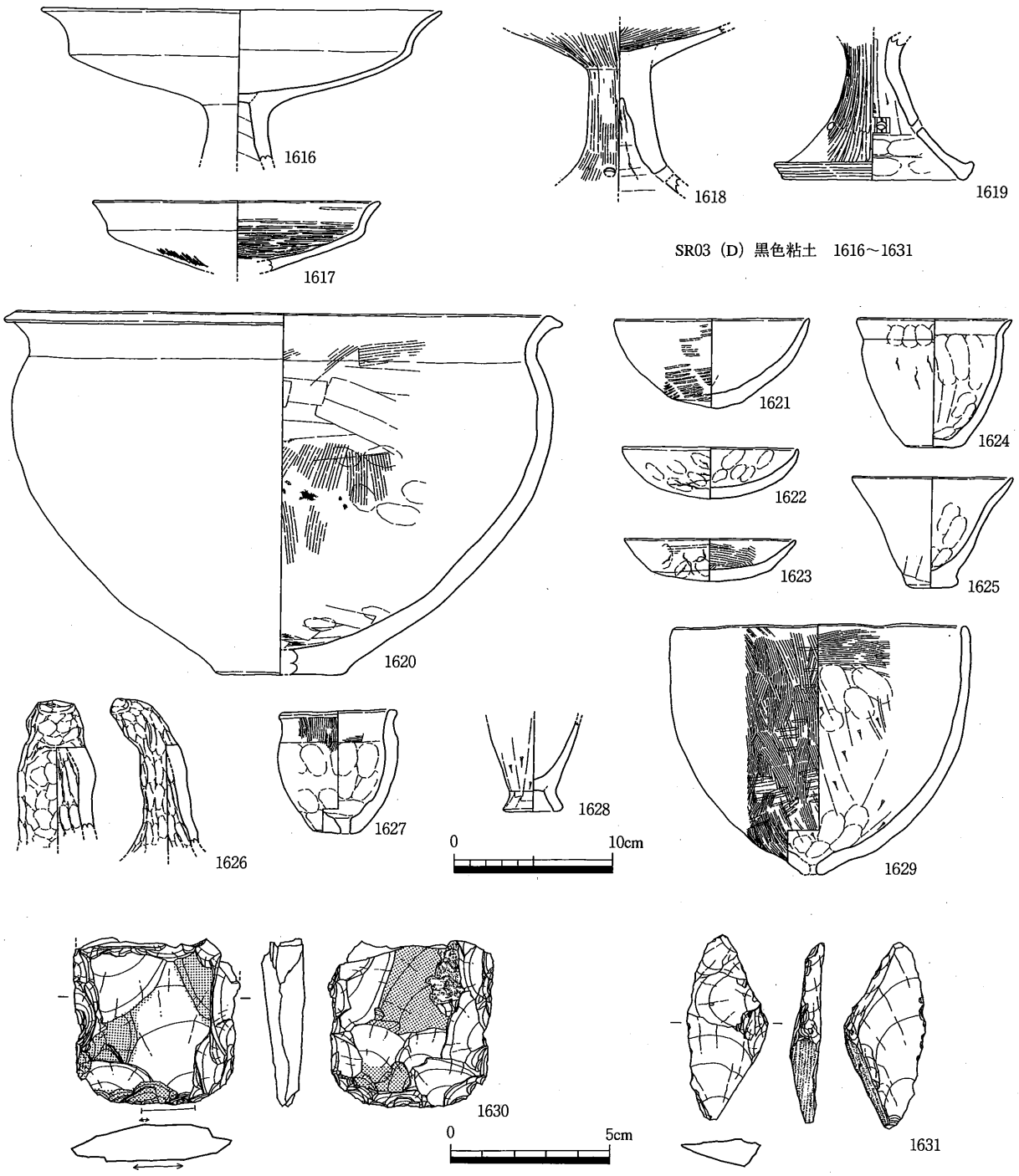
ＳＲ03Ｄ部分（６区①北）で検出した黒色粘土層である。南側からＳＲ03全体に広がって流れ込み、畔ＳＲ03（Ｄ）－１では厚さ20㎝程度、おもに黒褐色・暗褐色砂混じり粘土層が堆積し、北東へ向くが、畔から北側では黒色粘土層の堆積はほとんどみられず、南東隅部分ではＳＲ03自体が上がる。黒色粘土の堆積はＳＲ03部分の南半部で１度なくなるようだ。

1593～1604は壺。1593～1596は二重口縁壺。1593・1594は口縁部外面に鋸歯文を施す。頸部外面は縦方向のハケ、内面は横方向のハケで、1593には縦方向の粗いヘラミガキがある。1593は二重口縁の立ち上がりを外側へ付ける。1597～1599は直立から外傾する頸部に大きく開く口縁部を持つ。1597は口縁端部に波状文を施す。1600・1601はやや短めの口頸部に開く口縁部が付く器形。1601では丸い体部に平底を付ける。1602は細頸壺。下川津Ｂ類。1603は小型の壺で、内外面にハケを残す。1604は小型丸底壺。底部の形骸化はあまり進んでいない。内面には横方向のハケが残る。下川津Ｂ類。1605～1615は甕。1605・1607・1609はやや広めの口縁端部を持ち、頸部の屈曲は緩い。外面はハケまたは板ナデで、1605はその後ヘラミガキを施す。内面は横方向のヘラ削りまたは板ナデをする。1606はやや長めの口縁部を持つ。1610～1614は概ね口縁部をくの字に屈曲させ、外面にはタタキ痕とハケ、またはハケの痕跡を残す。底部は平底を呈す。内面は頸部や体部上半部にハケを施すものが多い。1615は下川津Ｂ類。1616～1619は高坏。1616は底部を充填した様子が窺える。1616には、摩滅が進むものの、杯部外面に放射状、内面には分割と思われるヘラミガキがあり、1618には杯部内外面とも放射状のヘラミガキがある。脚部には３ヶ所の穿孔がみられる。1619は脚部端面に２条の沈線がみられ、ほぼ均等に５ヶ所に穿孔がある。1620～1625は鉢。1620は大型で口縁部が外側へ屈曲する器形。底部は平底。1621～1623は椀形のもの。1622・1623は浅く、外面の整形はほとんどせず、クラックが入る。1624は口縁部外面を屈曲させるもの。ほとんど成形痕が観察されず、内面には緩い指押さえ痕が、外面にはクラックが残る。1625はまっすぐの口縁部にしっかりした平底で、あまり調整痕を残さない。1626は支脚。下部は欠損するが、ラッパ状の形態になると考えられる。上部は一方へ緩く折り曲げられ、中空である。内外面には指押さえ痕が顕著に残る。1627は底部に穿孔する。1628は製塩土器。外面にはヘラ削り痕跡を残す。1629は甑。底部は完存しないが、孔は１つと考えられる。1630は打製石斧。1631は翼状剥片。いずれもサヌカイト。

遺物の時期は弥生時代後期前半頃のものも出土するが、終末期のものが目立つようになる。

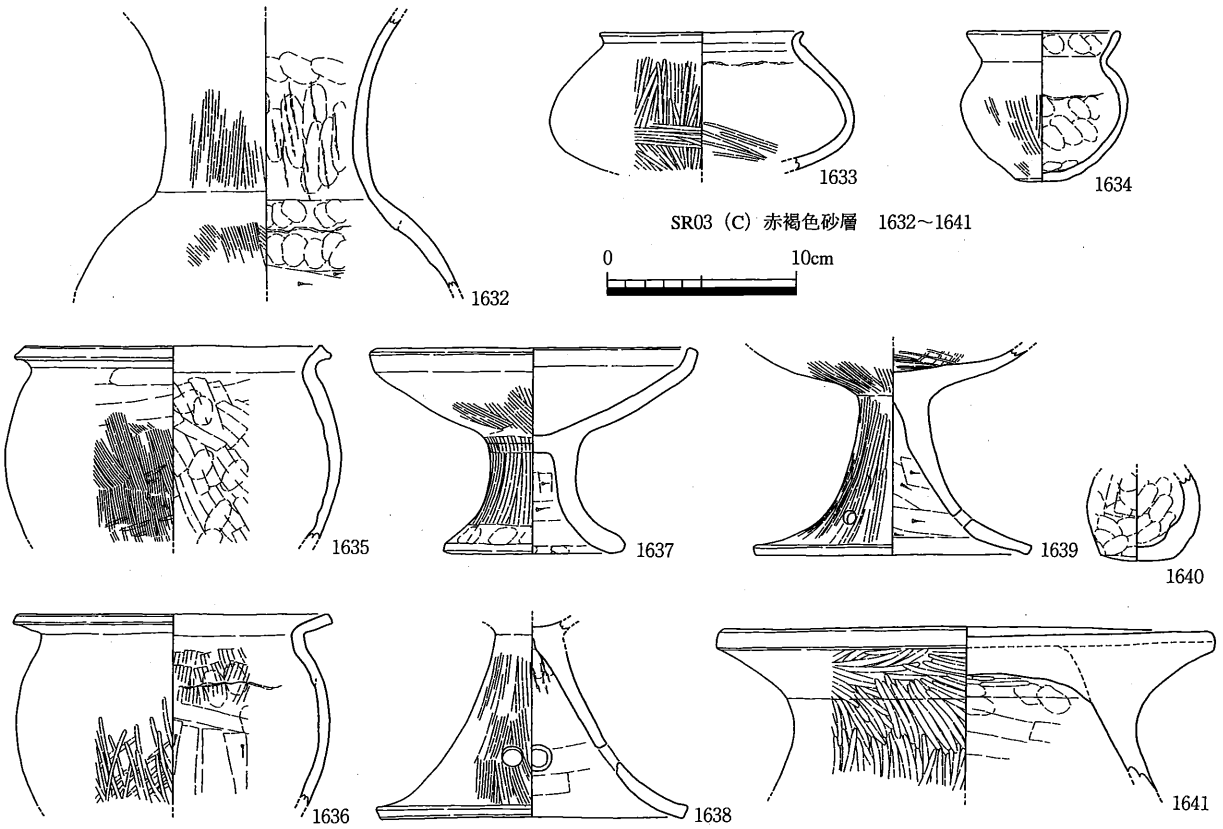
ＳＲ03（Ｃ）赤褐色砂層（第195図、図版72）

ＳＲ03Ｃ部分（６区①南）で検出した部分的な層位で、畦ＳＲ03（Ｃ）でしか検出していない。黒色粘土の下部に堆積する砂層を切っており、黒色粘土の上の暗灰色粘土の下部に堆積する。黒色粘土との前後関係は明らかではないが、黒色粘土下砂層と同じ範疇のものかもしれない。



第194図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物㉘(１／４、１／２)

1632～1634は壺。1632は直立する長めの頸部で、開く口縁部が付くと思われる。1633は算盤型の体部に短い口縁部が着く。外面はていねいに磨く。1635・1636は甕。口縁端部は四角くし、内面はヘラ削り、外面はハケ（1635）やヘラミガキ（1636）で仕上げる。1637～1639は高坏。1637は厚手で杯部の口縁部は短くほぼまっすぐに立ち上がる。脚部内面は横方向にヘラ削りする。1638は脚部上端付近に剥離痕が残り、ここから杯部が付いたと思われる。脚部にはほぼ均等に４孔の穿孔がある。孔の内側は焼成後に打ち欠いて割ったようで少しきたない。1639は杯の外面を放射状の、内面を横方向分割ヘラミガキし、脚部の内面は横方向にヘラ削りする。脚部には３孔の穿孔がほぼ均等に配される。1640はミニチュア土



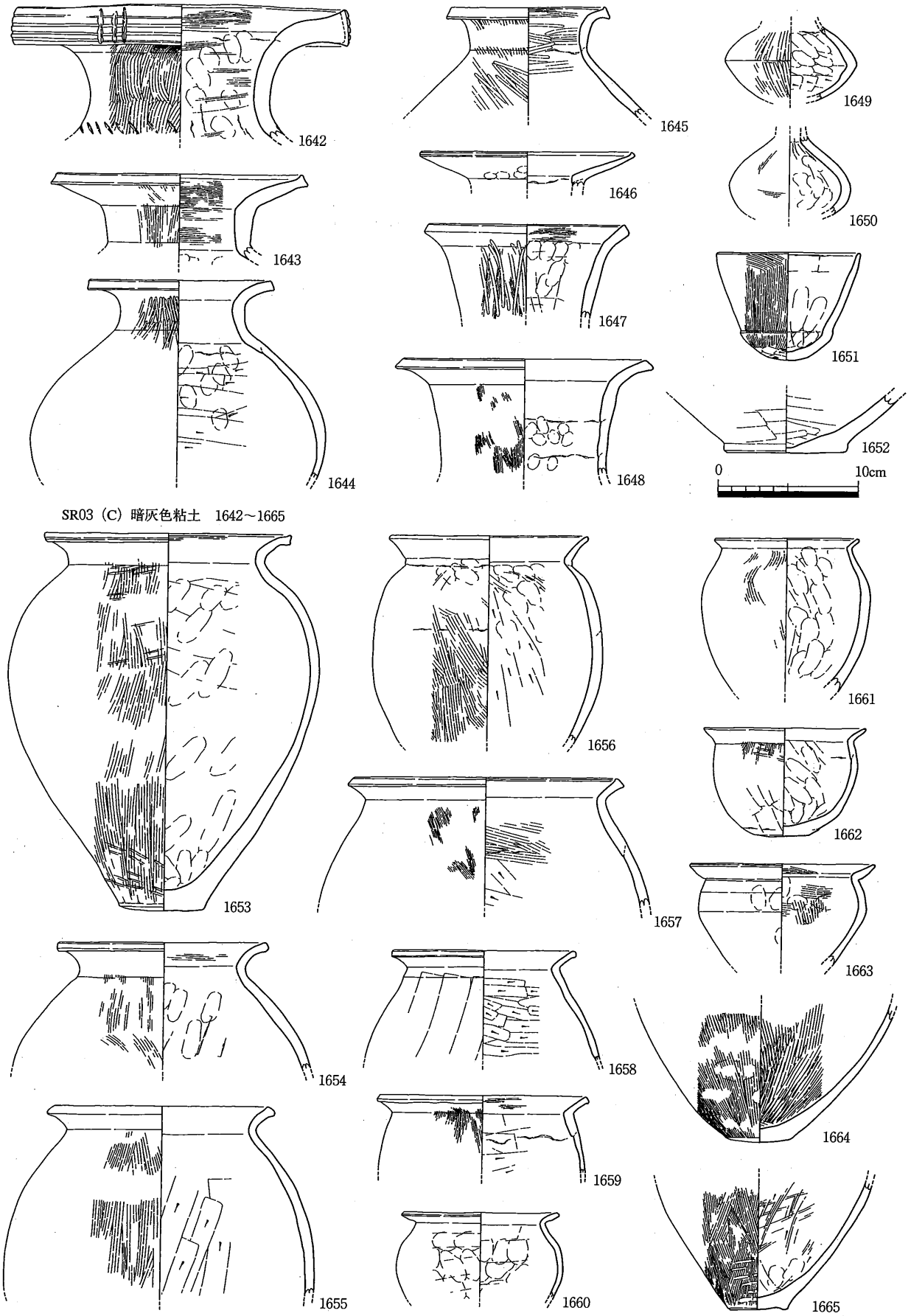
第195図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(29)(１／４)

器壺。指押さえ痕が顕著で全体に指押さえ痕跡が残る。1641は台状土器。台の部分は剥離が著しく、何層にも剥離している。外面はヘラミガキを密に行う。

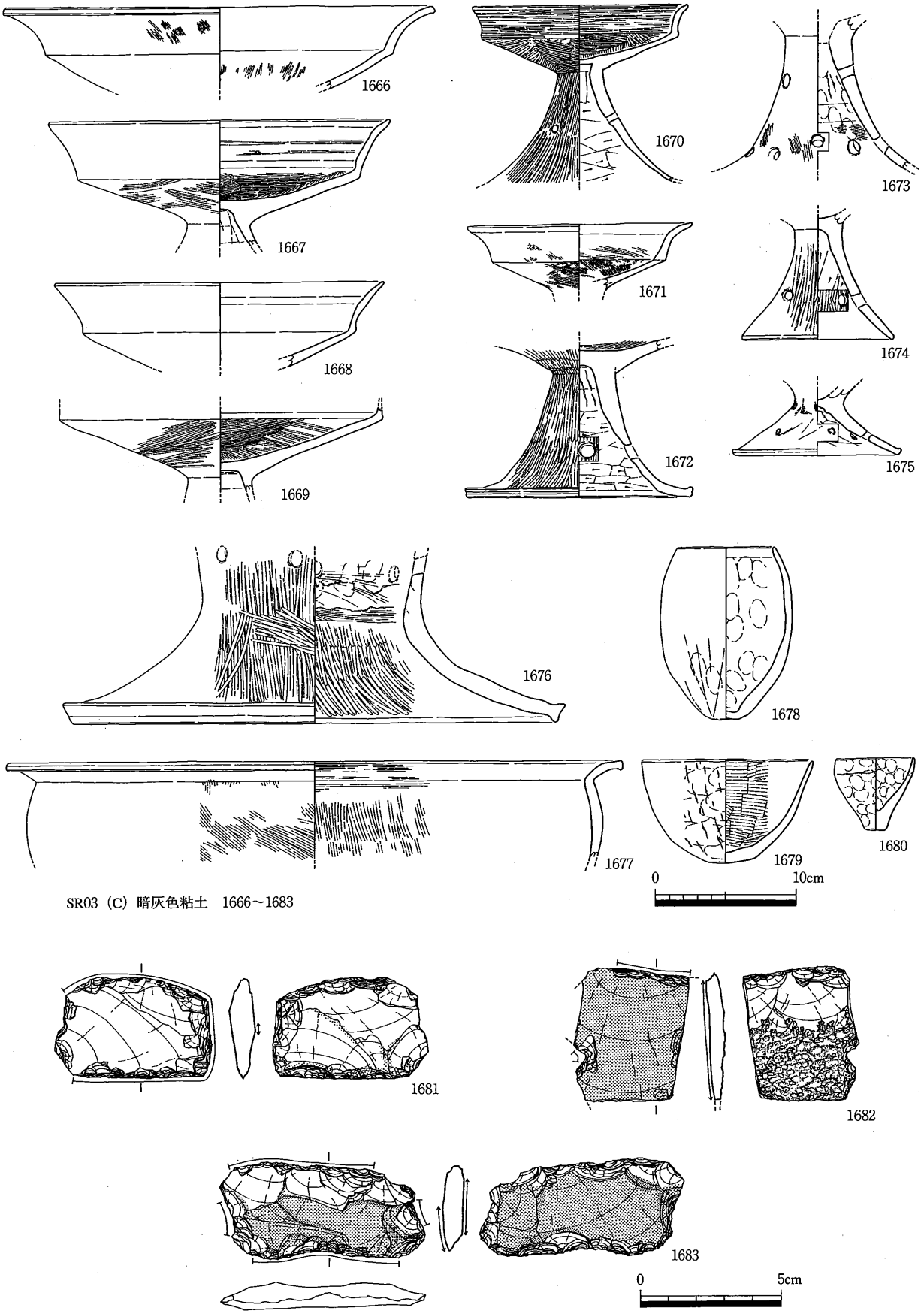
ＳＲ03（Ｃ）暗灰色粘土（第196・197図、図版72・73・75）

ＳＲ03Ｃ部分（６区①南）で検出した層位である。黒色粘土の上部に堆積し、東半部全体に10cm程度堆積するが、東端付近では流路状または窪み状になり40cm程度と深く堆積する。この窪み状の部分はＳＲ03Ｃの東端をかすめてＳＲ03Ｄ部分（６区①南）へ向かうようだ。

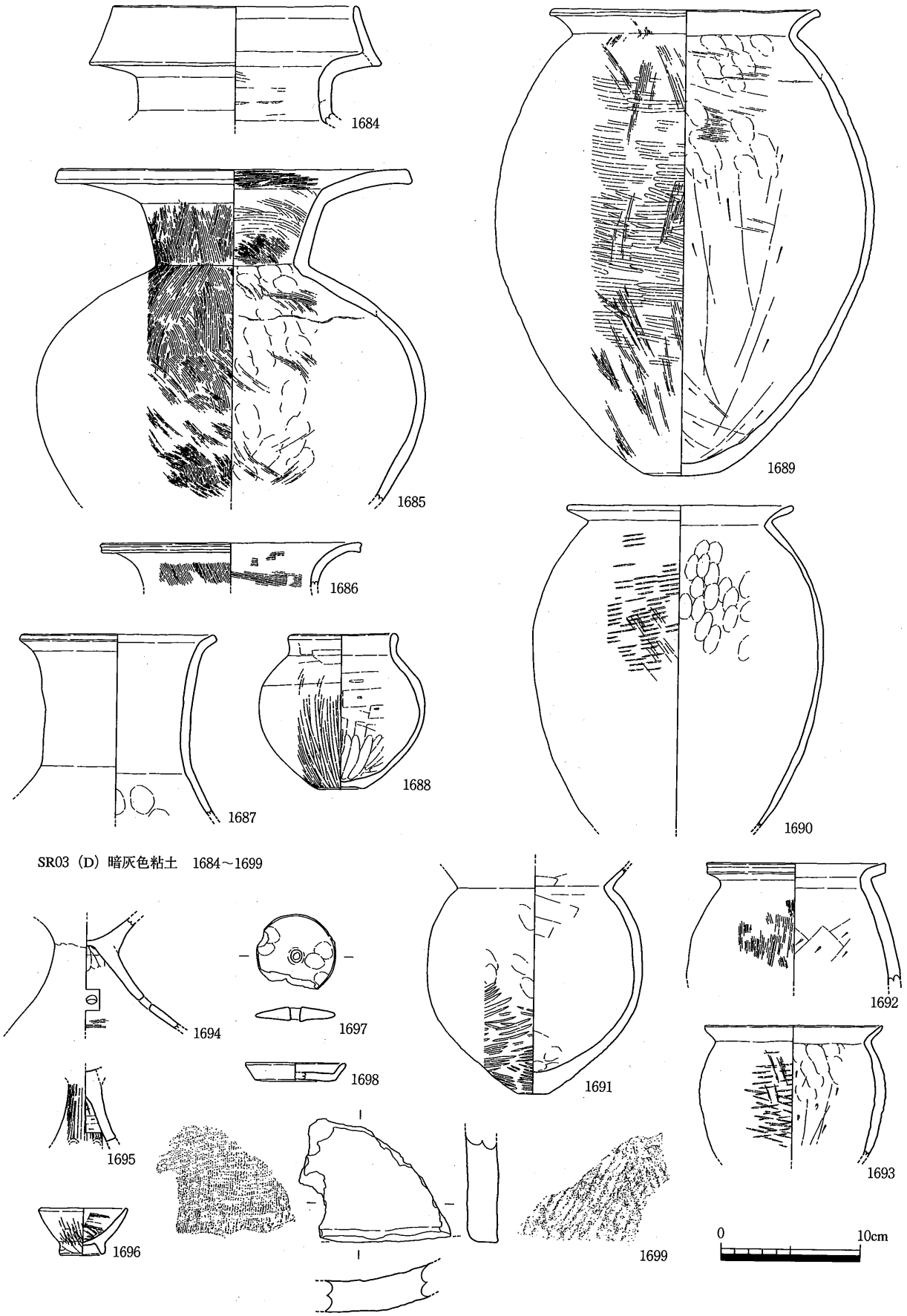
1642～1652は壺。1642～1644は直立する短めの頸部から口縁部が大きく広がるもの。1642は口縁端部をさらに粘土を外側へ貼って拡張し、そこに凹線を４条、その上からの縦方向の３条１組の刻み目が１個所残存する。頸部には斜め方向の刻み目がある。1645は短めの直立する頸部に短く開く口縁部が付く。体部はややなで肩気味に下がる。1647・1648は長めの頸部で口縁端部が緩やかに開くもの。1649・1650は小型のもの。1649は下川津Ｂ類。算盤型に近い体部で、外面は丁寧にヘラミガキする。1651は小型丸底壺。体部と底部にはわずかに段を残し、形骸化が進む。下川津Ｂ類。1652はしっかりとした平底を呈する。壺の底部と思われる。1653～1665は甕。1653～1655・1657は口縁部と体部の境の屈曲が緩いもの。概ね外面はハケ、内面は板ナデまたはヘラ削りする。1656・1658・1659はやや小型。屈曲部はややきつい。1660～1663はさらに小さい。1664・1665は甕底部。1666～1675は高坏。1666～1672は杯部が残る。1666は口縁端部を四角くし内外面には放射状のヘラミガキを施すと思われる。1667・1669・1670は杯部内外面に横方向の分割ヘラミガキを施す。いずれも下川津Ｂ類。1667・1670は口縁端部内面に段が認められる。1672には外面に２段の放射状のヘラミガキがある。1672～1675は脚部。1672は全体に縦方向の



第196図　ＳＲ03（Ｃ）出土遺物(30)（１／４）



第197図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(31)(１／４、１／２)



第198図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(32)(１／４)

ヘラミガキを施し、４個所に均等に穿孔が入る。1673は脚部に上段５個所、下段８個所、合計13個所に穿孔を施す。脚部上端部には本来杯底部があったと考えられる場所に剥離痕があり、底部は何らかの形で充填したと思われる。1674は脚部に穿孔が４個所残存するが、やや不均等である。残存状況から２孔＋３孔で施したのかもしれない。1675は低脚のもの。脚部の穿孔はやや不均等に６個所ある。その他に６孔のうち１孔は最初の位置決めを失敗したらしく、外側から少しあけかけて位置をずらして穿孔している。1676は器台。外面と内面裾部を丁寧にヘラミガキし、７個所に穿孔する。1677～1680は鉢。1677は大型で、口縁部が外側へ屈曲し、体部は丸みを持つ。1679は外面にクラックが多く残る。1680は手捏ねで歪みがあり、指押さえ痕が顕著に残る。1681はスクレイパー。腹面の稜部分には磨滅痕が残り、石庖丁の可能性もあろう。1682は側縁にわずかに抉りの様なものがある。刃部はあまり作っていない。1683は石庖丁。上・下部ともに潰しており、側縁部には抉りを入れる。全体にローリングを受けているが、特に稜の部分が磨滅が著しい。

ＳＲ03（Ｄ）暗灰色粘土（第198・199図、図版74・85・86）

ＳＲ03Ｄ（６区①北）で検出した層位である。黒色粘土の上部に堆積し、厚さは10cmほどである。埋土は暗灰色粘土で砂が少し混ざる。おそらくこの層位はＳＲ03Ｃの東端をかすめて北へ向き、ＳＲ03Ｄの東端をかすめながら調査区外へ延びると思われる。遺物はおもにＳＲ03東肩付近や畔ＳＲ03（Ｄ）から南側で出土した。

1684～1688は壺。1684は二重口縁壺。口縁部の外側に二重口縁壺口縁部の立ち上がりを貼り付ける。大部分が頸部と体部の境付近で剥離する。下川津Ｂ類。1685は斜めに立ち上がる頸部から大きく開く口縁部が付く。やや新しい。1687は長めの頸部にわずかに口縁端部が開くもの。1688は頸部が短く直立する。外面はヘラミガキできれいにする。1689～1693は甕。口縁部と体部の屈曲はきつく、外面調整は概ねタタキの後ハケであるが、ハケは粗雑でタタキ痕はあまり消えていない。1694・1695は高坏。1694は脚部に３個所の穿孔が残存し、残存部分からほぼ均等に４個所に配したと考えられる。1695は脚部に縦方向のヘラミガキをし、脚部上端外面に剥離痕を残す。この部分に杯部を付けたか接合粘土を付けたかどちらかであろう。杯底部となる部分は残っている。穿孔はやや近接して２孔残存するが、全容は不明。1696はミニチュア鉢。高台のようなものが付き、全体をハケで調整する。1697は紡錘車。1698は土師器小皿。1699は平瓦。凹面には布目、凸面には縄タタキ目を残す。タタキ目は斜めに交差しており、両側から叩いていたと考えられる。平安時代に綾南町陶近辺で製作される平瓦に多用される技法。1698・1699は上層からの紛れ込みと考えられる。1700はスクレイパー。1701は石庖丁。いずれもサヌカイト製。時期は弥生時代後期後半～終末期頃と考えられる。

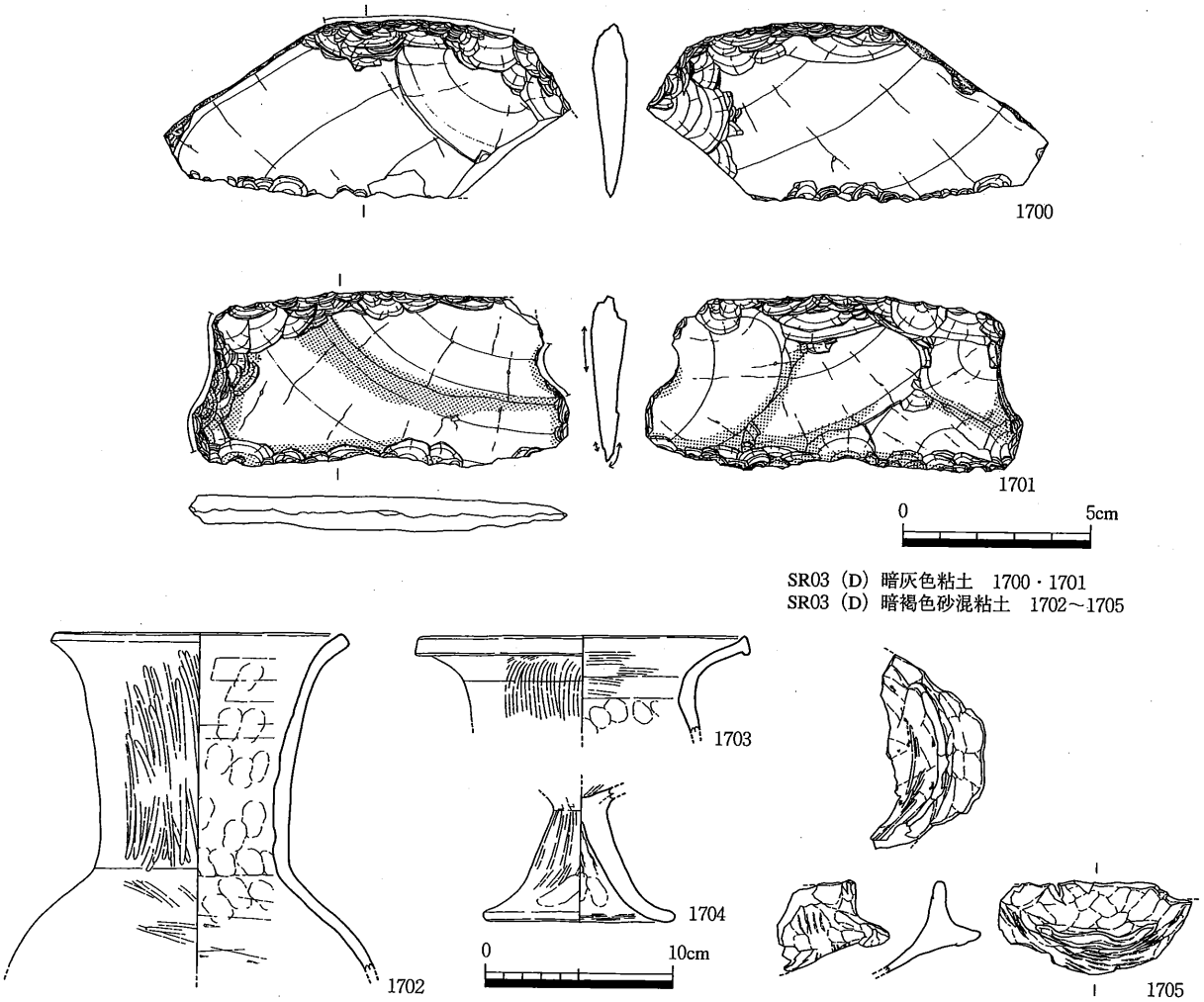
ＳＲ03（Ｄ）暗褐色砂混粘土（第199図、図版74）

ＳＲ03Ｄ（６区①北）で部分的に検出した層位である。畦ＳＲ03Ｄ－２部分の東半部で、砂層をはさんで黒色粘土の上面に厚さ15cmにわたって堆積する。

1702・1703は壺。1702は直立する長めの頸部に丸い体部が付く。外面はヘラミガキできれいにする。1703は直立する頸部に開く口縁が付くと思われる。1704は高坏。1705は把手付広片口皿。把手部分。内面に赤色顔料（水銀朱）が付着する。胎土の類似性から1018と同一個体の可能性がある。

ＳＲ03（Ｃ）灰色砂質土（第200図、図版74・90）

ＳＲ03Ｃ（６区①南）で検出した層位である。黒色粘土層の上面に堆積し、西側流路に切られる。畔ＳＲ03Ｃで厚さ20cmほど堆積し、埋土は明褐灰色砂質土である。この層は西壁土層の南半部・流路の南



第199図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物㉝(１／４、１／２)

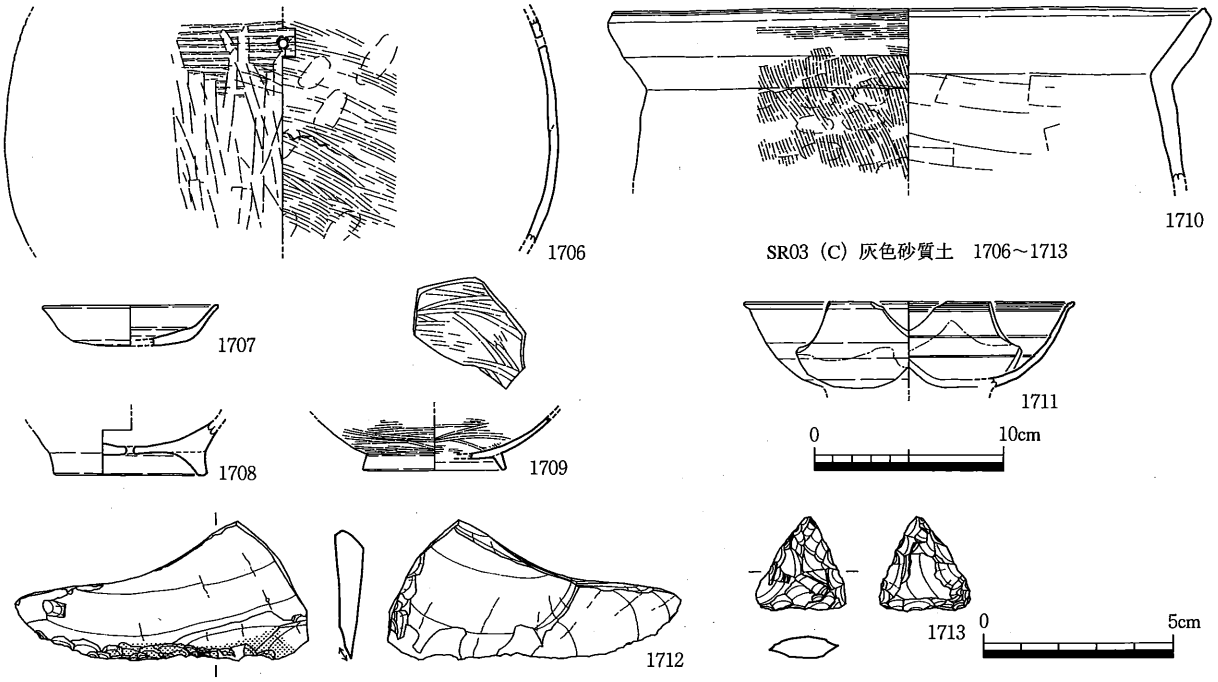
側、南壁土層の全面、北壁土層の東半分・流路の東側で同様の堆積状況を示しており、この層を切る西側流路以外の部分でほぼ全面に堆積していると思われる。これは２区③の奈良時代包含層へ連続するかもしれないが出土遺物はやや新しい。

1706は弥生土器。甕か。体部やや上部に穿孔が１個所ある。1707～1710は土師器。1707は小皿。内面の底部と体部の境付近に煤が少し付着する。1708・1709は椀。1709は吉備系土師器椀。1708は摩滅が著しく、底部中央付近に直径約５㎜の穿孔がある。1711は灰釉陶器。口縁端部は外反し、内外面とも概ね体部中程まで浸け掛けで施釉する。遺物は弥生土器を除けば10世紀後半～11世紀後半くらいのものがあるようだ。1712はスクレイパー。刃部をわずかに加工する。1713は石鏃。平基式。ともにサヌカイト製。

ＳＲ03（Ｃ）西側流路（第201～203図、図版75・87）

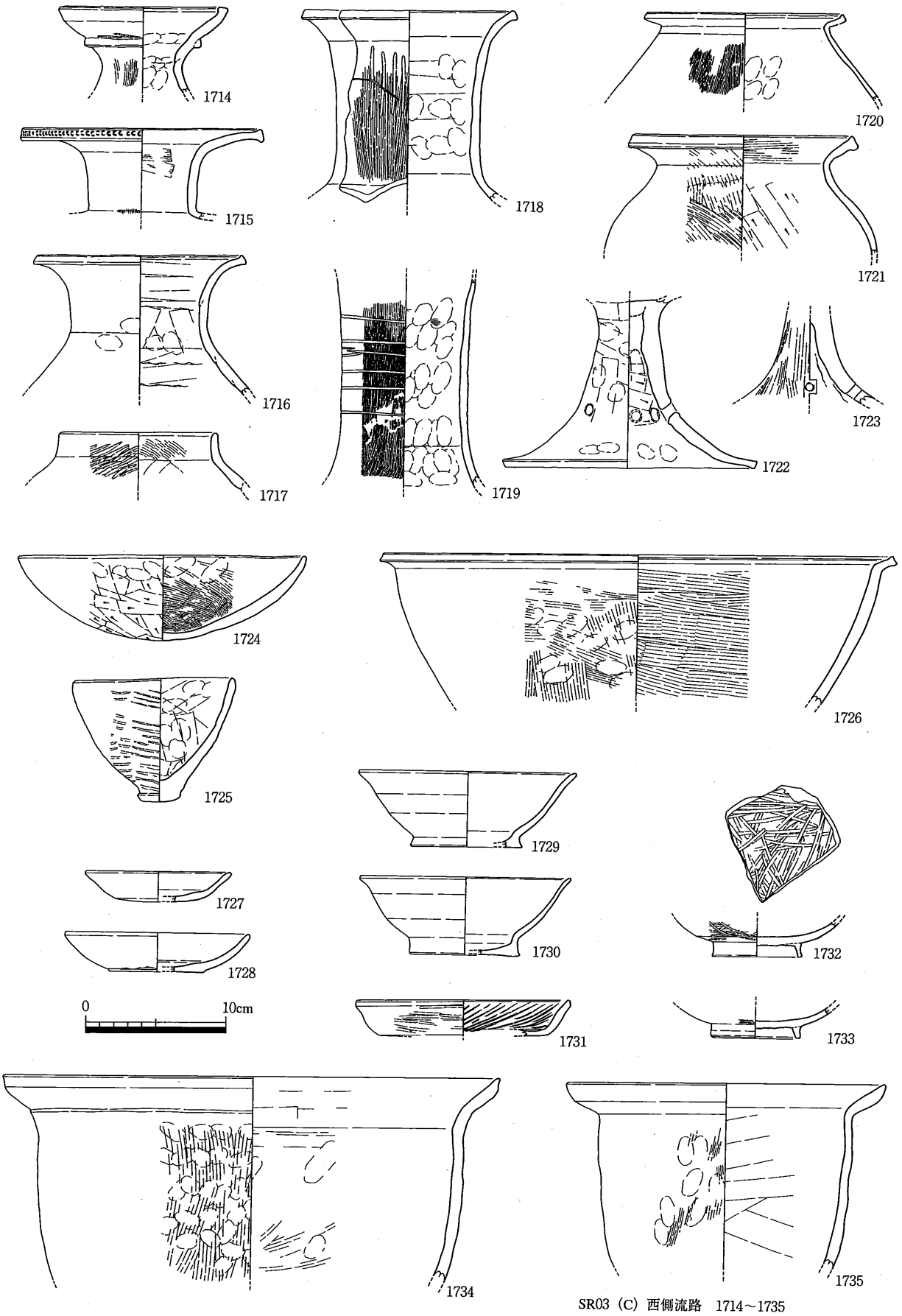
ＳＲ03Ｂ（６区②北）平野部側から出現し、ＳＲ03Ｃ（６区①南）の西部を流れてＳＲ03Ｄ（６区①北）の西側へ流れ込む流路である。幅４ｍ、深さ１ｍ前後で埋土は暗褐色・黒褐色系の下からラミナを含む砂層・シルト層・粘土層である。

1714～1726は弥生土器。1714～1719は壺。1714は弥生時代中期後半。口縁端部・突帯端部とも若干摩滅があるものの、刻みは観察できない。1715は直立する頸部に大きく開く口縁部を持つ。口縁端部に半裁竹管文を連続して押す。1717は短く太めの口縁部が直立する。体部は図化した部分できれいに全体に



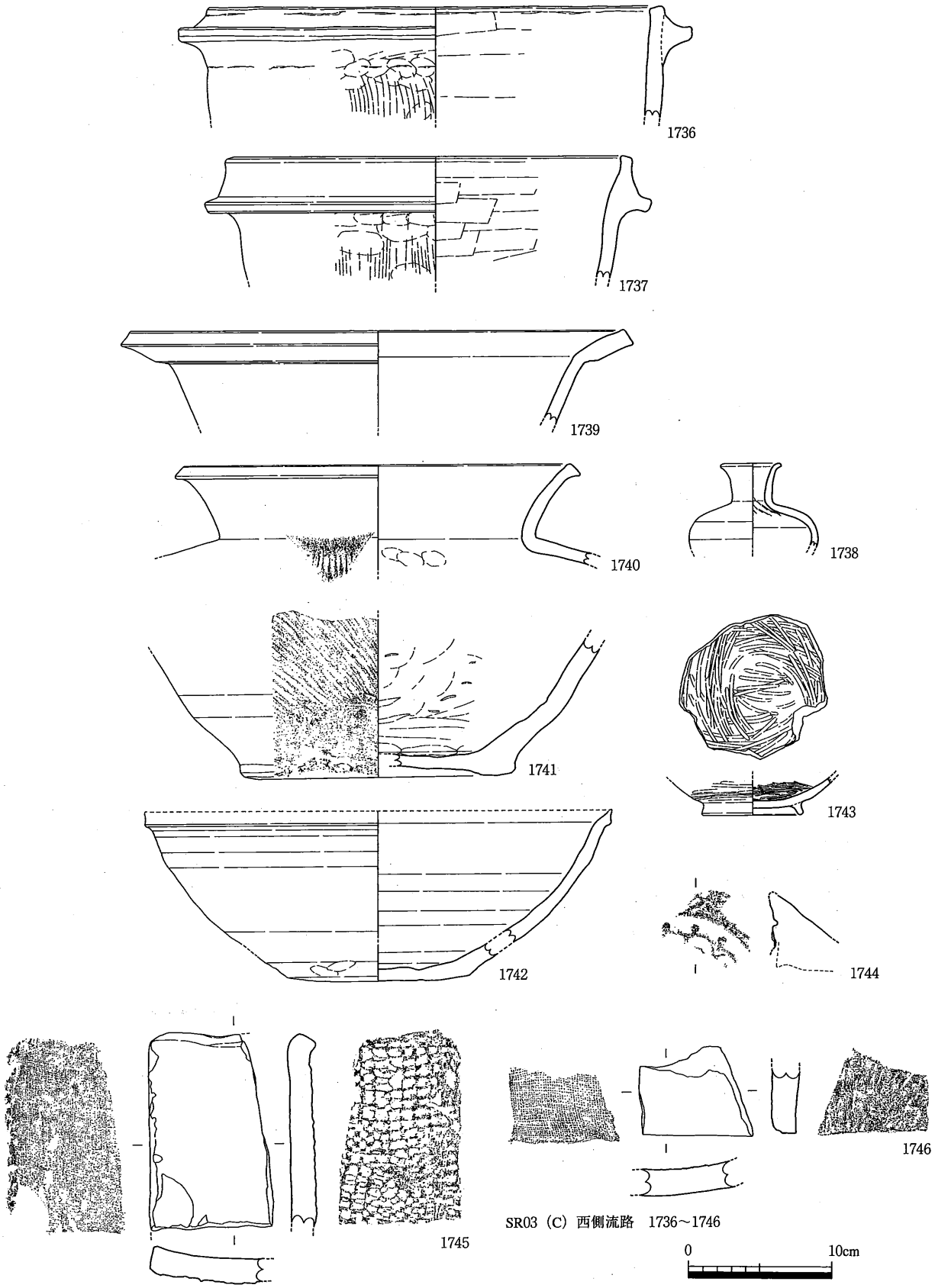
第200図　ＳＲ03（Ｃ）出土遺物㉞（１／４、１／２）

剥離しており、粘土の継ぎ目であったと考えられる。1718は直立する長めの頸部に開く口縁部が付く。頸部に４～５条の縦方向のヘラ描きがほぼ対角線上の２ヶ所にあり、そのうち１ヶ所にはその上から斜め方向のヘラ描きがある。1719は下川津Ｂ類。外面は全体にハケを施し、所々横方向に沈線状の深めのヘラミガキをする。1720・1721は甕。1720は下川津Ｂ類。内面の指押さえの部分に横方向に凸線が平行に走る。それは指押さえのない部分にも及んでいるが、指押さえ部分に特に強く残っており、指押さえの際に何か当てて指押さえをしたのかもしれない。1722・1723は高坏脚部。1722は杯部の底部を円盤充填する。穿孔は６孔残存するが、間隔はやや不均等である。全体では７～８孔あったと思われる。1723は上端と上端側縁側に剥離痕跡がみえる。間隔が不均等に３個所に穿孔が残存するが、残存範囲からこれ以上はないと思われる。1724～1726は鉢。1727～1737は土師器。1727・1728は杯。1729・1730は円盤状高台を持つ杯。1731は内面に斜放射の暗文をもち、外面はヘラミガキする。端部は丸く収める。1732・1733は椀。1732は吉備系土師器椀。内外面にヘラミガキする。1734・1735は甕。1734は口縁端部を上方へ引き上げて細くし、1735はまっすぐに丸く収める。1736・1737は羽釜Ｃ。いずれも口縁端部・鍔端部とも四角くする。1738～1742は須恵器。1738は壺。外面に自然釉が掛かる。1739～1741は甕。1739は1844と接合はしないが、よく似通っており、同一個体の可能性が非常に高い。1740は口縁端部を外側へ拡張し、外面には格子タタキを施す。1741は底部。全体に自然釉が掛かる。内面にはわずかに右から左への青海波文の当て具痕跡が残る。底部外面には須恵器片が溶着している。1742は捏ね鉢。先端部がわずかに欠損する。口縁部内外面に重ね焼き痕跡がある。1743は黒色土器Ａ椀。内面には体部５分割＋見込みのヘラミガキがあり、外面はおそらく回転式ではない横方向のヘラミガキがある。底部外面には板圧痕を残し、高台貼付部分には１～２重の円弧状の刻み目がある。見込みには直径3.2㎝の圧痕が観察できる。1744～1748は瓦。1744は軒丸瓦。複弁８葉蓮華文と思われる。外縁は傾斜するタイプで素文、外区には珠文を配する。弁と弁の間にはわずかに間弁が付く。丸瓦がちょうど剥離しており、接合粘土だけが残っているが、接合粘土は厚く、丸瓦の取り付け位置はかなり低かったと思われる。間弁はＴ字型

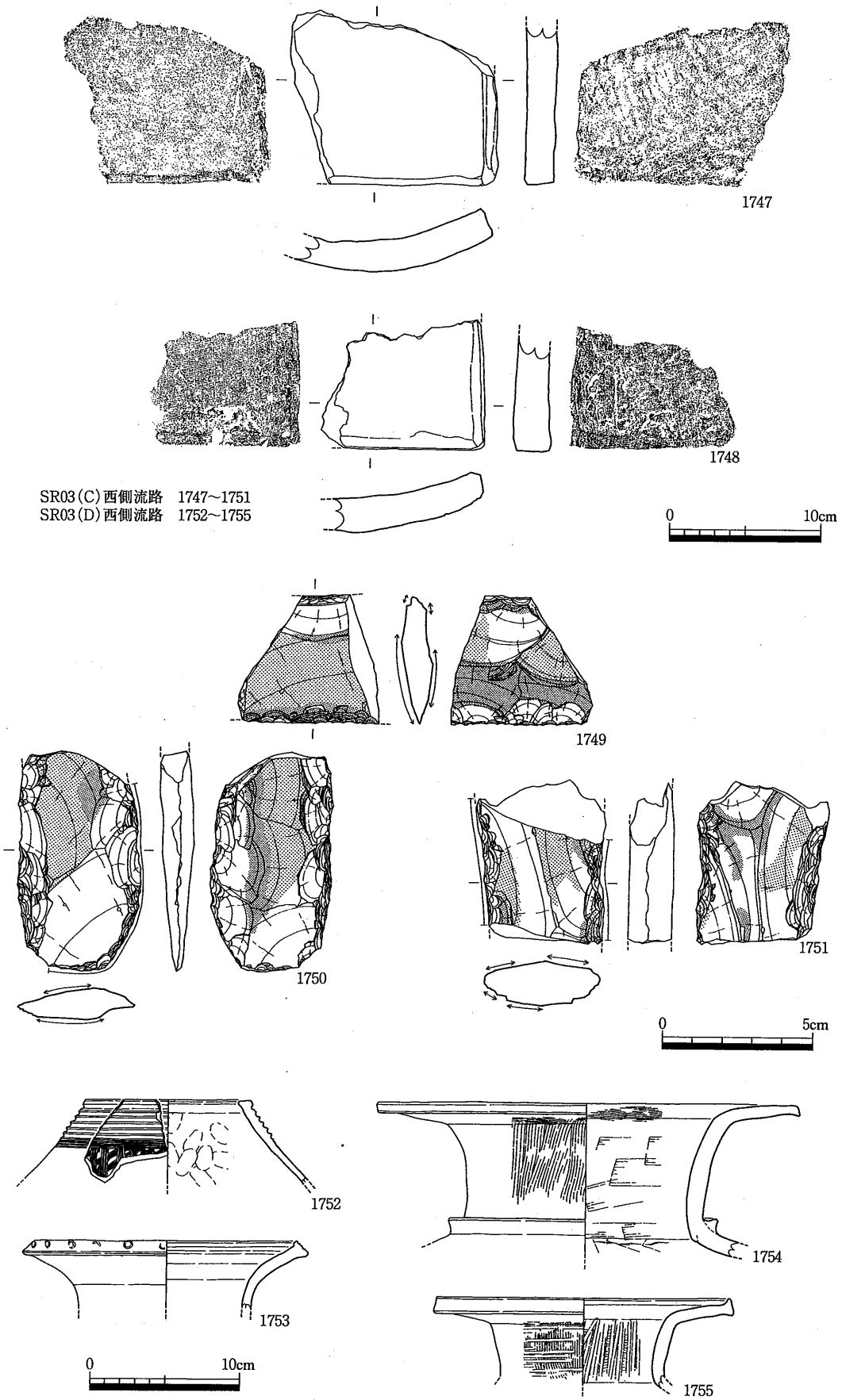


SR03（C）西側流路　1714～1735

第201図　ＳＲ03（Ｃ）出土遺物㉟（１／４）



第202図　ＳＲ03（Ｃ）出土遺物㊱（１／４）



第203図　ＳＲ03(Ｃ・Ｄ)出土遺物(37)(１／４、１／２)

でわずかに入るだけである。強いていえば讃岐国分寺ＳＫM07と似た文様構成で鋸歯文が省かれるものか。ＳＫM07には10世紀中頃の年代観が与えられている。1745～1748は平瓦。1745は格子タタキ痕を凸面全体に明瞭に残す。1746～1748は外面は縄タタキで成形するが、いずれもタタキ痕を明瞭に残さない。1747には縄タタキを両側から交互に施した痕跡がみられる。1749は楔形石器。1750はスクレイパー。1751は石斧。上・下部は欠損。いずれもサヌカイト製。

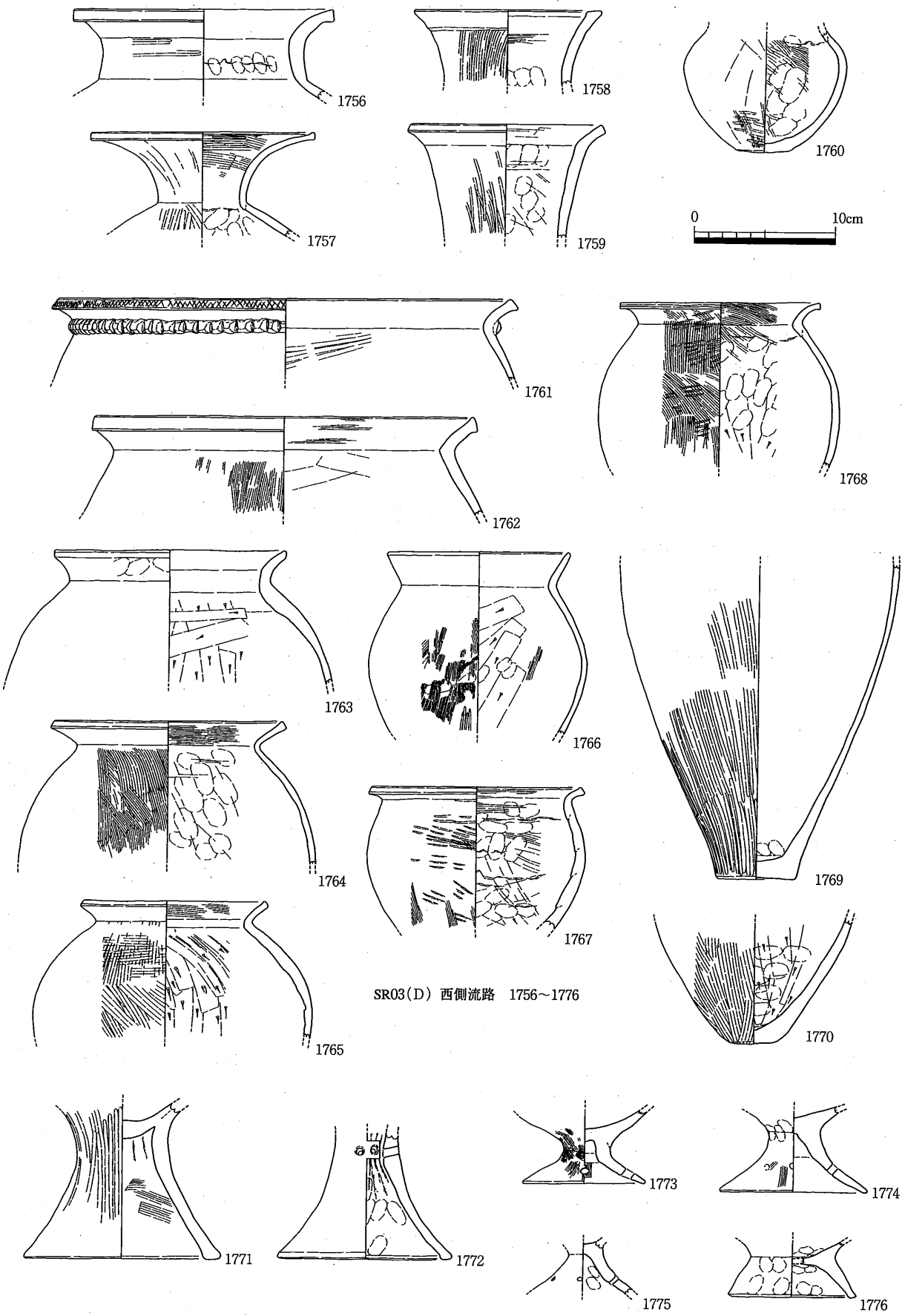
出土遺物は弥生時代後期前後くらいを除けば８世紀代のものが少しで、あとは10世紀後半頃のもの中心であるようだ。

ＳＲ03（Ｄ）西側流路（第203～207図、図版75・76・86～88）

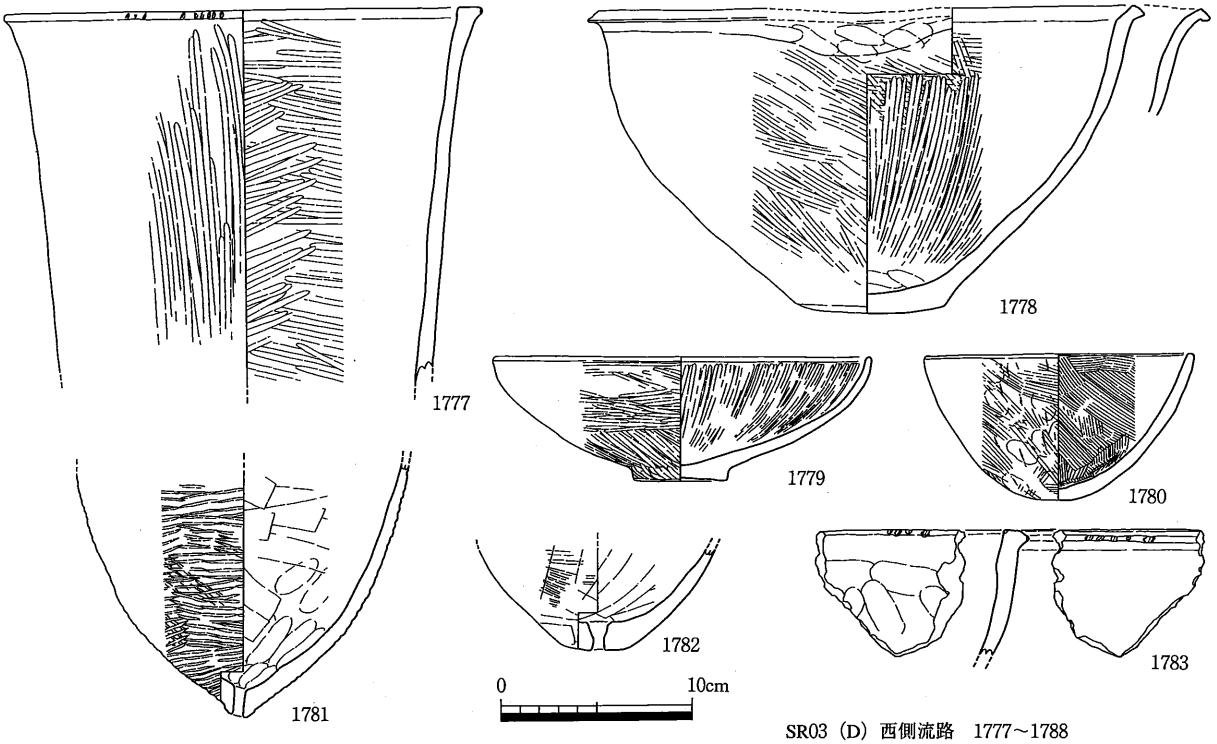
ＳＲ03Ｃ（６区①南）から流れ込む流路である。ＳＲ03ＤではＳＲ03の西端を北東へ流れる。幅10m、深さ0.6m、埋土は暗灰褐色粘土で多量の砂がラミナ状を示す。出土遺物の中には８世紀～10世紀のものが出土したが、全体に弥生土器に残存状況のよいものが多かった。しかし土層図からはＳＲ03Ｃの西側流路から続くものと考えられる。

図化したものは全て弥生土器である。1752～1760は壺。1752は無頸壺。口縁部には多条の沈線を施し、その下部には斜格子文様を入れる。弥生時代中期後半。1753は口縁端部に半裁竹管文をやや疎らに入れる。下川津Ｂ類。1754は口縁端部上面に約２㎝幅で剥離痕跡があり、二重口縁壺になると考えられる。頸部に突帯を巡らせる。1755は外傾気味に立ち上がる短めの頸部に大きく開く口縁部が付く。1758・1759は長い頸部に口縁部がわずかに開く。口縁端部に面を持つ。1760は体部。割れの部分はわずかに上方へ向いており、頸部へつながっていくと思われる。1761～1770は甕。1761は頸部に押圧突帯を巡らせ、口縁端部には斜格子文様を入れる。1761・1762は弥生時代中期後半。1764～1766・1768は概ね外面をタタキの後ハケ、内面口縁部付近をハケ、体部をヘラ削りし、薄くする。1769・1770は底部。1769はしっかりした平底で外面はきれいに磨き上げる。弥生時代中期後半。1771～1774は高坏。1771は弥生時代中期後半。1772は脚部の上端付近に２孔１対の穿孔が１個所に残る。1773は低脚で杯底部は丸い。脚部の穿孔は２孔残存し、残存部分からだいたい均等に４孔の穿孔があったと考えられる。1774も低脚の高坏。脚部の穿孔は３孔が残存するが、間隔は不均等で、全体には４～５孔があったと考えられる。1775は脚部に５孔の穿孔が残存しており、全体では10孔前後があったと思われる。脚部内面上端部には直径５㎜程度の孔がある。1776は台付鉢脚部。全体に指押さえがみられる。1777～1783は鉢。1777は口縁端部に刻み目を持ち、内外面は丁寧にヘラミガキする。1778は片口鉢。口縁端部を四角くし、内面をヘラミガキする、赤色顔料が付着するものと同じタイプであるが、摩滅のせいかもしれないが赤色顔料は観察できなかった。黒色粘土層出土のものと接合する。1779・1780は椀形の鉢。1779は内外面をきれいにヘラミガキし、しっかりした平底を作る。やや浅め。1781・1782は甑。ともに底部に穿孔を１孔する。1782は底部はやや平底気味である。1783は縄文土器鉢。口縁端部に刻み目を持つ。晩期。1784～1788はスクレイパー。1784・1785は剥片の端部に簡単な刃を付けただけのようなもの。1788は刃部が著しく磨滅し、光沢を持っている。1790～1792は打製石斧。1792には擦痕が顕著に残る。1793は太型蛤刃石斧。下部は欠損するが、割れ口に敲打痕が残されており、欠損後に叩き石などに再利用したと考えられる。閃緑岩製。1794は砥石。使用した面が１面のみ残存し、残りは割れ口である。線状の使用痕がみられる。流紋岩。

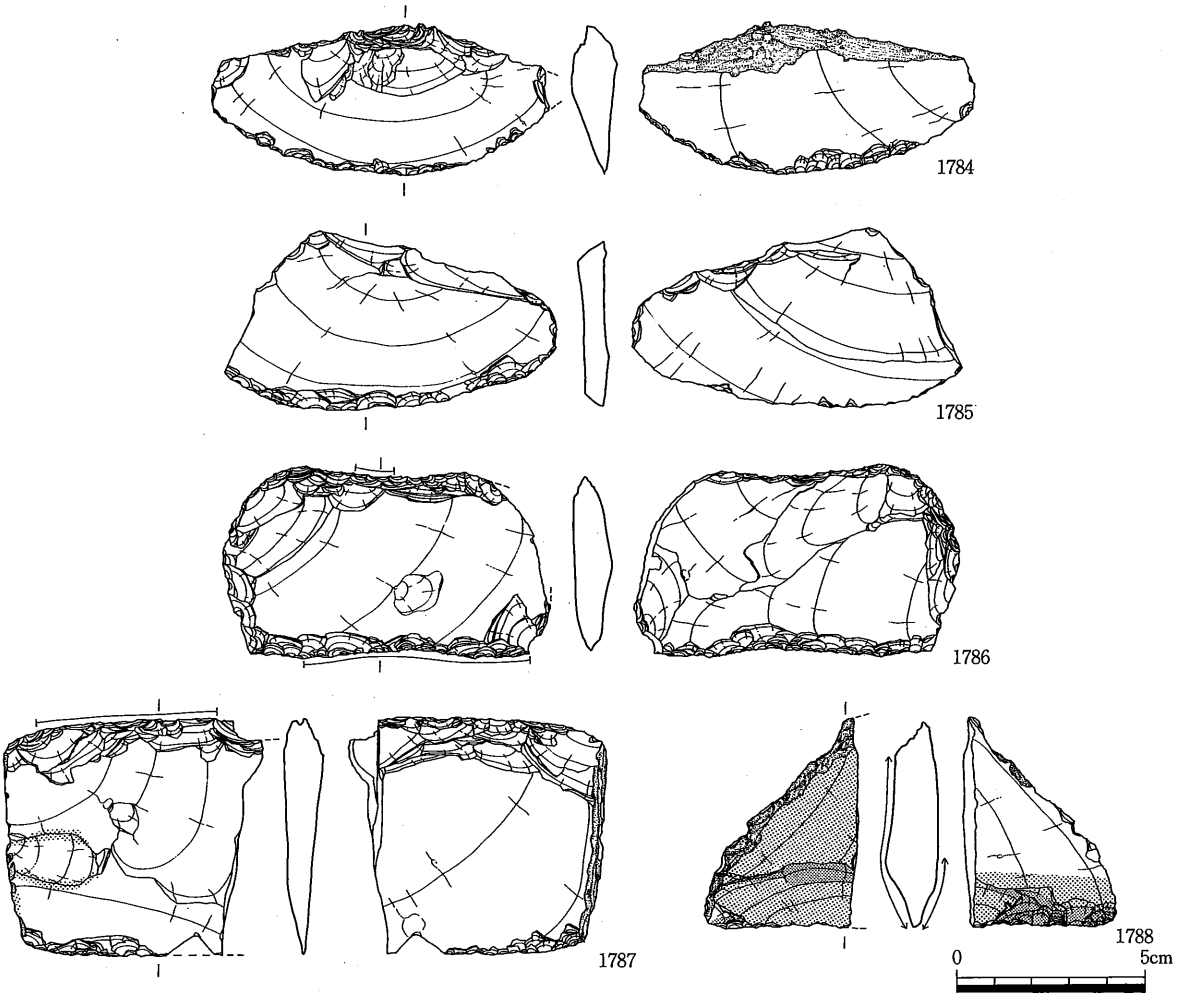
この部分の出土遺物は弥生時代後期後半～終末期を中心とするものであるが、層位からみれば黒色粘土などを切っており、出土遺物はこれらの層のものを巻き込んだものと考えられる。



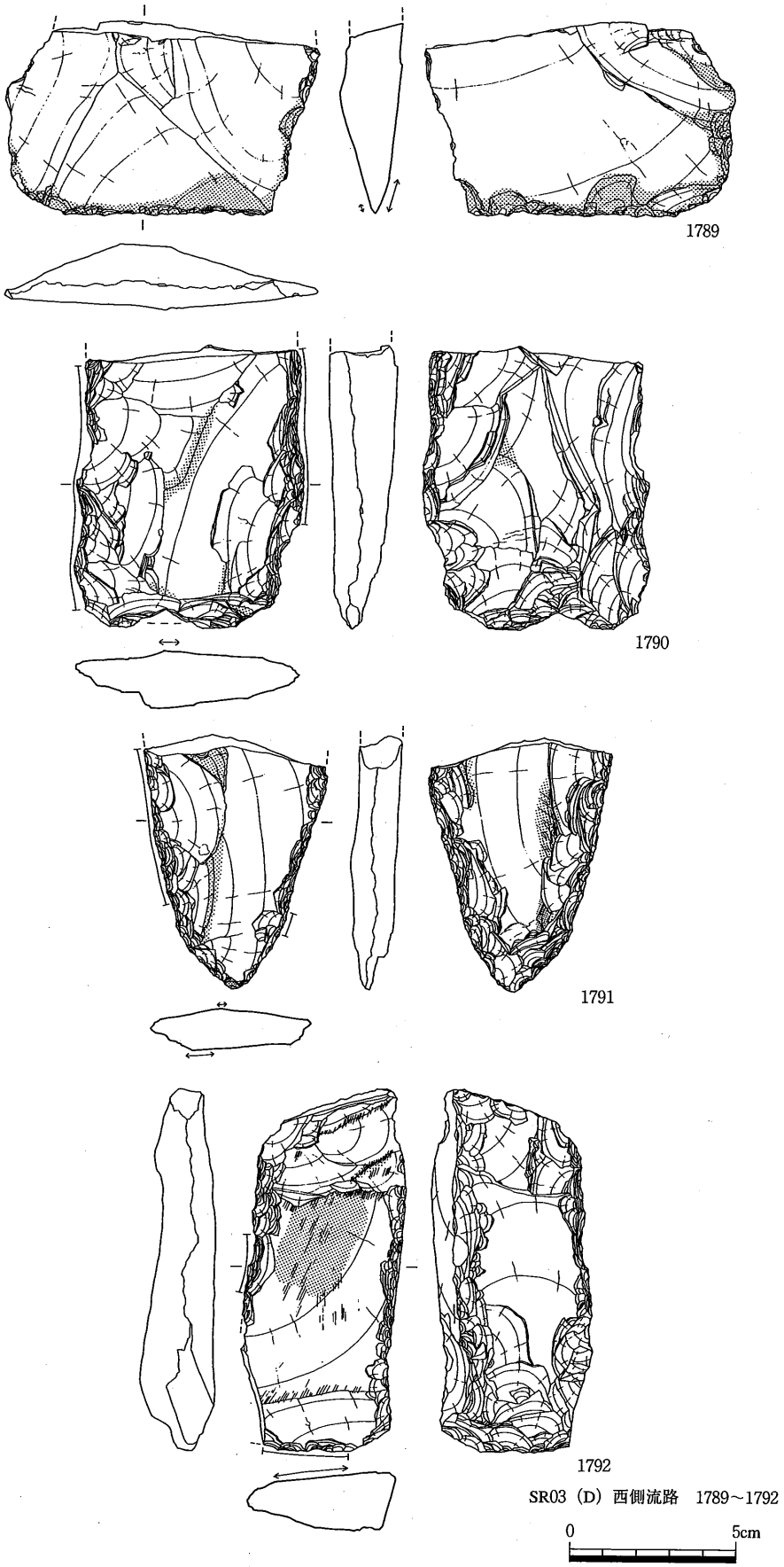
第204図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物㊳(１／４)



SR03（D）西側流路　1777～1788



第205図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物㊴(１／４、１／２)



第206図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(40)(１／２)

ＳＲ03（Ｄ）支流（第208図）

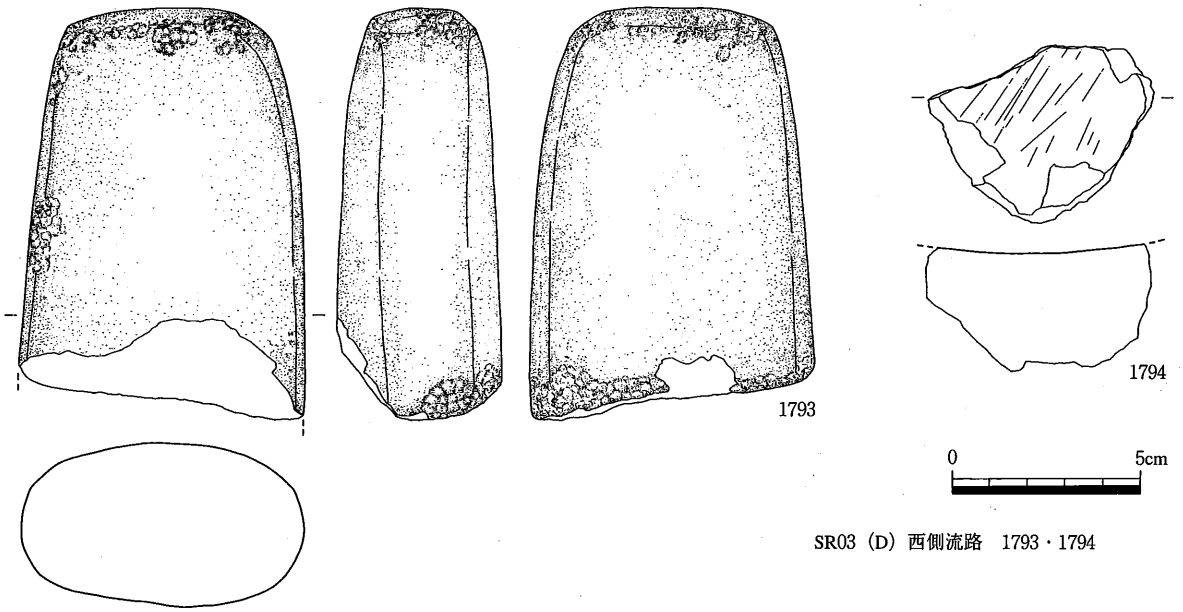
ＳＲ03Ｄ（６区①北）で検出した。幅1.4ｍ、深さ40cm、埋土は砂層の上面に明茶褐色砂質土が堆積し、ＳＲ03西側流路の西側にほぼ平行して検出した。

1795～1798は土師器。1795は小皿。1796は杯。1797は椀。1798は足釜。短い鍔が付く。1799は平瓦。須恵質の焼成。凹面には格子タタキ痕がみられる。

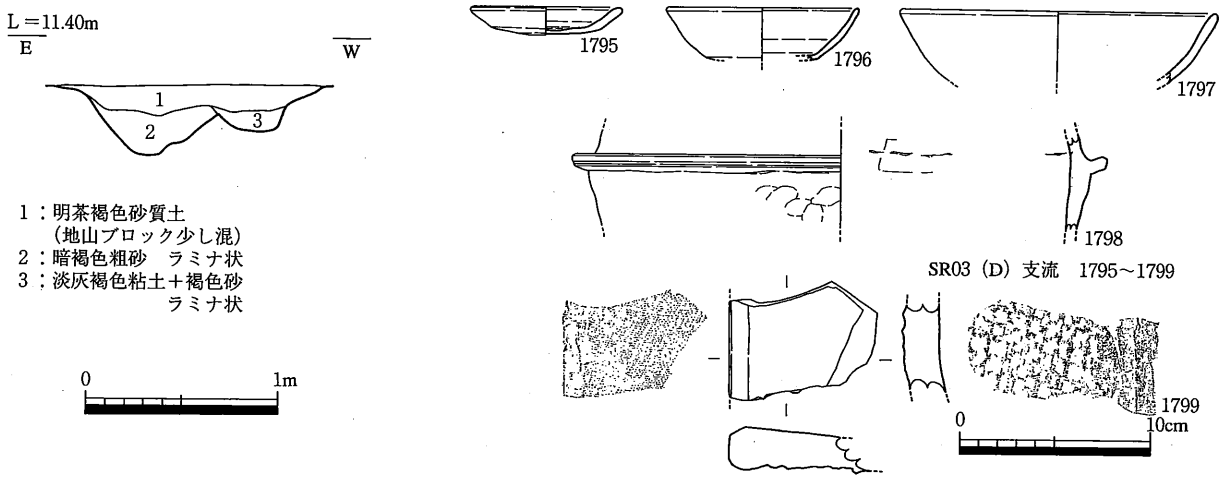
ＳＲ03（Ａ・Ｂ）上層（第209・210図、図版76）

ＳＲ03Ａ・Ｂ（６区②）の最上層である。範囲は概ねＳＲ03と重なる。埋土はおもに灰色粘土・砂質土で、深さは30～60cm前後である。

1800～1811は弥生土器。1800～1803は壺。いずれも弥生時代中期後半。1800は口縁端部を下方へ大きく拡張し、端部に斜格子文、内面上端部に斜格子文とその下部に列点文を入れ、口縁端部に刻み目を施す。1802は頸部に押圧突帯を貼る。1803は頸部に４条の突帯を貼り、そこに刻み目を付ける。1804～1808は甕。いずれも弥生時代中期後半。いずれも頸部の屈曲が明瞭で、胴部はあまり張らない。外面はヘラミガキ、内面もヘラミガキするものが多い。1804は体部中位付近に２個１組の列点文が１周する。底部はしっかりした平底である。1809は高坏。脚部外面はヘラミガキ、杯部内面にもわずかに分割されたヘラミガキが観察できる。1810は鉢の底部。内外面ともに縦方向のハケをする。1811は甑。平底でやや偏った位置に穿孔を１個所にする。1812～1820は土師器。1812～1814は杯。いずれも口径10.5cm前後、器高2.5cm前後である。11世紀中～後半。1815・1816は円盤状高台を持つ杯。1817・1818は椀。1818は吉備系土師器椀。1819は羽釜Ａ。外面に指押さえ以外の調整痕はない。1820は羽釜Ｃ。1821～1823は須恵器。1821は杯身。外面下半部はヘラ削りする。1822は蓋のつまみ。円環状のもの。1823は甕。1824・1825は黒色土器Ａ椀。1824は内面にわずかに分割ヘラミガキの痕跡がみえ、底部外面の高台部分に少しずれてわずかに円弧状の刻みがみえる。1826は黒色土器Ｂ椀。外面は横方向のヘラミガキ、内面は放射状のヘラミガキを行う。1827は丸瓦。1828は平瓦。凸面は左右両側から交互に縄タタキをする。1829はＳＲ03部分を表土剥ぎしたときに出土した遺物である。土師器小皿。外面は回転糸切りにより切り離す。13世



第207図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物(41)(１／４)



第208図　ＳＲ03(Ｄ)断面図(１／40)出土遺物(42)(１／４、１／２)

紀半ば。埋土中からは時期は弥生時代中期後半～後期後半の遺物が多く出土した他、11世紀～13世紀代まで出土遺物の時期幅があるが、13世紀代が最終的な埋没時代と思われる。

ＳＲ03（Ｃ）上層（第210・211図、図版77・88・90）

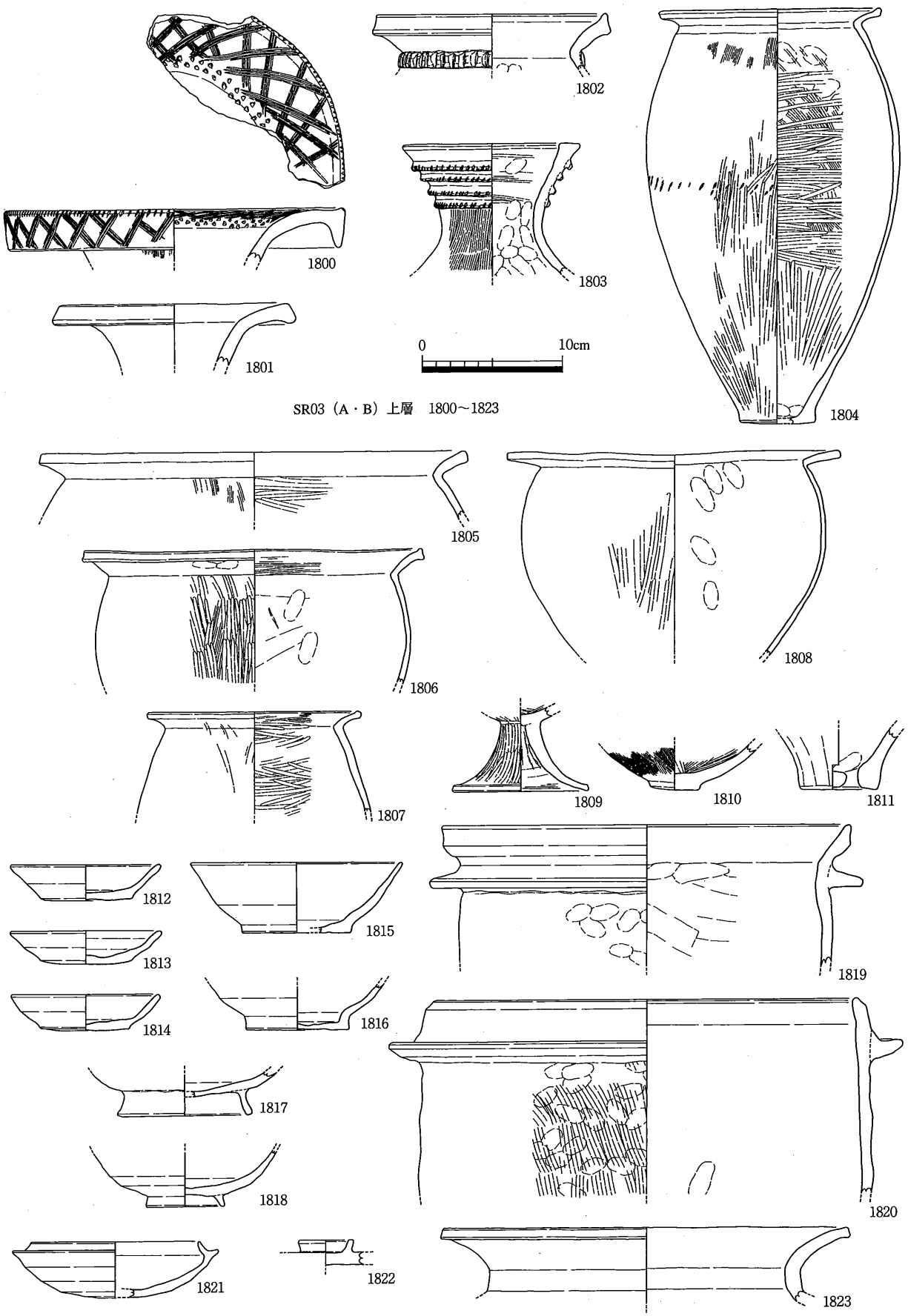
ＳＲ03Ｃ（６区①南）の最上層である。厚さ約40cmにわたって堆積し、埋土は概ね褐色または灰色砂質土である。

1830・1831は弥生土器。1830は甕。小型で口縁端部は緩く外反する。1831は器台。1832～1843は土師器。1832～1836は杯。口径が12cm前後のものと10.5cm前後のものがある。13世紀前半～中頃。底部はすべてヘラ切りで、1833・1834には板圧痕が残る。1835には反時計回りのヘラ切り痕が残る。1837～1840は椀。1837は外面に指押さえ痕を顕著に残す。1838・1839は内面にヘラミガキがある。1839は吉備系土師器椀。1840は底部にヘラ切り痕がみえる。焼成状況は土師器であるが、底部の形態は1848などに類似する。1841は甕Ｆ。1842・1843は羽釜Ｃ。いずれも口縁端部を内側に屈曲させる。11世紀代のものが多い。1844・1845・1848・1849は須恵器。1844は甕。全面に自然釉が掛かる。1739と同一個体と考えられる。1845は捏ね鉢。12世紀前半。西村産。1848・1849は椀。西村産。外面にヘラミガキはなく、内面にハケにも見えるナデが放射状に施される。13世紀半ば頃。1846は黒色土器Ａ椀。1847は黒色土器Ｂ椀。摩滅で内面の調整は不明。外面は横方向のヘラミガキをする。1850は青磁碗。外面に鎬蓮弁を飾る。13世紀前半。1851は白磁。碗底部。底部外面には施釉していない。12世紀代。1852は平瓦。凹面には布目、凸面には格子タタキ目が明瞭に残る。1853～1858は石器。1853～1855はスクレイパー。1853は上部・下部ともに刃を付けている。1854・1855は下部の刃部に刃を片側にしか付けていない。1856は石庖丁。1857は石鏃。平基式。1858は砥石。上部・下部が欠損するが、直方体のものと思われる。中程が凹んでおり、３面に使用痕が残る。砂岩製。遺物は弥生土器を除けば、11世紀～13世紀頃のものが主に含まれ、ＳＲ03（Ａ・Ｂ）部上層と似た様相を示す。

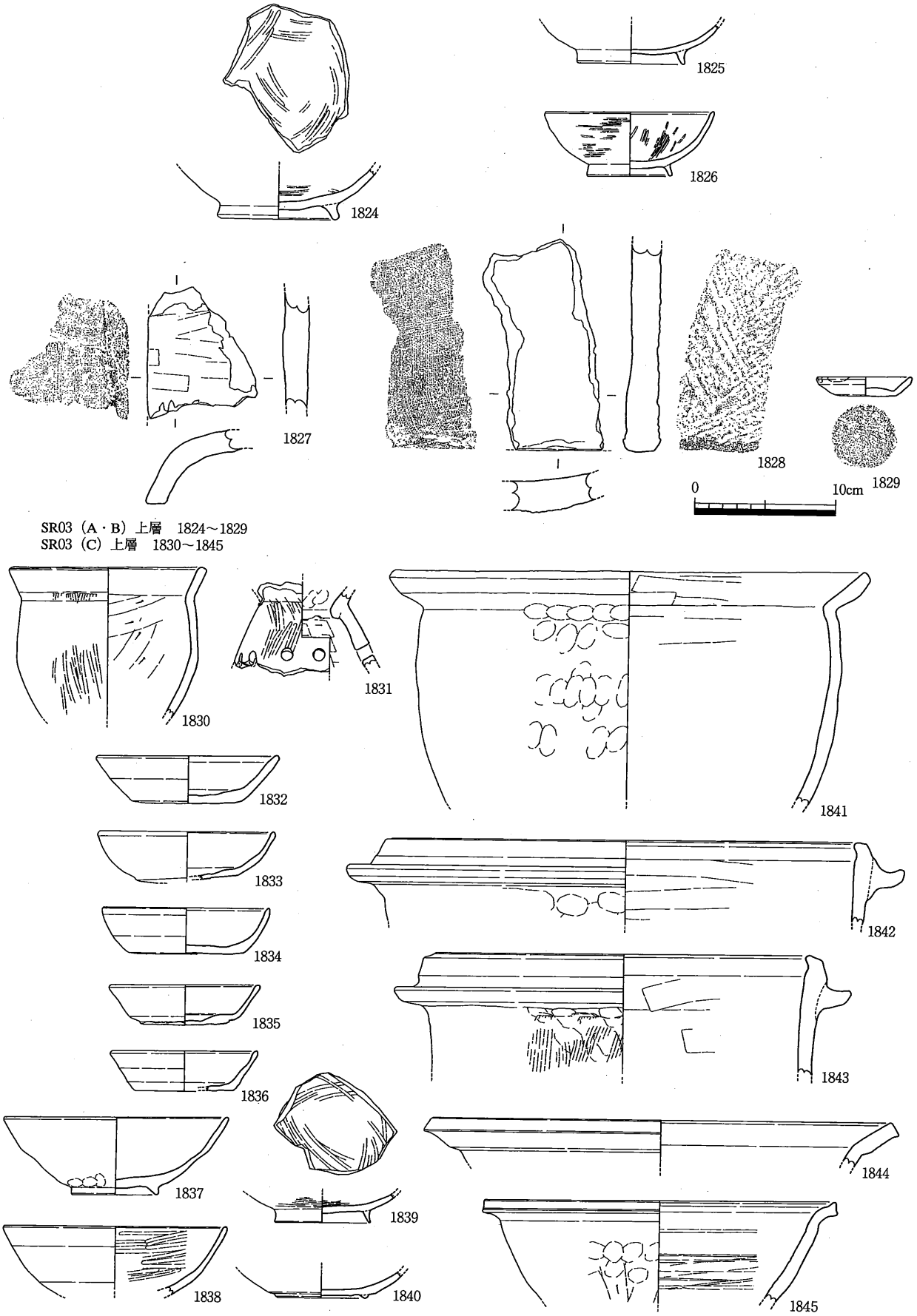
ＳＲ03（Ｄ）上層（第212図、図版89）

ＳＲ03Ｄ（６区①北）の上面に堆積する灰褐色砂質土・粘質土系の埋土である。厚さ約30cm程度である。

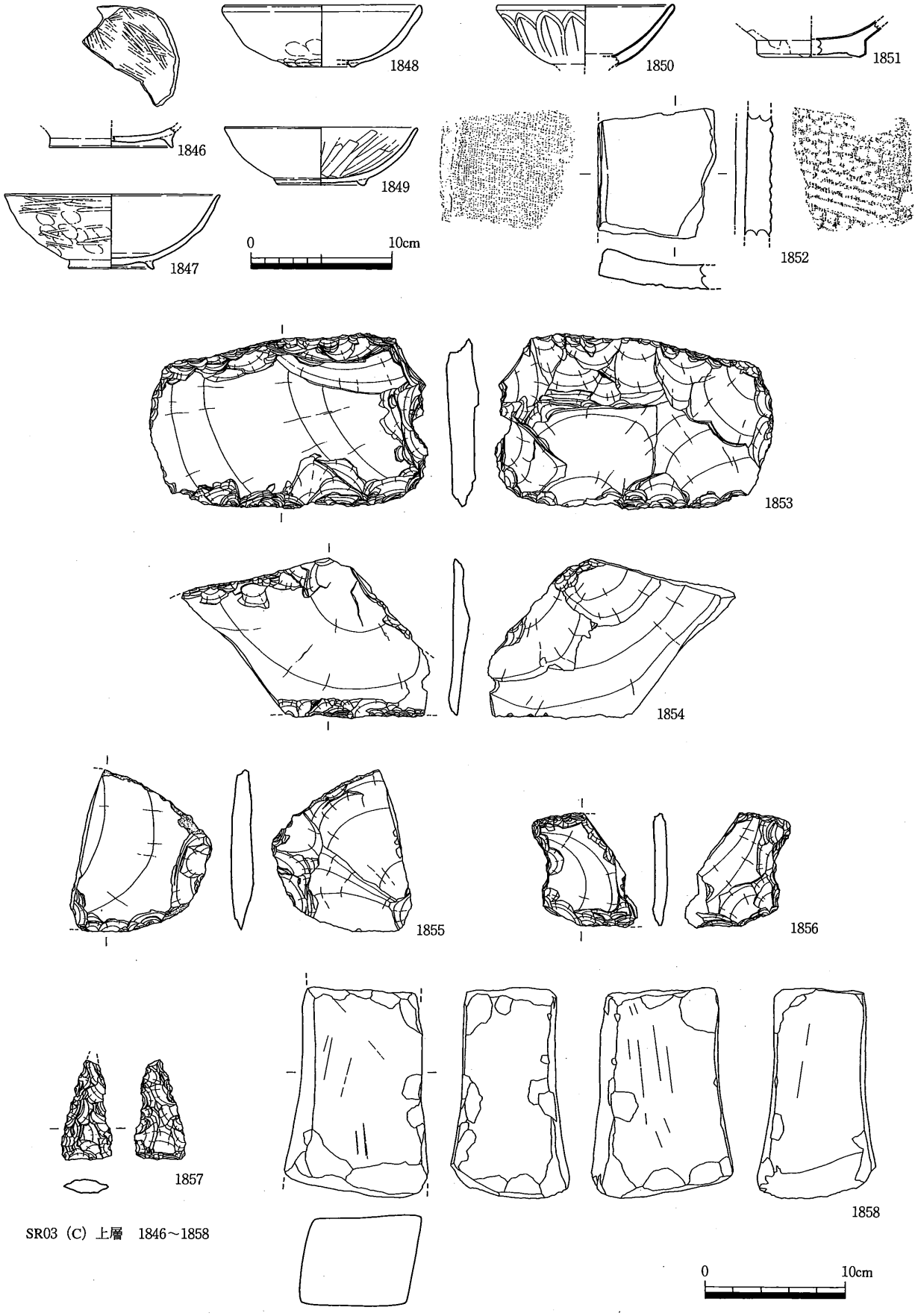
1859は弥生土器。甕。弥生時代後期後半。1860～1863は土師器。1860は杯。外面に回転ナデの痕跡を



第209図　ＳＲ03（Ａ・Ｂ）出土遺物(43)（１／４）

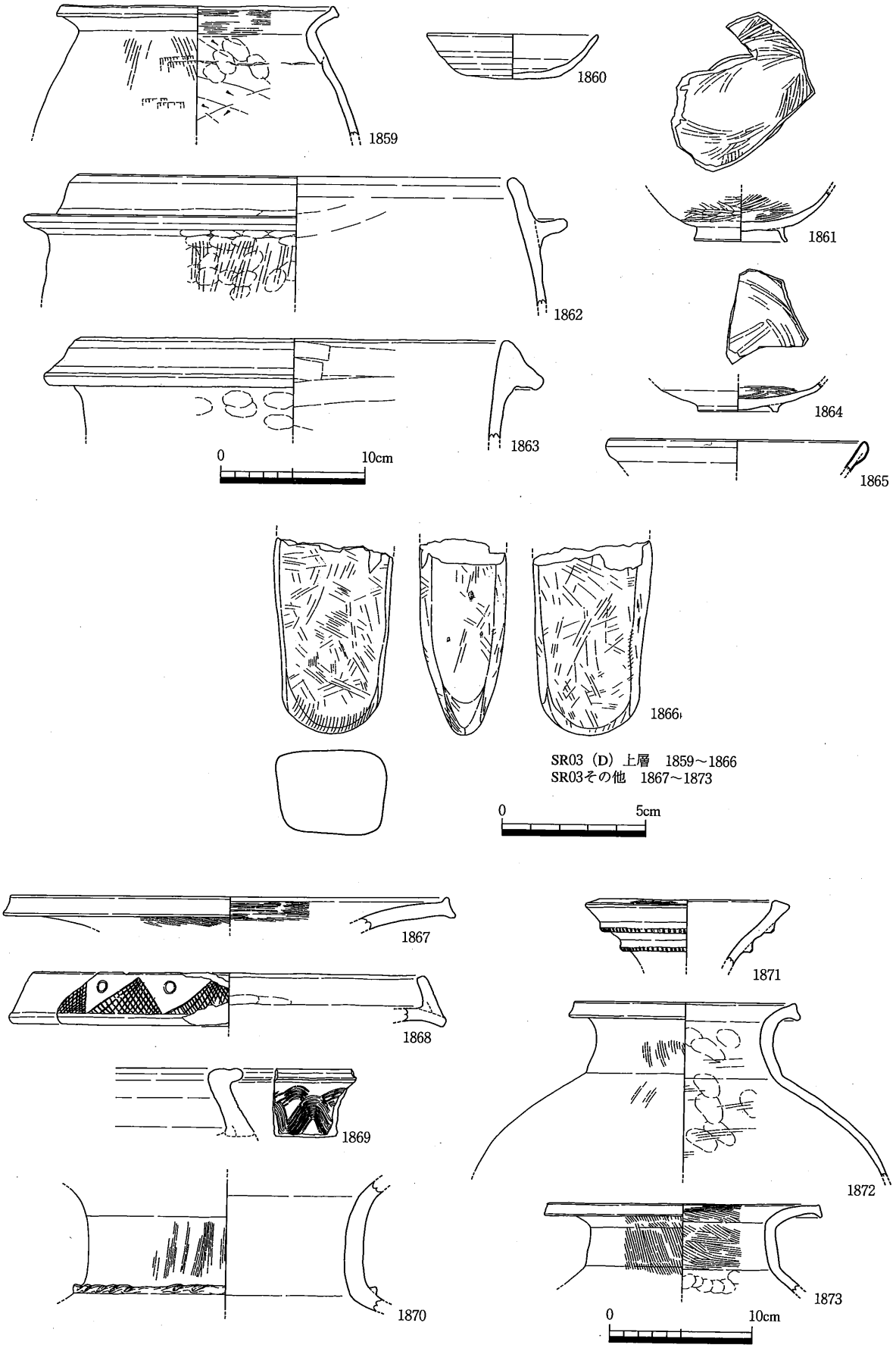


第210図　ＳＲ03(Ａ・Ｂ・Ｃ)出土遺物(44)(１／４)

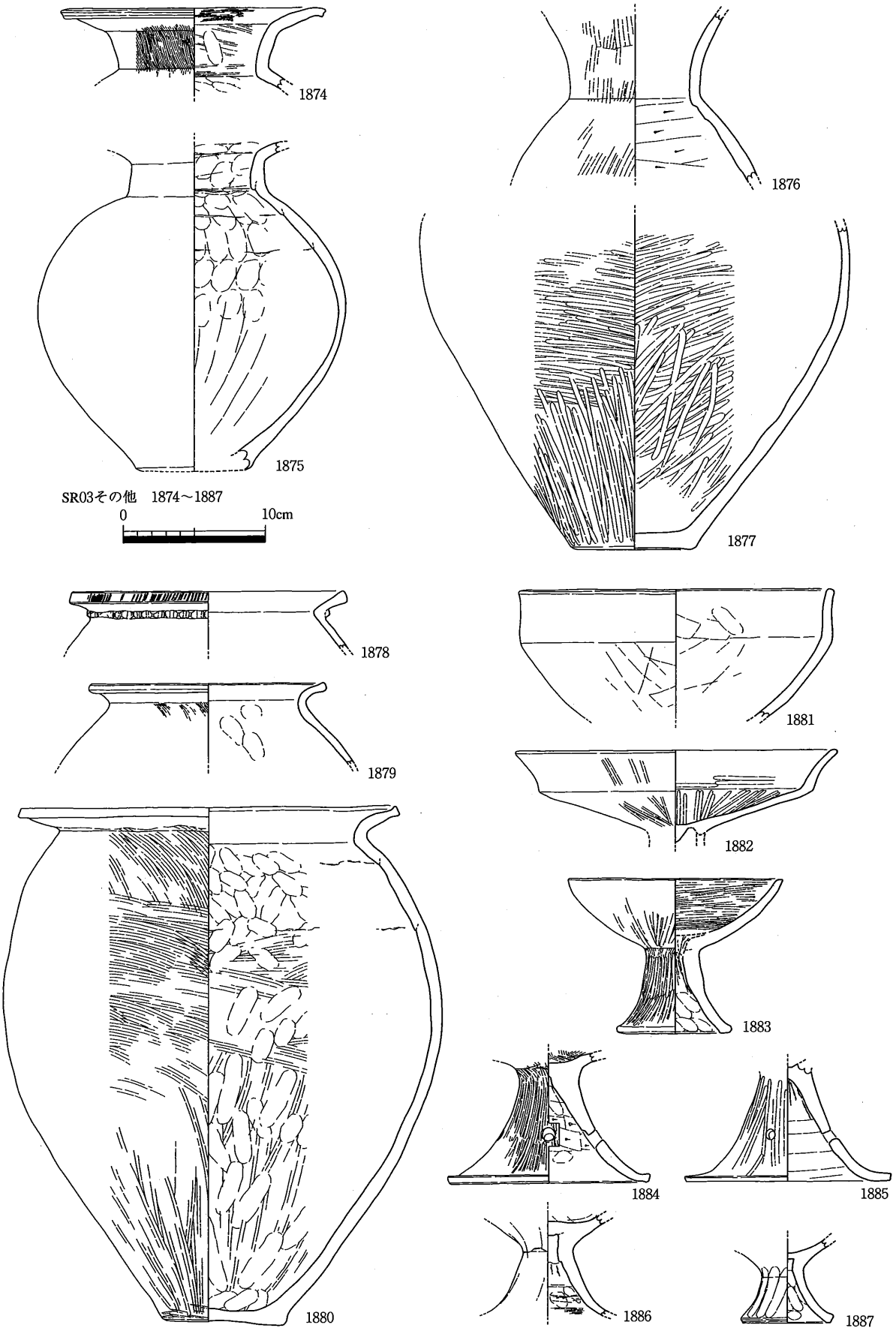


SR03 (C) 上層　1846～1858

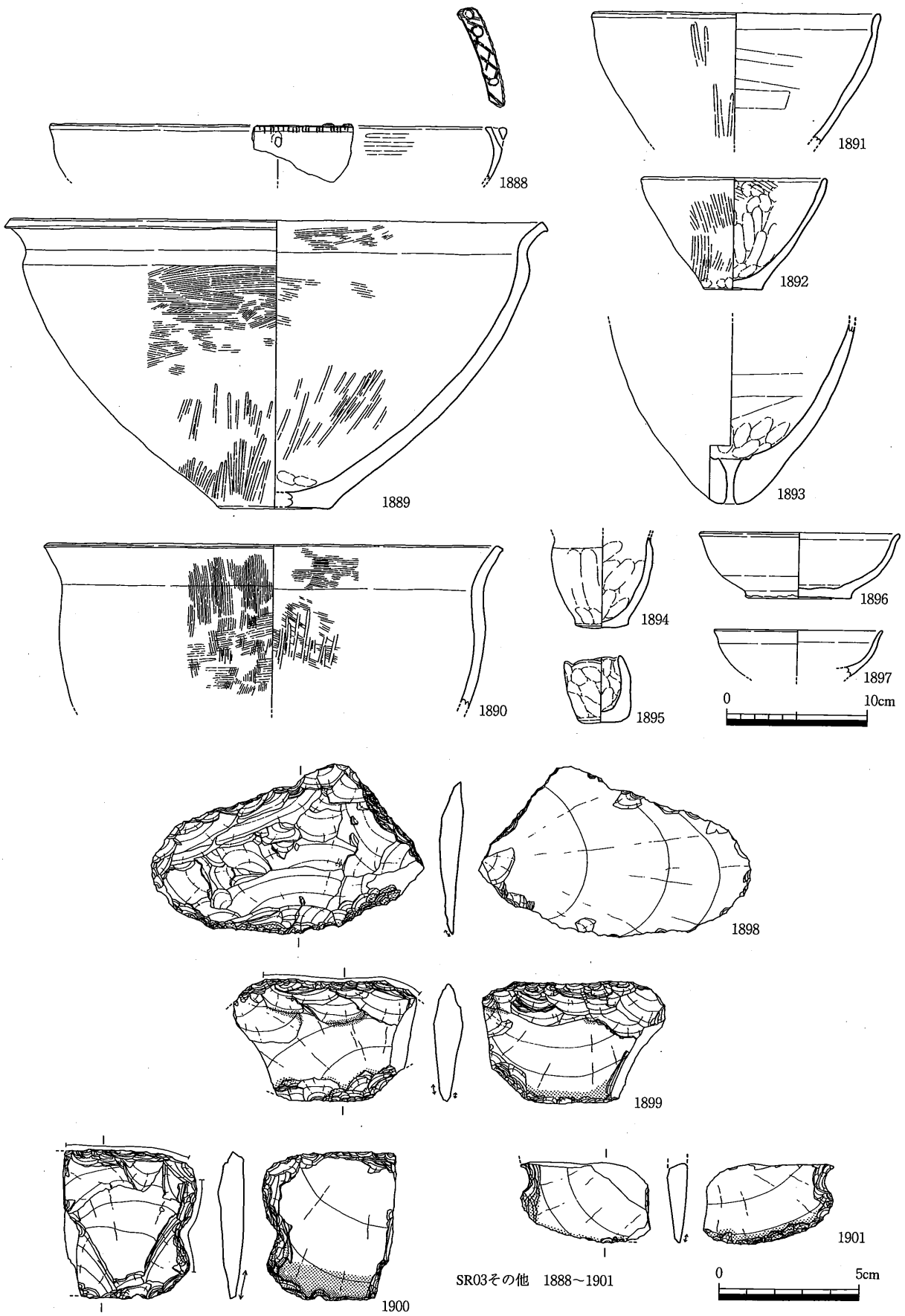
第211図　ＳＲ03(Ｃ)出土遺物(45)(１／４、１／２)



第212図　ＳＲ03(Ｄ)出土遺物㊻(１／４、１／２)



第213図　ＳＲ03出土遺物(47)（１／４）



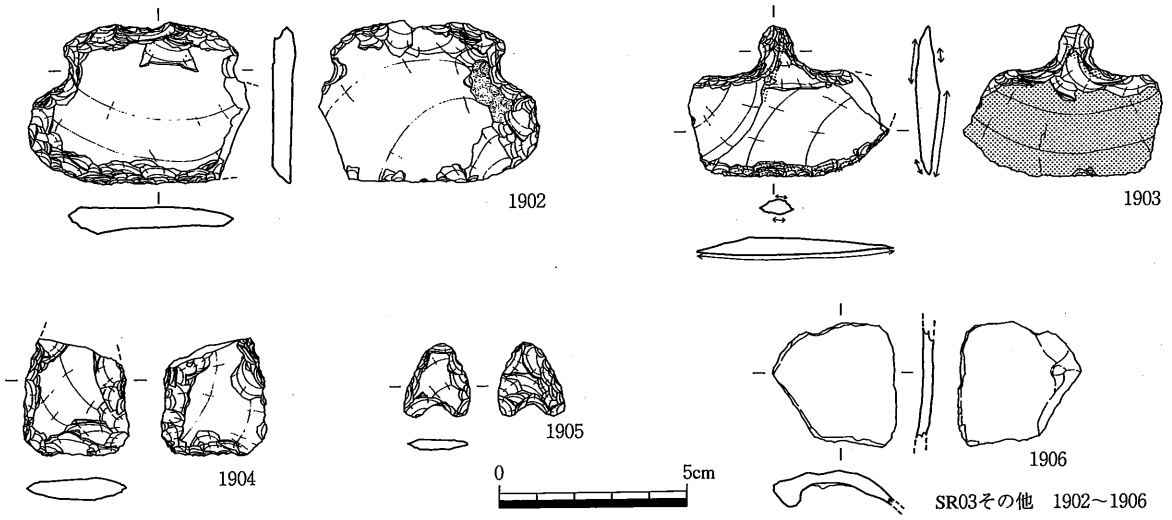
第214図　ＳＲ03出土遺物(48)（１／４、１／２）

明瞭に残し、底部には時計回りのヘラ切り痕を残す。13世紀代。1861は椀。内外面にヘラミガキをする。吉備系土師器椀。11世紀後半頃。1862は足釜。1863は羽釜C。鍔は下側を向き、口縁端部と鍔は一体化に近い。1864は須恵器。椀。1865は白磁碗。12世紀代。1866は砥石。上端は欠損し、下端は細くする。3面に使用痕がみられる。流紋岩製。

SR03　その他（第212～215図、図版77・78・85・86・89～91）

その他トレンチなどで出土した遺物である。

1867～1895は弥生土器。1867～1876は壺。1868・1869は二重口縁壺。1868は口縁の上端部に粘土を足して二重口縁部を作る。口縁部を鋸歯文で飾り、鋸歯文の間には竹管文を1個ずつ配す。1869は二重口縁壺の立ち上がった部分。下端部に剥離痕跡がみられ、外面には波状文がある。1870は壺の頸部。頸部と体部の境に突帯を巡らせ、そこに刻みを入れる。1871は頸部に突帯が付くもの。弥生時代中期後半。1867・1872～1875は広口壺。1872・1873はやや内傾気味の頸部に口縁部が大きく開く。1874は外傾する頸部に口縁部が大きく開く。1875は口縁部は欠損するが、直立する頸部に口縁部が大きく開くと考えられる。1876は長い頸部を持つ壺。1877は底部。しっかりした平底で内外面とも体部中位は横方向、下部は縦方向のヘラミガキをする。弥生時代中期後半。1878～1880は甕。1878は頸部に押圧突帯を付け、口縁端部に斜め方向の刻み目を入れる。1882～1887は高坏。1882は内面体部を横方向の、その他を縦方向にヘラミガキする。底部中心付近には円形に脚部が割れた痕跡があり、中心部は出っ張っている。1883は全体にヘラミガキする。底部が抜けていて、粘土で充填していたものが剥がれ落ちた痕跡と思われる。1884は脚部内面を横方向にヘラ削りする。穿孔は均等に3個所に残存し、4個所に均等に配していたと考えられる。1885は脚部に穿孔が3孔均等に配される。1888～1892は鉢。1888は口縁端部に穿孔し、上面に円形浮文を張る。弥生時代中期後半。1889は赤色顔料が付く鉢と同じタイプの鉢と思われるが、赤色顔料は観察できなかった。1893は甑。1894・1895はミニチュア土器。いずれも指頭痕が顕著。1896は須恵器椀。平底で、体部は丸みがあり、口縁部は外反する。播磨産に似た形態。1897は緑釉陶器椀。土師質で濃い緑色の釉を掛ける。近江産。1898・1899はスクレイパー。1898は裏側はほとんど加工しない。1899は刃部に磨滅痕を残し、上部は潰して加工する。1900～1902は石庖丁。1900は上部を潰して加工する。1901は両端に抉りを入れる。1903は石匙。1904・1905は石鏃。1904は平基式、1905は凹基式。1906は不明金属製品。



第215図　SR03出土遺物(49)（1／2）

7．包含層

3区①包含層（第216・217図、図版78・89・90）

おもに3区①西半部で検出した、ベース面の上面に堆積していた層である。暗褐灰色砂混粘質土・暗灰褐色砂質土を呈し、厚さ20cm前後である。石器や青磁碗を除けば概ね9世紀後半～10世紀前半のもので、鍛冶関連遺構群の遺構検出の際に出土したものが多い。

1907～1913は土師器。1907～1909は杯。すべて回転台土師器。9世紀後半～10世紀前半。1910は椀底部。1911は土師器甕D。口縁端部を上方へつまみ上げる。1912は羽釜A。口縁端部・鍔端部とも上方へ引き上げる。1913は蛸壺。全体になでて仕上げる。真蛸壺。1914は須恵器杯。外面に火襷が掛かる。1915は須恵器甕。体部外面には上から下、左から右の格子タタキ痕が残る。タタキは甕の肩部を持って上から下へ叩くので、下部へ下がるに従い、タタキの方向は斜めになる。口縁部はほとんど横ナデで消しているが、わずかに格子タタキ痕跡が残る。1916は黒色土器B椀。摩滅により調整は不明。1917は緑釉陶器皿。須恵質で内外面ともヘラミガキを密に行った後に施釉する。口縁端部にはわずかに沈線が入る。京都産と考えられる。1918は青磁碗。龍泉窯系。内面と外面高台部付近まで施釉する。見込み部分には「金玉満堂」の銘がある。12世紀半ば～後半。1919は丸瓦。凹面に布目が残る。凸面には板ナデの後わずかにヘラミガキの痕跡がある。1920は平瓦。凹面には粗めの布目が、凸面には縄タタキ痕が斜め方向に残る。左右交互からタタキを行ったと考えられる。1921・1922は鞴羽口。ともに溶融痕跡は残らないが、先端方向が灰色に変色する。1923・1924はスクレイパー。1923は刃部をわずかに加工して作る。1924は2方向に刃を作る。1925は石匙。1926は縦長剥片。1927は石鍬か。左半分は欠損する。上面はつるつるで擦痕が多数残る。欠損後に砥石として再利用したものか。

3区②包含層（第218図、図版78）

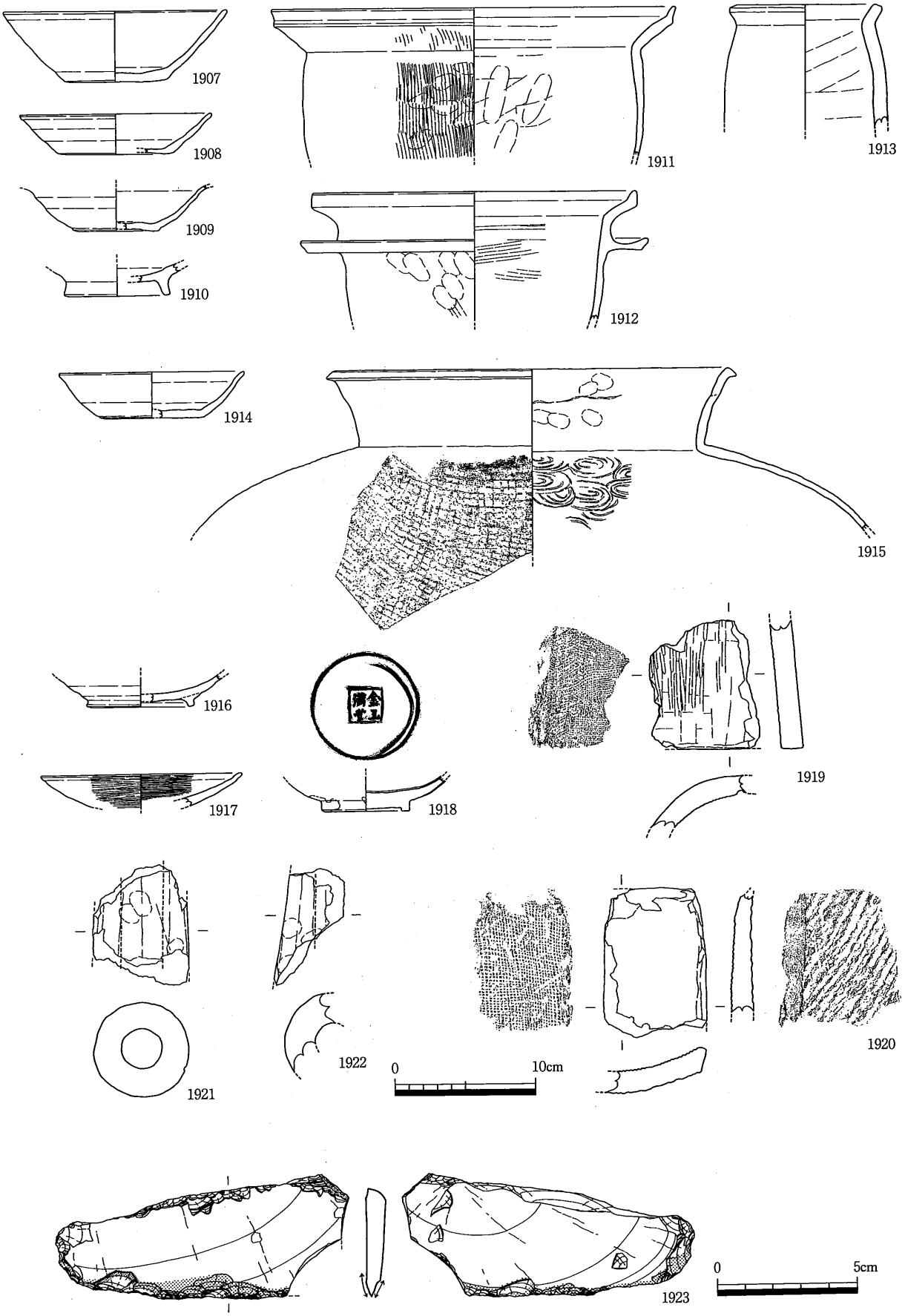
3区②で遺構検出時に出土した遺物である。1929のみ中央付近の攪乱層を除去した際に出土したもの、残りは黒色粘土層から出土したものである。黒色粘土層は、3区①ＳＲ01部分で中央部分に黒色粘土層が厚さ10cmほど堆積しているので、その延長部分に少し堆積していたのかもしれない。この黒色粘土は2区を中心に堆積する黒色粘土層の縁辺部と考えられる。

1928～1930は弥生土器。1928は広口壺。直立する頸部に口縁部が大きく開く。口縁端部には円弧状に粘土を貼り付け、そこに刻み目を入れるものを3個所に貼り付けている。端部には波状文を描く。1930は甕。口縁端部が上部へ立ち上がる。1931は楔形石器。サヌカイト製。

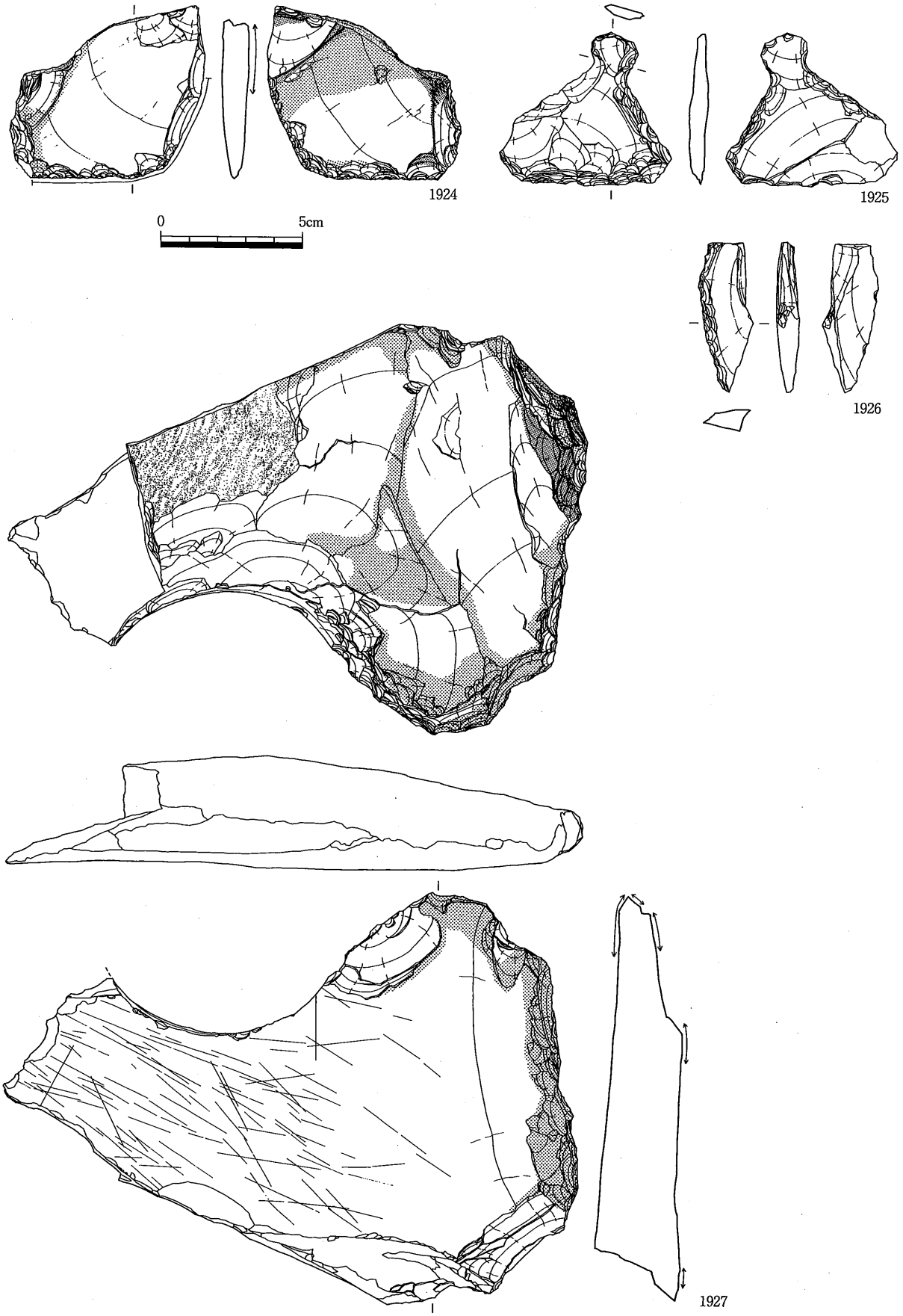
3区④包含層（第219図、図版90）

3区④上面精査などの際に出土した遺物である。1932・1933・1936～1939はＳＨ07付近から出土したもので、もともとＳＨ07の上部包含層に由来する可能性が高い。1934は壁切り中、1935は遺構精査中である。

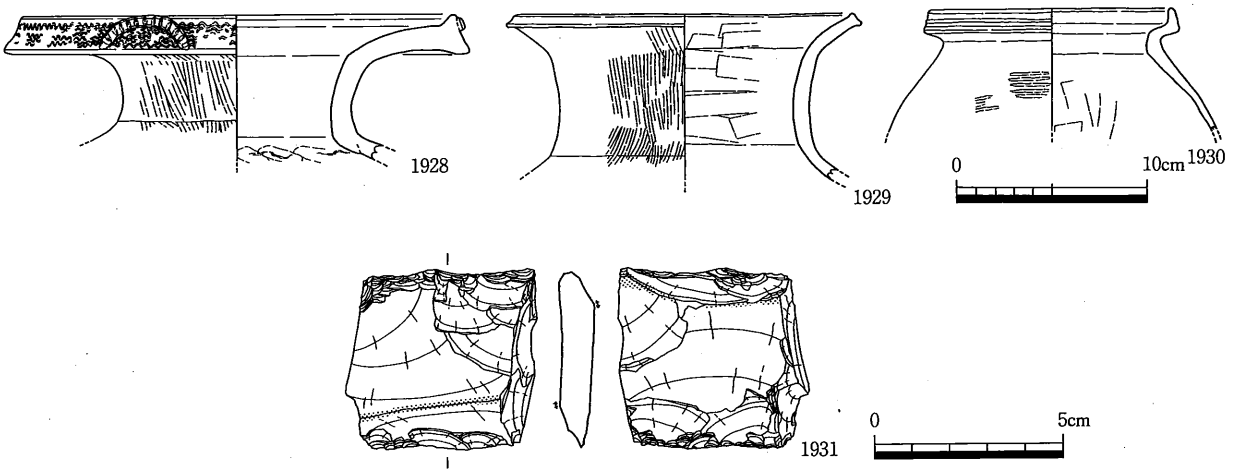
1932～1934は弥生土器。1932は二重口縁壺。口縁部の立ち上がり部分は欠損する。1933・1934は鉢。1933は内外面ともハケ、1934は外面にタタキ痕、内面には板圧痕を残し、底部は平底をしっかり作る。1935は土師器椀。口縁端部に僅かに面を持つ。1936は土師器杯。円盤状高台を持つ。1937は打製石斧。両端部に抉りを入れる。1938・1939は石鏃。1938は平基式。1939は凹基式。



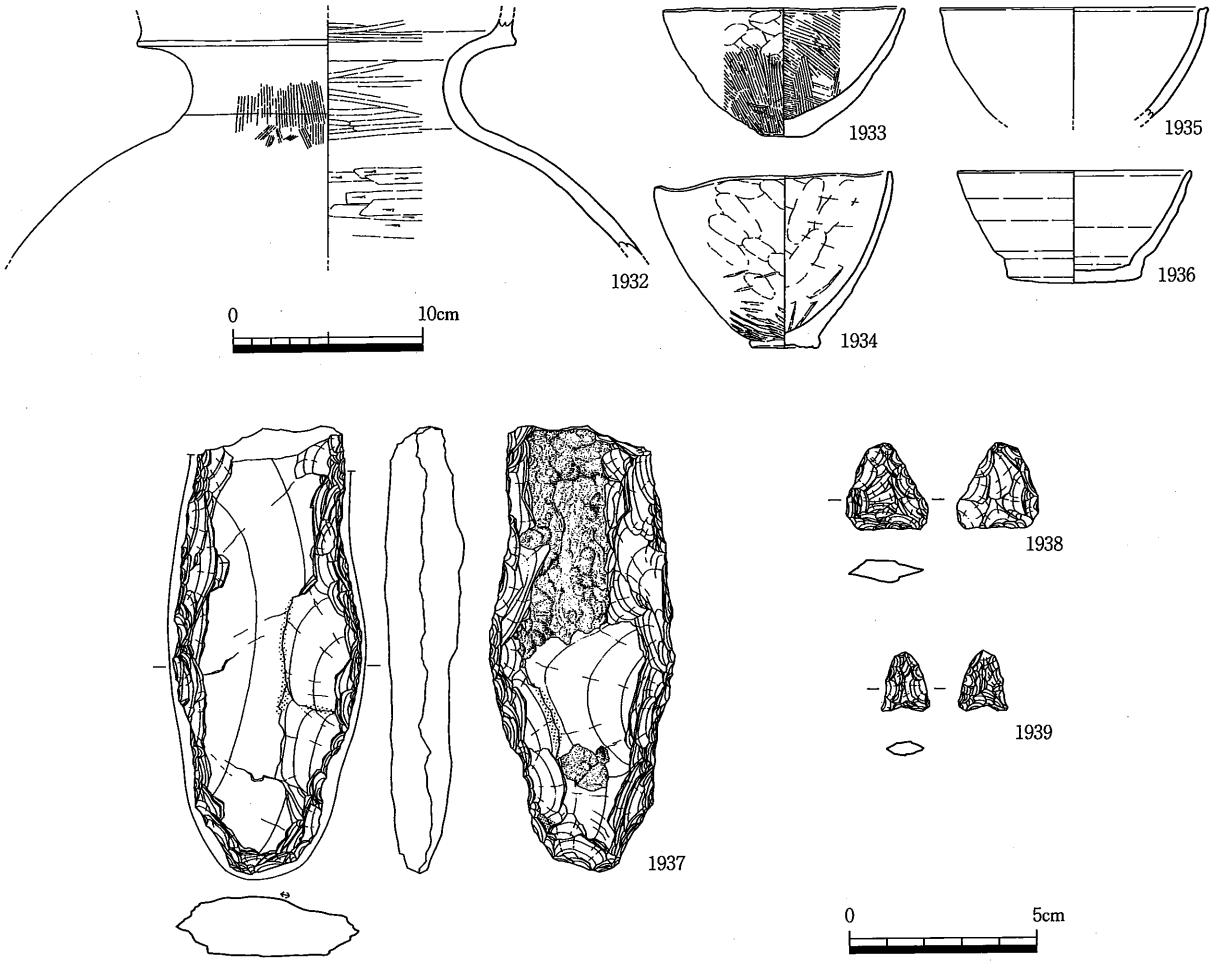
第216図　３区①包含層出土遺物(1)（１／４、１／２）



第217図　３区①包含層出土遺物(2)(１／２)



第218図　３区②包含層出土遺物（１／４、１／２）



第219図　３区④包含層出土遺物（１／４、１／２）

第４章　自然化学分析の調査結果

第1節　川津東山田遺跡I区のプラント・オパール分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出し、その組成や量を明らかにする方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている。

川津東山田遺跡Ｉ区の発掘調査では、土層壁面の調査において畦畔状の盛り上がりが複数認められたことから、これらが当時の水田跡である可能性が推定された。そこで、プラント・オパール分析を行い、水田耕作層の探査を試みることになった。

２．試料

試料採取地点は、調査区北東部の２区③中央畦（ＳＲ02Ｂ－２）南側壁面である。分析試料は、上位より粗砂混じり灰褐色砂質土（試料１）、鉄分を多く含み赤茶色を呈する粗砂混じり灰褐色砂質土（試料２）、鉄分を少量含む粗砂混じり灰褐色砂質土（試料３）、粗砂混じり灰褐色砂質土（試料４）、褐色の強い灰褐色砂質土（試料５）、暗灰褐色粗砂混じり粘質土（試料６）、暗灰褐色砂混じり粘質土（試料７ａ）、色調が薄く砂分の少ない暗灰褐色砂混じり粘質土（試料７ｂ上、７ｂ下）、砂が少し混じる黒灰褐色粘質土（試料８ａ、８ａ下）、灰色の強い黒灰褐色粘質土（試料８ｂ）、黒灰色粘土（試料９ａ）、黒茶灰色粘土（試料９ｂ上、９ｂ下）の各層準より採取された計15点である。

３．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

１）試料土の絶乾（105℃・24時間）

２）試料土約１gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02g）

　※電子分析天秤により１万分の１gの精度で秤量

３）電気炉灰化法による脱有機物処理

４）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）

５）沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥

６）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

７）検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料１ｇ中のプラント・オパール個数（試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}ｇ）を乗じて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキ、タケ亜科については数種の平均値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、8.40、6.31、1.24、0.48である（杉山・藤原、1987）。

４．分析結果

検出されたプラント・オパールは、イネ、キビ族（ヒエ属型）、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属型）、タケ亜科（ネザサ節型、クマザサ属型、その他）および未分類の各分類群である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表３、第220図に示した。おもな分類群については顕微鏡写真を示した。

５．考察

（１）川津東山田遺跡Ｉ区の稲作跡

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行うにあたって、稲作の行われていた可能性が高いと判断されるのは、通常、イネのプラント・オパールが試料１ｇあたりおよそ5,000個以上の密度で検出された場合である。また、当該層においてプラント・オパール密度にピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくいことから、密度が基準値に達していない場合であっても稲作跡である可能性が考えられる。これらのことを基準として稲作跡の可能性について検討を行う。

イネのプラント・オパールが検出されたのは、上位より試料１～８ａ、９ａおよび９ｂの各層準である。したがって、これらの層準において稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、試料１の層準ではプラント・オパール密度が6,100個／g以上と高い値である。また、試料７ｂの層準では上部は2,800個／gとやや低いものの、下部は5,900個／gと高い密度である。なおかつ直上層の試料７ａが低密度であることから上層からの混入は考えにくい。試料２では5,000個／g弱と比較的高い密度である。よって、これらの層準については耕作層であった可能性が高いと判断される。また、試料４の層準ではプラント・オパール密度は3,700個／gとやや低い値であるが、明瞭なピークが認められることから上層からの混入である危険性は考えにくい。こうしたことから、当該層準についても稲作跡である可能性が高いと考えられる。なお、畦畔状の盛り上がりが認められた７ａ、８ａ、９ａの各層準では、いずれもプラント・オパール密度が1,000個／g前後と低い値である。よって、分析的にはこれらの層準を稲作跡と肯定することは難しい。仮にこれらの層準で稲作が行われていたとしたならば、プラント・オパール密度の低いことの原因としては次のようなことが考えられる。１）耕地として利用された期間が短かった、２）休耕期間（休閑）があった、３）田畑輪換が行われていた、４）稲藁の多くが耕作地の外に持ち出されていた、５）稲の生産性が低かったなどである。

（２）プラント・オパール分析から推定される環境

おもな分類群の推定生産量（図の右側）をみると、各層準ともネザサ節型の卓越が顕著である。このことから、調査区および周辺は比較的乾いた環境であったと推察される。ただし、試料１～５、７ａ～

８ｂ、９ｂの層準ではヨシ属も優勢であることから、近傍にはヨシの生育する湿地が存在したと推定される。また、このことは（１）で推定された稲作跡が水田であった可能性を示唆する。試料９ｂ下以外ではススキ属型が検出されていることから、各層準とも近傍にススキ属も生育していたとみられる。とくに試料２、３、５、７ｂ、８ａの各層準では比較的多かったと推定される。なお、試料２、７ｂ下および８ａからはヒエ属型とみられるプラント・オパールが検出されている。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点ではこれらを明確に識別するには至っていない（杉山ほか、1988)。したがって、ここでヒエが栽培されていたかどうかは不明であるが、検出された層準はいずれも稲作層と判断されたところであり、さらにいずれも密度は1,000個／g前後と低いことから、これらは雑草のイヌビエあるいは水田雑草のタイヌビエである可能性が高い。

６．まとめ

川津東山田遺跡Ｉ区においてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の探査を試みた。その結果、上位より試料１、試料２、試料４および試料７ｂの層準で稲作が行われていた可能性が高いと推定された。なお、畦畔状の高まりが確認されていた試料７ａ、８ａおよび９ａの各層準については、稲作跡であることを積極的に肯定することはできなかった。

文献

杉山真二・藤原宏志（1987）川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析．赤山－古環境編－．川口市遺跡調査会報告、10、281－298.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－．考古学と自然科学、20、p.81－92.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、９：15－29.

藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O.s a tiv a L.）生産総量の推定－、考古学と自然科学、12:29－41.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－、考古学と自然科学、17：73－85.

検出密度（単位：×100個/g）

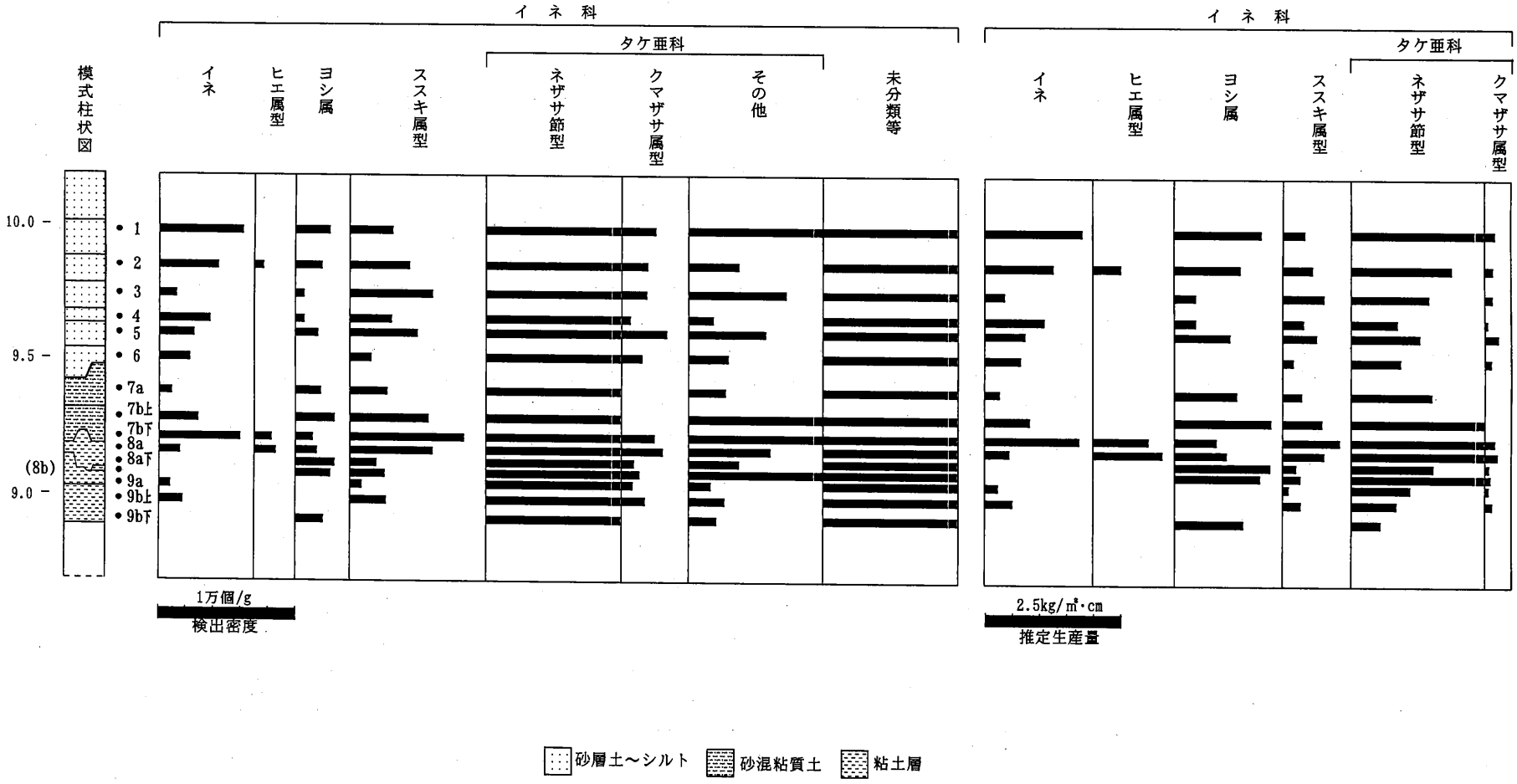
分類群（和名・学名）	土層	2区③中央畦														
		1	2	3	4	5	6	7a	7b上	7b下	8a	8a下	8b	9a	9b上	9b下
イネ科	Gramineae (Grasses)															
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	61	43	12	37	25	22	9	28	59	15			8	17	
ヒエ属型	*Echinochloa* type		6							12	15					
ヨシ属	*Phragmites*	25	19	6	6	16		18	28	12	15	28	25			20
ススキ属型	*Miscanthus* type	31	43	60	30	49	15	27	57	83	60	19	25	8	26	
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)															
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	479	389	299	177	263	189	311	509	920	642	317	501	226	173	111
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	25	19	18	6	33	15			24	30	9	13	8	17	
その他	Others	154	37	72	18	57	29	27	141	106	60	37	100	16	26	20
未分類等	Unknown	1093	611	717	402	689	408	778	1245	1840	1374	681	1301	792	711	688
プラント・オパール総数		1806	1117	1172	640	1108	655	1162	1981	2984	2181	1092	1964	1051	954	840

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

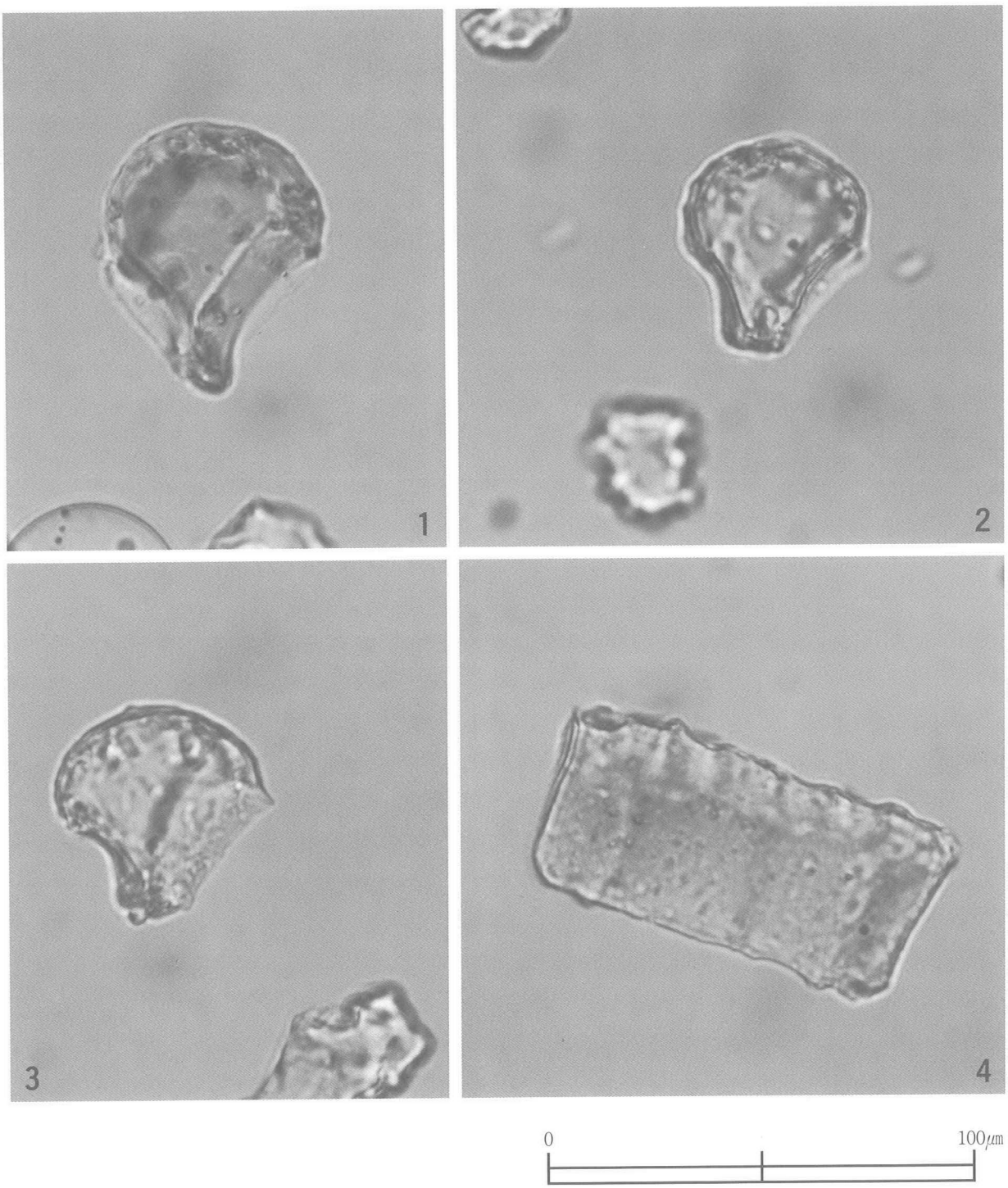
イネ	*Oryza sativa* (domestic rice)	1.81	1.27	0.35	1.08	0.72	0.64	0.27	0.83	1.73	0.44			0.24	0.51	
ヒエ属型	*Echinochloa* type		0.52							0.99	1.25					
ヨシ属	*Phragmites*	1.55	1.17	0.38	0.38	1.04		1.15	1.79	0.74	0.94	1.77	1.58			1.28
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.38	0.54	0.74	0.38	0.61	0.18	0.34	0.70	1.02	0.74	0.23	0.31	0.10	0.32	
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa* type	2.30	1.87	1.43	0.85	1.26	0.91	1.49	2.44	4.42	3.08	1.52	2.40	1.09	0.83	0.53
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*) type	0.18	0.14	0.13	0.05	0.25	0.11			0.18	0.22	0.07	0.09	0.06	0.13	

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

表3　川津東山田遺跡Ⅰ区のプラント・オパール分析結果

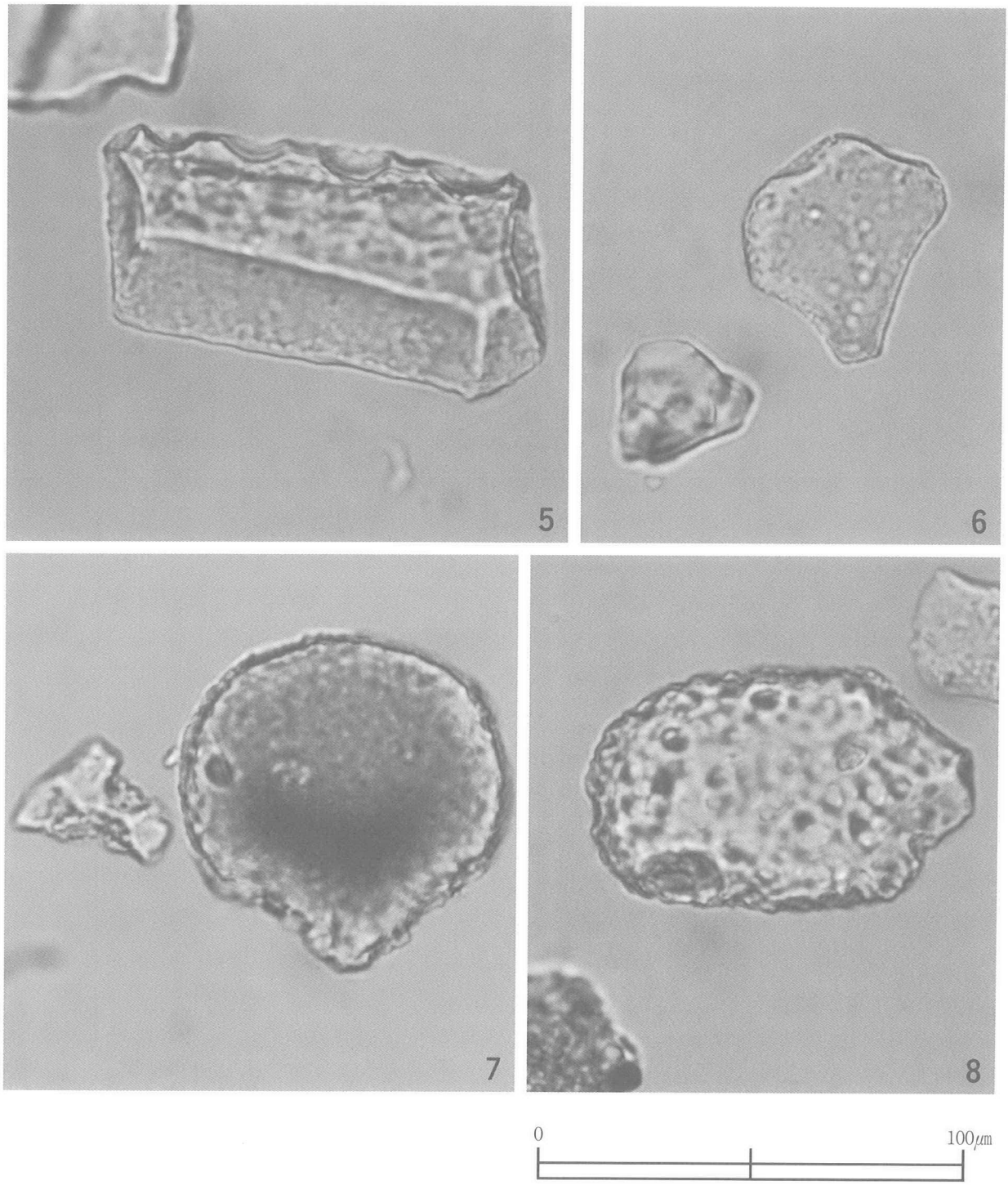


第220図　川津東山田遺跡Ⅰ区におけるプラント・オパール分析結果



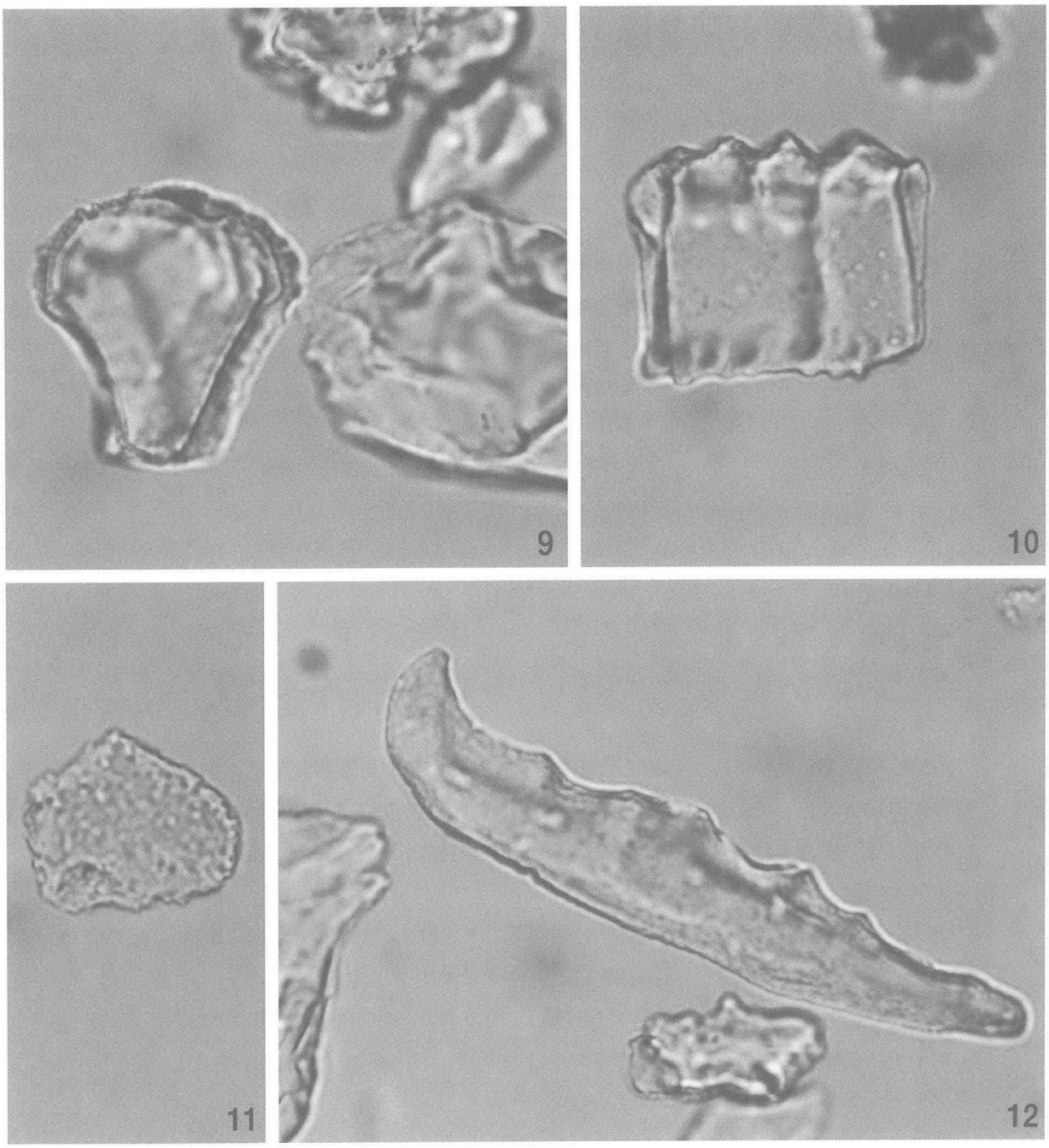
1	イ　　ネ	試料１
2	イ　　ネ	試料４
3	イ　　ネ	試料７ｂ下
4	キ　ビ　属（ヒエ属型）	試料７ｂ下

写真１　プラント・オパール（植物珪酸体）の顕微鏡写真(1)



5	キ　ビ　属（ヒエ属型）	試料８ａ
6	ウシクサ属（ススキ属）	試料７ｂ下
7	ヨ　シ　属	試料７ｂ上
8	ヨ　シ　属	試料８ａ下

写真２　プラント・オパール（植物珪酸体）の顕微鏡写真(2)



9	タケ亜科（ネザサ節型）	試料７ｂ下
10	タケ亜科（ネザサ節型）	試料８ａ
11	タケ亜科（クマザサ属型）	試料５
12	その他（樹木起源？）	試料８ａ

写真３　プラント・オパール（植物珪酸体）の顕微鏡写真(3)

第2節　川津東山田遺跡Ⅰ区出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・ＴＡＣセンター
大澤正己・鈴木瑞穂

1　いきさつ

坂出市川津町の飯野山北麓に位置する川津東山田遺跡Ⅰ区では、10世紀前半に比定される遺構から椀形鍛冶滓・羽口・含鉄鉄滓・鉄塊系遺物などの鍛冶関連遺物が出土している。このため当遺跡における鉄器生産の実態について検討する目的から金属学的調査を行う運びとなった。

2　調査方法

2－1　供試材

表４に示す。鍛冶関連遺物計９点の調査を行なった。

2－2　調査項目

(1)　肉眼観察

遺物の肉眼観察所見。これらの所見をもとに分析試料採取位置を決定する。

(2)　マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面全体像を、投影機の10倍もしくは20倍で撮影したものを指す。当調査は、顕微鏡検査によるよりも広い範囲にわたって、組織の分布状態、形状、大きさなどの観察ができる利点がある。

(3)　顕微鏡組織

切り出した試料をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の＃150、＃240、＃320、＃600、＃1000と順を追って研磨し、最後は被研磨面をダイヤモンド粒子の３μと１μで仕上げて光学顕微鏡観察を行った。なお、金属鉄の炭化物は、ピクラル（ピクリン酸飽和アルコール液）で、フェライト結晶粒は５％ナイタル（硝酸アルコール液）で、腐食（Etching）している。

(4)　ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成と、金属鉄の組織同定を目的として、ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用した。

(5)　ＣＭＡ（Computer Aided X-Ray Micro Analyzer）調査

ＥＰＭＡ（Electron Probe Micro Analyzer）にコンピューターを内蔵させた新鋭分析機器である。旧式装置は別名Ｘ線マイクロアナライザーとも呼ばれる。分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性Ｘ線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に標準試料とＸ線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。化学分析を行えない微量試料や鉱物組織の微小域の組織同定が可能である。

(6) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）、：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、五酸化燐（P_2O_5）、バナジウム（V）、銅（Cu）、：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法 ：誘導結合プラズマ発光分光分析。

(7) 耐火度

耐火度の加熱に耐える温度とは、溶融現象が進行の途上で軟化変形を起こす状態度の温度で表示することを定め、これを耐火度と呼んでいる。試験には三角コーン、つまりゼーゲルコーンが溶倒する温度と比較する方法を用いている。

3 調査結果 （ ）は報文番号

KWT－1 羽口 (331)

① 肉眼観察：先が僅かにすぼまる形状の羽口片である。先端・基部側は欠損する。胎土は硬質で緻密な粘土質で、籾を少量混和する。外面先端側の色調は被熱のため灰白色に変色している。地の色調は淡い橙色である。

② 顕微鏡組織：Photo. 1 ①～③に示す。①は羽口胎土である。鱗片状の粘土鉱物（Cerisite）中に微細な角張った形状の砂粒が混入する。②③は外面表層部分で、熱影響を受けて粘土鉱物がやや非晶質化する。

③ 化学組成分析：Table. 2 に示す。強熱減量（Ig loss）8.45％と熱影響は少なく結晶構造水の飛散はあまりない状態での分析である。鉄分（Fe_2O_3）は5.44％と高く軟化性に問題のある数値であった。酸化アルミニウム（Al_2O_3）は15.60％と低く耐火性に不利である。

なお自媒剤となる塩基性成分（CaO＋MgO）は1.58％であった。胎土中への砂鉄の混入はあまりなく、二酸化チタン（TiO_2）は0.63％止まりである。

④ 耐火度：胎土をゼーゲルコーンという三角錐の試験片に作り、1分間当り10℃の速度で1000℃まで温度上昇させ、以降は4℃に昇温速度をおとし、試験片が荷重なしに自重だけで軟化し崩れる温度が1090℃であった。成分系を反映してか耐火性の低い性状であった。

KWT－2 椀形鍛冶滓（大）(336)

① 肉眼観察：平面不整六角形を呈する椀形鍛冶滓である。側面6面は全面破面であるが完形に近い試料である。全面黄褐色の酸化土砂が固着しており、地の観察が困難であるが、上面は平坦気味でガラス質滓の凸部が1個所認められる。羽口溶融物の垂下痕であろう。下面側は幅1㎝程の木炭痕が散在し、ごく薄く灰白色の鍛冶炉床粘土が付着する。滓の地は灰色で風化気味である。そのためか全面に細かい亀裂が認められる。

② 顕微鏡組織：Photo. 1 ④～⑧に示す。④は表層部分で、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）、白色樹枝状結晶ヴスタイト（Wustite：FeO）が基地の暗黒色ガラス質滓

中に晶出する。⑤⑥も④と同様の鉱物組成であるが、こちらは結晶の形態が明瞭である。⑦⑧白色粒状結晶ヴスタイト（Wustite：FeO）が凝集気味に晶出する個所を示す。鉄素材の繰返し折り曲げ鍛接の高温作業で排出された鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③　ビッカース断面硬度：Photo. 1 ⑧に白色粒状結晶凝集部分の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は447Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値450～500Hv（注１）の下限を僅かに下回るが、誤差の範囲内といえよう。ヴスタイトに同定される。

④　化学組成分析：Table. 2 に示す。脈石成分（TiO_2、V、MnO）の低減した成分系である。全鉄分（Total Fe）40.63%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.04%、酸化第１鉄（FeO）41.36%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）12.07%の割合であった。ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）40.50%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）2.26%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）0.29%、バナジウム（V）0.01%と低く、酸化マンガン（MnO）も0.13%と低値で、銅（Cu）は0.002%であった。鍛錬鍛冶滓の成分系である。

KWT－３　椀形鍛冶滓（中）（337）

①　肉眼観察：厚手でやや歪な形状の椀形鍛冶滓である。上下で中心がややずれた２段椀形鍛冶滓の可能性がある。また、風化のため分かりづらいが側面２面は破面と考えられる。全面に細かい木炭痕がやや密に認められる。滓の地は灰色で細かい気孔が散在する。

②　顕微鏡組織：Photo. 2 ①～③に示す。①は表層の銹化鉄部を示す。微かにパーライト組織痕跡が認められて亜共析鋼（0.77％C以下）止まりである。②③は滓部で白色粒状結晶ヴスタイト（Wustite：FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：2FeO･SiO_2）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③　ビッカース断面硬度：Photo. 2 ③に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は469Hvであった。ヴスタイト（Wustite：FeO）の文献硬度値の範囲内で、ヴスタイトに同定される。

④　化学組成分析：Table. 2 に示す。全鉄分（Total Fe）51.64%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.19%、酸化第１鉄（FeO）45.34%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）23.17%の割合であった。ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）24.66%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）1.51%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO2）0.52%、バナジウム（V）0.02%と低く、酸化マンガン（MnO）も0.33%と低めで、銅（Cu）0.002%であった。鍛錬鍛冶滓の成分系である。

KWT－４　椀形鍛冶滓（小）（763）

①　肉眼観察：小型で偏平な椀形鍛冶滓である。側面１面が大きく破面。上面側は部分的にやや気孔が集中する個所が認められ、周囲に細かい木炭痕が散在する。下面でも細かい木炭痕が散在し、１個所小さく光沢のある黒色ガラス質滓部分が認められる。滓の地は灰色で、一部表層にガスが抜けきらないような細かい気孔が集中する部分があるが、全体に緻密な滓である。

②　顕微鏡組織：Photo. 2 ④～⑧に示す。④は滓表面に固着した酸化土砂中に多数混入する鍛造剥片である（注２）。これは赤熱鉄素材の鍛打で剥落した酸化膜で鍛錬鍛冶を実証する。⑤⑥は滓中の銹化鉄部分である。微かにフェライトと層状のパーライト痕跡が残存しており、極低炭素鋼に分類される。⑦⑧は滓部で白色粒状結晶ヴスタイト（Wustite：FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファ

イヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③　ビッカース断面硬度：Photo. 2⑧に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は463Hvであった。ヴスタイト（Wustite：FeO）に同定される。

④　化学組成分析：Table. 2に示す。全鉄分（Total Fe）52.54%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.14%、酸化第1鉄（FeO）46.56%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）23.18%の割合であった。ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）24.31%で、このうちに塩基性成分（CaO＋MgO）2.02%を含む。砂鉄特有成分の二酸化チタン（TiO_2）0.63%、バナジウム（V）0.02%と低めで、酸化マンガン（MnO）も0.12%と低く、銅（Cu）0.007%であった。鍛錬鍛冶滓に分類される。

KWT－5　椀形鍛冶滓（小）（764）

①　肉眼観察：偏平で小型の含鉄椀形鍛冶滓片である。淡褐色の酸化土砂が分厚く固着するため地の観察が困難な個所があるが、周囲の側面5面は破面と考えられる。そのうち2面は新しい破面で、一部茶褐色に銹化した含鉄部が確認される。金属探知器での反応はなかった。試料上面は凹面を呈し細かい木炭痕が散在する。滓の地は光沢のある黒灰色で表層側に細かい気孔が散在する。

②　マクロ組織：Photo. 7に示す。やや不定形の気孔が特に上面側に散在する。また表層に沿ってごく小さな銹化鉄部分がみられる。ヴスタイト（Wustite：FeO）結晶粒が全体的に小さく樹枝状に晶出するが、特に下面側では微細である。1個所木炭を噛み込んでいる。

③　顕微鏡組織：Photo. 3に示す。①～④は表層の酸化土砂中に混入する鍛造剥片である。鍛造剥片の被膜構成は、表層は極薄のヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、内層ヴスタイト（Wustite：FeO）の3層分離型である。いずれも内層ヴスタイトが非晶質化した鍛打工程の後半段階の派生物と考えられる。⑤～⑨は滓部で白色粒状結晶ヴスタイト（Wustite：FeO）、淡灰色木ずれ状結晶ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が基地の暗黒色ガラス質滓中に晶出する。なおヴスタイト粒内に微小析出物が認められる。ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）系の析出物と推測される。

④ビッカース断面硬度：Photo. 3⑤に白色粒状結晶の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は503Hvであった。ヴスタイトの文献硬度値の上限を僅かに上回るが、誤差の範囲内といえよう。析出物が硬化の要因となった可能性もあるかもしれない。

KWT－6　含鉄鉄滓（1188）

①　肉眼観察：小型不定形滓で破面をもたぬ完形の含鉄鉄滓である。滓は黒灰色のガラス質分の高そうな軽い質感のもので、部分的に茶褐色の銹化による変色部分が認められる。各面には小さな木炭痕が僅かにみられる。端部で金属探知器H（○）での反応がある。

②　マクロ組織：Photo. 7に示す。試料先端の12×7㎜程の鉄部を中心に示している。共析鋼（0.77%C）クラスで全面パーライトで黒色層状で少々見ずらい状態にある。細かい気孔が多数散在し、周囲より銹化が進行している。また周囲の滓部の風化も顕著である。

③　顕微鏡組織：Photo. 4に示す。①は滓部で白色粒状結晶ヴスタイト（Wustite：FeO）がやや凝集気味に晶出する。風化の影響が著しいので、前にみてきた結晶とはいささか異なった印象を与

えている。鉱物相から鍛冶系の含鉄鉄滓と判断される。②～⑨は金属鉄を５％ナイタルで腐食して現れた組織である。②③はパーライト基地に初析フェライトが針状や網目状に析出する亜共析組織の個所である。④はほぼ全面パーライトの共析組織部分、⑤はマルテンサイト組織部分を示す。パーライト組織の素地中にブロック状にマルテンサイト組織を呈する個所が認められ、パーライトが析出する共析温度（727℃）以下の温度領域から急冷されたものと考えられる。

④　ビッカース断面硬度：Photo.4⑥～⑨に金属鉄組織の硬度測定の圧痕を示す。⑥は針状フェライトが析出する個所で、硬度値は130Hvであった。⑦はパーライト基地に初析フェライトが析出する個所で硬度値は290Hv、⑧は全面パーライト部分で硬度値は332Hv、また⑨はマルテンサイト部分で硬度値は930Hvであった。各組織の硬度値は相対的な差異でもって対応するが、各値はやや高め傾向にある。

KWT－７　鉄塊系遺物（292）

①　肉眼観察：平面不整楕円形でやや偏平な鉄塊系遺物である。表層には僅かに薄く灰色の滓が付着する。全体に放射割れが顕著で、一部表層が剥落している。吸炭の進んだ鍛冶系鉄塊系遺物と考えられる。金属探知器Ｈ（○）での反応がある。

②　マクロ組織：Photo. 8 に示す。銹化が進行して端部の一部に金属鉄が遺存するのみであるが、まとまりのよい鉄塊であった。組織的にはパーライト素地に針状セメンタイトが析出する過共析組織から白鋳鉄およびねずみ鋳鉄組織が混在する。

③　顕微鏡組織：Photo. 5 に示す。①表層のごく僅かに固着する滓部は暗黒色ガラス質滓の素地中に淡茶褐色多角形結晶ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）が晶出する。また共存する銹化鉄には、針状セメンタイトが析出する過共析組織痕跡が認められる。②は鉄中非金属介在物で、黄褐色微小異物は硫化鉄（FeS）である。③～⑨は金属鉄を５％ナイタルで腐食して現れた組織を示す。③の写真左側は片状黒鉛を析出するねずみ鋳鉄組織、右側は蜂の巣状のセメンタイトとオーステナイトの共晶であるレデブライトが認められる白鋳鉄組織である。④⑤はまだ十分に成長しきっていない亜共晶組成白鋳鉄組織を示す。含有炭素量がやや低いためパーライトの面積率が大きい。⑥も亜共晶組成白鋳鉄部分である。こちらは成長の進んだ組織である。

④　ビッカース断面硬度：Photo. 5 の⑦～⑨に金属鉄組織の硬度測定の圧痕を示す。⑦は板状セメンタイトに囲まれたパーライトが晶出する個所で、硬度値は412Hvであった。また⑧はセメンタイト部分で硬度値は504Hv、⑨はレデブライト部分で硬度値は680Hvであった。それぞれが組織に対応した値である。

⑤　ＣＭＡ調査：Photo.10に表層僅かに固着する滓部の特性Ｘ線像と定量分析値を示す。

ＣＯＭＰ（反射電子像）に１の番号をつけた不定形結晶の定量分析値は55.1％FeO－28.6％TiO_2－8.9％V_2O_3－2.2％Cr_2O_3であった。また３の番号をつけた不定形結晶の定量分析値も56.4％FeO－29.4％TiO_2－8.6％V_2O_3－1.6％Cr_2O_3と近似する値を示した。いずれもウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）に同定されてCrの固溶が注目される。２は素地部分で定量分析値は60.9％SiO_2－14.8％Al_2O_3－2.8％CaO－3.1％K_2O－16.6％FeO－3.8％TiO_2－1.6％Cr_2O_3であった。珪酸塩系でここでもTiやCrを固溶する。

ウルボスピネル（Ulvospinel：$2FeO \cdot TiO_2$）が確認されたことから砂鉄系を原料とする製錬生成

物であることが明らかになった。さらにバナジウム（V）、クロム（Cr）が検出されたことが特徴的である。

最近四国における製鉄・鍛冶関連遺跡調査の結果、四国地域に賦存する砂鉄はクロム（Cr）を比較的多く含有することが明らかになっている（注５）（注６）（注７）。このため当試料も在地に賦存する砂鉄が原料である可能性が考えられる。現状では該期の四国地域における製鉄に関してほとんど分っていないが、当地域周辺における製鉄遺跡の存在を示唆しうるものとして注目される（注８）。

KWT－８　棒状鉄片（291）

① 肉眼観察：全体が褐色の酸化土砂に分厚く覆われた棒状の鉄器破片である。両端は破面で５×４㎜程の隅丸長方形の破面が認められる。銹化が進行しており金属探知器での反応はない。

② マクロ組織：Photo. 8 に示す。断面形は方形状。銹化により金属鉄は遺存しない。中核部は空洞になり外装は層状に剥離を起こしており鍛造品と判断される。

③ 顕微鏡組織：Photo. 6 ①～③に示す。金属鉄は遺存しないが、微かにフェライト粒と少量のパーライト痕跡が認められる個所がある。この痕跡から含有炭素量は0.1％以下の極軟鋼と推定される。

KWT－９　板状鉄片（290）

① 肉眼観察：全体が褐色の酸化土砂に分厚く覆われた厚さ５㎜程の板状の鉄器破片である。銹化が進行しており金属探知器での反応はない。

② マクロ組織：Photo. 8 に示す。断面はもともと紡錘形といおうか、凸レンズ状と表現すべく両端が窄まり、銹化により中央部が膨らんだ形状を呈する。剣先が想定できようが定かでない。銹化により金属鉄は遺存しない。層状の剥離を起こしており鍛造品と推定される。

③ 顕微鏡組織：Photo. 6 ④～⑧に示す。金属鉄は遺存しないが、微かにフェライト粒と少量のパーライト痕跡が認められる個所がある。こちらは含有炭素量は0.1％前後の極軟鋼と推定される。板状と表現しているが鉄器の器種ははっきりしない。

4　まとめ

〈１〉鉄塊系遺物（KWT－７）の表層に僅かに固着する滓の鉱物組成から、塩基性砂鉄を始発原料とする製錬生成鉄が鍛冶原料として搬入されていたことが明らかになった。更に滓中に晶出するウルボスピネル結晶のCMA調査の結果、クロム（Cr）が少量検出された。前述したように四国地域に賦存する砂鉄はクロム（Cr）を比較的多く含有する傾向が判明しているので、この試料も在地に賦存する砂鉄を原料に近接地域で鉄製錬が行われ、当遺跡に搬入された可能性が考えられて貴重な資料となった。10世紀代に四国の在地砂鉄製錬の間接証明となる。当地域における分析試料の蓄積が望まれる所である。

また、この鉄塊系遺物（KWT－７）は小振りであるが鉄はよくまとまっており、不純物の少ない高品位の鍛冶原料鉄といえる。なお鍛冶系の含鉄鉄滓（KWT－６）中の鉄部も小さなもので、こうした小振りの鉄塊が鍛冶原料として供給されたものと推測される。

〈２〉椀形鍛冶滓の化学組成（KWT－１～４）はいずれも脈石成分（TiO_2、V、MnO）が低値であった。先に述べたように不純物の少ない高品位の製錬生成鉄を原料として、鍛冶作業が行われたことを示すものと考えられる。その鍛冶は鍛造剥片が証明するように鉄器製作などの鍛錬鍛冶が主体である。荒鉄（製錬生成鉄で、表皮スラグや捲込みスラグ、更には炉材粘土などの不純物を含む原料鉄：鉄塊系遺物）の成分調整や不純物除去の精錬鍛冶滓は、今回の調査試料の中にはなかった。

〈３〉鉄片（KWT－８・９）はどちらも炭素含有量の少ない極軟鋼の鍛造品であった。共に銹化して金属鉄は遺存せず、金属組織からみた熱処理技術などを検討する情報は得ることができなかった。

〈４〉鍛冶羽口（KWT－１）は鉄分や塩基性成分が多く、アルミナは少なく耐火性に不利な成分系を示し、耐火度は1090℃と低めであった。

（注）

(1) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968磁鉄鉱は530～600Hv、ヴスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファイヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。また、ウルボスピネルは硬度値範囲の明記はないが、マグネタイトにチタン（Ti）を固溶するので、600Hv以上であればウルボスピネルと同定している。

(2) 鍛造剥片とは鉄素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌（金肌）やスケールとも呼ばれる。鍛冶工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色（光沢を発する）へと変化する。粒状滓の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛冶の段階を押える上で重要な遺物となる（注３）。鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）、大部分は内層ヴスタイト（Wustite：FeO）の３層から構成される。このうちのヘマタイト相は1450℃を越えると存在しなく、ヴスタイト相は570℃以上で生成されるのはFe－O系平衡状態図から説明される（注４）。鍛造剥片を王水（塩酸３：硝酸１）で腐食すると、外層ヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）は腐食しても侵されず、中間層マグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）は黄変する。内層のヴスタイト（Wustite：FeO）は黒変する。鍛打作業前半段階では内層ヴスタイト（Wustite：FeO）が粒状化を呈し、鍛打仕上げ時になると非晶質化する。鍛打作業工程のどの段階が行われていたか推定する手がかりともなる。

(3) 大澤正己「房総風土記の丘実験試料と発掘試料」『千葉県立房総風土記の丘年報15』（平成３年度）千葉県房総風土記の丘1992

(4) 森岡ら「鉄鋼腐食科学」『鉄鋼工学講座』11朝倉書店1975

(5) 大澤正己「具同中山遺跡出土、鉄滓の金属学的調査」平成10年８月16日　パリノ・サーヴェイ株式会社作成報告書記載

(6) 大澤正己・鈴木瑞穂「入野南山ノ陰遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」～高知県香美郡土佐山田町所在～『入野南山ノ陰遺跡発掘調査報告書』(土佐山田町埋蔵文化財報告書第　集）土佐山田町教育委員会　2001

(7) 大澤正己・鈴木瑞穂「矢野遺跡出土鉄製品・砂鉄等の金属学的調査」『矢野遺跡（Ⅰ）～徳島南環

状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告～』(徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第33集) 徳島県教育委員会・(財) 徳島県埋蔵文化財センター・建設省四国地方建設局　2001
(8) 大澤正己・鈴木瑞穂「高知県内製鉄関連遺物の金属学的調査」土佐山田町教育委員会への提出原稿　平成13年2月8日

表4 供試材の履歴と調査項目

符号	遺跡名	遺構名	報文番号	遺物名称	推定年代	計測 値		メタル度	調査項目								備考
						大きさ(mm)	重量(g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	CMA	化学分析	耐火度	カロリー	
KWT-1	川津東山田	SD01	331	羽口	10C前半	104×69×26	201.9	なし		○				○	○		
KWT-2	川津東山田	SD01	336	椀形鍛冶滓(大)	10C前半	113×96×42	517.2	なし		○	○			○			
KWT-3	川津東山田	SD01	337	椀形鍛冶滓(中)	10C前半	74×76×39	277.0	なし		○	○			○			
KWT-4	川津東山田	SR01(D)上層	763	椀形鍛冶滓(小)	10C前半	51×50×18	62.6	なし		○	○			○			
KWT-5	川津東山田	SR01(D)上層	764	椀形鍛冶滓(小)	10C前半	36×48×17	31.7	錆化(△)	○	○	○						
KWT-6	川津東山田	SR02(B)第1層	1188	含鉄鉄滓	10C前半	27×20×15	6.0	H(○)	○	○	○						
KWT-7	川津東山田	SD01	292	鉄塊系遺物	10C前半	23×26×19	15.5	H(○)	○	○	○		○				
KWT-8	川津東山田	SD01	291	棒状鉄器	10C前半	52×19×19	13.9	錆化(△)	○	○							
KWT-9	川津東山田	SD01	290	板状鉄器	10C前半	30×22×6	7.9	錆化(△)	○	○							

表5 供試材の組成

符号	遺跡名	報文番号	遺物名称	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	* 二酸化珪素 (SiO_2)	* 酸化アルミニウム (Al_2O_3)	* 酸化カルシウム (CaO)	* 酸化マグネシウム (MgO)	* 酸化カリウム (K_2O)	* 酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	#:Igloss 炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	耐火度	Σ* 造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe
KWT-1	川津東山田	331	羽口	4.61	0.21	0.77	5.44	61.34	15.60	0.91	0.57	2.10	1.48	0.22	0.63	0.03	0.01	0.52	#8.45	0.01	0.002	1090	82.00	17.787	0.137
KWT-2	川津東山田	336	椀形鍛冶滓(大)	40.63	0.04	41.36	12.07	30.61	5.44	1.78	0.48	1.27	0.92	0.13	0.29	0.03	0.01	0.37	0.11	0.01	0.002		40.50	0.997	0.007
KWT-3	川津東山田	337	椀形鍛冶滓(中)	51.64	0.19	45.34	23.17	18.02	3.86	1.14	0.37	0.74	0.53	0.33	0.52	0.02	0.01	0.59	0.11	0.02	0.002		24.66	0.478	0.010
KWT-4	川津東山田	763	椀形鍛冶滓(小)	52.54	0.14	46.56	23.18	16.98	3.90	1.46	0.56	0.66	0.75	0.12	0.63	0.02	0.02	0.31	0.07	0.02	0.007		24.31	0.463	0.012

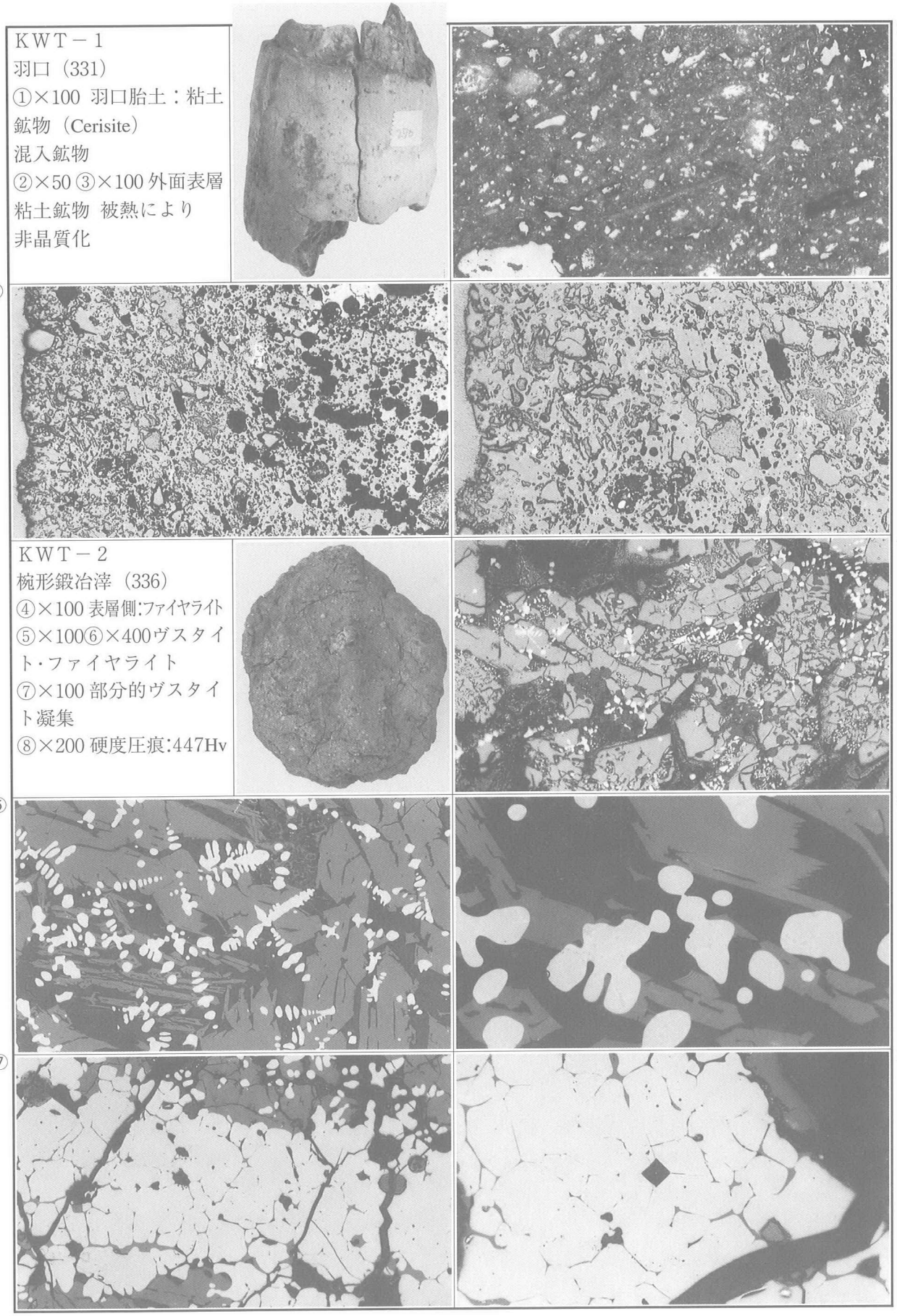


写真４　羽口・椀形鍛冶滓の顕微鏡組織

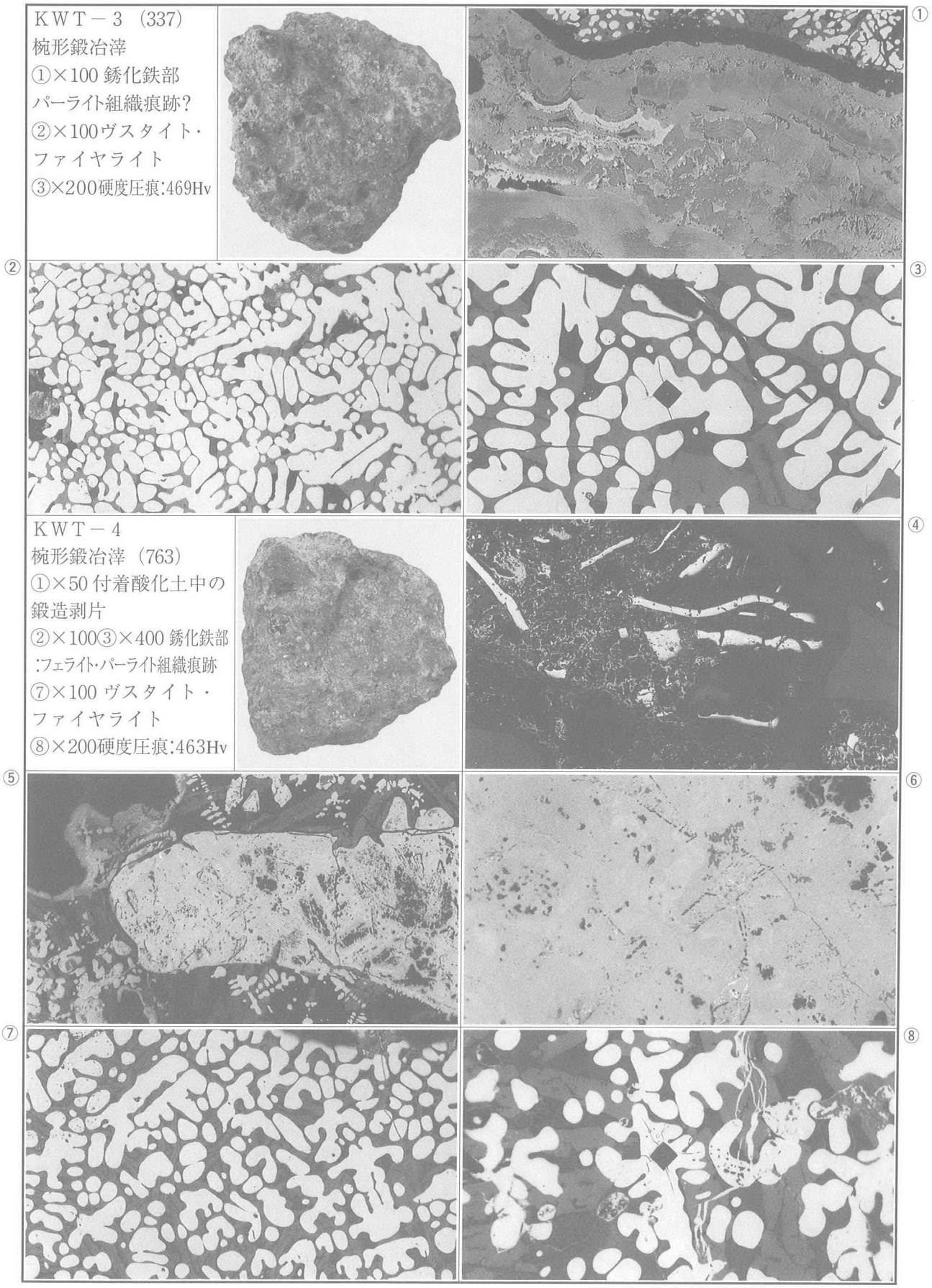


写真５　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織(1)

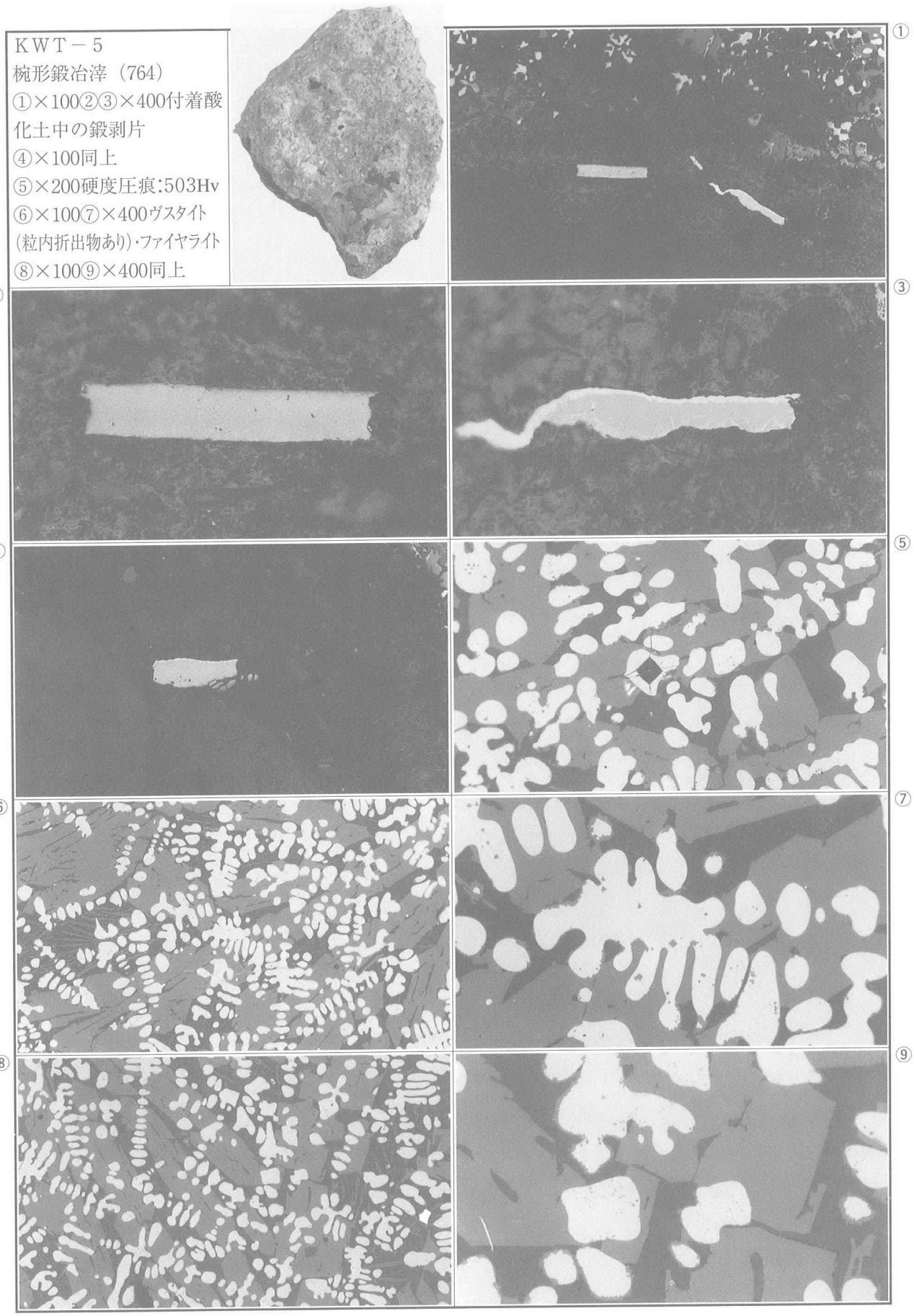


写真６　椀形鍛冶滓の顕微鏡組織(2)

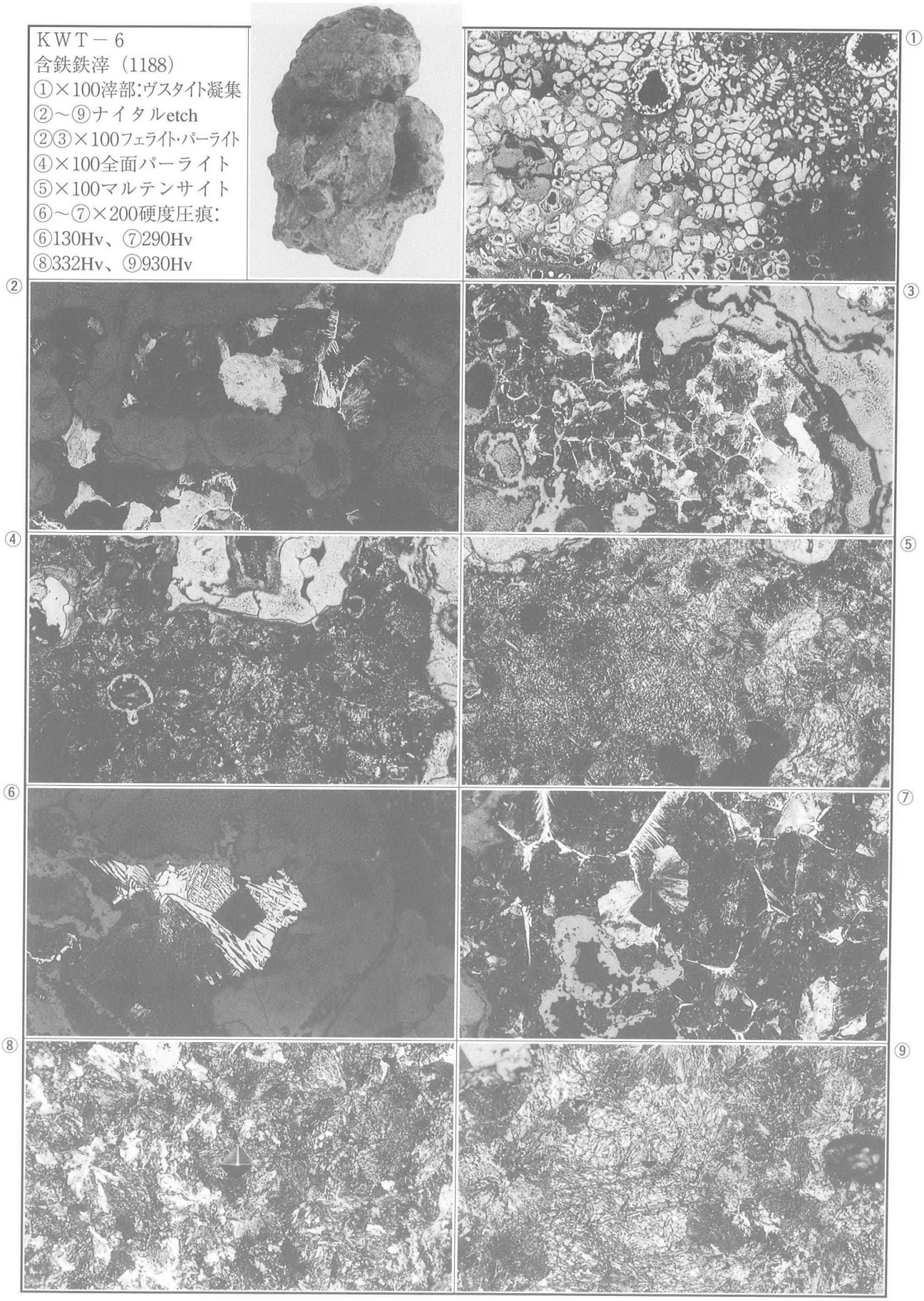


写真７　含鉄鉄滓の顕微鏡組織

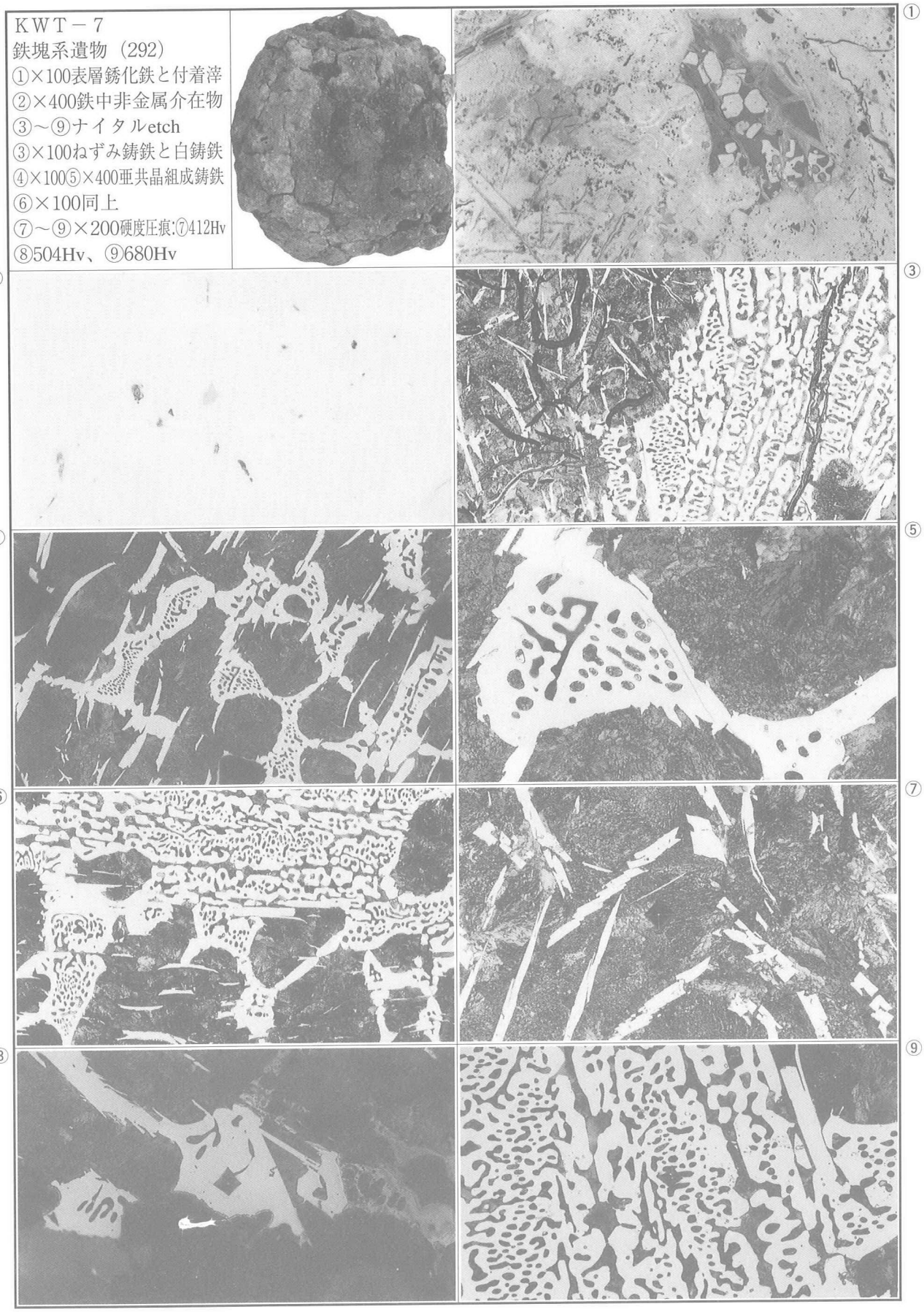


写真８　鉄塊系遺物の顕微鏡組織

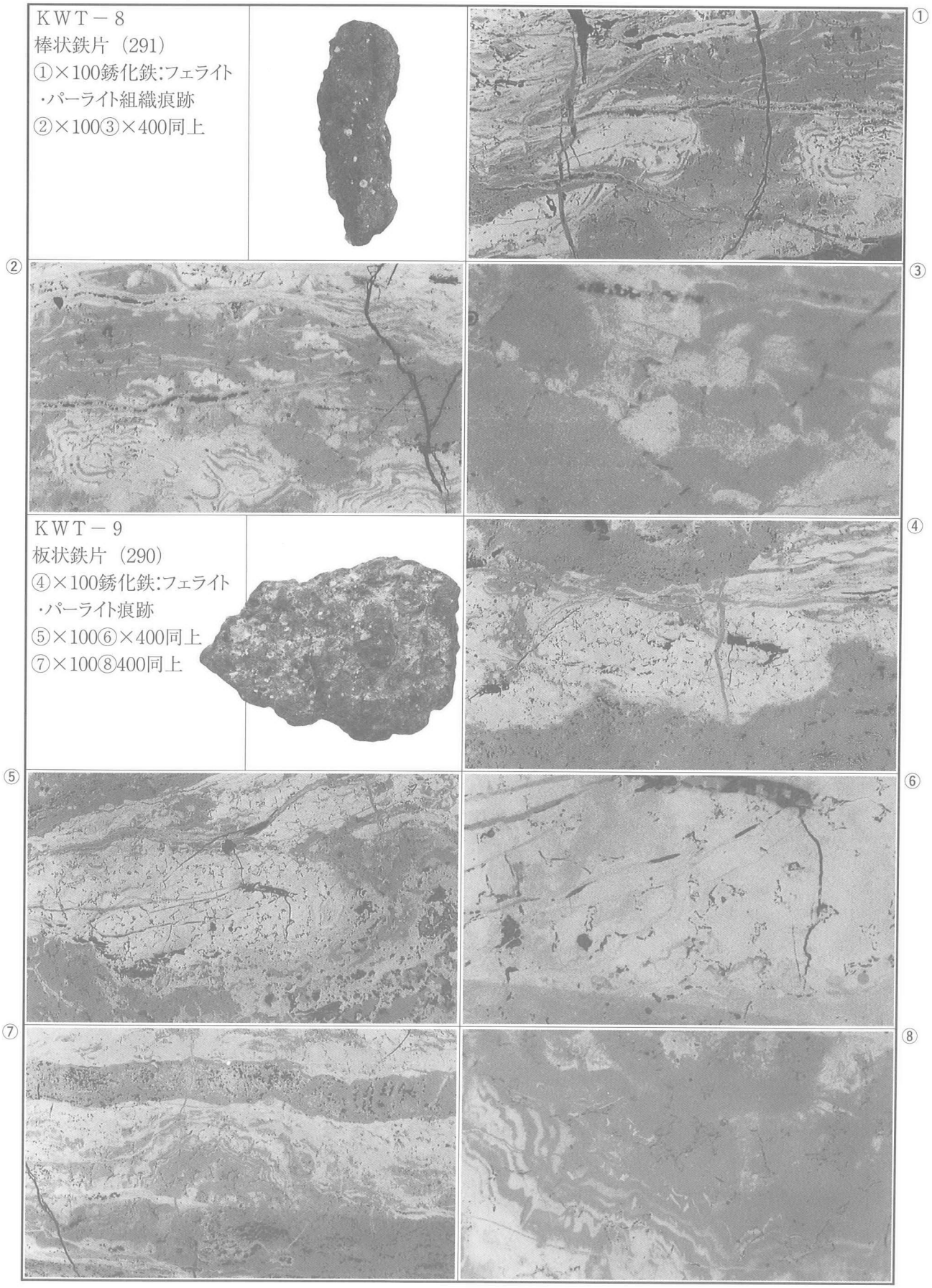
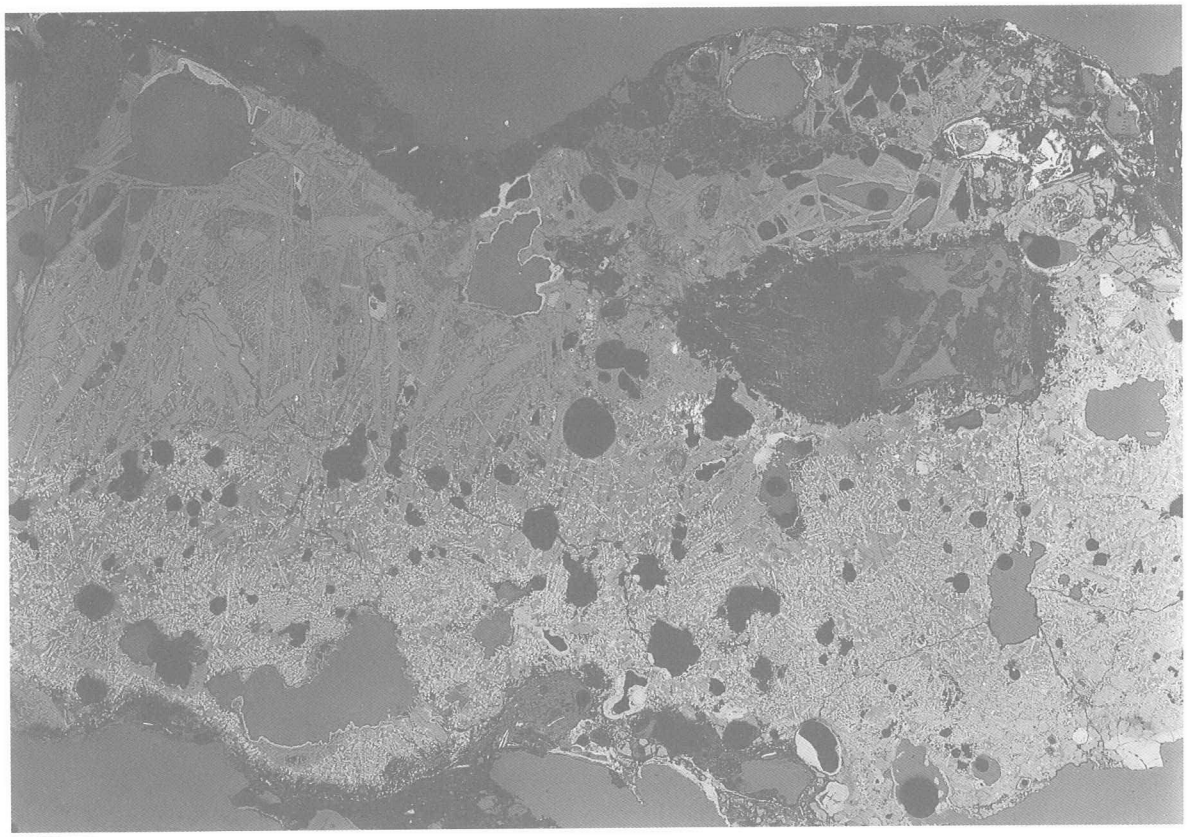
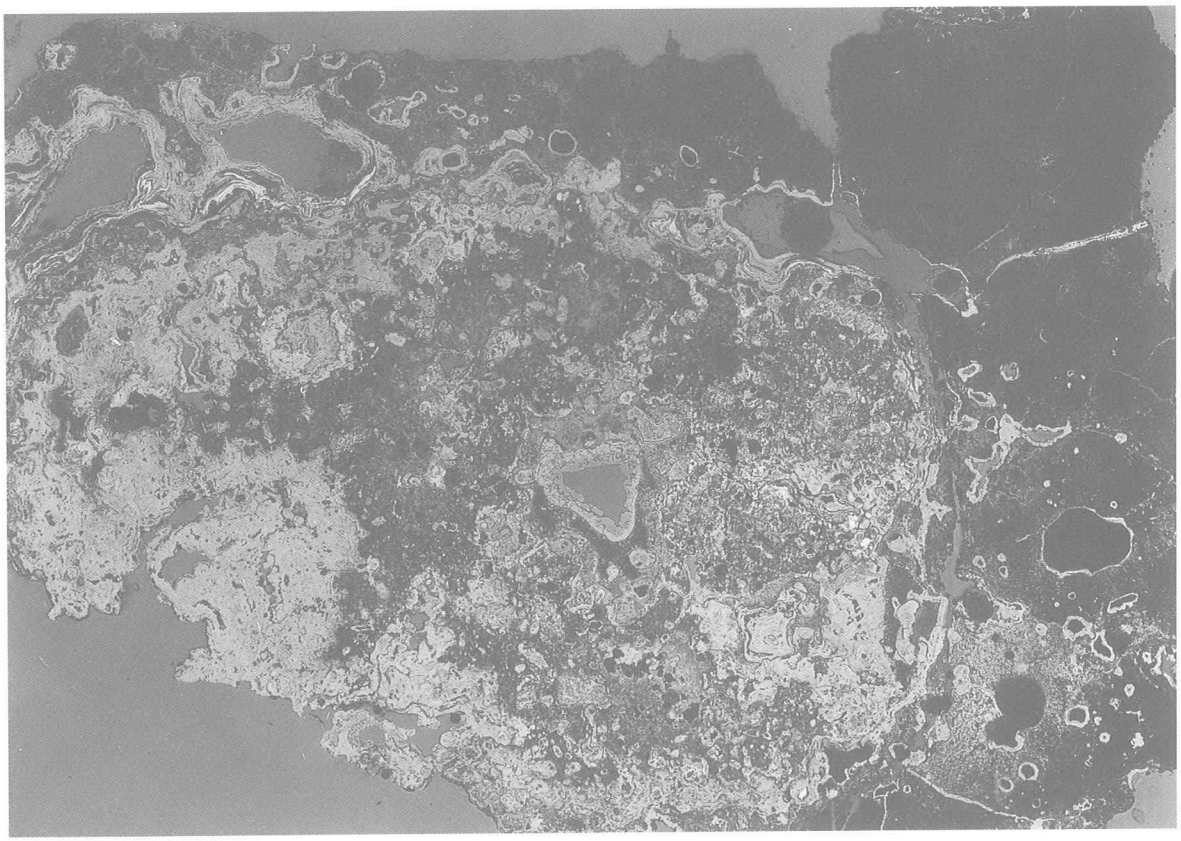


写真９　棒状鉄片・板状金の顕微鏡組織



KWT－5 ×10



KWT－6 ×10

写真10　上段：椀形鍛冶滓（KWT－5）のマクロ組織（×10）
下段：含鉄鉄滓（KWT－6）のマクロ組織（×10）